

四国横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

第 二 冊

大 門 遺 跡  
矢ノ岡 遺 跡  
利 生 寺 遺 跡  
利 生 寺 古 墳  
北 条 遺 跡  
道 免 窯 跡

1987.3

香川県教育委員会  
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

第 二 冊

大 門 遺 跡  
矢ノ岡 遺 跡  
利 生 寺 遺 跡  
利 生 寺 古 墳  
北 条 遺 跡  
道 免 窯 跡

1987.3

香川県教育委員会  
日本道路公団



大門遺跡全景 (南から)



(1) 土師質土器皿 B・L・N外面 (赤・白)



(2) 土師質土器皿 A内面 (赤・白)



(3) 土師質土器皿 A外面 (赤・白)

## 例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書第二冊である。
2. 本書に収録したのは、香川県三豊郡高瀬町上勝間に所在する大門遺跡・矢ノ岡遺跡・利生寺遺跡・利生寺古墳・北条遺跡（以上は昭和60年度に調査）と、同郡三野町大見に所在する道免窯跡（昭和59年度に調査）の6遺跡である。
3. 調査は、日本道路公団高松建設局の委託を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課調査三係（普通寺連絡事務所）が実施した。
4. 発掘調査は、高瀬地区を野中寛文（主任技師）と株木彰（嘱託）が、三野地区を東原輝明（主任技師）が担当した。
5. 調査に要する経費は、日本道路公団が負担した。
6. 調査にあたっては、下記の個人と機関の指導や援助を得た。記して謝意を表したい。  
山下千代松、近藤義一、矢野卯之助、日本道路公団高松建設局、同普通寺工事事務所、香川県土木部横断道対策室、高瀬町教育委員会、同町横断道対策室、三野町教育委員会、地元自治会、地元横断道対策協議会、共同企業体
7. 出土品の整理は、普通寺連絡事務所職員が実施した。
8. 本書の作成に当たっては、文化行政課職員をはじめ、調査に参加した調査員の助言を受けながら、以下のように分担執筆した。

I	伊 沢 肇 一（調査三係係長）
II・III・IV・V・VI・VII	野 中 寛 文（ 〃 主任技師）
VIII-一	佐 藤 豊（和鋼記念館副館長）
VIII-二	仲 谷 英 夫（香川大学講師）
IX	真 鍋 昌 宏（調査三係主任技師）
9. 本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
  - (1) 挿図の縮尺は、掲載の図内にスケールで示した。
  - (2) 方位は、国土座標第IV座標系の北を表わす。
  - (3) 水平基準線の数値は、海拔高を示している。
  - (4) 遺物番号は、遺跡別に通し番号を付した。図と図版の遺物番号は一致する。
  - (5) 遺構ごとの掲載出土遺物は、各遺物観察表に示した。
10. 本書に用いている遺構記号は次の通りである。

S B	建物跡	S D	溝状遺構	S E	井 戸	S K	土 坑
S X	その他の遺構						

11. 調査組織は下記の通りである。

昭和59年度

総括	課長	遠藤 啓(～11. 25)		
		磯田文雄(11. 26～)		
	主幹	林 茂		
		松本豊胤		
	課長補佐	中村 仁		
庶務	係長	下河芳樹(～5. 31)	調査	善通寺連絡事務所
		宮谷昌之(6. 1～)	所長	石塚徳治(～4. 30)
	主任主事	酒井幸子		入江 久(5. 1～)
	主事	前田和也	係長	伊沢肇一
			道免窯跡主任技師	東原輝明

昭和60年度

総括	課長	磯田文雄(～12. 20)		
	教育次長 課長事務取扱	樫原 悠(12. 21～)		
	主幹	松本豊胤		
	課長補佐	片山 堯		
庶務	係長	宮谷昌之	調査	善通寺連絡事務所
	主任主事	前田和也	所長	入江 久
	主任主事	酒井幸子(～5. 31)	係長	伊沢肇一
	主事	松下由美子(6. 1～)	大門遺跡他主任技師	野中寛文
			嘱託	株木 彰

昭和61年度

総括	課長	廣瀬和孝		
	主幹	松本豊胤		
	課長補佐	片山 堯		
庶務	係長	宮谷昌之	整理	善通寺連絡事務所
	主任主事	前田和也	所長	入江 久
	主事	松下由美子	係長	伊沢肇一
			大門遺跡他主任技師	野中寛文
			道免窯跡主任技師	真鍋昌宏

# 本文目次

I 調査に至る経過	1
II 高瀬・三野地区の調査	9
一 調査の経過	11
二 立地と環境	17
1 調査地周辺の地理	17
2 遺跡の分布	17
3 旧三野郡に関する史料	18
III 大門遺跡	23
一 立地と土層序	25
二 古墳時代の遺構と遺物	26
1 遺構	26
(1)掘立柱建物跡	26
(2)竪穴住居跡	26
(3)土坑	31
(4)性格不明遺構	31
(5)溝状遺構	32
2 遺物	67
(1)土器類	67
(2)土製品	71
(3)鉄滓	71
(4)石製品	75
(5)自然遺物	75
三 奈良時代以降の遺構と遺物	112
1 遺構	112
(1)建物跡	112
(2)土坑	113
(3)焼土塊	114

(4)井戸	114
(5)溝状遺構	114
(6)性格不明遺構	116
2 遺物	135
(1)土器類	135
(2)縄文土器	196
(3)瓦・土壁	196
(4)土製品	197
(5)金属製品	198
(6)木製品	199
(7)石製品	200
四 考察	227
1 古墳時代の遺構と遺物について	227
(1)遺構について	227
1) 建物跡 2) 建物跡の支柱穴 3) 建物跡の付属施設 4) 建物跡のカマド	
5) 土坑 6) 溝状遺構	
(2)遺物について	233
1) 床面直上遺物について 2) 須恵器杯身について 3) 黒色粒を含む須恵器	
4) ヘラ記号を有する土器 5) 土器の材質別・機能別数量	
(3)小結	240
1) 遺跡の範囲 2) 集落の変遷 3) 集落の構成	
2 奈良時代以降の遺構と遺物について	251
(1)遺構について	251
1) 建物跡 2) 溝状遺構 3) 遺構の時期変遷	
(2)遺物について	258
1)土師質土器	258
i 皿・杯・碗の分類 ii 皿・杯の機能について iii 皿・杯各タイプの	
時期的な消長 iv 皿・杯・碗の編年 v 盤・播鉢・甕・鍋・釜について	
2)須恵質土器と陶器	276
3)輸入陶磁器	276
4)土器類の材質別・機能別比率	277
5)赤・白の皿・杯について	277
6)土壁の分布について	284
7)桶の側板配置について	284



IV 矢ノ岡遺跡 .....	289
1 立地と土層序 .....	291
2 遺構 .....	291
(1)建物跡 (2)土坑 (3)溝状遺構 (4)塚 (5)段落ち	
3 遺物 .....	306
(1)縄文土器 (2)土師器 (3)須恵器 (4)瓦器 (5)土師質土器 (6)青磁	
(7)銅鏡 (8)銅銭	
4 小結 .....	315
(1)遺構 (2)遺物 (3)遺跡の範囲	
V 利生寺遺跡 .....	319
1 立地と土層序 .....	321
2 遺構 .....	324
(1)建物跡 (2)柱穴 (3)土坑 (4)井戸	
3 遺物 .....	330
(1)弥生土器 (2)土師質土器 (3)瓦質土器 (4)陶磁器 (5)銅銭 (6)石製品 (7)鋳子	
4 小結 .....	341
(1)遺構 (2)遺物 (3)遺跡の範囲	
VI 利生寺古墳(2号墳) .....	347
1 立地と利生寺古墳群 .....	349
2 遺構 .....	351
(1)外部施設 (2)内部主体	
3 遺物 .....	354
(1)土器類 (2)金属製品 (3)石製品	
4 小結 .....	363
(1)遺構 (2)遺物	
VII 北条遺跡 .....	365
VIII 自然科学的調査 .....	369
一 大門遺跡出土鉄滓の調査 .....	371

二 大門遺跡産出の哺乳類遺体	394
IX 道免窯跡	397
1 調査の概要	399
2 遺物	401
3 小結	413

# 挿 図 目 次

I	
図 1 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地 (善通寺～豊浜間) ……………	6
図 2 発掘作業風景……………	7
図 3 整理作業風景……………	7
II	
図 1 大門遺跡の発掘作業……………	13
図 2 大門遺跡の航空写真測量……………	13
図 3 大門遺跡の現地説明会……………	13
図 4 高瀬・三野地区遺跡地図……………	15
III	
図 1 グリッド配置図……………	25
図 2 大門遺跡土層模式図……………	26
図 3 第 2 遺構面地形実測図……………	33
図 4 S B 01 実測図 (1/60) ……………	34
図 5 S B 02・03 実測図 (1/60) ……………	35
図 6 S B 02・03 実測図, S B 03 カマド 実測図 (1/60・1/30) ……………	37
図 7 S B 04 実測図 (1/60) ……………	38
図 8 S B 05 実測図 (1/60) ……………	39
図 9 S B 06 実測図 (1/60) ……………	40
図 10 S B 07 実測図 (1/60) ……………	41
図 11 S B 08 実測図 (1/60) ……………	42
図 12 S B 09 実測図 (1/60) ……………	43
図 13 S B 010・011 実測図 (1/60) ……………	44
図 14 S B 010・011 実測図, S B 011 カマド 実測図 (1/60・1/30) ……………	45
図 15 S B 012 実測図 (1/60) ……………	46
図 16 S B 012 実測図, S B 012 カマド 実測図 (1/ 60・1/30) ……………	47
図 17 S B 013・014・015・016 実測図 (1/60) ……………	48
図 18 S B 017・018 実測図 (1/60) ……………	49
図 19 S B 019・020 実測図 (1/60) ……………	50
図 20 S B 019・020 カマド 実測図 (1/30) ……	51
図 21 S B 021・022・023 実測図 (1/60) ……	52
図 22 S B 021・023 カマド 実測図 (1/30) ……	53
図 23 S B 024・025 実測図 (1/60) ……………	54
図 24 S B 026 実測図 (1/60) ……………	55
図 25 S K 030・032 実測図 (1/30) ……………	56
図 26 S K 033・034 実測図 (1/30) ……………	57
図 27 S K 035・036 実測図 (1/30) ……………	58
図 28 S K 038 実測図 (1/30) ……………	59
図 29 S X 02 実測図 (1/60) ……………	60
図 30 S X 06・07 実測図 (1/60) ……………	61
図 31 S D 04・020・026・027・028・036 実測図 (1) (1/30) ……………	62
図 32 S D 04・020・026・027・028・036 実測図 (2) (1/160) ……………	63
図 33 S D 039・040, S X 06 実測図 (1/160・1/ 40) ……………	65
図 34 須恵器分類図(1) (1/6) ……………	68
図 35 須恵器分類図(2) (1/6) ……………	69
図 36 土師器分類図(1) (1/6) ……………	70
図 37 土師器分類図(2) (1/6) ……………	72
図 38 S B 01・03・04・05 出土土器実測図 (1/ 3・1/5) ……………	76
図 39 S B 05・06・07・08・09 出土土器実測図 (1/3) ……………	77
図 40 S B 09・010・011・012 出土土器実測図 (1/ 3) ……………	78
図 41 S B 013・015・017・019・020・021・022・ 023 出土土器実測図 (1/3) ……………	79
図 42 S B 023・024・026 出土土器実測図 (1/3) ……………	80
図 43 S B 026 出土土器実測図 (1/3) ……………	81
図 44 S K 030・033・036 出土土器実測図 (1/3・ 1/5) ……………	82
図 45 S X 02・03 出土土器実測図 (1/3・1/5) ……………	83
図 46 S X 05・06・07・09(1) 出土土器実測図 (1/ 3) ……………	84

図47	S X 09出土土器実測図(2) (1/3) ……85	図76	S X 08実測図 (1/30) ……130
図48	S D 03・04出土土器実測図 (1/3) ……86	図77	S D 02石積み遺構実測図 (1/40) ……131
図49	S D 018・019・020(1)出土土器実測図 (1/3) ……87	図78	S D 02・02南半・05・06実測図 (1/40・1/30) ……132
図50	S D 020出土土器実測図(2) (1/3) ……88	図79	S D 07実測図 (1/40) ……133
図51	S D 020出土土器実測図(3) (1/3) ……89	図80	S D 08・09・010・011・013・015・044・045, S X 010実測図 (1/30) ……134
図52	S D 020出土土器実測図(4) (1/3) ……90	図81	奈良時代以降土器類分類図 ……136
図53	S D 020出土土器実測図(5) (1/3) ……91	図82	S P 出土土器実測図(1) (1/3) ……152
図54	S D 022・025・027・028出土土器実測図 (1/3) ……92	図83	S P 出土土器実測図(2) (1/3・1/5) 155
図55	S D 029出土土器実測図 (1/3) ……93	図84	S E 01, S K 010・011・016・017・018出土土器実測図 (1/3) ……156
図56	S D 030・031・032・035出土土器実測図 (1/3・1/5) ……94	図85	S K 019・020・022・024・025・026出土土器実測図 (1/3) ……157
図57	S D 034・036・037・040・044(1)出土土器実測図 (1/3) ……95	図86	S K 028・043・044・045出土土器実測図 (1/3) ……158
図58	S D 044出土土器実測図(2) (1/3) ……96	図87	S D 02黒色土層出土土器実測図 (1/3) ……159
図59	S D 044出土土器実測図(3) (1/3) ……97	図88	S D 02砂質土層出土土器実測図(1) (1/3・1/5) ……160
図60	R-10・R-11・S-10第5層出土土器実測図 (1/3) ……98	図89	S D 02砂質土層出土土器実測図(2) (1/3・1/5) ……161
図61	S-11・T-10・U-10・U-11・V-10・V-11第5層出土土器実測図 (1/3) ……99	図90	S D 02砂質土層出土土器実測図(3) (1/3・1/5) ……162
図62	S B 026, S D 020・044出土瓦・土製品実測図 (1/3) ……100	図91	S D 02石積み遺構内・石積み遺構間出土土器実測図 (1/3・1/5) ……163
図63	S B 012・024, S D 029・034, S-10第5層出土土器製品実測図 (1/3) ……101	図92	S D 02石積み遺構間, S D 06・07出土土器実測図 (1/3・1/5) ……164
図64	S B 027・028実測図 (1/60) ……118	図93	S D 07・08(1)出土土器実測図 (1/3・1/5) ……165
図65	S B 029・030・031実測図 (1/60) ……119	図94	S D 08出土土器実測図(2) (1/3・1/5) ……166
図66	S B 032・033実測図 (1/60) ……120	図95	S D 08(3)・09出土土器実測図 (1/3・1/5) ……167
図67	S B 034・035実測図 (1/60) ……121	図96	S D 010・011・015・016・017, S X 010出土土器実測図 (1/3) ……168
図68	S B 036・037実測図 (1/60) ……122	図97	S D 02南半出土土器実測図(1) (1/3) 169
図69	S B 038・039実測図 (1/60) ……123	図98	S D 02南半出土土器実測図(2) (1/3・1/5) ……170
図70	S B 040・041実測図 (1/60) ……124		
図71	S B 042実測図 (1/60) ……125		
図72	S K 018・024・025実測図 (1/30) ……126		
図73	S K 026・027・028, 焼土実測図 (1/30) ……127		
図74	S K 044実測図 (1/6) ……128		
図75	S E 01実測図 (1/40) ……129		

図99 S X 04・09, 自然流路跡出土土器実測図 (1/3・1/5) ……………171	図121 S E 01出土木製品実測図(7) (1/4) ……215
図100 R-10・R-11第4層出土土器実測図(1/ 3) ……………172	図122 S E 01出土木製品実測図(8) (1/4) ……216
図101 R-11第4層出土土器実測図 (1/3) 173	図123 S E 01出土木製品実測図(9) (1/4) ……217
図102 S-10第4層出土土器実測図 (1/3・1/5) ……………174	図124 S E 01出土木製品実測図(10) (1/4) ……218
図103 S-10・S-11・U-7・U-10・V- 10第4層出土土器実測図 (1/3) ……175	図125 S E 01(1016・1017, 1/4), S D 02石積み 遺構内(1018・1019, 1/10), S X 010(1020, 1/2) 出土木製品実測図……………219
図104 Q-11・R-10・R-11・S-11第3層 出土土器実測図 (1/3・1/5) ……176	図126 S D 02南半出土木製品実測図(1) (1/2) ……………220
図105 S-11・T-11・U-7・V-7第3層, S-10第4層出土土器実測図 (1/3) 177	図127 S D 02南半出土木製品実測図(2) (1/2) ……………221
図106 桶側板計測基準図 ……………199	図128 S D 02砂質土層出土木製品実測図 (1/1) ……………222
図107 R-10・R-11・S-11第5層, T-11 第4層, V-11第2層出土縄文土器実測 図 (1/2) ……………201	図129 S D 08出土石製品実測図 (2/3) ……223
図108 S D 02南半・07, S K 011, R-11第4層 出土瓦実測図 (1/3) ……………202	図130 S D 08, S E 01出土石製品実測図 (2/3) ……………224
図109 S-10第4層, R-11第3層出土瓦, S P 258, R-11第3・4層出土土壁実測図 (1/3) ……………203	図131 S E 01, S-10第4層, S-11第2層出 土石製品実測図 (2/3) ……………225
図110 S K 024, T-11・R-10・U-11・V- 10第3層出土土製品実測図 (1/3・1/2) ……………204	図132 S D 02南半出土石製品実測図 (1/5) 226
図111 出土銅銭拓影 (1/1) ……………205	図133 杯かえり部計測基準図 ……………237
図112 R-11第4層出土金属製品実測図 (1/2) ……………206	図134 大門遺跡の範囲 ……………240
図113 S P 11, R-11第3層, S-10・R-11・ T-11第4層, S D 02南半出土金属製品 実測図 (1/2) ……………207	図135 古墳時代S Bの方向と規模によるグルー プ分け図 (1/800) ……………244
図114 S D 02, R-11・S-10第4層, S-11・ T-11第3層出土鉄滓実測図 (1/2) 208	図136 古墳時代S Bの分布によるグループ分け 図 (1/800) ……………245
図115 S E 01出土木製品実測図(1) (1/4) ……209	図137 古墳時代遺構変遷図 (I・II期) (1/800) ……………246
図116 S E 01出土木製品実測図(2) (1/4) ……210	図138 古墳時代遺構変遷図 (III・IV期) (1/800) ……………247
図117 S E 01出土木製品実測図(3) (1/4) ……211	図139 古墳時代遺構変遷図 (V・VIII期) (1/800) ……………248
図118 S E 01出土木製品実測図(4) (1/4) ……212	図140 奈良時代以降遺構変遷図 (IX・X期) (1/ 800) ……………253
図119 S E 01出土木製品実測図(5) (1/4) ……213	図141 中世遺構配置図 (1/800) ……………254
図120 S E 01出土木製品実測図(6) (1/4) ……214	図142 奈良時代以降遺構変遷図 (XI・XII期) (1/ 800) ……………255
	図143 奈良時代以降遺構変遷図 (XIII期) (1/ 800) ……………256
	図144 奈良時代以降遺構変遷図(近世) (1/800)

.....	257
IV	
図1 矢ノ岡遺跡土層模式図(北西部・南東部)	.....291
図2 矢ノ岡遺跡グリッド配置図(1/2000)	.....292
図3 S B01実測図(1/60)	.....296
図4 S B01・S B01カマド実測図(1/60・1/30)	.....297
図5 S B02実測図(1/60)	.....298
図6 S B03実測図(1/60)	.....299
図7 S B04・05実測図(1/60)	.....300
図8 S B06・07実測図(1/60)	.....301
図9 S B08・09実測図(1/60)	.....302
図10 S B09・010実測図(1/60)	.....303
図11 塚1号, S D01・02・03・04実測図(1/30)	.....304
図12 S D05・06, S K06実測図(1/30)	305
図13 S B01・04, S K03, S D04出土土器実測図(1/3)	.....308
図14 塚1号出土土器実測図, 銅銭拓影(1/3)(1/1)	.....309
図15 F-10・F-11出土土器実測図(1/3)	.....310
図16 F-10・F-11・G-9・H-9出土土器実測図(1/3)	.....311
図17 I-9出土銅鏡拓影・実測図(1/1)	312
図18 矢ノ岡遺跡遺構変遷図(1/800)	.....317
図19 矢ノ岡遺跡の範囲(1/5000)	.....318

## V

図1 グリッド土層位置図(1/1000)	.....321
図2 グリッド土層図(1/60)	.....322
図3 利生寺遺跡グリッド配置図(1/1000)	.....323
図4 S B01・02実測図(1/40)	.....326
図5 S B03実測図(1/40)	.....327
図6 S P02, S K01・02, S E01実測図(1/	

40)	.....328
図7 S P09~013, S K04・06・07実測図(1/40)	.....329
図8 S B02・03出土土器実測図(1/3)	.....333
図9 S P014, S K01・02出土土器実測図(1/3・1/5)	.....334
図10 S K06出土土器実測図(1/3)	.....335
図11 S K06・07, S E01出土土器実測図(1/3)	.....336
図12 F-9・G-6・G-7出土銅銭拓影(1/1)	.....337
図13 F-9・F-10・G-7出土石器実測図(1/2・1/1)	.....338
図14 高瀬町字砂古2321出土鉞子実測図(1/5)	.....339
図15 利生寺遺跡遺構変遷図(1)	.....343
図16 利生寺遺跡遺構変遷図(2)	.....344
図17 利生寺遺跡の範囲	.....345

## VI

図1 利生寺古墳グリッド配置図(1/1000)	.....349
図2 利生寺古墳遺構配置図(1/200)	.....350
図3 Aトレンチ南壁土層図(1/80)	.....351
図4 利生寺古墳石室掘り形・排水溝等実測図(1/60)	.....353
図5 排水溝内・石室掘り形内出土土器実測図(1/3)	.....356
図6 石室掘り形内出土土器実測図(1/3)	357
図7 石室掘り形内出土土器実測図(1/3・1/5)	.....358
図8 石室掘り形内・グリッド包含層出土土器実測図(1/3)	.....359
図9 排水溝充填石直上出土銅環, 石室掘り形内出土不明鉄器実測図(1/1)	.....360
図10 石室掘り形内出土石器実測図(1/2)	361

## VII

図1 試掘トレンチ位置図	.....367
--------------	----------

## IX

図 1	地形測量・遺構配置図	400
図 2	須恵器実測図(1)	402
図 3	須恵器実測図(2)	403
図 4	須恵器実測図(3)	404
図 5	須恵器実測図(4)	405
図 6	須恵器実測図(5)	406
図 7	須恵器実測図(6)	407
図 8	須恵器実測図(7)	408
図 9	須恵器実測図(8)	409
図10	須恵器実測図(9)	410
図11	須恵器実測図(10)	411

# 表 目 次

I	
表 1 調査一覧表……………5	表24 備前焼分類別集計表 ……150
II	
表 1 高瀬地区調査遺跡一覧表……………11	表25 備前焼遺構別・分類別集計表 ……151
III	
表 1 古墳時代後期建物跡計測値表……………32	表26 常滑焼分類別集計表 ……150
表 2 カマド跡計測値表……………66	表27 常滑焼遺構別・分類別集計表 ……150
表 3 古墳時代後期土坑計測値表……………66	表28 信楽焼遺構別・分類別集計表 ……150
表 4 古墳時代後期溝計測値表……………66	表29 瀬戸焼遺構別・分類別集計表 ……151
表 5 須恵器分類表……………67	表30 亀山焼遺構別・分類別集計表 ……151
表 6 土師器分類表……………71	表31 六古窯陶器・東播系須恵質土器包含層別集計表 ……151
表 7 須恵器遺構別・器種タイプ別集計表…73	表32 輸入陶磁器器種別集計表 ……151
表 8 土師器遺構別・器種タイプ別集計表…73	表33 輸入陶磁器遺構別・器種別集計表 ……151
表 9 第5層グリッド別出土須恵器・土師器集計表(破片数) ……71	表34 近世陶磁器分類別集計表 ……151
表10 古墳時代後期土器類観察表 ……102	表35 近世陶磁器遺構別・分類別集計表 ……151
表11 古墳時代以降建物跡計測値表 ……117	表36 第4・3層出土土器類集計表 ……153
表12 古墳時代以降土坑計測値表 ……117	表37 奈良時代以降土器類材質・遺構別観察表 ……178
表13 古墳時代以降溝計測値表 ……117	表38 縄文土器観察表 ……196
表14 土師質土器・黒色土器・瓦質土器(皿・杯・碗等)分類別集計表 ……148	表39 瓦観察表 ……197
表15 土師質土器・黒色土器・瓦質土器(皿・杯・碗等)遺構別・分類別集計表 ……148	表40 土壁遺構別出土量 ……197
表16 土師質土器(盤・播鉢・甕・鍋・釜)分類別集計表 ……150	表41 土壁包含層別出土量 ……197
表17 土師質土器(盤・播鉢・甕・鍋・釜)遺構別・分類別集計表 ……149	表42 出土銅銭表 ……198
表18 瓦質土器(鉢・釜)分類別集計表 ……150	表43 S E 01井筒用桶側板計測値・観察表 200
表19 瓦質土器(鉢・釜)遺構別・分類別集計表 ……150	表44 奈良時代以降土器類以外遺物番号・出土遺構包含層対照表 ……201
表20 須恵質土器分類別集計表 ……150	表45 竪穴住居跡主軸方向分布表 ……229
表21 須恵質土器遺構別・分類別集計表 ……150	表46 竪穴住居跡床面積別棟数 ……229
表22 東播系須恵質土器分類別集計表 ……150	表47 主柱穴間内面積別棟数 ……229
表23 東播系須恵質土器遺構別・分類別集計表 ……150	表48 煙道主軸方向分布表 ……229
	表49 煙道巾・長さ値分布表 ……229
	表50 古墳時代S K面積別基数分布表 ……229
	表51 古墳時代S D深さ・巾値分布表 ……229
	表52 主柱穴間内面積と床面積の比率 ……228
	表53 床直上遺物一覧表 ……233
	表54 杯身口径分布表(かえり部) ……235
	表55 遺構別杯身口径分布表(受部) ……235
	表56 須恵器・土師器個体数・機能別比率表(遺構全体) ……235



表57	杯かえり部・受部計測値表 (S B)	237
表58	杯かえり部・受部計測値表 (S K・S X)	237
表59	杯かえり部・受部計測値表 (S D)	237
表60	S B 026・S D 020・遺構全体土器類器種別出土比率	239
表61	S B 026・S D 020・遺構全体須恵器・土師器出土比率	239
表62	機能別器種一覧表	239
表63	S B 026・S D 020・遺構全体機能別出土比率	240
表64	須恵器・土師器機能別比率 (遺構全体)	240
表65	ヘラ記号を刻す土器一覧	240
表66	奈良時代以降 S B 主軸方向分布表	249
表67	奈良時代以降 S B 面積別棟数表	249
表68	中世 S D 延長方向分布表	249
表69	中世 S D 巾値分布表	249
表70	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S K 010)	259
表71	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S K 011)	261
表72	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S D 09)	263
表73	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S D 02 黒色土層)	265
表74	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S D 02 砂色土層)	267
表75	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S D 08)	264
表76	土師質土器 (皿・杯・碗) 口径・底径・器高・傾き比 (S K 010・011・020・022・024・025・028)	269
表77	口径・底径・器高・傾き比判定表	271
表78	遺構別土師質土器 (皿・杯) タイプ別比率 (個体数について)	273
表79	土師質土器 (皿・杯) タイプ別出土比率の変遷表	273
表80	中世土器類器種別点数・比率	278

表81	中世土器類材質別出土比率	278
表82	中世土器類機能別出土比率	278
表83	遺構・包含層別土師質土器 (皿・杯) 赤・白比率	279
表84	遺構・包含層別器種・タイプ別土師質土器 (皿・杯) 赤・白比率(1)	279
表85	遺構・包含層別器種・タイプ別土師質土器 (皿・杯) 赤・白比率(2)	279
表86	第4層土壁グリッド別出土比率	281
表87	第3層土壁グリッド別出土比率	281
表88	鉄滓グリッド別出土比率	281
表89	桶側板 B 値分布表	285
表90	桶側板分類表	285

#### IV

表 1	S B 計測値表	295
表 2	S K 計測値表	295
表 3	S D 計測値表	295
表 4	塚 1 号出土銅銭	307
表 5	遺構別出土遺物	307
表 6	包含層別出土遺物	307
表 7	遺物観察表	313
表 8	S B 主軸方向分布表	315

#### V

表 1	出土銅銭表	331
表 2	遺構別出土遺物	332
表 3	包含層出土遺物集計表	332
表 4	遺物観察表	340

#### VI

表 1	利生寺古墳出土土器集計表	354
表 2	遺物観察表	361
表 3	須恵器杯身口径値分布表 (立ち上がり部)	364

#### IX

表 1	遺物観察表	415
-----	-------	-----

## 図 版 目 次

- |   |  |
|---|--|
| <p>巻頭図版 1 大門遺跡全景 (南から)</p> <p>巻頭図版 2 (1)土師質土器皿B・L・N外面<br/>(赤・白)<br/>(2)土師質土器皿A内面 (赤・白)<br/>(3)土師質土器皿A外面 (赤・白)</p> <p style="text-align: center;">III</p> <p>図版 1 大門遺跡第 2 遺構面全景</p> <p>図版 2 (1)S B 01<br/>(2)S B 02・03</p> <p>図版 3 (1)S B 04<br/>(2)S B 05</p> <p>図版 4 (1)S B 06<br/>(2)S B 07</p> <p>図版 5 (1)S B 09<br/>(2)S B 010・011</p> <p>図版 6 (1)S B 011<br/>(2)S B 012</p> <p>図版 7 (1)S B 019・020<br/>(2)S B 021・022・023</p> <p>図版 8 (1)S B 026<br/>(2)S K 038・S X 06</p> <p>図版 9 (1)S B 013~016<br/>(2)S B 018</p> <p>図版10 (1)S B 024<br/>(2)S B 07検出状態</p> <p>図版11 (1)S B 03カマド・煙道<br/>(2)S B 03煙道先端部<br/>(3)S B 011煙道口</p> <p>図版12 (1)S B 012カマド・煙道<br/>(2)S B 020カマド・煙道</p> <p>図版13 (1)S B 021カマド・煙道<br/>(2)S B 023カマド・煙道<br/>(3)S B 023カマド・煙道</p> <p>図版14 (1)S B 021・022・023切り合い状態<br/>(2)S K 030</p> <p>図版15 (1)S K 035</p> | <p>(2)S K 036</p> <p>図版16 (1)S B 027<br/>(2)S B 029</p> <p>図版17 (1)S B 027柱根跡<br/>(2)S D 02</p> <p>図版18 (1)S B 042・S D 07<br/>(2)S D 08・09・010</p> <p>図版19 (1)S B 042<br/>(2)S B 042礎石・詰め石</p> <p>図版20 (1)S E 01断面<br/>(2)S E 01井筒用桶埋置状態</p> <p>図版21 (1)S E 01桶<br/>(2)S E 01桶のタガ</p> <p>図版22 (1)S K 011<br/>(2)S K 018</p> <p>図版23 (1)S K 025・026・028<br/>(2)S K 026鞆の羽口出土状態</p> <p>図版24 (1)S K 025<br/>(2)S K 026</p> <p>図版25 (1)S K 028<br/>(2)焼土塊</p> <p>図版26 (1)S K 044検出状態<br/>(2)S K 044蓋用の椀を取る</p> <p>図版27 (1)S K 044断面<br/>(2)S K 044壘内面</p> <p>図版28 (1)S D 02北壁土層<br/>(2)S D 02石積み遺構</p> <p>図版29 (1)S D 02石積み遺構<br/>(2)S D 02石積み遺構根板</p> <p>図版30 (1)S D 07<br/>(2)S D 07断面</p> <p>図版31 (1)S D 08・010西壁土層<br/>(2)S X 010北壁土層</p> <p>図版32 6・4・22・7・26・23・27・54</p> <p>図版33 126・128・125・134・60・141・118・<br/>147</p> <p>図版34 165・213・207・205・202・211・235</p> |
|---|--|

- 図版35 228・229・230・252・241・248・238・  
 253  
 図版36 259・261・314・260・269・270  
 図版37 281・285・287・288・290・291  
 図版38 301・303・308・318・322・327・340  
 図版39 342・344・349・350・351・355・357・  
 393・404  
 図版40 356・360・359・451・405・406  
 図版41 423・428・478・450・455  
 図版42 461・473・482・476・483  
 図版43 484・499・512・509  
 図版44 487・552・557・525・551・579  
 図版45 567・582・583・622・599・619  
 図版46 623・629・631・641・635・671・660・  
 627  
 図版47 634・638・636・639・637・640  
 図版48 661・694・695・668・699  
 図版49 707・747・752・748・755・776  
 図版50 753・857・858  
 図版51 898・906-2・908・934・931・957  
 図版52 941・944・942・945・943・946・960・  
 961・962・958・959  
 図版53 956・954・955・978・979  
 図版54 972・1029・1032・1031・1033  
 図版55 1035・1036・1034・1037・411  
 図版56 414・415・423・427・428・429・430・  
 432・433・435・436・439・440・441・  
 442・443・444・445・446・447・449・  
 456・460・461・463・464・466・467・  
 470・472・473  
 図版57 474・475・476・477・478・479・481・  
 484・486・487・492・493・494・504・  
 505・506・507・508・509・510・519・  
 522・527・528・529・530・531・532・  
 533・535・536・537-1・538・539・540・  
 541・542・543  
 図版58 544・546・547・548・553・555・556・  
 557・558・559・560・561・562・563・  
 564・565・567・568・569・570・571・  
 572・573・574・575・576・577・578・  
 584・585・586・587・588・589・590・  
 591・592・593・594  
 図版59 595・596・597・598・599・600・602・  
 603・604・605・606・607・608・609・  
 610・611・612・613・614・615・616・  
 617・618・619・642・643・645・646・  
 647・652・653・654・655・656・657・  
 658・659・660・661・662  
 図版60 663・664・665・666・667・672・673・  
 674・675・676・677・678・679・680・  
 681・682・683・684・685・686・687・  
 688・700・701・702・703・704・706・  
 707・708・709・710・711・712・718・  
 719  
 図版61 720・721・722・723・724・725・726・  
 727・728・729・730・741・742・743・  
 761・773・777・778・779・780・782・  
 783・784・785・786・787・788・789・  
 790・791・792・793・794・795・796・  
 797・798・799・800・801・802  
 図版62 803・804・805・806・807・808・809・  
 811・812・813・814・815・817・818・  
 819・820・821・822・823・824・825・  
 826・827・828・829・830・831・832・  
 833・834・835・836・838・839・842・  
 843・844・846・847・848・850・851・  
 852  
 図版63 853・854・855・856・871・872・873・  
 874・875・876・877・878・879・880・  
 881・882・883・884・885・886・887・  
 888・889・890・891・912・915・916・  
 918・919・920・921・922・923・924・  
 925  
 図版64 996・994・995・986  
 図版65 1017・S E 01桶側板展開状態  
 図版66 (1)矢ノ岡遺跡遠景

IV

(2)矢ノ岡遺跡

- 図版67 (1)S B 01検出状態  
(2)S B 01
- 図版68 (1)S B 01カマド  
(2)S B 01外溝
- 図版69 (1)S B 01外溝  
(2)S B 02
- 図版70 (1)S B 03  
(2)S B 04
- 図版71 (1)八稜鏡出土状態  
(2)F・G-10・11グリッド
- 図版72 (1)塚1号  
(2)塚1号
- 図版73 (1)塚1号  
(2)塚1号
- 図版74 1・2・3・7・6・5・4
- 図版75 17・25・47
- 図版76 48

V

- 図版77 (1)利生寺遺跡遠景  
(2)散布していた五輪塔群
- 図版78 (1)利生寺遺跡II区遺構検出状態  
(2)S B 01
- 図版79 (1)S B 02  
(2)S B 03
- 図版80 (1)S B 03粘土塊  
(2)S B 03土坑
- 図版81 (1)方形柱穴群  
(2)S K 07
- 図版82 (1)S E 01  
(2)S E 01
- 図版83 1・3・9・10・14・13・12・11
- 図版84 18・23・25・19・26・24
- 図版85 15・27・31・29
- 図版86 39・37・40・38・41・42
- 図版87 43・44・43・43

VI

- 図版88 (1)利生寺古墳遠景  
(2)利生寺古墳
- 図版89 (1)Bトレンチ  
(2)石室掘り形
- 図版90 (1)石室掘り形  
(2)排水溝蓋石
- 図版91 (1)排水溝土層  
(2)銅環出土状態
- 図版92 (1)排水溝内須恵器出土状態  
(2)発掘・実測作業風景
- 図版93 1・2・21・10
- 図版94 23・27・30・31・32
- 図版95 33・36・38・44・39・40・43
- 図版96 47・48・51・52

VII

- 図版97 (1)北条遺跡試掘風景  
(2)トレンチ土層

## 付 図 目 次

- 付図 1 大門遺跡第 1 遺構面遺構配置図 (1/200)
- 付図 2 大門遺跡第 2 遺構面遺構配置図 (1/200)
- 付図 3 矢ノ岡遺跡遺構配置図 (1/200)
- 付図 4 利生寺遺跡遺構配置図 (1/200)
- 付図 5 大門遺跡出土土師質土器等編年図(1) (1/3)
- 付図 6 大門遺跡出土土師質土器等編年図(2) (1/3)
- 付図 7 大門遺跡出土土師質土器等編年図(3) (1/6)

# I 調査に至る経過



## I 調査に至る経過

四国横断自動車道（善通寺～豊浜）埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和58年1月1日付、日本道路公団大阪建設局との委託契約に始まる。以来4年の歳月を要し、現場での発掘調査は昭和61年12月末をもって終了した。（一部用地未解決あり）

発掘調査は、四国横断自動車道（善通寺～豊浜）31.6km、面積2,041千㎡の1割強に当る211,500㎡を対象とした。

昭和57年度第4半期に善通寺市竜川地区（善通寺I、C）で初めて発掘調査に立入った。それまでに、埋蔵文化財調査について、現地踏査（分布調査）を基に、日本道路公団と協議を重ねた。

協議は、整備計画決定、施工命令が出された昭和47年6月頃から続けられ、下って実施計画認可、路線発表があった51年4月からはそれぞれの遺跡について具体的な話し合いが持たれた。

昭和56年5月に入り、巾杭設置測量が公団の手で行われ、具体的に用地買収交渉が行われるに伴い、発掘調査の準備も進められた。

発掘調査は、比較的用地買収が早かった善通寺地区、豊中地区の順に進めた。用地買収契約調印が終了した所から、予備調査の実行計画を立てた。しかし稲の植付、立毛、水路、畦畔、農道確保の問題が次々と噴出し、地元への必要にして十分な配慮が問われた。公団や対策室、市町、関係機関、地元協議会との連携により、協力が得られるに至った。周知されていなかった箇所の子備調査を実施したところ、新規の遺跡が次々と発見され、発掘面積が60,900㎡から211,500㎡へとふくれ上がった。それに伴い調査工程と工事工程の調整が一層緊密さを増した。

多度郡条里については、当初坪境の溝、または畦畔の検出によって条里の全用が把握できるものと考えていた。ところが予備調査を実施した段階に、縄文、弥生時代や古代、中世、近世の自然河川や建物を中心とする集落跡の色彩が強く、新規の遺跡とした。

高瀬地区においても、予想していなかった高瀬川北岸の大門地区に古墳時代後期の竪穴式住居跡25棟を検出した。

豊中地区では、延命遺跡の城ノ岡地区で発掘調査中、宮川を挟んで対峙する八反地地区で電柱立替え工事中、偶然弥生土器を発見した。予備調査の結果、濃密な遺構が確認されるに至った。

財田川左岸に広がる三豊平野において、買収契約未調印の箇所も、地元対策協議会、公団、県、市横断道対策課、その他関係機関参加のもと、地区別に説明会を開催し、地元の協力が得られた所の予備調査を実施した。それによると、財田川寄りの12,000㎡に濃密な弥生後期の竪穴住居を中心とした集落が検出された。

石田、長砂古、中姫の各遺跡も同様にして予備調査を実施し、発掘面積を確定した。

昭和62年度供用開始を目標に工事は急ピッチで進行している。そのため、発掘調査区内を工事



用道路が走り、カルバート・ボックス等の構造物施工箇所を優先して発掘調査した。特に、平野部に所在する永井遺跡と刈田郡条里は、調査工程と工事工程上のコントロールポイントとなった。

調査体制の充実も大きな課題となった。調査員は3名でスタートしたが、昭和58年4月に調査の拠点となる善通寺連絡事務所を開設。11名の陣容を確保、59年度12名、60年度17名、61年度21名と増員し、調査のスピード化をはかった。併せて、発掘調査作業員もピーク時には230名を数えるに至った。

出土品の整理作業も、昭和58年度に1班を要し、基礎整理を始めた。61年1月からは、報告書作成に向け本格的に整理作業（整理補助員4名、整理作業員16名）に取りかかり、61年度には、実績報告書の他に2冊の報告書（7遺跡）を刊行した。併せ、一般・学童・生徒向けに小冊子「いにしへの讃岐II」も刊行。

現場説明会も、大門遺跡、刈田郡条里で実施したところ、大盛況を呈し、文化財に対する興味、感心の高さを認識した。

遺跡の名称については、発掘調査の成果に基づき、遺跡の性格や立地等について検討した結果、一部名称変更をせざるを得なくなった。

発掘現場作業員延83,000人を要して発掘し、多くの出土品（コンテナ28ℓ入、4,570箱）や遺構を検出した遺跡は、今、地中深く眠る。62年度供用に向け、構造物、土木工事が急ピッチで進む。

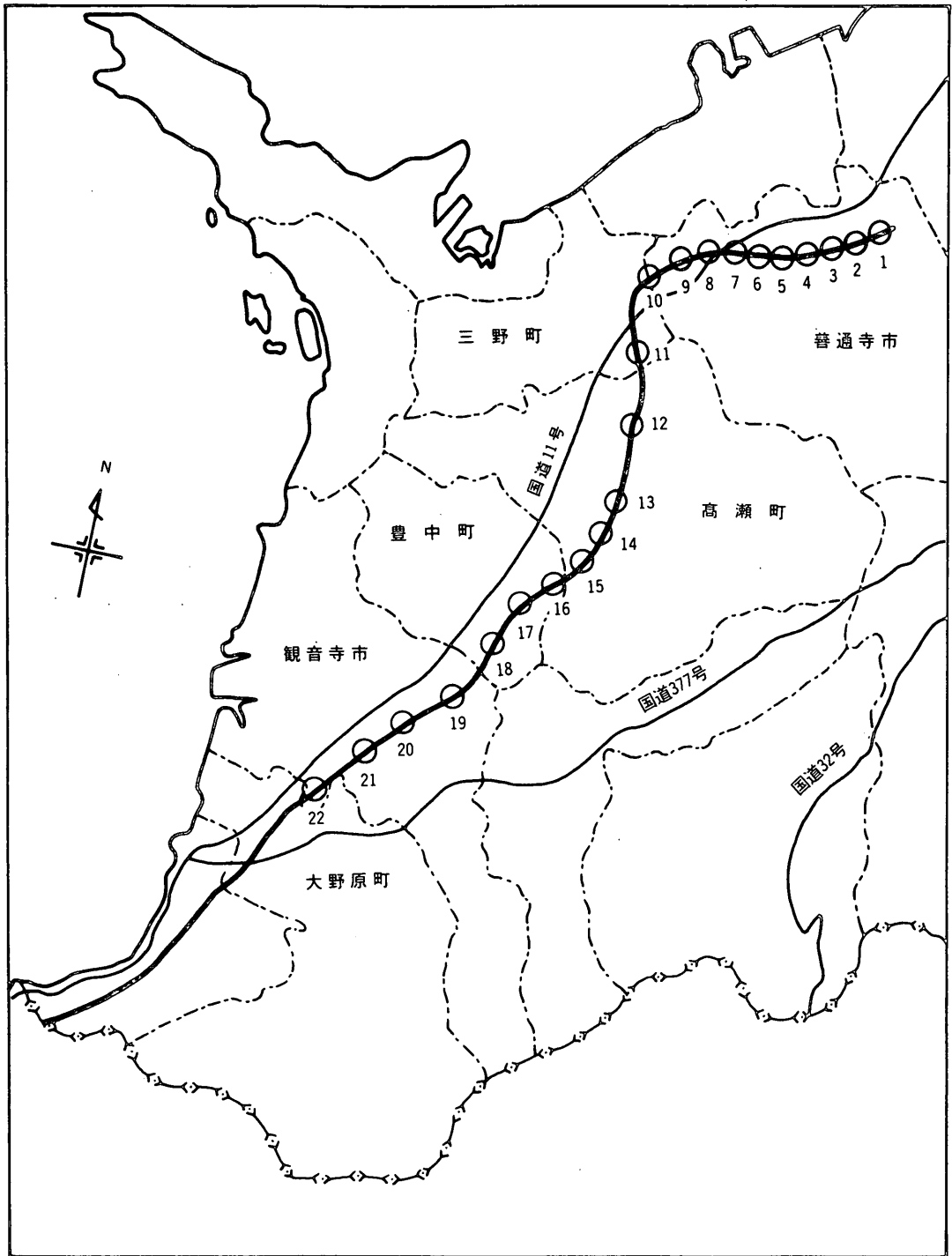
発掘調査は終了したが、62～64年度に報告書作成事業が待ち受けている。

旧	新
多度津条里 下所地区	金蔵寺下所遺跡
稲木B地区	稲木遺跡B地区
稲木C地区	稲木遺跡C地区
永井地区	永井遺跡
吉原A地区	矢ノ塚遺跡
吉原B <sub>1</sub> 地区	上一坊遺跡
吉原B <sub>2</sub> 地区	乾遺跡
利生寺遺跡 I・II・III区	利生寺遺跡、大門遺跡
土佐神社跡	矢ノ岡遺跡
刈田郡条里	一の谷遺跡群
中姫遺跡	柞田八丁遺跡

遺 跡 名 称 変 更

表1 調査一覧表

遺跡 番号	遺 跡 名	所 在 地	面 積 (㎡)					調査期間	
			発掘面積	57年度	58年度	59年度	60年度		61年度
1	金蔵寺下所遺跡	普通寺市金蔵寺町下所	17,000	1,300	8,000	7,700			58.4.1～ 60.2.28
2	稲木遺跡・C	普通寺市稲木町下吉田町	4,000		600	3,400			59.4.1～ 60.3.30
3	稲木遺跡・A	普通寺市稲木町下吉田町	300		300				58.6.29～ 59.2.14
	稲木遺跡・B	普通寺市稲木町下吉田町	17,100		5,100	12,000			59.9.17～ 60.2.8
4	永井遺跡	普通寺市下吉田町下所西 中村町島田・横田	33,000				15,600	17,700	60.5.7～ 61.12.23
5	中村遺跡	普通寺市中村町筆岡	9,000			9,000			59.7.3～ 59.9.17
6	乾遺跡	普通寺市中村町乾	2,300			200	2,100		60.9.2～ 60.11.20
7	上一坊遺跡	普通寺市吉原町上一坊	2,600			400	2,200		60.11.13～ 61.1.24
8	矢ノ塚遺跡	普通寺市吉原町碑殿町 矢ノ塚	11,800			4,800	7,000		59.10.8～ 60.8.30
9	西碑殿遺跡	普通寺市碑殿町	5,200			3,000	1,400	800	60.2.4～ 4.30 61.7.28～ 8.11
10	深尾石棺群	三野町大見深尾	500			500			59.9.11～ 59.10.23
11	道免遺跡	三野町大見道免丸尾	100			100			59.9.11～ 59.10.23
12	北条遺跡	高瀬町上高瀬北条	100				100		60.5.9～ 60.5.9
13	利生寺遺跡	高瀬町上勝間砂古	3,200				3,200		60.5.22～ 60.7.18
	利生寺古墳	高瀬町上勝間砂古	700				700		60.12.2～ 61.3.17
14	大門遺跡	高瀬町上勝間砂古	5,500				5,500		60.7.22～ 61.1.28
15	矢ノ岡遺跡	高瀬町上勝間矢ノ岡	2,600				2,600		61.1.28～ 61.2.27
16	四ツ塚遺跡	豊中町笠田笠岡	1,000		200	800			59.4.16～ 59.5.14
17	財田古墳	豊中町上高野	1,000		1,000				58.9.26～ 58.11.30
18	延命遺跡城の岡地区	豊中町上高野	5,000		4,000	1,000			58.11.28～ 59.7.18
	延命遺跡八反地地区	豊中町上高野	13,000			10,000	2,000	1,000	59.7.19～ 60.5.15 61.9.1～ 9.30
19	一の谷遺跡群	観音寺市本大町古川町	36,100			2,500	17,600	16,000	60.5.15～ 61.12.25
20	石田遺跡	観音寺市池ノ尻町石田	17,200			1,200	16,000		60.5.1～ 61.1.11
21	長砂古遺跡	観音寺市池ノ尻町大長	8,900			1,200	2,500	5,200	61.1.13～ 61.8.12
22	柞田八丁遺跡	観音寺市柞田町八丁	14,000			100		13,420	61.4.3～ 61.11.28 62.1.7～ 62.1.27
	合 計		211,500	1,300	19,200	57,900	78,500	54,120	残 480



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜間）

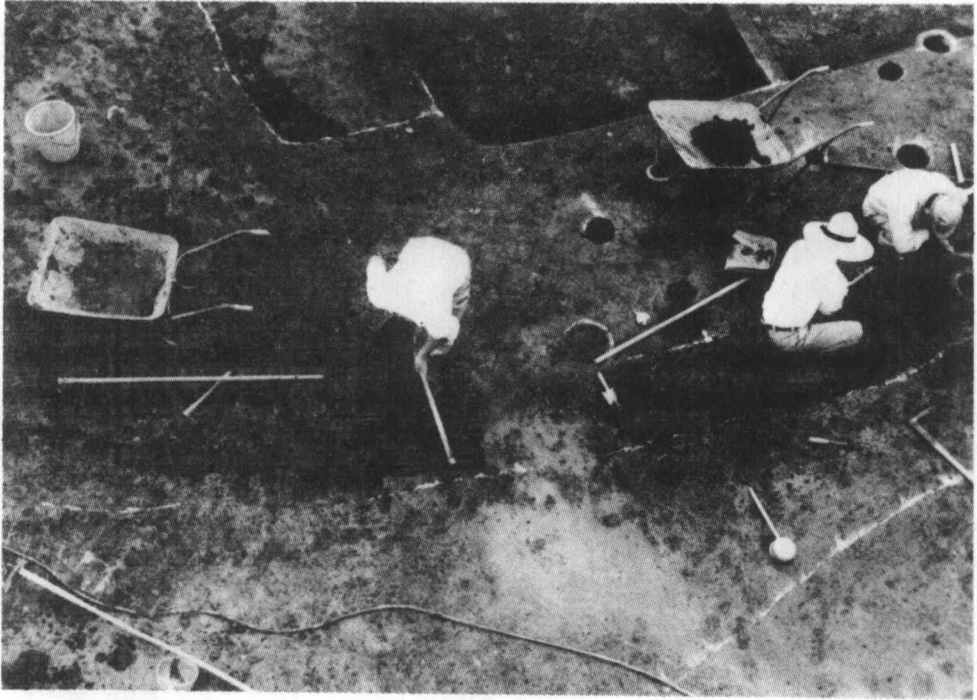


図2 発掘作業風景



図3 整理作業風景



## II 高瀬・三野地区の調査



## II 高瀬・三野地区の調査

### 一 調査の経過

調査した遺跡の面積・期間・種類を次表に示す。

表1 高瀬地区調査遺跡一覧表

遺跡名	調査対象面積	調査期間	遺跡の種類等
大門遺跡	5,500m <sup>2</sup>	1985. 7 .22 1986. 1 .28	古墳時代後期と中世の集落跡。竪穴住居跡26棟、中世の礎石建物跡・石組溝・石組井戸を検出した。
矢ノ岡遺跡	2,600m <sup>2</sup>	1986. 1 .28 1986. 2 .27	古墳時代後期と中世の集落跡。八綾鏡が出土。「土佐神社」と称される塚があった。
利生寺遺跡	3,200m <sup>2</sup>	1985. 5 .16 1985. 7 .18	弥生時代・中世・近世の集落跡。中世の竪穴住居跡1棟検出。「利生寺」跡であるとの伝承がある。
利生寺古墳	700m <sup>2</sup>	1985.12. 2 1986. 3 .17	古墳時代後期の古墳。
北条遺跡	100m <sup>2</sup>	1985. 5 . 9	(遺構・遺物は検出されなかった。)

高瀬地区の調査の経過を次に示す。

#### 1985年

- 4月24日 矢ノ岡遺跡・利生寺遺跡・利生寺古墳に杭打ち。
- 5月1日 矢ノ岡遺跡の試掘調査を実施。
- 5月2日 利生寺遺跡の試掘調査を実施。町道北側で弥生時代の土坑を検出。
- 5月9日 北条遺跡の試掘調査を実施。遺構・遺物ともに検出されなかった。
- 5月13日 利生寺古墳の試掘調査を実施。尾根基部で古墳を1基検出する。
- 5月16日 利生寺遺跡の本調査を開始する。町道南側の谷底部は、現代の攪乱を広く、深く受けていることが判明。
- 6月13日 大門遺跡の試掘調査を実施。方形ピット・石組み溝等を検出。
- 6月26日 町道北側で中世の竪穴住居跡を検出する。この頃、雨天の日が多く調査やや遅れ気味。
- 7月18日 利生寺遺跡の調査終了する。
- 7月22日 大門遺跡の本調査を開始する。
- 8月7日 竪穴住居跡を3棟検出。3棟とも煙道をもつ。
- 9月4日 調査区北西部で中世遺構群を検出する。
- 9月30日 礎石建物跡を1棟検出する。
- 10月15日 第2遺構面の調査を開始する。



- 10月18日 古墳時代の竪穴住居跡3棟検出する。
- 10月31日 石組み井戸の井筒に桶が使用されていることがわかる。
- 11月13日 古墳時代の掘立柱建物跡を1棟検出する。
- 11月14日 現場事務所で大門遺跡についての記者発表を行う。
- 11月15日 高瀬町の町長・教育長・町会議員の方々、高瀬高校新聞部の職員・生徒が見学に来る。
- 11月25日 勝間小学校の職員20名余が見学に来る。
- 11月27日 第1回航空写真測量を実施(ヘリコプター)する。
- 11月29日 調査区東半の調査を開始する。普通寺連絡事務所の整理作業員が見学に来る。
- 11月30日 大門遺跡の現地説明会を実施(午後2時～4時)、300名余の参観者あり。
- 12月2日 利生寺古墳の調査を開始する。
- 12月6日 大門遺跡調査区南西部で竪穴住居跡6棟検出する。

#### 1986年

- 1月24日 利生寺古墳石室の攪乱坑を検出する。
- 1月28日 大門遺跡第2回航空写真測量を実施する。矢ノ岡遺跡の本調査を開始する。
- 1月30日 矢ノ岡遺跡で竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡2棟検出する。大門遺跡の調査終了する。
- 1月31日 I-9グリッド地山直上から八稜鏡1点出土する。
- 2月27日 矢ノ岡遺跡の調査終了する。
- 3月3日 利生寺古墳、義道部の根石3個検出。排水溝から残置された杯3セットが出土する。
- 3月17日 利生寺古墳の調査終了。

#### 発掘作業に従事した方々

徳永多佳子(調査補助員)・長谷川郁子(整理作業員)・入江弘文・岩本和親・大平正則・大平正吉・小山辰男・島田義見・相馬浅吉・高畑一男・谷口政市・堤久吉・中野弘美・新延末広・則包重徳・藤田進・真鍋照男・馬淵元行・森良秋・石井ツヤノ・入江さちこ・岩本ヨシ子・小山カズ子・篠原ミノリ・詫間ヨシエ・豊嶋千代子・豊嶋マツミ・則包アツミ・宮崎ヒサエ・矢野カツ

ミ

#### 整理作業に従事した方々

川田裕加子・横田周子(整理補助員)・石川ゆかり・猪木原美恵子・葛西薫・小林和恵・田井照美・長谷川郁子・林肇子・藤田由紀子



図1 大門遺跡の発掘作業



図2 大門遺跡の航空写真測量

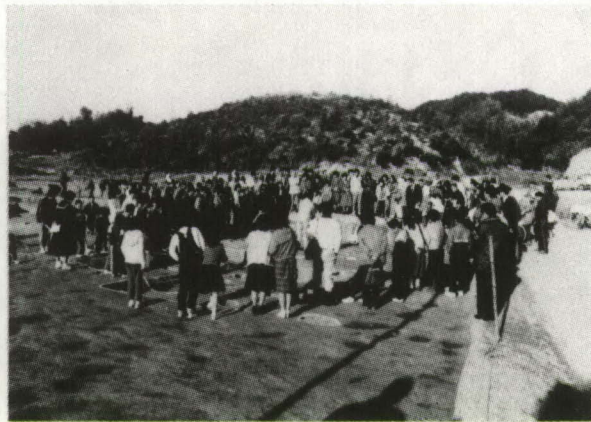


図3 大門遺跡の現地説明会

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through.

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through.

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through.

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through.



- |           |             |           |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 水出遺跡    | 26 三背鼻法華経塚  | 51 カナグラ古墳 |
| 2 新開古墳    | 27 平池山根古墳   | 52 大原塚古墳  |
| 3 東山西南古墳  | 28 砂古古墳     | 53 猪の崎遺跡  |
| 4 道免窯跡    | 29 利生寺遺跡    | 54 蟻の山古墳  |
| 5 城山古墳    | 30 利生寺古墳    | 55 神宮寺跡   |
| 6 権現さん古墳  | 31 骨蔵器出土地   | 56 蟻の首遺跡  |
| 7 天神さん遺跡  | 32 大門遺跡     | A 大平窯     |
| 8 下女塚     | 33 矢ノ岡古墳    | B 道免2号窯   |
| 9 榎森塚     | 34 一本松古墳    | C 手石場窯    |
| 10 土井坂古墳  | 35 矢ノ岡石棺墓   | D 男谷窯     |
| 11 山代塚    | 36 福井城跡     | E 原上窯     |
| 12 厳島古墳   | 37 歓喜院窯跡    | F 野田池北    |
| 13 おかめ塚   | 38 山北古墳     | G 高瀬末古窯址群 |
| 14 骨蔵器出土地 | 39 矢ノ岡遺跡    | H 宮山1号窯   |
| 15 大神宮古墳  | 40 勝間城跡     |           |
| 16 北原遺跡   | 41 石塔       |           |
| 17 茶臼山古墳  | 42 天古遺跡     |           |
| 18 堂ヶ鼻1号墳 | 43 爺神古墳     |           |
| 19 源宗寺跡   | 44 爺神城跡     |           |
| 20 青井谷古墳  | 45 皇子岡経塚    |           |
| 21 青井谷窯跡  | 46 東光寺古墳    |           |
| 22 北条遺跡   | 47 瓦谷窯跡     |           |
| 23 平池経塚   | 48 宗吉窯跡     |           |
| 24 三背鼻経塚  | 49 貝がら遺跡    |           |
| 25 三背鼻古墳  | 50 伊与神社境内遺跡 |           |

1～56は『全国遺跡地図香川県』  
 (文化庁・1977年)松野一博・西  
 岡達哉『矢ノ岡石棺墓発掘調査報  
 告書』(高瀬町教育委員会 1984  
 年)を参考にした。  
 A～Hは松本敏三・岩橋孝「香川  
 県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅰ・  
 Ⅱ(瀬戸内海歴史民俗資料館『同  
 紀要第1・2号』所収, 1984・1985)  
 を参考にした。

図4 高瀬・三野地区遺跡地図

## 二 立地と環境

### 1 調査地周辺の地理

現在の三豊郡高瀬町・三野町・詫間町の平野部は、地理的に他から明瞭に区別できる。東は竜王山・貴峰山・弥谷山・火上山・東部山・鬼ヶ白山が、西は妙見山・高尾下山・七宝山がそれぞれ障壁となっている。南は眉山・鳥越山を含む洪積層の山が障壁となっている。西と南との間には比較的巾の広い平坦地があり、あたかも南西方への抜け道のような形状を呈しているが、そこには上記洪積層末端が及び、南と西の山をつなぐ鞍部となっている。現在の国市池・勝田池の水はその池を分岐点として両側へ流下している。この鞍部は、南西方との交通路であるが、一方城戸の役割も果たしている。北は海である。高瀬町・三野町・詫間町の平野部は周囲を山によって遮られた細長い、北に開口する袋状を呈する。袋状部の中央には高瀬川が流下して瀬戸内海に至る。川の東側には音田川の流れる谷が1本刻まれている。現在の鳥坂峠に至る凹みは、かつての入江の跡であろう。一方、川の西側は全体にゆるやかな傾斜をなして山へつながる。北端部は5mの等高線から伺えるように、かつては深い入江であっただろう。

### 2 遺跡の分布

袋状部における遺跡は、立地からは山の末端部に所在するといえる。平野部は極めてわずかである。これは未調査に原因するものである。密度からは、音田川を挟む両側の山の西斜面部に群を抜いて集中している。次は、高尾下山・七宝山の東斜面部に疎に分布している。眉山・鳥越山東斜面部は希薄である。調査は不十分であるが、同じ条件に基づく分布図であることを考えると、遺跡の密着する音田川付近がこの平野部の中心部をなしていただろうことが推測できる。密着地帯の遺跡は古墳時代の窯跡と古墳がその大部分を占める。このことは、古墳時代においては音田川を挟む両側の山で須恵器を焼き、古墳を営み、おそらくその膝下、遺跡の密集する山と高瀬川の間狭い平坦地に集落と耕地をつくっていたものと考えられる。大門遺跡は、その川と山の間平坦地が次第に細まり、ついにはなくなる部分に位置する。その意味で大門遺跡は古墳時代の中心地帯のまさに南端部に当たるといえよう。矢ノ岡遺跡は高瀬川左岸の河岸段丘上に立地する。これは中心地帯に対して周縁部といえよう。

ところで、縄文時代の遺跡は、粟島や荘内半島の海浜部において知られるが、内陸部については不明である。弥生時代の遺跡もほとんど調査されていないが、音田川南岸の斜面部の北条遺跡から銅剣が3口発見されていることは、少なくとも弥生時代からこの付近が居住地として利用さ

れていたことを意味している。奈良時代以降の遺跡は、今回の大門・利生寺・矢ノ岡遺跡で調査された以外は不明であり、その全体像はほとんど分かっていない。

### 3 旧三野郡に関する史料

古代の三野郡に関する史料を次に示す。

①天平十九年二月十一日

(747)

「合處處庄肆陸處

合處處倉捌拾肆口 屋壹佰拾壹口

(中略)

讚岐国拾參處 大内郡一處 三木郡一處  
山田郡一處 阿野郡一處

鞆足郡二處 那珂郡三處  
多度郡一處 三野郡一處

(『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』)

②宝龜二年三月

(771)

「辛酉 遠江、國磐田郡、主計无位若湯坐部、龍麻呂 (中略) 讚岐、國三野郡、人丸部、臣豊辨  
各以<sub>テ</sub>私物ヲ<sub>リ</sub>養<sub>フ</sub>窮民廿人已上ヲ<sub>リ</sub>賜<sub>フ</sub>爵人コトニ二級ヲ<sub>リ</sub>」

(『續日本紀』)

③「飭磨の部

(中略)

美濃の里<sub>繼</sub>の湖土は下の中なり。右 美濃と號くるは 讚伎の國の彌濃の郡の人 到来たり  
て居りき。故、美濃と號く。

(後略)

(『播磨国風土記』)

④承和二年七月

(835)

「乙卯 賜<sub>テ</sub>讚岐國三野郡空閑地百餘町時子内親王<sub>一</sub>」

(『續日本後紀』)

⑤嘉祥一年十月

(848)

「冬十月丁亥朔 (前略) 讚岐國言 三野郡人從四位上丸部臣明麻呂 年卅 戸主外從八位上  
己酉成男也 齡十八歲入<sub>レ</sub>都從<sub>レ</sub>宦 遂効<sub>テ</sub>勞績<sub>一</sub> 被<sub>レ</sub>任<sub>テ</sub>當郡大領<sub>一</sub> 卽讓<sub>テ</sub>己職於父<sub>一</sub> 自守<sub>テ</sub>  
子道<sub>一</sub> 孝<sub>テ</sub>養二親<sub>一</sub> 己酉成年老到仕 親母亦耄 各居<sub>テ</sub>別宅<sub>一</sub> 相去十里 明麻呂朝夕往遷  
定省年久 眷<sub>テ</sub>其孝行<sub>一</sub> 在昔曾參不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>獨賢<sub>一</sub> 望請准<sub>テ</sub>據法式<sub>一</sub> 以被<sub>テ</sub>貢舉<sub>一</sub> 者勅宜<sub>下</sub>  
叙<sub>テ</sub>爵三階<sub>一</sub> 終<sub>レ</sub>身免<sub>中</sub>戸内田租<sub>上</sub>」

(『續日本後紀』)

㊦貞觀七年五月

<sup>(865)</sup>  
「廿五日乙巳（前略）讚岐國三野郡置<sub>2</sub>主政一員<sub>1</sub>（後略）」

貞觀七年十二月

「九日丙辰（前略）停<sub>2</sub>癩讚岐國三野郡託磨牧<sub>1</sub>（後略）」

貞觀十五年十二月

<sup>(873)</sup>  
「二日癸巳（前略）讚岐國三木郡人從五位下守大判事兼行明法博士丹波權掾櫻井田部連貞相  
明法得業生大初位下櫻井田部連貞世 三野郡人右近衛將監正六位上櫻井田部連豐貞等並  
改<sub>2</sub>本居<sub>1</sub>貫<sub>2</sub>右京六条一坊<sub>1</sub>（後略）」

元慶元年十二月

<sup>(877)</sup>  
「廿五日辛卯（前略）讚岐國香河郡人左少史正六位上秦公直宗 弟彈正少忠正七位上秦公直  
本 並改<sub>2</sub>本居<sub>1</sub>隸<sub>2</sub>左京六條<sub>1</sub>」讚岐國三野郡人外從五位下行遠江介櫻井田部連豐直 尾張  
國海部郡人玄蕃少允從六位上高尾張宿祢松影等 並移貫<sub>2</sub>山城國<sub>1</sub>」讚岐國寒川郡人木工大  
允正六位上矢田部造利人移貫<sub>2</sub>山城國愛宕郡<sub>1</sub>（後略）」

（『日本三代実録』）

㊧「三野郡一座<sub>小</sub> <sup>オホミツカミ</sup>大水神社」

（『延喜式』）

㊨「三野郡

勝間

大野

本山

高野

熊岡

高瀬

託間」

（『和名類聚抄』）

㊩「久安三年<sup>(1147)</sup>三月廿八日於讚洲三乃郡安養寺書寫了」

（『平安遺文題跋編』1768号）

㊪「注進 平家當國屋嶋落付御坐捨参源氏御方奉<sub>レ</sub>参京都候御家人交名事

藤大夫資光 同子息新大夫資重 同子息新大夫能資 藤次郎大夫重次 同舍弟六郎長資

藤新大夫光高 三野三郎大夫高包 橘大夫盛資 三野首領盛資 仲行事貞房 三野九郎

有忠 三野首領太郎 同次郎 大麻藤太家人

右度々合戦 源氏御方参 京都候之由為<sub>レ</sub>入<sub>2</sub>鎌倉殿御見参<sub>1</sub>注進如<sub>レ</sub>件

元暦元年五月 日  
(1184)

(『吾妻鏡』元暦元年九月十九日条)

「三野郡」については奈良時代のものから知られる (㊶)。郡職員として「大領」「主政」の存在が知られる。(㊶㊷)。三野郡の氏族として、「大領」に就職していた「丸部」氏、山城国に貫した「桜井田部」氏がいる (㊸㊹㊺)。三野郡と「播磨国飴磨部」間に交流があった (㊻)。式内社としては「大水上神社」1座があった (㊼)。7郷の存在が知れる。「勝間・大野・本山・高野・熊岡・高瀬・託間」の順序で記載されている (㊽)。「託磨牧」があった (㊾)。12世紀に「安養寺」があった (㊿)。12世紀末の鎌倉幕府成立時の内乱期において「三野」姓を称する「御家人」の存在が知れる (㊿)。

次に中世の主な史料を示す。

㊿源誓置文

(讃岐国高瀬郷) (伊豫大道) (下) (半分) (孫) (諱)  
「さぬぎのくにたかせのかうの事、いよたいたうよりしもはんぶんおは、まこ次郎泰忠ゆつ  
るへし、たたし、よきあしきは、ゆつりのときあるへく候、もしこ日にくひかゑして、しよ  
(兄弟) (後) (梅廻) (自宗)  
のきやうたいのなかにゆつりてあらは、はんふんのところおかみへ申て、ちきやうすへし、  
(上) (知行)  
よんて、のちのために、いましめのしやうかくのことし、  
(誠)

元徳三年十二月五日  
(1331)

源誓 (花押)」

(秋山家文書『香川県史古代・中世史料』所収)

㊿室町將軍家足利義政御判御教書案

(三野郡)  
「仁和寺法金剛院法華堂領讃岐國勝間庄領家職、祇園社領同國西大野郷領家方代官職事、早  
任度々補任状當知并行之旨、彌領掌不可有相違之状如件、

享徳三年十二月廿一日 (足利義政) 御判  
(1454)

近藤越中守殿

(八坂神社文書『香川県史古代・中世史料』所収)

㊿法金剛院領目録案

〔(外題略)

法金剛院領 仁和寺宮之院御舊記抄出之

(中略)

讃岐國

大水上社 田畑一町二段七十歩 (町脱力)  
畠百五十一段百六十歩

勝間庄 田卅一町九段

(中略)



天文貳年十一月八日 沙門大順判  
(1533)

(後略) 』

(法金剛院文書『香川県史古代・中世史料』所収)

高瀬郷には秋山氏の所領があった(㊀)。具体的な所在地は不明であるが調査を行った大門遺跡等の付近、または、それを含む可能性をもつ勝間庄と大水上社領があった(㊁㊂)。

近世の史料を1点のみ示す。

㊃「(前略)

智性童女 安政二卯年八月廿三日利正寺平蔵娘  
(1855)

(中略)

道鏡信士 安政三辰四月五日利正寺林番平蔵  
(1856)

(後略) 』

(『過去和帳弘化三丙<sub>午</sub>二月宝珠山宥峰代』地藏寺所蔵)

「利生寺」については、現在、小地名「利生寺」・川名「利生寺川」が知られるが、安政の史料は現在知られている最も古いものである。



### III 大門遺跡



### III 大門遺跡

#### 一 立地と土層序

大門遺跡は三豊郡高瀬町大字上勝間字砂古に所存する。付近には「大門」の小地名が伝承されている。

遺跡は鬼ヶ白山膝下の平坦地に立地する。標高は約19mである。平坦地はすぐ南側の高瀬川によって切断されているために約100mの巾しかない。東西はともに谷筋に当たるために相対的に底所になっている。遺跡は山際の孤立した狭小な平坦地に立地しているといえよう。

遺跡の北に隣接する鬼ヶ白山には一本松古墳・利生寺古墳・利生寺遺跡・砂古古墳が、高瀬川を挟んで南側には矢ノ岡遺跡が所存する。

基本土層序は、図2に示したように淡褐色・淡黄褐色粘質土層（第6層）を基盤土層とする。その上に、古墳時代・中世・近世の各包含層、さらにその上に床土と耕作土が層序をなしている。層厚は調査区中央の南北ラインを境として東・西に向うほど次第に厚くなっていく。なお、調査区東半は古墳時代の包含層を欠く。

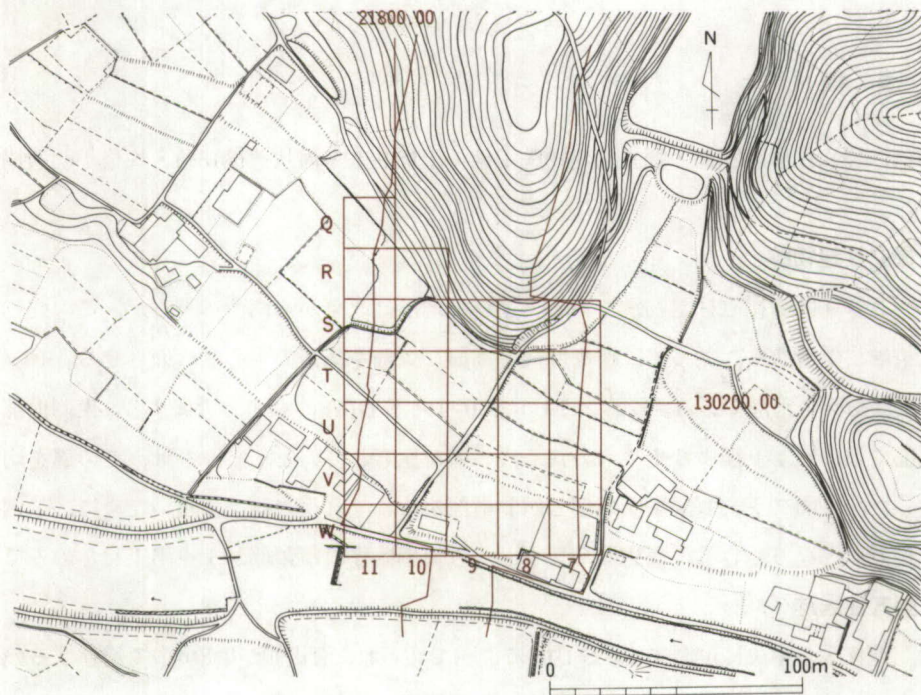


図1 グリッド配置図

遺構は、第6層上面に古墳時代後期の、第5層上面に中世の、第4層にわずかであるが近世のものが掘り込まれていた。第3層上面からは遺構は検出されなかった。

第1層	灰黒色土層	(耕作土)
第2層	明黄褐色土層	(床土)
第3層	淡褐色砂質土層	(中近世遺物包含層)
第4層	灰褐色土層・茶褐色土層	(中世遺物包含層)
第5層	暗褐色土層・黒茶色粘質土層	(古墳時代後期・古代遺物包含層)
第6層	淡褐色粘質土層・淡黄褐色粘質土層	(地山)

図2 大門遺跡土層模式図

## 二 古墳時代の遺構と遺物

### 1 遺構

遺構は、竪穴住居跡25棟・掘立柱建物跡1棟・土坑9基・溝状遺構18条・性格不明遺構4基を検出した。

#### (1) 掘立柱建物跡

S B01 2×4間の掘立柱建物跡である。遺跡の地形は北東から南西へ下るが、この建物跡は、その北東端に位置する。従って、標高は最も高い。梁部を集落の中心側へ面させる。ピットは円形、埋土は褐灰色土層である。なお、これは隣接するS D028のものと近似する。東側桁部と南側梁東半部には、ピット径よりやや巾の狭く浅い溝が掘られていた。ピットは、この溝を切って掘られていた。平面プランは、南側梁部と西側桁部がそれぞれ反対側より短いために、全体的には歪んだ長方形となっている。遺物は、ピットから須恵器甕の口頸部が1点出土したのみである。

#### (2) 竪穴住居跡

S B02 調査区の中央に位置する。S B03によって切られ、南辺側が0.8m巾で残存するのみである。東辺にのみ周溝が掘られていた。遺物は、土師器の体部小片のみである。

S B03 調査区の中央に位置する。S D025を切る。S D024とは切り合い関係を有しない。少な

くとも、SD024は、この住居跡に付属するものである。主柱穴はSP1～4である。カマドは、北辺のほぼ中央につくられている。周溝が、カマド部分を除き巡る。

カマドは、黒茶色土によって築かれている。0.65×0.8m、厚さ9cmの火床を残す。火床面の上には厚さ5cmの焼土を含む粘質土が堆積していた。煙道は竪穴掘り形上場線から始まり、外方へほぼ直角に1.52m延びる。火床面と煙道底部のレベルはほぼ同じである。しかし、先端部近くでレベルを上げ、一旦、平坦面をつくった後、さらに、ピット状の凹みとなって終わる。同凹みからは、土師器甕の大破片が1点出土した。

遺物は、カマド内の焼土を含む土層上面から須恵器鉢の破片が1点出土した。埋土中から、土師器鍋、須恵器杯・高杯の破片が出土した。

SB04 SD025・026を切る。SP7・8に切られている。主柱穴はSP1～4である。周溝は3辺に残る。西辺は削平により失われたものと思われる。カマドはもたない。遺物は、須恵器杯破片が1点出土したのみである。

SB05 南壁はSX02に切られている。平面プランは隅丸方形を意識しているが、辺には出入りがある。また、竪穴壁の傾きも、ゆるやかな部分が多く、全体的に粗いつくりである。主柱穴は、SP1・2の2穴と考えられる。竪穴床面のほぼ中央に、炭化物を含む粘質土の土塊があった。西外方へ延びるSD023とは切り合い関係はみられなかった。カマドはもたない。遺物は、床面から完成品はないが、残存率の高い須恵器が多く出土した。土師器は杯、須恵器は壺蓋・高杯・甕・短頸壺・鉢・鍋・甕がある。

SB06 斜面部に立地する。SK033に切られる。削平を受け、高所側に周溝を残すのみである。周溝は北東辺中央で膨らむ。カマドの有無は不明。遺物は、周溝から土師器と須恵器の杯破片が出土した。

SB07 斜面部に立地する。床面まで削平を受け周溝を残すのみである。竪穴の2箇所の隅から外方へ小溝が延びるが、竪穴との切り合い関係は認められなかった。住居跡に付属するものであろう。主柱穴は決定し難い。SP1・7は周溝を切るが、住居跡に伴うピットであると思われる。方形の土坑は第4層から掘り込まれたもので、中世の攪乱である。カマド築造の痕跡はなかった。遺物は、周溝から須恵器杯破片が数点出土した。

SB08 深く削平を受ける。東半分の周溝を残すのみである。南東隅付近のピットは周溝を切る。カマドの有無は不明である。遺物は、周溝から杯破片が数点出土したのみである。

SB09 西コーナー部は調査区外である。北辺西半は中世の攪乱を受ける。全体に深く削平を受け、周溝を残すのみである。主柱穴は、SP1～4である。床面東半中央部に1.1×1.7mの範囲で、炭化物の堆積がみられた。北辺中央やや東寄りのところから、煙道が直角に外方へ延びる。

カマドはほとんど削平により失われていた。煙道先端部のピットは後世の攪乱である。煙道は基部から次第に細まり二等辺三角形を呈する。煙道底部のレベルは、竪穴の床面よりも低い。

遺物は、埋土中から土師器高杯・小甕・甗、須恵器杯・高杯・甕の破片が出土した。

S B010 調査区南端部に位置する。S B011によって北東部分を切られる。東・南壁とも後世のピットによって切られる。平面形は隅丸長方形である。主柱穴はS P 1と考えられる。床面は、かならずしも平坦ではなく、数箇所の不定形の凹みがある。東辺中央部にカマドをつくる。

カマド自体は残存しない。煙道は基部がわずかに残存するのみである。基部から次第に細まるとも考えられる。同底部は、竪穴床面と同じレベルで検出された。

遺物は、須恵器杯身などの破片がわずかに出土した。

S B011 S D03によって北東コーナー部を切られる。平面形は隅丸長方形である。北東コーナー寄りに土坑がある。主柱穴は決定し難い。床面は、かならずしも平坦ではなく、壁際は低くなっている。

東辺中央部にカマドをつくる。竪穴壁に対して直角方向に1.4mの煙道が延びる。カマドの立ち上がり部を失い火床部を残すのみである。火床部は2層に分けられる粘質土によって築かれる。0.8×0.9mの規模を残す。煙道の平面形は長方形、火床部から段をつくって下がり、中央部までゆるやかに下る。それより先は、逆にゆるやかに上がり、先端部では屈曲してピット状の凹みとなる。煙道両側壁は垂直に上がり、断面形はU字形である。

遺物は、埋土中から須恵器杯破片が数点出土した。

S B012 東辺は生活道路があったために調査できなかった。主柱穴はS P 1～4である。壁際にわずかのテラス部を残して、周溝が掘られている。周溝は浅く、巾0.34～0.5mでカマド部分を残して巡る。この周溝により、竪穴中央部は壇状の高まりを現出する。壇状部上面は平坦である。南辺壁際には溝を掘る。溝中央には、土橋状に巾0.25mの掘り残し部分がある。

北辺中央にカマドを築く。立ち上がり部は失われ、粘質土によってつくられた火床部を残すのみであった。残存する規模は、0.76×0.83mである。北辺から直角に外方へ煙道が延びる。中央部で東方へ若干屈曲する。平面形は歪んだ長方形である。煙道底部は、カマド火床部から一段下がって始まり、ゆるやかに上がって先端部に至る。奥壁は急な傾斜で上がるが、途中で屈曲してゆるやかとなる。煙道中央部で土師器甕の大形片が出土した。

遺物は、壇状部中央の床面直上から、脚部を欠く須恵器有蓋高杯が倒立状態で出土した。埋土中から、土師器甕・把手、須恵器杯・高杯が出土した。

S B013 調査区南西部に位置する。4棟が切り合う竪穴住居跡のなかで最も新しいものである。北半は、生活道路があるために調査できなかった。主柱穴は決定し難い。カマドの有無も不明である。

遺物は、埋土中から須恵器杯・甕が数点出土した。

S B014 S B013とS D044に切られる。主柱穴は不明である。北辺東半部と東辺北半部に周溝がある。カマドの有無は不明である。



遺物は、土師器の小片のみである。

S B 015 S B 014とS D 044に切られる。主柱穴は不明である。北東コーナー部を中心に、鍵形に周溝がある。北辺やや東寄りで、0.8×0.9mの焼土を含む粘質土層を検出した。カマドと考えられる。

カマドは、周溝を切ってつくられている。第14・15層が火床部であろう。煙道は攪乱によって失われたものと考えられる。

遺物は、埋土中から土師器甕、須恵器杯・高杯破片が出土した。

S B 016 S B 013・014・015によって切られている。南辺部と南東コーナー部を検出したのみである。主柱穴、カマド部の有無は不明である。

遺物は、埋土中から土師器の小片が出土したのみである。

S B 017 調査区南西端に位置する。西側2/3は調査区外である。S P 1は主柱穴の1つであろう。復元規模は4.46×4.46mである。カマドの有無は不明である。

遺物は、埋土中から須恵器杯破片が出土したのみである。

S B 018 S B 017に南辺を切られている。西側2/3は調査区外である。主柱穴は不明である。周溝が巡る。周溝とS P 1～7は同時併存していたと考えられる。カマドの有無は不明である。

遺物は、埋土中から須恵器高杯・甕破片が出土したのみである。

S B 019 西辺は生活道路があるために調査できなかった。大部分をS B 020に切られる。主柱穴は不明である。

北辺中央部にカマドを築く。立ち上がり部は失われていた。火床部は2層に分けられる粘質土でつくられる。煙道は、基部から次第に細まる。底部は本来平坦であって、段状のものは、S B 020に切られた時の攪乱によるものであろう。先端部には、ピット状の凹みが掘られていた。なお、南辺東寄り部で焼土塊の集中を検出した。

S B 020 主柱穴は決定し難い。

北辺中央部にカマドを築く。立ち上がり部は失われていた。粘質土でつくられた火床部は、中央部が皿形に凹む。煙道は途中で若干屈曲し、先へ向かって次第に細まる。同底部は先に向かいやや上がり気味で、先端部で屈曲して平面楕円形のピット状の凹みとなる。

遺物は、埋土中から須恵器杯・高杯・甕破片が出土した。

S B 021 調査区のほぼ中央に位置する。S B 022・023によって切られる。主柱穴はS P 8・9・12・11であろう。カマド部分を除き、周溝が巡ると思われる。

東辺中央にカマドを築く。立ち上がり部は失われる。粘質土でつくられる火床部は、0.38×0.58m残存している。火床上面直上の焼土を含む粘質土は、崩落した立ち上がり部の一部と思われる。火床奥部は、溝状に凹むが、すぐに上がり煙道口となる。煙道底部は火床面よりも10cm高い位置から始まり、レベルを上げながら先端部に至る。先端部には、ピット状の凹みが掘られている。

煙道断面は皿形を呈し、先へ行くに従い細まる。

遺物は、埋土中から須恵器罍破片が出土したのみである。

S B 022 S B 023によって切られる。西辺は試掘時に失った。主柱穴、カマドの有無は不明である。復元規模は4.4×4.12mである。

遺物は、埋土中から須恵器杯身破片が出土したのみである。

S B 023 主柱穴はS P 1・3・9・7が考えられる。S P 7は、S B 021の再利用である。東辺にのみ周溝をもつ。床面中央部に炭化物を多量に含む土塊があった。その上面には須恵器杯身の完成品が1点残されていた。

北辺やや西寄り部にカマドを築く。残存状態が最も良好であった。カマドは、竪穴床面を掘り凹み、そこへ黒茶色を呈する粘質土を入れて火床部をつくり、さらに立ち上がり部を築いていた。火床部内巾0.53m、奥行きは0.66m、平面形は両側辺が膨らむ台形である。カマド中央部には焼成を受けた赤褐色粘質土があった。この上面がカマド使用時の床面であろう。その上には、灰を含む黒色粘質土層と焼土を含む灰茶色粘質土層が堆積していた。床面は奥へゆるやかに上がっていく。煙道は、巾0.24m、長さ1.3m、先端部で細くなる。同中央部にはピット状の凹みが掘られていた。溝状に凹む火床最奥部から約15cmを外湾して急に上がり、煙道底部となる。煙道口からピット状の凹みまで、ほぼ水平に延び、同凹みを越えると底部は基部側より7cm高く、そのまま先端部へ向かう。

遺物は、埋土中から須恵器杯・高杯・甕破片が、多く出土した。

S B 024 1.57×1.57mの隅丸方形の竪穴である。壁面はゆるやかな部分もあるが、急なところが多い。床面の4隅にはそれぞれ柱穴がある。中央部には0.38×0.65m、深さ0.15mの土坑が掘られていた。ここから、砂岩の砥石が1点出土した。南・北隅部には、それぞれ外方へ延びる小溝が付けられていた。北隅の小溝底部は竪穴床面と同じレベルであるが、南隅のそれは、竪穴床面よりも段状に高くなっていた。

遺物は、埋土中から土師器杯、須恵器杯・高杯の破片が比較的、多く出土した。

S B 025 試掘で壁面を失った。東コーナー部を残すのみである。南半は、生活道路があるために調査できなかった。周溝が巡る。S P 1は周溝内に掘られていた。主柱穴、カマドの有無は不明である。

遺物は、周溝から土師器、須恵器小片を出土したのみである。

S B 026 西辺は調査区外である。南半は農業用水路があるため調査できなかった。北東コーナー部と東辺を検出したのみである。S P 2は主柱穴の一つであろう。この住居跡はS D 020を切っている。

遺物は、埋土中から土師器杯・羽釜・甕、須恵器杯・盤・皿・高杯・鉢・甕・長頸壺・無頸壺、製塩土器、鉄滓・獣骨などを出土した。住居廃棄跡、塵芥の捨て場として利用されたものである

う。

### (3) 土坑

S K030 径約2mの円形土坑である。床面断面はゆるやかな皿形であるが、北半には0.65×1.1m、深さ0.2mの掘り形の中に須恵器甕を埋置していた。掘り形と甕の間には、多量の拳大の石を詰め石として入れていた。甕は土圧によって潰され、同破片の多くが甕内へ落ち込んでいた。甕内には土坑埋土と同一の土が入っていたのみである。

土坑埋土中から土師器小片のみが出土した。

S K032 形状は1.53×2.06mの楕円形、深さは5cmである。床面は小さな凹凸があるがほぼ水平である。

埋土中から土師器小片のみが出土した。

S K033 形状は径1.99mの円形、深さは6cmである。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はほぼ水平である。南東壁際に径0.4m、深さ0.15mの土坑が掘られていた。

埋土中から、須恵器杯・長頸壺破片が出土した。

S K034 1.39×1.53m、深さ3cmの楕円形の土坑である。南西壁際に0.6×1.4m、深さ0.35mの土坑が掘られていた。

埋土中から、土師器小片のみ出土した。

S K035 径2.5mの円形の土坑である。S D024に切られている。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はほぼ水平である。中央部西寄りに0.5×0.5m、深さ0.18mの不整形の土坑が掘られていた。また、北東壁際に0.28×0.53m、深さ8cmの土坑、南東壁際に小さな凹みが2箇所掘られていた。

埋土中から、土師器、須恵器小片が出土した。

S K036 径1.83mの円形の土坑である。床面はほぼ水平である。北壁際に径0.7mの円形の小土坑をもつ。

遺物は、埋土中から須恵器杯・高杯が出土したのみである。

S K038 1.8×2.25m、深さ0.31mの不整形な土坑である。床面は凹凸があり、平坦ではない。南西隅部に浅い小土坑をもつ。

埋土中から土師器小片が出土した。

### (4) 性格不明遺構

S X02 5.9×8.7m、深さ0.18mの不整形な遺構である。床面は、ほぼ平坦であるが、東から西へゆるやかに下る。ピット状の凹みが4箇所にある。

遺物は、埋土中から土師器甕破片、須恵器杯・高杯・甕・子持ち壺・甕・器台の破片などが多く出土した。

S X06 S K038とS D033に切られている。3.3×4.1m、深さ0.14mの不整形な遺構である。南辺中央部に不整形な段状部がある。床面はほぼ水平で、ピット状の凹みが6穴ある。

埋土中から土師器甕、須恵器杯・高杯・長頸壺の破片が出土した。

(5) 溝状遺構

S D020 S D04とともに集落を貫通する幹線的な溝である。巾0.55~1.1m、深さ0.65~1 m、断面は先丸のV字形を呈する場合が多い。

表1 古墳時代後期建物跡計測値表

遺構名	規模 (面積)	形状	カマド・炉の有無	主軸方向	主柱間距離	付属施設	主柱穴内面積
S B01	2×4間 4.2×6.45 (27.09㎡)	長方形	無し	N41° E	2.2 2.1 1.8 1.9 1.5 1.65 1.5 1.52 1.8 1.35 1.5 1.8		
02	4.46×(4.46) (19.89㎡)	(隅丸方形)	不明	N27° W	不明	周溝	
03	6.16×5.38 (33.14㎡)	隅丸方形	カマド有り	N28° W	4 2.9 3.2 2.74 3.04	周溝	0.26
04	4.2×4.22 (17.72㎡)	隅丸方形	無し	N12° E	4 2.2 2.2 2.0 2.1	周溝	0.25
05	4.22×4.5 (18.99㎡)	垂な隅丸方形	カマド無し 床面中央炭化物有り 炉跡か	N30° W	2 3.3		
06	5.55×(5.55) (30.80㎡)	隅丸方形	不明	N35° E	不明	周溝	
07	4.1×4.06 (16.65㎡)	隅丸方形	無し	N42° W	不明	周溝、対角位置から外方へ延びる溝各1	
08	5.3×(5.3) (28.09㎡)	隅丸方形	不明	N1° W	不明	周溝 巾0.3m~0.48m 深さ0.1m	
09	5.38×5.5 (29.59㎡)	隅丸方形	カマド有り	N29° W	4 2.75 2.0 2.72 2.4	周溝	0.20
010	3.2×4.1 (13.12㎡)	隅丸長方形	カマド有り	N40° E	(1)		
011	3.49×4.28 (14.94㎡)	隅丸長方形	カマド有り	N58° E	(4)		
012	5.65×(5.65) (31.92㎡)	隅丸方形	カマド有り	N12° W	4 3.25 2.16 3.48 2.62	南壁下に溝、床面中央に壇状遺構	0.25
013	4.9×(4.9) (24.01㎡)	隅丸方形	不明	N11° E	不明	焼土有り	
014	4.5×(4.5) (20.25㎡)	隅丸方形	不明	N45° E	不明		
015	4.33×4.92 (21.30㎡)	隅丸長方形	不明	N5° W	不明		
016	不明	(隅丸方形)	不明	N16° W	不明		
017	4.46×(4.46) (19.89㎡)	隅丸方形	不明	N10° W	不明		
018	5.5×(5.5) (30.25㎡)	隅丸方形	不明	N5° W	不明	周溝	
019	5.06×(5.06) (25.60㎡)	隅丸方形	カマド有り	N38° W	不明		
020	5.56×5.5 (30.58㎡)	隅丸方形	カマド有り	N35° W	不明		
021	3.9×4.67 (18.21㎡)	隅丸方形	カマド有り	N64° E	4 2.2 2.18 2.48 2.2	周溝	0.29
022	4.4×4.12 (18.13㎡)	隅丸方形	不明	N16° W	不明	2辺に周溝	
023	4.97×4.7 (23.36㎡)	隅丸方形	カマド有り 床面中央に炭化物有り	N16° W	不明		
024	1.57×1.52 (2.39㎡)	隅丸方形	無し	N34° W	4 0.7 1.21 1.05 1.22	対角位置から外方へ延びる溝有り 床面中央に土坑	0.42
025	不明	隅丸方形	不明	N35° E	不明	周溝	
026	不明	隅丸方形	不明	N29° W	不明		

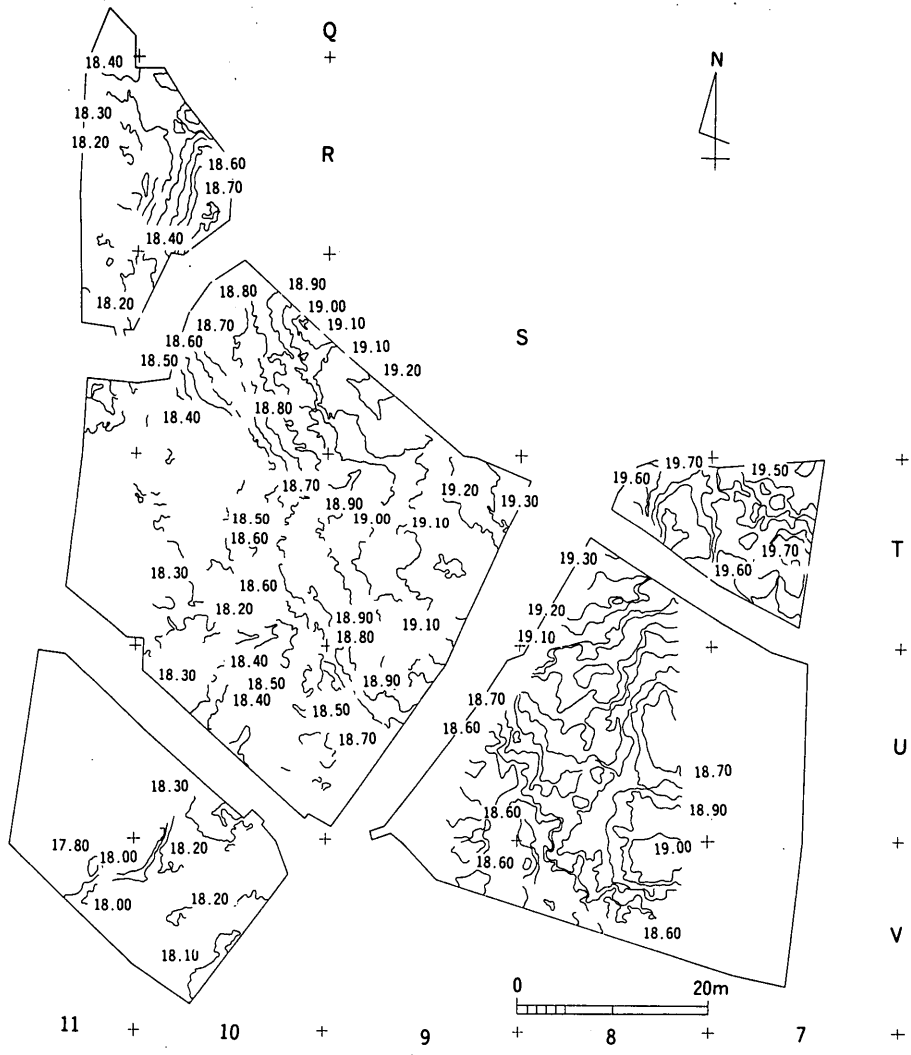


図3 第2遺構面地形実測図

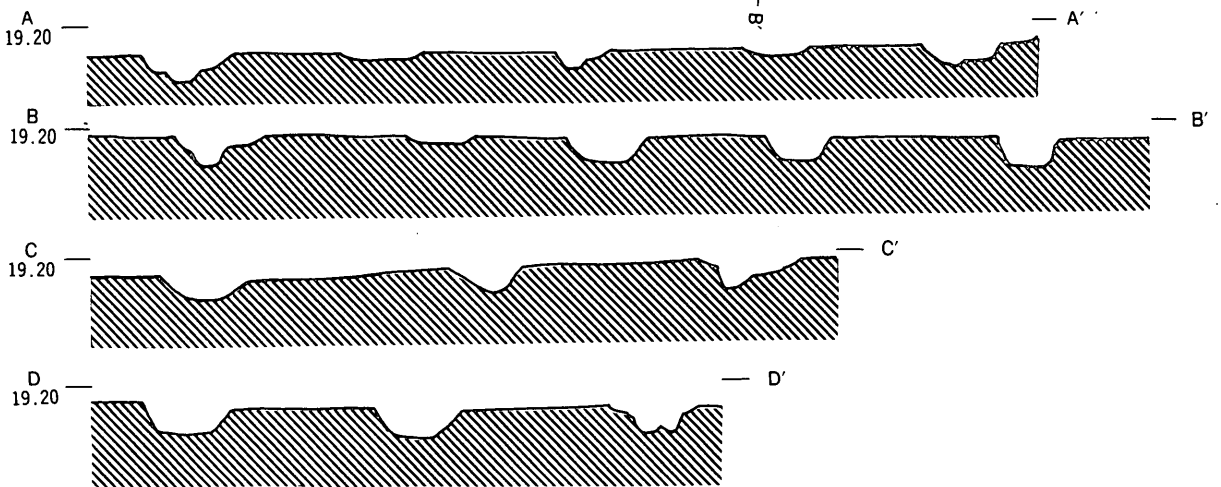
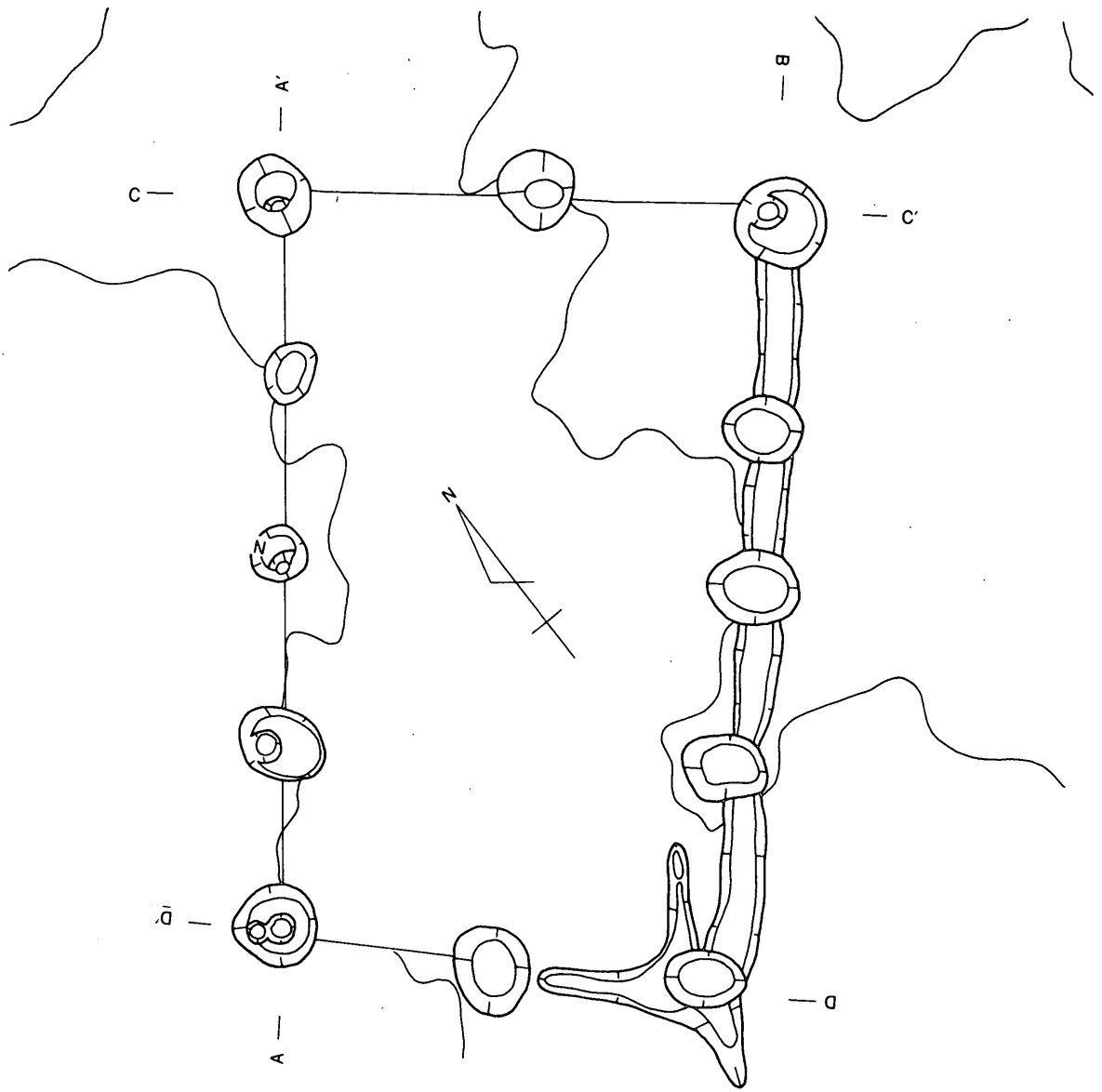


图4 SB01实测图 (1/60)



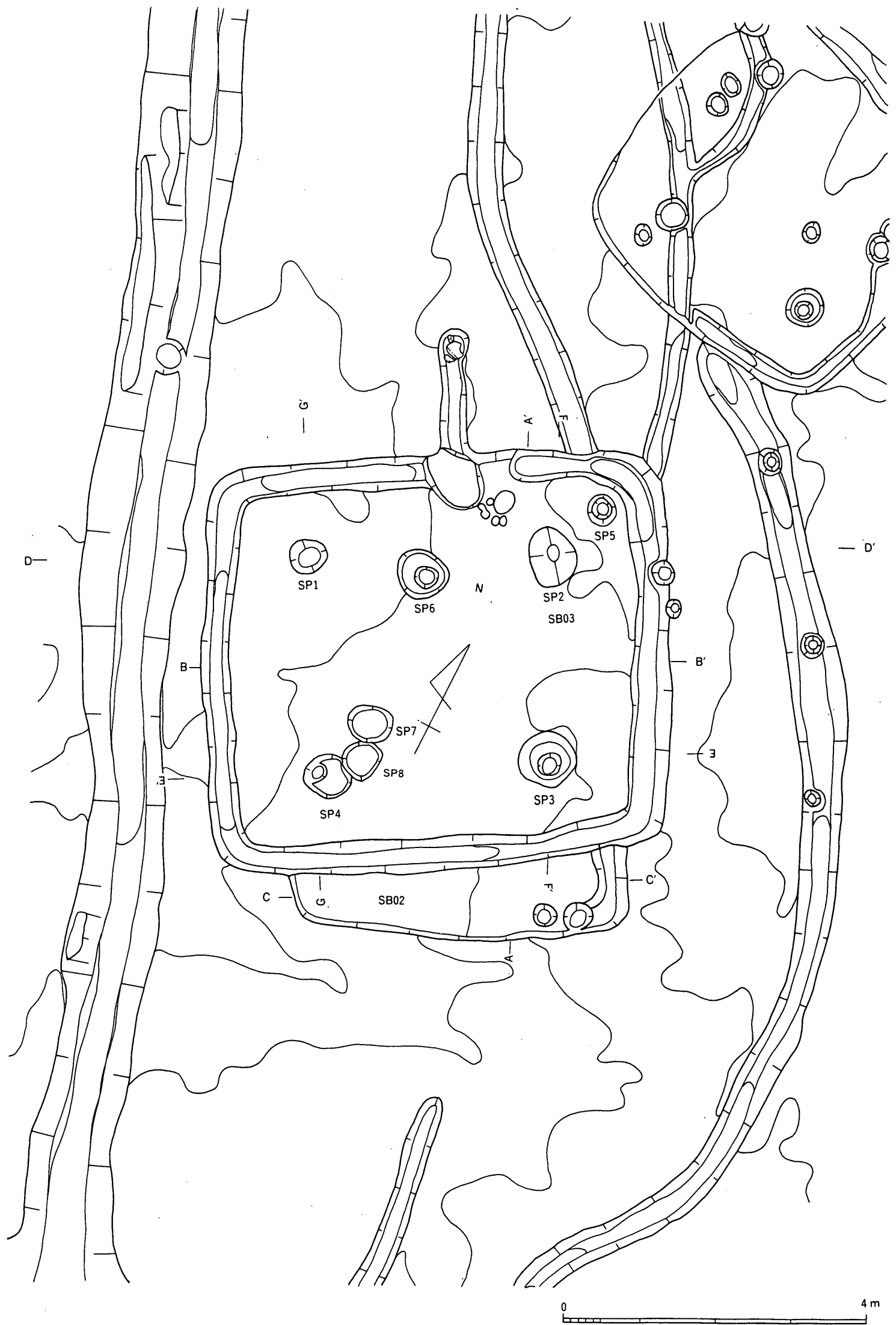


图5 SB02·03实测图 (1/60)

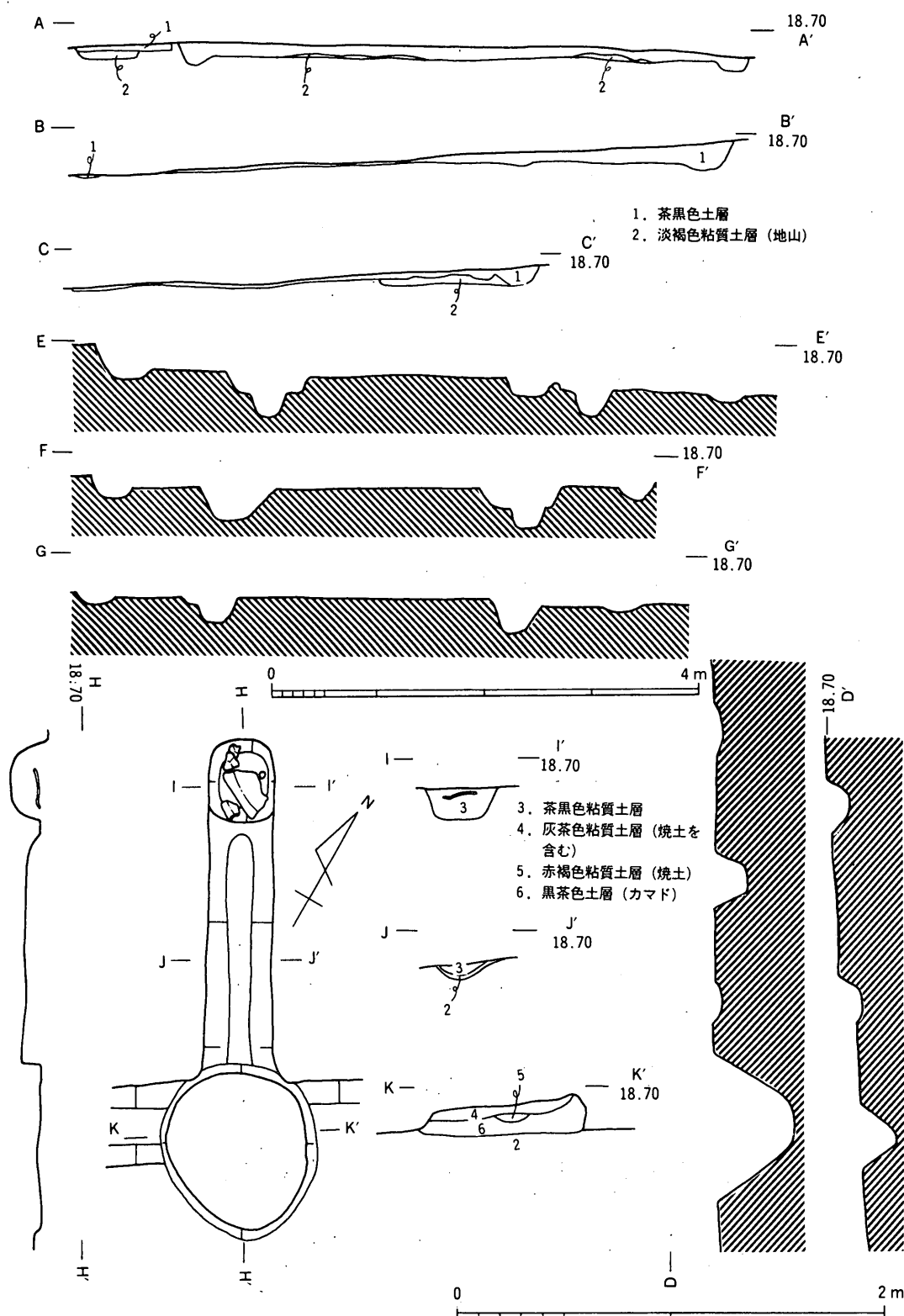
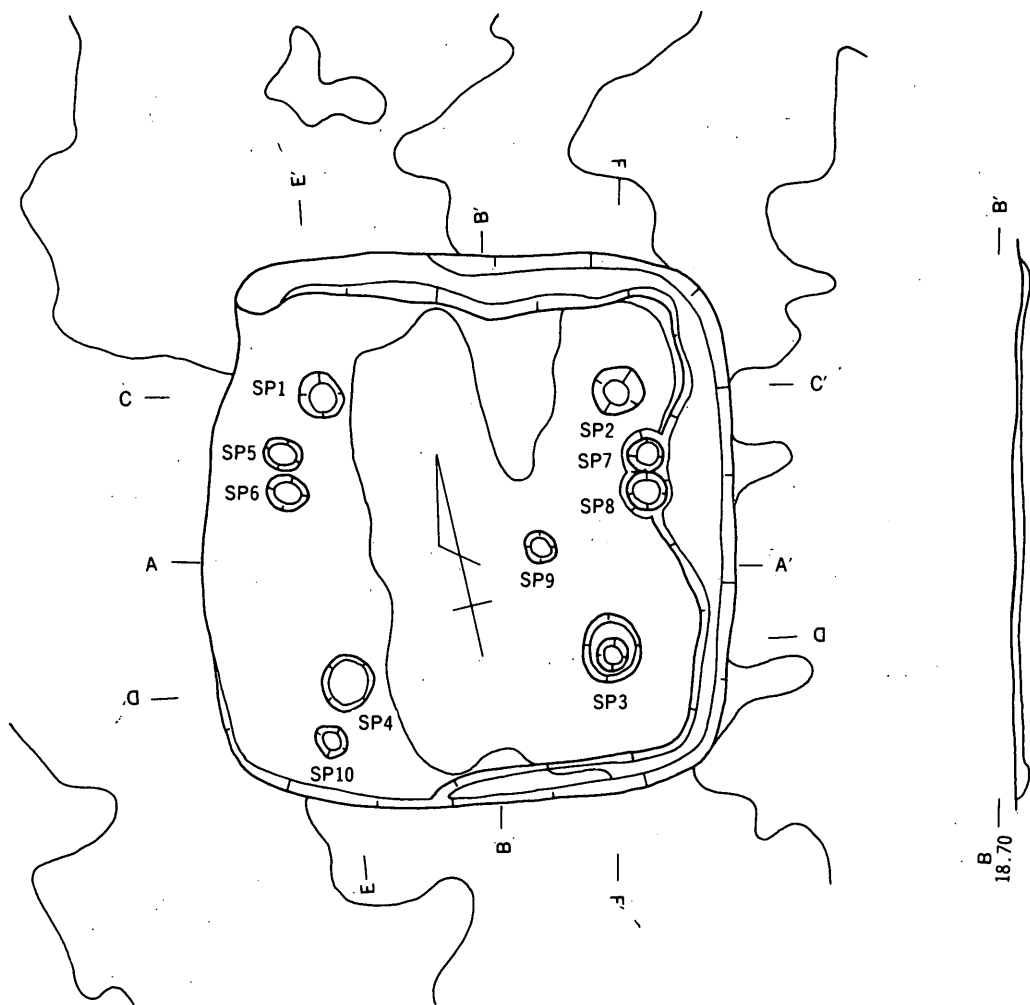
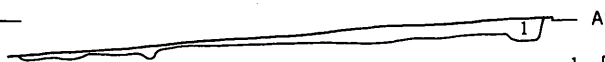


図6 S B 02・03実測図, S B 03カマド実測図 (1/60・1/30)





A  
18.70



1. 灰茶黑色粘質土層

C  
18.70



D  
18.70



E  
18.70



F  
18.70

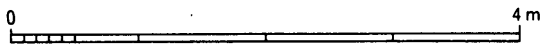
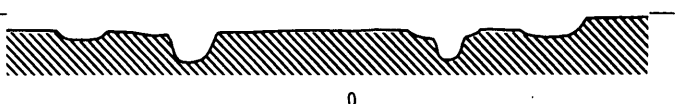
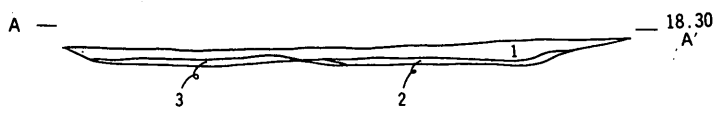
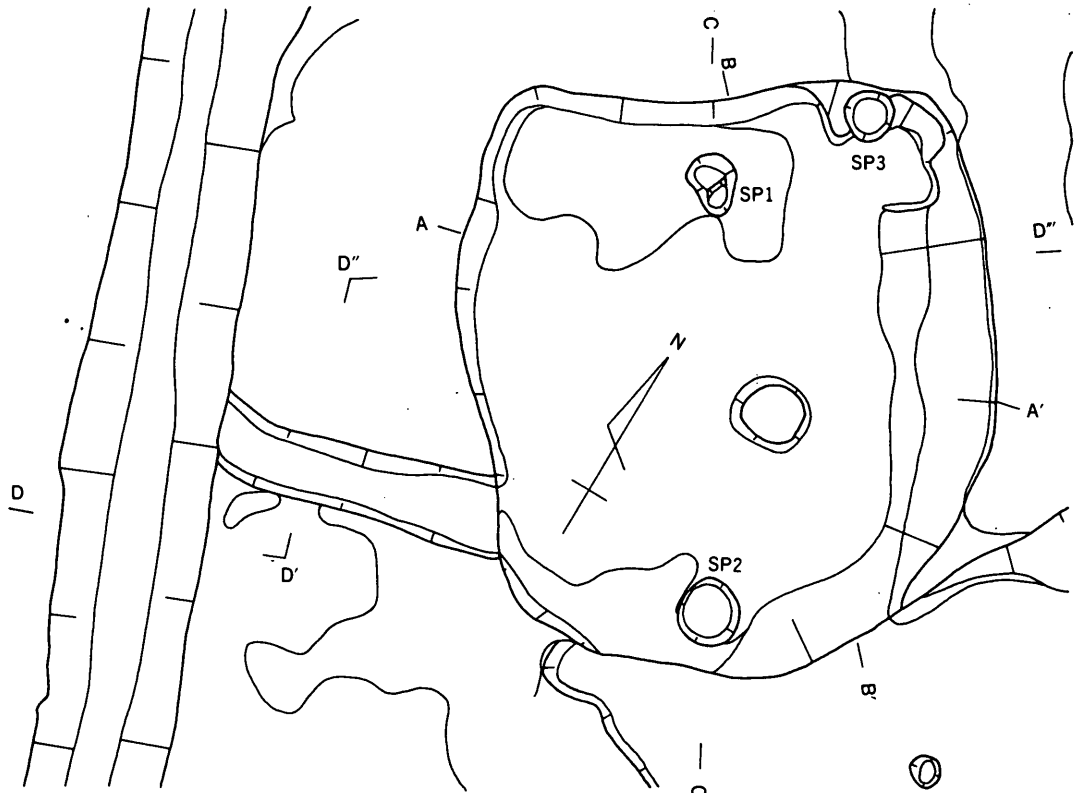


图7 S B04实测图 (1/60)



- 1. 茶灰黒色粘質土層
- 2. 灰黒色粘質土層
- 3. 灰褐色粘質土層 (地山)
- 4. 1より茶色味が強い
- 5. 茶黒色粘質土層

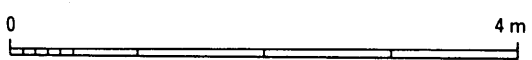
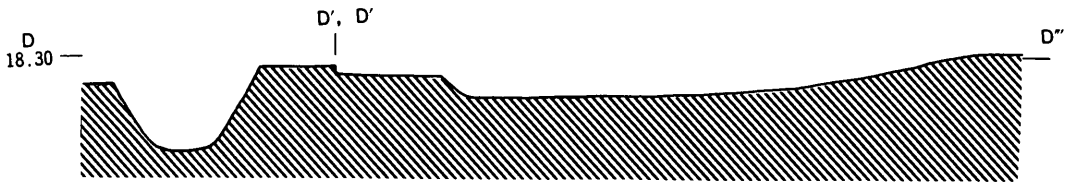
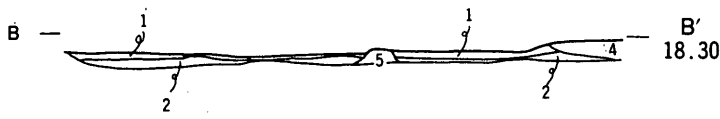


図8 S B05実測図 (1/60)

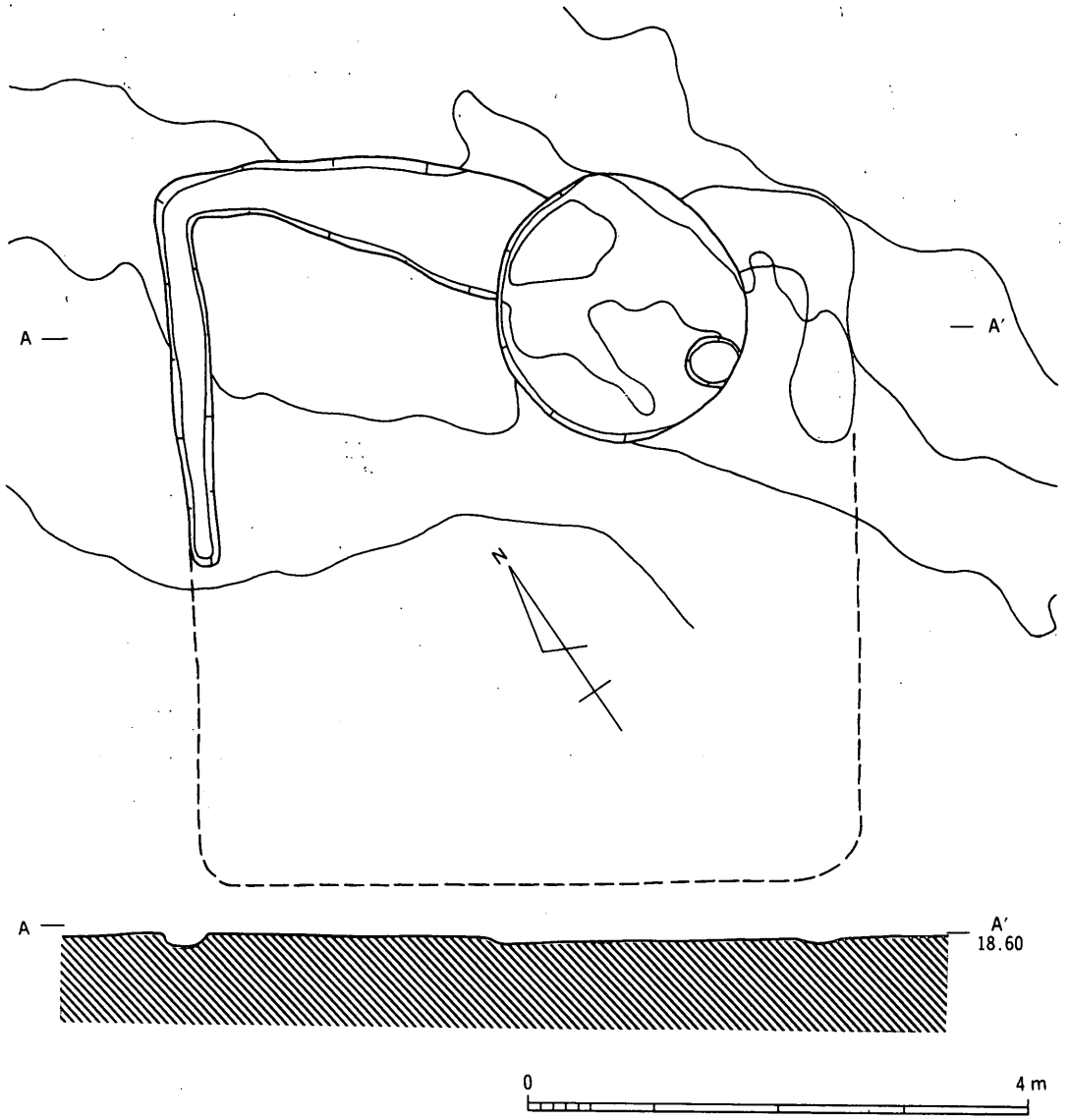


图9 SB06实测图 (1/60)

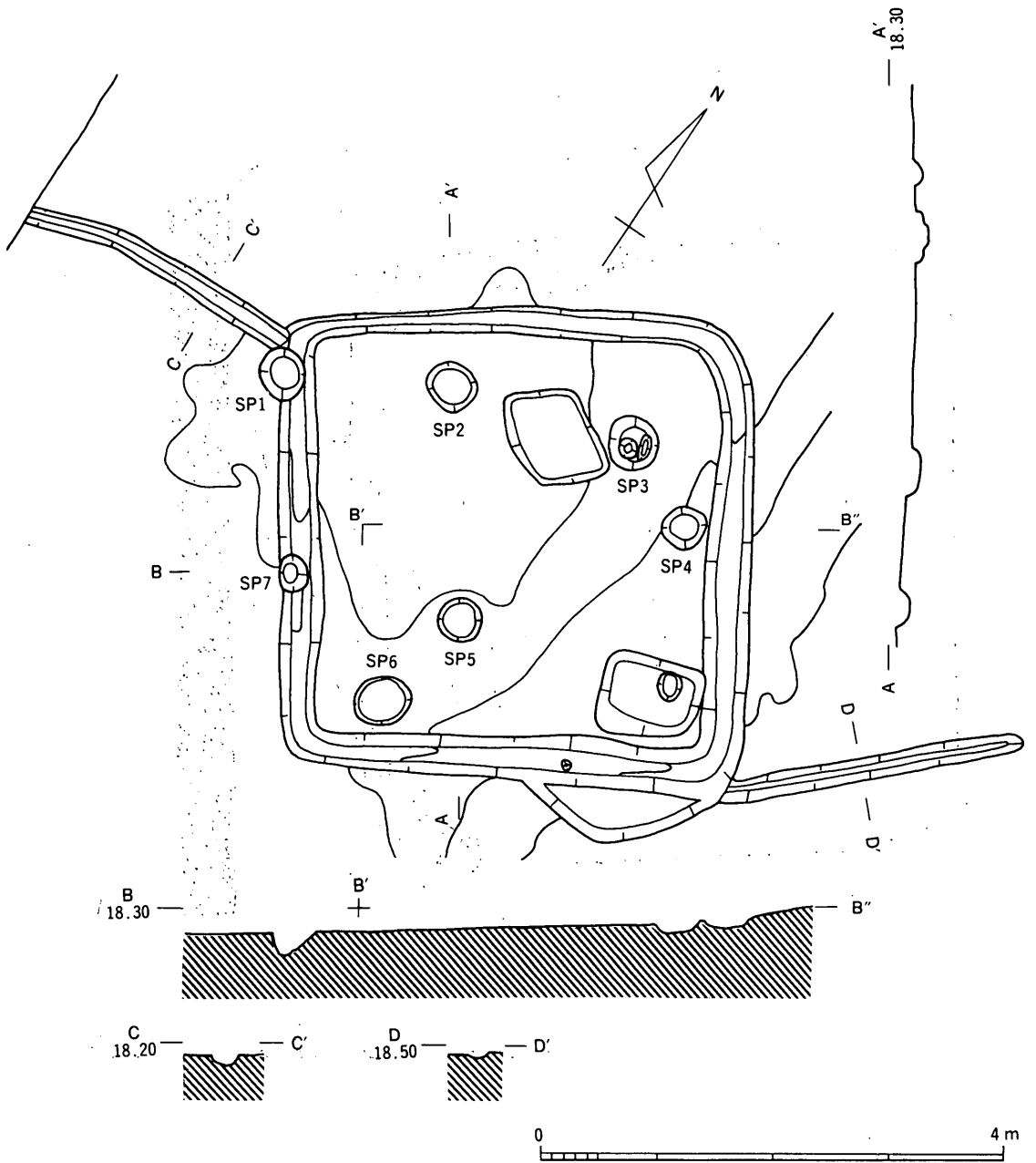


图10 SB07实测图 (1/60)

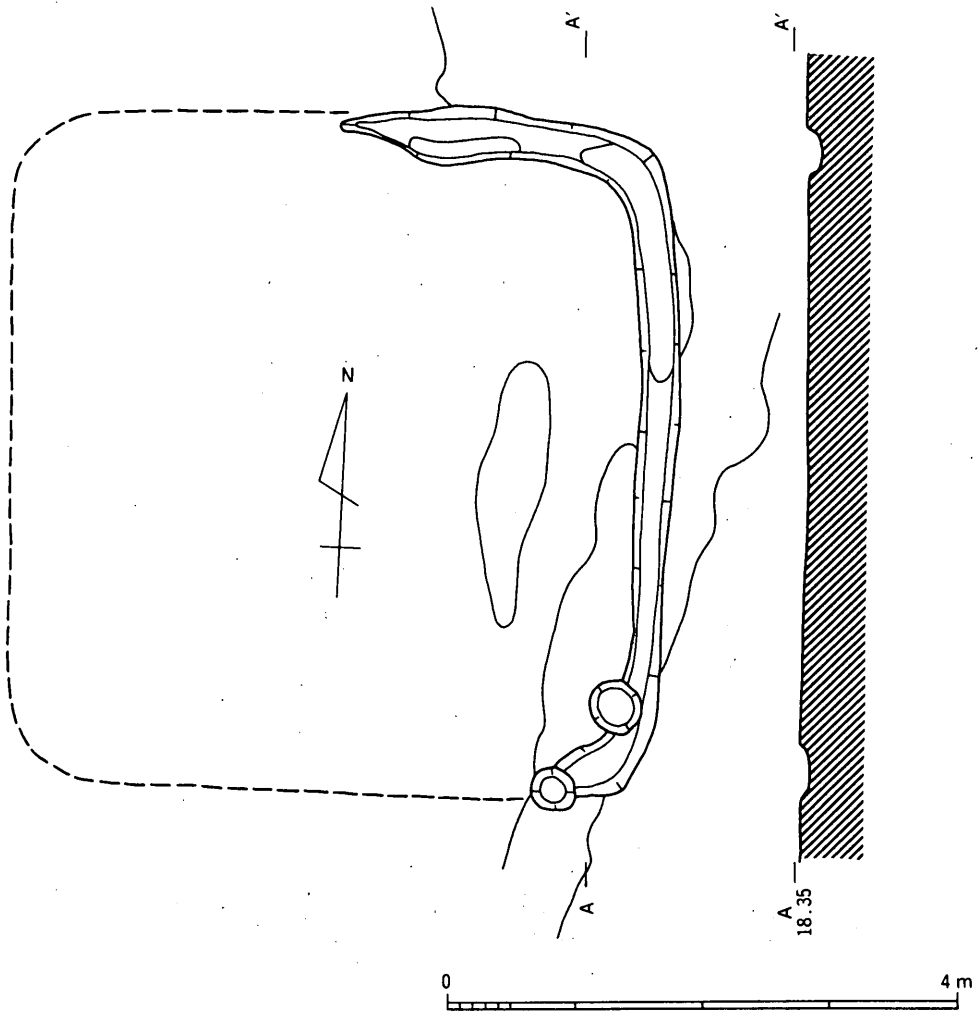


图11 SB08实测图 (1/60)

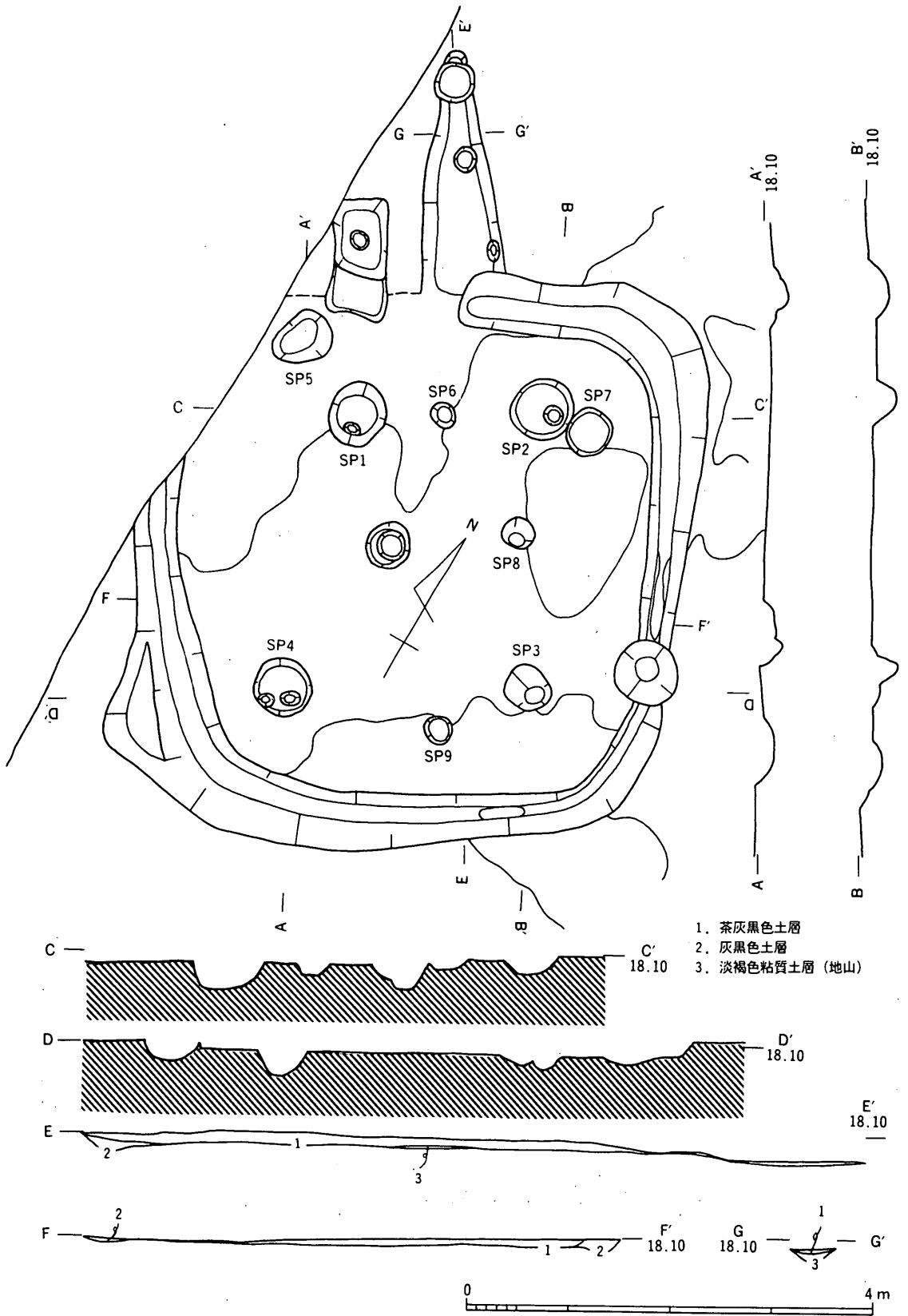
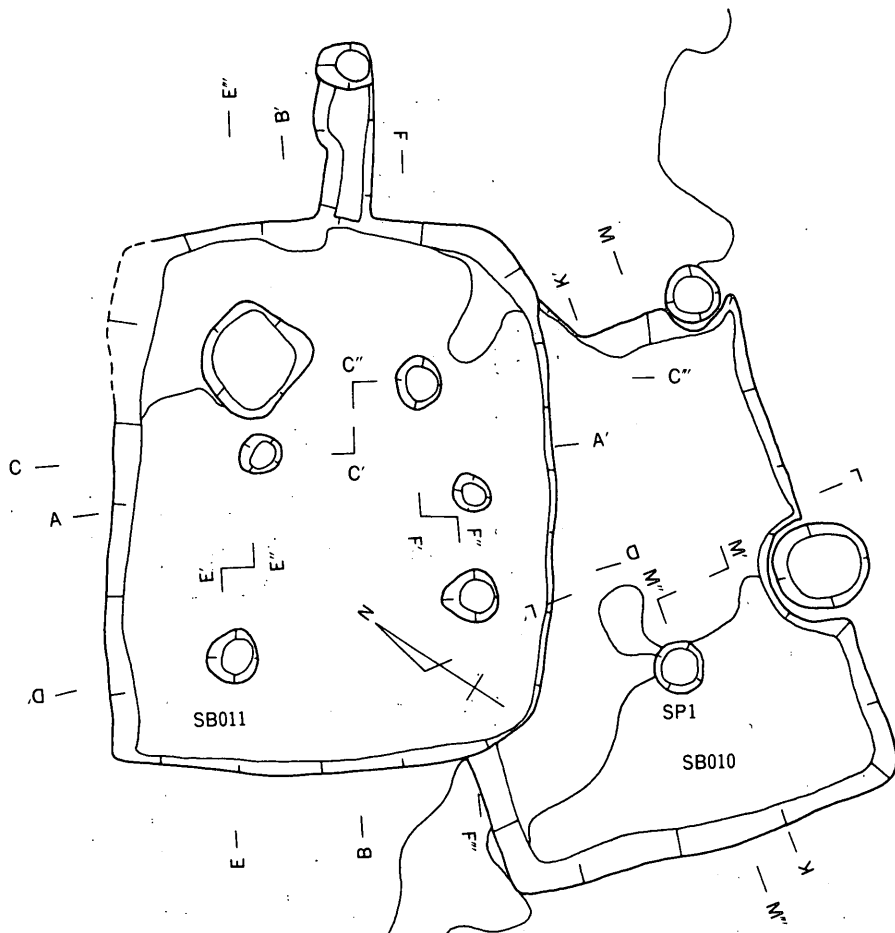
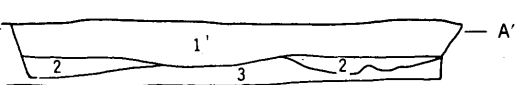


图12 S B09实测图 (1/60)

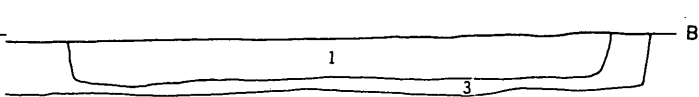


A  
18.20

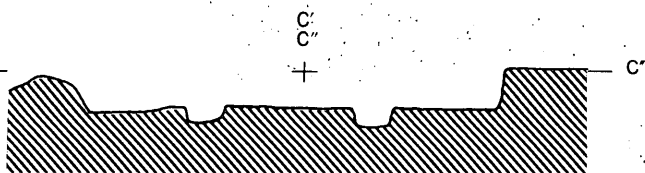


1. 黒褐色粘質土層
2. 暗褐色粘質土層
3. 暗茶褐色粘質土層 (地山)

B  
18.20



C  
18.20



D  
18.20

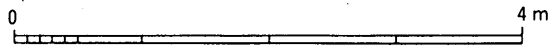
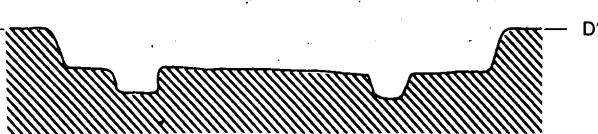


图13 SB010・011実測図 (1/60)

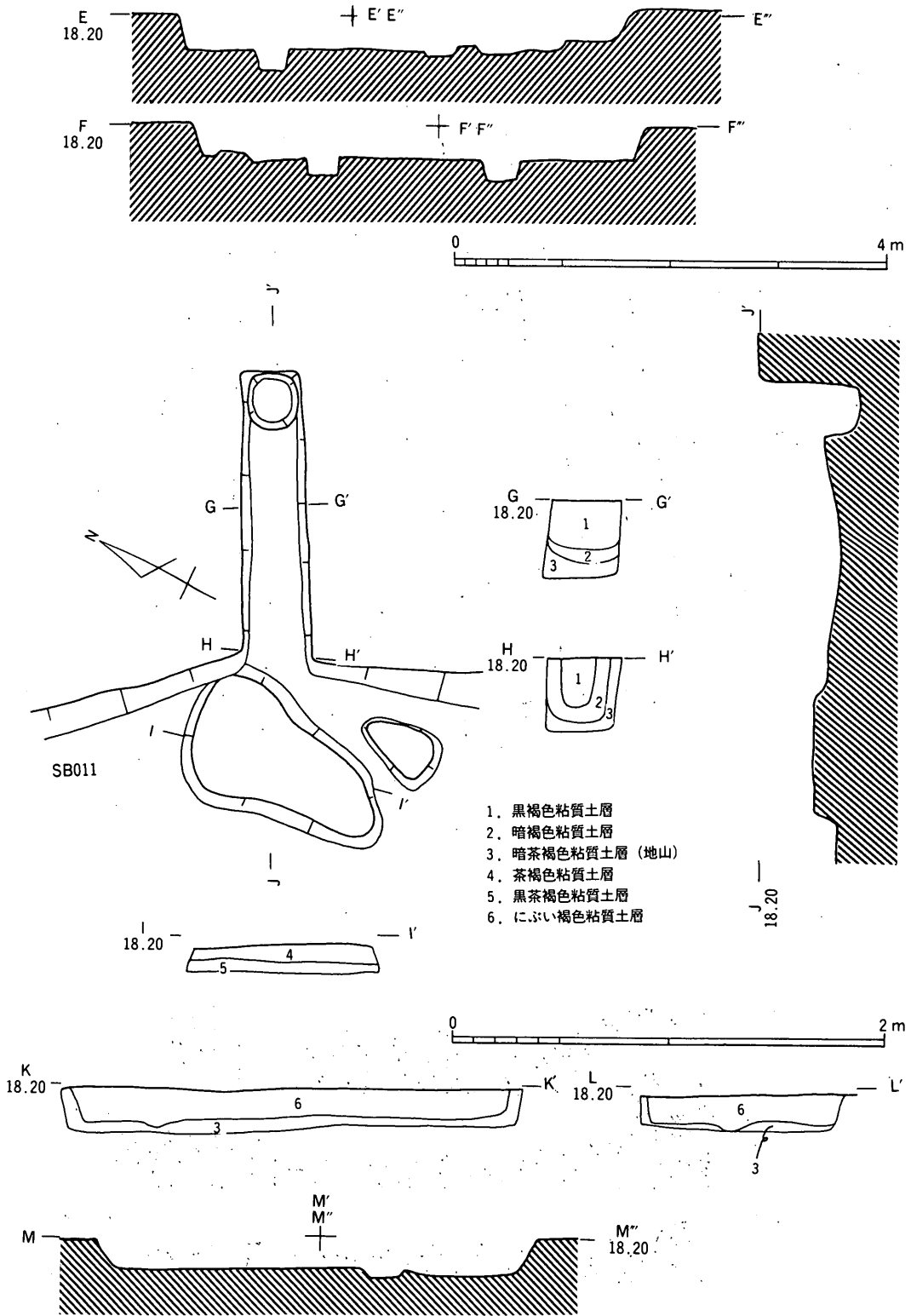


図14 SB010・011実測図, SB011カマド実測図 (1/60・1/30)



1. 黑褐色粘質土層
2. 暗黃褐色粘質土層 (地山)

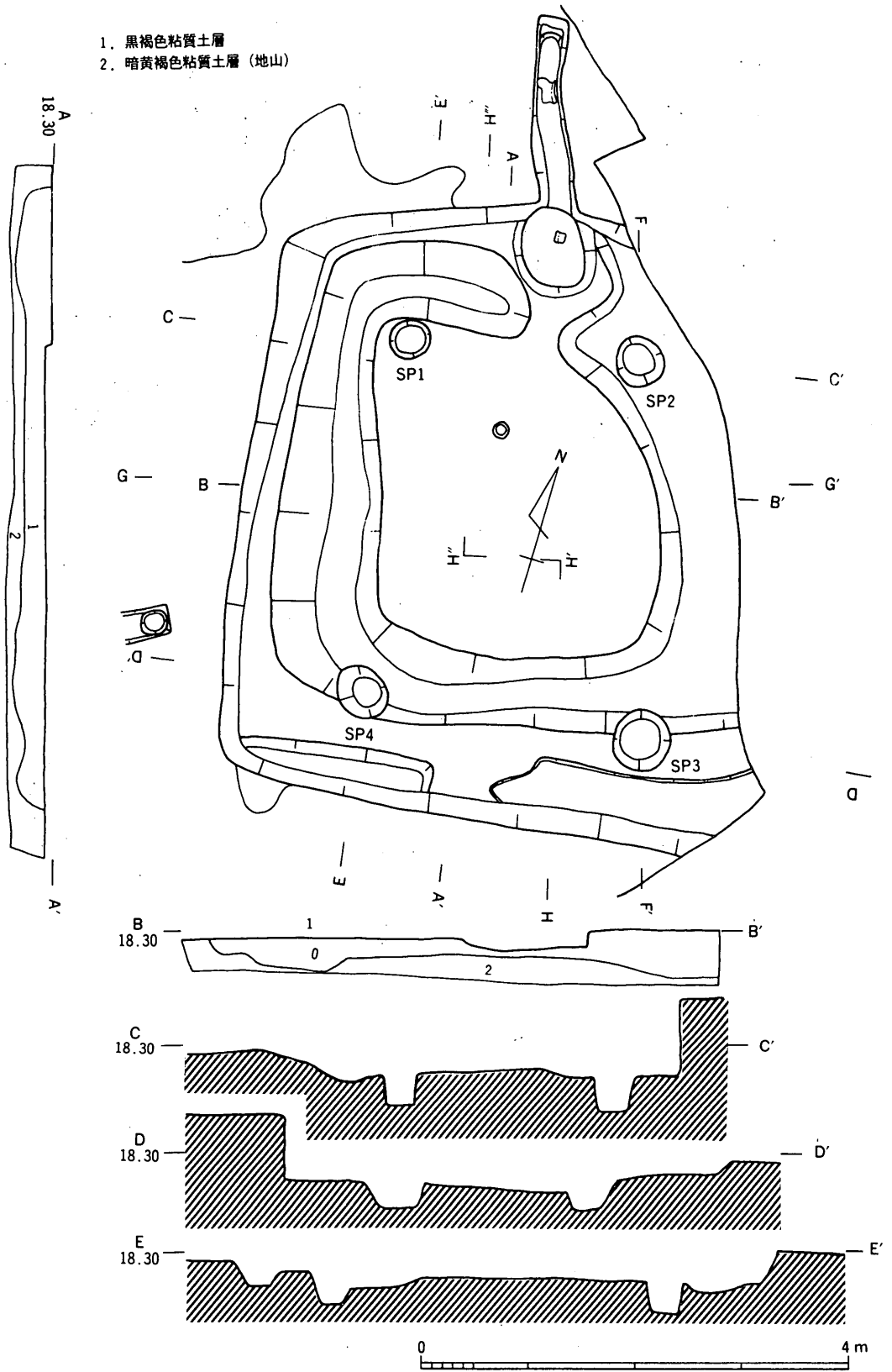


图15 SB012实测图 (1/60)

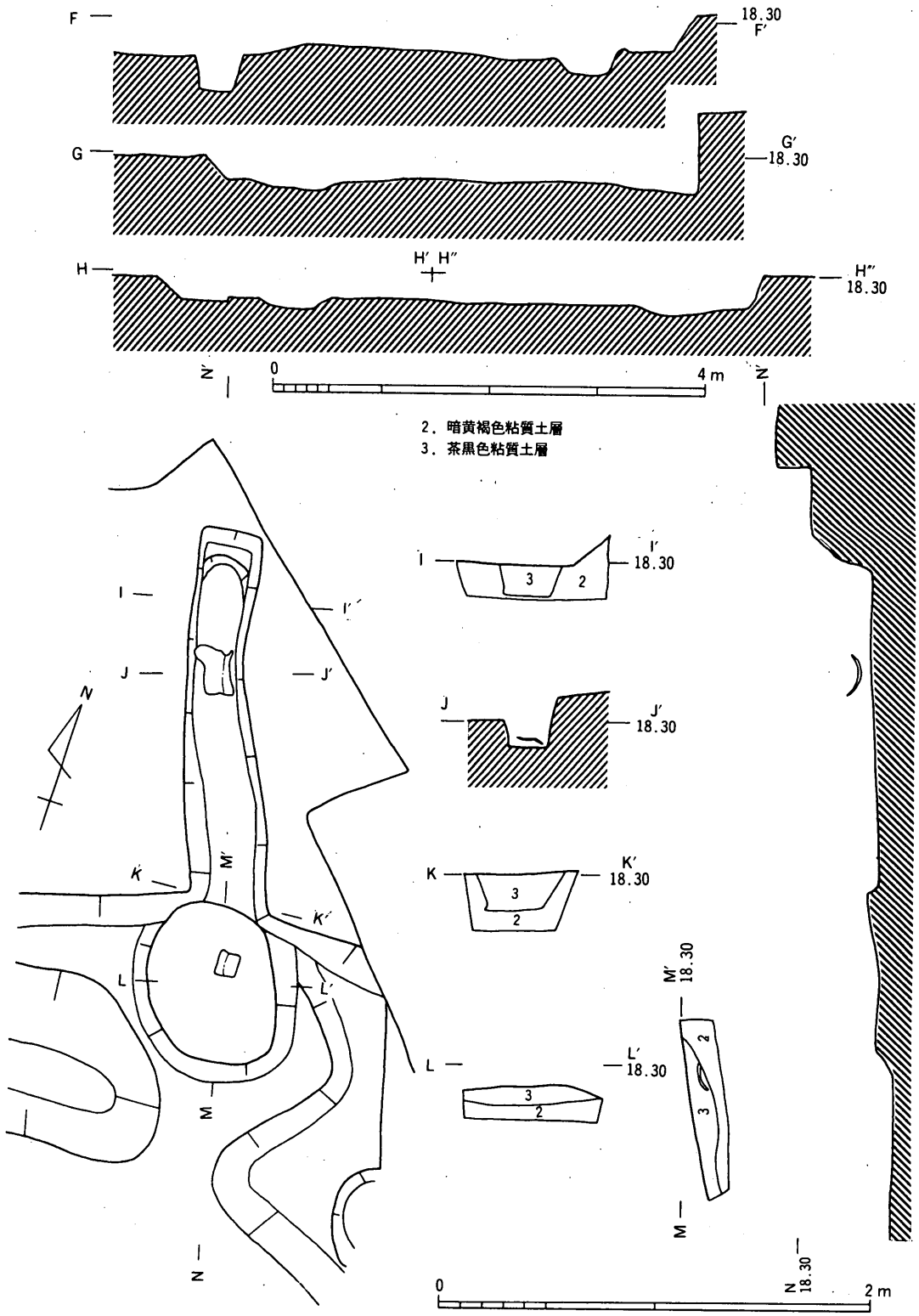
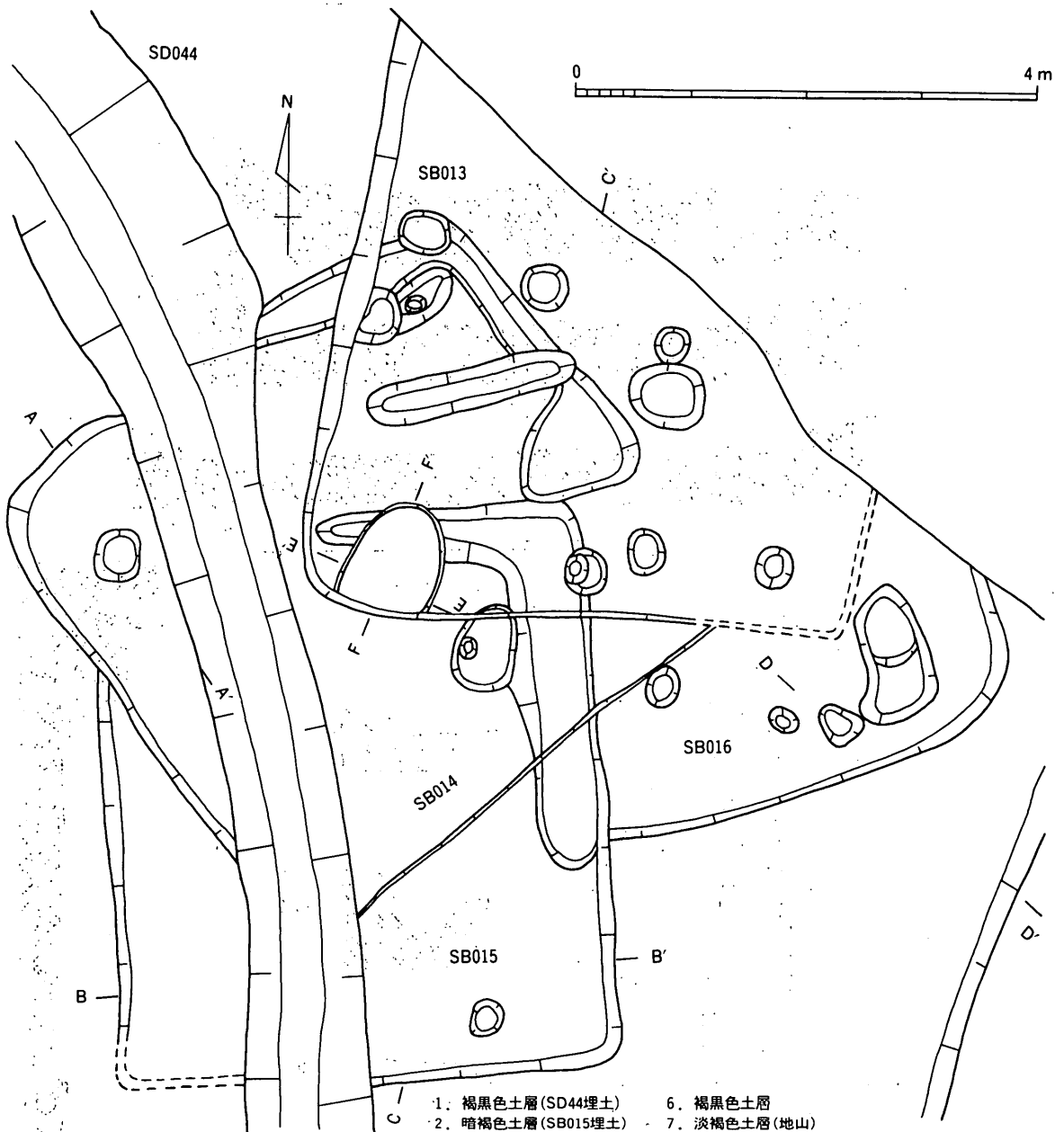
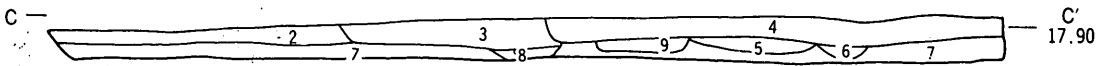
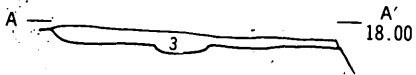


図16 S B 012実測図, S B 012カマド実測図 (1/60・1/30)



- 1. 褐黒色土層(SD44埋土)
- 2. 暗褐色土層(SB015埋土)
- 3. 2より暗い(SB014埋土)
- 4. 茶黒色土層(SB013埋土)
- 5. 褐黒色土層(SB014埋土)
- 6. 褐黒色土層
- 7. 淡褐色土層(地山)
- 8. 暗褐色土層
- 9. 褐黒色土層(SB015埋土)



- 10. 茶黒色土層(SX09埋土)
- 11. 黒褐色土層(SB016埋土)
- 12. 褐黒色土層(SB016埋土)

- 13. 黒色粘質土層(焼土を含む)
- 14. 黒褐色粘質土層
- 15. 褐黒色土層

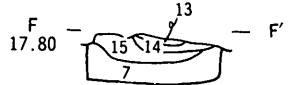
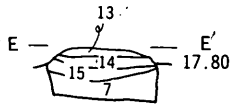
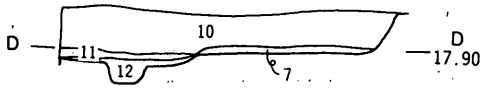


図17 S B 013・014・015・016実測図 (1/60)

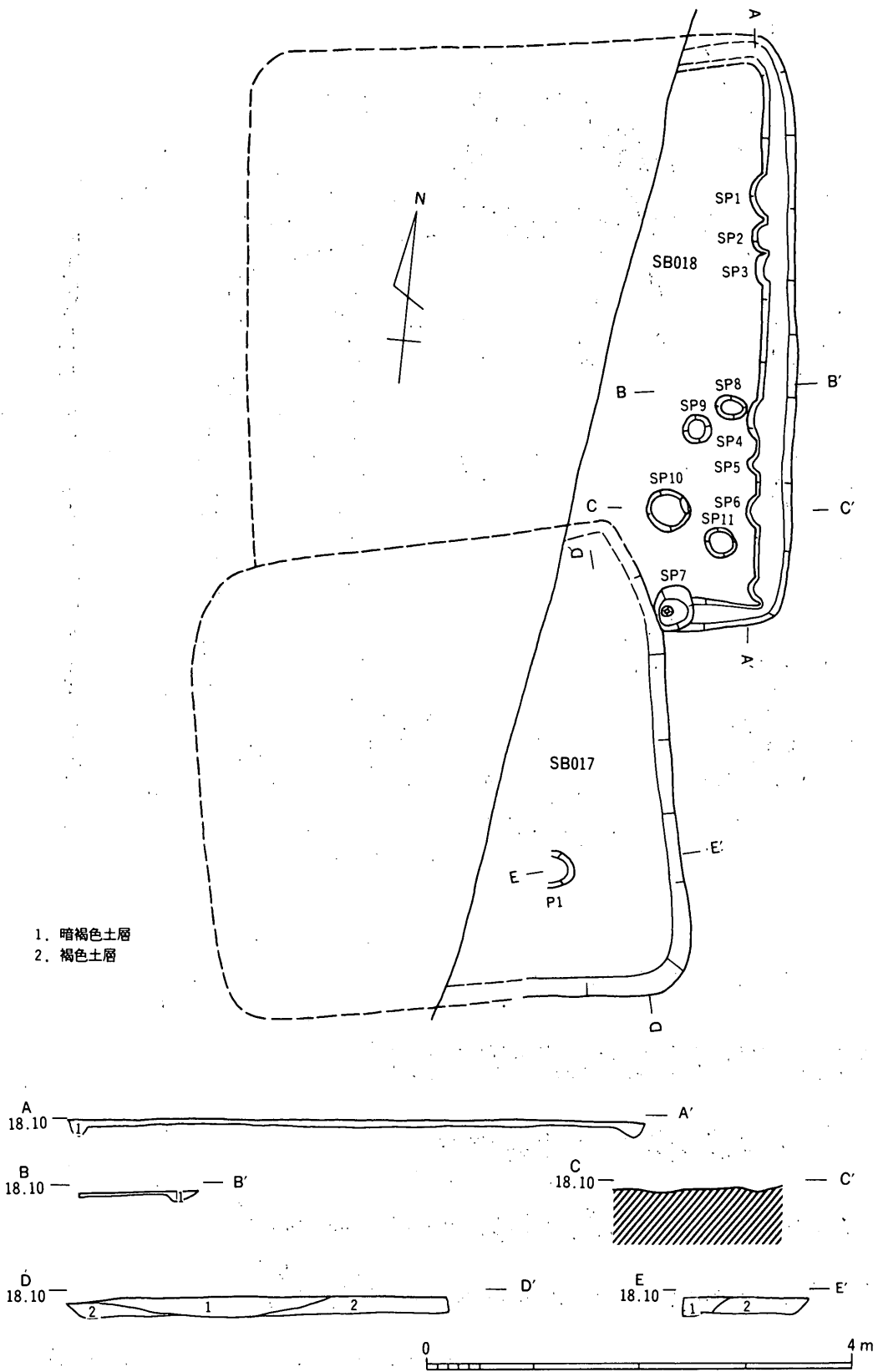


图18 SB017·018实测图 (1/60)

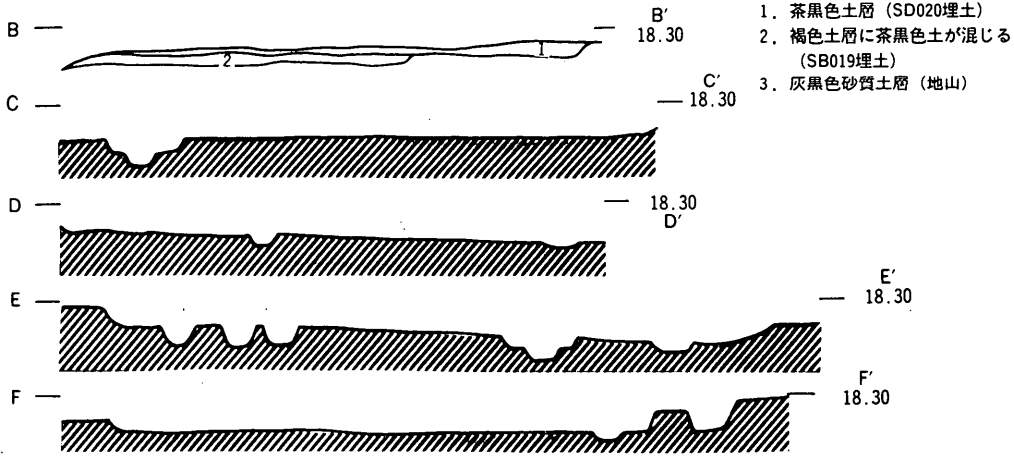
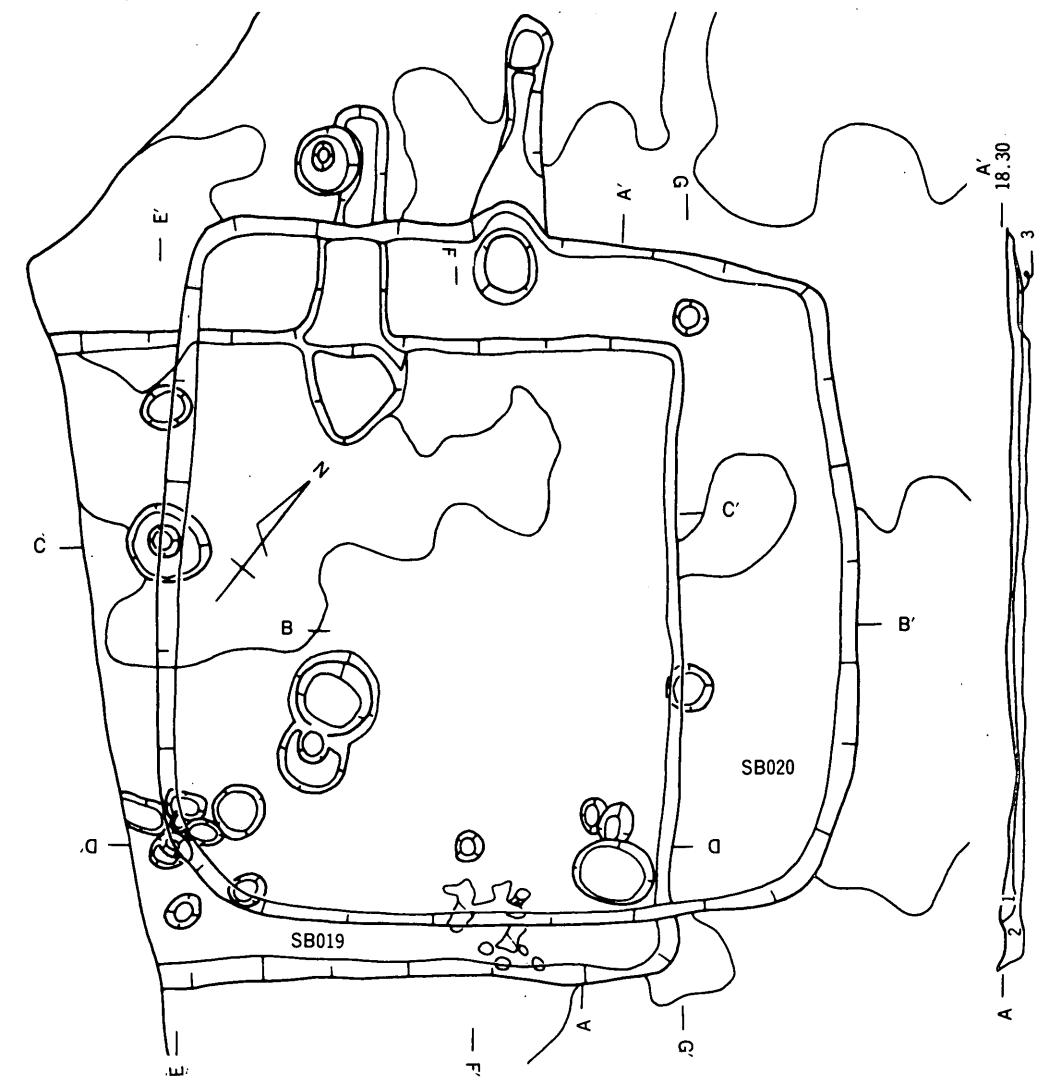


図19 SB019・020実測図 (1/60)

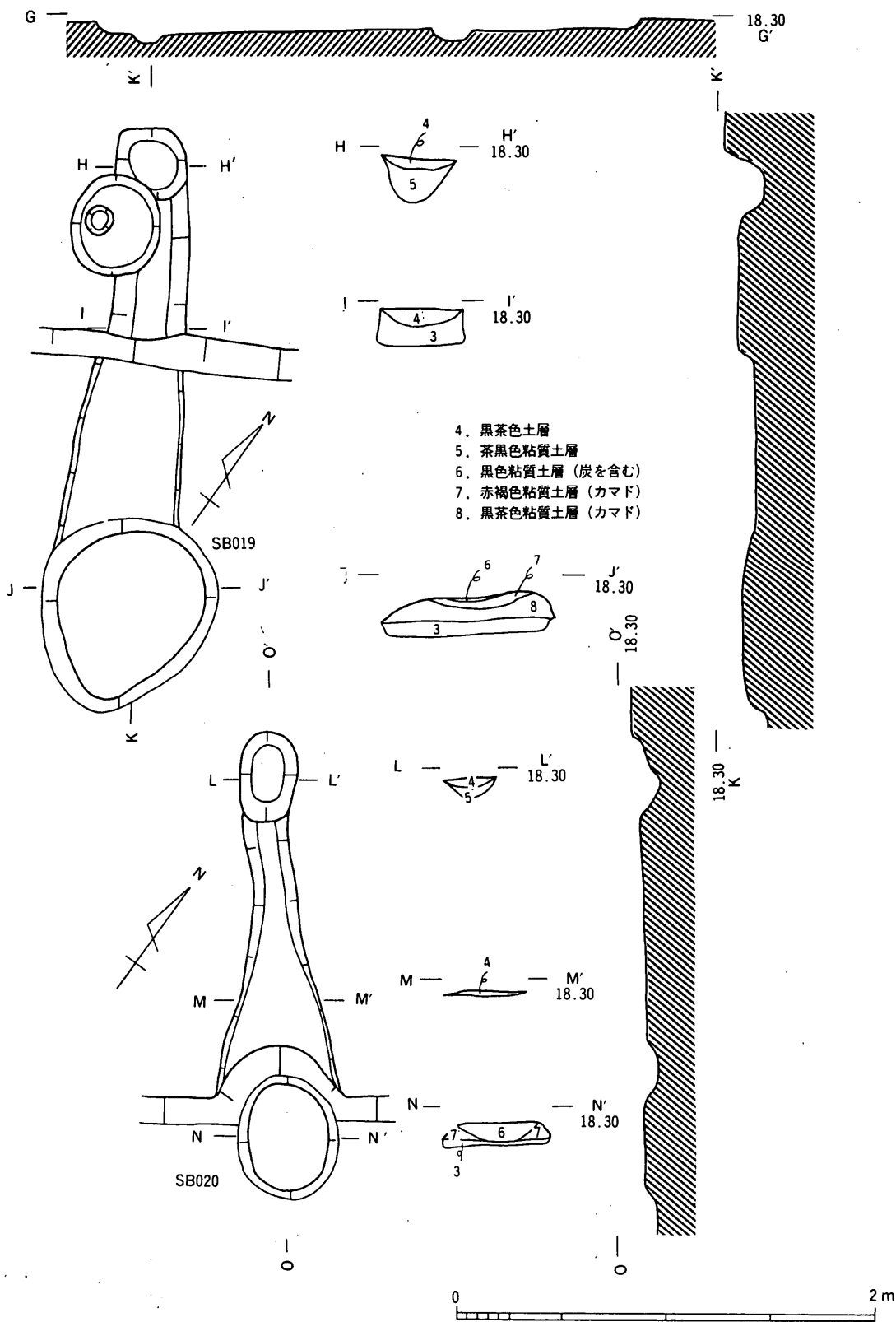


図20 SB019・020カマド実測図 (1/30)

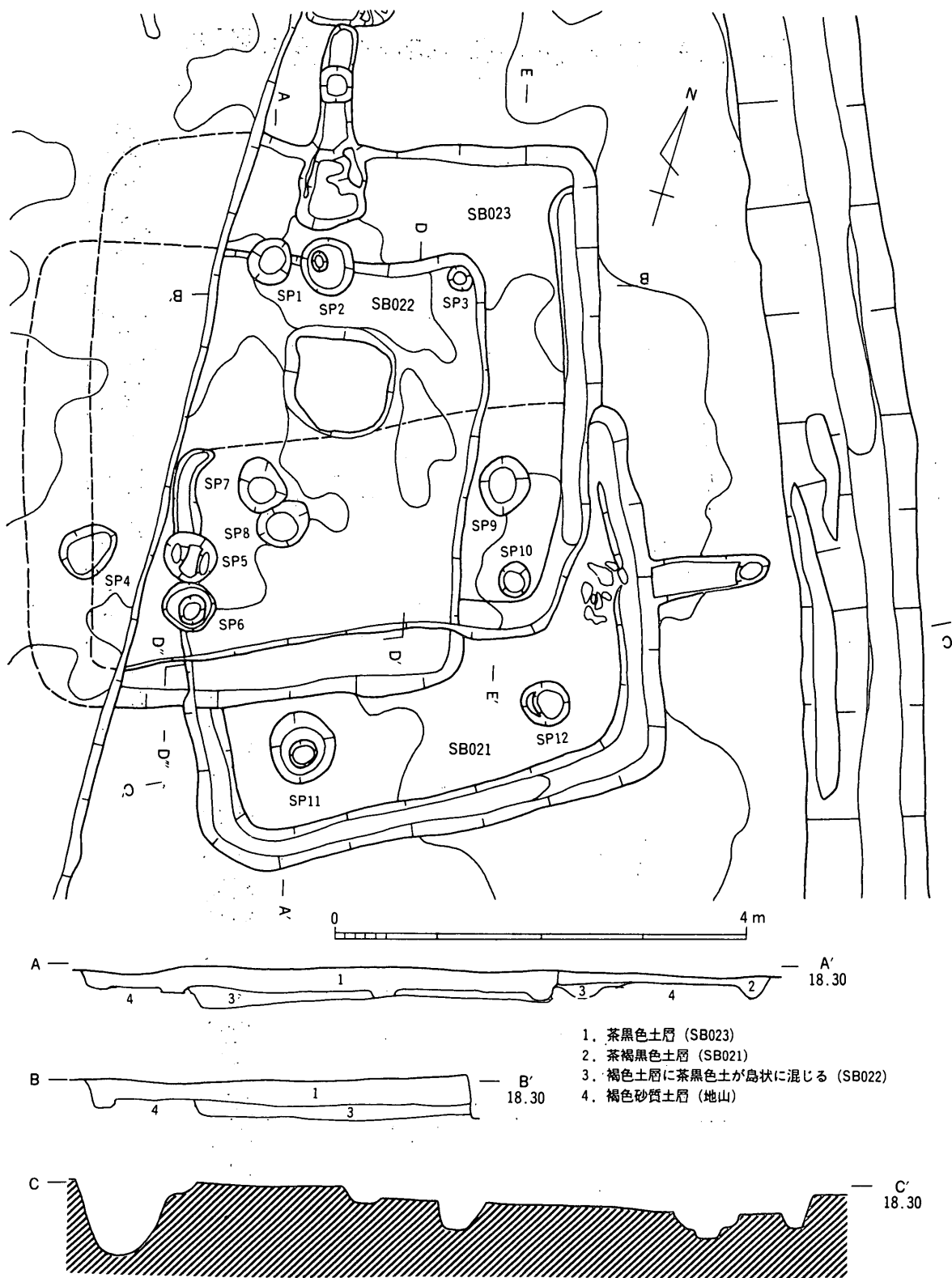


図21 S B 021・022・023実測図 (1/60)

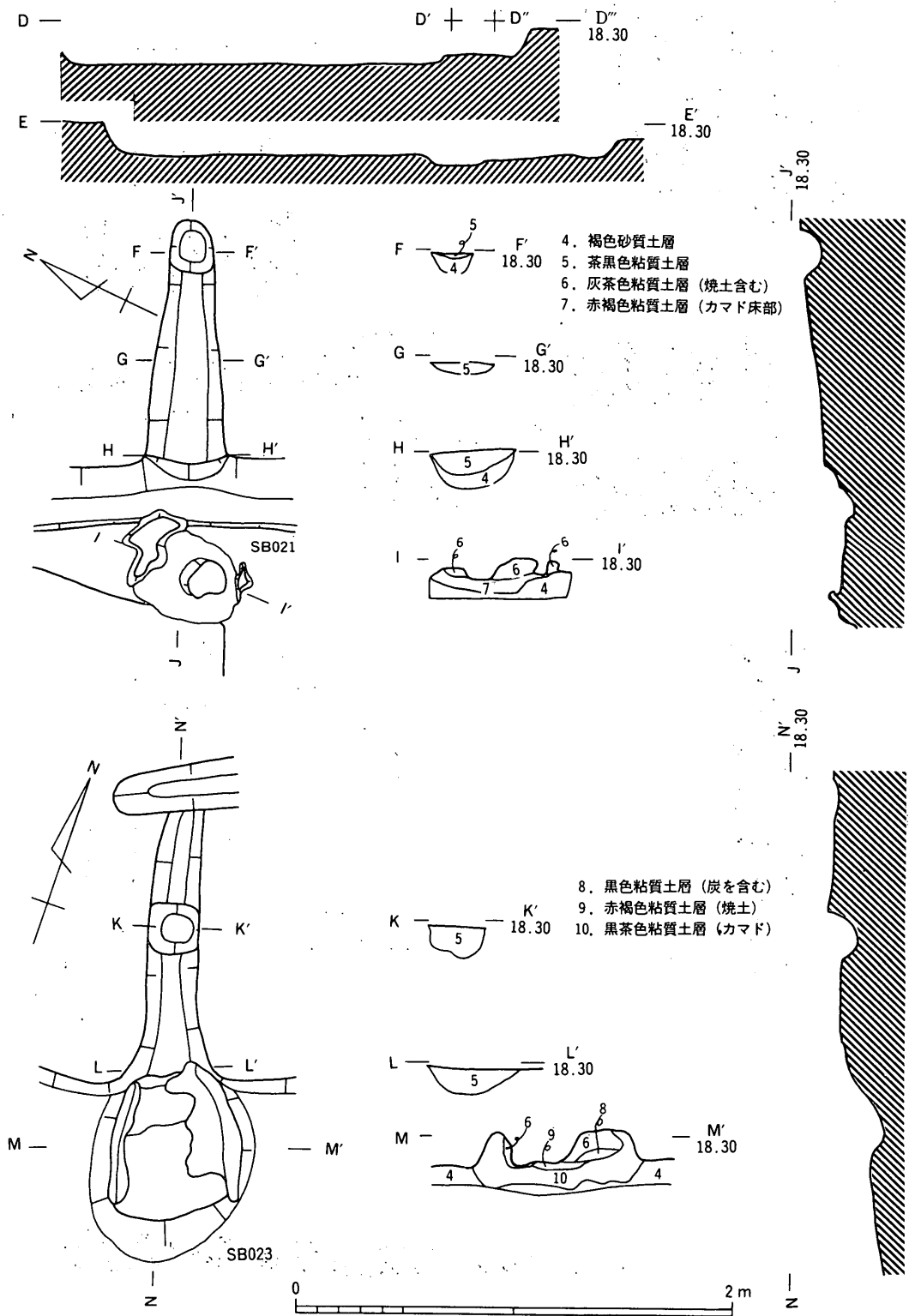
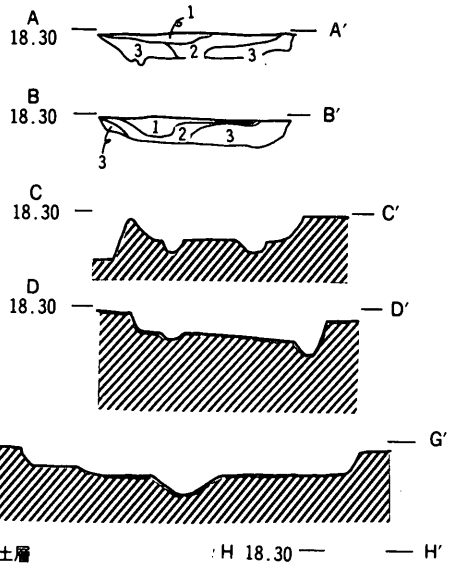
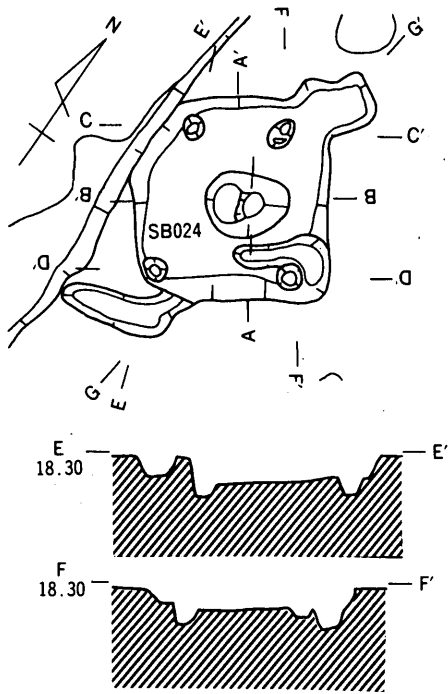


図22 S B 021・023カマド実測図 (1/30)





1. 茶灰色粘質土層
2. 黒茶色粘質土層
3. 灰茶色粘質土層
4. 茶黒色土層 (炭を含む)
5. 褐黒色土層

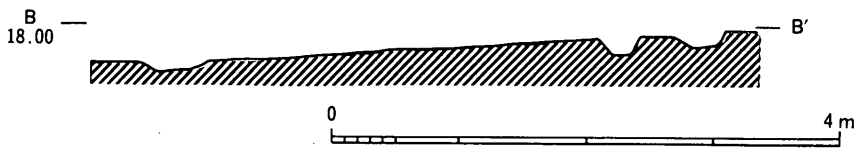
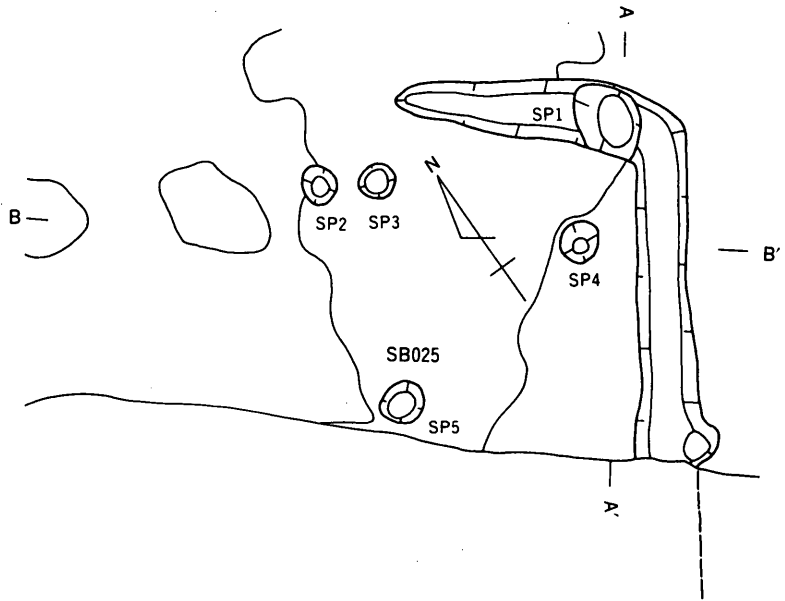
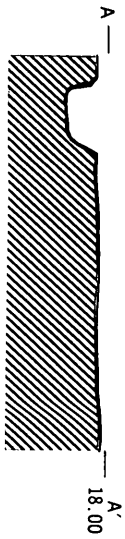


図23 S B 024・025実測図 (1/60)

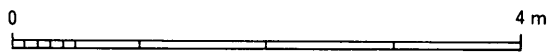
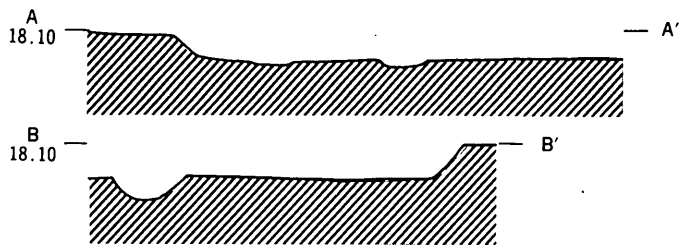
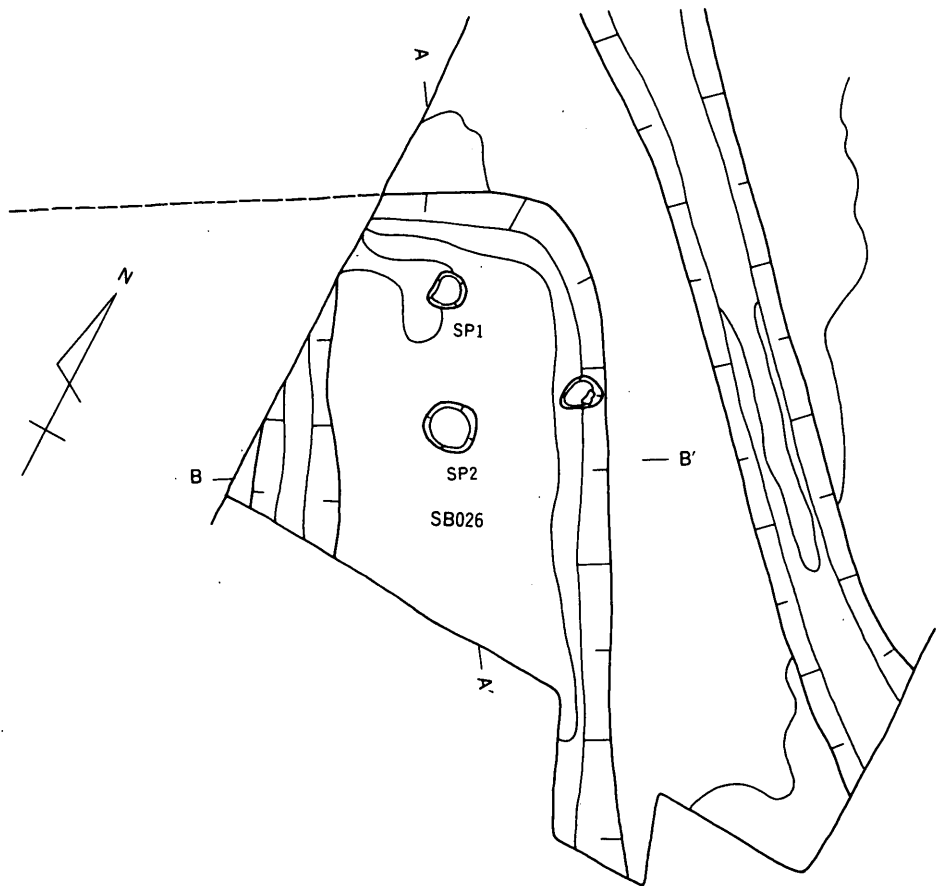
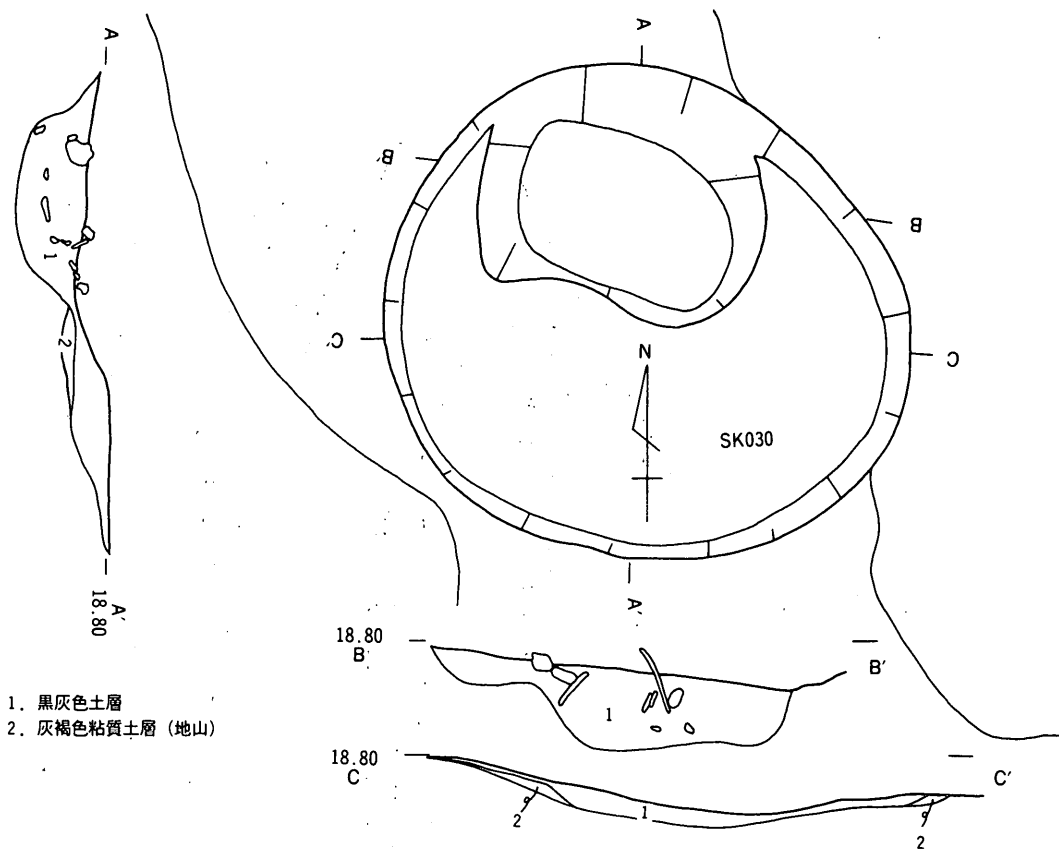


图24 S B 026实测图 (1/60)



- 1. 黑灰色土層
- 2. 灰褐色粘質土層 (地山)

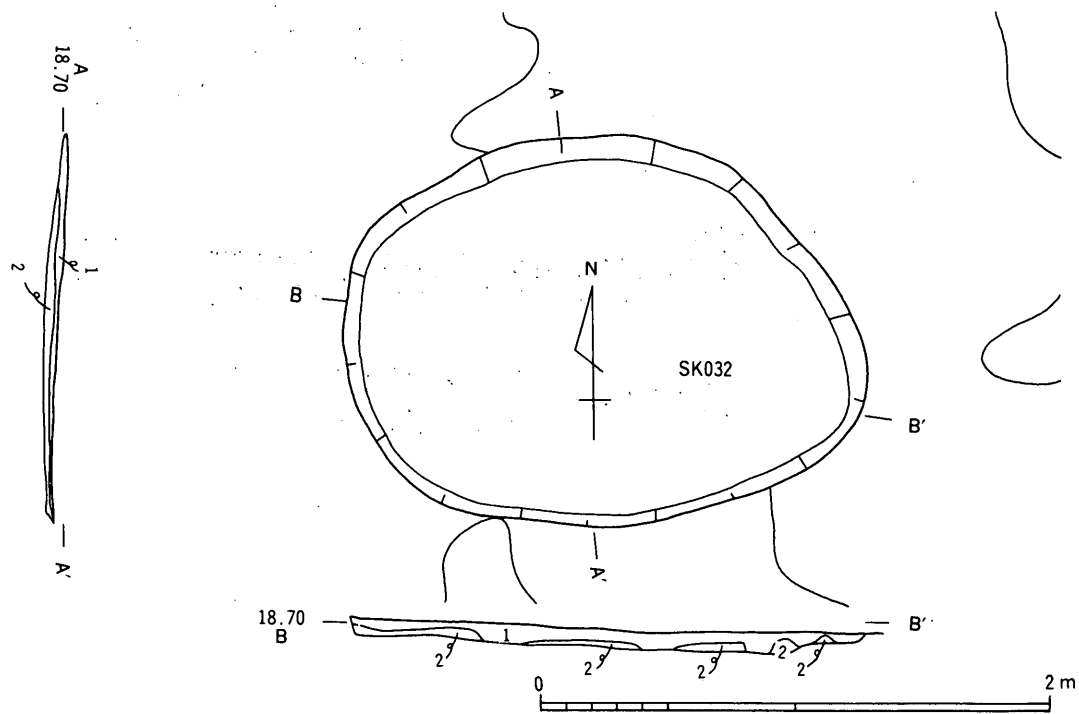
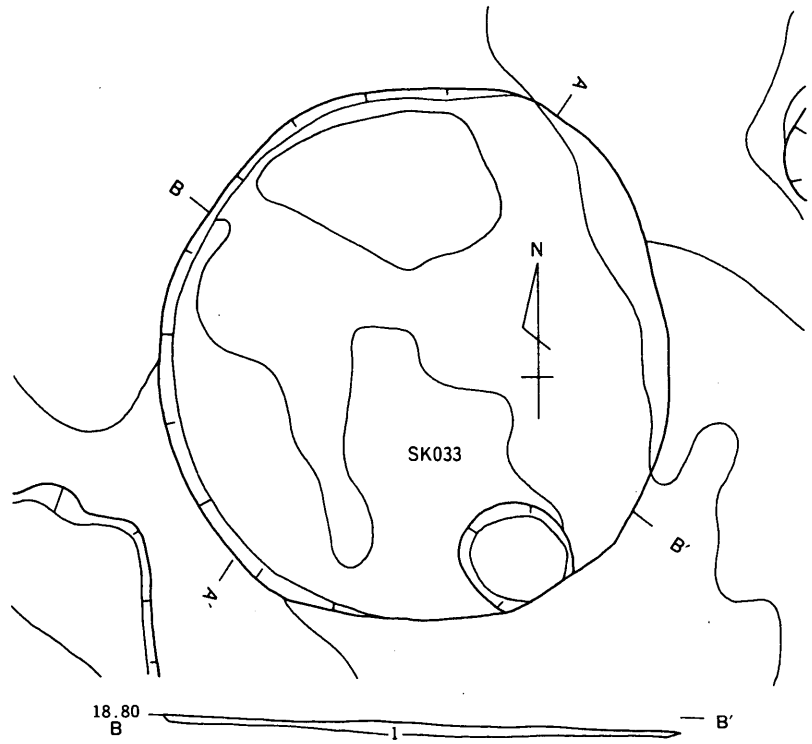


图25 S K 030 · 032实测图 (1/30)



- 1. 黑灰色土層
- 2. 灰褐色粘質土層 (地山)

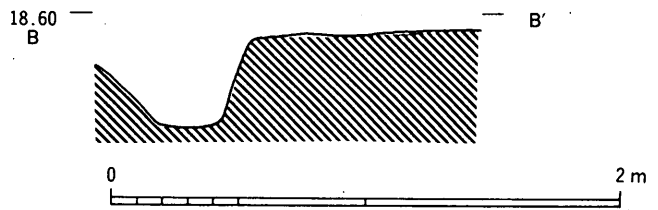
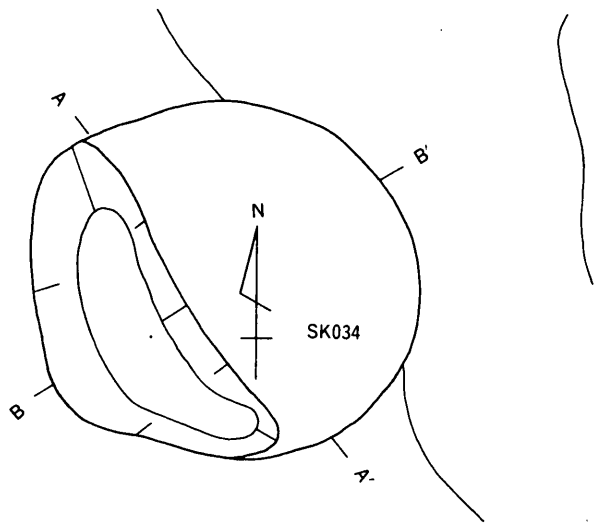
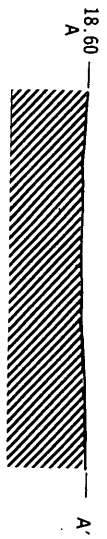
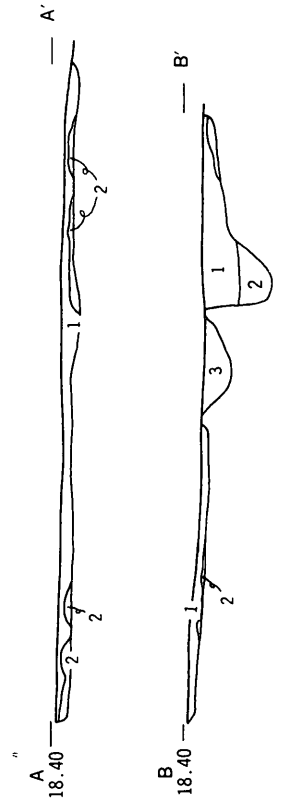
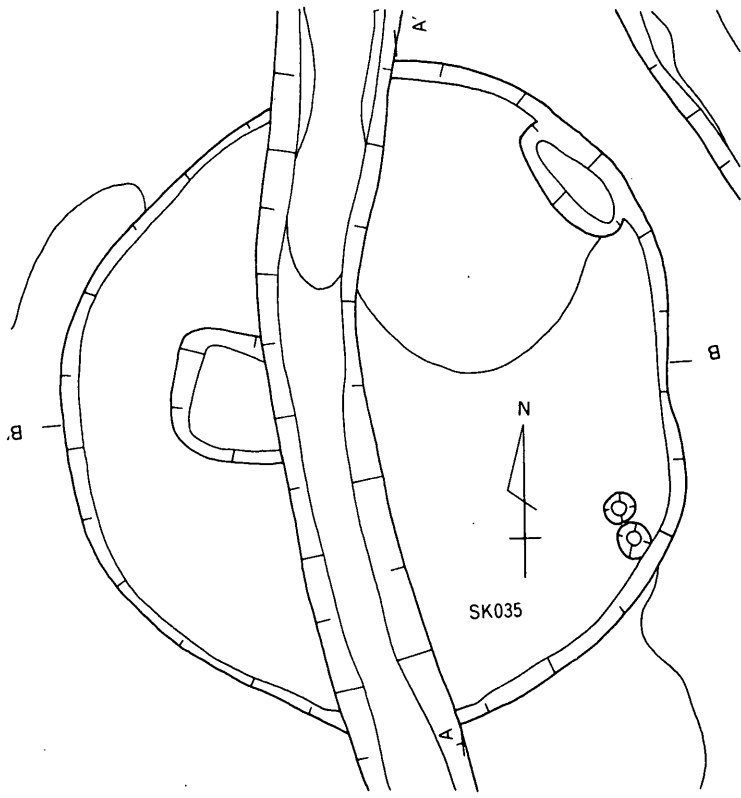


图26 S K 033 · 034 实测图 (1/30)



1. 茶灰黑色粘質土層
2. 灰褐色粘質土層 (地山)
3. 灰黑色粘質土層 (SD024埋土)

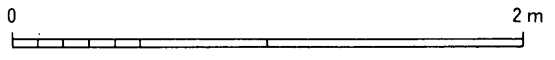
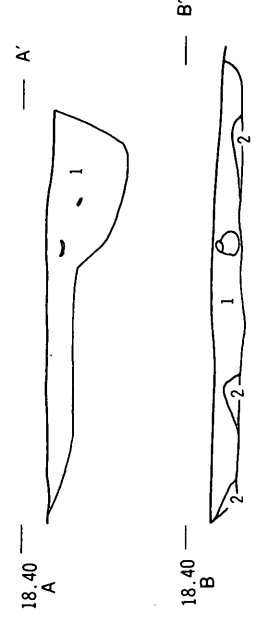
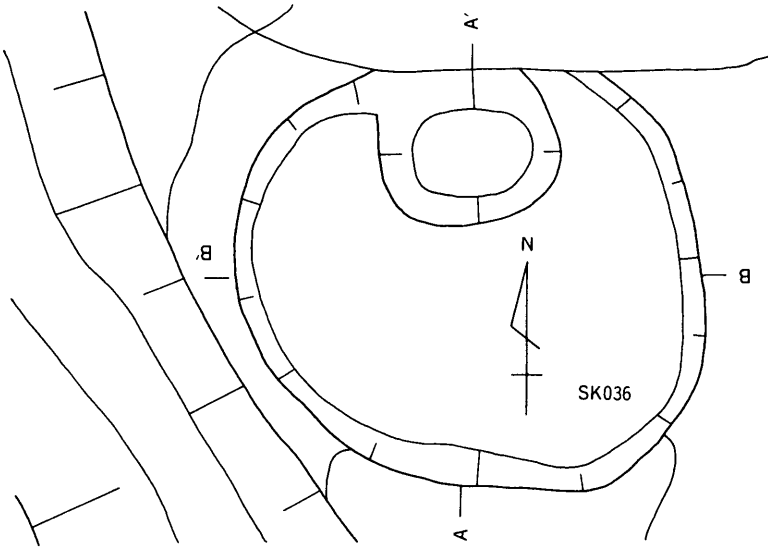
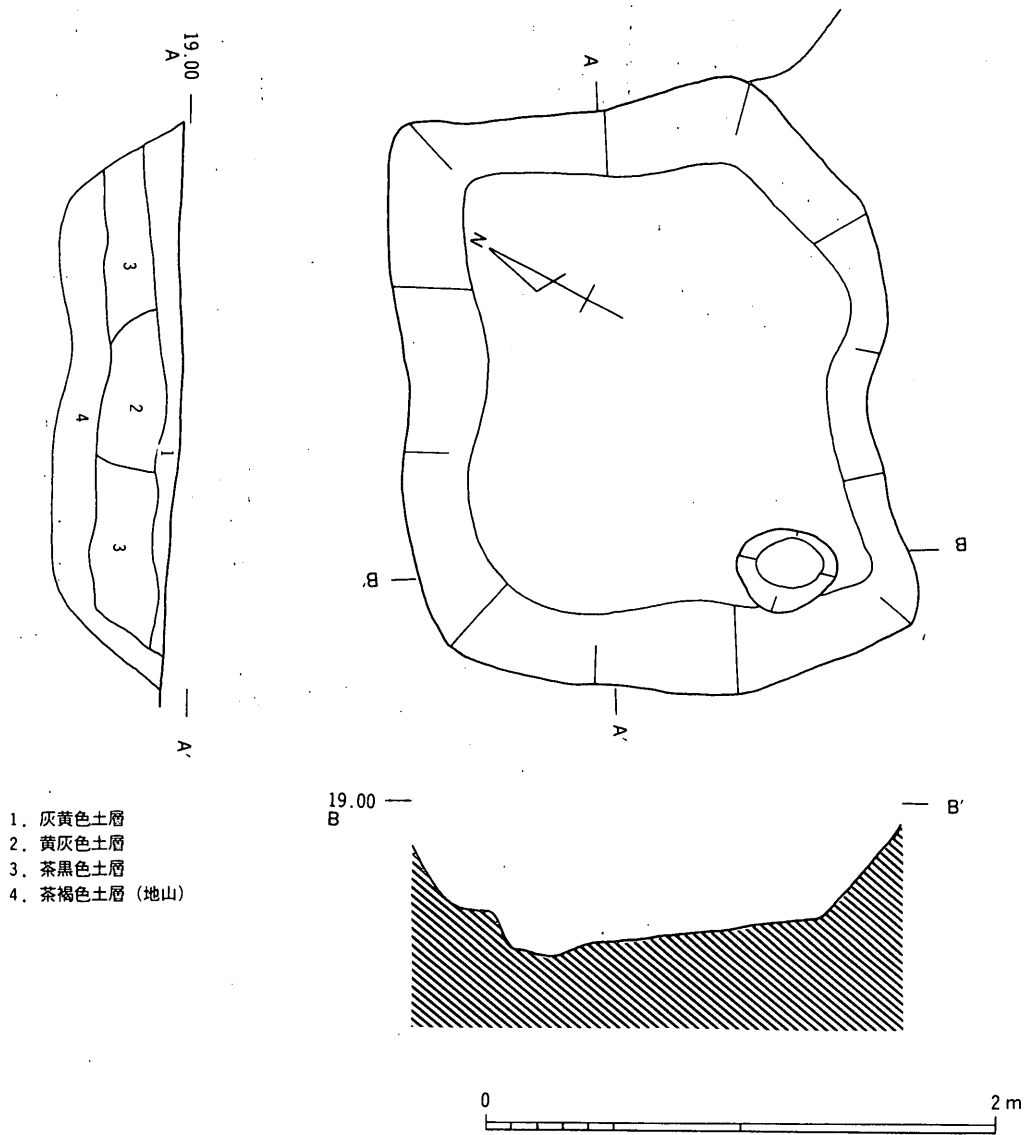
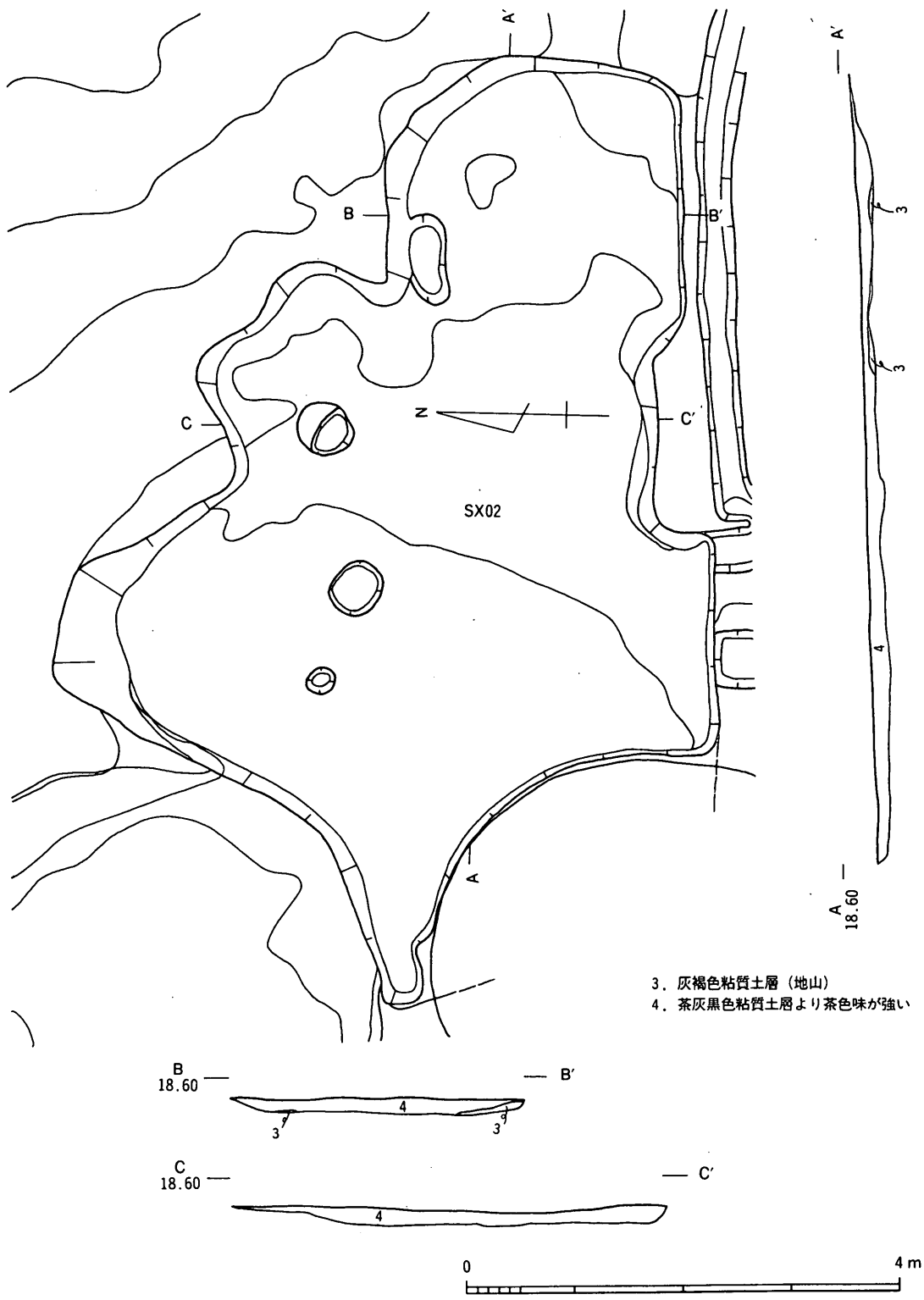


图27 S K 035 · 036实测图 (1/30)



1. 灰黄色土层
2. 黄灰色土层
3. 茶黑色土层
4. 茶褐色土层 (地山)

图28 S K 038实测图 (1/30)



- 3. 灰褐色粘質土層 (地山)
- 4. 茶灰黒色粘質土層より茶色味が強い

図29 S X02実測図 (1/60)

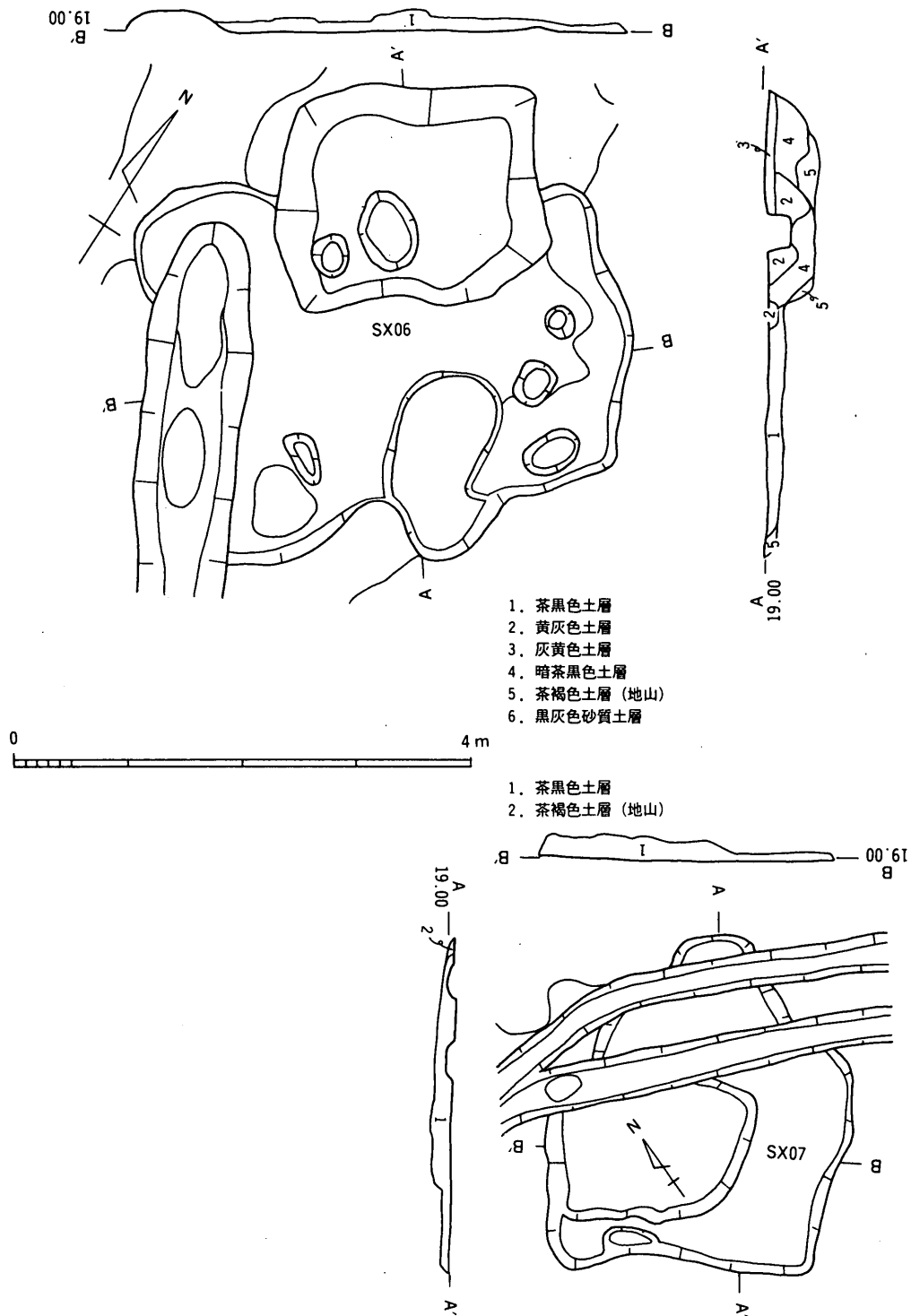


图30 S X 06 · 07 实测图 (1/60)



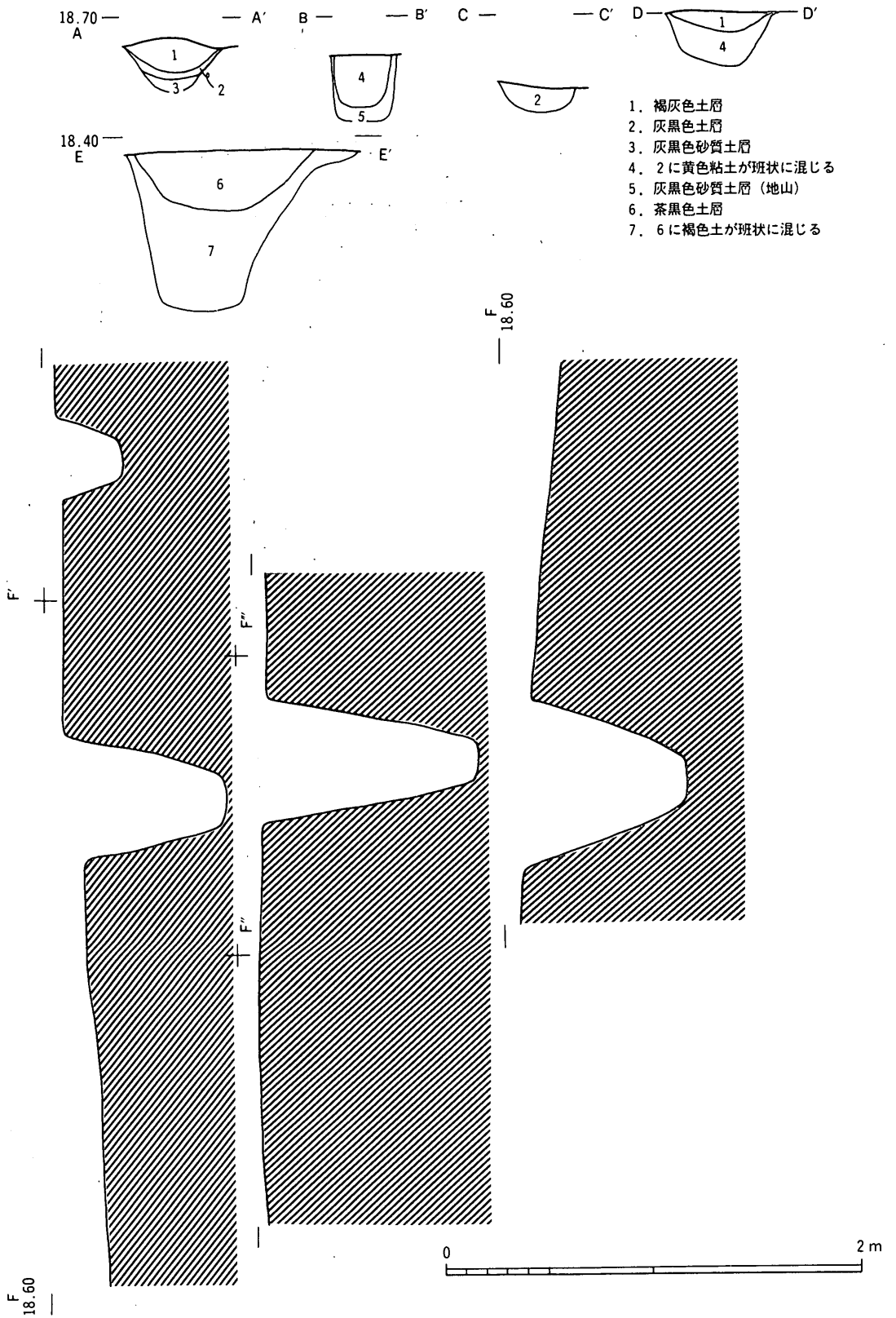


図31 S D 04・020・026・027・028・036実測図(1) (1/30)

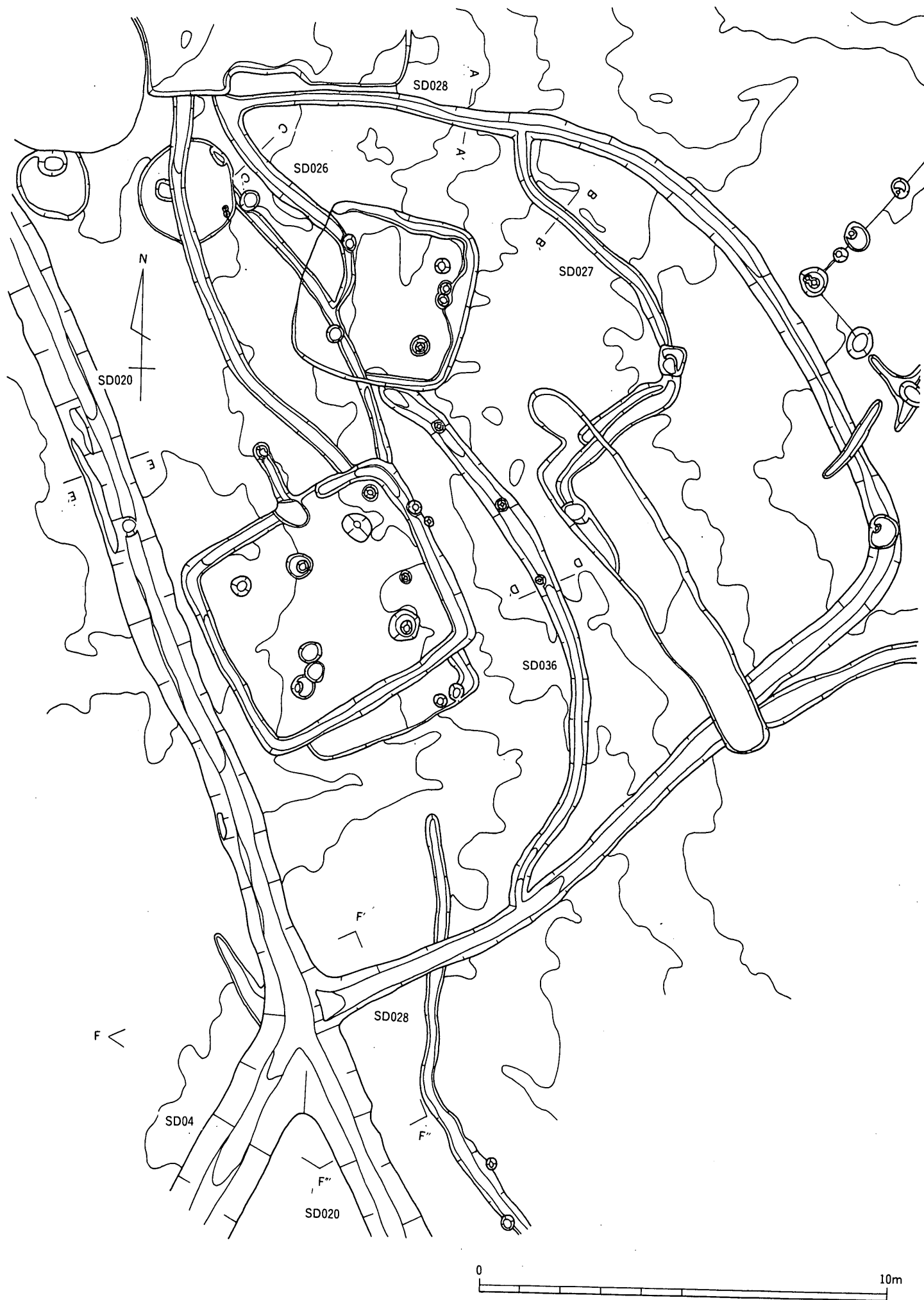


图32 S D 04 · 020 · 026 · 027 · 028 · 036实测图(2) (1/160)

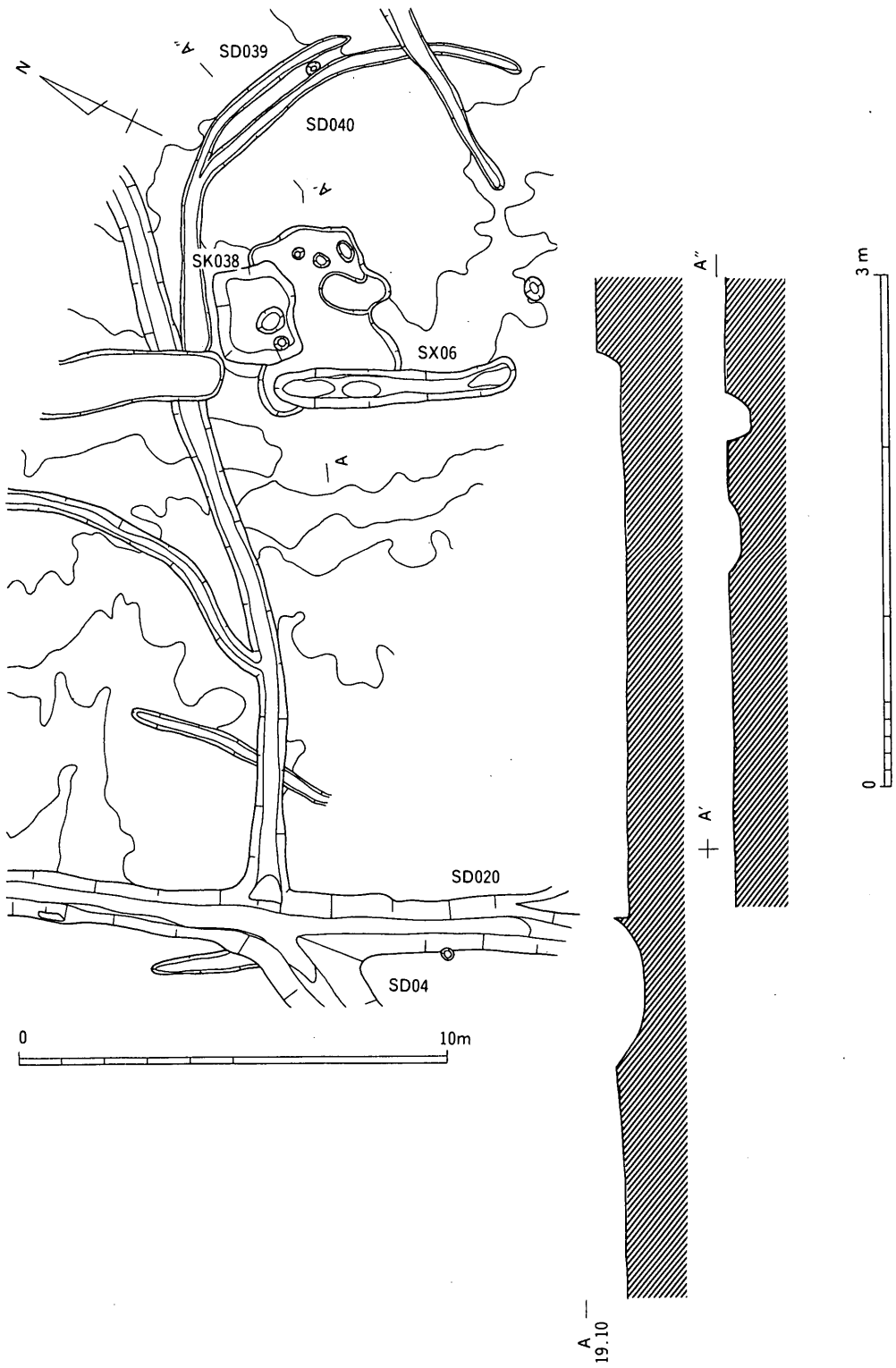


图33 S D039 · 040, S X06实测图 (1/160 · 1/40)

表2 カマド跡計測値表

遺構名	焼室規模 (焼土規模)	煙道規模 深さ	煙道先端部の 凹みの有無	主軸 方向
S B03	(0.73×0.81)	0.3×1.52 0.05	隅丸方形の凹み有り 中に土師壺 の大形破片有り	N28° W
09	不明	0.34×2.38 0.04	不明 (後世の ビット有り)	N29° W
010	不明	不明	不明	N40° E
011	(0.51×1.0)	0.3×1.4 0.3	円形の凹み有り	N58° E
012	(0.76×0.83)	0.3×1.73 0.23	無し。煙道から土師 器壺の大破片出土	N12° W
019	(0.84×0.92)	0.35×1.83 0.08	円形の凹み有り	N38° W
020	(0.48×0.58)	0.2~0.5× 1.5	楕円形の凹み有り	N35° W
021	(0.38×0.58)	0.2~0.37× 1.1 0.1	円形の凹み有り	N64° E
023	内法 0.53×0.66	0.24×(1.3) 0.1	中位に隅丸方形 の凹み有り	N16° W

表3 古墳時代後期土坑計測値表

遺構名	形状	規模 (面積)	主軸方向	付 属 施 設
S K030	円形	直径 1.9・2.07 (3.23㎡)		北方に土坑不定形0.9m ×1.16m、深さ0.3m。土 坑内には須恵器壺を埋蔵。
032	楕円形	1.53・2.06 (2.53㎡)	N86° W	無し。
033	円形	直径1.99 (3.11㎡)		南壁下に土坑。円形、 直径0.4m。
034	楕円形	1.39・1.53 (1.67㎡)	N-S	西壁際に土坑。 不定形、0.61m×1.41 m、深さ0.32m。
035	円形	直径2.5 (4.91㎡)		西壁寄りに土坑。 不定形、0.5m×0.57 m、深さ0.15m。
036	円形	直径1.83 (2.63㎡)		北壁際に土坑。 円形、直径0.7m。
038	不定形	1.8×2.25 (4.05㎡)	N56° E	南西隅に土坑。 円形、直径0.35m。

表4 古墳時代  
後期溝計測値表

遺構名	巾・深さ	断面形
S D04	0.8・0.74	V字形
020	0.6・1.0 1.1・0.77	V字形 U字形も
026	0.37・0.12	皿形
027	0.27・0.24	U字形
028	0.46・0.20	皿形
036	0.52・0.26	U字形
039	0.27・0.13	U字形
040	0.42・0.08	皿形

遺物は、埋土中から完形品を含む土師器・須恵器・製塩土器が多量に出土した。

S D028 S B02・03・04を囲むように巡る。巾0.45m、深さ0.25m、断面は強く開くU字形である。

遺物は、埋土中から土師器壺、須恵器杯・短頸壺・壺の破片が出土した。

S D040 S D039とともにS K038・S X06を囲むように巡る。巾0.43m、深さ8cm、断面は皿形である。埋土中から須恵器杯・鉢の破片が出土した。

## 2 遺物

### (1) 土器類

古墳時代の遺構出土の土師器・須恵器を次のように分類した。須恵器の器形の決定は、田辺昭三『須恵器大成』<sup>(1)</sup>と松本敏三・岩橋孝「香川県古代窯業遺跡分布調査報告 I」「同 II」<sup>(2)</sup>に準じて行った。

しかし、杯身と杯蓋は区別し難い例が多くあった。かえり部の立ち上がりが低く、かえり部基部から受部端までの間が比較的長く、杯蓋と考えられるが、つまみ部を欠くために断定出来ないものは杯身とした。また、かえり部・高台のない杯の多くは杯蓋としたが、その頂部がヘラ切りで平坦面が存し、正置すれば

安定し、器高の比較的深いものは杯身とした。

第5層出土遺物は、分類の対象としなかった。多くは、遺構出土遺物による分類の中に収まるが、一部、外れるものがある。

383・399はともに甑とするが、口縁端部は水平な面をなし、1条の凹線をめぐらす。

393は支脚とするが<sup>(3)</sup>、体部は指頭圧痕の後ナデ調整、断面は不整形である。

365は、緑釉陶器の杯である。高台は、外面側がほぼ垂直、内面側は外傾し、端部近くで一条の沈線をめぐらせるため階段状になる。杯底部内面には1条の沈線をめぐらせる。釉は、高台見込みと、高台内側端部の沈線付近までは露胎。他は暗緑色の釉を施す。

表5 須恵器分類表

器種	タ	イ	ブ
杯身	Aかえり付きのもの。 A 1口径(立ち上がり部分)が10.5cmより大きいもの。 A 2口径(立ち上がり部分)が10.5cm以下のもの。 Bかえり・高台ともにないもの。 B 1体部と口縁部との境が屈曲するもの(蓋の可能性をもつ)。 B 2内湾する体部が途中から直線状になり、そのまま口縁端に至るもの。 B 3体部・口縁部ともに内湾して連続しているもの。 B 4体部が直線状に外傾するもの。 B 5体部に凹線を有するもの(蓋の可能性をもつ)。 C高台付のもの。 C 1体部下位に稜線を有し、稜線と高台外面基部との間が比較的長いもの。 C 2体部下位に稜線を有し、稜線と高台外面基部との間が比較的短いもの。 C 3高台外面基部から、直ちに体部となるもの。		
杯蓋	A体部内湾して、そのまま口縁端部に至る。 B内湾する体部から屈曲し、外湾する口縁部をもつもの。 C内面にかえり、外面につまみをつくもの。 D口縁端部が下方へ拡張され、三角形を呈する。つまみ付き。 E体部から外方へ屈曲し、さらに直ぐに内方へ屈曲する。逆「N」字状の口縁部。つまみ付き。		
登蓋	口径8~10cmで口縁端部凹面をなす。		
椀	脚付きで口径10.4cm、椀部高約12cm。		
盤・皿	全形不明。口径が17cmと大きいことにより盤・皿とした。		
有蓋高杯	杯部にかえりをもつ。		
無蓋高杯	A脚部の端部拡張なく、面をなしておわる。 B脚部を強く外湾させ、内面端部を下方に拡張させ、逆三角形を呈する。 B 1短脚。 B 2比較的長いもの。 C脚部部を上方へ拡張させるもの。		
甕	A穿孔の中心点が、体部高の上方1/3以内にあるもの。明瞭な肩部をなす。 B穿孔の中心点が、体部高の中心1/3以内にある。全体に丸い。		
長頸壺(瓶)	A体部が全体に丸いもの。 A 1大型。 A 2小型。 B体部上方1/3でゆるく曲るもの。 C体部上方1/3で屈曲し、明瞭な稜線を残す。		
短頸壺	A口縁端部が丸いもの。 A 1大型。 A 2小型。 B口縁端部、内傾して面をなすもの。		
無頸壺	内傾する体部上半がそのまま口縁部となる。		
子持ち壺	子部のみである。		
横瓶	口頸部から直角に屈曲して、ほぼ水平な体部となる。		
平瓶	最大径が体部中程にある。縦断面は、楕円形。		
鉢(大型)	A最大径が口縁部にあるもの。 A 1口縁端部が丸いもの。 A 2口縁端部が凹面をなすもの。 B最大径が体部上位途中にあるもの。		
鉢(小型)	A最大径は口縁部にある。口縁端部は丸い。		
椀	A口縁端部水平な面をなすもの。 B口縁端部外傾する面をなすもの。		
鍋	丸底、把手がつく。		
器台	体部には、横方向の2条1単位の凹線で、巾約7cmの圧面帯をつくる。そこへ縦方向の凹線を多数施す。		
甕	A口頸部の長いもの。 A 1口縁部、外面を巾広く、断面長方形に拡張させているもの。 A 2口縁部を拡張させ、断面三角形にするもの。 A 3口縁端部が丸く、頸部外面に断面三角形の突帯がめぐるもの。 B口頸部の短いもの。 B 1口縁部外面を巾広く、断面長方形に拡張させているもの。 B 2口縁部を断面三角形に拡張させているもの。 B 3口縁部を拡張せず、面にしておわらせるもの。		

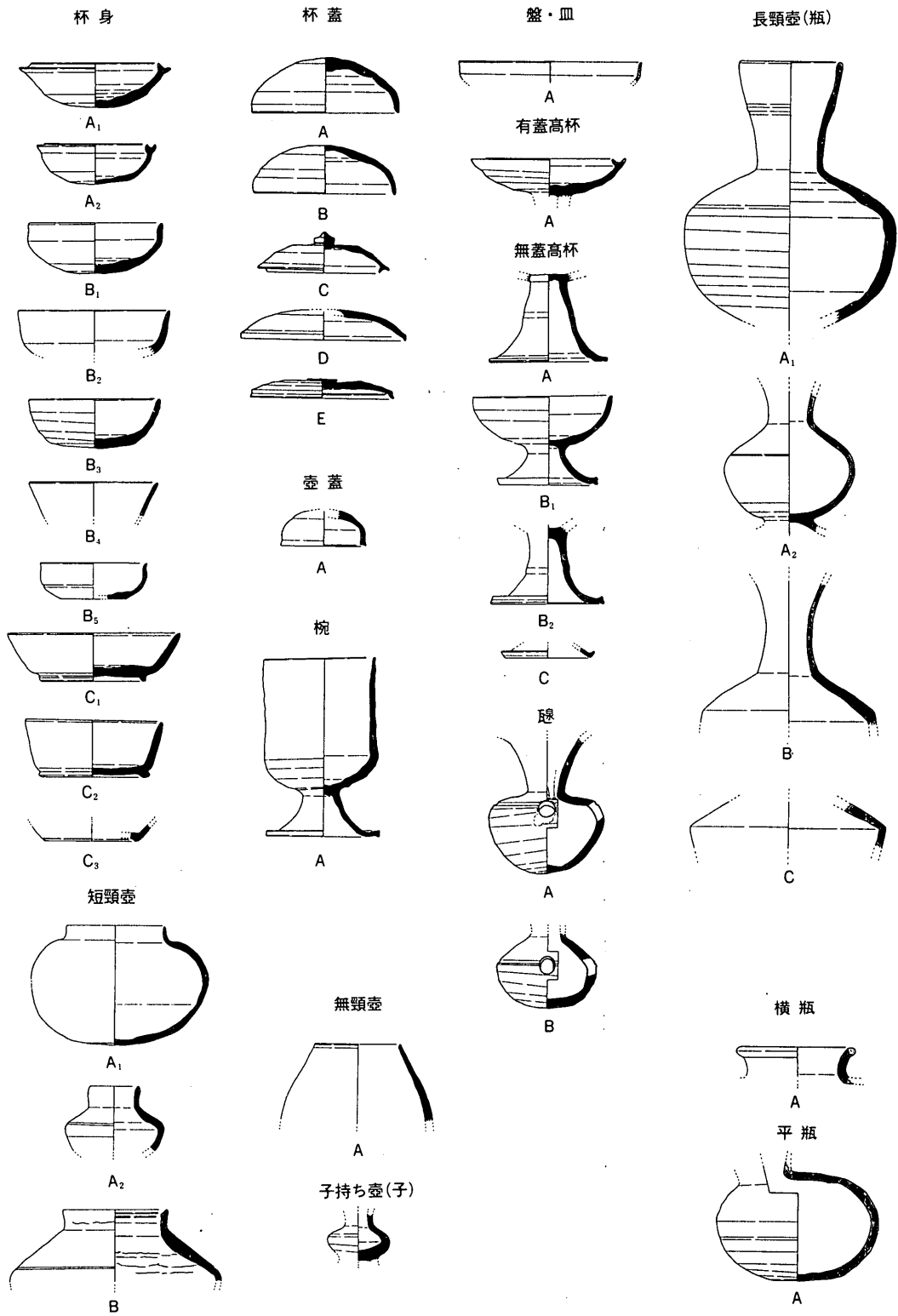


図34 須恵器分類図(1) (1/6)

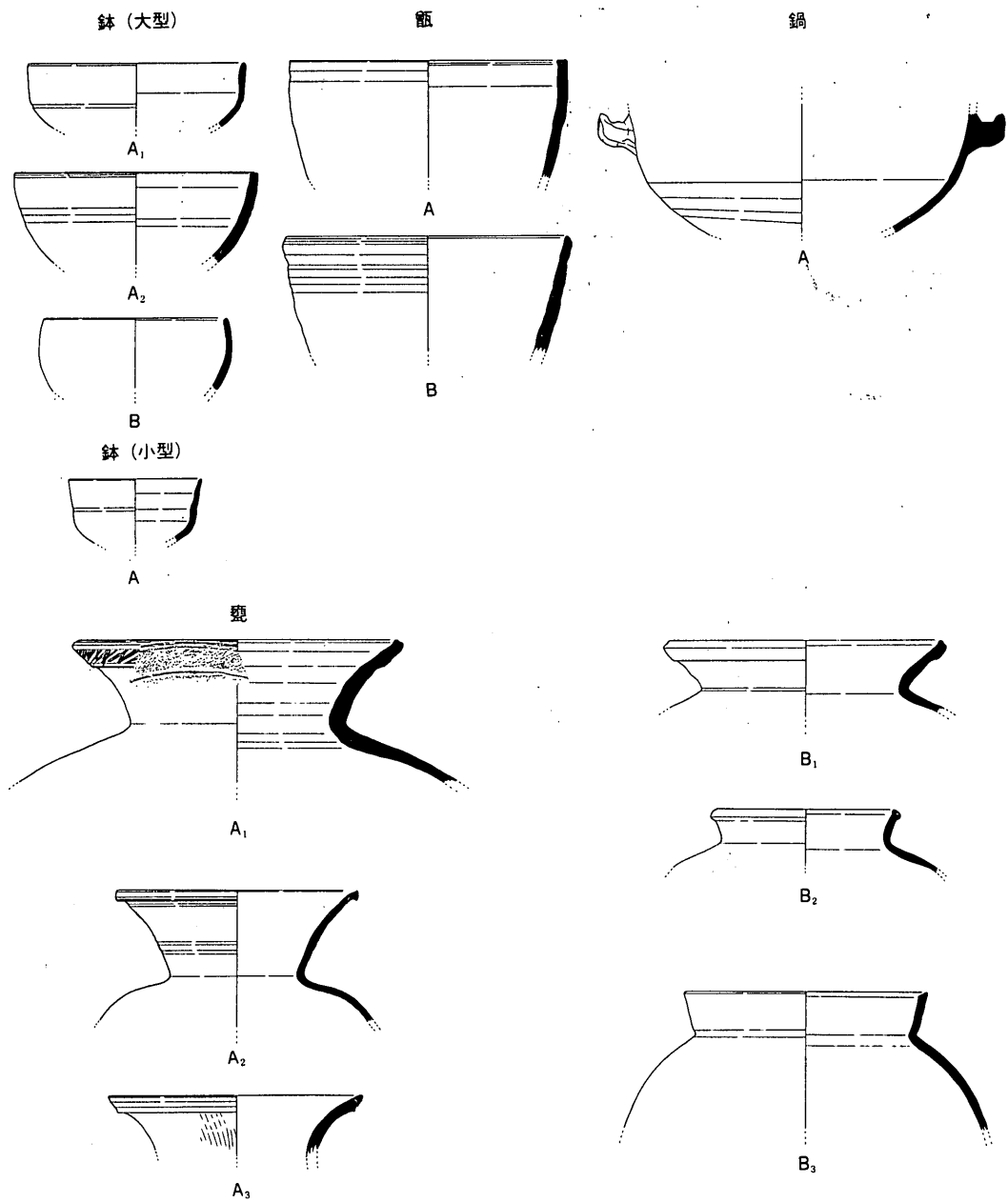


図35 須恵器分類図(2) (1/6)

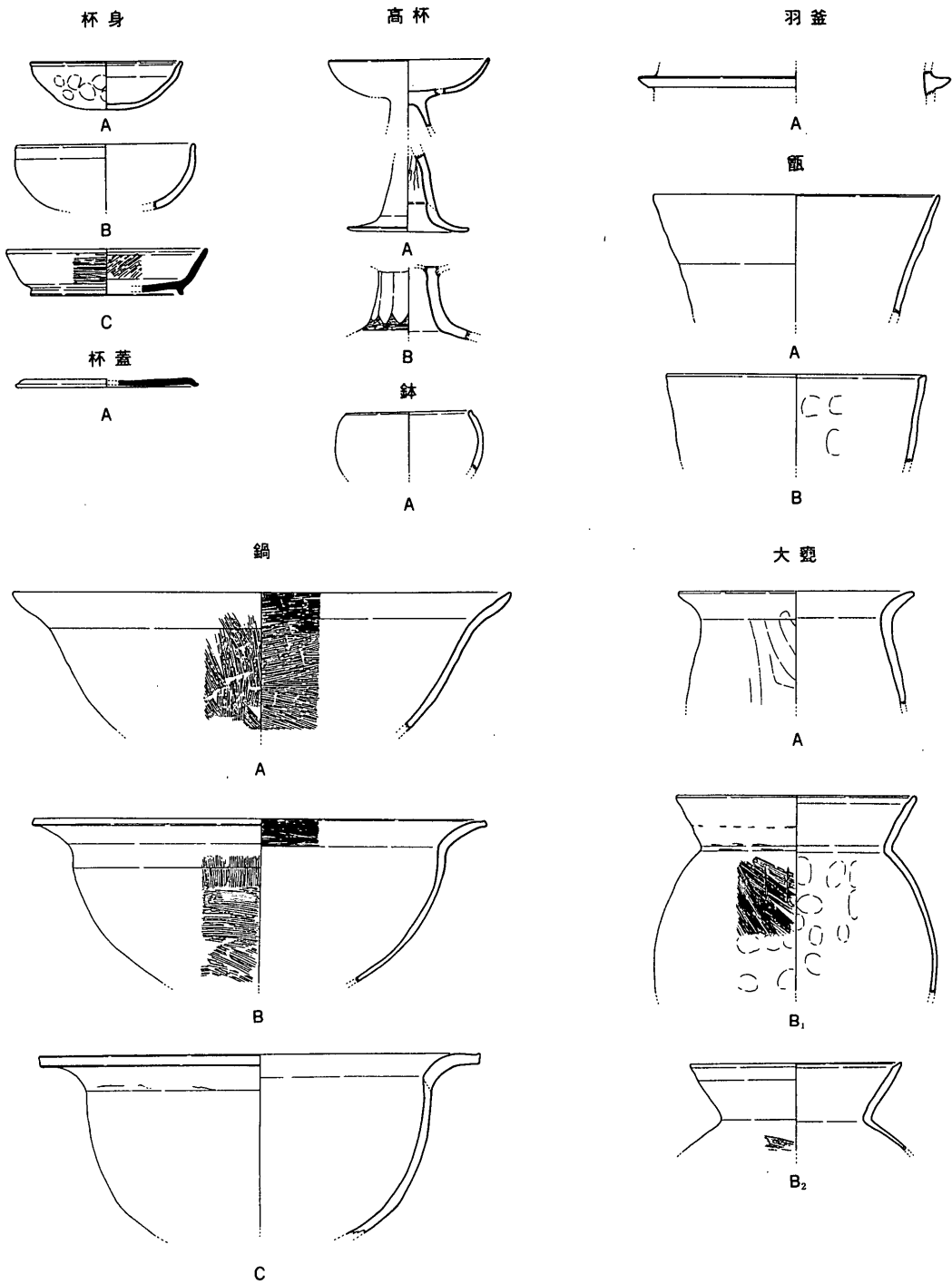


图36 土師器分類図(1) (1/6)



次に須恵器と土師器の遺構別の器種タイプ別集計表、第5層出土須恵器、土師器のグリッド別破片数一覧を示す。

(2) 土製品

S B026から鞆の羽口片が49点出土した。図化できるものは少ない。405は、鞆の羽口近くのところの破片である。中央に径2.6cmの円孔が貫通している。体部の残存最大径は6.08cmで先端部に向い、わずかであるが細まる。体部外面はナデ、内面は、縦方向にナデている。中子状のものを抜き取った跡であろう。胎土は2mm以下の白色砂粒を含む、色調は内外面とも橙色、先端部に近いところの外面は、2次焼成により黒変している。

406は、S D020出土のものである。出土点数は1点である。先端部の破片である。中央の円孔径は2.9cmである。体部径は8cm。胎土は1mm以下の白色砂粒を多量に含む。気泡跡が多くある。色調は内外断面とも橙色、先端部は2次焼成によって、壁内まで黒変し、外面では多孔質となっている。

404は、S D044出土の丸瓦片である。点数は1点である。外面はナデ、内面は布目圧痕がある。角はヘラ削りにより面取りを行っている。胎土は1mm以下の白色砂粒を少し含む。色調は内面が灰色、外面は光沢のある灰色、断面は芯状に明青灰色その両側は灰白色である。焼成は堅緻で、須恵器の焼きである。

(3) 鉄滓

S B09から5点、69g、S B014から2点、11g、S B026から35点、1352g、S D020から5点、302g、S D029から1点、155g、S D044から1点、47gの鉄滓が出土した。また、包含層第5層から10点、255gの鉄滓が出土した。

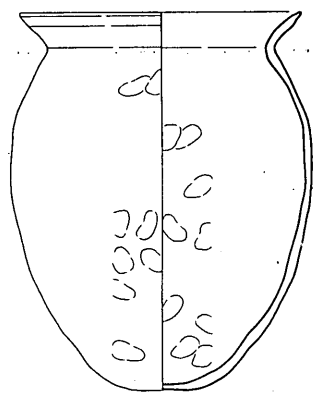
鉄滓の地は暗青灰色で錆層の部分は暗赤褐色、断面は暗紫灰色を呈するものが多い。金属質の光沢をもつものもある。形態は不整形であるが、相対する面が平坦面をなす場合が多くある。厚さは10~25mmの間にある。重さは最高でS B026出土の120g、平均は約40gである。質はほとんど

表6 土師器分類表

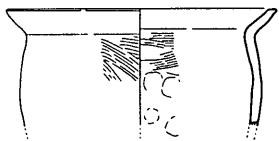
器種	タ	イ	ブ
杯身	Aゆるく内湾して斜め上方へのびる。浅い。 B内湾してのび、途中、屈曲した後、直立する。深い。 C高台付。体部やや外湾気味。		
杯蓋	A口縁部で、まず内方へ屈曲した後、直ぐに外方へ屈曲する。		
高杯	A細長い脚部。脚部は丸い。杯部は内湾して浅い。 B脚柱部は、縦方向の面取りにより10角柱状を呈する。		
鉢	A内湾する体部。体部中に最大径あり。		
大壺	A口縁端部を丸くするもの。 B1口縁端部内面に、押えナデにより凹面のあるもの。 B2口縁端部内面と外面につまみナデにより、共に凹面のあるもの。 C口縁端部外面に押えナデにより凹面のあるもの。 D口縁端部に水平な面取りがなされているもの。 E口縁端部を内外面とも拡張させているもの。体部外面には、タタキとカキ目がなされる。 F口縁端部を内外方に弱冠拡張させ、端部は面をなし、1条の沈線をめぐらす。		
	A口縁端部が丸いもの。 B口縁端部が面をなすもの。 C口縁端部が内面側に内傾する。平坦面のあるもの。		
	A口縁端部が丸いもの。外面、口頸部を除き、内面全面にハケ目。 B口縁端部、外傾する面をなす。内面、口頸部のみハケ目、外面は消されているが全面にハケ目。 C口縁端部、垂直な面をなす。ハケ目なし。		
	A横断面が楕円形のもの。 B横断面が円盤形のもの。		
	A断面、上面が水平な直角三角形の錐をもつ。		
	A口縁端部が丸い。 B口縁端部、内傾する面をなす。		
製壺土器	A内傾する口頸部をもつ。 B外反する口頸部をもつ。		
支脚	A下面は平坦面につくる。下から上方へ細まる。浅い面取りによって5面をつくる。		

表9 第5層グリッド別出土須恵器・土師器集計表(破片数)

	R-10	R-11	S-9	S-10	S-11	T-10	U-10	U-11	V-11	合計
須恵器	109	213	18	585	171	387	245	50	41	1819 (53.5%)
土師器	96	339	21	441	104	266	130	63	120	1580 (46.5%)
合計(%)	205 6.0	552 16.2	39 1.1	1026 30.3	275 8.1	653 19.3	375 11.0	113 3.3	161 4.7	3399 (100.0%)

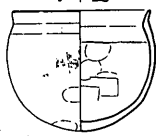


C

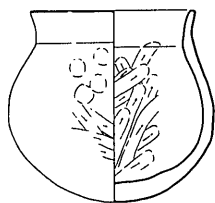


D

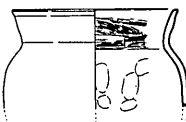
小中甕



A



B



C

把手

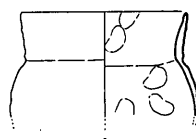


A

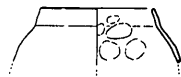


B

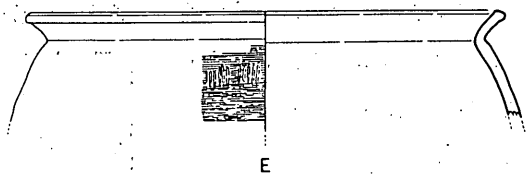
製塩土器



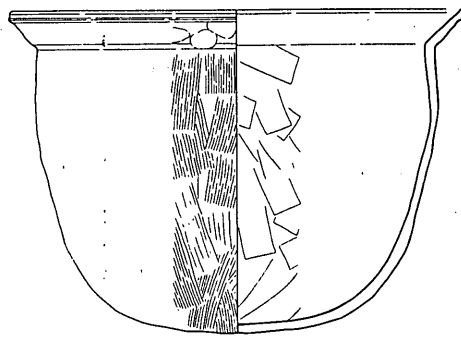
A



B



E



F

图37 土師器分類图(2) (1/6)



どが多孔質である。孔の大きさは5mm以下である。孔が1mm以下と小さく、密にある場合は光沢をもつことが多い。

S B026から任意に4点、S D020・029・044から1点ずつ抽出して、化学分析等を行った。結果は、VIII 自然科学的調査に収めている。それによると、S D020出土の鉄滓は精練鍛冶滓、他のS B026、S D029・044の出土のものは鍛練鍛冶滓であると判断されている。

#### (4) 石製品

407・408・410は砥石である。石材はすべて砂岩である。407は上面と側面の1つが使用された面である。408も上面と側面の1つに条痕が残る。410は407・408より相対的に小型である。上下面が使用された面であると考えられる。409は平・断面とも楕円形を呈するように、おそらく成形した石を、さらに楕円の一端に磨き等の調整を加えて長軸に平行する平坦面をつくり出している。このため断面は楕円の一端をスライスした形状となっている。平坦部の反対側の頂部には叩きによると考えられる凹みが残っている。材質は花崗岩であろう。411は石製の紡錘車である。両面からブランディングを行い、円盤形を呈する。中央には径6.5mmの円孔を穿いている。

#### (5) 自然遺物

S B026・S D020から獣骨が出土した。鑑定によると、ともにウマの成獣の骨と歯である。(VIII 自然科学的調査)

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』(1981年、角川書店)
- (2) 『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第1号・『同』第2号所収 1984、1985
- (3) これと、よく似たものが高瀬町の野田池窯から出土している。報告書は、それを窯道具としている。(『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第2号)

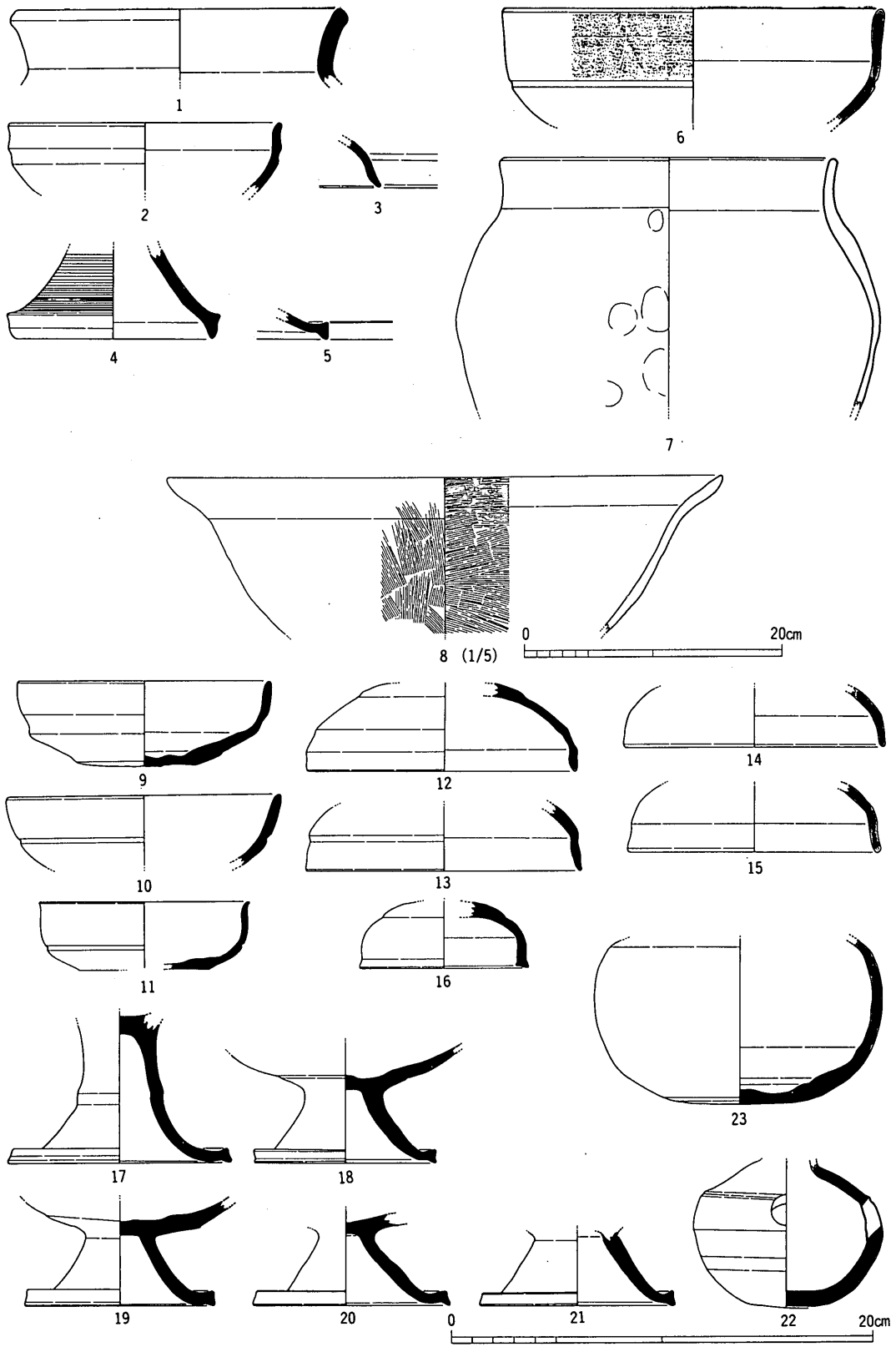


图38 S B 01 · 03 · 04 · 05出土土器实测图 (1/3 · 1/5)

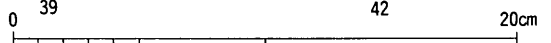
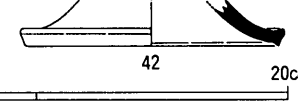
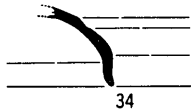
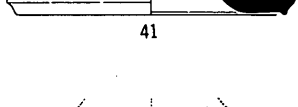
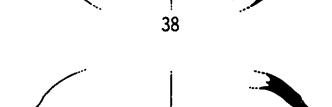
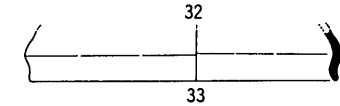
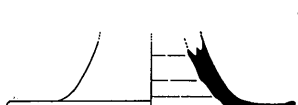
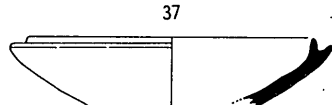
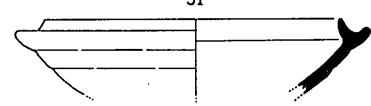
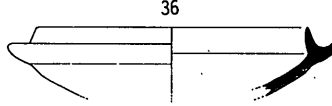
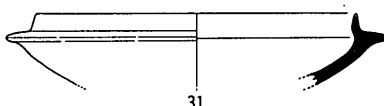
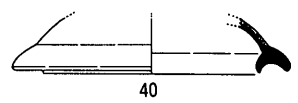
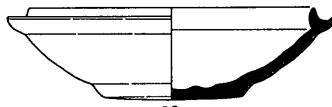
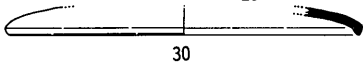
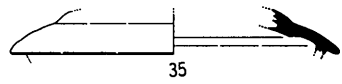
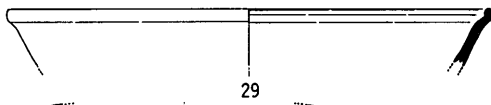
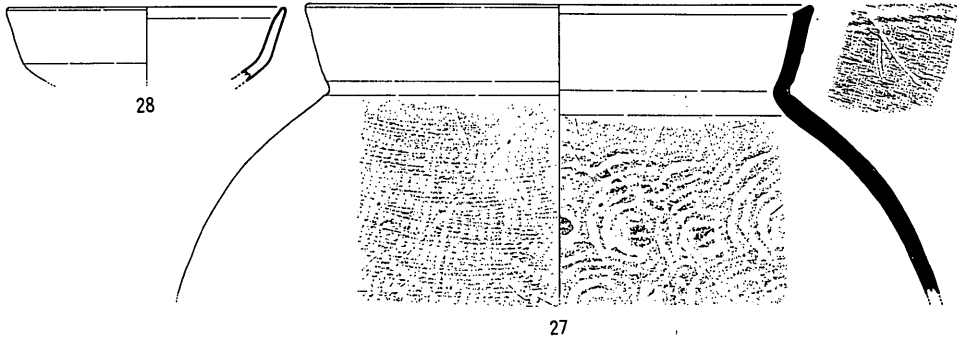
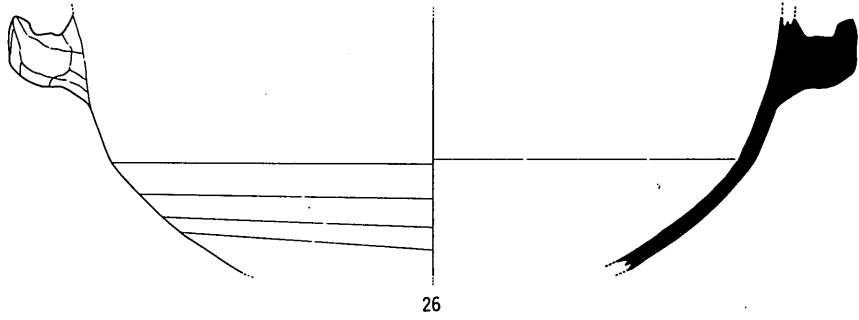
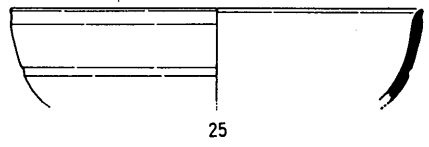
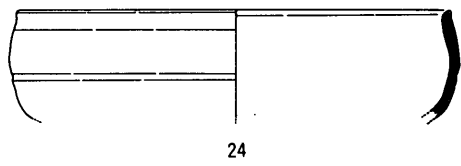


图39 S B 05 · 06 · 07 · 08 · 09出土土器实测图 (1/3)

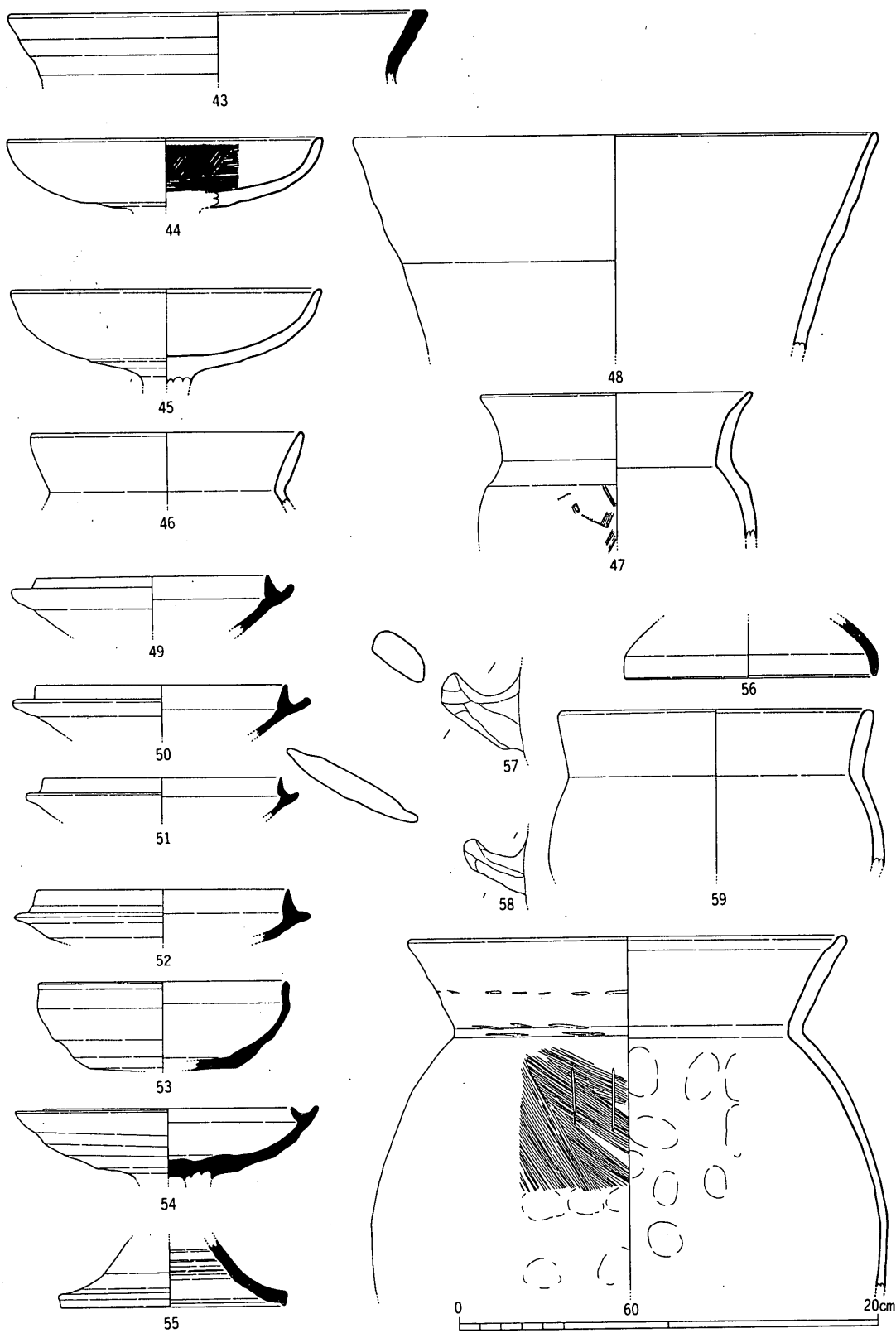


图40 S B 09 · 010 · 011 · 012出土土器实测图 (1/3)

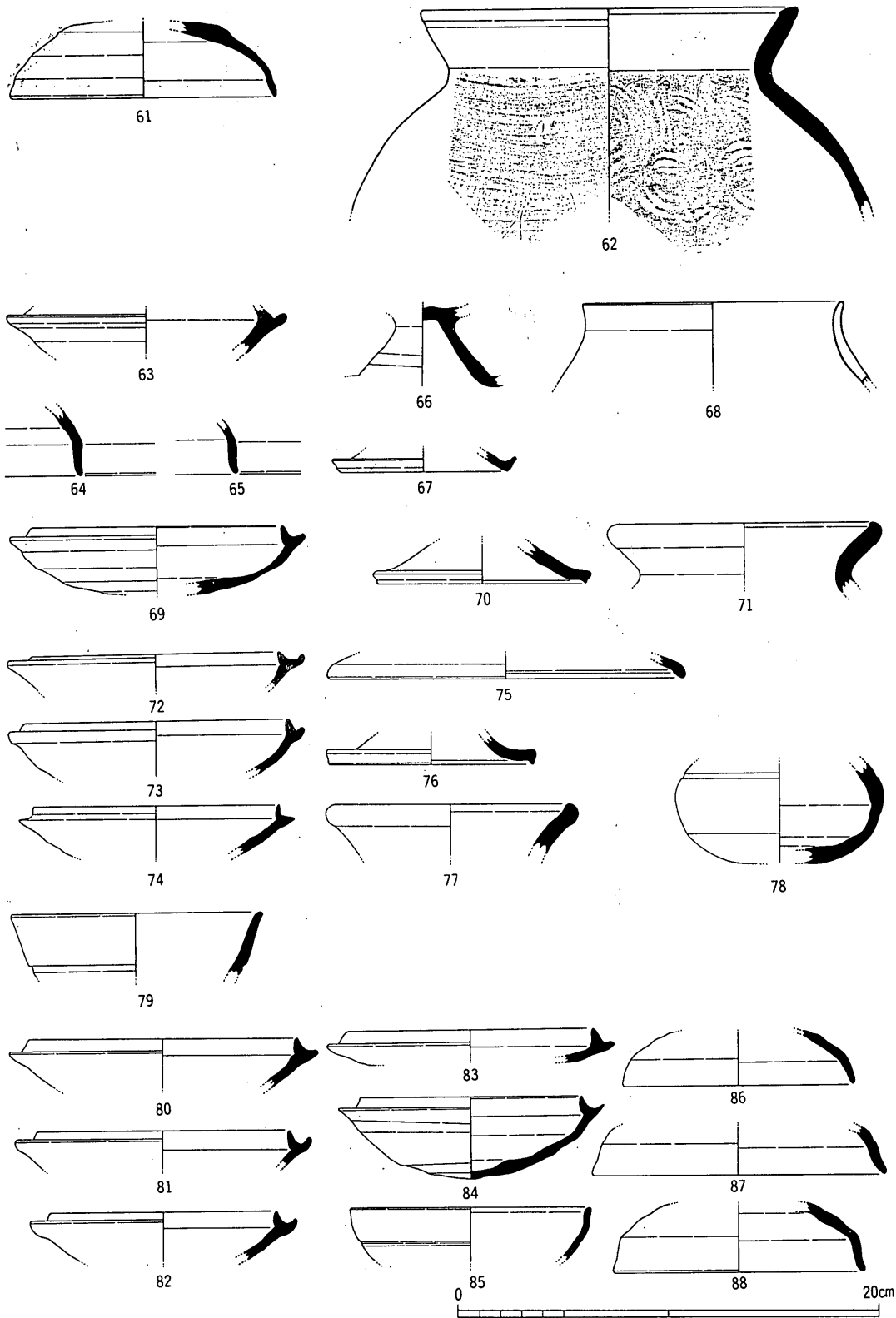


图41 S B 013 · 015 · 017 · 019 · 020 · 021 · 022 · 023出土土器实测图 (1/3)



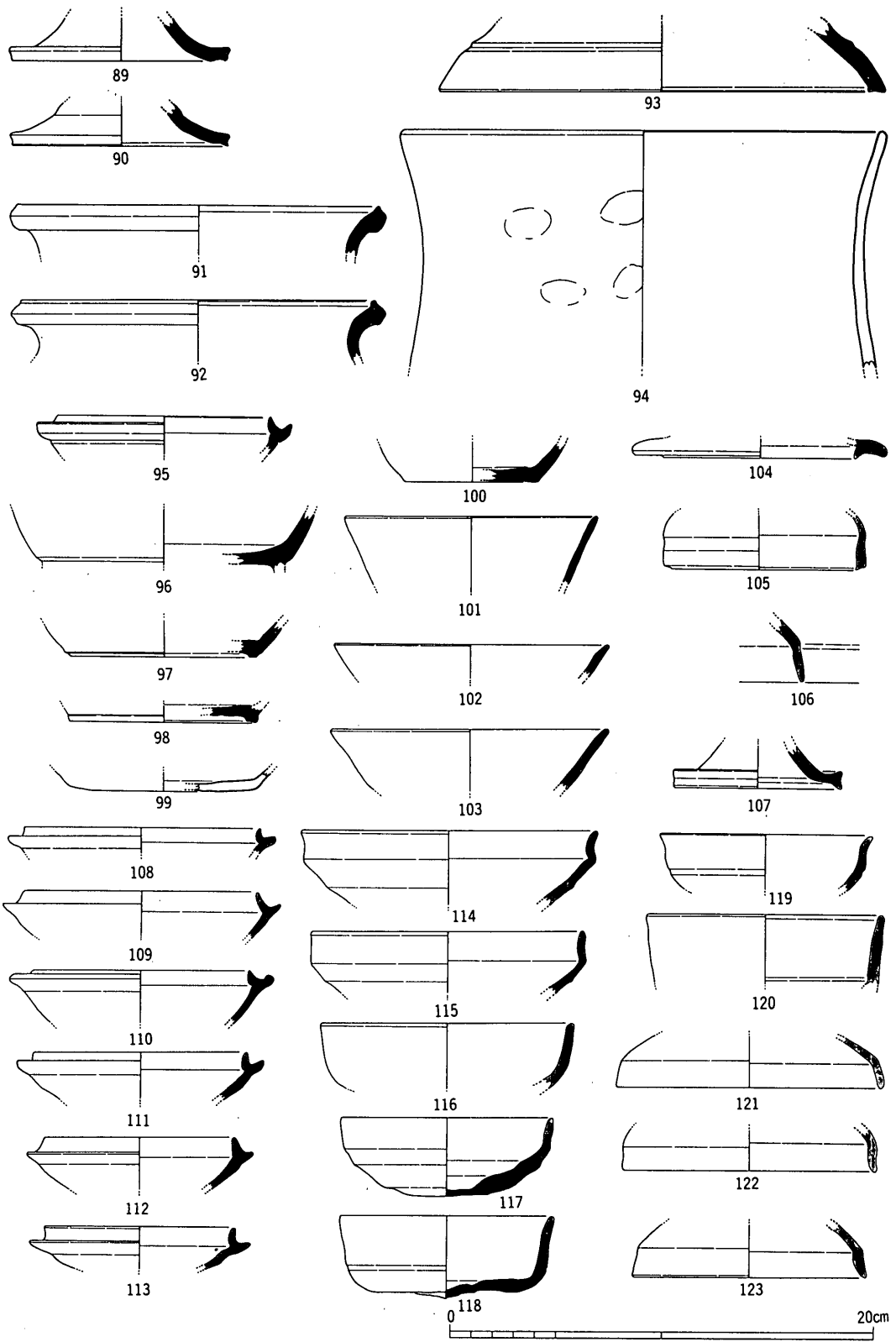


图42 S B 023 · 024 · 026出土土器实测图 (1/3)

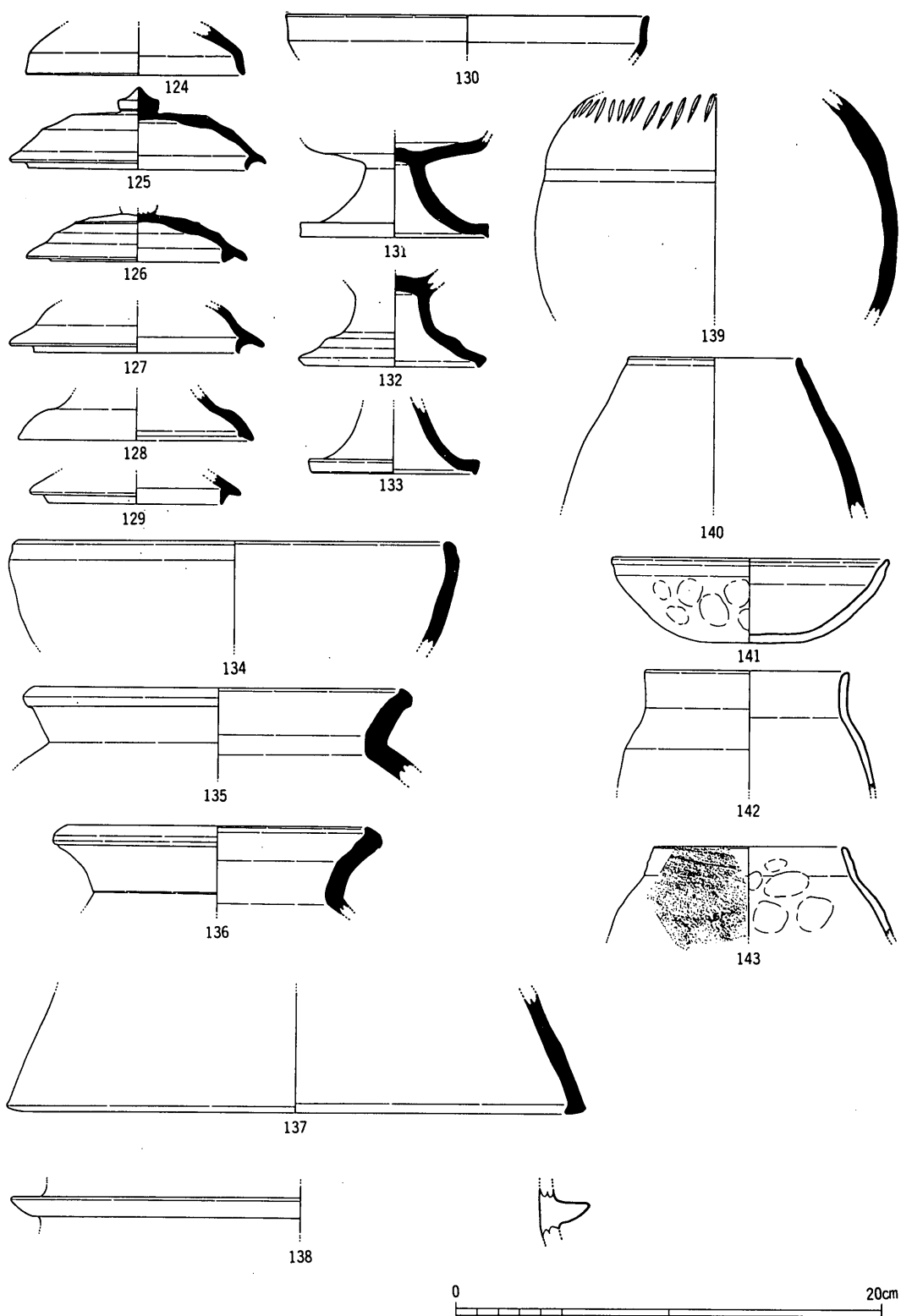


图43 S B 026出土土器实测图 (1/3)

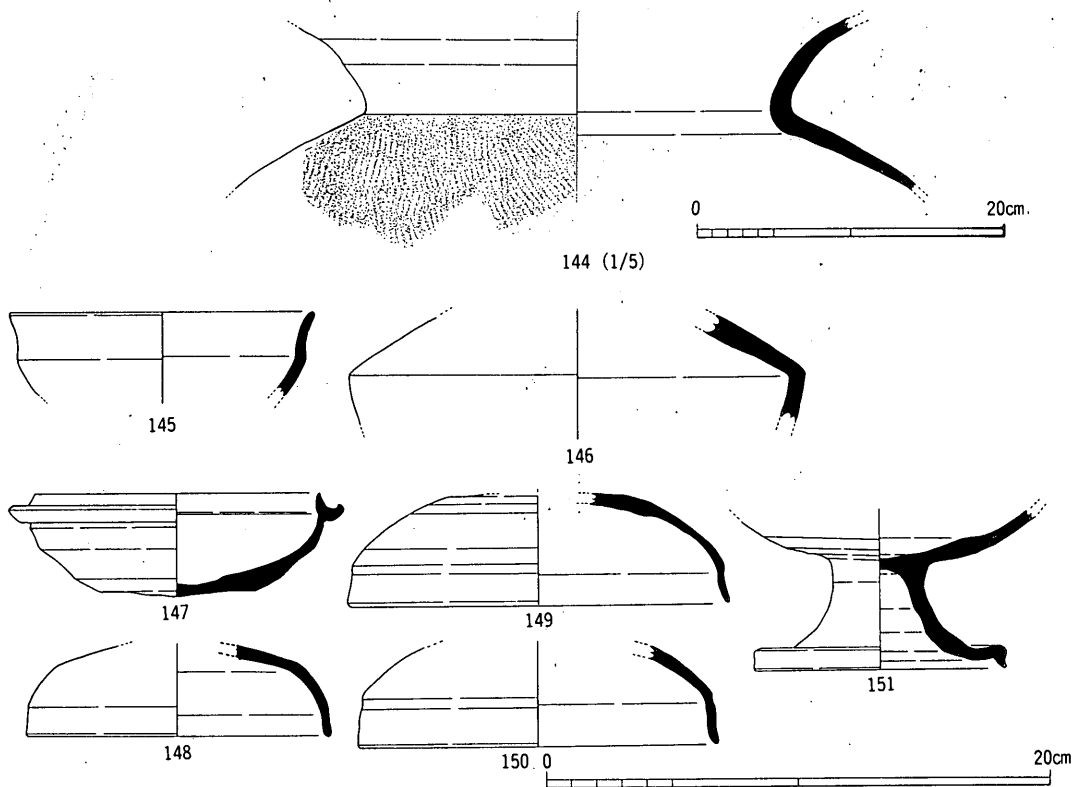


图44 S K 030 · 033 · 036出土土器实测图 (1/3 · 1/5)

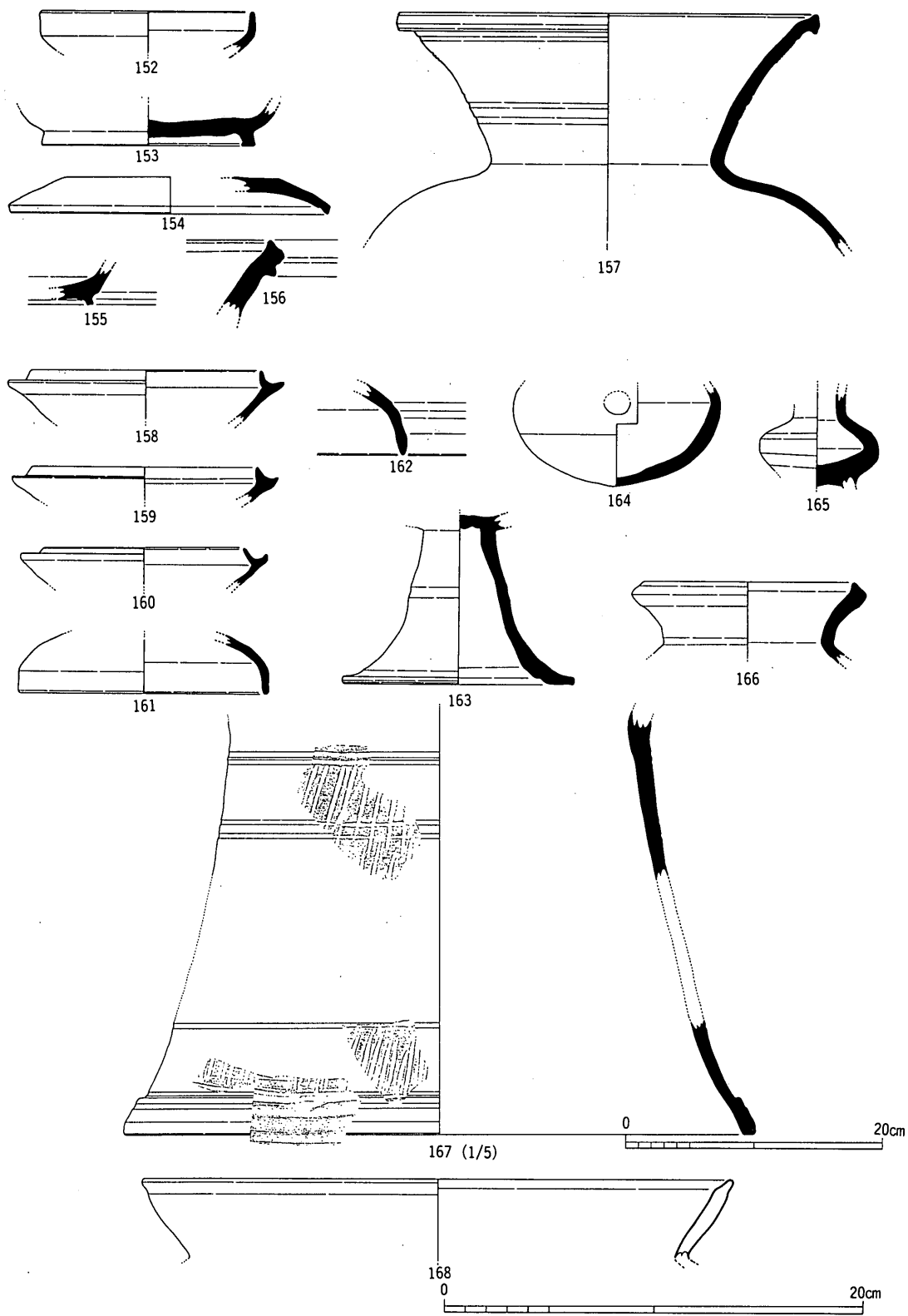


图45 S X 02 · 03出土土器实测图 (1/3 · 1/5)

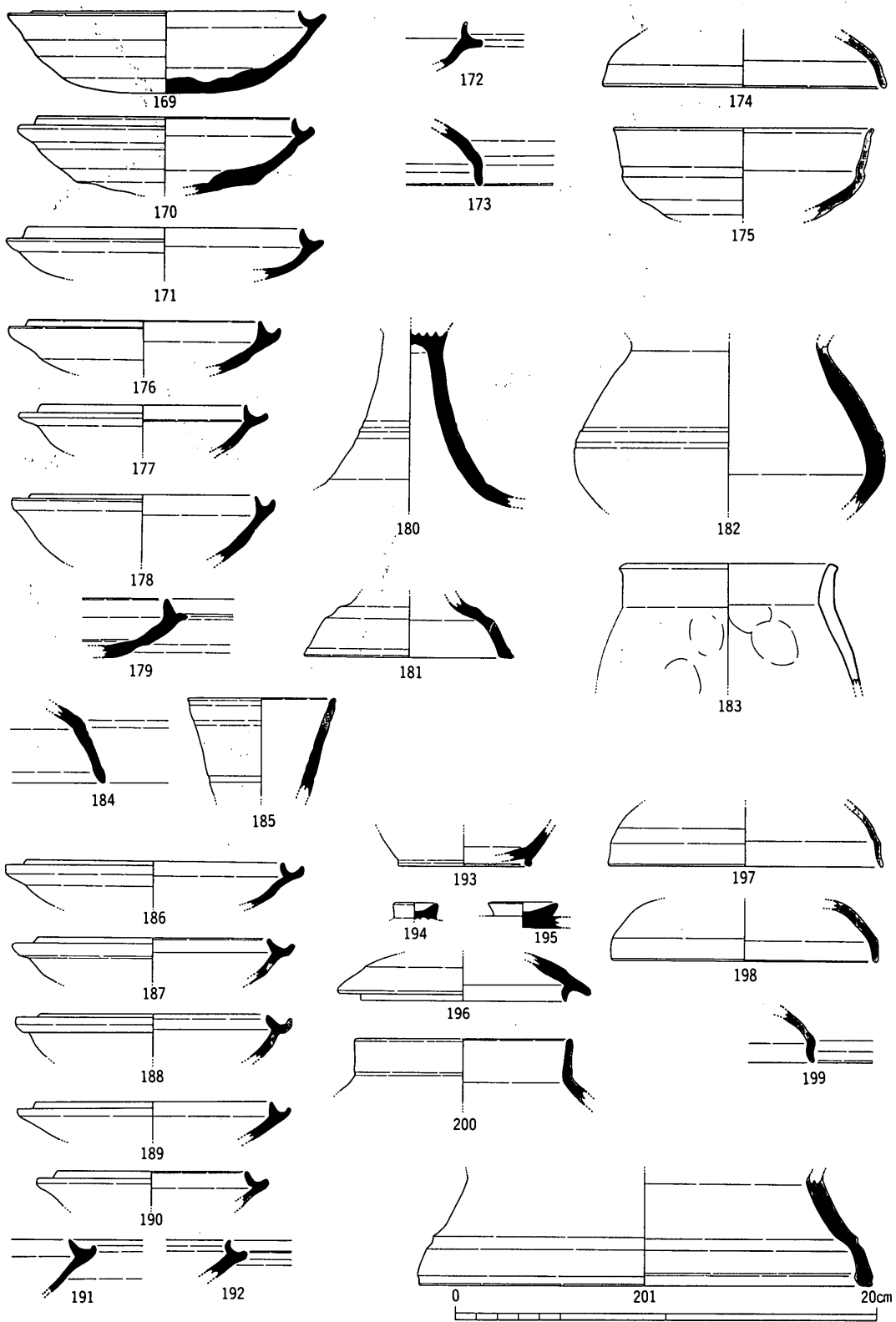


图46 S X 05·06·07·09(1)出土土器实测图 (1/3)

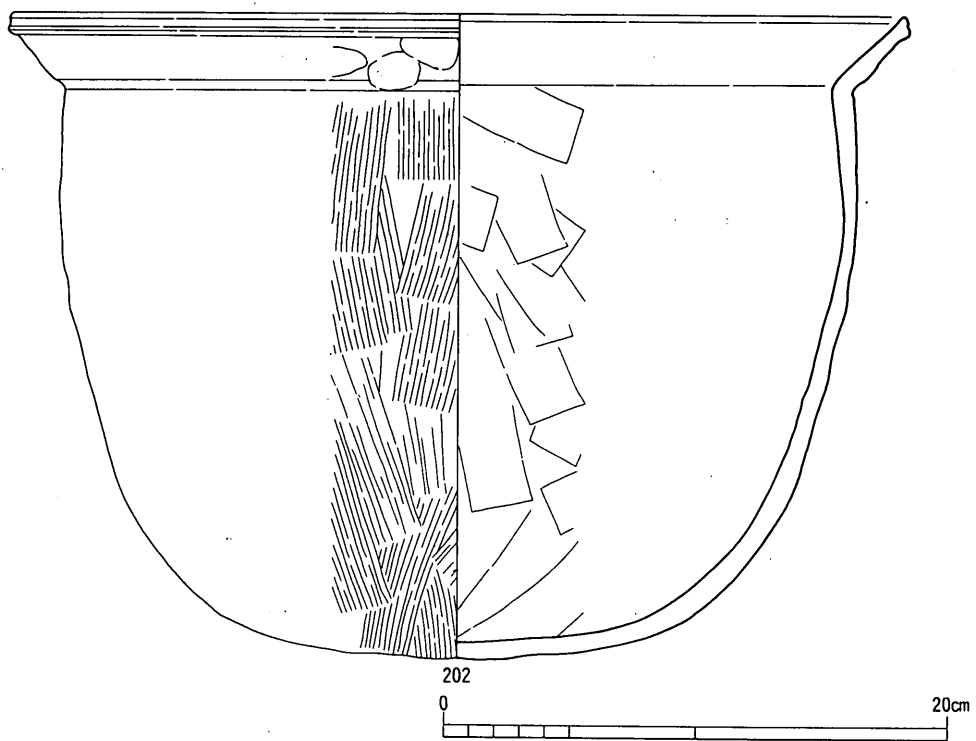
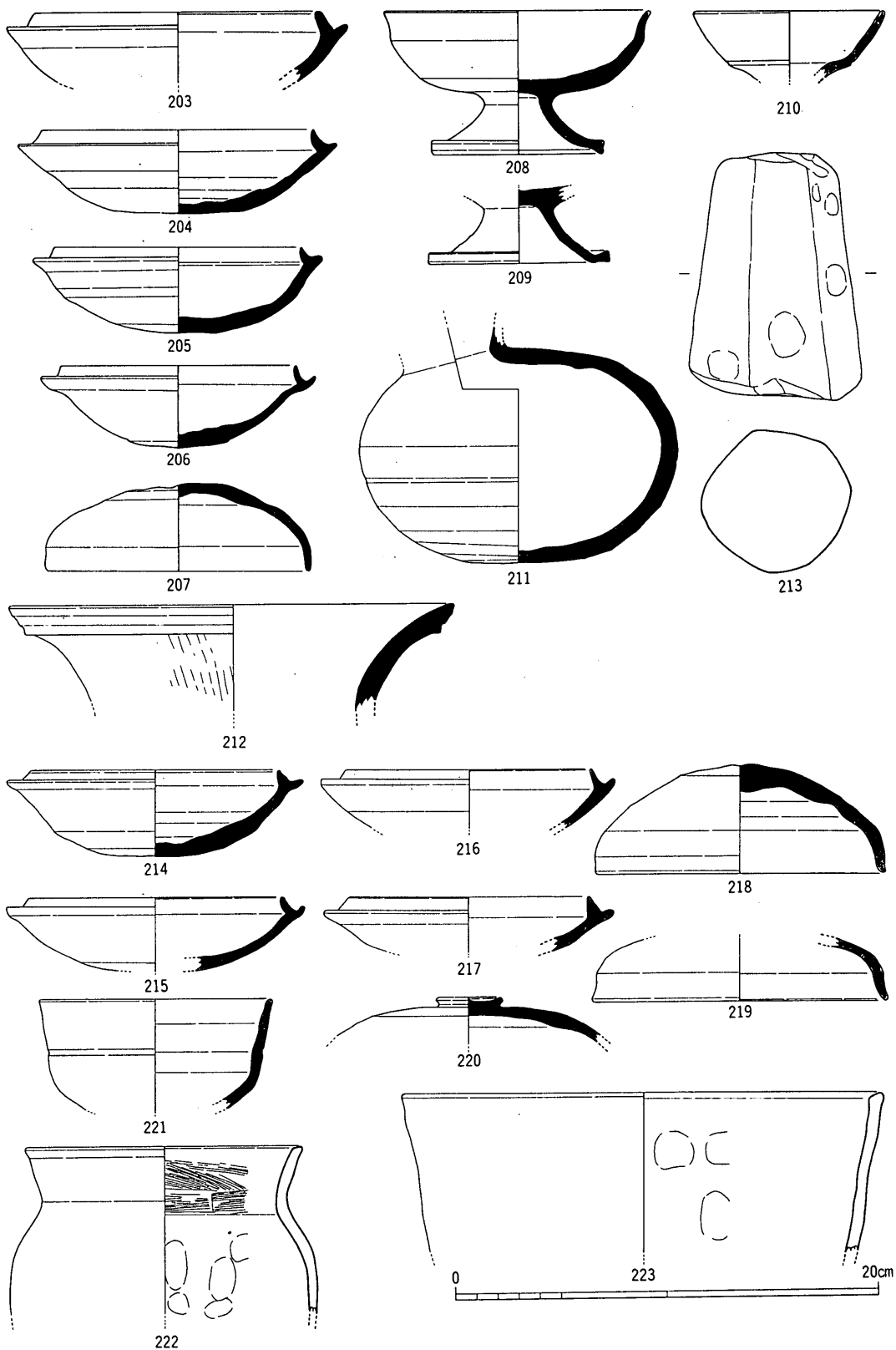


图47 S X 09出土土器实测图(2) (1/3)



· 图48 S D03·04出土土器实测图 (1/3)

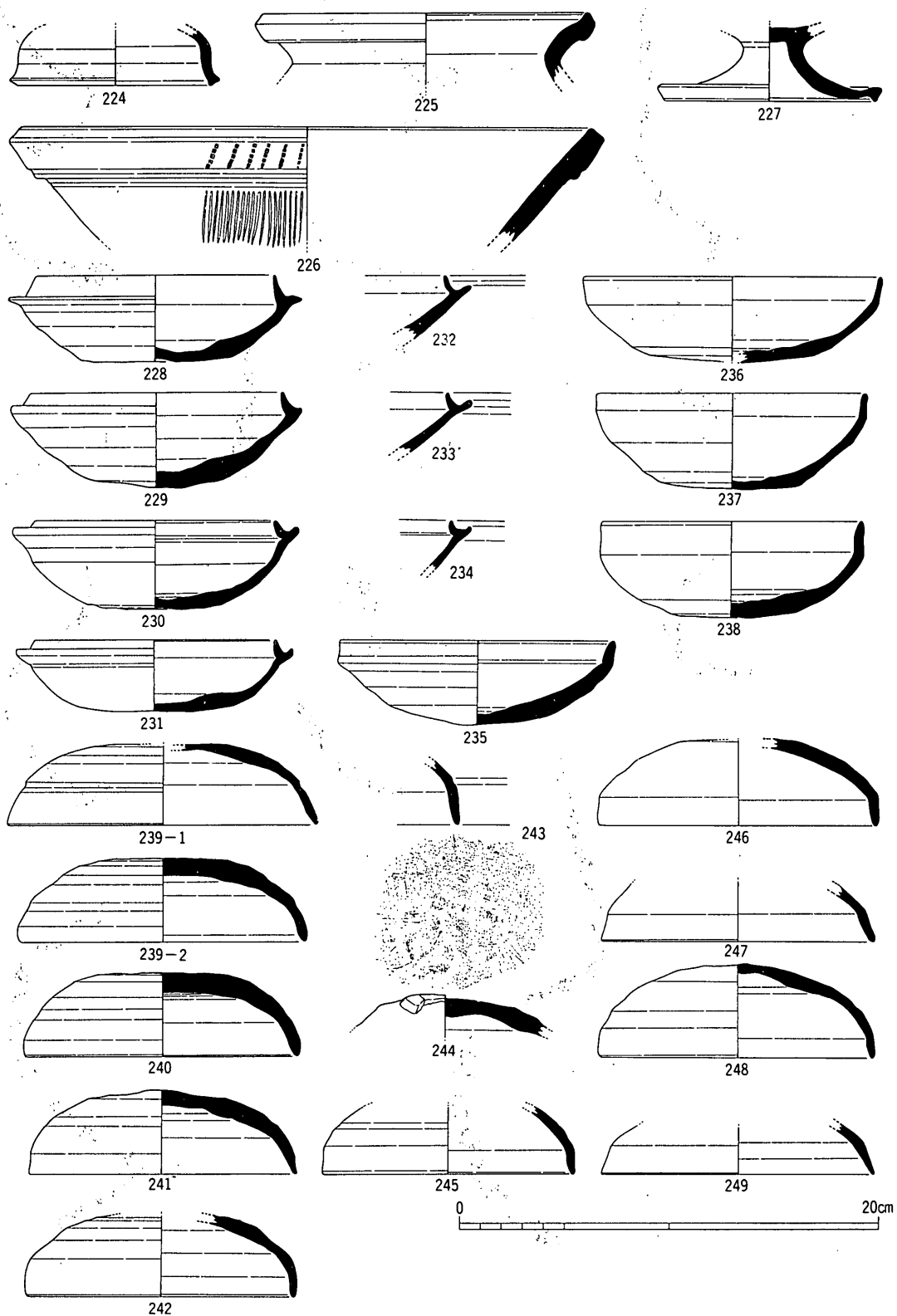


图49 S D 018 · 019 · 020(1)出土土器实测图 (1/3)



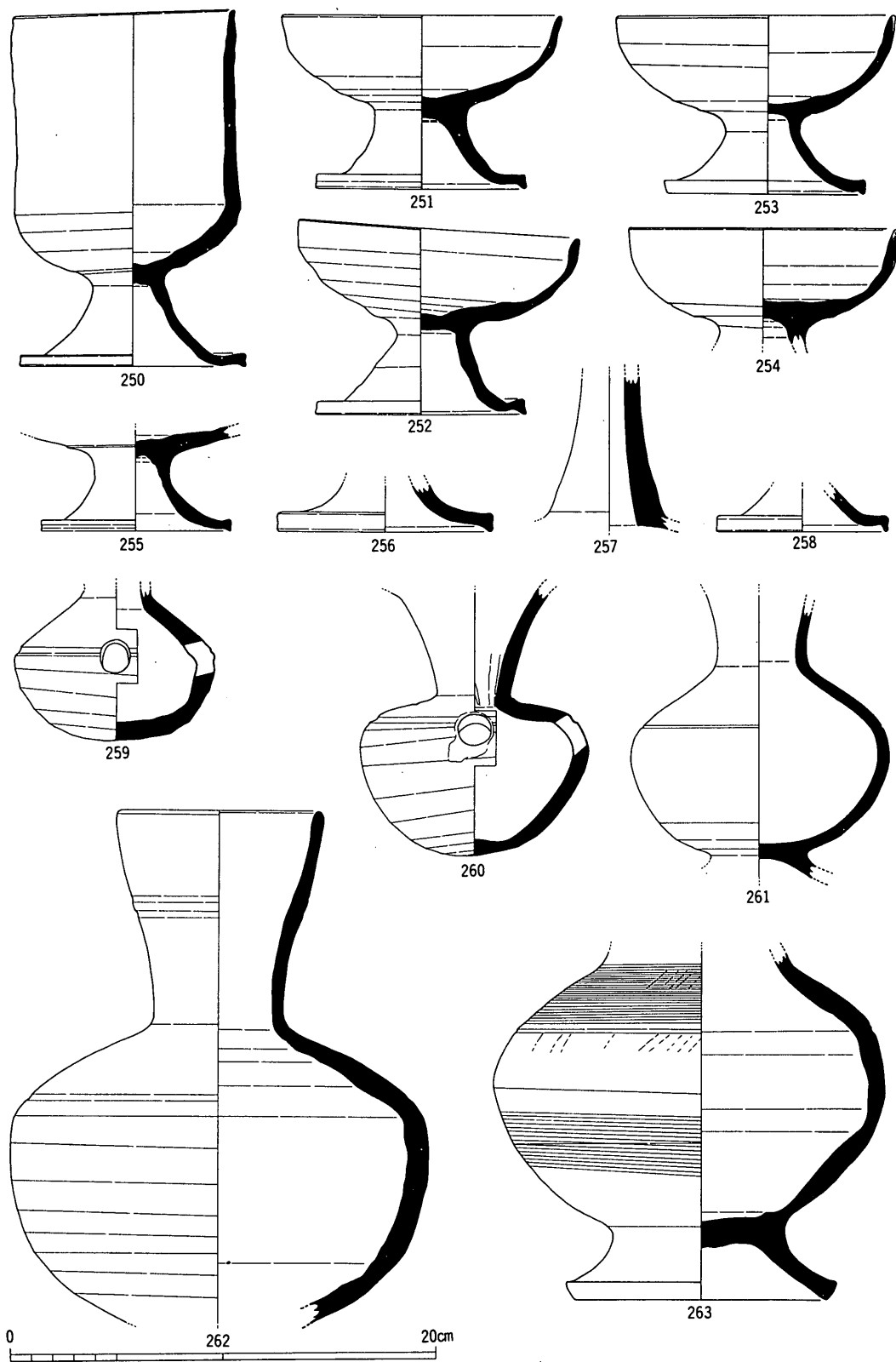


图50 S D 020出土土器实测图(2) (1/3)

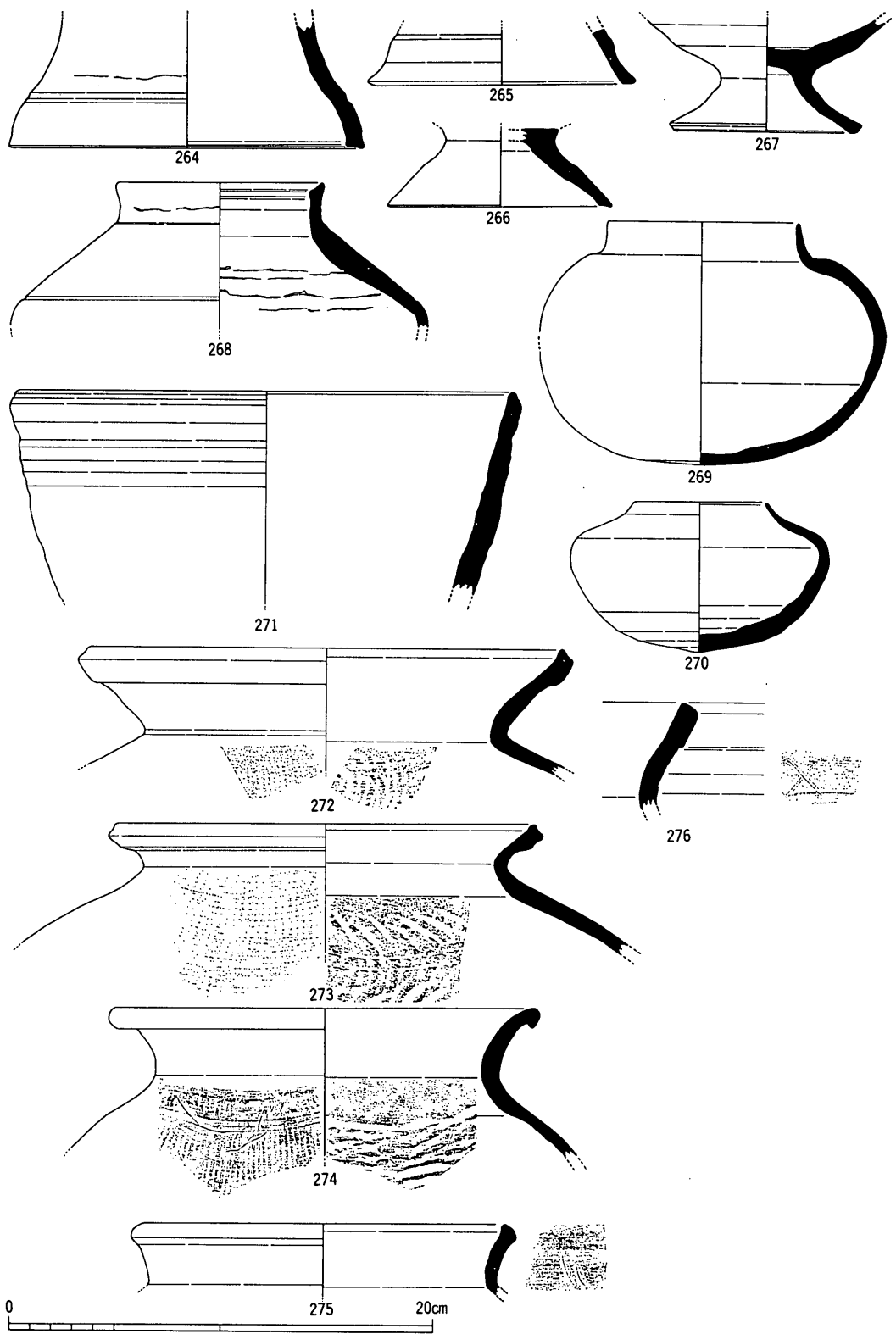
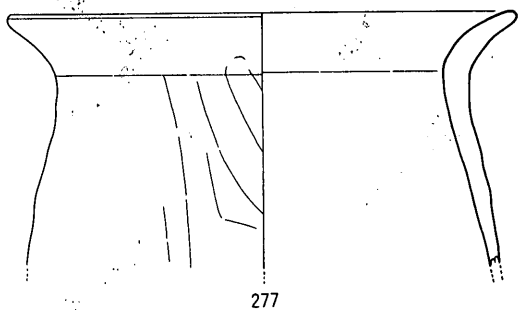
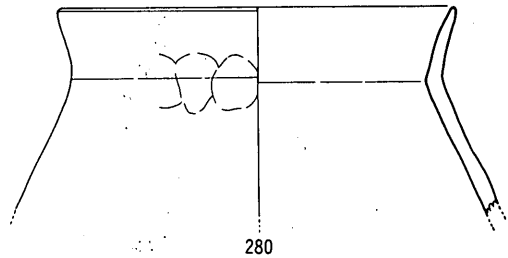


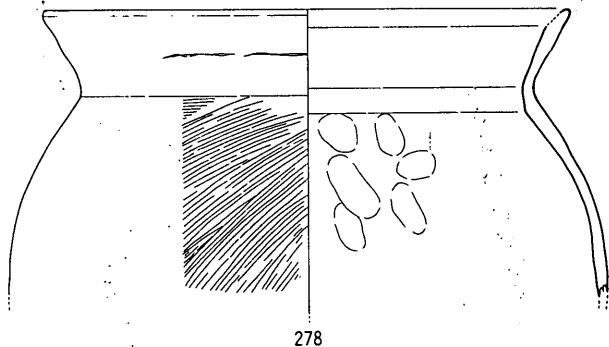
图51 S D 020出土土器实测图(3) (1/3)



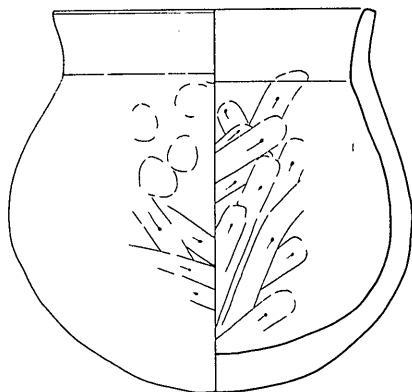
277



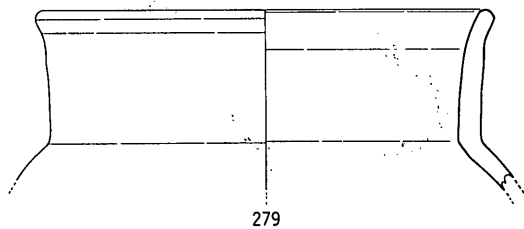
280



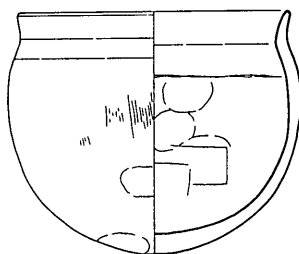
278



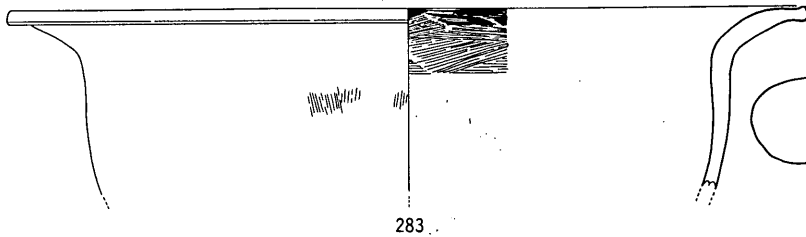
281



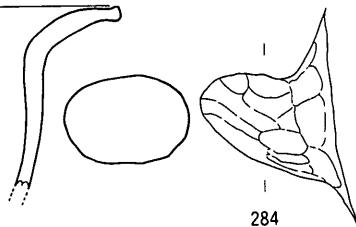
279



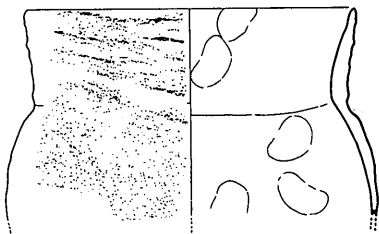
282



283



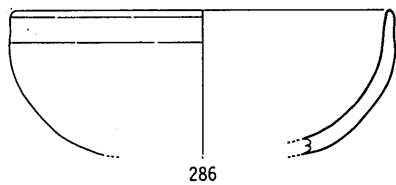
284



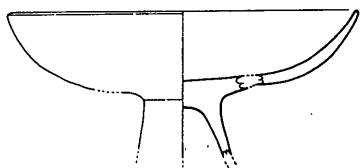
285



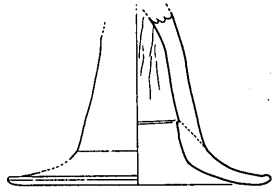
图52 S D 020出土土器实测图(4) (1/3)



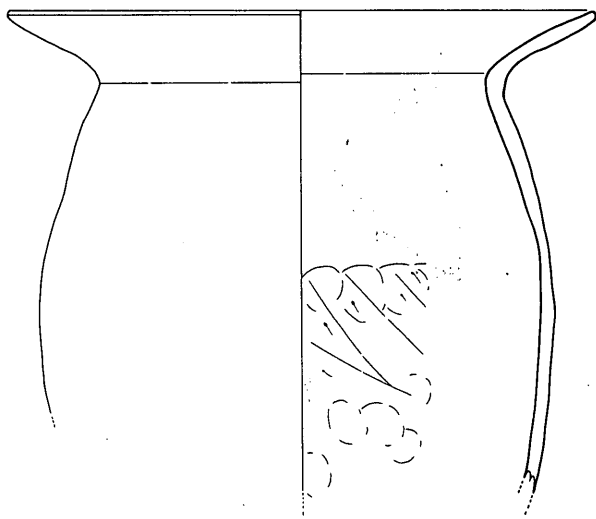
286



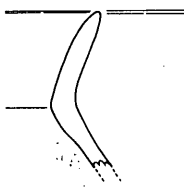
287



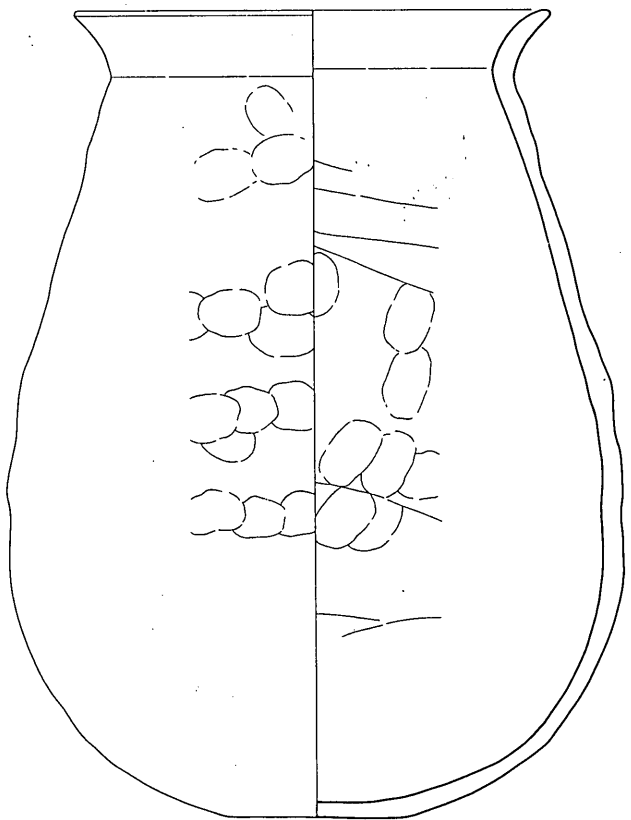
288



290



289



291

0

20cm

图53 S D020出土土器实测图(5) (1/3)

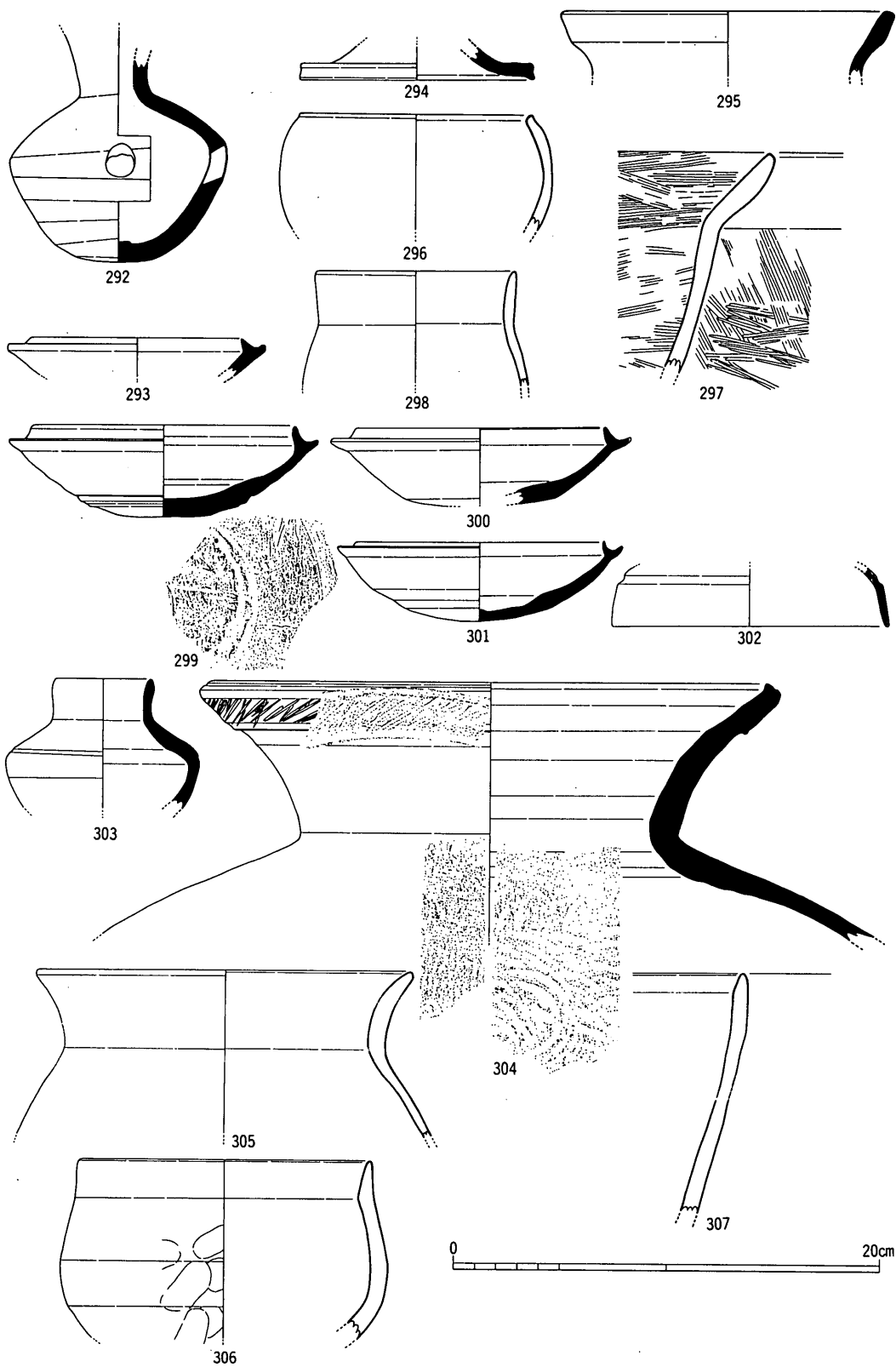


图54 S D 022 · 025 · 027 · 028出土土器实测图 (1/3)

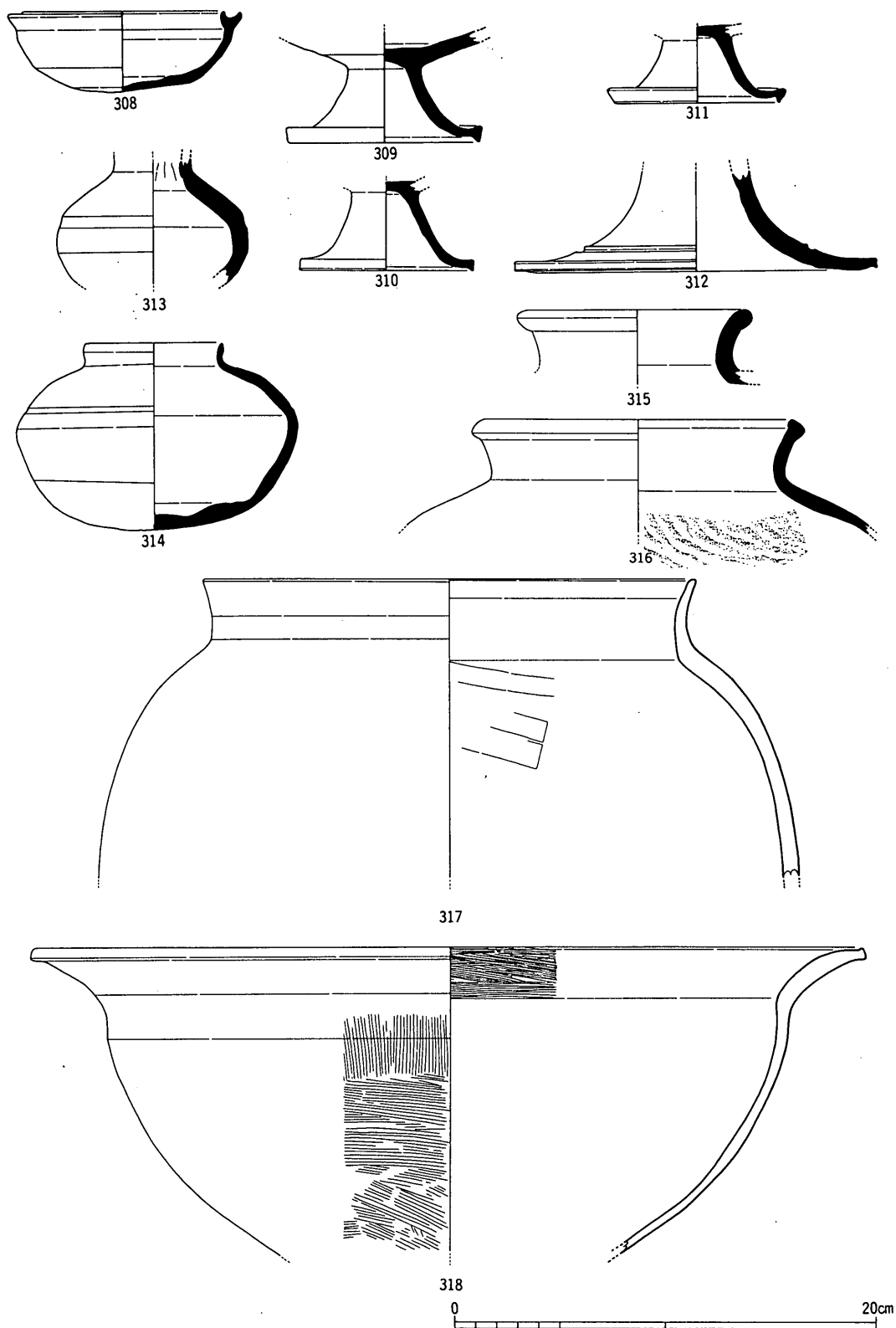


图55 S D029出土土器实测图 (1/3)

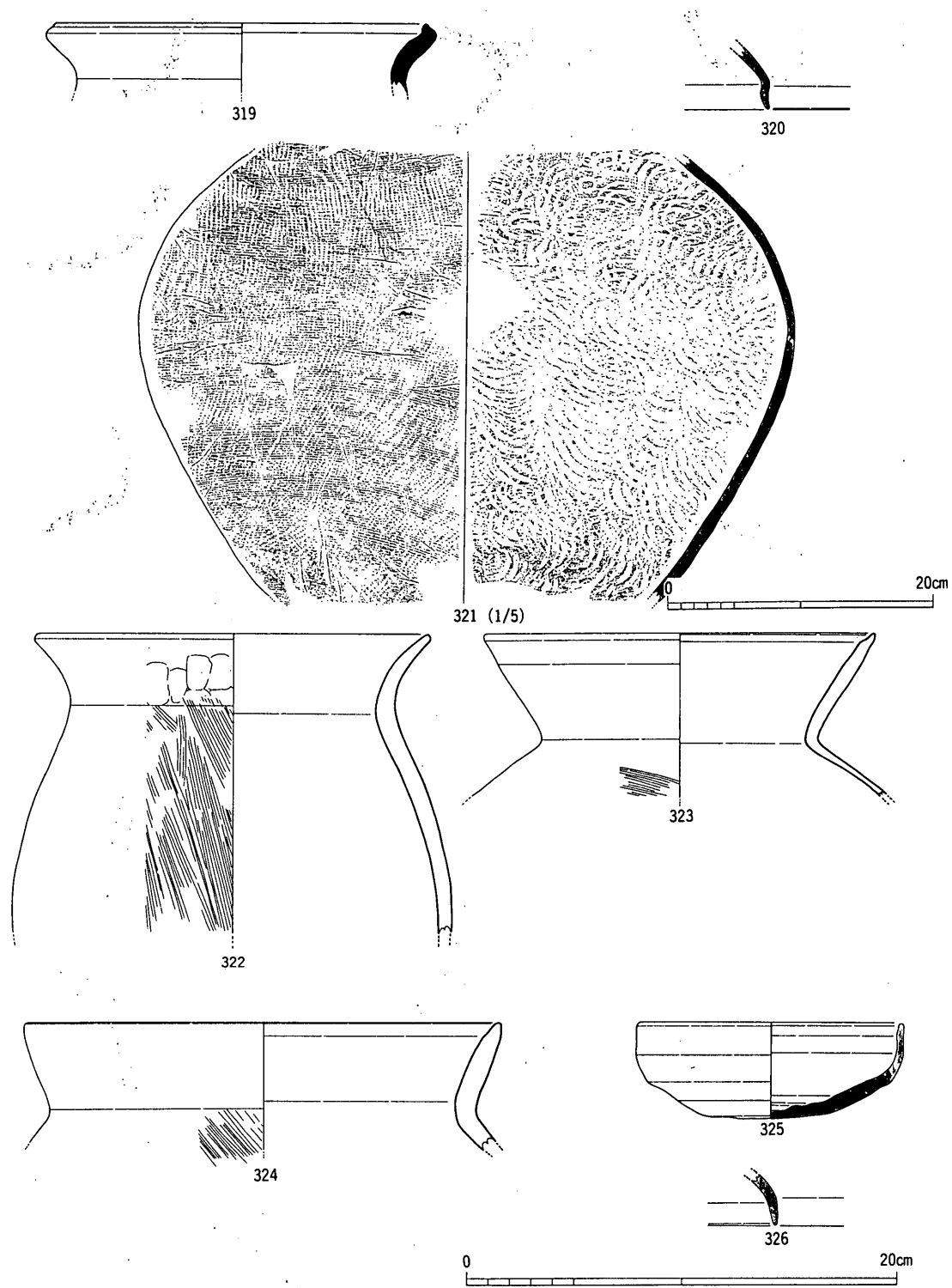


图56 S D 030 · 031 · 032 · 035出土土器实测图 (1/3 · 1/5)

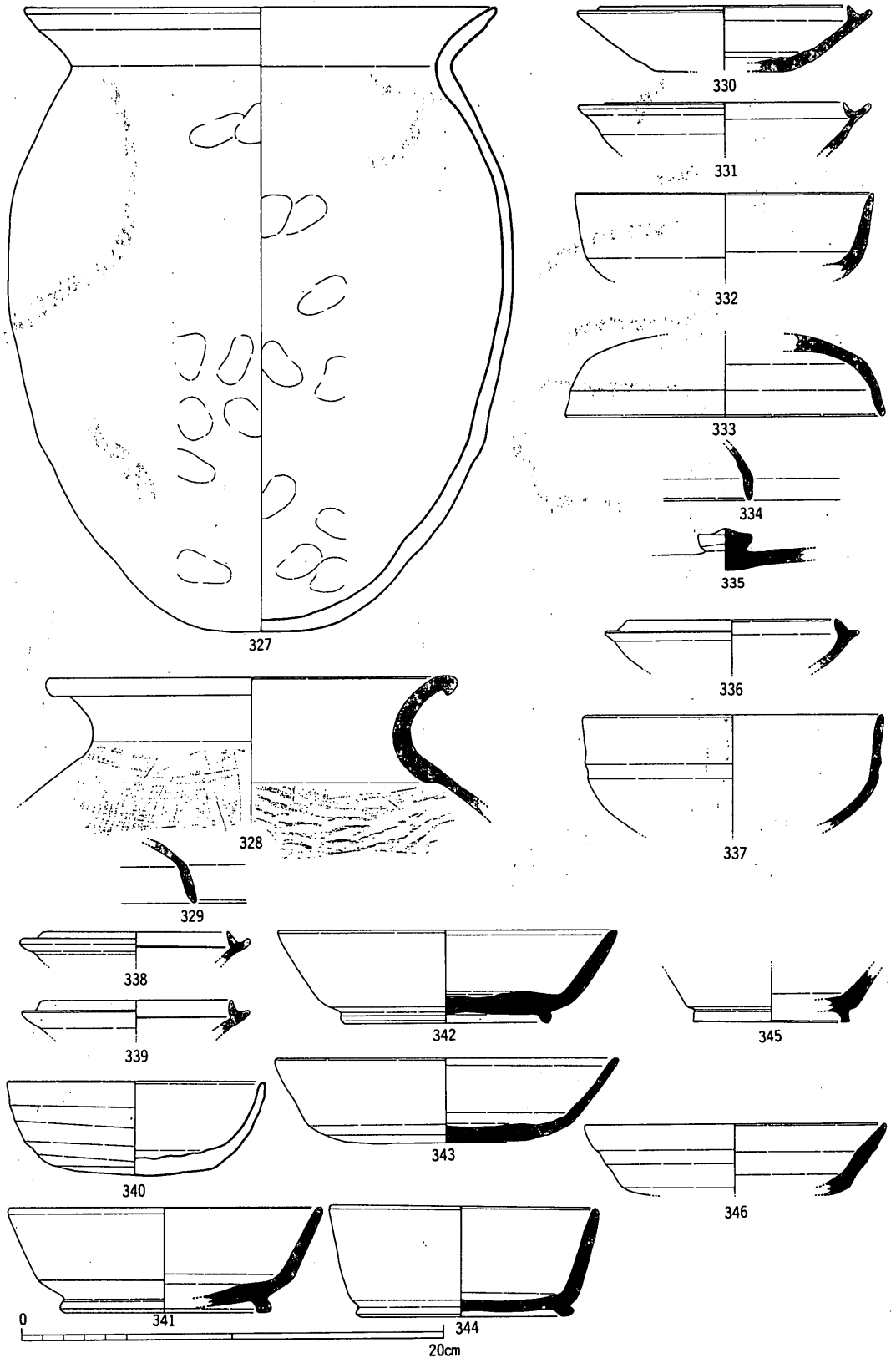


图57 S D 034 · 036 · 037 · 040 · 044(1)出土土器实测图 (1/3)



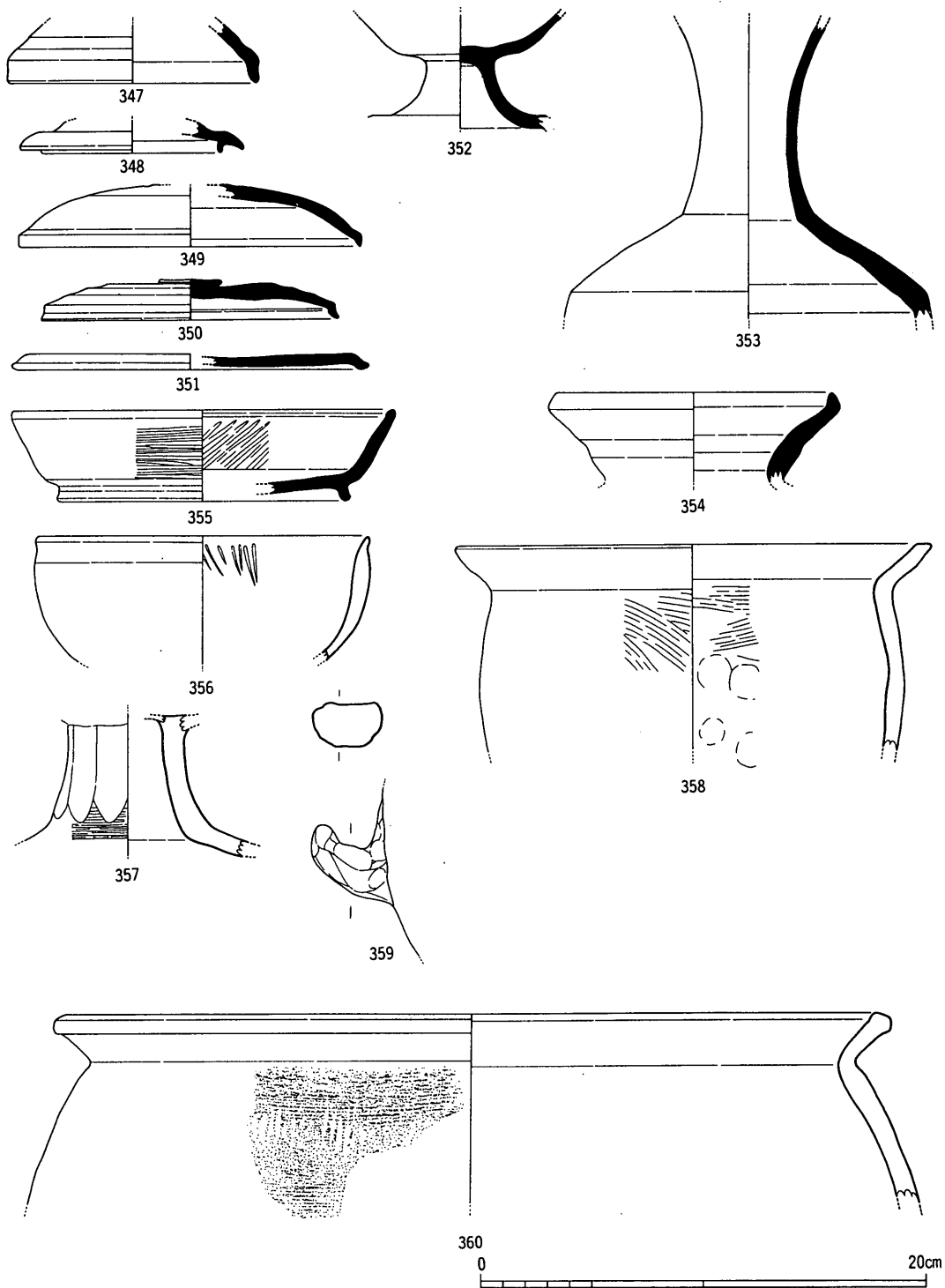


图58 S D044出土土器实测图(2) (1/3)

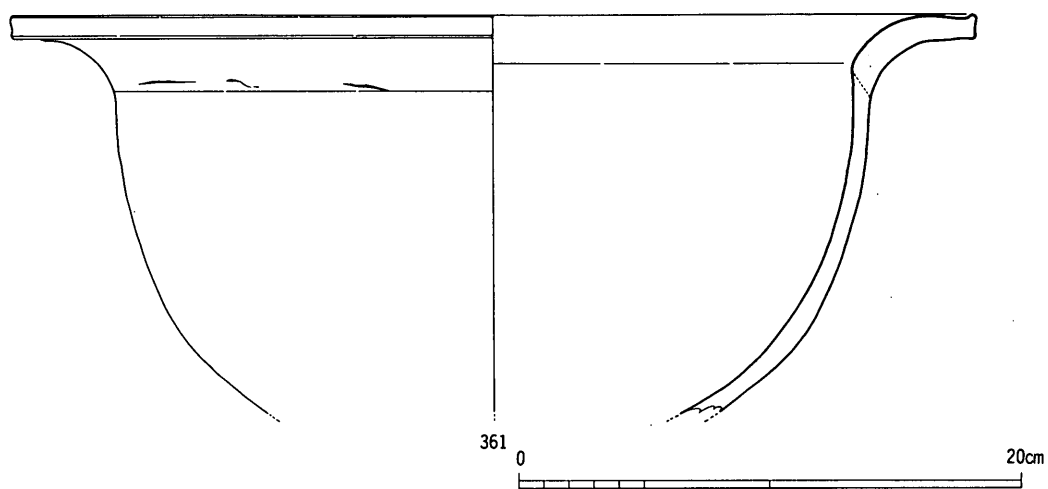


图59 S D 044出土土器实测图(3) (1/3)

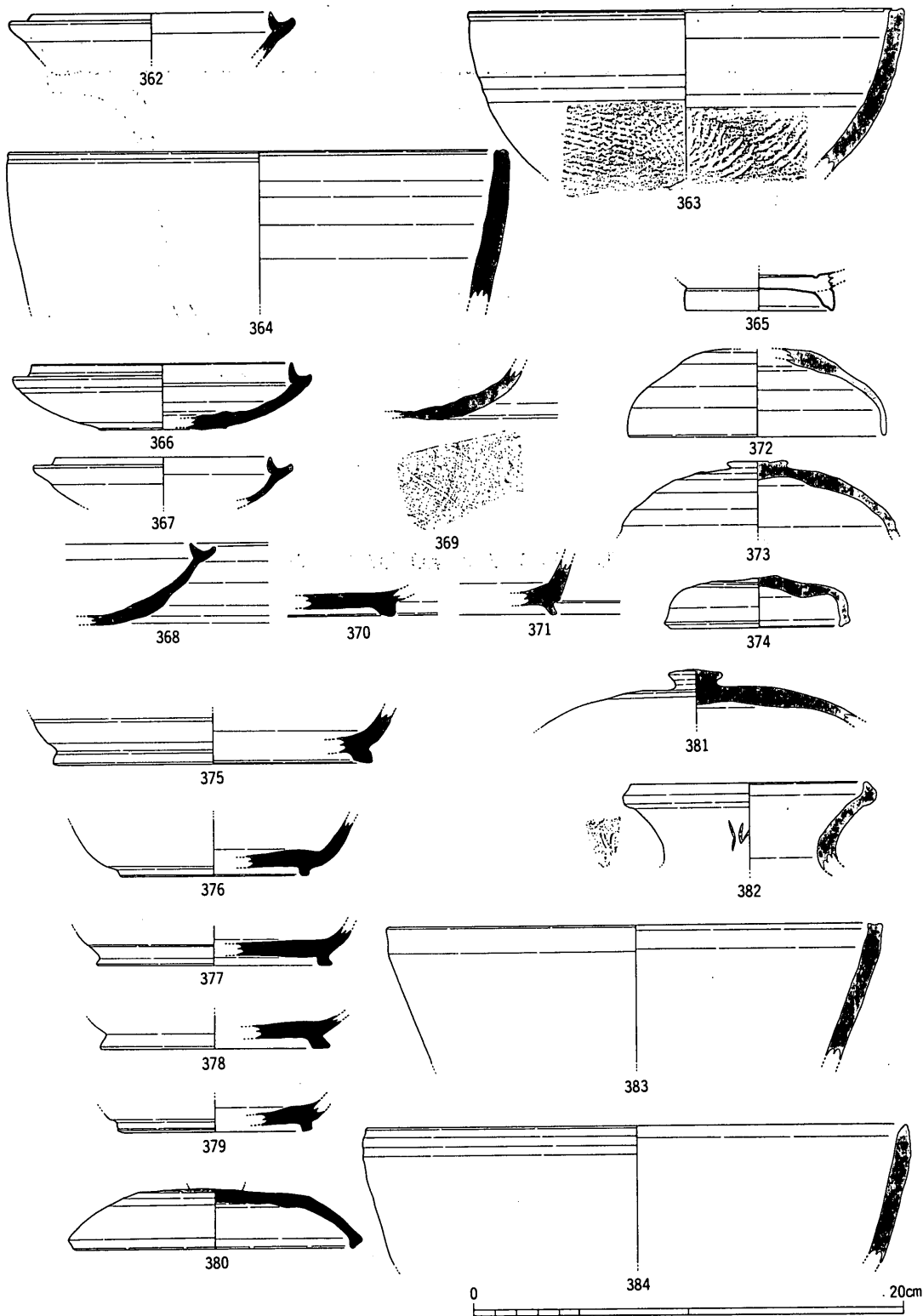


图60 R-10·R-11·S-10第5层出土土器实测图 (1/3)

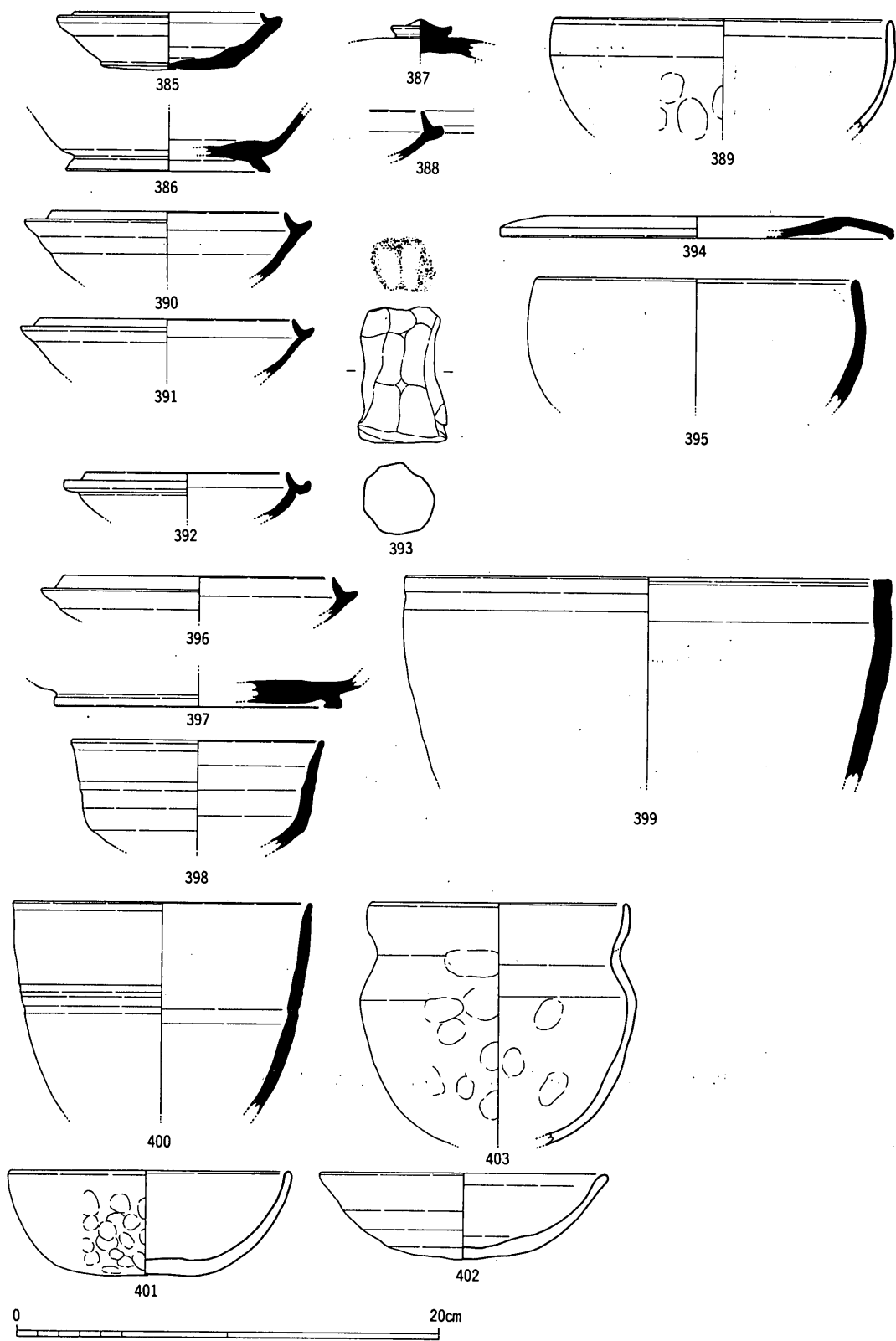
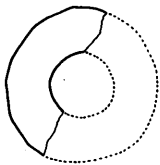
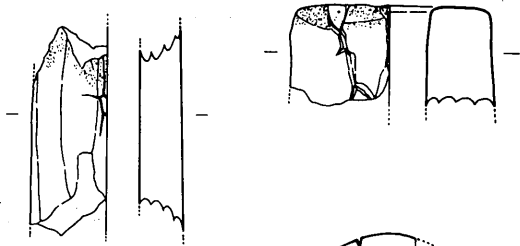
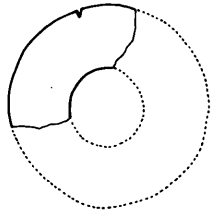


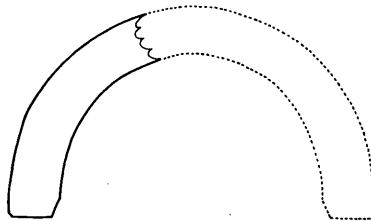
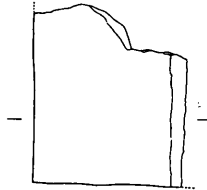
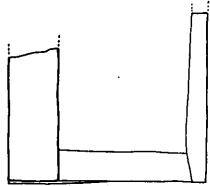
图61 S-11·T-10·U-10·U-11·V-10·V-11第5层出土土器实测图 (1/3)



405



406



404

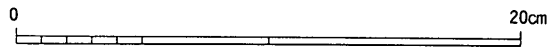
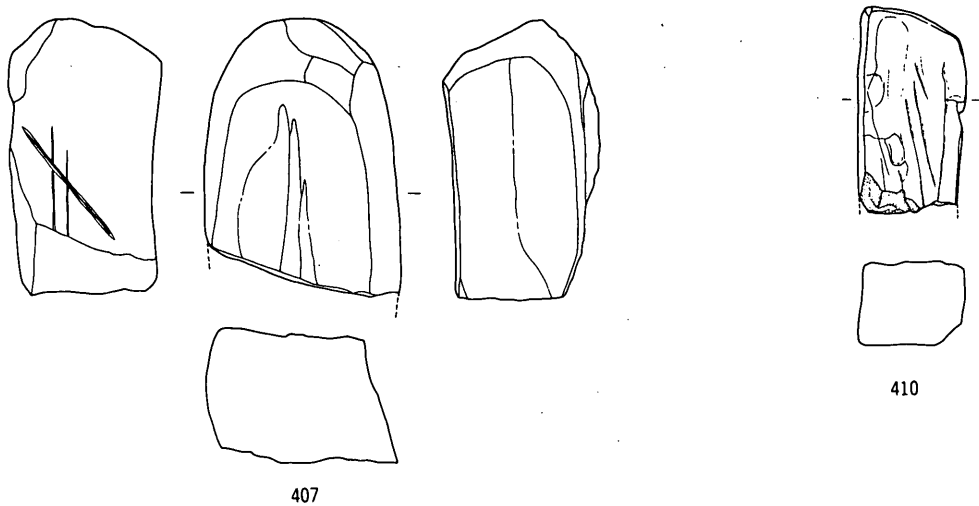
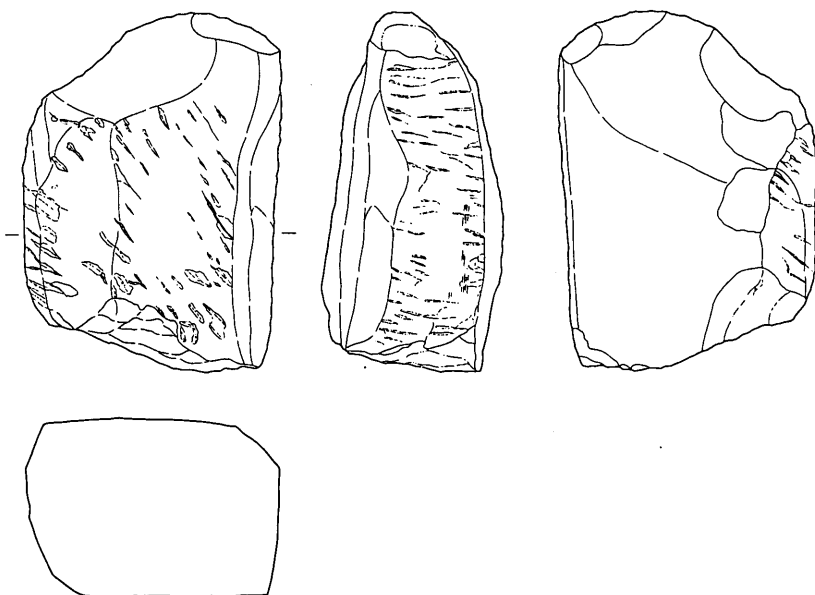


图62 S B 026, S D 020・044出土瓦・土製品実測図 (1/3)

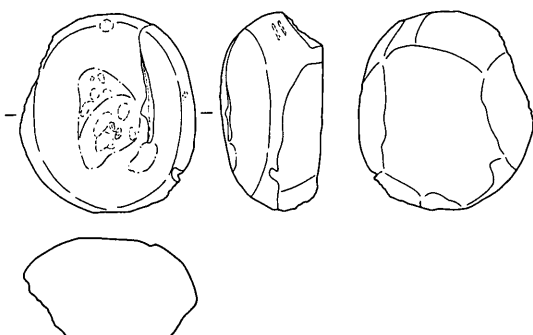


407

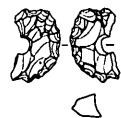
410



408



409



411

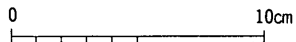


图63 S B 012 · 024, S D 029 · 034, S - 10第5层出土石製品実測图 (1/3)

表10 古墳時代後期土器類観察表

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色調	備考
S B01	1	須, 壺 B 3	回転ナデ	——	——	粗	灰白色 //	
S B03	2	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 暗青灰色 明青灰色	
S B03	3	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B03	4	須, 高杯 B 1	——	——	脚部内面回転ナデ 外面カキ目, 回転ナ デ	密	青灰色 暗青灰色 明青灰色	
S B03	5	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	粗	青灰色 暗青灰色 明青灰色	
S B03	6	須, 鉢 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B03	7	土, 壺 A	回転ナデ	内面ナデ 外面指頭(土痕)の上を ナデ	——	粗	にぶい赤褐色 // 黒色(芯状) 黄褐色 にぶい赤褐色	
S B03	8	土, 鍋 A	内面ハケ目 外面ハケ目の上を 回転ナデ	ハケ目	——	粗	青灰色 //	
S B05	9	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(右) 端部 (ヘラ切り)	粗	青灰色 //	
S B05	10	須, 杯身 B 5	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 //	
S B05	11	須, 杯身 B 5	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	粗	青灰色 //	
S B05	12	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	頂部ヘラ削り(方向 不明)	粗	灰白色 青灰色 //	
S B05	13	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B05	14	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 //	
S B04	15	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B05	16	須, 壺蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 明青灰色 //	
S B05	17	須, 高杯 B 2	——	——	脚部回転ナデ	粗	暗赤褐色(芯状) //	
S B05	18	須, 高杯 B 1	——	回転ナデ	脚部回転ナデ	粗	青灰色 //	
S B05	19	須, 高杯 B 1	——	回転ナデ	脚部回転ナデ	粗	灰白色 //	
S B05	20	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	粗	にぶい褐色(芯状) //	
S B05	21	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	粗	暗灰色 //	
S B05	22	須, 甌 B	——	回転ナデ	ヘラ削り(右)	密	灰白色 //	
S B05	23	須, 短頸壺 A 1	——	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	青灰色 //	
S B05	24	須, 鉢 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 明青灰色 //	
S B05	25	須, 鉢 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B05	26	須, 鍋 A	——	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	暗青灰色(芯状) //	
S B05	27	須, 壺 B 3	回転ナデ	内面同心内状明平 外面平行明平目	——	粗	灰白色 //	底部を中心に二 次焼成を受ける
S B05	28	土, 杯 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 //	口内外部にヘ ラ削り
S B06	29	土, 杯 C	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B06	30	須, 杯蓋 D	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	にぶい褐色 //	
S B07	31	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 //	
S B07	32	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B07	33	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 //	
S B07	34	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B07	35	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B08	35	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 //	
S B09	36	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り、後ナデ	粗	灰白色 //	
S B09	37	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B09	38	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	暗青灰色 //	
S B09	39	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 //	
S B09	40	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 //	
S B09	41	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	粗	青灰色 //	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色調	備考
S B09	42	須, 高杯 B 1	-----	-----	脚部回転ナデ	粗	灰白色 灰白色	
S B09	43	須, 壺 B 3	回転ナデ	-----	-----	粗	灰白色 灰白色	
S B09	44	上, 高杯 A	回転ナデ	内面ハケ目 外面回転ナデ	-----	粗	淡褐色 〃 〃	外面二次焼成を受ける
S B09	45	上, 高杯 A	回転ナデ	内面摩滅 外面回転ナデ	-----	粗	褐色 〃	
S B09	46	上, 小壺 A	回転ナデ	-----	-----	粗	褐色 明赤褐色 暗青灰色	
S B09	47	上, 小壺 A	回転ナデ	内面ナデ 外面ハケ目の上をナ デ	-----	粗	にぶい褐色 にぶい褐色 褐色(茶状)	
S B09	48	上, 甌 A	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	褐色 褐色 褐色	
S B010	49	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃	
S B011	50	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	青灰色(茶状)	
S B011	51	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃	
S B012	52	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 〃	
S B012	53	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃	
S B012	54	須, 有蓋高杯 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	青灰色(茶状) 青灰色 暗赤灰色(茶状)	
S B012	55	須, 高杯 B 1	-----	-----	脚部回転ナデ	粗	灰白色 〃 〃	
S B012	56	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃 〃	
S B012	57	上, 把手 A	-----	把手ナデ	-----	粗	浅黄褐色 〃 〃	
S B012	58	上, 把手 B	-----	把手ナデ	-----	粗	浅黄褐色 〃 〃	
S B012	59	上, 小中壺 A	(摩滅)	(摩滅)	-----	粗	黒色(茶状) にぶい黄褐色	外面二次焼成を受ける
S B012	60	上, 大壺 B 1	回転ナデ	内面滑溜(口縁の後ナデ 外面上半ハケ目下半 指面口縁の上をナデ	-----	粗	にぶい黄褐色 〃 〃	体部外面にヘラ 起り
S B013	61	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 〃 〃	
S B013	62	須, 壺 B 3	回転ナデ	内面同心目状明赤 外面平滑明赤目	-----	粗	暗青灰色(茶状) 灰白色 〃 〃	
S B015	63	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	黄灰色 灰白色 〃 〃	
S B015	64	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃 〃	
S B015	65	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃 〃	
S B015	66	須, 高杯	-----	-----	脚部回転ナデ	粗	青灰色 〃 〃	
S B015	67	須, 高杯 C	-----	-----	脚部回転ナデ	粗	青灰色 〃 〃	
S B015	68	上, 小壺 A	ナデ	ナデ	-----	粗	浅黄褐色 〃 褐色(茶状)	
S B017	69	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	明青灰色 〃 青黒色(茶状)	
S B019	70	須, 高杯 B 1	-----	-----	脚部回転ナデ	粗	青灰色 〃 〃	
S B019	71	須, 壺 B 2	回転ナデ	-----	-----	粗	青灰色 〃 〃	
S B020	72	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	青灰色 灰白色 灰白色 〃 〃	
S B020	73	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 灰白色 灰白色 暗青灰色 〃 〃	
S B020	74	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃 〃	
S B020	75	須, 杯蓋 D	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	青灰色 〃 〃	
S B020	76	須, 高杯 B 1	-----	-----	脚部回転ナデ	粗	灰白色 青灰色 灰白色 〃 〃	
S B020	77	須, 壺 B 2	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	粗	灰白色 〃 〃	
S B021	78	須, 甌 B	-----	回転ナデ	ヘラ削り(方向不明)	粗	暗青灰色 〃 青黒色 灰白色 青灰色 赤褐色	
S B022	79	須, 杯身 B 5	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	
S B023	80	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃 〃	
S B023	81	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	青灰色 〃 〃	
S B023	82	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	青灰色 〃 〃	
S B023	83	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	-----	粗	灰白色 〃 灰白色(茶状)	



遺物名 包含簡名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口 縁 部	体 部	底部・頂部	胎 土	色 調	備 考
S B 023	84	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	青灰色 // //	
S B 023	85	須, 杯身 B 5	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // 灰白色	
S B 023	86	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰色 // //	
S B 023	87	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // 灰色	
S B 023	88	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰色 // 灰白色	
S B 023	89	須, 高杯 A	————	————	脚部回転ナデ	粗	灰白色 // //	
S B 023	90	須, 高杯 A	————	————	脚部回転ナデ	粗	灰白色 // //	
S B 023	91	須, 甕 B 2	回転ナデ	————	————	粗	灰黄褐色(芯状) // 灰白色	
S B 023	92	須, 甕 B 2	回転ナデ	————	————	粗	暗灰色 // 灰白色(芯状)	
S B 023	93	須, 脚部	————	————	脚部回転ナデ	粗	灰白色 // //	
S B 023	94	土・(?)	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	にぶい褐色 // 浅黄褐色	
S B 024	95	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	明青灰色 // //	
S B 024	96	須, 杯身 C 2	————	回転ナデ	回転ナデ 貼付高台	粗, 黒色粒 (2コ)	灰白色 // //	
S B 021	97	須, 杯身 C 3	————	回転ナデ	回転ナデ 貼付高台	粗	暗青灰色 // //	
S B 024	98	須, 杯身 C 3	————	————	ヘラ切り 貼付高台	粗	暗青灰色 // //	
S B 024	99	土, 杯身	————	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青黒色 // //	
S B 024	100	須, 杯身	————	回転ナデ	ヘラ切り	粗	暗青灰色 // //	
S B 024	101	須, 杯身 B 4	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 024	102	須, 杯身 B 4	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 024	103	須, 杯身 B 4	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 024	104	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 024	105	須, 甕蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S B 024	106	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	暗青灰色 // 青灰色	
S B 024	107	須, 高杯 B 1	————	————	脚部回転ナデ	粗	灰白色 // 青灰色	
S B 026	108	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	明褐色(芯状) // 灰白色	
S B 026	109	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	110	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S B 026	111	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	————	密	灰白色 // //	
S B 026	112	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	暗青灰色 // //	
S B 026	113	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	114	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	115	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	————	密	青灰色 // //	
S B 026	116	須, 杯身 B 2	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰色 // //	
S B 026	117	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // 暗青灰色	
S B 026	118	須, 杯身 B 5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // //	
S B 026	119	須, 杯身 B 5	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	暗青灰色 // 青灰色	
S B 026	120	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰色 // //	
S B 026	121	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	122	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	密	青灰色 // //	
S B 026	123	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S B 026	124	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S B 026	125	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(方向不明)	粗	青灰色 // 灰色	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色調	備考
S B 026	126	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(方向不明) つまみは貼付	粗	青灰色 // //	
S B 026	127	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S B 026	128	須, 脚部	————	————	脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	
S B 026	129	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	130	須, 盤皿 A	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S B 026	131	須, 高杯 B 1	————	回転ナデ	脚部回転ナデ	粗	灰白色 // 灰色	
S B 026	132	須, 高杯 B 1	————	回転ナデ	脚部回転ナデ	粗	灰白色 // //	
S B 026	133	須, 高杯 B 1	————	————	脚部回転ナデ	粗	暗青灰色 // 灰赤色(芯状)	
S B 026	134	須, 鉢 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰赤色 // 灰黄色	
S B 026	135	須, 壺 B 2	回転ナデ	叩き	————	粗	青灰色 // //	
S B 026	136	須, 壺 B 2	回転ナデ	叩き	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	137	須, 脚部	————	————	脚部回転ナデ	粗	灰赤色 // //	
S B 026	138	土, 羽蓋 A	————	(磨滅)	————	粗	赤褐色 // //	
S B 026	139	須, 長頭壺 A	————	回転ナデ	————	粗	青灰色 // 暗青灰色(芯状)	
S B 026	140	須, 無頭壺 A	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // 灰赤色	
S B 026	141	土, 杯身 A	回転ナデ	内面ナデ 外面指頭圧痕の上を ナデ	ナデ	粗	褐色 // //	
S B 026	142	土, 小壺 A	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // //	
S B 026	143	製塩土器 A	内面指頭圧痕の上 をナデ 外面叩き	指頭圧痕の上をナデ	————	粗	暗赤褐色 // //	
S K 030	144	須, 壺	回転ナデ	内面叩きの後ナデ 外面平行叩き目	————	粗	青灰色 // //	
S K 033	145	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰白色 // 明黄褐色	
S K 033	146	須, 長頭壺 C	————	回転ナデ	————	粗	青灰色 // 暗青灰色	
S K 036	147	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(左) 端部はへら切り痕	粗	青灰色 // //	
S K 036	148	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	へら切り	粗	褐色 // 灰赤色	
S K 036	149	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(左)	粗	青灰色 // 暗赤褐色	
S K 036	150	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰赤色 // //	
S K 036	151	須, 高杯 B 1	————	————	へら削り(右) 脚部回転ナデ	粗	灰白色 // //	
S X 03	152	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	暗青灰色 // 暗赤褐色	
S X 03	153	須, 杯身 C 2	————	回転ナデ	へら切り 貼付高台	粗, 黒色粒 (2ゴ)	青灰色 // //	
S X 03	154	須, 杯蓋 D	回転ナデ	回転ナデ	へら切り後ナデ	粗	青黒色 // 明赤褐色(芯状)	
S X 03	155	須, 杯身 C 2	————	回転ナデ	回転ナデ 貼付高台	粗	灰白色 // 青灰色(芯状)	
S X 03	156	須, 壺 B 2	回転ナデ	————	————	粗	青灰色 // //	
S X 03	157	須, 壺 A 2	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面回転ナデ	————	粗, 黒色粒 (7ゴ)	明青灰色 // 青灰色(芯状)	
S X 02	158	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	灰赤色 // //	
S X 02	159	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // にまじり赤褐色	
S X 02	160	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	青灰色 // //	
S X 02	161	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	————	粗	暗青灰色 // //	
S X 02	162	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	————	粗, 黒色粒 (6ゴ)	青灰色 // 明青灰色	
S X 02	163	須, 高杯 A	————	————	脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	
S X 02	164	須, 壺 B	————	回転ナデ	へら削り(右)後ナ デ	粗	明青灰色 // 暗赤褐色(芯状)	
S X 02	165	須, 子持ち壺 A	————	回転ナデ	へら削り(右)	粗	青灰色 // 青黒色	
S X 02	166	須, 壺 B 2	回転ナデ	————	————	粗	青灰色 // //	
S X 02	167	須, 器台 A	————	内面同心円状叩きの 上を回転ナデ 外面回転ナデ、部分 的にへらミガキ	回転ナデ	粗, 黒色粒 (16ゴ)	青灰色 // //	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色調	備考
S X 02	168	土、大甕 B 2	回転ナデ		——	粗	灰白色 〃 黒色	
S X 05	169	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	粗	明青灰色 青灰色 青灰色 (芯状)	
S X 05	170	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切りの後ナデ	粗	明青灰色 〃	
S X 05	171	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 暗青灰色 青灰色	
S X 05	172	須、杯身	回転ナデ 受部に刻み目あり	回転ナデ	——	粗	灰白色 〃 暗青灰色 明青灰色	
S X 05	173	須、杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	〃 〃 青灰色 暗青灰色 青灰色	
S X 05	174	須、杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 暗青灰色 青灰色	
S X 05	175	須、小型鉢 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 〃 青灰色	
S X 06	176	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 青灰色 暗青灰色 明青灰色 〃	
S X 06	177	須、杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	〃 〃 灰白色 青灰色 灰白色	
S X 06	178	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 青灰色 灰白色	
S X 06	179	須、杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 〃 〃	
S X 06	180	須、高杯 A	——	——	脚部回転ナデ	粗	青灰色 〃 〃	
S X 06	181	須、脚部	——	——	脚部回転ナデ	粗	灰白色 〃 にぶい、黄色	
S X 06	182	須、長頭壺 A 2	——	回転ナデ	——	粗	赤灰色 〃 暗青灰色	
S X 06	183	土、小甕 B ナデ	ナデ	指頭は瓶の上をナデ	——	粗	にぶい、黄褐色 〃 黒色 (芯状)	
S X 07	184	須、杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(方向不明)	粗	青灰色 〃 〃	
S X 07	185	須、平瓶 A 口頭部	回転ナデ	——	——	粗	明青灰色 〃 〃	
S X 09	186	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 灰色 暗赤褐色 (芯状)	
S X 09	187	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	明青灰色 暗青灰色 暗黒色	
S X 09	188	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	明青灰色 暗青灰色 暗赤褐色 (芯状)	
S X 09	189	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 〃 〃	
S X 09	190	須、杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 〃 青黒色	
S X 09	191	須、杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 青灰色 〃	
S X 09	192	須、杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 〃 〃	
S X 09	193	須、杯身 C 3	——	回転ナデ	回転ナデ 貼付高音	粗	青灰色 〃 〃	
S X 09	194	須、杯蓋つまみ	——	——	つまみは貼付	粗	青灰色 〃 〃	
S X 09	195	須、杯蓋つまみ	——	——	つまみは貼付	粗	明青灰色 青黒色 にぶい、赤褐色	
S X 09	196	須、杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 〃 〃	
S X 09	197	須、杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	明青灰色 灰色 青黒色 青灰色 〃 〃	
S X 09	198	須、杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 〃 〃	
S X 09	199	須、杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 〃 〃	
S X 09	200	須、長頭壺 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	暗青灰色 明青灰色 灰白色 青黒色 (芯状)	
S X 09	201	須、脚部	——	——	脚部回転ナデ	粗	灰色 青灰色 灰白色	
S X 09	202	土、大甕 F	内面板ナデ 外面回転ナデ	内面板ナデ 外面ハケ目	(体部に同じ)	粗	にぶい、赤褐色 〃 黄褐色	外面二次焼成を受ける
S D 03	203	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗、黒色粒含む (6粒)	青灰色 〃 〃	
S D 03	204	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	外面ヘラ削り(左)	粗	灰白色 〃 暗青灰色 (芯状)	
S D 03	205	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	外面ヘラ削り(左)の後ヘラ切り、さらにナデ	粗、黒色粒含む (4コ)	青灰色 〃 灰白色 (芯状)	
S D 03	206	須、杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	外面ヘラ削り(左)の後、ヘラ切りの後	粗	青灰色 〃 暗青灰色	
S D 03	207	須、杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り、後をナデ	粗	暗青灰色 青灰色 暗青灰色	
S D 03	208	須、高杯 B 1	回転ナデ	回転ナデ	外面、ヘラ削り(左)	粗	灰白色 〃 〃	
S D 03	209	須、高杯 B 1	——	脚部回転ナデ	——	粗	灰色 〃 青灰色	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎上	色調	備考
S D03	210	須, 甌 口頭部	回転ナデ	——	——	粗	灰白色 暗青灰色	
S D03	211	須, 平瓶 A	——	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	青灰色 青黒色 暗赤褐色(芯状)	
S D03	212	須, 甌 A 3	回転ナデ 頭部はヘラミガキ の上を回転ナデ	——	——	粗	青黒色 暗赤褐色(芯状)	
S D03	213	土, 支脚 A	上面指頭圧痕の後 ナデ	指頭圧痕の後、ナデ 本整形の六角形につ くる	下面指頭圧痕の後ナ デ	粗	外面褐色 断面褐色	
S D04	214	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // //	
S D04	215	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(右)	粗	暗青灰色(芯状) 青灰色	
S D04	216	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	青灰色 // //	
S D04	217	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // //	
S D04	218	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰色 // 青灰色 灰色	
S D04	219	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // 暗青灰色(芯状)	
S D04	220	須, 杯蓋	——	回転ナデ	頂部ヘラ削り(左)	粗	青灰色 // 暗青灰色	
S D04	221	須, 小型鉢 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 // 青灰色 暗赤褐色 赤褐色	内面自然釉(オ リーフ灰色)
S D04	222	土, 小壺 C	回転ナデ 内面ハケ目	外面ナデ 内面指頭圧痕	——	粗	青灰色 暗赤褐色 赤褐色	
S D04	223	土, 甌 B	回転ナデ	外面回転ナデ 内面指頭圧痕の後回 転ナデ	——	粗	黄褐色 // 黒色(芯状)	
S D018	224	須, 壺蓋	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D018	225	須, 甌 B 2	回転ナデ	——	——	粗	灰白色 // 暗青灰色 灰白色	
S D018	226	須, 甌 A 1	回転ナデ 外面細溝と列点文と 裾面文をほどこす	——	——	粗	青灰色 // 暗青灰色(芯状) 青灰色	
S D019	227	須, 高杯	——	脚部回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	228	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	暗青灰色 // 暗褐色 黒色	
S D020	229	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰白色 // //	外面に緑色の自 然釉
S D020	230	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // 灰色 暗青灰色	
S D020	231	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // //	
S D020	232	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // 青黒色 灰白色	
S D020	233	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	234	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	235	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	褐色 // 暗褐色 黒色(芯状)	かえり部分の成 形を途中でやめ ている 焼成も不良である
S D020	236	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(右)後、 部分的にヘラ切り	粗	青灰色 // //	
S D020	237	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰白色 // に濃い黄褐色	
S D020	238	須, 杯身 B 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // //	
S D020	239 -1	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	暗青灰色 // 青灰色 青黒色 青灰色	
S D020	239 -2	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(左)	粗	白色 // //	
S D020	240	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(左)後、 部分的にヘラ切り	粗	灰白色 // //	
S D020	241	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	暗青灰色 // 青黒色 青灰色 暗青灰色	
S D020	242	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // 暗青灰色 青灰色	
S D020	243	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青黒色 // //	
S D020	244	須, 杯蓋	——	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰白色 // 灰色	頂部外面にヘラ 記号
S D020	245	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	246	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰白色 // 灰色	
S D020	247	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	248	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // //	
S D020	249	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	250	須, 甌 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り(右) 脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色・調	備考
S D020	251	須, 高杯 B 1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り 脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	
S D020	252	須, 高杯 B 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(右) 脚部回転ナデ	粗	青灰色 灰白色(芯状)	
S D020	253	須, 高杯 B 1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り 脚部回転ナデ	粗	灰色 // //	
S D020	254	須, 高杯	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(右) 脚部回転ナデ	粗	灰白色 褐色(芯状)	
S D020	255	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	粗	灰白色 にぶい黄褐色(芯状)	
S D020	256	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	密	青灰色 // //	
S D020	257	須, 高杯 A	——	——	脚部回転ナデ	粗	暗青灰色(芯状) 明青灰色 暗青灰色	
S D020	258	須, 高杯 B 1	——	——	脚部回転ナデ	粗	青黒色 // //	
S D020	259	須, 甕 B	——	回転ナデ	へら削り(左)	粗	暗赤色 青灰色 // //	
S D020	260	須, 甕 A	——	回転ナデ	へら削り(左)	粗	暗青灰色 // //	
S D020	261	須, 長頭甕 A 2	——	回転ナデ	へら削り(右) 脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	
S D020	262	須, 長頭甕 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(左)	粗, 黒色粒 (2つ)	灰色 // //	
S D020	263	須, 長頭甕 A 1	——	内面ナデ 外面上位1/3は櫛目、 中位1/3は回転ナデ、 下半はへら削り(左) の後櫛目	へら削り(左) 脚部回転ナデ	粗	白色 // //	
S D020	264	須, 脚部	——	——	脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	
S D020	265	須, 脚部	——	——	脚部回転ナデ 長方形の透かしあり	密	灰色 // //	内外全面にオリ ープ灰色の自然 軸がある
S D020	266	須, 脚部	——	——	脚部回転ナデ	粗	灰白色(芯状) 明青灰色 // //	
S D020	267	須, 脚部	——	回転ナデ	脚部回転ナデ	粗	青灰色 // //	
S D020	268	須, 短頭甕 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D020	269	須, 短頭甕 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(方向不明)	粗	灰白色 // //	
S D020	270	須, 短頭甕 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(左)	粗	明青灰色 灰色 // //	
S D020	271	須, 甕 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 青黒色 青灰色 // //	
S D020	272	須, 甕 B 1	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面平行叩きの上を カキ目	——	粗	暗青灰色 // //	
S D020	273	須, 甕 B 1	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面平行叩きの上を カキ目	——	粗	灰色 青黒色(芯状) 青灰色 // //	
S D020	274	須, 甕 B 2	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面平行叩き痕の後 回転ナデ	——	密	青灰色 // //	
S D020	275	須, 甕 B 3	回転ナデ	——	——	粗	灰色 暗青灰色 // //	口頸部外面にへ ら記号
S D020	276	須, 甕 B 1	回転ナデ	——	——	粗	明青灰色 // //	口頸部外面にへ ら記号
S D020	277	土, 大甕 A	回転ナデ	ナデ	——	粗	褐色 // //	体部下半スス付 着
S D020	278	土, 大甕 B 1	回転ナデ	内面指頭圧痕の上を 回転ナデ	——	粗	にぶい褐色 // //	胎土中に金銀埋 片を多量に含む
S D020	279	土, 大甕 A	回転ナデ	内面ハケ目 回転ナデ	——	粗	灰色(芯状) 黒色 // //	
S D020	280	土, 大甕 A	ナデ	ナデ	——	粗	浅黄褐色 // //	体部外面スス付 着
S D020	281	土, 小中甕 B	回転ナデ	内面板ナデ 外面上半指頭圧痕の 上をナデ、下半へら 削りの上をナデ	(体部に同じ)	粗	褐色 // //	
S D020	282	土, 小中甕 A	回転ナデ	内面指頭圧痕の上を 板ナデ 外面指頭圧痕の上を ハケ目	(体部に同じ)	粗	褐色 // //	
S D020	283	土, 鍋 B	内面ハケ目 外面回転ナデ	内面ナデ 外面ハケ目	——	粗	浅黄褐色 // //	体部外面スス付 着
S D020	284	土, 把手 A	——	把手部ナデ	——	粗	にぶい褐色 // //	
S D020	285	製塩土器 B	内面指頭圧痕の上 をナデ 外面ナデ	内面指頭圧痕の上を ナデ 外面ナデ	——	粗	にぶい褐色 赤褐色 灰色(芯状) // //	全体に二次焼成 を受ける
S D020	286	土, 杯身 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	白色 // //	
S D020	287	土, 高杯 A	(磨滅)	(磨滅)	(磨滅)	粗	にぶい黄褐色 浅黄褐色 // //	
S D020	288	土, 高杯 A	——	——	脚部内面ナデ、しぼ り目 外面回転ナデ	粗	褐色 // //	
S D020	289	土, 大甕	内面回転ナデ 外面ナデ	——	——	粗	黒色(芯状) 浅黄褐色 褐色 // //	
S D020	290	土, 大甕 A	回転ナデ	内面上半回転ナデ 下半は板ナデ 外面板ナデ	——	粗	褐色 // //	体部外面スス付 着
S D020	291	土, 大甕 A	内面回転ナデ 外面指頭圧痕の上 をナデ	内面指頭圧痕の上を 板ナデ 外面指頭圧痕の上を ナデ	(体部に同じ)	粗	褐色(芯状) 赤褐色 // //	

遺物名 包含層名	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口 縁 部	体 部	底部・頂部	胎 土	色 調	備 考
S D 022	292	須. 壺 B	—	回転ナデ	へら削り(左)	粗	青灰色 // 暗赤褐色(芯状)	
S D 025	293	須. 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	明青灰色 // 青灰色	
S D 027	294	須. 高杯 B 1	—	回転ナデ	—	粗	明青灰色 // 青灰色	
S D 027	295	須. 壺 B 1	回転ナデ	—	—	粗	青灰色 // 灰白色	
S D 027	296	土. 鉢 A	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	青灰色 // 浅黄褐色 // 褐色	外面二次焼成を 経て赤褐色
S D 027	297	土. 鍋 A	内面ハケ目 外面ハケ目の上を 回転ナデ	内面ハケ目 外面ハケ目の上をへ ラミガキ ナデ	—	粗	浅黄褐色 // 褐色 // にぶい褐色	外面全体にスス 付着
S D 027	298	土. 小中壺 A	—	—	—	粗	灰褐色 // にぶい褐色 // 暗褐色	
S D 028	299	須. 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り	粗	青灰色 // //	底部外面にへら 記号
S D 028	300	須. 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り	粗, 黒色粒 (19ゴ)	明青灰色 // 青灰色 // にぶい赤褐色(芯状) // その両側に黒色附	
S D 028	301	須. 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(右)後、 部分的にナデ	粗	青灰色 // //	
S D 028	302	須. 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	暗青灰色 // //	
S D 028	303	須. 短頭壺 A 2	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(右)	粗, 黒色粒 (13ゴ)	明青灰色 // // 暗青灰色	
S D 028	304	須. 壺 A 1	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面平行叩き目	—	粗	明青灰色 // 青灰色 // 暗赤褐色(芯状)	
S D 028	305	土. 大壺 A	回転ナデ	内外面指頭圧痕の後 ナデ	—	粗	灰白色 // 灰色	
S D 028	306	土. 小中壺 A	回転ナデ	内面(磨滅) 外面指頭圧痕	—	粗	にぶい褐色 // にぶい赤褐色	
S D 028	307	土. 甌 A	回転ナデ	内面(磨滅) 外面指頭圧痕の後ナ デ	—	粗	明赤褐色 // にぶい褐色	
S D 029	308	須. 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(右)	粗	青灰色 // 暗青灰色	
S D 029	309	須. 高杯 B 1	—	回転ナデ	へら削り(左)		青灰色 // 暗青灰色	
S D 029	310	須. 高杯 B 1	—	回転ナデ	—	粗, 黒色粒 (9ゴ)	青灰色 // //	
S D 029	311	須. 高杯 B 1	—	回転ナデ	—	粗	暗青灰色 // //	
S D 029	312	須. 高杯 A	—	回転ナデ	—	粗, 黒色粒 (11ゴ)	暗青灰色 // 青灰色 // 緑褐色(芯状)この両 側は暗赤褐色附	
S D 029	313	須. 壺 B	—	回転ナデ	へら削り(右)	粗	暗青灰色 // //	
S D 029	314	須. 短頭壺 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら削り(不定方向) の後ナデ	粗	明青灰色 // // にぶい赤褐色(芯状)	
S D 029	315	須. 横瓶 A	回転ナデ	内面同心円状叩き	—	粗	暗青灰色 // // にぶい赤褐色(芯状)	
S D 029	316	須. 壺 B 2	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面叩きの後カキ目、 さつにナデ	—	粗	青灰色 // //	
S D 029	317	土. 大壺 B 1	内面回転ナデ 外面ナデ	内面板ナデ 外面ナデ	—	粗	淡黄褐色 // 灰褐色 // 明赤褐色	外面全体にスス 付着
S D 029	318	土. 鍋 B	内面ハケ目 外面回転ナデ	内面ナデ 外面ハケ目	—	粗	浅黄褐色 // // //	
S D 030	319	須. 壺 B 2	回転ナデ	—	—	粗	明青灰色 // // //	
S D 031	320	須. 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	明青灰色 // // //	
S D 031	321	須. 壺	—	内面同心円状叩き 外面平行叩き目の 後、カキ目	—	粗	青灰色 // // //	
S D 031	322	土. 大壺 A	内面(磨滅) 外面指頭圧痕の後 回転ナデ	内面ナデ 外面ハケ目	—	粗	にぶい褐色 // 明赤褐色	
S D 031	323	土. 大壺 B 2	回転ナデ	内面ナデ 外面ハケ目	—	粗	褐色 // //	二次焼成を受け る
S D 031	324	土. 大壺 B 1	(磨滅)	内面(磨滅) 外面ハケ目	—	粗	淡黄色 // // 赤褐色	
S D 032	325	須. 杯身 B <sub>1</sub>	回転ナデ	回転ナデ	へら切り	粗	明青灰色 // // 青灰色	
S D 035	326	須. 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	灰白色 // // //	
S D 034	327	土. 大壺 C	回転ナデ	指頭圧痕の後ナデ	指頭圧痕の後ナデ	粗	褐色 // // //	
S D 036	328	須. 壺 B 2	回転ナデ	内面同心円状叩き 外面平行叩き目	—	粗	暗青灰色 // // //	
S D 036	329	須. 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	青灰色 // // //	
S D 037	330	須. 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り	粗	灰白色 // // //	
S D 037	331	須. 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	青灰色 // // //	
S D 037	332	須. 杯身 B <sub>2</sub>	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	明青灰色 // // 青灰色	
S D 037	333	須. 杯身 B	回転ナデ	回転ナデ	—	粗	青灰色 // // //	

遺構名 包含層番号	遺物 番号	材質・器種 タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色調	備考
S D037	334	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	明青灰色 // //	
S D037	335	須, 杯蓋つまみ	——	——	頂部内面ナデ 外面回転ナデ	粗	暗青灰色	
S D040	336	須, 杯蓋 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D040	337	須, 鉢 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // //	
S D044	338	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D044	339	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // // 灰黄色 (芯状)	
S D044	340	須, 杯身 B 3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰白色 // //	
S D044	341	須, 杯身 C 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り (左) 貼付高台	粗	黒色 // // にぶい黄褐色	
S D044	342	須, 杯身 C 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 貼付高台	粗	灰白色 // // 灰白色	
S D044	343	須, 杯身 C 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り (左) 後、 ヘラ切り 貼付高台	粗	暗青灰色 // //	
S D044	344	須, 杯身 C 2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰色 // //	
S D044	345	須, 杯身 C 2	——	回転ナデ	回転ナデ 貼付高台	粗	灰色 // //	
S D044	346	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D044	347	須, 杯蓋 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // // 灰白色	
S D044	348	須, 杯蓋 C	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S D044	349	須, 杯蓋 D	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り (左)	粗	暗青灰色 // //	
S D044	350	須, 杯蓋 E	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り つまみは貼付	粗、黒色粒 (5コ)	灰白色 // // 暗青灰色	
S D044	351	土, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	——	密	褐色 // // 浅黄褐色 (芯状)	
S D044	352	須, 高杯	——	回転ナデ	——	粗	灰白色 // // 灰白色	
S D044	353	須, 長頭樽 B	頸部は回転ナデ	回転ナデ 内面にしぼり目	——	粗、黒色粒 (6コ)	灰白色 // // 緑灰色 // // 灰白色	
S D044	354	須, 壺 B 2	回転ナデ	——	——	粗	灰白色 // //	
S D044	355	土, 杯 C	回転ナデ	内面右上がりのヘラ ミガキ 外面横方向のヘラミ ガキ	回転ナデ 貼付高台	密	褐色 // // にぶい褐色 (芯状)	
S D044	356	土, 杯 B	内面回転ナデの 後、ヘラミガキ 外面回転ナデ	——	——	粗	褐色 // //	
S D044	357	土, 高杯 B	——	脚部内面回転ナデ、 外面カキ目、柱状部 は板ナデ	——	密	褐色 // // 浅黄褐色	
S D044	358	土, 大甕 D	回転ナデ	内面上半ハケ目、下半 指頭圧痕の上をナデ 外面上半ハケ目、下 半磨滅	——	粗	褐色 // //	体部外面黒変
S D044	359	土, 把手 A	——	指頭圧痕の後ナデ	——	粗	黄褐色 // // 灰色 // // にぶい褐色	
S D044	360	土, 大甕 E	回転ナデ	内面回転ナデ 外面平行叩き目の上 にカキ目	——	粗	褐色 // // 浅黄褐色 (芯状)	
S D044	361	土, 鍋 C	回転ナデ	——	——	粗	明赤褐色 // // 赤褐色 // // 青灰色	口縁部・体部上 位1/4の外面に スス付着
R-10 第5層	362	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
R-10 第5層	363	須, 鉢 A 2	回転ナデ	内面上半回転ナデ、 下半同心円状叩き 外面上半回転ナデ、 下半格子目状叩き	——	粗	青灰色 // // 暗青灰色 (芯状)	
R-10 第5層	364	須, 甌 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 // //	
R-10 第5層	365	緑釉陶器杯	——	回転ナデ	ヘラ切り 高台は貼付付け	微小な白色砂 粒を多く含む	灰色 (芯状) // // 釉は暗緑色 // // 露胎部分・断面は橙 色	
R-11 第5層	366	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り (右) 後、 部分的にヘラ切り	粗	青灰色 // //	
R-11 第5層	367	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
R-11 第5層	368	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	青灰色 // //	
R-11 第5層	369	須, 杯身	——	回転ナデ	ヘラ削り (方向不明)	粗	青灰色 // //	底部外面にヘラ 記号
R-11 第5層	370	須, 杯身	——	——	ヘラ削り (方向不明)	粗	青灰色 // // 緑灰色	
R-11 第5層	371	須, 杯身	——	回転ナデ	回転ナデ 貼付高台	粗	青灰色 (芯状) // // 灰色 // // 灰白色	
R-11 第5層	372	須, 杯蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り (左) 後、 部分的にヘラ切り	粗	灰白色 // // 灰色 (芯状)	
R-11 第5層	373	須, 杯蓋	——	回転ナデ	ヘラ削り (左)	粗	明青灰色 // // 青灰色 // // 灰白色 // //	
R-11 第5層	374	須, 甕蓋 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	灰白色 // //	

遺構名 包含層	遺物 番号	材質・器種 ・タイプ名	口縁部	体部	底部・頂部	胎土	色調	備考
S-10 第5層	375	須, 杯身 C 2	——	回転ナデ	ヘラ削り(左) 貼付高台	粗	青灰色 // //	
S-10 第5層	376	須, 杯身 C 2	——	回転ナデ	ヘラ削りの上をナデ	粗	灰白色 // //	
S-10 第5層	377	須, 杯身 C 2	——	回転ナデ	ヘラ削りの上をナデ 貼付高台	粗	灰白色 // //	
S-10 第5層	378	須, 杯身 C 3	——	回転ナデ	回転ナデ 貼付高台	粗	青灰色 // //	
S-10 第5層	379	須, 杯身 C 2	——	回転ナデ	ヘラ削りの上をナデ 貼付高台	粗	灰白色 青灰色 芯状に灰白色との両 側に明黄褐色	
S-10 第5層	380	須, 杯蓋 D	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削りの上をナデ つまみは貼付	粗	暗青灰色 // //	
S-10 第5層	381	須, 杯蓋	——	回転ナデ	頂部ヘラ削り(右)	粗	青灰色 // //	
S-10 第5層	382	須, 壺 B 2	回転ナデ	——	——	粗	灰白色 // //	口頸部外面にヘ ラ記号
S-10 第5層	383	須, 甌	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S-10 第5層	384	須, 鉢 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色(芯状) 灰色 // //	
S-11 第5層	385	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	粗	灰白色 青灰色 灰色 灰褐色(芯状)	
S-11 第5層	386	須, 杯身 C 2	——	回転ナデ	ヘラ削りの上をナデ 貼付高台	粗	暗青灰色 // //	
S-11 第5層	387	須, 杯蓋	——	——	頂部ヘラ削り(右) つまみは貼付	粗	青灰色 灰白色 // //	
S-11 第5層	388	須, 杯身	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
S-11 第5層	389	上, 鉢 A	回転ナデ	内面ナデ 外面指頭圧痕の上を ナデ	——	粗	浅黄褐色 // //	
T-10 第5層	390	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	明青灰色 暗青灰色 明青灰色	
T-10 第5層	391	須, 杯身 A 1	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
U-10 第5層	392	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 暗青灰色 青灰色	
U-10 第5層	393	上, 支脚	上面ナデ、2本の 凹線	指頭圧痕の後ナデ	下面ナデ平坦	粗	褐色 // //	
U-11 第5層	394	須, 杯蓋 D	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
U-11 第5層	395	須, 鉢 B	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 // //	
V-11 第5層	396	須, 杯身 A 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
V-11 第5層	397	須, 杯 C 2	——	——	回転ナデ	粗	灰色 // //	
V-11 第5層	398	須, 杯 B 2	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰色 // //	
V-10 第5層	399	須, 甌	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	灰白色 灰白色 灰色 灰白色	
V-11 第5層	400	須, 腕 A	回転ナデ	回転ナデ	——	粗	青灰色 // //	
V-11 第5層	401	上, 杯身 A	回転ナデ	指頭圧痕の上をナデ	指頭圧痕の上をナデ	粗	暗青灰色(芯状) に深い黄褐色	
V-11 第5層	402	上, 杯身 A	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	粗	に深い褐色 灰白色	
V-11 第5層	403	土, 小中壺 A	回転ナデ	指頭圧痕の上をナデ	——	粗	褐色 // //	



### 三 奈良時代以降の遺構と遺物

#### 1 遺 構

遺構は、掘立柱建物跡16棟、土坑20基余、井戸1基、溝状遺構14条、性格不明遺構3基、ピット数百穴、焼土塊1基を検出した。

##### (1) 建物跡

S B 027 1×2間の掘立柱建物跡である。床面は、1辺約3.2mの方形を呈する。ピットは1辺0.7~0.8mの隅丸方形の掘り形をもち、埋土は黒褐色土層である。柱根跡は径約0.2mである。遺物は、外面にハケ目を施す土師器体部片が1点出土したのみである。

S B 028 1×2間の掘立柱建物跡である。ピットは径0.3~0.45mの円形の掘り形をもつ。埋土は淡褐色土層である。出土遺物はない。

S B 029 1×1間の掘立柱建物跡である。ピットは径0.3~0.5mの円形の掘り形をもつ。根石をもつものがある。遺物はS P 61・78・81・84から土師質土器の小片が出土した。

S B 030 南半は、生活畦畔があったため調査できなかった。1×2間の掘立柱建物跡であろう。ピットは径0.3~0.36mの円形の掘り形をもつ。出土遺物はない。

S B 031 1×1間の掘立柱建物跡である。ピットは径0.27~0.38mの円形の掘り形をもつ。S P 07から土師質土器の小片が出土した。

S B 032 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 033と重なり合う。床面は約3.7mの方形を呈する。ピットは径0.2~0.5mの円形の掘り形をもつ。S P 285から土師質土器の小片が出土した。

S B 033 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 032・035と重なり合う。床面は1辺約3.2mの方形を呈する。ピットは径0.25~0.5mの円形の掘り形をもつ。S P 282・289から土師質土器の小片が出土した。

S B 034 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 035と重なり合う。ピットは0.18~0.28mの円形の掘り形をもつ。S P 307から土師質土器の小片が出土した。

S B 035 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 033・034・036と重なり合う。S D 016を切っている。ピットは径0.15~0.56mの掘り形をもつ。S P 273から土師質土器杯Aが1点出土している。S P 281から土師質土器の小片が出土した。

S B 036 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 035・037と重なり合う。S D 016を切っている。ピットは径0.28~0.47mの円形の掘り形をもつ。S P 215から土師質土器皿Aが1点、S P 292から同皿A・杯Aが各1点出土した。S P 265・293から土師質土器小片が出土した。

S B 037 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 036と重なり合う。S D 016を切る。ピットは径

0.2～0.4mの円形の掘り形をもつ。S P 258から土師質土器皿A・Nと杯A・Dが各1点、土壁破片が数点出土した。S P 299から土師質土器皿Aが1点出土した。

S B 038 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 039・S K 024と重なり合う。S D 011に切られている。ピットは約0.38mの円形の掘り形をもつ。S P 180から土師質土器杯Aが1点、S P 194から同皿A・杯Aが各1点、土壁破片が1点出土した。

S B 039 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 038・040と重なり合う。ピットは径0.18～0.24mの円形の掘り形をもつ。S P 152から土師質土器杯Aが、S P 176から同皿Cが各1点出土した。

S B 040 1×1間の掘立柱建物跡である。S B 039と重なり合う。ピットは径0.18～0.38の円形の掘り形をもつ。S P 155から土師質土器杯Aが、S P 172・178からともに同皿A・杯Aが各1点ずつ出土した。

S B 041 1×1間の掘立柱建物跡である。S K 022・023と重なり合う。ピットは径0.22～0.36mの円形の掘り形をもつ。S P 166から土師質土器皿Aが1点、杯Aが2点、椀C<sub>1</sub>が1点出土した。

S P 141から土師質土器杯Aが1点出土した。

S B 042 2×2間、総柱の礎石建物跡である。西半が調査区外であるため規模は大きくなる可能性をもつ。S D 012と重なり合う。S P 226・230・233の礎石は失われていた。礎石は径約0.7m、深さ約0.2mの断面皿形のピット内に、水平な面を上にした石の大部分を埋めていた。詰石をもつものもある。礎石は花崗岩で、調整を加えた跡がみられる。埋土は、茶灰色土層である。S P 228から土師質土器皿A、S P 230から同皿A・杯A、S P 233から同皿A、S P 238から同皿Nが各1点ずつ出土した。

## (2) 土坑

S K 018 1.25×1.5mの隅丸長方形の土坑である。掘り形の周囲には石敷きを行っている。石は砂岩の円礫が多い。土坑内は砂礫を多く含む土で埋まっていた。床面はほぼ水平で人頭大の花崗岩が5個、投げ込まれた状態で出土した。埋土中から完形に近い土師質土器杯C<sub>1</sub>などが3個体分出土した。

S K 024 1×1.1mの、隅丸方形の土坑である。床面は傾斜し、断面は不整形である。埋土は焼土と炭片を含む黒茶色土である。埋土中から土師質土器皿・杯・椀の破片が出土した。

S K 025 平面形は0.77×1.03mの隅丸長方形である。断面は階段状を呈し、南辺寄りの部分が深くなっている。深さは、0.58mである。埋土は、浅い方は茶灰色土層で基盤土層と類似している。深い方は焼土・炭片を含む黒茶色土層である。浅い方は掘削後、直ぐに埋められたものであろう。埋土中から土師質土器皿・杯・椀の破片が出土した。

S K 026 平面形は0.66～0.70mの隅丸方形である。深さは0.77mである。壁面は垂直に近い角度で上がる。床面は傾斜している。埋土は、断面を斜めに切るように2分される。下層の方は茶白色土層で基盤土層に類似している。上層は、焼土・炭片を含む黒茶色土層である。下層土は、土

坑掘削後すぐに埋めたものであろう。上層土中から完形の鞆の羽口が1点出土した。上下層から土師質土器皿・杯破片が出土した。

S K027 1.22×1.5mの隅丸長方形の土坑である。南西隅は試掘トレンチで失った。深さは約5cmで浅い。埋土は花崗岩質の砂礫を多く含む。遺物は、土師質土器の小片のみである。

S K028 平面形は0.8～0.95mの隅丸長方形である。断面U字形で、床面は傾斜している。深さは、0.75mである。埋土は2層に分かれる。その境は不整形である。おそらく、土坑掘削後に、掘り上げた基盤土で直ぐに埋め、さらに、その後、深さ0.65mの土坑を再び掘ったのであろう。上層土は焼土・炭片を含む黒茶色土である。上層土中から土師質土器皿・杯の破片を出土した。

### (3) 焼土塊

S D014の東肩付近から焼土塊が出土した。0.24×0.54mの不整形、厚さは約5cmである。これは包含物ではなく、この場所で焼成を受けて固結したものである。焼土塊の周辺には焼成されていない暗黄色粘土層が敷かれていた。

### (4) 井戸

S E01 石組みの井戸で、井筒に桶を利用する。検出面での石組みは内径は約1.15m、下方に行くにしたがい細まり、下端部内径は0.88mである。残存する深さは約2.6m。石材は、花崗岩が最も多く、ほかに砂岩もある。石は小口積みにして、右上り、右廻りの螺旋状に積み上げている。その場合、大小の石を区別し、1周毎に大小を変えているのが伺える。井筒の桶は上端部内径約0.82m、下端部内径0.62m、深さ0.57mである。底板はもちろんない。井戸掘り形は検出面で径約4mの円形で、そこから次第に径を減じて、石組み下端部で石組みの外径と同じになる。井筒部では桶が入るだけの大きさのものになっている。地下水は、井筒上端部付近から湧き出し始める。掘り形内埋土は、掘削時に出土した土をそのまま入れているため、黒褐色土に青黒色土が斑状に混じっている部分が多い。石組み内・井筒内の埋土は砂質土層でその中には多量の石が投げ込まれた状態で入っていた。

遺物は、石組み・井筒の埋土中から須恵器と土師質土器の破片が多量に出土した。掘り形内からは、多量の須恵器破片とともに磨製石斧が出土した。須恵器が多いのは、掘り形が古墳時代後期の包含層を掘り抜いているためであろう。

### (5) 溝状遺構

S D02北半 北部は生活道路があったために調査できなかった。南端も検出できなかった。おそらく、鍵形に屈曲する用水路下の未調査部分にS D02南半（近世溝）との境があるものと推定される。検出長約14.5m、巾約3.1m、深さ約0.73m、断面は皿形である。埋土は、褐色砂質土層と黒灰色粘質土層とが上下層としてある。両層は簡単・明瞭に分層できる。溝の中程部分には、溝を横断する2列の石積み遺構が存した。両石積み遺構は、溝を横断して溝の両肩に至る。石積み巾は、北側のものが約0.6m、南側のものが0.7m、石積みの上面は溝の肩部の高さとほぼ同じで

ある。両石積みの間には巾約0.8mの空間がある。石積みは、前述の黒灰色粘質土層中に縦割りの木材を置いて基底板とする。その上に土を混ぜて石を積み上げたものである。基底板は、北側石積みで約1.7m、南側石積みで約0.85m残存していた。石は花崗岩が多い。石は大小を混ぜて、数段に積み上げたもので規則性は見出せない。両石積み間の空間からは、土師質土器皿・杯とともに、備前焼の甕2個体分が出土した。また、自然木片が溝に直交する位置で1本出土した。

溝の遺物は、褐色砂質土層のものと黒灰色粘質土層のものを区別して取り上げた。両者からは、完形品を含む多量の土師質土器皿・杯・盤・播鉢・鍋・釜、瓦質土器鉢、備前焼播鉢、甕、白磁皿、青磁碗・鉢などが出土した。なお、石積み遺構部分については、石積み内と両石積み遺構間とに分けて遺物を取り上げた。

S D02南半 S D02北半を切っていると考えられる。南端に近づくと細まり、西方へ湾曲する。長さは、約13m、最大巾は5.6m、深さは0.95mである。埋土は土質から2層に分けられる。上層は砂層、下層は粘質土層である。埋土中からは、土師質土器皿・杯、常滑焼甕、信楽焼小片、瀬戸焼おろし皿、染付碗、瓦、煙管、鉄製庖丁、石灯籠と考えられるものの一部、薄板状木製品などが出土した。おそらく、近世に塵芥捨て場として利用されたのであろう。

S D05 調査区内を南東-北西方向に走る小溝である。南東端は自然流路跡に合流する。途中、S X010に切られ、S K043を切る。北西端は後世の削平を受け消滅している。長さ約70m、巾約0.84m、深さ約0.3m。埋土は、暗黄色砂質土層と暗褐色土層の2層である。遺物は少量で、土師質土器杯などが出土のみである。

S D06 調査区北西部で検出。S D08・010に平行する。検出長約4m、東側は用水路下のため調査できなかった。巾約0.85m、深さ約0.13mである。埋土は上から青灰色粘質土層、灰黄色砂質土層・青灰色粘土層である。埋土中からは、土師質土器皿・杯が少量出土した。

S D07 調査区北西部で検出した。S D02・S D015に平行する。北東側は用水路下にあるため調査できなかった。溝は石組み部分が約4m、これに連続して直線的に伸びる素掘り部分が約6.5mある。さらに、そこから北西側へクランクした後、不整形に拡巾する。北東端はS X04に切られているために不明である。石組み部分は、巾0.87m、深さ0.15m、断面皿形の掘り形の中央に底石を置き、その両側に側石を置く。底石は30cm弱のものを選別して利用し、側石は大小に関係なく、それぞれの長辺を壁面とする。石組み内巾は約0.35m、深さは約7cmである。底石上面はほぼ水平である。素掘り部分は、規模・形状とも石組み部分の掘り形の延長といえる。しかし、石組みの有無は不明とせざるを得ない。ただ、石組み部分北端の東側に北面を揃えた石が1個置かれた状態であった。これは、何かの敷石とも考えられる。このことを考えると、石組みはここで終わっていたとすることもできよう。遺物は、土師質土器皿・杯・播鉢・鍋、瓦質土器鉢、常滑焼甕の破片が出土した。

S D08 調査区北端で検出した。S D06・09・010に平行する。S D010を切る。西端は調査区外、

東端は生活道路下であるため調査できなかった。また、北肩も生活道路下にあるため調査できなかった。南肩側に、溢水の跡が2条ある。検出長約23m、推定巾約2.5m、深さ約0.45m、断面皿形。埋土は土質から砂層と粘質土層に分かれる。遺物は、土師質土器皿・杯・盤・播鉢・鍋・釜、東播系こね鉢、備前焼甕・青磁碗などが出土した。

S D09・010 調査区北端で検出した。両溝は土橋状に掘り残された部分によって分離しているが、溝の内外を区画するという機能においては1本の溝と考えるべきであろう。S D06・08に平行する・S D010はS D08に切られる。S D09の検出長は10.03m、巾は1.0m、深さ0.32m、埋土は褐色土層と褐色砂質土層に分けられる。S D010は長さ9.6mで完結する。巾は約1.7m、深さ約0.27m、埋土は褐色土層・褐色砂質土層・淡褐色砂層に分かれる。遺物は、土師質土器皿・杯・碗・鍋・釜、東播系こね鉢が出土した。

S D011 西端は調査区外である。S D08・09・010などに平行する。S B038を切る。検出長約5m、巾は約0.8m、深さは約0.1m、断面皿形である。埋土は焼土を含む黒褐色土層である。遺物は、土師質土器皿・杯が出土した。

S D012 南端は調査区外である。S D07などと平行する。S B042と重なり合う。検出長約2.5m、巾約0.16m、深さ約5cm、断面皿形である。埋土は黒褐色土層で焼土を含む。遺物は、土師質土器小片が出土したのみである。

S D013 S D07・012などに平行する。北端は焼土に、南端はS K027に切られる。検出長約2.2m、巾約0.22m、深さ8cm、断面は皿形である。埋土は焼土を含む黒褐色土層である。遺物は、土師質土器小片が出土したのみである。

S D014 S D013の東側に隣接する。S D013に平行し、規模・形状も類似している。長さ3.7m、巾約0.3m、深さは約0.1m、断面は皿形である。埋土は焼土を含む黒褐色土層である。遺物は、土師質土器小片が出土したのみである。

S D015 隣接するS D07とは先後関係があろう。S D07・02北半と平行する。長さ約9.2m、巾約0.8m、深さ約8cm、断面は皿形である。埋土は、淡茶色砂層である。遺物は、土師質土器皿・杯が出土したのみである。

S D016・S D02北半に東から流れ込む小溝である。S B035・036・037と重なり合う。長さ約7.1m、巾約0.7m、深さ約0.1m、断面皿形である。途中に北方へ突出する部分がある。埋土は暗褐色土層である。遺物は、土師質土器皿・杯が出土したのみである。

S D017 S D02北半の溢水の跡であろう。S D016に切られる。遺物は、土師質土器皿・杯が出土したのみである。

#### (6) 性格不明遺構

S X08 北辺は用水路があるため調査できなかった。平面形は、南・東辺がほぼ直角に曲がり西辺が外方へ突起し全体的には東西に長くなっている。壁面はゆるやかに傾斜し、ほぼ水平な床面

となる。埋土は2層に分かれ、下層には灰色粘土層があった。埋土中から土師質土器の小片が出土した。

SX010 検出長約49m。巾は生活道路があるために全掘できていないが、約6mであろう。深さは、北端部で約0.7m、南端部で約1.0mである。断面形は、北側約17mは皿形であるが、それより南はテラス状の平坦部をもつ。埋土は、複雑に分層する。遺物は土師質土器皿・杯・播鉢・鍋・釜、青磁椀、染付椀、漆を塗った木製椀の破片が出土した。中世と近世のものが混じっている。なお、この遺構はSXとしたが、溝と考えるべきであろう。

表11 古墳時代以降建物跡計測値表

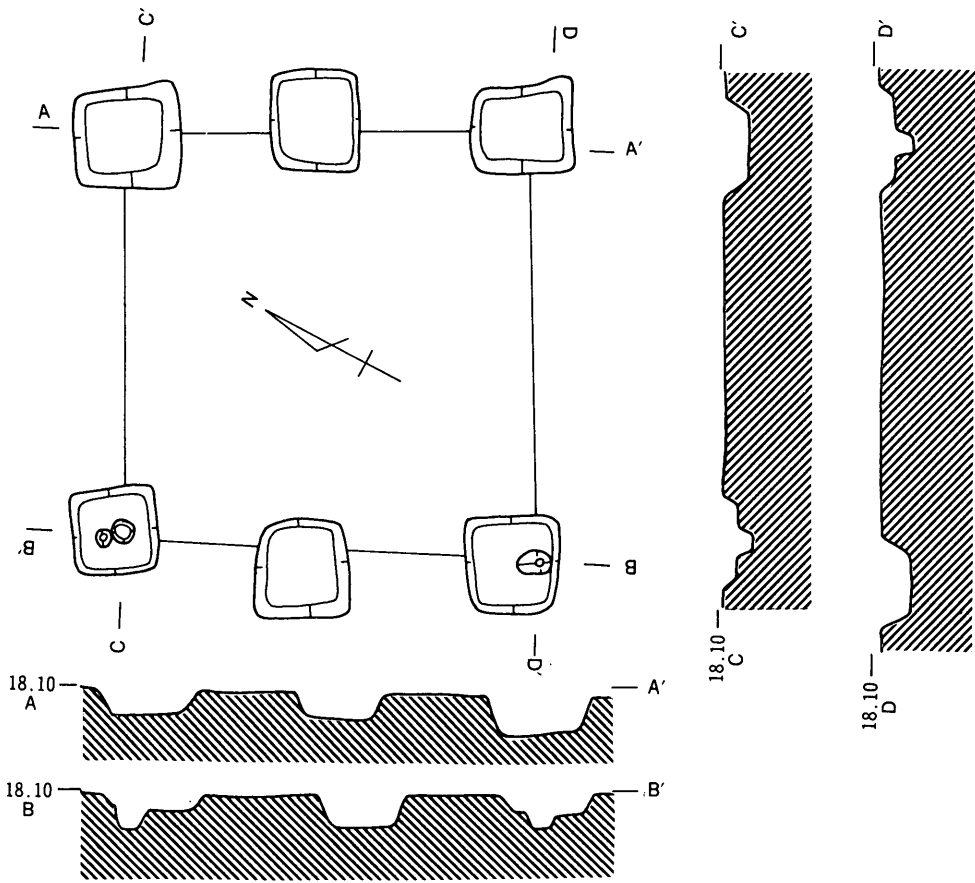
遺構名	規模	梁部柱間距離	桁部柱間距離	面積	主軸方向	備考
S B027	1×2	3.25 3.25	1.50 1.68 1.46 1.84	10.34㎡	N24°W	S P34から土師器体部片出土。ピットは隅丸方形
S B028	1×2	2.30 2.36	2.50 2.44 2.55 2.40	11.36㎡	N58°W	
S B029	1×1	1.95 1.94	4.06 4.08	7.88㎡	N37°E	
S B030	1×(2)	2.13	2.22		N36°E	
S B031	1×1	2.14 2.26	3.63 3.62	7.77㎡	N59°W	
S B032	1×1	3.69 3.67	3.80 3.71	14.02㎡	N40°E	
S B033	1×1	3.41 3.31	3.19 3.23	11.01㎡	N41°E	
S B034	1×1	2.26 2.11	3.61 3.52	8.16㎡	N42°E	
S B035	1×1	3.08 3.08	3.66 3.74	11.52㎡	N39°E	S P273から杯A(1)出土。
S B036	1×1	2.00 2.02	3.32 3.32	6.64㎡	N52°E	S P275から皿A(1)出土。 S P292から皿A(1)、杯A(1)出土。
S B037	1×1	1.92 1.99	3.80 3.76	7.30㎡	N47°E	S P299から皿A(1)出土。 S P258から皿A(1)、皿N(1)、杯A、D(各1)、壁土材出土。
S B038	1×1	2.72 2.76	4.32 4.28	11.75㎡	N44°E	S P180から杯A(1)出土。 S P194から皿A(1)、杯A、壁土材出土。
S B039	1×1	2.00 2.00	4.00 4.01	8.00㎡	N38°E	S P176から皿C(1)出土。 S P152から杯A(1)出土。
S B040	1×1	2.10 2.03	3.84 3.78	8.06㎡	N50°E	S P178から皿A(1)、S P172から皿A(1)、S P155から杯A(1)出土。
S B041	1×1	2.37 2.48	2.73 2.74	6.47㎡	N52°E	S P166から皿A(1)、杯A(2)、椀C1(1)、S P141から杯A(1)出土。
S B042	(2)×(2)	2.12 2.11	1.89 1.94	16.20㎡以上	N42.5°E	S P228から皿A(1)、S P238から皿N(1)、S P230から皿A(1)、杯A(1)、壁土材、S P233から皿A(1)、壁土材出土。総柱。

表12 古墳時代以降土坑計測値表

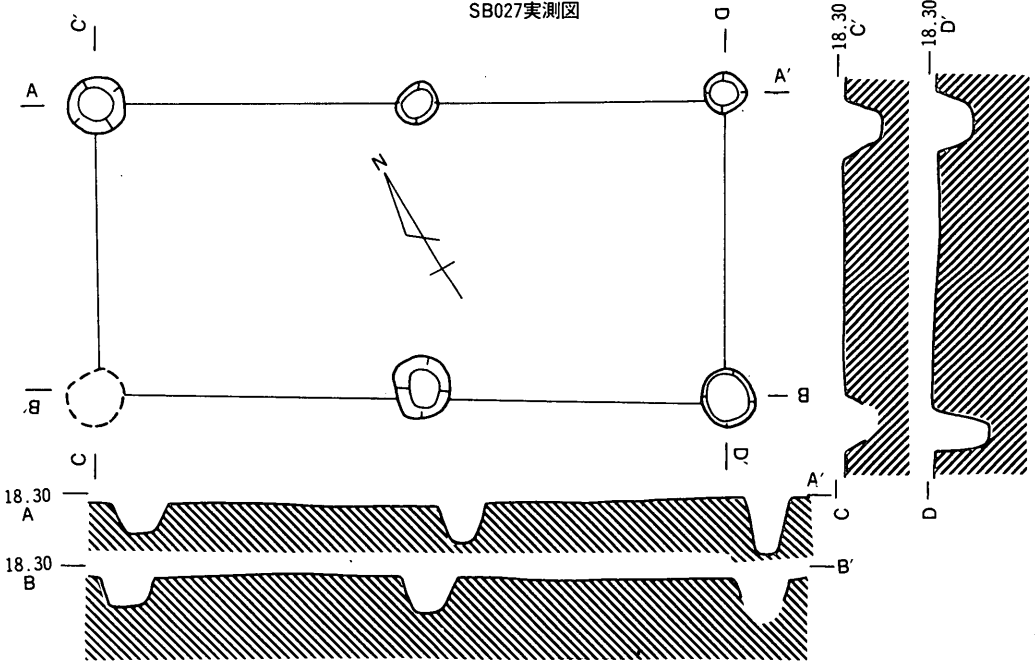
遺構名	規模 深さ	形状	主軸方向
S K010	0.76~1.09 0.31	楕円形	N70°E
S K011	0.7~1.4 0.25	楕円形	N20°W
S K016	(0.8×1.5) 0.1	不定形	
S K017	0.7~1.6×3.2 0.1	不定形	N50°W
S K018	1.26×1.47 0.27	隅丸方形	N30°E
S K019	0.71×0.7 0.07	隅丸方形	N50°W
S K020	1.11×1.23 0.16	隅丸方形	N40°E
S K021	0.97×1.2 0.04	隅丸方形	N50°W
S K022	0.74×0.86 0.08	隅丸方形	N48°W
S K023	0.81×0.81 0.15	方形	N35°W
S K024	1×1.1 0.39	隅丸方形	N40°E
S K025	0.8×1.03 0.05~1.09	隅丸方形	N27°E
S K026	0.66×0.7 0.05~0.77	隅丸方形	N46°W
S K027	1.2×1.47 0.04	隅丸方形	N36°E
S K028	0.8×0.94 0.05~0.76	隅丸方形	N7°W
S K043	直径0.9 0.35	円形	
S K044	直径0.72 0.18	円形	

表13 古墳時代以降溝計測値表

遺構名	巾	長さ	方向	備考
S D02	2.9~3.1	16.5	N44°E	石積み遺構を有する。
S D05	0.6~1.0	61	N40°W N63°W	途中で屈曲する。
S D06	0.8	4.0	N40°W	
S D07	0.8~3.9	16.9	N45°E N44°W	石組溝の部分がある。途中でクラックし、さらに90°屈曲する。
S D08	(約3.0)	22.3	N40°W	直角方向に分岐する支流を2条有する。
S D09	0.8~1.1	10.5	N40°W	S D010との間の土橋によって一端はおわる。
S D010	0.8~1.8	9.5	N40°W	S D09との間の土橋によって一端はおわる。
S D011	0.4~0.6	5.1	N47°W	
S D012	0.15~0.2	2.6	N45°E	
S D013	0.3	2.2	N44°E	
S D014	0.28~0.4	3.7	N43°E	
S D015	0.8~0.9	9.2	N42°E	
S D016	0.5~0.8	7.1	N47°W	直角方向に分岐する支流が1条ある。
S D017	0.5~1.1	3.5	N37°E	



SB027実測図



SB028実測図

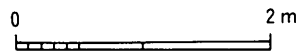


図64 S B 027・028実測図 (1/60)

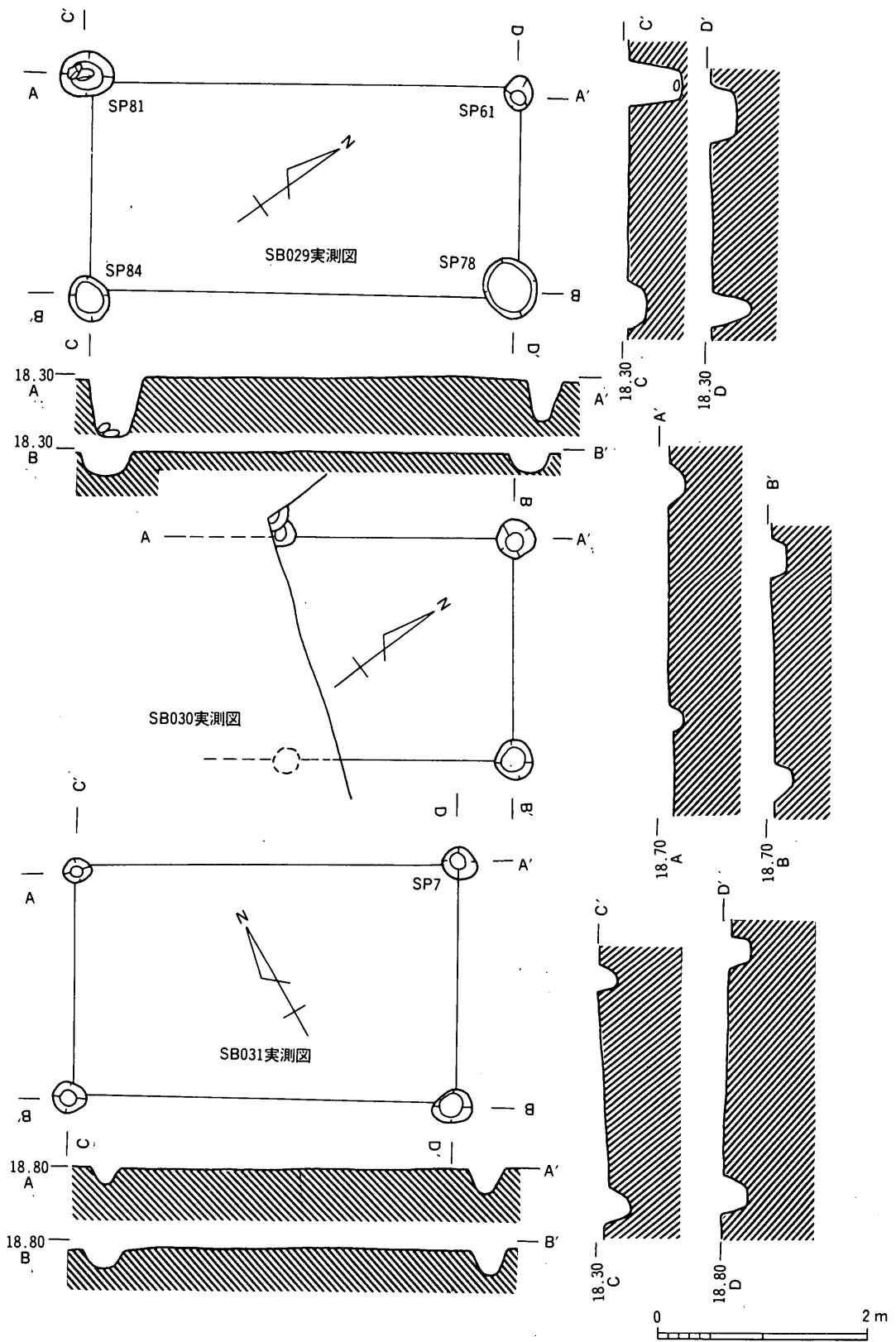


图65 S B 029 · 030 · 031 实测图 (1/60)



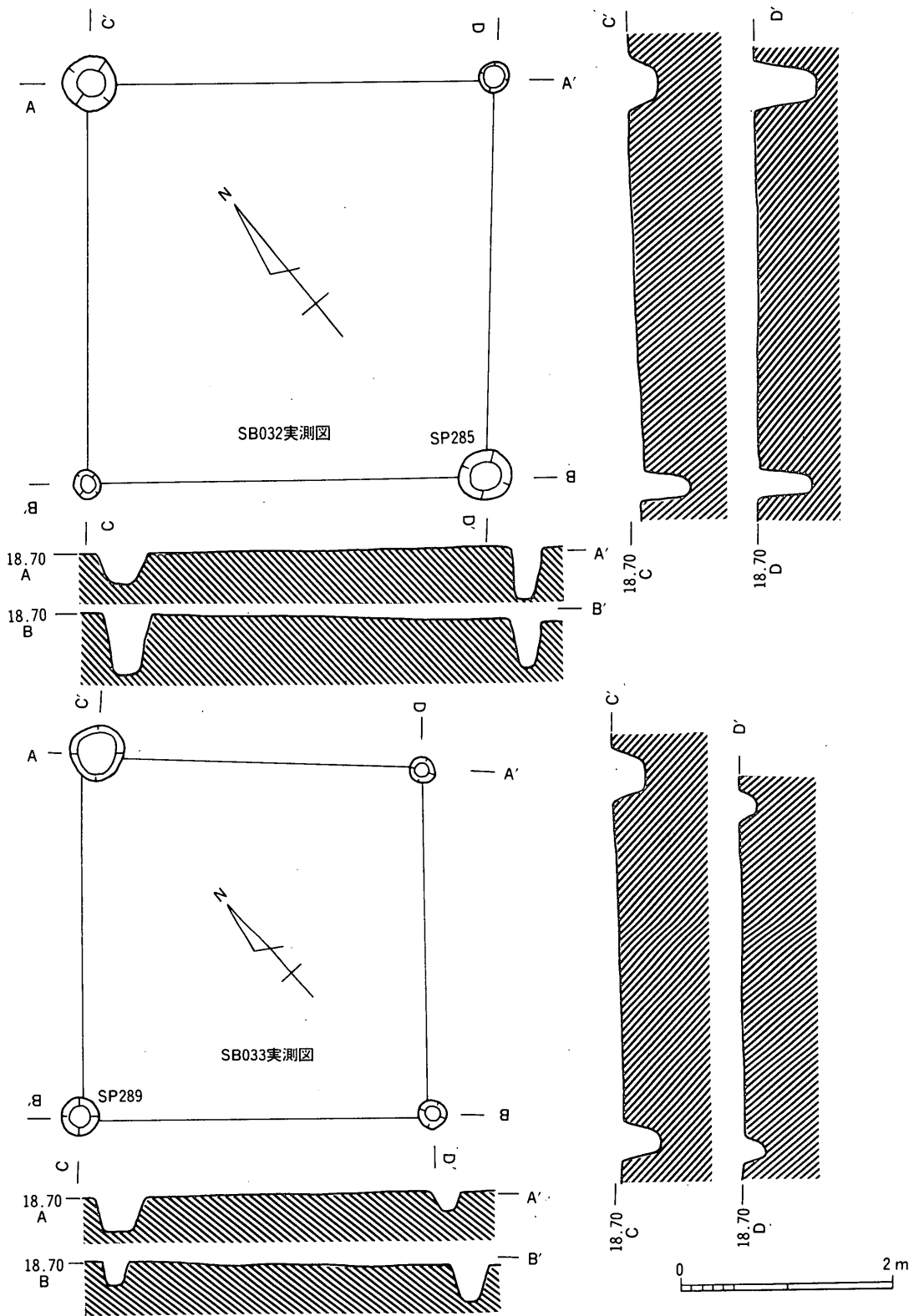
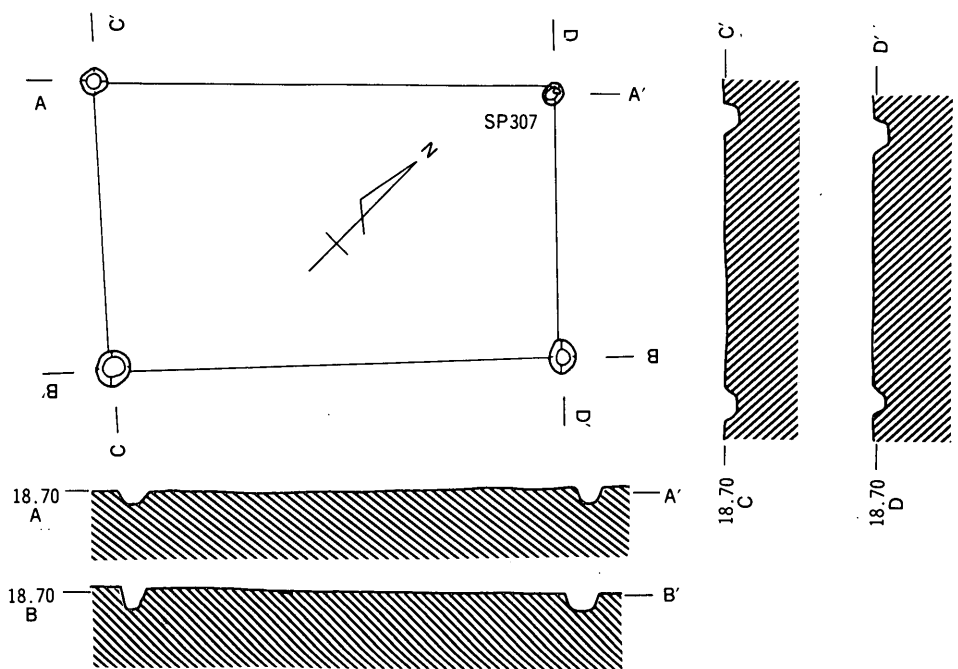
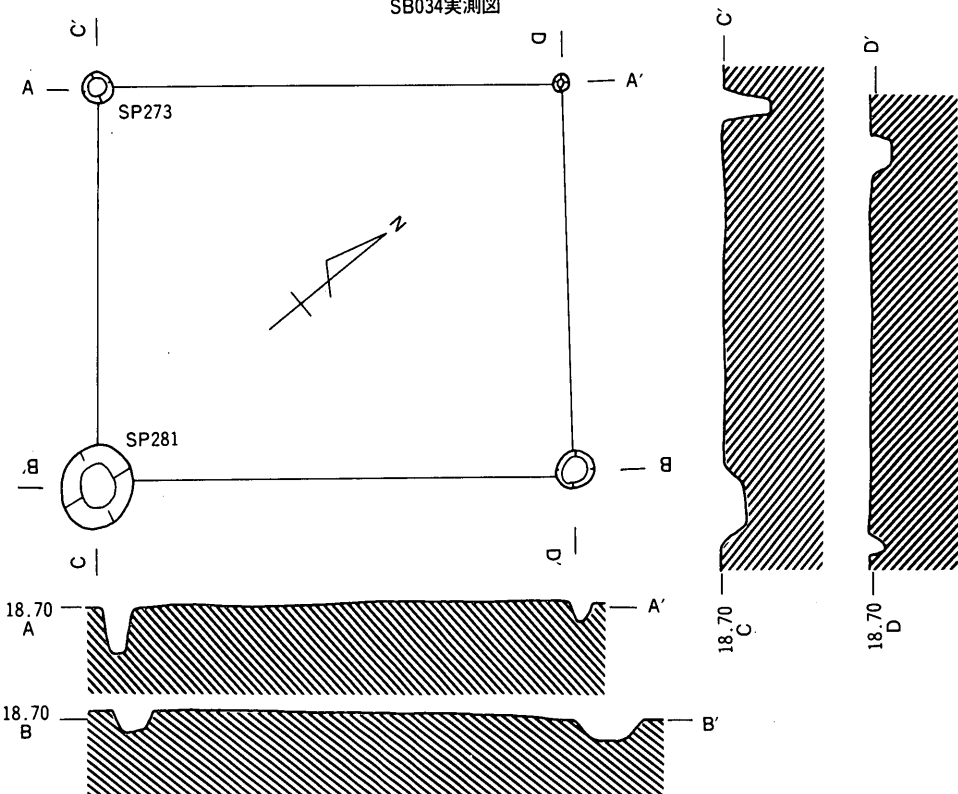


图66 S B 032 · 033实测图 (1/60)



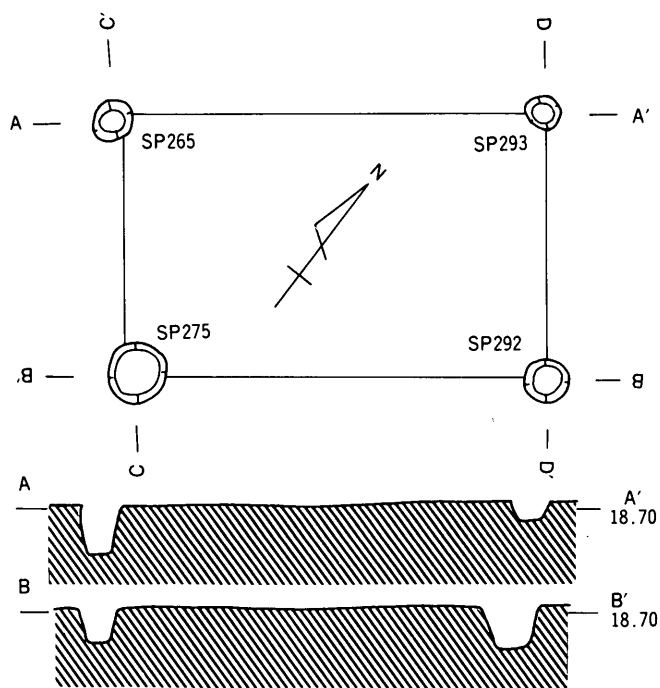
SB034実測図



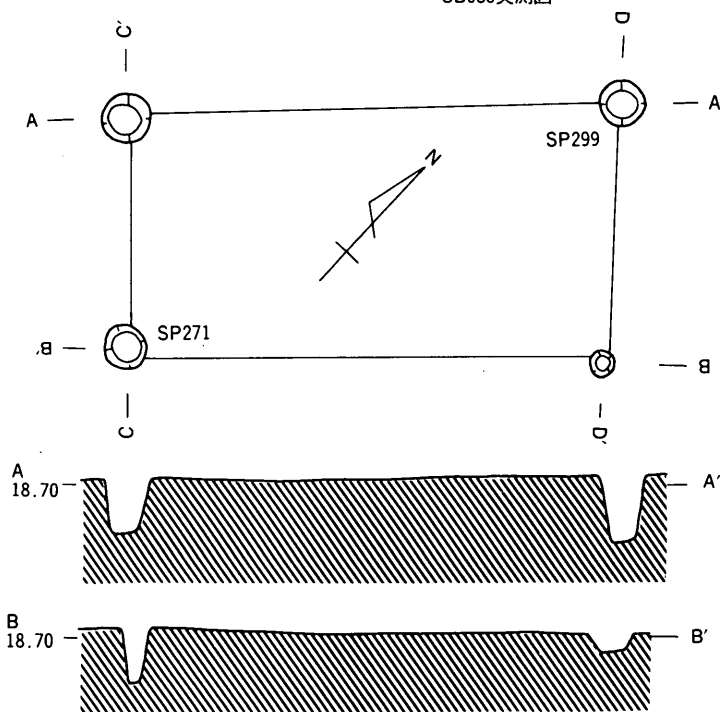
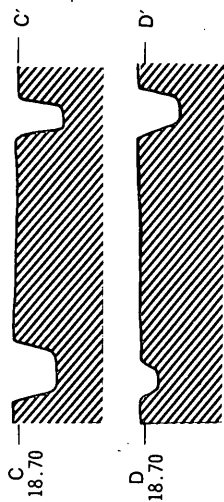
SB035実測図



図67 S B 034・035実測図 (1/60)



SB036実測図



SB037実測図

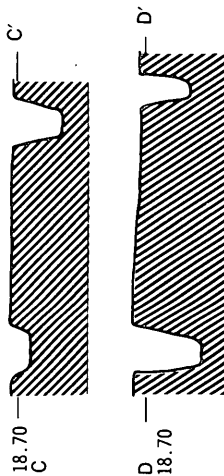
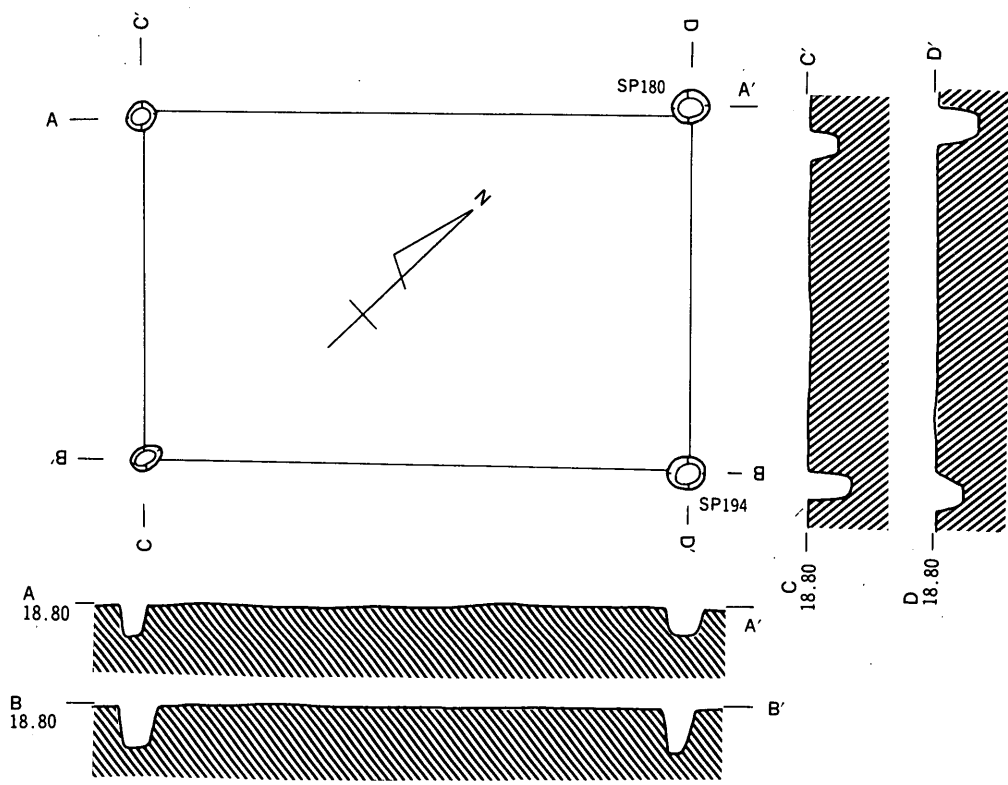
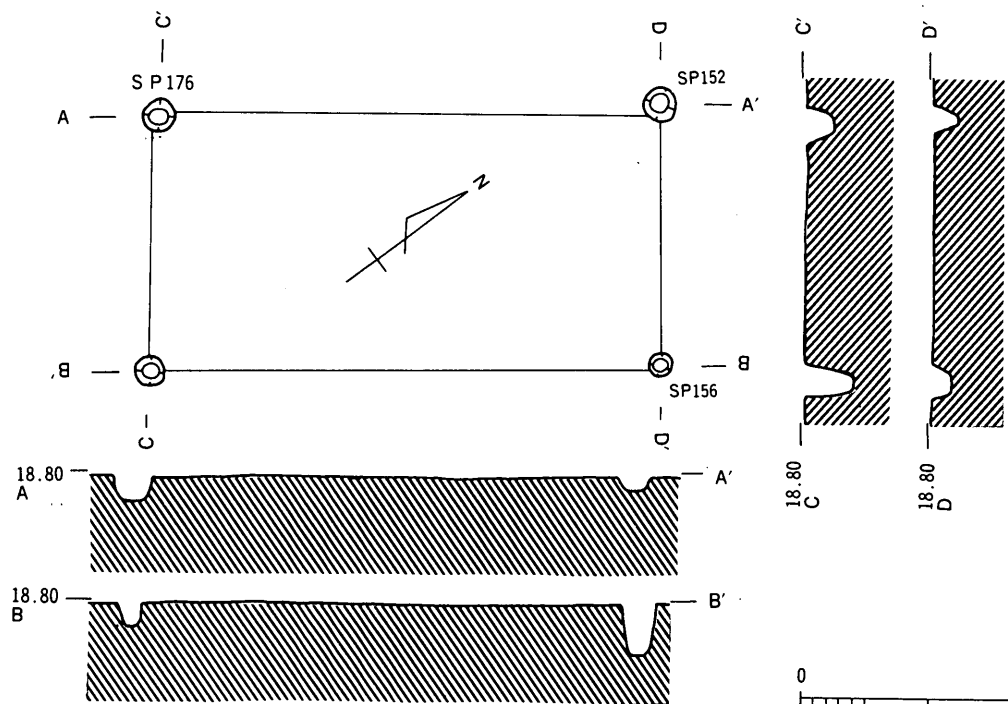


图68 S B 036 · 037实测图 (1/60)



SB038实测图



SB039实测图



图69 S B 038 · 039实测图 (1/60)

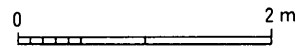
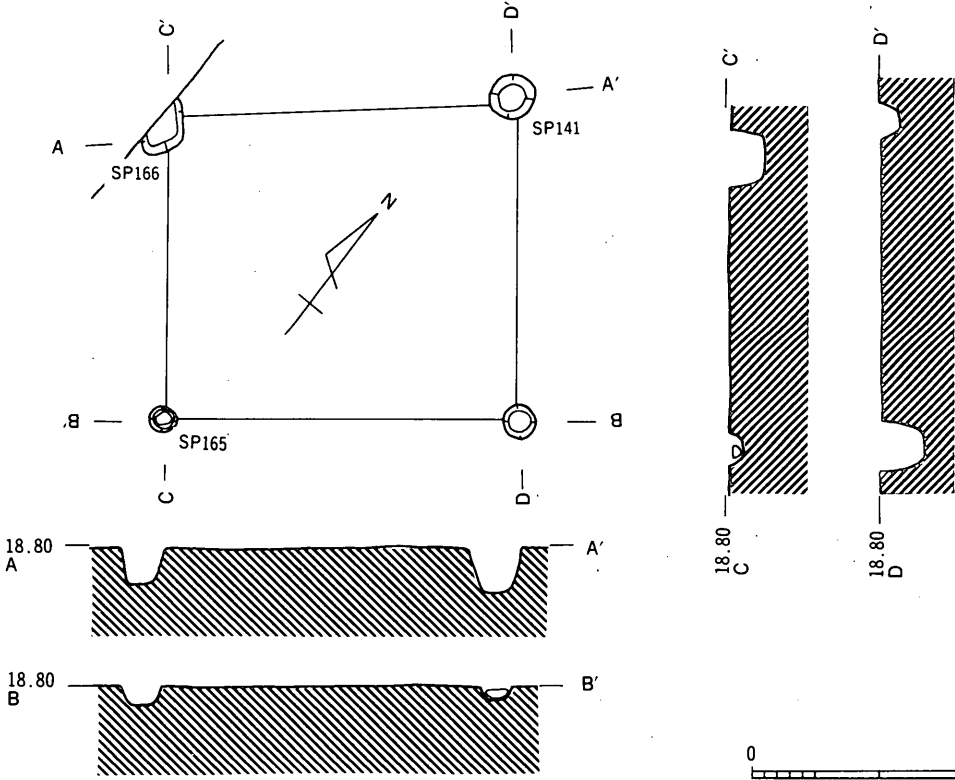
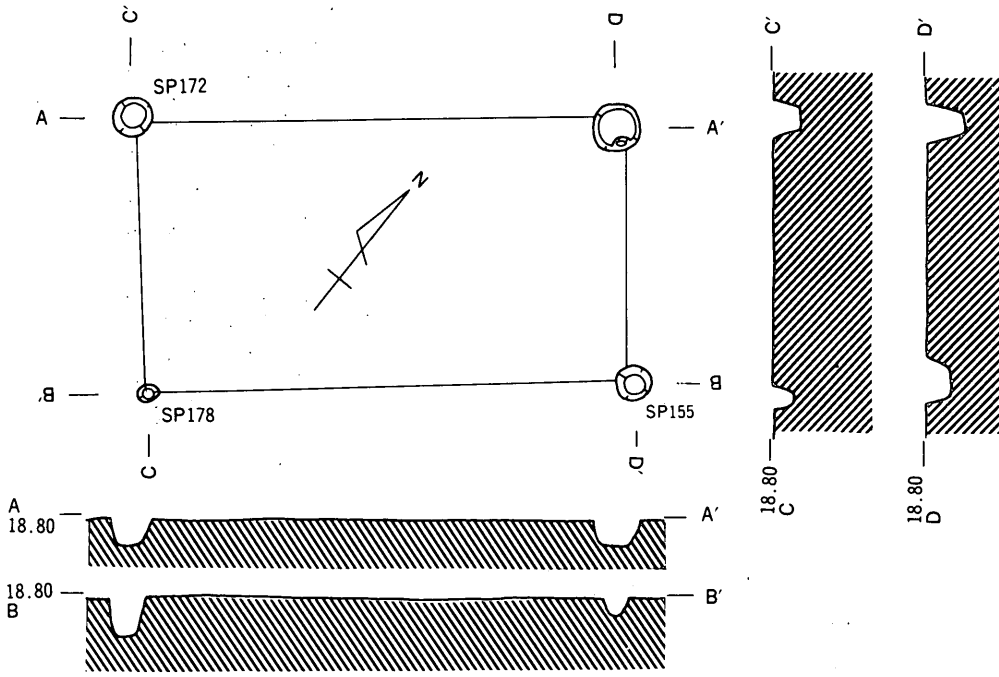
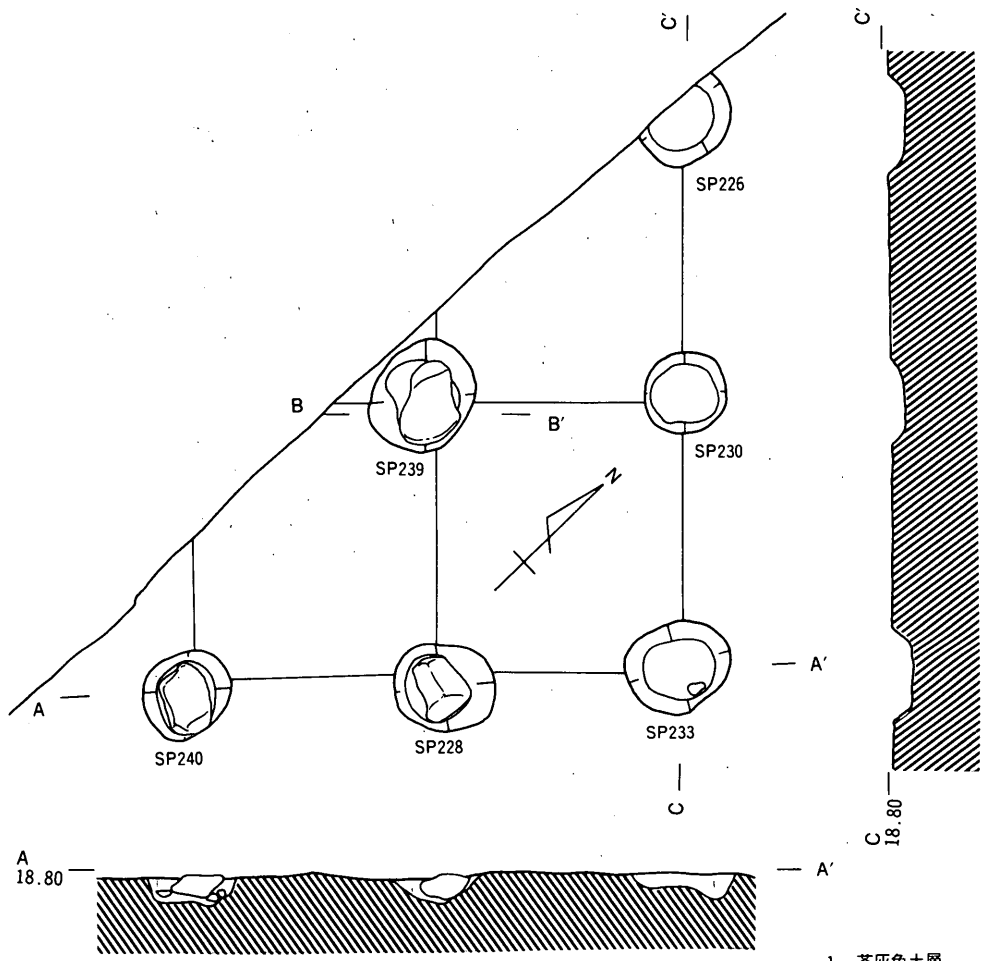
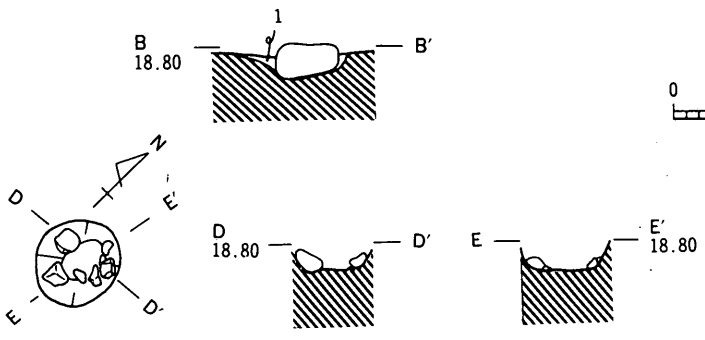
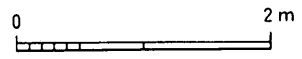


图70 S B 040 · 041 实测图 (1/60)

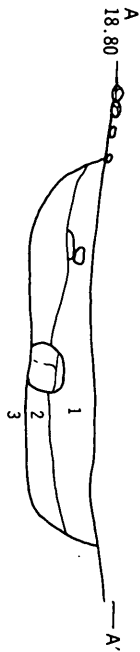


1. 茶灰色土層

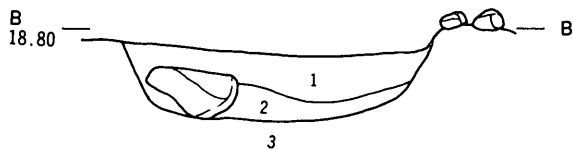
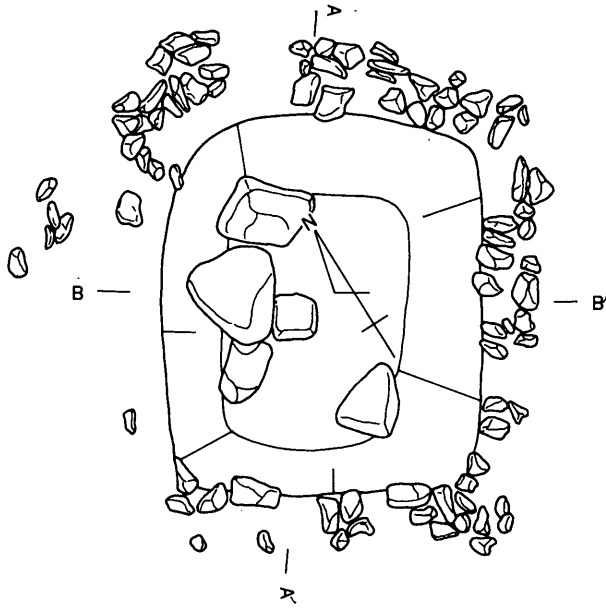


SP240 詰石実測図

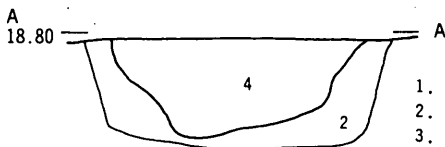
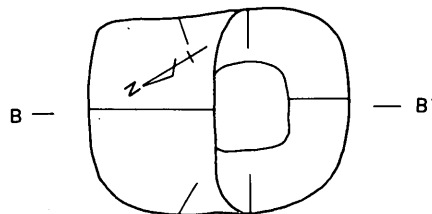
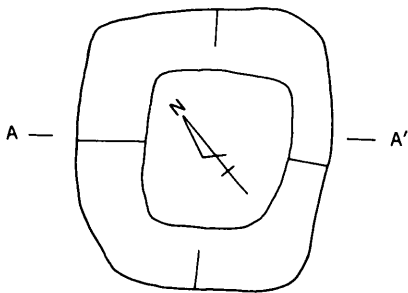
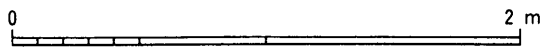
图71 S B 042 実測図 (1/60)



1. 暗灰色砂層
2. 灰褐色砂層
3. 黒茶色土層

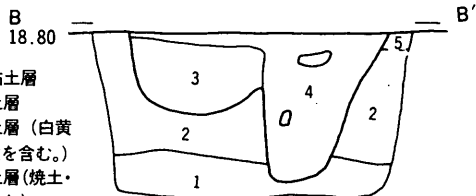


SK018実測図



SK024実測図

1. 白黄色粘土層
2. 灰茶色土層
3. 茶灰色土層 (白黄色粘土粒を含む。)
4. 黒茶色土層 (焼土・炭片を含む)



SK025実測図

图72 S K 018 · 024 · 025実測図 (1/30)

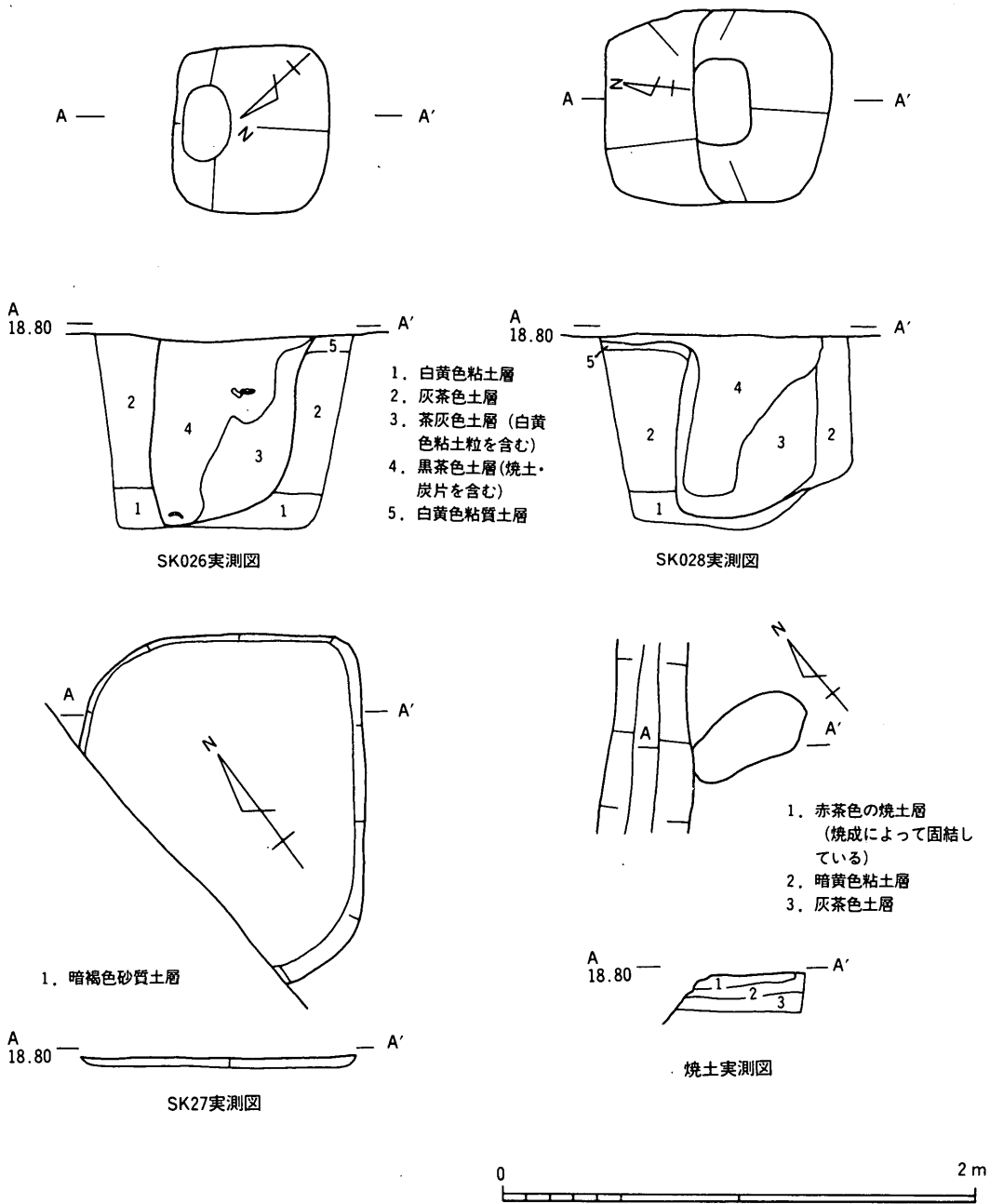


図73 S K 026・027・028, 焼土実測図 (1/30)



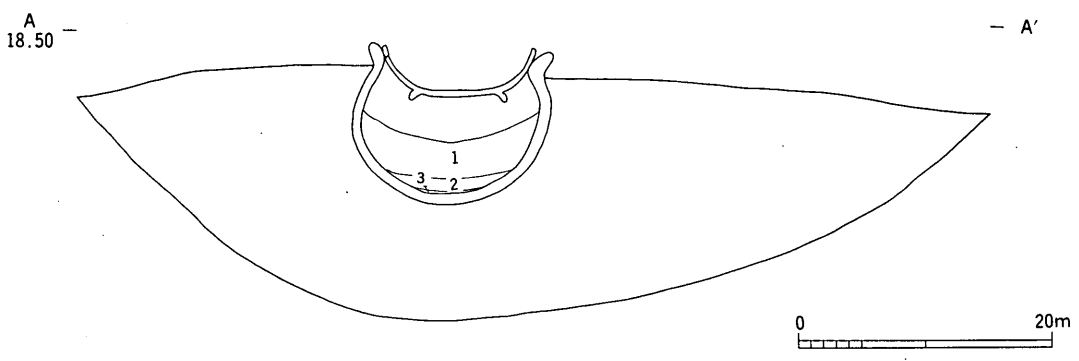
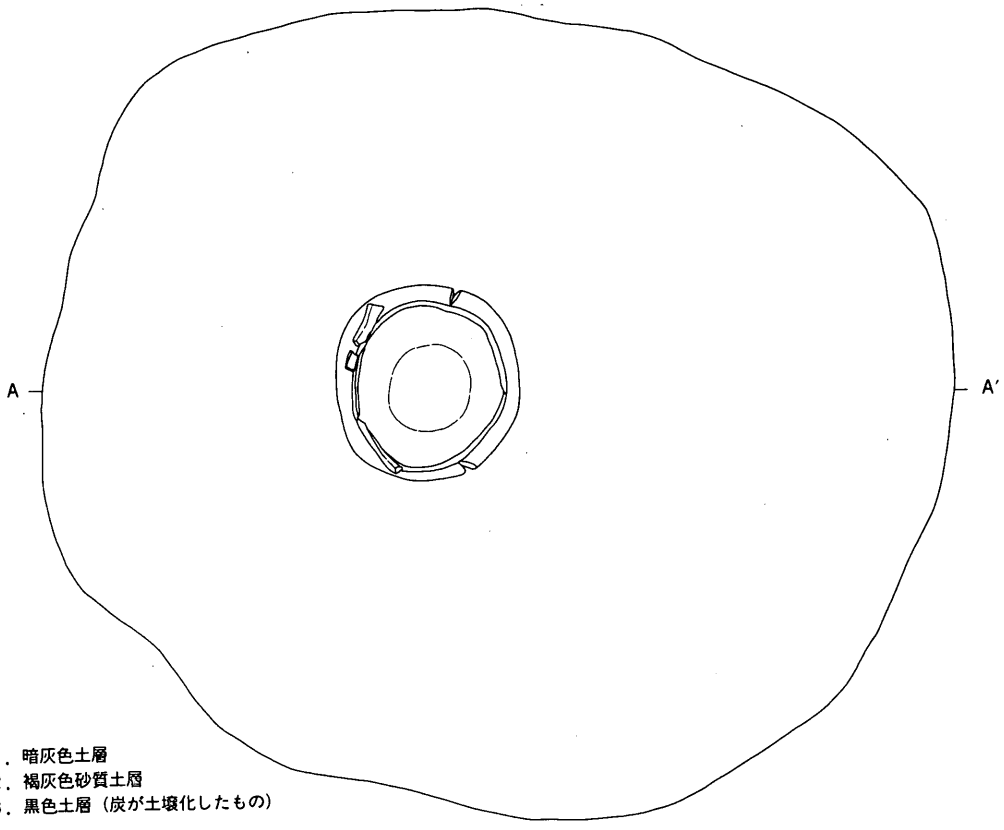


図74 S K 044実測図 (1/6)

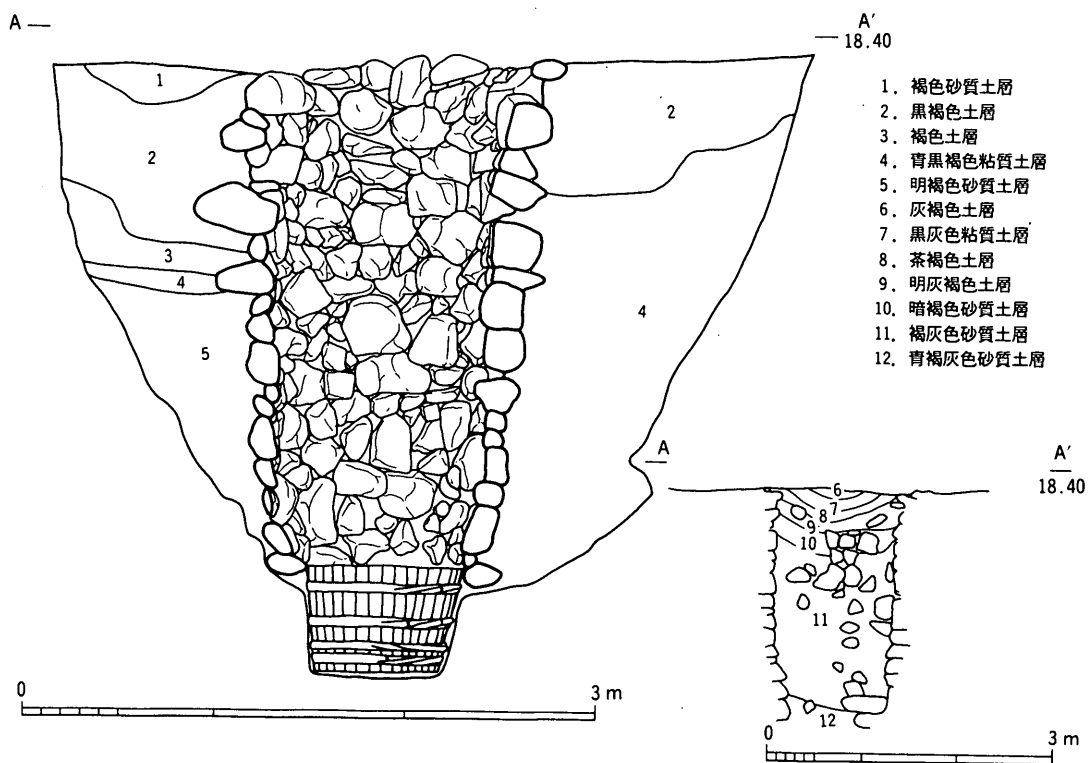
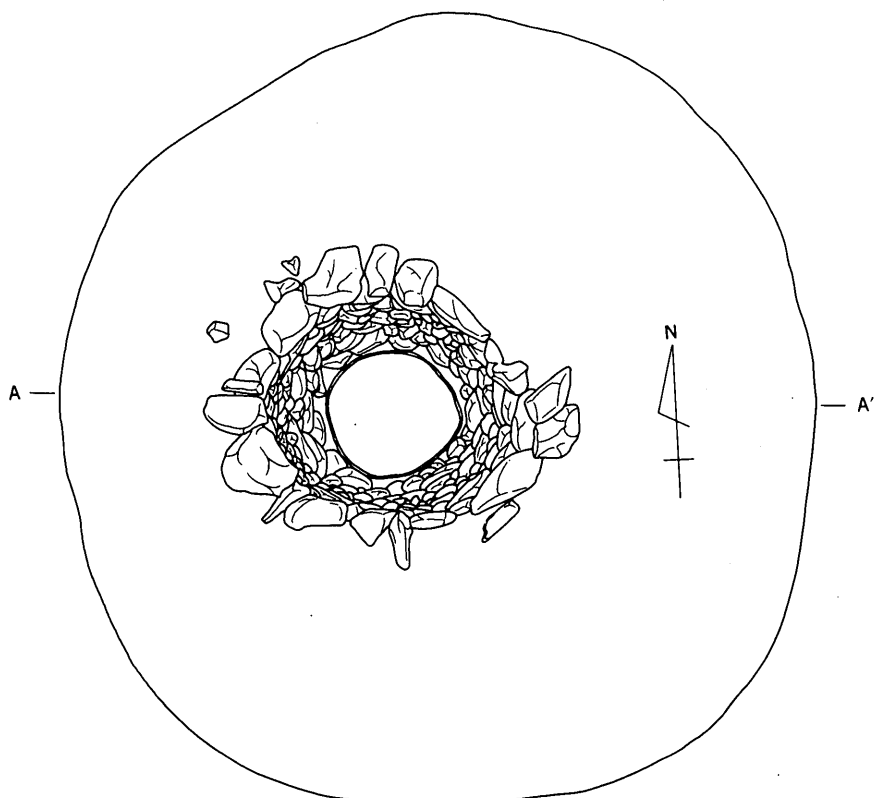


图75 S E 01 实测图 (1/40)

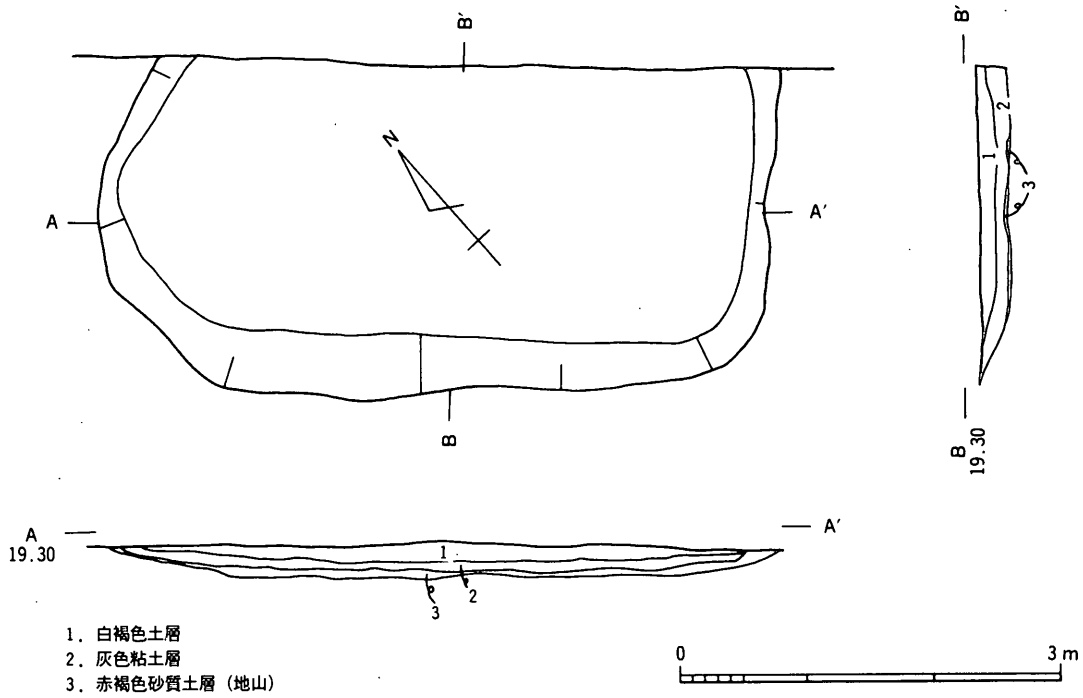
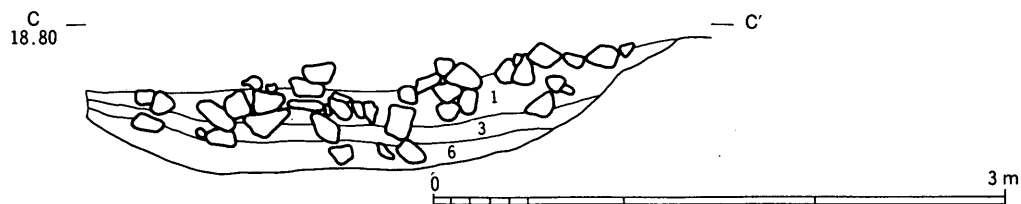
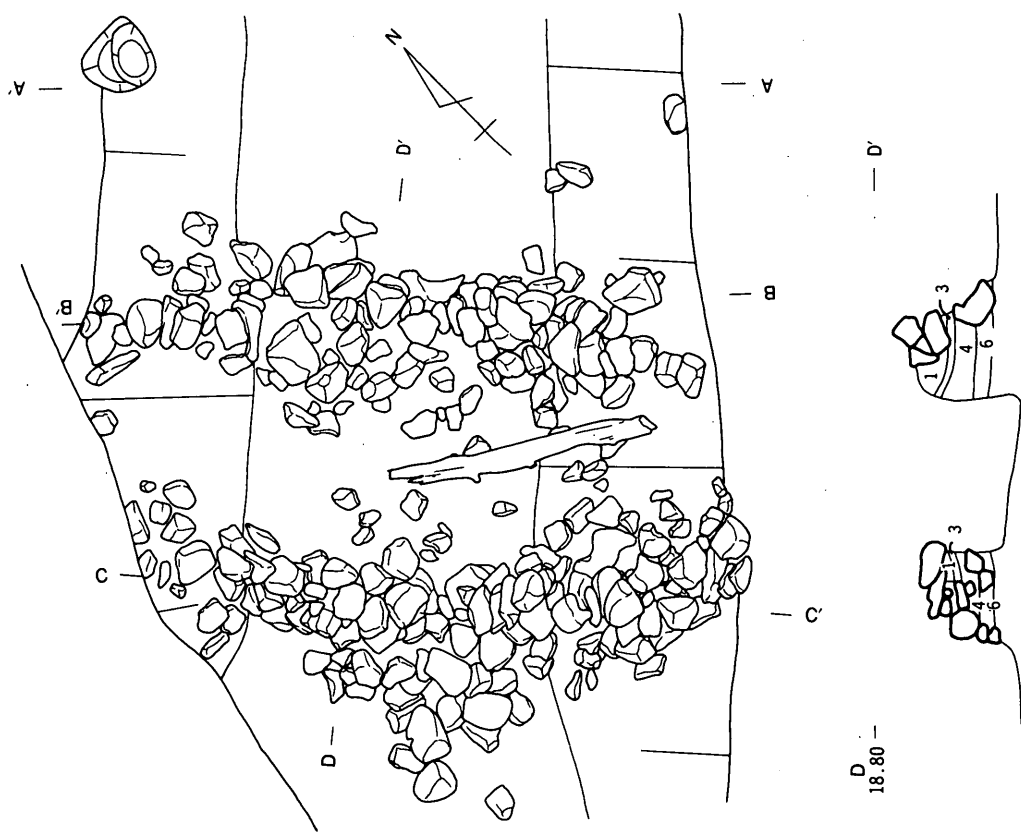
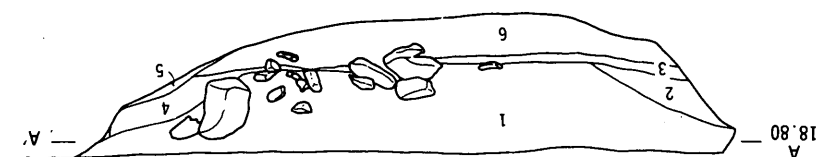
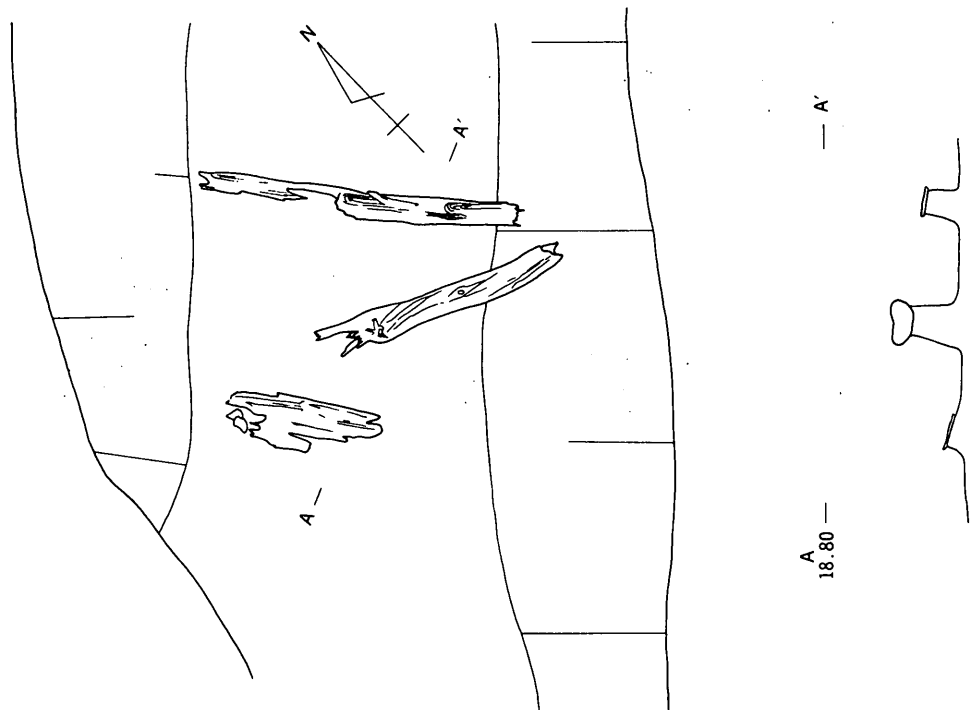


图76 S X 08実測図 (1/30)



- 1. 褐色砂質土層
- 2. 灰色土層
- 3. 赤褐色土層
- 4. 淡灰色土層
- 5. 灰色砂層
- 6. 黒灰色粘質土層

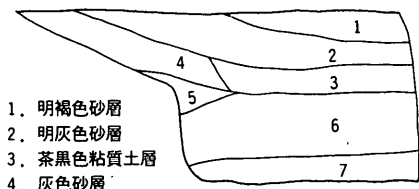
図77 S D02石積み遺構実測図 (1/40)



SD02基底板実測図

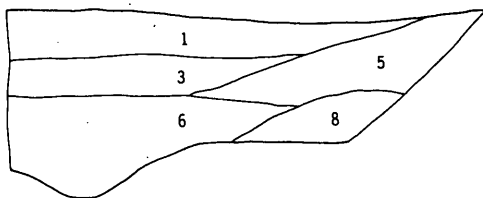
東

18.80

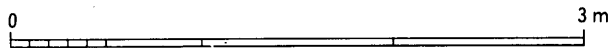


1. 明褐色砂層
2. 明灰色砂層
3. 茶黑色粘質土層
4. 灰色砂層
5. 暗灰色粘質土層  
(赤褐色土を含む)
6. 灰黑色粘質土層
7. 青灰色砂質土層 (地山)
8. 淡黄灰色粘質土層 (地山)

西

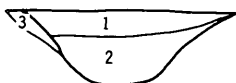


SD02南半土層実測図



18.70

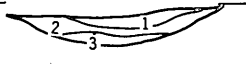
1. 暗黄色砂質土層
2. 暗褐色土層
3. 茶褐色土層



SD05土層実測図

18.80

1. 青灰色粘質土層
2. 灰黄色砂質土層
3. 青灰色粘土層



SD06土層実測図



图78 S D 02・02南半・05・06実測図 (1/40・1/30)

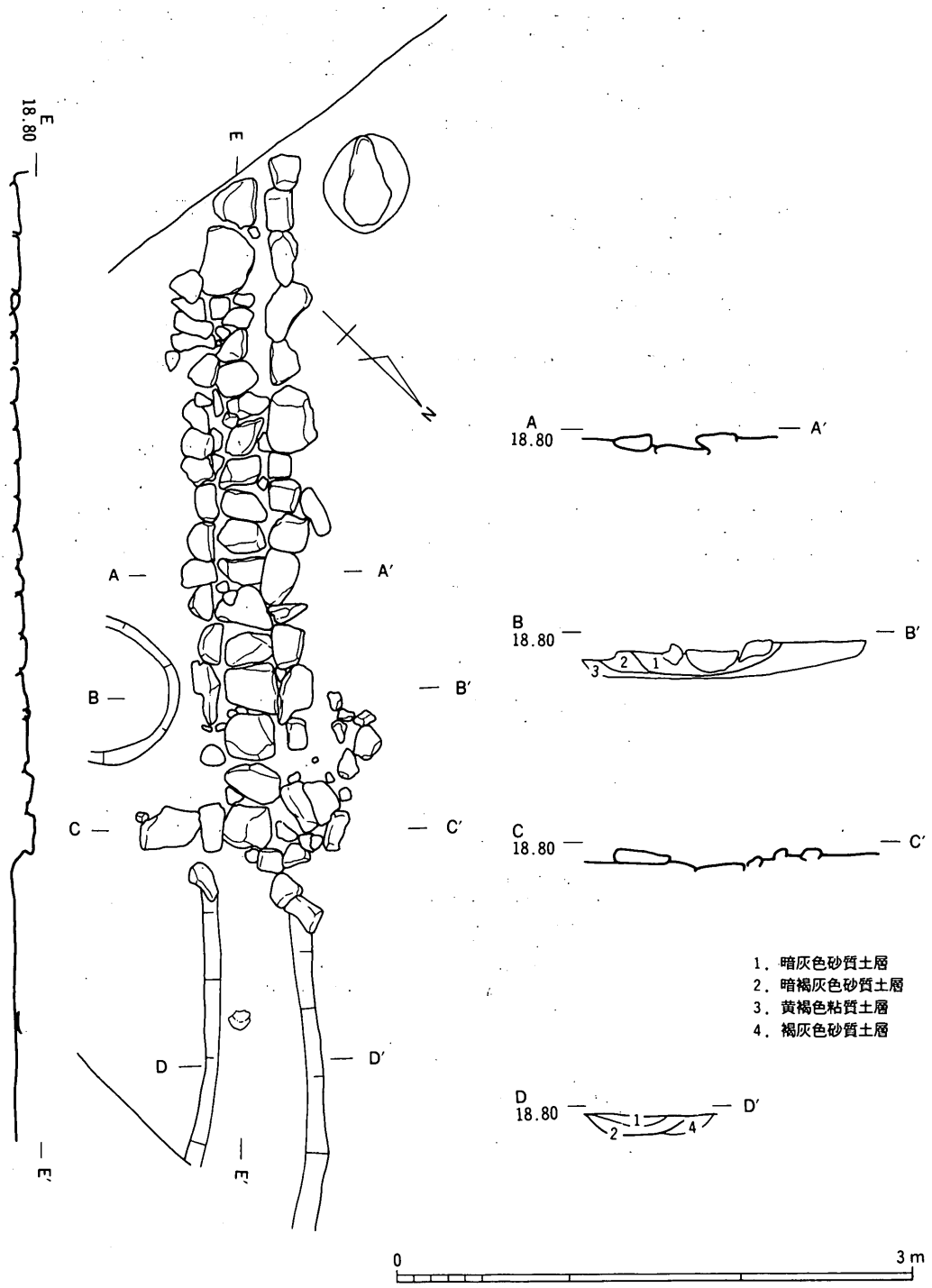
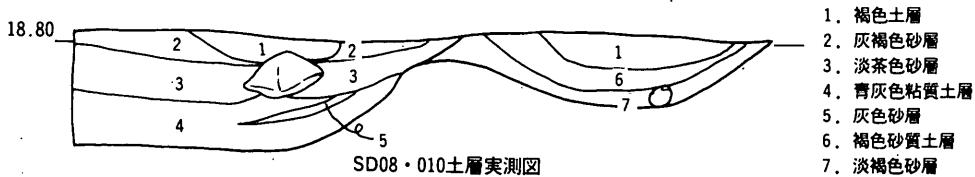
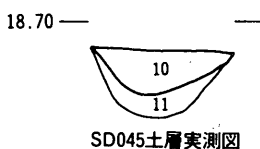
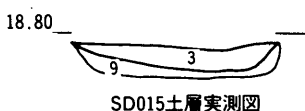
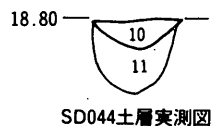
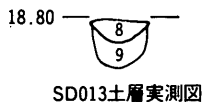
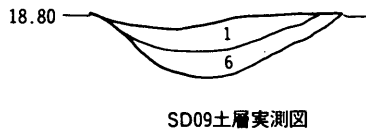
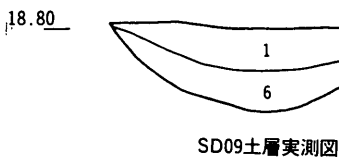


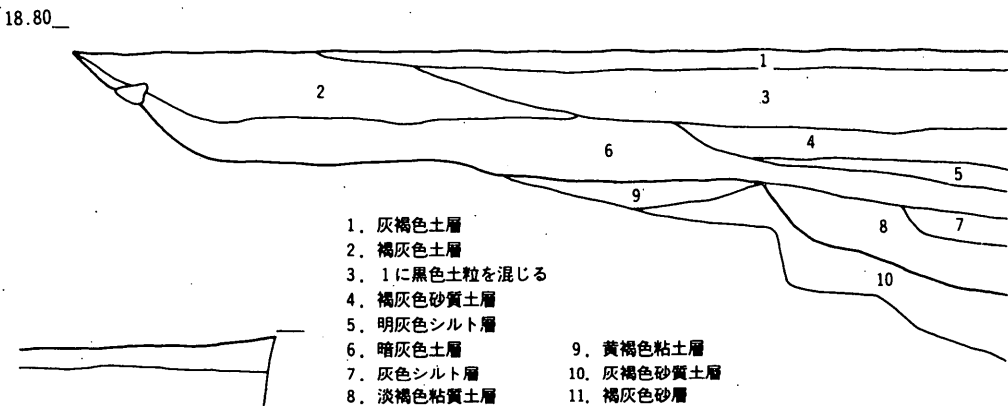
图79 S D07实测图 (1/40)



- 1. 褐色土層
- 2. 灰褐色砂層
- 3. 淡茶色砂層
- 4. 青灰色粘質土層
- 5. 灰色砂層
- 6. 褐色砂質土層
- 7. 淡褐色砂層



- 8. 黒褐色土層(焼土を含む)
- 9. 茶黒色粘質土層
- 10. 褐茶色土層
- 11. 淡灰色砂混じりシルト層(地山)



- 1. 灰褐色土層
- 2. 褐灰色土層
- 3. 1に黒色土粒を混じる
- 4. 褐灰色砂質土層
- 5. 明灰色シルト層
- 6. 暗灰色土層
- 7. 灰色シルト層
- 8. 淡褐色粘質土層
- 9. 黄褐色粘土層
- 10. 灰褐色砂質土層
- 11. 褐灰色砂層

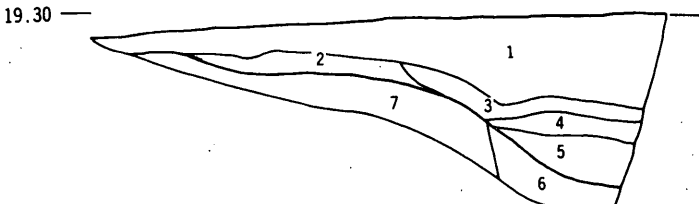
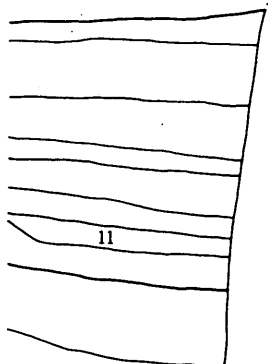


図80 S D08・09・010・011・013・015・044・045, S X010実測図 (1/30)

## 2 遺物

土器類は、材質によって土師質土器・瓦質土器・須恵質土器・東播系須恵質土器・亀山焼・備前焼・常滑焼・瀬戸焼・信楽焼・輸入陶磁器・近世陶磁器・土師器・須恵器に分け、まず、土師質土器～信楽焼については分類表を作成した。次に、それぞれの材質毎に、分類別集計表、遺構・包含層別分類別集計表を作成した。土器類1点毎の説明は本文では行えなかった。図・観察表によらるたい。

土器類以外の遺物は、瓦・土壁・土製品、金属製品、木製品、石製品に分け、1点毎の説明を行った。なお、縄文土器は便宜的に土器類以外の遺物のところに入れて、その説明を行った。

### (1) 土器類

実測図中の土器類の内、内外面に黒塗りを施した部分は、スス・油煙付着を示す。内外面に網をかけた部分は、赤色顔料塗抹を示す。断面に斜線を施したものは、瓦質土器であることを示す。

観察表の「胎土」項目中の「3コ」等の個数表記は、径3cmの円形範囲内の砂粒の個数である。

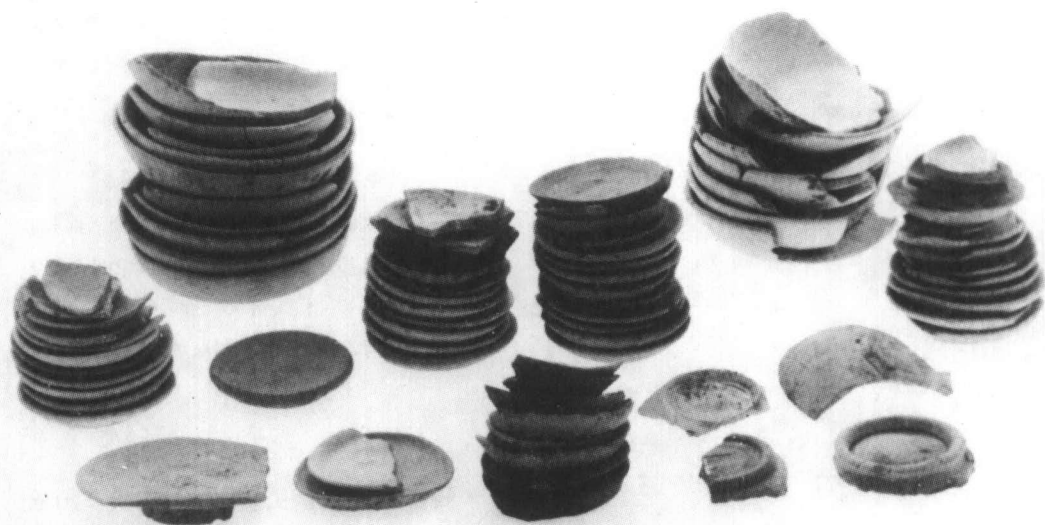
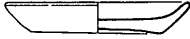

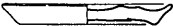




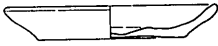



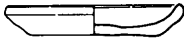
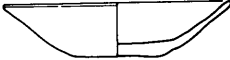

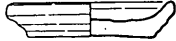

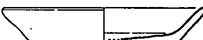
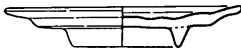
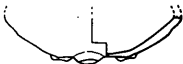


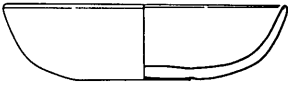

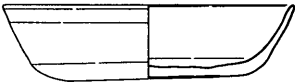

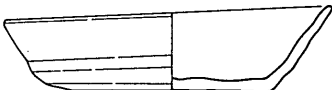




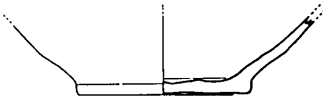
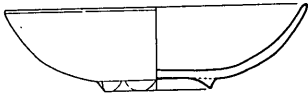

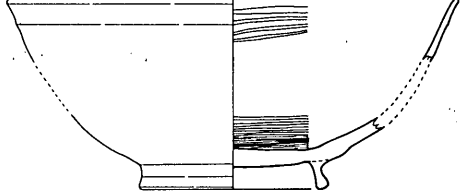
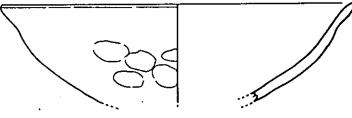

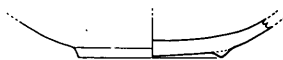
図81 奈良時代以降土器分類図

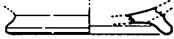
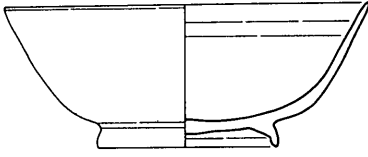
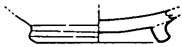
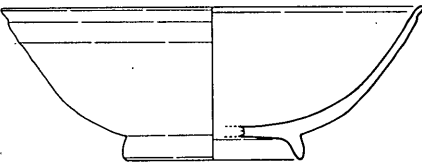
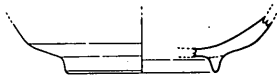
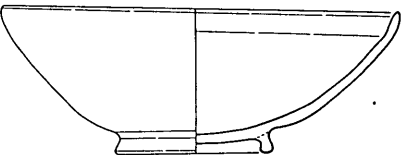

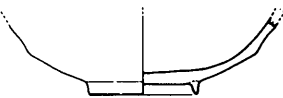
土師質土器			
皿	A		<p>最も量が多い。底部へら切り。へらの回転方向は右。底部はやや上底であって、凸起することはない。体部は直線的に開く。口径は6.5~7.5cmの間に大体収まり、8cmを超えることはない。</p>
	B		<p>胎土に0.5mm以下の半透明砂粒を均一に多量に含む。底部へら切り。へらの回転方向は左。1回転で完了する。底部は上底になるものもあるが、大部分は外方へ出張る。このために底・体部界をなす稜線は浮いた位置にめぐる。体部はわずかに内弯しながら開く。器厚は薄い。</p>
	C		<p>底部へら切り、へらの回転方向は右。平底。体部は短く直線的に開く。器高は皿のなかで最小。</p>
	D		<p>底部へら切り。へらの回転方向は右。底部外面には数条の沈線状の凹みがまわる。体部、水平に近い程に強く開く。体部の傾きは皿のなかで最大。</p>
	E		<p>口径約10cm。口径の大きい群 (F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・H・I) に属す。底部はへら切り。その痕跡は不明瞭。底部端で肥厚し、短く直線的に開く体部。口縁部は外弯して端部に至る。</p>

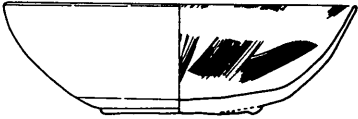
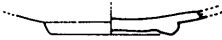


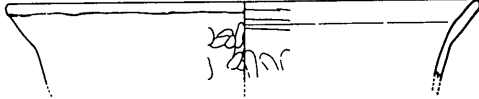
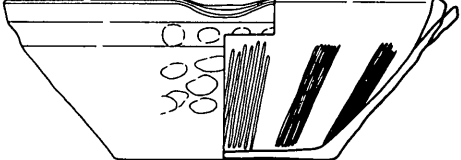
皿	F <sub>1</sub>		口径の大きい群に属す。底部ヘラ切り。ヘラの回転方向は右であるが痕跡は少ない。底部内面中央隆起。体部はほぼ直線的に開き口縁端部に至る。体部外面中位に稜線が1本残ること多い。
	F <sub>2</sub>		口径の大きい群に属す。底部ヘラ切り。その痕跡は不明瞭。体部、やや内弯しながら開く。
	G		底部ヘラ切り。ヘラの回転方向は左。底部上げ底。底・体部界は鋭い稜線をなす。体部は直線的に開く。しかし、体部上半が外方へ肥厚するために、体部は外弯し上半で内弯したような形状を呈する。
	H		口径の大きい群に属す。底部ヘラ切り。ヘラの回転方向は右。平底。しかし、内面は中央と周辺が肥厚し全体に波状である。体部は直線的に開く。器厚は薄い。
	I		口径の大きい群に属す。底部ヘラ切り。ヘラの回転方向は右だが痕跡は少ない。丸底である。体部直線的に開く。口縁部で器厚を減じ内面側に稜線をつくる。
	J		底部荒いヘラ切り。ヘラの回転方向は右。やや丸底。底部端から肥厚し、そのまま口縁端部に至る。

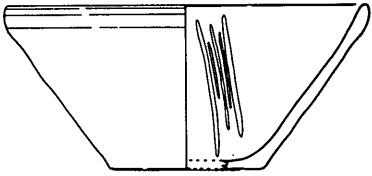
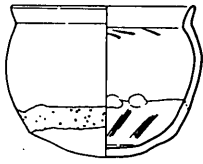
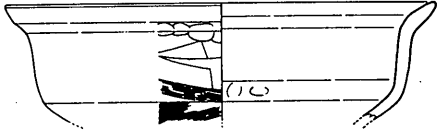
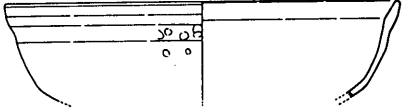
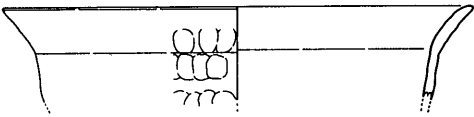


皿	K		底部ヘラ切り（回転糸切りのように見える）。体部ほぼ直線的に開く。口縁部で肥厚する。
	L		底部静止糸切り。胎土精良。底径 4 cm と小さい。体部長く、深いという印象を与える。
	M		底部回転糸切り。体部やや外弯して強く開く。全体に厚い。
	N		底部回転糸切り。全体に分厚い。体部傾き小さい。器高は低い。
	O		底部回転糸切り。細かく密な痕跡を残す。やや丸底。体部は内弯して開く。全形は知り得ない。
	P		底部回転糸切り。細かい痕跡を残す。体部直線的に開く。
脚付皿	A		ヘラ切りの底部に断面三角形の脚部をめぐらす。体部はやや外弯して強く開く。
	B		丸底の底部に 3 個の断面逆台形の短い脚部を貼付。体部は中位で屈曲して内弯気味に伸びるため、皿以外の器形の可能性もある。

杯	A		最も量が多い。底部へら切り。へらの回転方向は右。平底。底・体部界に稜線はなく、そのまま内窩する体部となる。
	B		底部は静止糸切り。平底。底径小さい。胎土精良。体部ほぼ直線的に開き長い。口縁部やや外反するものあり。
	C <sub>1</sub>		底部へら切り。へらの回転方向は右。粘土紐の痕跡を残す。体部は直線的に開く。
	C <sub>2</sub>		底部へら切り。平底。底・体部界に稜線を残す。体部は直線的に開く。
	C <sub>3</sub>		口・底径ともに大きい。底部へら切り。へらの回転方向は左。体部は直線的に強く開く。
	D		底部は回転糸切り。平底。底径小さい。底部端のすぐ上方で屈曲して、直線的に開く体部。器高は最も大。
	E		底部へら切り。底部端で肥厚し強く開く体部。全形は知り得ない。

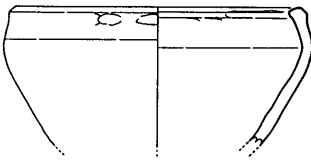
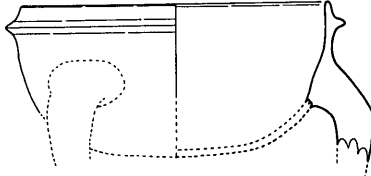
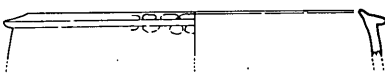
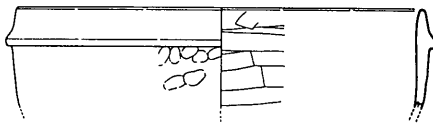
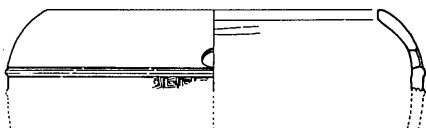


杯	F		<p>瓦質である。底部はヘラ切りの後ナデ。体部は短く直立した後、屈曲して直線的に開く。</p>
高台付杯	A		<p>杯Aに高台を貼付したもの。高台は指頭圧痕により成形。</p>
	B		<p>杯Aに高台を貼付したもの。高台は回転ナデにより成形。</p>
椀	A <sub>1</sub>		<p>内外面黒色。ヘラ切りの底部に、比較的長い、端部で肥厚する高台を貼付する。体部は内弯して開き、上半で直線的になり、丸い口縁端部をつくる。内面に横方向のミガキ。</p>
	A <sub>2</sub>		<p>内外面黒色。体部中位からは直線的に開く。口縁端部やや尖がり気味。内面回転ナデ。外面中位、指頭圧痕の後ナデ。上位は回転ナデ。</p>
	A <sub>3</sub>		<p>内外面黒色。中広で低い高台を貼付。</p>
	A <sub>4</sub>		<p>内外面黒色。断面三角形の低い高台を貼付。</p>







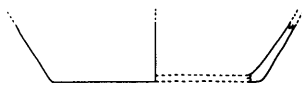
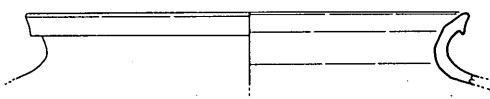
椀	B <sub>1</sub>		内面黒色。外方に開き、端部丸い高台を貼付。
	B <sub>2</sub>		内面黒色。外方に開き、端部で細くなる高台を貼付。体部下位では内弯し、中上位では直線的に開く。
	B <sub>3</sub>		内面黒色。外方に開き、断面隅丸長方形の低い高台を貼付。
	C <sub>1</sub>		土師質土器である。外方に開き、端部で細くなる高台を貼付。内弯して開く体部。外面口縁部に沈線状のものが1条めぐる。
	C <sub>2</sub>		尖がり気味の垂下する高台を貼付。
	C <sub>3</sub>		垂下して端部で肥厚する短い高台を貼付。
	C <sub>4</sub>		断面三角形の低い高台を貼付。
	C <sub>5</sub>		細かく尖がり気味の低い高台を貼付。

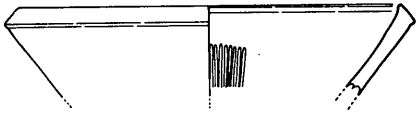
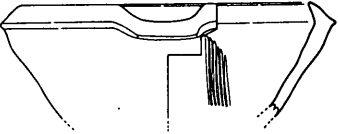

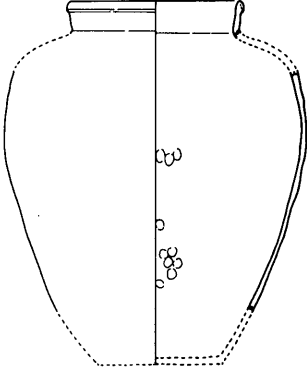
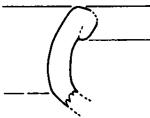


椀	D <sub>1</sub>		瓦質土器である。高台は貼付。内面側は接地するほどに低い。外面側は高台貼付後、底部にヘラ削りを行って高台を高める。内面にハケ目。外面は回転ナデ。
	D <sub>2</sub>		断面半円形の低い高台を貼付。
鉢	A		底部は静止糸切り。体部は内湾して外傾。全形は知り得ない。
盤	A		体部中位から外面側に肥厚させるため、外湾状を呈する。口縁端部は丸くつくる。
	B		体部中央で屈曲し上位は外反させる。口縁端部は丸い。
播鉢	A		口縁部内面側に肥厚。端部面をなす。摺目7条/単位。

<p>播鉢</p>	<p>B</p>		<p>体部上位でやや肥厚。口縁端部は丸くつくる。摺目5条/単位。</p>
<p>甕</p>	<p>A</p>		<p>体部最大径は、器高よりも長い。丸底、外反する短い口縁部。端部は丸い。</p>
<p>鍋</p>	<p>A</p>		<p>底部から内方へ屈曲して体部となる。体部やや外弯して直線的に開く。体部から外方へ強く屈曲して口縁部となる。</p>
	<p>B</p>		<p>頸部外面に指頭圧痕。内面に稜線を残して、口縁部はゆるく外反する。</p>
	<p>C</p>		<p>内面は、頸部からなめらかな曲線を描いて外反する口縁部となる。</p>
	<p>D</p>		<p>体部から直角に屈曲して、水平方向に開く口縁部となる。端部は丸い。</p>
	<p>E</p>		<p>内弯して円傾する体部上位。対角位置に断面弧状の粘土板の下半を貼付し、同板上半と体部との間から体部へ穿孔を加える。</p>



鍋	F		体部上位で屈曲して内傾する。口縁部肥厚する。
釜	A <sub>1</sub>		10mm前後以上に伸びる鑊。鑊より上位に直立する口縁部。
	A <sub>2</sub>		10mm前後以上に伸びる鑊、鑊上面基部からわずかに屈曲して、すぐに口縁端部に至る。
	B		鑊5mm以下と短い。鑊の上位に直立する口縁部。
瓦質土器			
鉢	A		体部中位から内弯して内傾。口縁端部は垂直な面をなす。体部最大径の位置に貼付突帯を2条。突帯間に印花文。突帯間または突帯上に長方形・円形の窓をつくる。
	B		内弯して内傾する体部。口縁部で肥厚し、端部は上面と内面に広い面をつくる。口縁部外面に貼付突帯を2条、突帯間に印花文。
	C		内弯して内傾する体部から屈曲して立上がる口縁部。口縁端部は内外面および上面に平坦面をつくる。口縁端部外面下半に印花文。

甗	A		直立する口・体部。口縁端部は面をなす。口縁部外面に断面三角形の突帯を付す。
	B		直立する口・体部。口縁端部は面をなす。口縁下に断面長方形の鋳をめぐらす。
	C		水平に近く内傾する口縁部。口縁端部で上下に強く肥厚させる。端部は広い面。
陶 器			
こね鉢	A		口縁部内方へ肥厚し、くちばし状を呈する。須恵質土器。
	B		口縁部外方へ断面三角形に肥厚させる。須恵質土器。
	C		口縁部外方へわずかに肥厚させる。須恵質土器。
甕	A		平底。底部端鋭い稜をなす。
甕	A		体部から外弯して強く開く口頸部。口縁端部は外方へ断面三角形に肥厚させる。外面頸部より下方に格子目のタタキを施す。亀山焼。

撻鉢	A		口縁端部内外方へわずかに肥厚する。摺目8条/単位。備前焼。
	B		口縁部内方へ強く肥厚。くちばし状を呈する。摺目6条/単位。備前焼。
	C		体部から、あたかも直角に屈曲したように口縁端部が内方へ肥厚する。断面隅丸長方形を呈する。口縁端部外面は広い面をなし、そこへ3条の凹線を入れる。備前焼。
甕	A		口頸部は外傾して開く。口縁端部、外方へ折り曲げて断面楕円形の玉縁をつくる。備前焼。
	B		口頸部は外弯して開く。口縁端部、外方へ折り曲げて断面円形の玉縁をつくる。備前焼。
壺	A		直立する口頸部。口縁端部は楕円形の玉縁。備前焼。
灯明皿	A		丸底の浅い皿の内面に、断面三角形の低い台をめぐらす。台の3箇所に入り込みを入れる。備前焼。



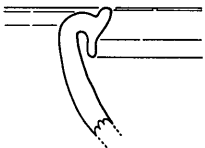
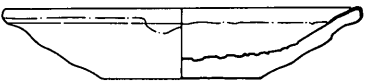
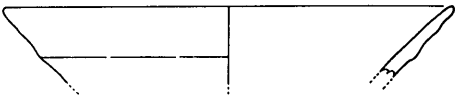
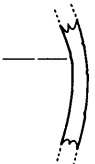
蓋	A		<p>下面は周辺部で上方へ反る。上面中央の凹みにつまみを貼付。備前焼。</p>
甕	A		<p>やや外弯する体部から外方に直角に屈曲して口縁部となる。口縁端部は内方へ強く肥厚する。口縁部断面は「J」形を呈する。常滑焼。</p>
	B		<p>やや外弯する体部から、ほぼ180度曲げて口縁部となる。口縁端部は内外方へ強く肥厚させる。口縁部断面は「一」形を呈する。常滑焼。</p>
皿	A		<p>おろし皿である。底部回転糸切り。内弯気味に開く体部は上位でやや屈曲して外反する。口縁部内面にオリーブ色の釉をめぐらす。底部内面におろし目を格子目に刻む。瀬戸焼。</p>
	B		<p>直線的に強く開く体部。外面に回転ナデによる凹みが数条めぐる。内外面に淡緑灰色の釉を施す。瀬戸焼。</p>
甕	A		<p>体部に檜垣文を施す。信楽焼。</p>

表14 土師質土器・黒色土器・瓦質土器  
(皿・杯・椀等) 分類別集計表

分類	遺 構		R-11 第4層	S-10 第4層	R-11・ S-10以 外の 第4層	第 3 層		
	器種名	タイプ名	破片数	個体数	個体数		破片数	
皿	A	土師質土器	245	244	324	115	(1)	(3)
	B		84	59	5	11		
	C		17	17	8	4		(4)
	D		3	2	0	0		
	E		2	2	0	0		
	F1		3	3	0	0		
	F2		1	1	0	0		
	G		7	4	0	0		
	H		1	1	0	0	650	202
	I		0	0	0	0	(1)	
	J		1	1	0	0		
	K		1	1	1	0		
	L		6	6	0	1		
	M		10	9	2	0		
	N		22	22	41	13		(3)
	O		4	4	0	0		
P		1	1	0	0			
脚付皿	A		2	2	1	0	0	0
	B		1	1	0	0		
杯	A		532	290	259	275		
	B		737	306	14	22		
	C1		23	6	2	3		
	C2		1	1	0	0	1163	529
	C3		3	3	0	0		
	D		11	11	2	9		
	E		2	2	0	0		
F		1	1	0	0			
高台付杯	A		0	0	1	0	0	0
	B		0	0	1	0		
椀	A1	黒色土器	2	2	0	0		
	A2		1	1	0	0		
	A3		0	0	0	0	(1)	
	A4		0	0	0	0	(1)	
	B1		3	3	0	0		
	B2		2	2	0	1		
	B3		1	1	1	0	24	22
	C1	土師質土器	4	4	0	0		
	C2		3	3	0	0		
	C3		1	1	0	0		
	C4		2	2	0	0		
	C5		1	1	0	0		
	D1	瓦質土器	3	3	0	0		
	D2		0	0	1	0		
鉢	A	土師質土器	1	1	0	0	0	0

表15 土師質土器・黒色土器・瓦質土器  
(皿・杯・椀等) 遺構別集計表

遺 構 名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SP178			
皿	A	1	1
	A	2	1
SP172			
皿	A	1	1
	A	1	1
SP155			
杯	A	3	1
SP171			
皿	A	1	1
SP275			
皿	A	1	1
SP166			
皿	A	1	1
	A	3	2
	C1	1	1
SP228			
皿	A	1	1
SP292			
皿	A	1	1
	A	1	1
SP176			
皿	C	1	1
SP238			
皿	N	1	1
SP152			
杯	A	1	1
SP180			
杯	A	1	1
SP273			
杯	A	1	1
SP141			
杯	A	1	1
SP299			
皿	A	1	1
SP194			
皿	A	1	1
	A	3	1
SP230			
皿	A	1	1
	A	9	1
SP233			
皿	A	1	1
SP258			
皿	A	1	1
	N	1	1
	A	3	1
	D	1	1
SP30			
皿	H	1	1
	B1	1	1
	(?)	1	1
SP38			
杯	C3	1	1
SP56			
椀	B	1	1
	C1	2	2
SP126			
皿	J	1	1
SP133			
皿	A	1	1
SP135			
杯	A	1	1
SP138			
皿	A	2	2
SP158			
皿	A	1	1
	C1	1	1

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SP167			
杯	A	2	1
SP320			
皿	A	1	1
杯	F	1	1
SP327			
脚付碗	皿 A	1	1
	A1	1	1
	B3	1	1
SP328			
杯	C2	1	1
SP352			
皿	O	2	2
SP322			
皿	G	7	4
	O	1	1
SP205			
皿	A	2	2
杯	A	1	1
SP276			
碗	C1	1	1
SP222			
皿	A	1	1
杯	A	1	1
SP266			
皿	A	1	1
SP248			
杯	A	3	3
碗	D1	1	1
SP280			
杯	B	1	1
SP294			
杯	A	1	1
SP209			
杯	A	1	1
SK010			
皿	A	1	2
	D	3	1
	M	7	6
杯	C3	1	1
	E	2	2
碗	A2	1	1
SK011			
皿	E	2	2
	F1	3	3
	F2	1	1
	O	1	1
脚付碗	B	1	1
	A1	1	1
	B1	1	1
SK016			
皿	A	7	7
杯	A	10	5
SK017			
皿	A	9	9
杯	C	1	1
	A	6	2
SK018			
杯	B	2	1
	C1	20	3
SK019			
皿	A	9	9
SK020			
皿	A	33	33
杯	A	8	2
碗	D1	1	1
SK021			
杯	A	2	2
SK022			
皿	A	4	4
杯	A	4	1
碗	C2	1	1
SK023			
杯	B	1	1

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SK024			
皿	A	5	5
杯	A	13	9
	C1	1	1
碗	C4	2	2
SK025			
皿	A	7	7
	B	1	1
	C	1	1
	N	6	6
杯	A	7	4
碗	B1	1	1
SK026			
皿	C	2	2
杯	N	1	1
	A	3	3
	D	2	2
SK028			
皿	A	6	6
	C	2	2
	N	3	3
杯	A	11	8
	D	1	1
SK044			
碗	B2	1	1
SK045			
杯	B	1	1
碗	C2	1	1
SE01			
皿	B	1	1
杯	A	1	1
	B	5	3
SD02石積み遺構内			
皿	A	1	1
杯	A	3	1
	B	21	5
碗	C5	1	1
SD02石積み遺構間			
皿	B	2	1
杯	A	1	1
	B	3	2
SD02黒色土層			
皿	A	3	3
	B	11	6
	C	1	1
	L	3	2
	N	1	1
杯	A	9	9
	B	215	75
碗	D1	1	1
	D	1	1
SD02砂質土層			
皿	A	27	27
	B	49	33
	L	2	2
	M	1	1
	N	7	7
杯	A	97	76
	B	323	157
	D	3	3
SD05			
杯	A	1	1
	B	2	1
SD06			
皿	A	1	1
杯	B	1	1
SD07			
皿	A	26	26
	B	12	9
	C	4	4
	L	1	1
	M	1	1
	N	1	1
杯	A	65	29
	B	61	19
SD08			
皿	A	19	19
	B	8	8
	C	1	1
	N	1	1
杯	A	49	25
	B	63	20
	D	1	1

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SD09			
皿	A	35	34
杯	A	67	35
	D2	1	1
碗	C2	1	1
SD010			
皿	A	3	3
	C	1	1
	M	1	1
杯	A	9	9
	B	1	1
	C1	1	1
SD011			
皿	A	8	8
杯	C	1	1
	A	74	18
	D	1	1
SD015			
皿	A	1	1
杯	A	5	5
SD016			
皿	A	9	9
杯	C	1	1
	A	14	7
SD017			
皿	A	2	2
杯	B	1	1
	A	9	4
	B	1	1
SD02南半			
皿	A	3	3
杯	P	1	1
	B	28	10
SX04			
皿	A	1	1
杯	A	15	10
	B	6	5
	C2	1	1
	A	1	1
SX010			
皿	A	1	1
杯	B	1	1
自然流路跡			
碗	C1	1	1
R-11第4層			
皿	A	324	5
	B	8	8
	C	1	2
	K	2	1
	M	41	1
	N	1	259
脚付杯	A	14	14
	A	2	2
	B	2	1
	C1	515	2
	D	1	1
高台付杯	A	2	2
	B	1	1
碗	B3	1	1
	D2	13	1
S-10第4層			
皿	A	115	11
	B	11	4
	C	4	13
	L	1	1
	N	1	275
杯	A	502	22
	B	3	3
	C1	9	9
碗	D	7	1
U-10第4層			
皿	I	1	1
碗	A3	1	1
	A4	1	1

表17 土師質土器(盤・播鉢・甕・鍋・釜)遺構別・分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SP278			
鍋	B	1	1
SP305			
釜	A2	1	1
SK020			
播鉢	A	3	1
SK024			
釜	A2	1	1
SK044			
甕	A	1	1
SK045			
釜	A1	1	1
SD02黒色土層			
鍋釜	D	2	1
	A1	1	1
SD02砂質土層			
盤	A	14	2
	B	4	3
播鉢	A	3	1
	B	3	1
	A	1	1
鍋釜	A1	18	1
	B	6	2
SD07			
播鉢	A	1	1
鍋	A	4	1
SD08			
盤	B	3	1
	A	2	1
	B	7	3
	A	12	6
	E	8	6
釜	A1	5	2
	B	3	3
SD09			
鍋	A	1	1
	B	2	1
釜	A1	1	2
SD02南半			
播鉢	A	1	1
	B	2	1
鍋	B	3	3
	E	2	2
SX04			
鍋	B	2	2
釜	B	1	1
SX09			
鍋釜	C	1	1
	A1	3	1
SX010			
播鉢	A	1	1
鍋釜	A	1	1
	A1	1	1
R-11第4層			
播鉢			0
鍋釜		133	11
			11
S-10第4層			
播鉢			5
鍋釜		60	11
			5

表16 土師質土器(盤・播鉢・甕・鍋・釜)  
分類別集計表

分類		遺構		第4層		第3層					
器種名	タイプ名	質	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数			
盤	A	土師質土器	14	2	3095		2775				
	B	〃	7	4							
播鉢	A	〃	12	7					(1)		
	B	〃	5	3							
甕	A	〃	1	1							
鍋	A	〃	11	6							
	B	〃	18	13							
	C	〃	1	1							
	D	〃	2	1							
	E	〃	14	9							
	F	〃	0	0	(1)						
釜	A1	〃	15	8							
	A2	〃	2	2							
	B	〃	11	6							

表18 瓦質土器(鉢・釜)分類別集計表

分類		遺構		第4層		第3層		
器種名	タイプ名	質	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
鉢	A	瓦質土器	5	2	4	4	4	3
	B	〃	3	3				
	C	〃	2	2				
釜	A	〃	0	0	3	3	0	0
	B	〃	0	0				

表21 須恵質土器遺構別・分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SP261			
甕	A	1	1
U-10第4層			
甕	A	1	1

表22 東播系須恵質土器分類別集計表

分類		遺構		R-11・S-10第4層		
器種名	タイプ名	質	破片数	個体数	破片数	個体数
鉢	A	須恵質土器	3	3	5	5
	B	〃	1	1	0	0
	C	〃	1	1	0	0

表24 備前焼分類別集計表

分類		遺構		第4層		第3層	
器種名	タイプ名	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
皿	A	1	1				
播鉢	A						(1)
	B	6	3				(3)
	C	1	1				
	(不明)	3	3				
甕	A	42	6		2		(1)
	B						(1)
	(不明)	4	4				
甕	A						(1)
蓋	A						(1)

表26 常滑焼分類別集計表

分類		遺構		第4層	
器種名	タイプ名	破片数	個体数	破片数	個体数
甕	A	1	1	0	0
	B	3	2	0	0
	(不明)	1	1	1	1

表27 常滑焼遺構別・分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SD07			
甕	A	1	1
SD02南半			
甕	B	3	2
	(不明)	1	1
S-10第4層			
甕	(不明)	1	1

表19 瓦質土器(鉢・釜)遺構別・分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SD02砂質土層			
鉢	A	5	2
	B	1	1
SD07			
鉢	B	1	1
SD02南半			
鉢	B	1	1
	C	2	2
R-10第4層			
鉢	(?)	1	1
R-11第4層			
釜	B	1	1
S-10第4層			
鉢	A	1	1
	A	1	1
	C	1	1
S-11第3層			
鉢	A	1	1

表20 須恵質土器分類別集計表

分類		遺構		第4層		
器種名	タイプ名	質	破片数	個体数	破片数	個体数
甕	A	須恵質土器	1	1	1	1

表23 東播系須恵質土器遺構別・分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SK017			
鉢	A	1	1
SK020			
鉢	C	1	1
SD02砂質土層			
鉢	B	1	1
SD08			
鉢	A	1	1
SD010			
鉢	A	1	1
R-11第4層			
鉢	A	2	2
S-10第4層			
鉢	A	3	3

表28 信楽焼遺構別・分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SD02南半			
(甕)		1	1

表25 備前焼遺構別・  
分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SK043			
榎鉢	B	1	1
SD02石積み遺構間			
甕	A (不明)	6	1
SD02砂質土層			
榎鉢	B A	3 27	1 1
SD08			
甕	(不明)	1	1
SD02南半			
皿	A	1	1
榎鉢	C	1	1
甕	A	2	2
R-11第4層			
甕	A	1	1
S-10第4層			
甕	A	1	1
R-11第3層			
榎鉢	B A	1 1	1 1
S-11第3層			
榎鉢	A B	1 2	1 2
壺	A	1	1
T-11第3層			
壺蓋	B A	1 1	1 1

表29 瀬戸焼遺構別・  
分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
SD02砂質土層			
皿	A	1	1
SD02南半			
おろし皿	A	1	1

表30 亀山焼遺構別・  
分類別集計表

遺構名			
器種名	タイプ名	破片数	個体数
S-10第4層			
甕	A	1	1

表31 六古窯陶器・東播系須恵質  
土器包含層別集計表

遺物名	第4層		第3層	
	破片数	個体数	破片数	個体数
六古窯陶器 東播系須恵質土器	2260	117	2240	75

表32 輸入陶磁器器種別集計表

分類		遺構		第3・4層	
種類	器種名	破片数	個体数	破片数	個体数
白磁	皿	1	1	2	2
	碗	0	0	3	3
青磁	皿	15	0	1	1
	碗		10	18	7
	鉢		1	1	1
黒釉	碗	0	0	3	3

表34 近世陶磁器分  
類別集計表

分類		遺構	
種類	器種名	破片数	個体数
染付	碗	3	3
陶磁器	碗	3	3

表35 近世陶磁器遺構  
別・分類別集計表

遺構名			
種類	器種名	破片数	個体数
SD02南半			
染付陶磁器	碗	1	1
	碗	2	2
SX010			
染付陶磁器	碗	2	2
	碗	1	1

表33 輸入陶磁器遺構  
別・器種別集計表

遺構名・包含層名			
種類	器種名	破片数	個体数
SP143			
青磁	碗	1	1
SD02砂質土層			
白磁	皿	1	1
青磁	碗	6	6
	鉢	1	1
SD08			
青磁	碗	2	1
SD02南半			
青磁	碗	1	1
SX010			
青磁	碗	1	1
R-10第4層			
黒釉	碗	1	1
R-11第4層			
白磁	皿	2	2
青磁	碗	8	3
S-10第4層			
白磁	碗	2	2
青磁	碗	3	3
S-11第4層			
黒釉	碗	1	1
R-11第3層			
青磁	皿	1	1
	碗	1	1
黒釉	碗	1	1
U-7第3層			
青磁	鉢	1	1
V-7第3層			
白磁	碗	1	1



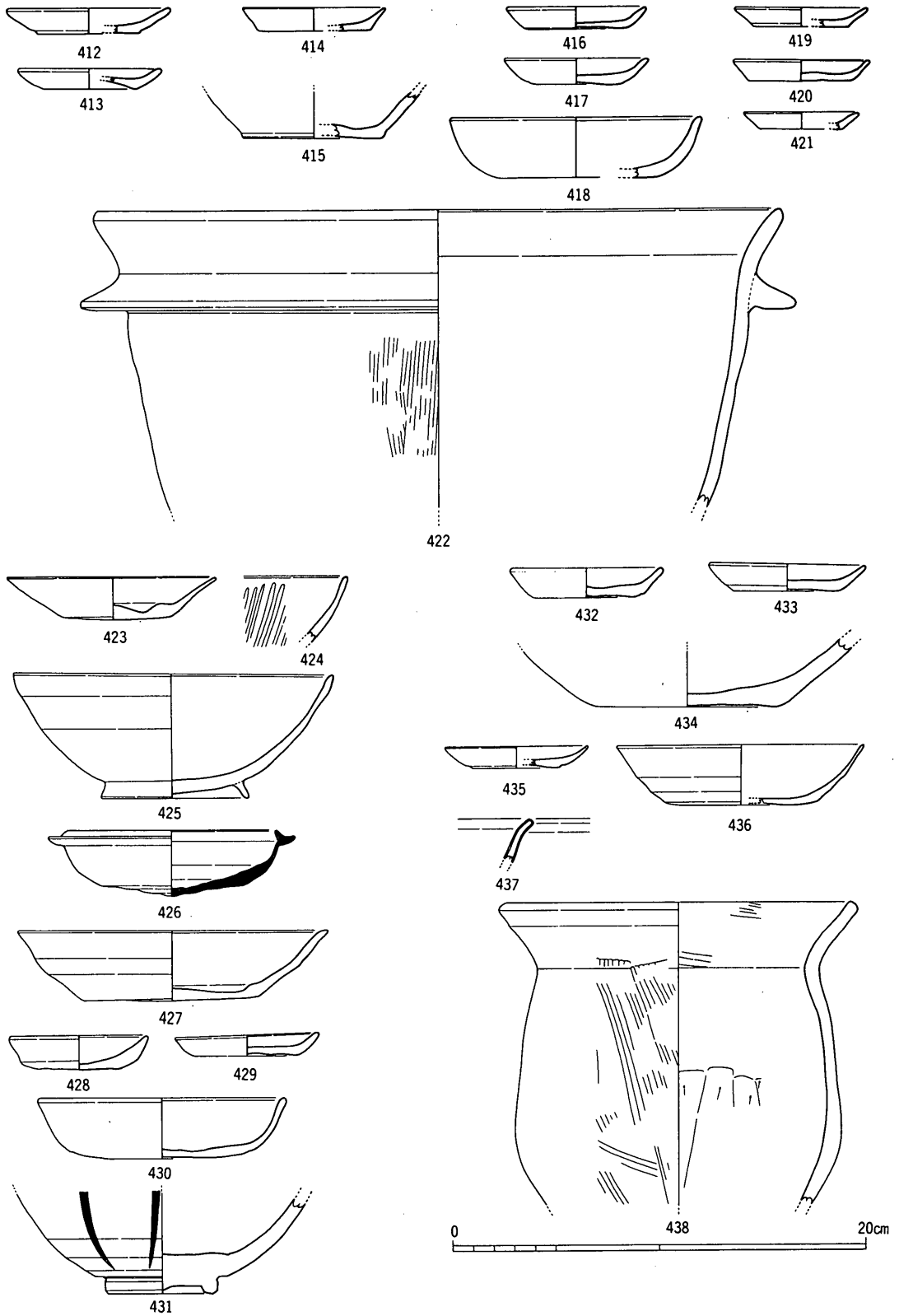


图82 SP出土土器实测图(1) (1/3)

表36 第4・3層出土土器類集計表

第4層

	土師質土器												瓦質土器				山焼		六古窯・須恵質土器		輸入陶磁器		近世陶磁器		須恵器		合計	比率 (%)								
	皿			杯			椀			(不明片)			盤・鉢・甕・鍋・釜			(不明片)			鉢		釜		破片数	比率 (%)	破片数	比率 (%)			破片数	比率 (%)	破片数	比率 (%)				
	破片数	重量(g)	比率 (%)	破片数	重量(g)	比率 (%)	破片数	重量(g)	比率 (%)	破片数	重量(g)	比率 (%)	破片数	重量(g)	比率 (%)	破片数	重量(g)	比率 (%)	破片数	比率 (%)	破片数	比率 (%)														
Q-11											23	140	100.00															4	23	100.00						
R-10	63	600	6.54	126	2450	13.07	2	20	0.21	488	2100	50.62				46	2300	4.77	218	4250	22.61	1	0.10							18	1.87	2	0.21	101	964	100.00
R-11	409	2910	13.40	515	5850	16.87	13	87	0.43	1868	8825	61.19	29	1500	0.95	162	4350	5.31	1	0.03	1	0.03							40	1.31	15	0.49	262	3053	100.01	
S-10	164	1500	4.80	502	5850	14.69	7	70	0.20	2333	10250	68.26	45	2500	1.32	299	6100	8.75	1	0.03	2	0.06	1	0.03			58	1.70	6	0.18	671	3418	100.02			
S-11											23	130	18.40																		129	125	100.00			
T-9																																118	121	100.00		
T-10											13	110	5.33																			92	244	100.00		
T-11											12	85	30.77																			49	39	100.00		
U-10	14	150	2.68	20	310	3.83	2	15	0.38	66	330	12.64																					522	99.99		
U-11																																504	848	100.00		
V-10																																	414			
V-11																																	463	548	100.00	
合計	650	5160		1163	14460		24	192		4826	21970		120	6300		2975	35310		3		3		1		117		23				2807					

第3層

Q-11	59	605	17.35	118	1550	34.71					145	600	42.65																			19	340	100.00				
R-10											143	565	69.76																			34	205	100.01				
R-11	90	750	7.78	261	2550	22.56	2	10	0.17	648	2300	56.01	23	1100	1.99	110	2300	9.51											17	1.47	3	0.26	3	0.26	101	1157	100.01	
S-10	18	135	4.37	53	560	12.86	1	5	0.24	280	1200	67.96																					97	412	99.99			
S-11	4	25	1.20	21	280	6.33					212	900	63.86																				72	332	100.00			
T-7											27	220	50.94																					27	53	100.00		
T-8	8	60	5.71	3	35	2.14	3	35	2.14	99	650	70.71																					107	140	99.99			
T-10	3	50	1.27	9	85	3.81	3	20	1.27	147	600	62.29																					191	236	100.00			
T-11											57	450	7.96	30	2200	4.19	602	5200	84.08	2	0.28							24	3.35			1	0.14	224	716	100.00		
U-7	10	85	2.91	14	135	4.07	3	50	0.87	237	950	68.90	14	445	4.07	64	1150	18.60											1	0.29	1	0.29	68	344	100.00			
U-9											95	630	37.55																				2	0.79	103	253	100.00	
U-10	5	60	1.52	13	150	3.95	8	115	2.43	211	1000	64.13																					111	329	99.99			
V-7											202	1400	26.17	11	645	1.42	558	4350	72.28											1	0.13					62	772	100.00
V-8																																	50	186	100.00			
V-9											6	100	7.79																					17	77	100.00		
V-10											60	390	17.70																					1	0.29	111	339	100.00
V-11	5	75	0.72	37	600	5.33	2	80	0.28	391	1500	56.34																						5	0.72	279	694	99.98
合計	202	1845		529	5945		22	315		2960	13455		78	4390		2697	30560		4								75		5		13		1673					

合計（破片数）は、須恵器破片数を除いたものの計である。

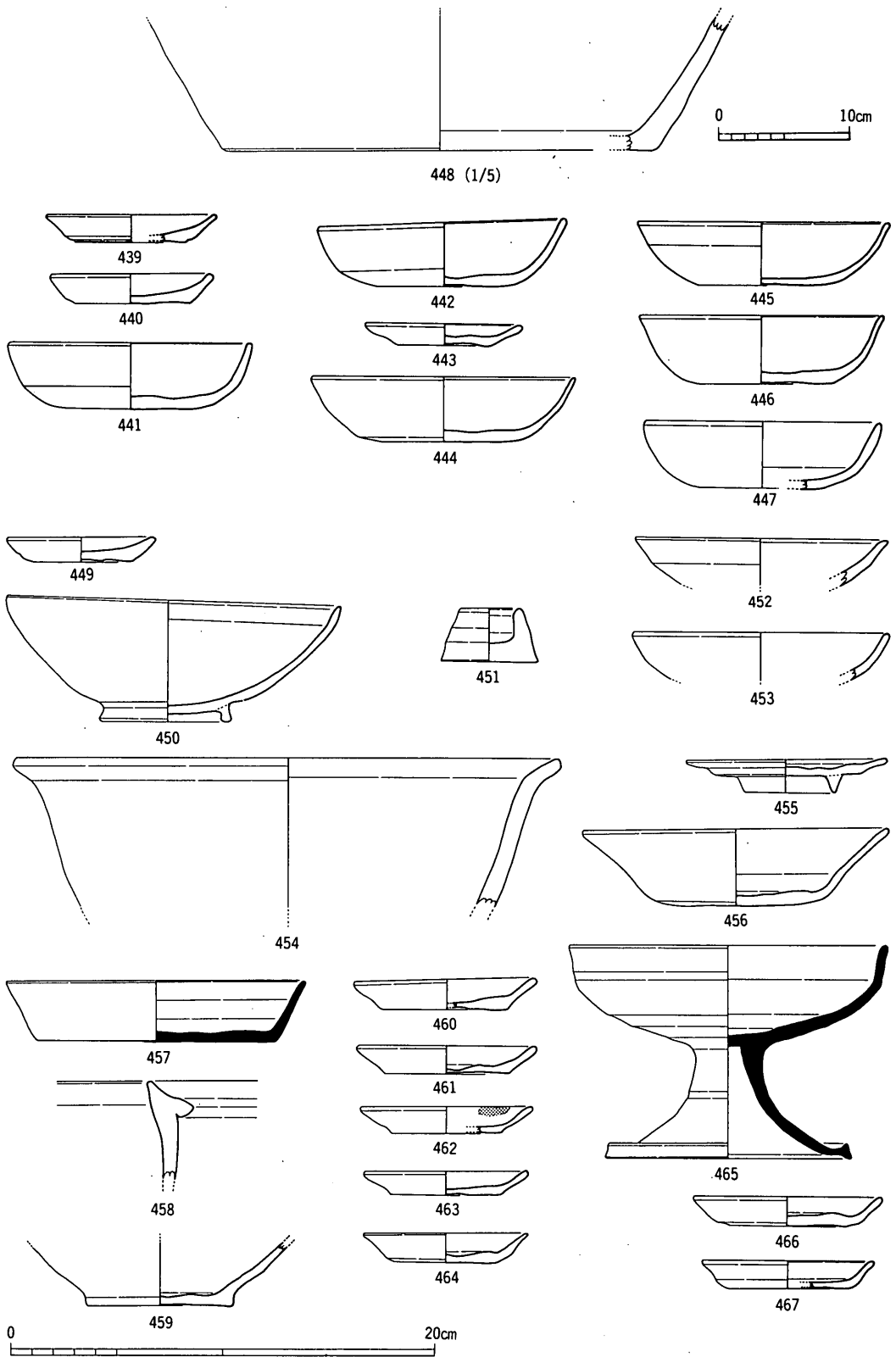


图83 SP出土土器实测图(2) (1/3·1/5)

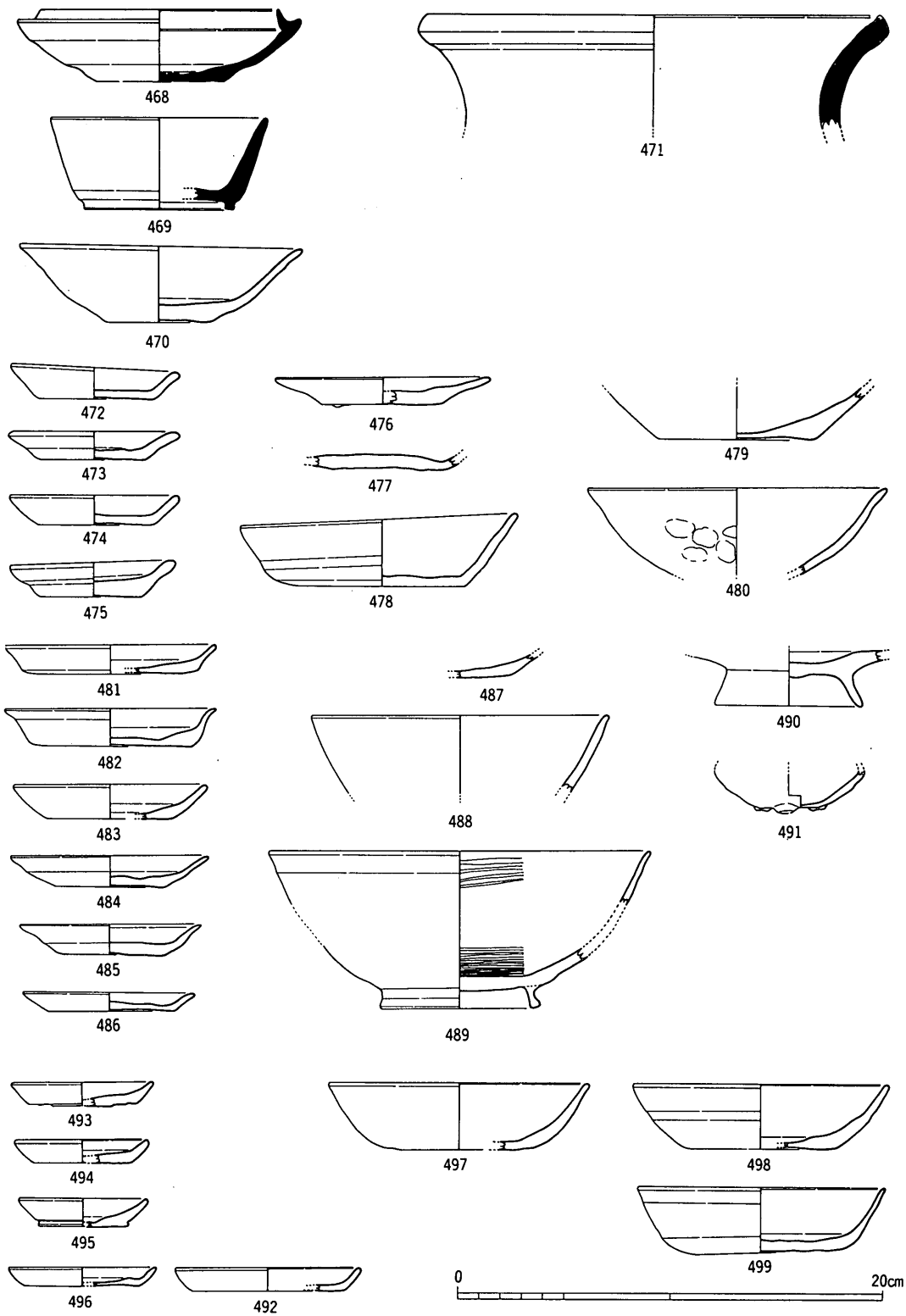


图84 S E 01, S K 010 · 011 · 016 · 017 · 018出土土器实测图 (1/3)

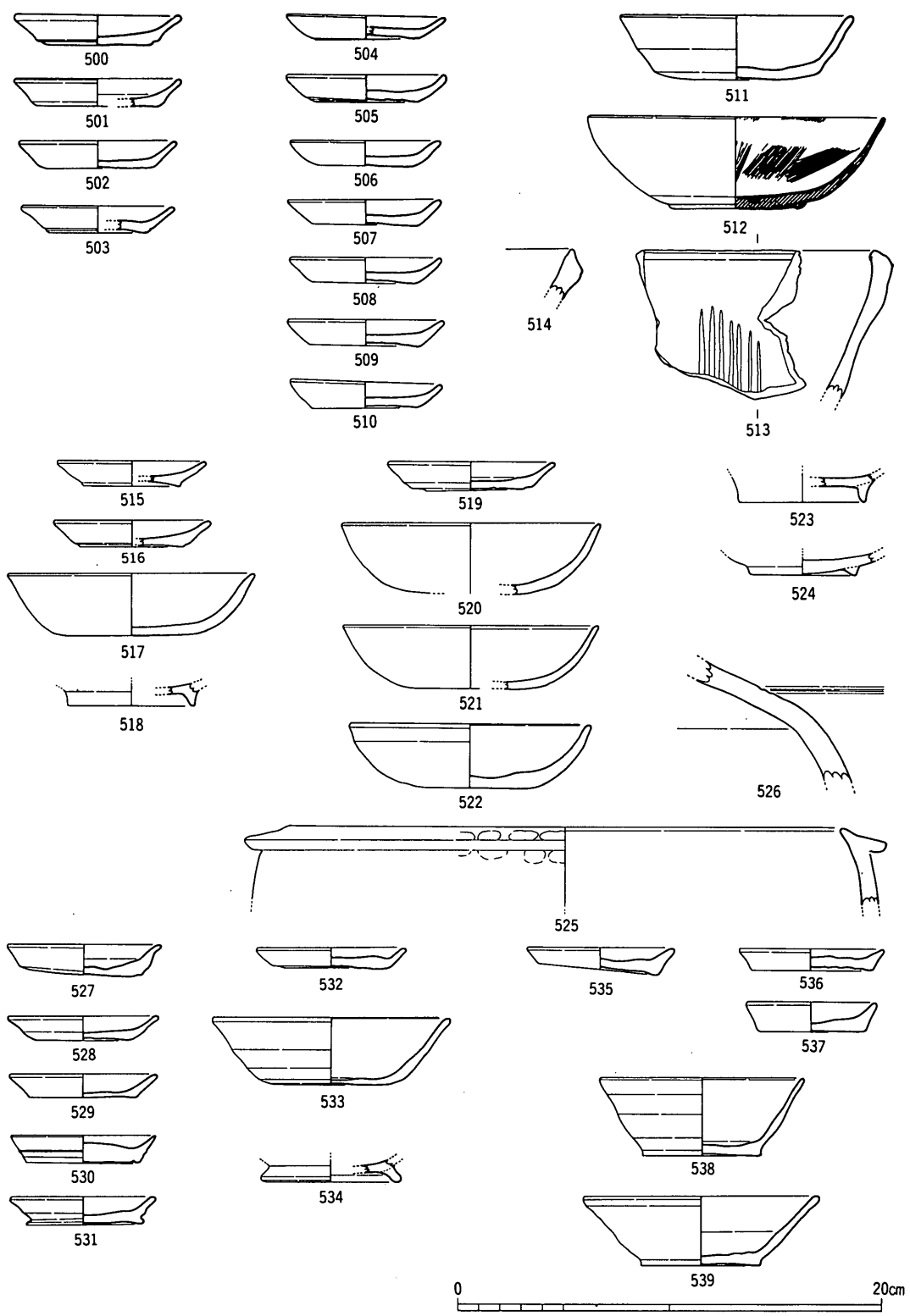


图85 S K 019 · 020 · 022 · 024 · 025 · 026出土土器实测图 (1/3)

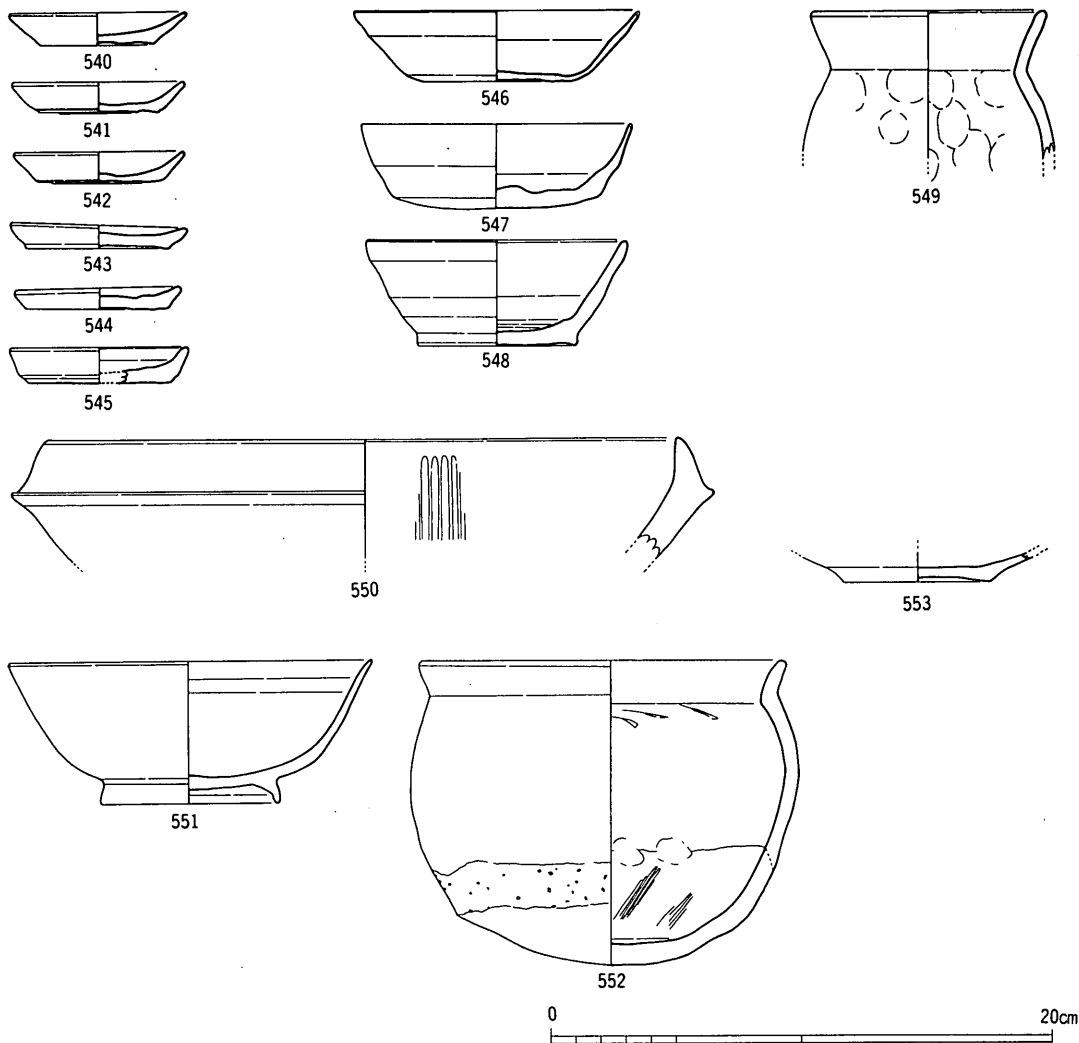


图86 S K 028 · 043 · 044 · 045出土土器实测图 (1/3)

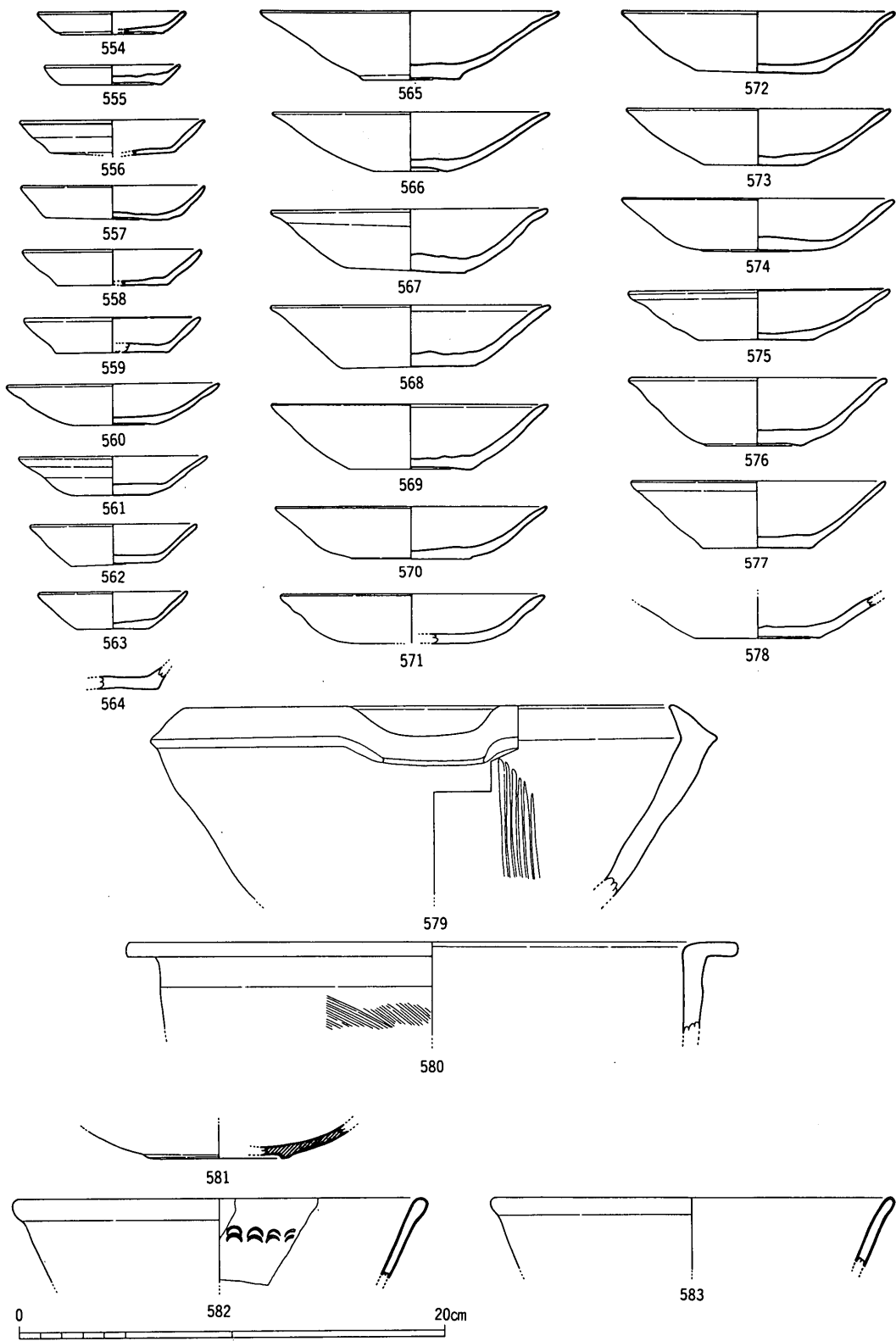


图87 S D 02黑色土層出土土器実測図 (1/3)

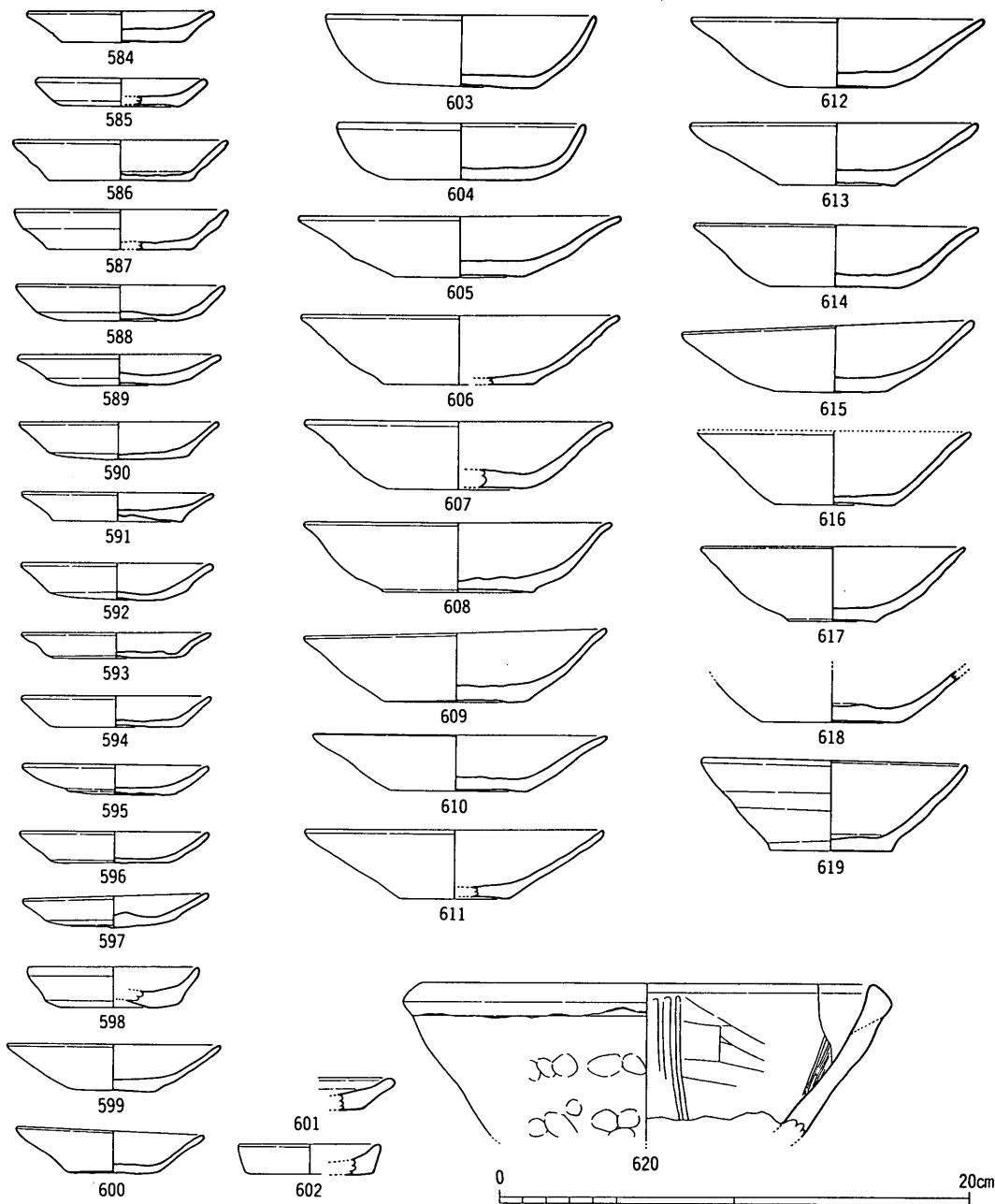


图88 S D 02砂質土層出土土器実測図(1) (1/3・1/5)



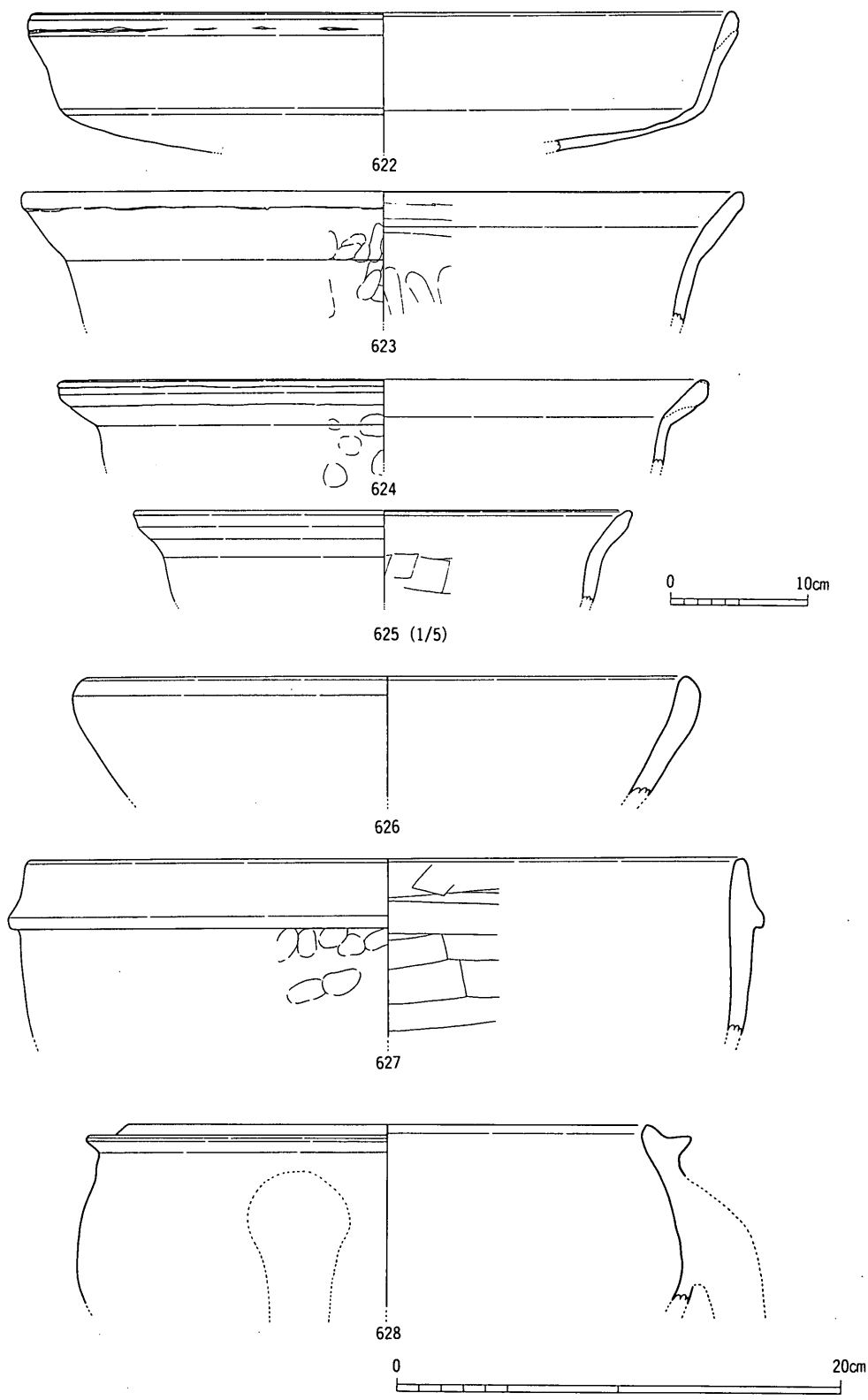


图89 S D02砂質土層出土土器実測図(2) (1/3・1/5)

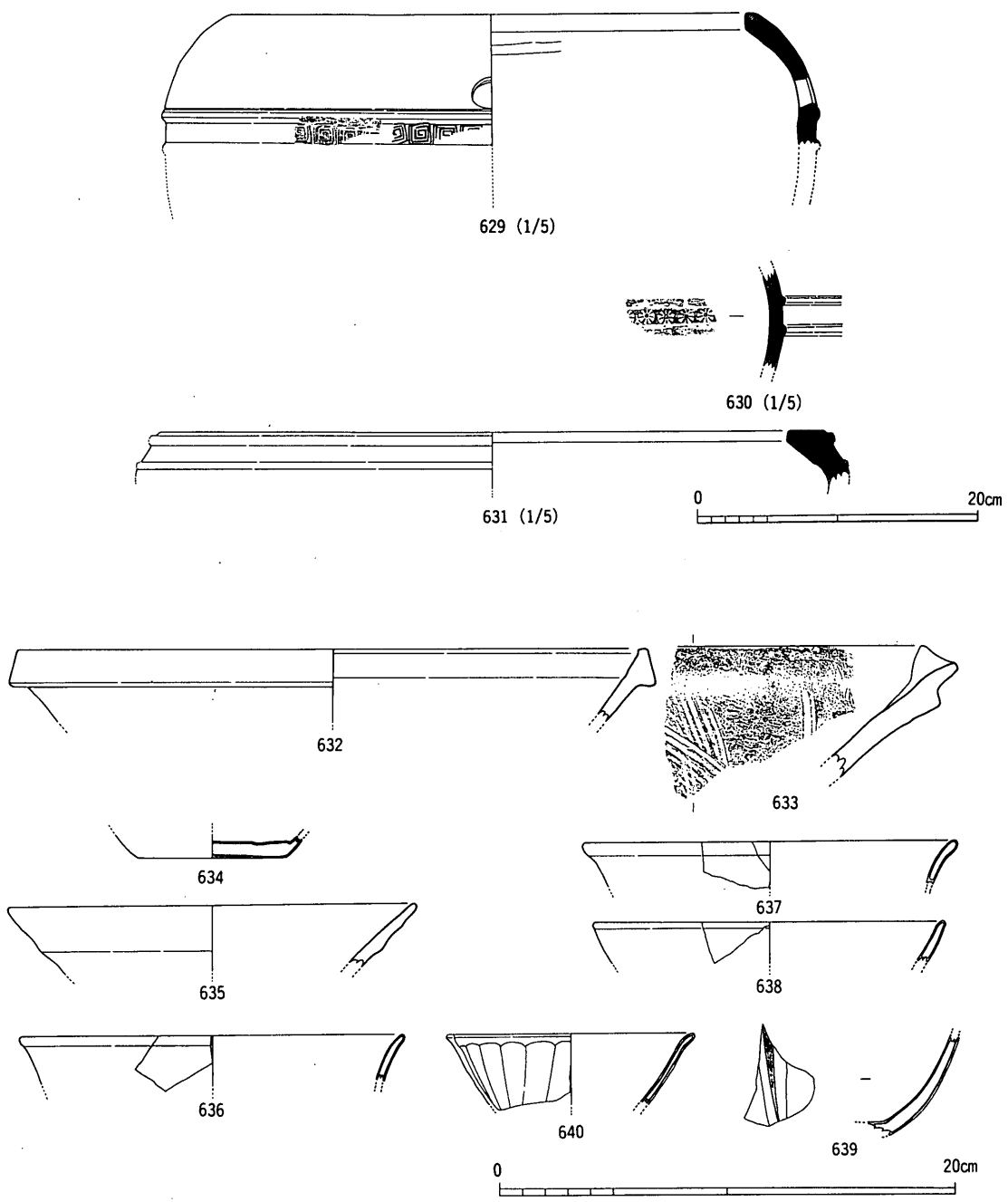


图90 S D02砂質土層出土土器実測图(3) (1/3 · 1/5)

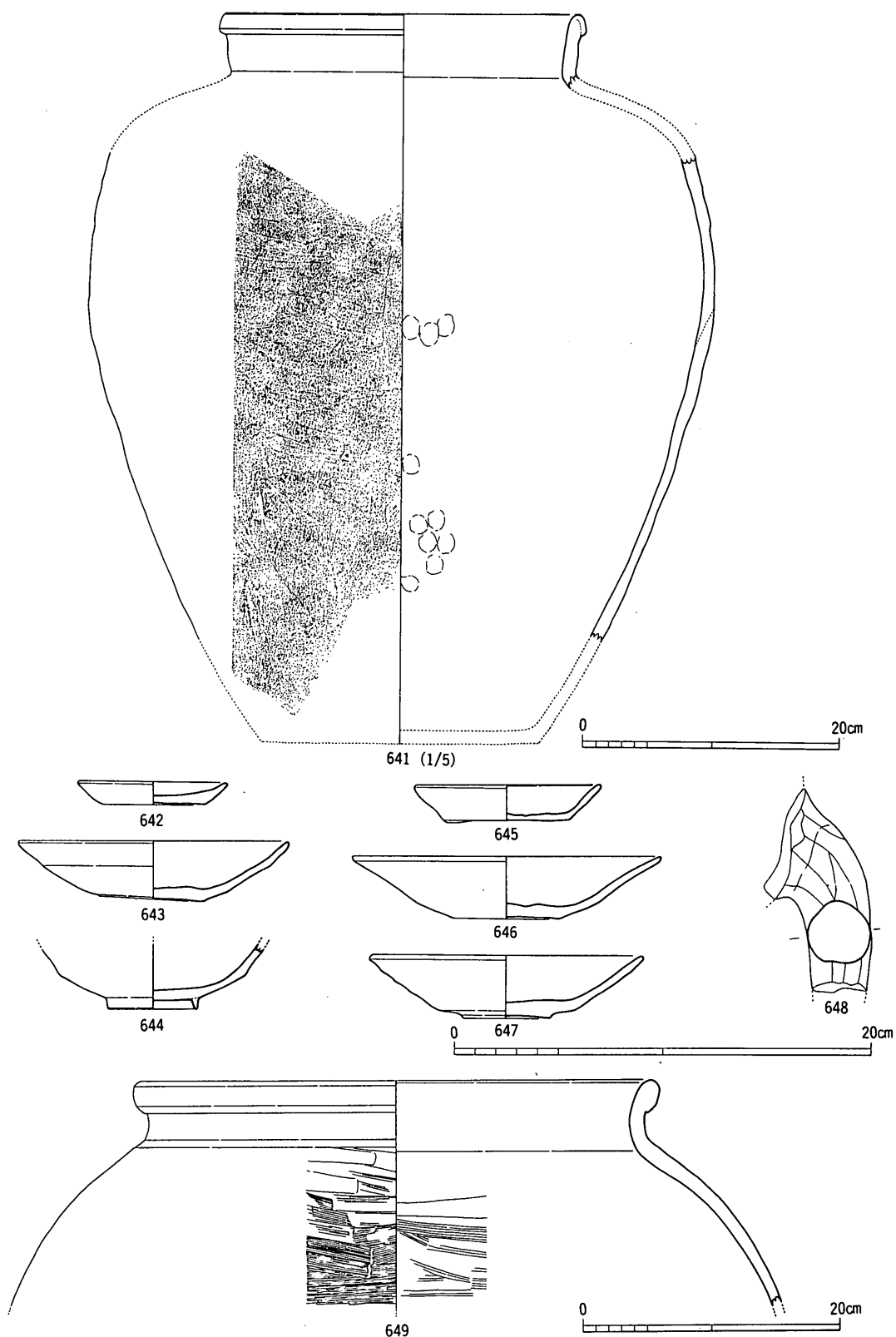
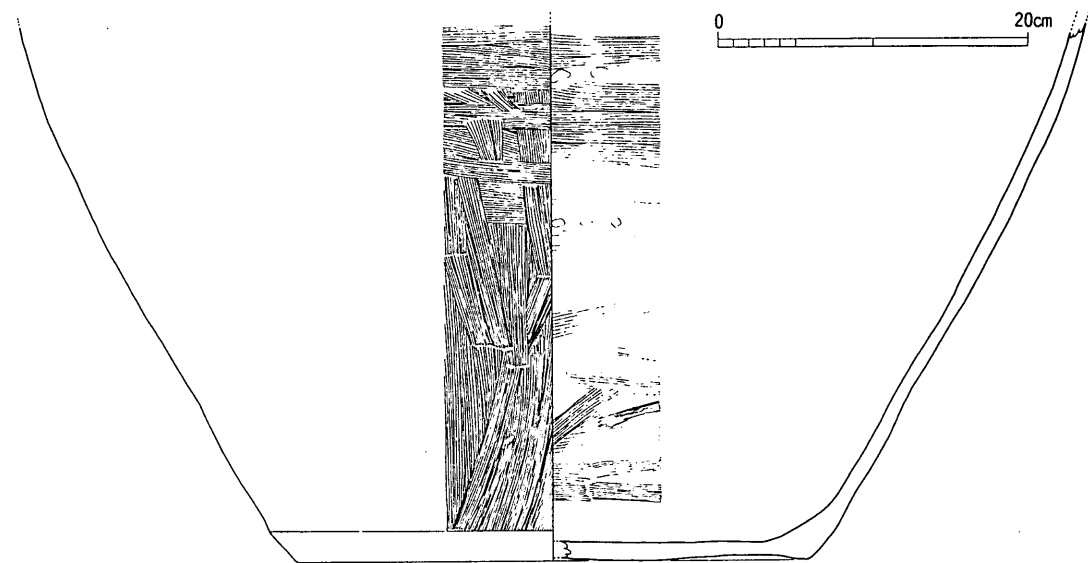


図91 S D02石積み遺構内・石積み遺構間出土土器実測図 (1/3・1/5)



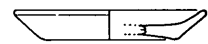
650 (1/5)



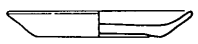
651



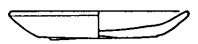
652



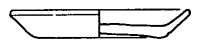
653



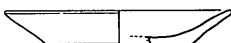
654



655



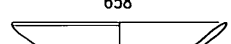
656



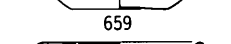
657



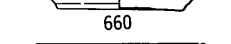
658



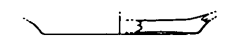
659



660



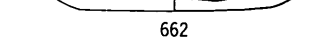
661



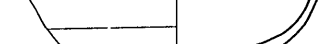
667



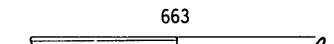
662



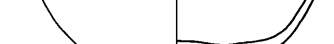
663



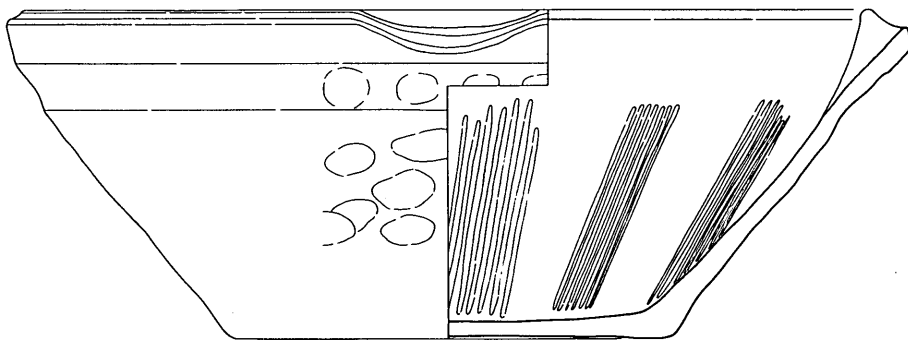
664



665



666



668

図92 S D02石積み遺構間, S D06・07出土土器実測図 (1/3・1/5)

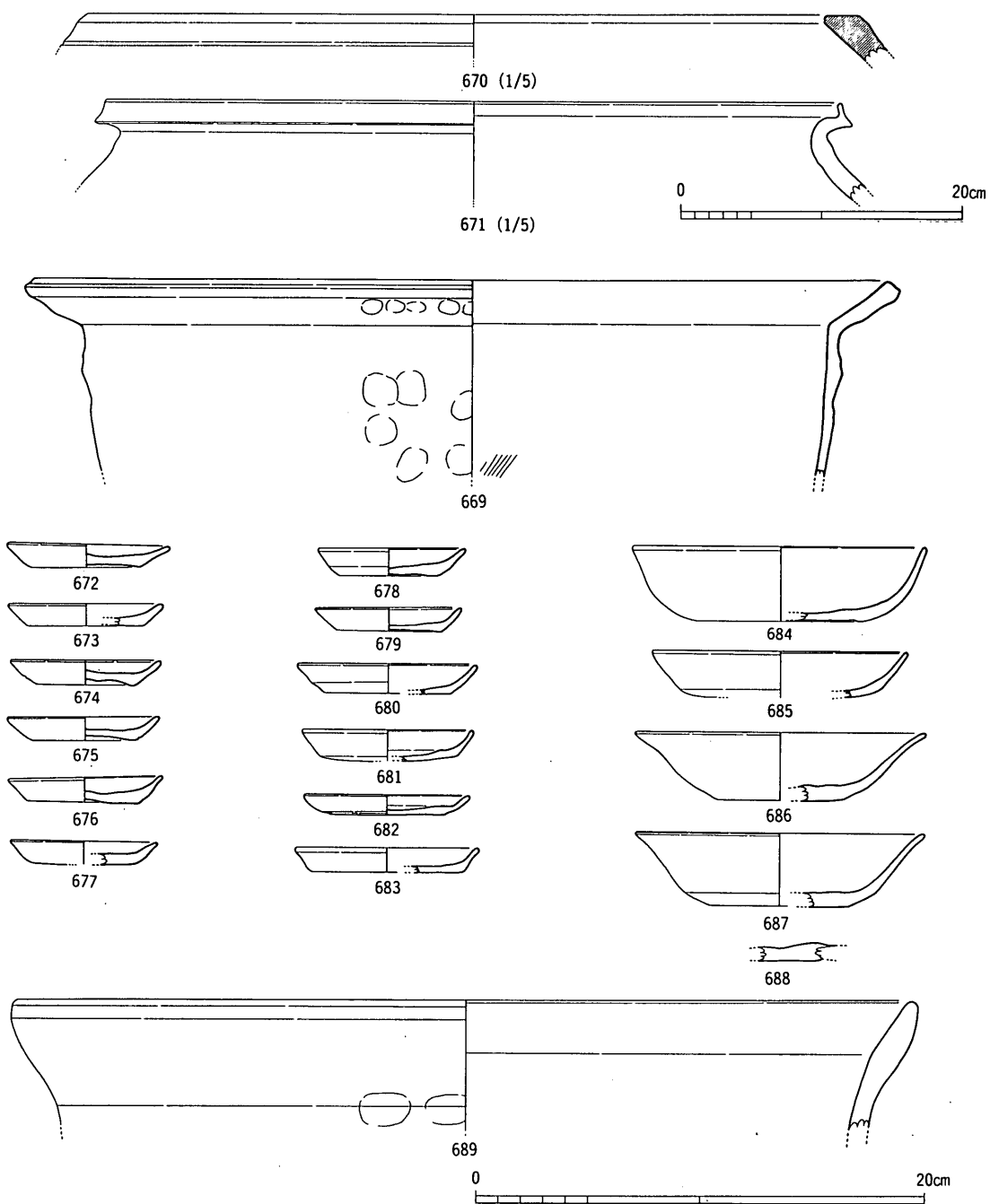


图93 S D 07 · 08(1)出土土器实测图 (1/3 · 1/5)

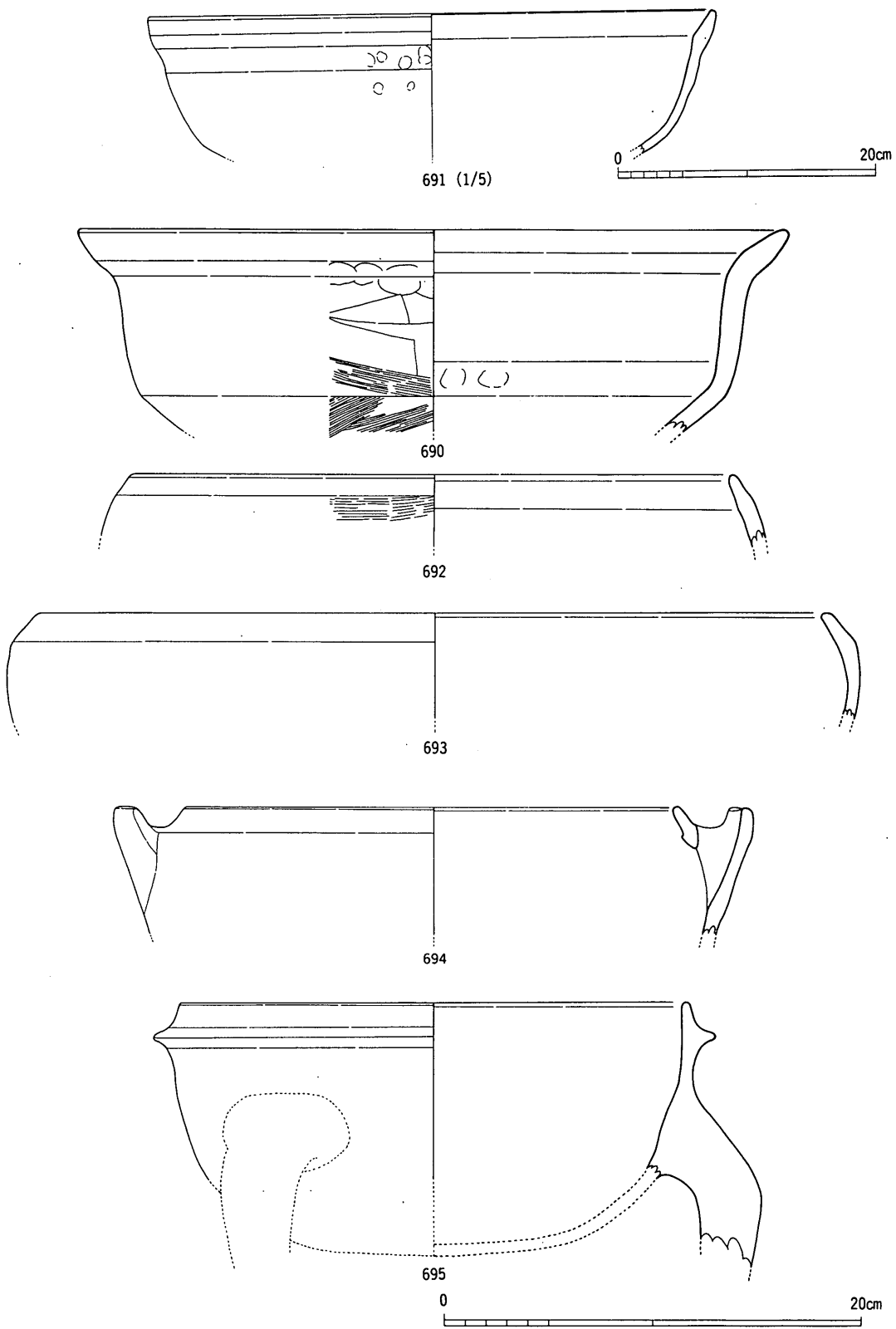


图94 S D08出土土器实测图(2) (1/3 · 1/5)

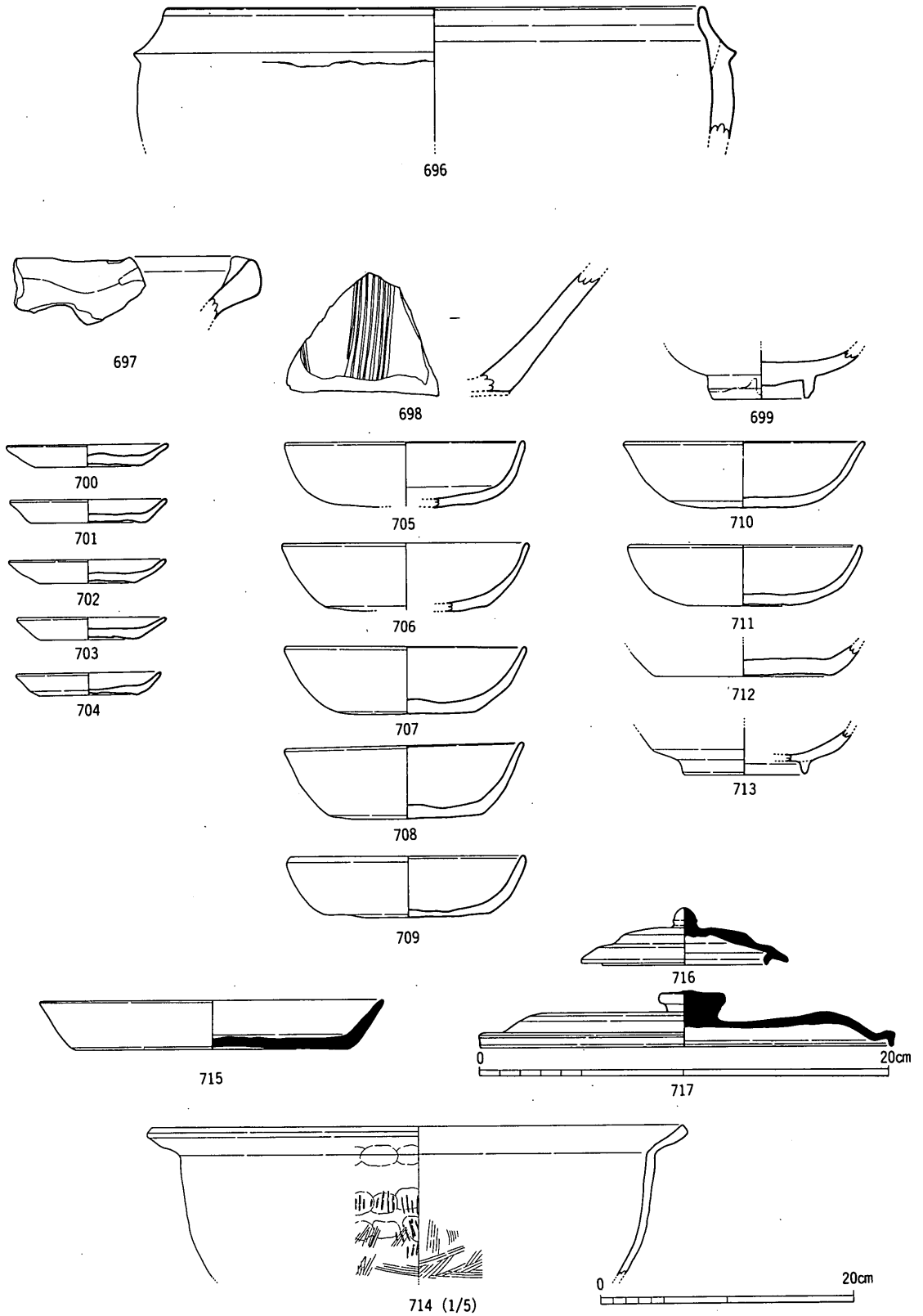


图95 S D08(3)·09出土土器实测图(1/3·1/5)

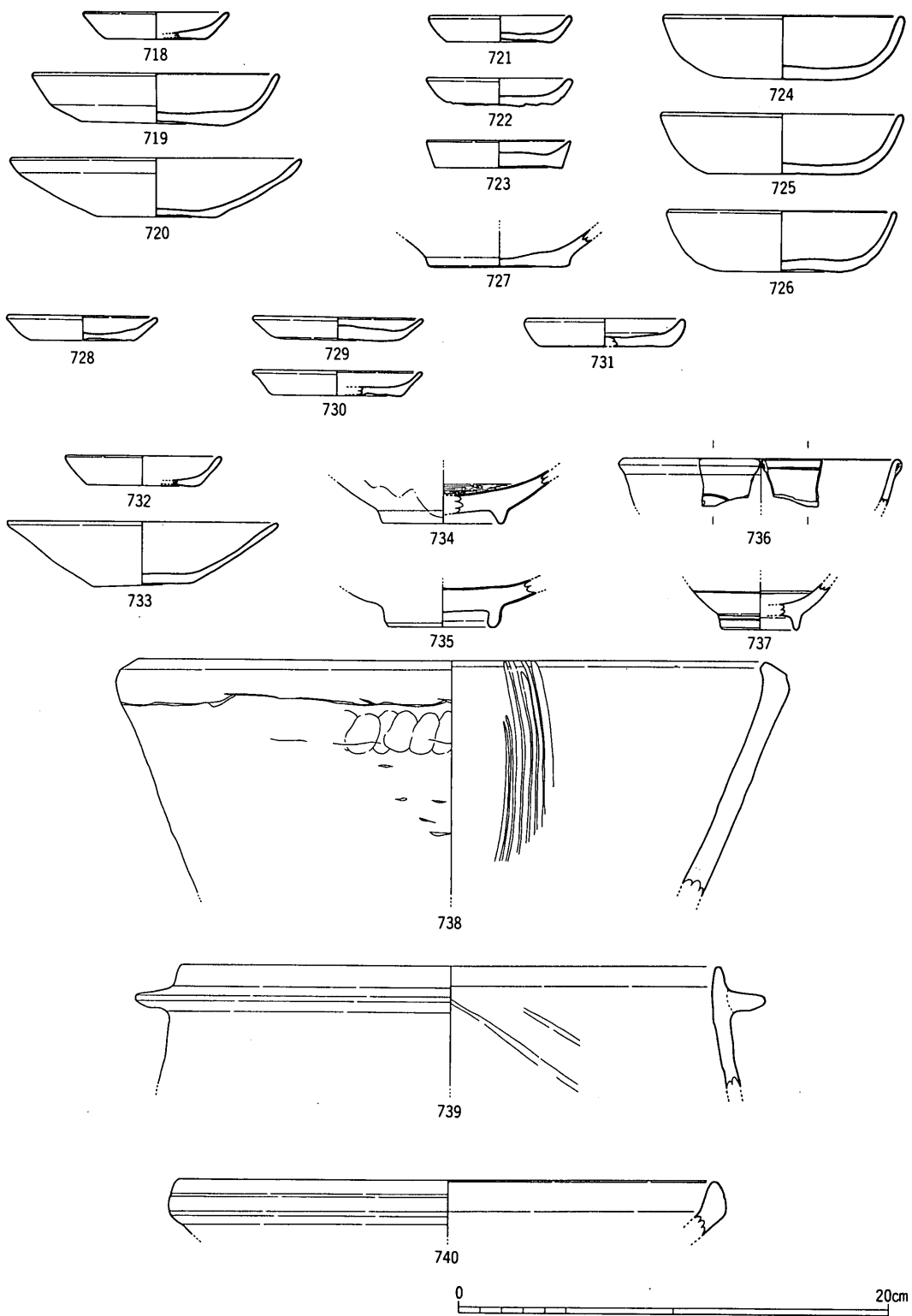


图96 S D010·011·015·016·017, S X010出土土器实测图 (1/3)



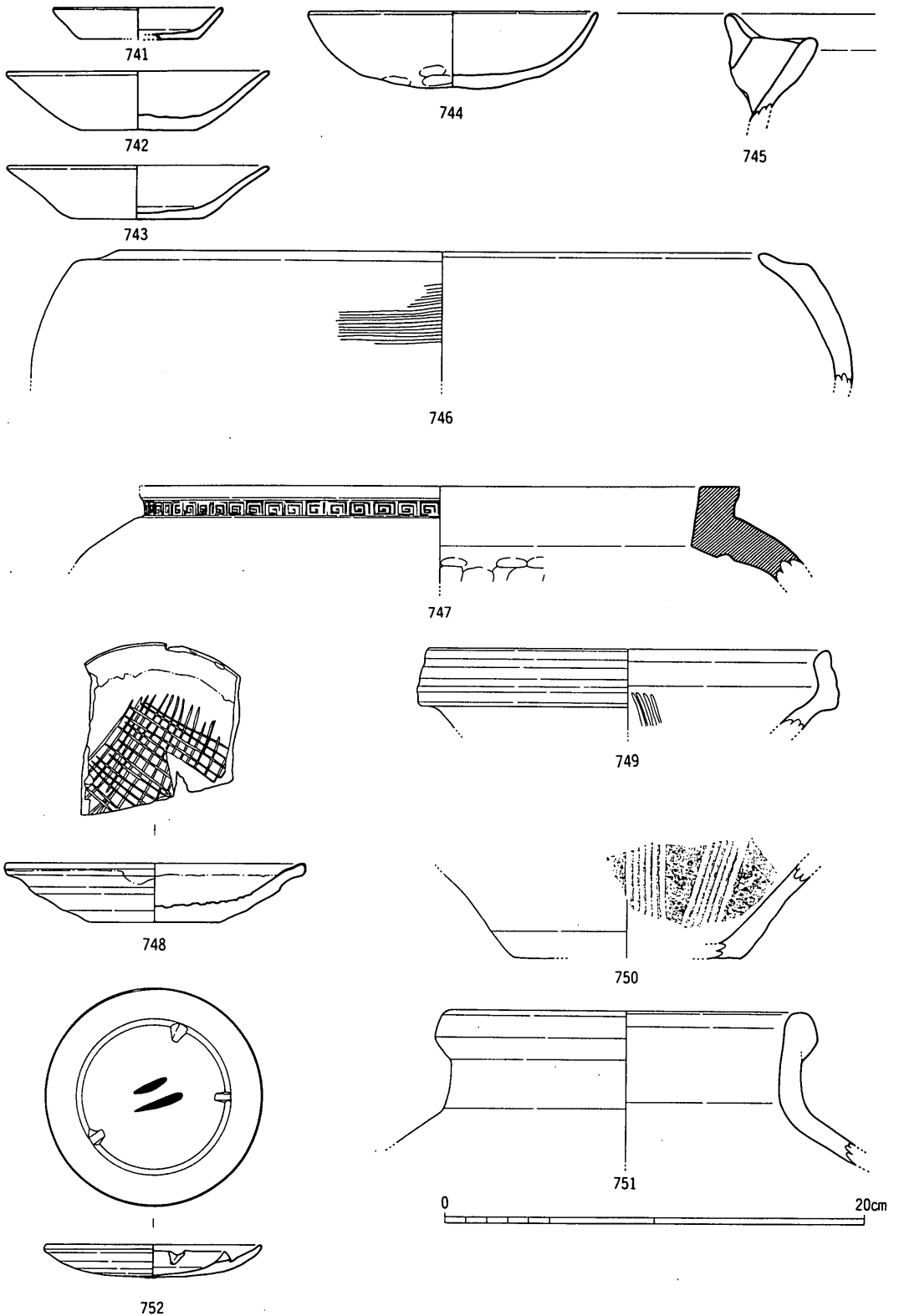


图97 S D02南半出土土器实测图(1) (1/3)

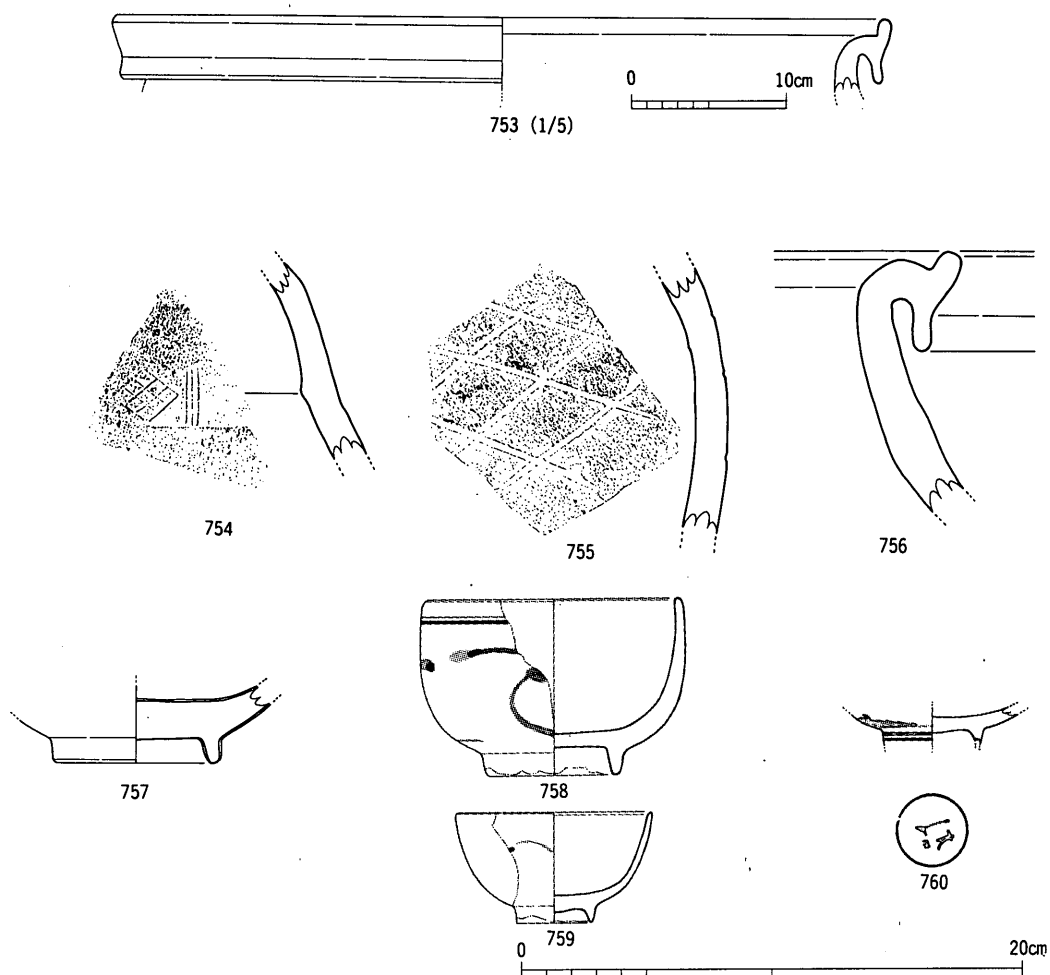


图98 S D02南半出土土器实测图(2) (1/3 · 1/5)

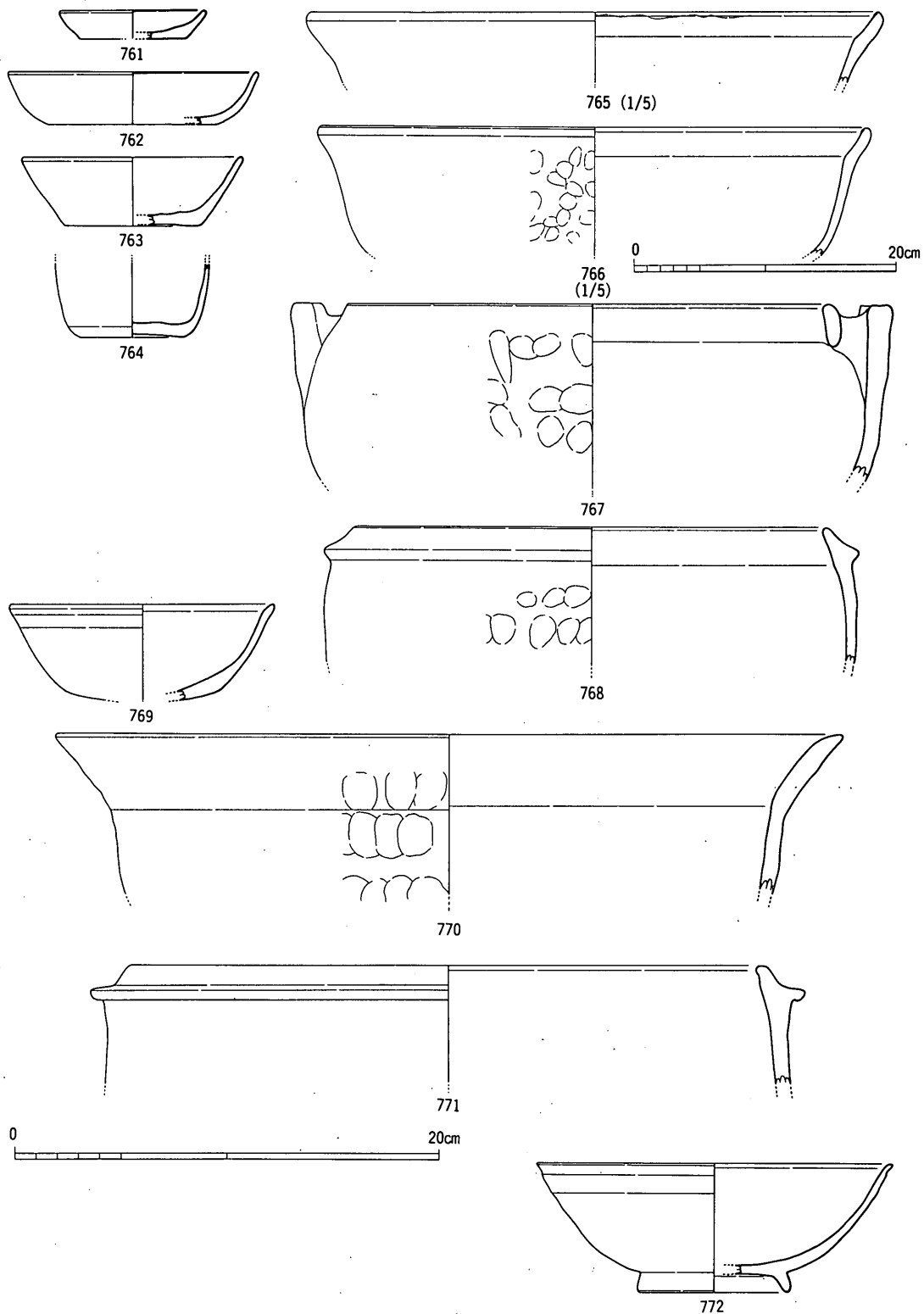


图99 S X04·09, 自然流路迹出土土器实测图 (1/3·1/5)

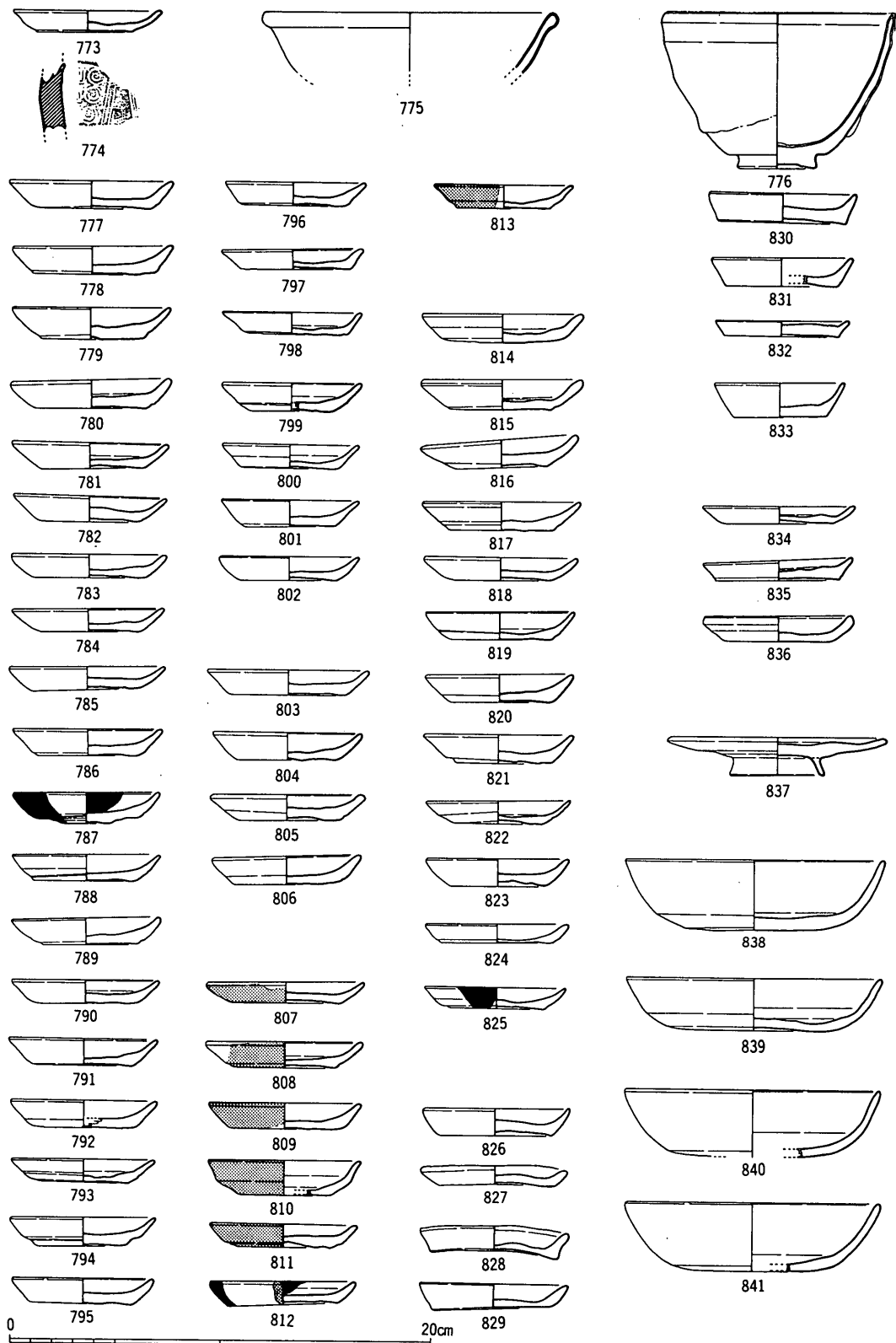


图100 R-10·R-11第4层出土土器实测图 (1/3)

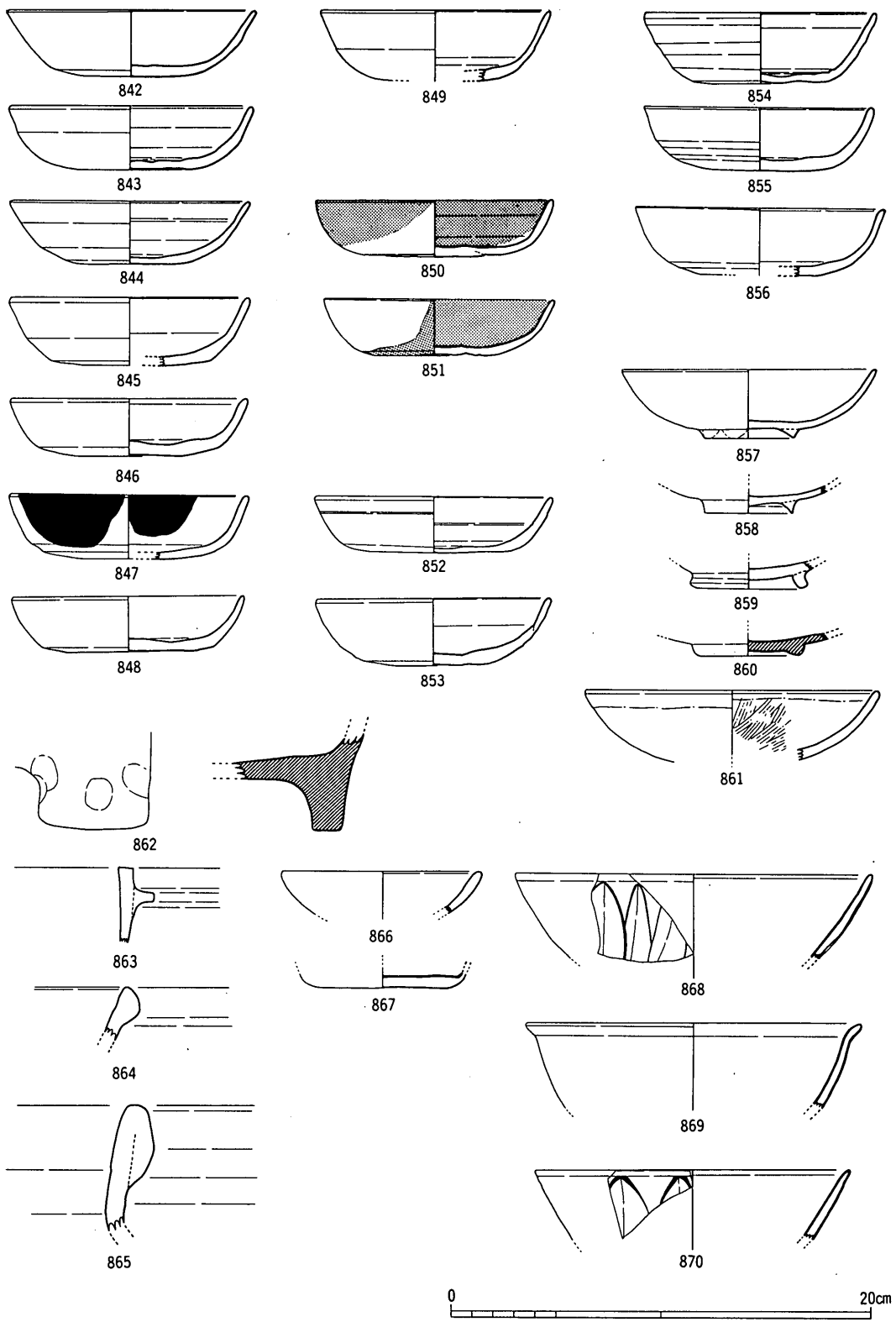


图101 R-11第4层出土土器实测图 (1/3)

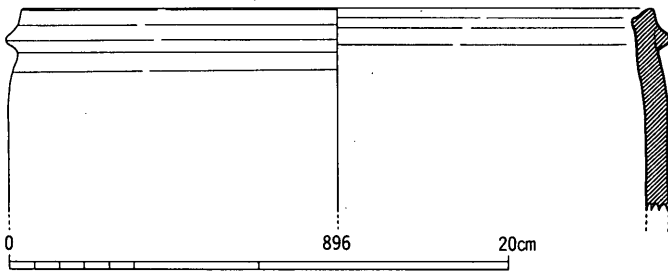
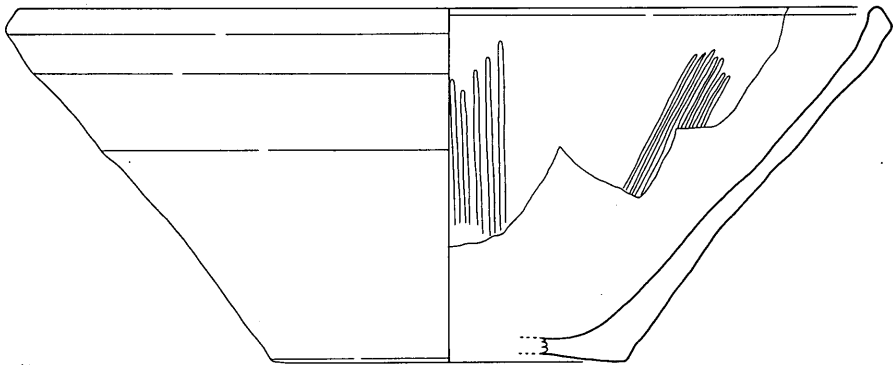
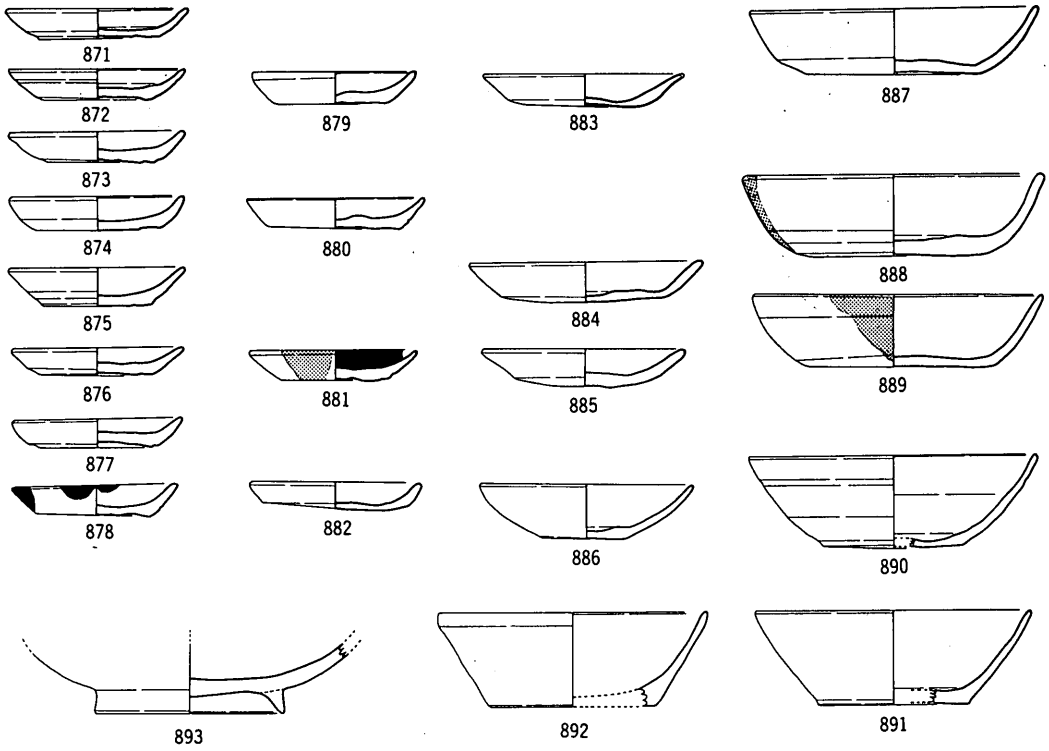


图102 S-10第4层出土土器实测图 (1/3·1/5)

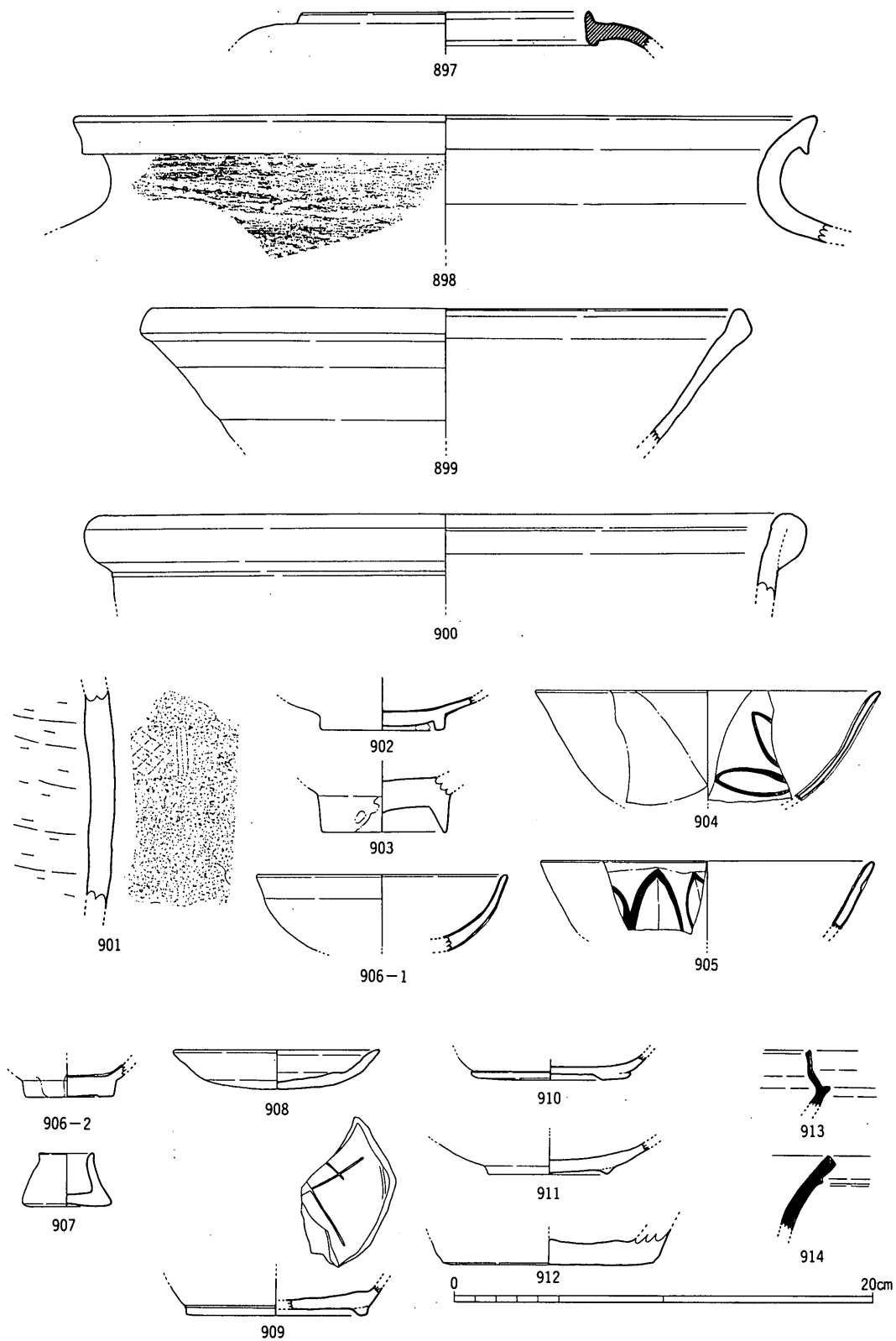


图103 S-10·S-11·U-7·U-10·V-10第4层出土土器实测图(1/3)

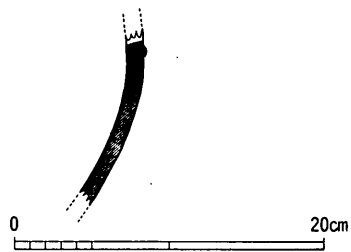
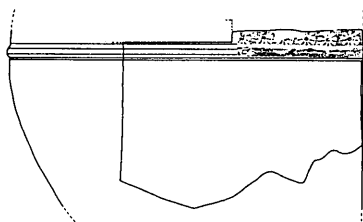
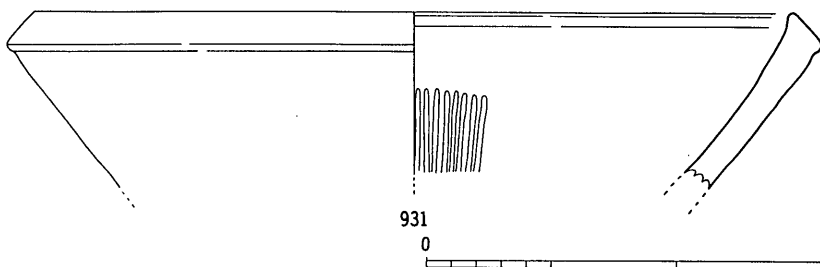
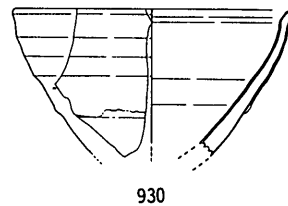
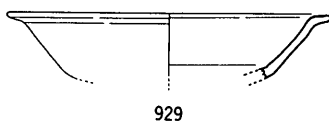
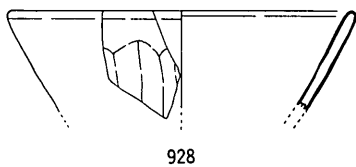
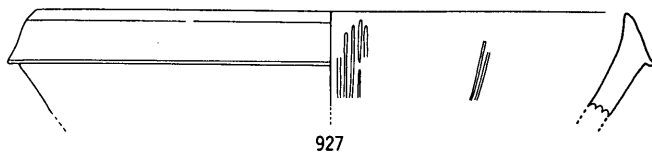
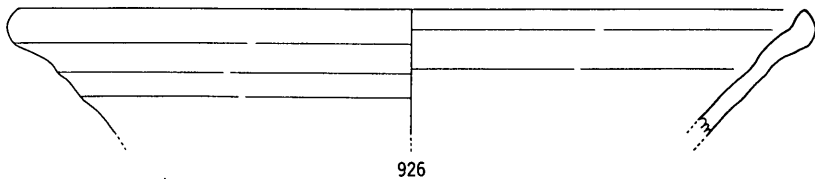
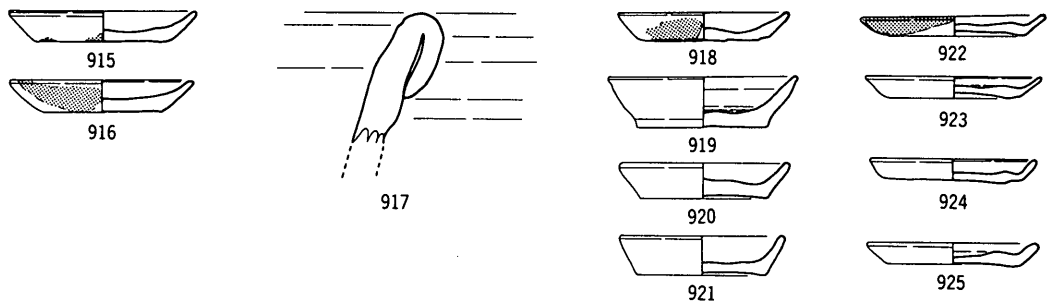


图104 Q-11·R-10·R-11·S-11第3层出土土器实测图 (1/3·1/5)



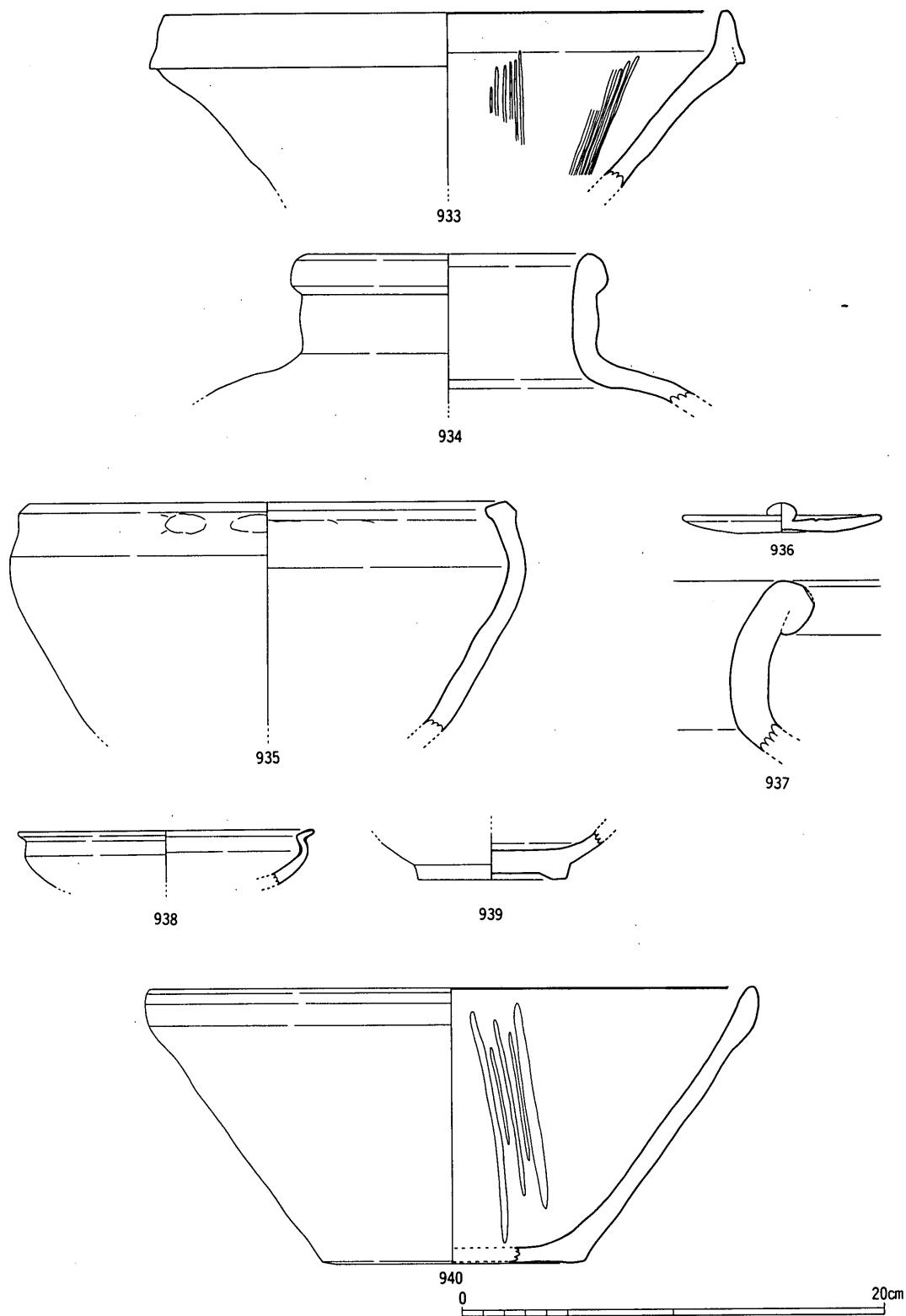


图105 S-11·T-11·U-7·V-7第3层, S-10第4层出土土器实测图(1/3)

表37 奈良時代以降土器類材質・遺構別観察表  
〔土師質土器（含黒色土器・瓦質土器）皿・杯・椀〕

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
SP275	皿 A	412	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm前後半透明 3コ	橙色	外面底体部・部分的に朱塗り
SP292	皿 A	413	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm前後半透明 4コ	淡橙色	
SP258	皿 N	414	1/4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後赤褐色 2コ	淡橙色	外面体部に朱塗の痕跡あり
SP258	杯 D	415	底・ 体部	—	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後白色・赤褐色 3コ	淡橙色	
SP172	皿 A	416	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後半透明・赤褐色 7コ	橙色	
SP178	皿 A	417	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右） 賀ノ子状圧痕（1mm 巾のもの8条）	1～2mm半透明・白色 2コ	橙色	
SP155	杯 A	418	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（方向不明）	1～3mm半透明・白色 4コ	橙色	
SP166	皿 A	419	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（方向不明）	1～3mm 白色 2コ	橙色	
SP233	皿 A	420	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後半透明 4コ	橙色	外面底部に部分的に朱塗り
SP228	皿 A	421	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（方向不明）	1mm前後半透明 2コ	橙色	
SP30	皿 H	423	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後白色 2コ 0.5～1mm赤褐色粒 25コ	淡橙色	粘土紐巻キ上ゲの痕跡あり
SP30	黒色土器 椀	424	1/5	回転ナデ	内面・回転ナデ後縦方向のヘラミガキ 外面・回転ナデ後横方向のヘラミガキ	—	1mm半透明 1コ	内面・漆黒色 外面・灰白色（口縁部は漆黒色） 断面・黒灰色	
SP30	黒色土器 椀 B1	425	1/5	回転ナデ	回転ナデ	貼り付ケ高台	0.5～1mm白色 3コ 0.5mm赤褐色粒 25コ	内面・漆黒色 外面・淡橙色（口縁部は漆黒色）	
SP38	杯 C3	427	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1～3mm半透明 4コ	橙色	粘土紐巻キ上ゲ
SP126	皿 J	428	1/1	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り（左）	1mm前後半透明 1コ	灰白色	
SP133	皿 A	429	1/3	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後半透明 2コ	橙色	
SP135	杯 A	430	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1～2mm白色・半透明 5コ	橙色	
SP138	皿 A	432	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1～2mm半透明 7コ	橙色	
SP138	皿 A	433	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1～2mm白色・半透明 5コ	橙色	
SP158	皿 A	435	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（方向不明）	1mm前後半透明 1コ	橙色	
SP158	杯 C1	436	1/3	回転ナデ	回転ナデ	（不明）	1～3mm半透明 3コ	灰白色	
SP205	皿 A	439	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（方向不明）	1mm前後半透明 1コ	橙色	
SP205	皿 A	440	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後半透明 1コ 白色土・赤褐色土 5コ	橙色	
SP205	杯 A	441	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後白色・半透明 3コ	橙色	
SP209	杯 A	442	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1mm前後半透明 2コ	灰白色	
SP222	皿 A	443	1/4	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り（右） 賀ノ子状圧痕あり	1～3mm半透明 4コ	橙色	
SP222	杯 A	444	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り（右）	1～2mm白色・半透明 5コ	淡橙色	

遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S P 248	杯 A	445	1/5	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明 3コ	橙色	
S P 248	杯 A	446	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右) 貫ノ子状圧痕(1.5mm 巾のもの3条)	1~2mm半透明 1コ	灰白色	
S P 248	杯 A	447	1/4	回転ナデ	回転ナデ	(不明)	1mm前後半透明 2コ	橙色 2次的な黒変あり	
S P 266	皿 A	449	2/3	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透明 1コ	淡橙色	外面底体部に朱塗りの 痕跡あり
S P 276	土師質 碗 C 3	450	3/4	回転ナデ	回転ナデ	貼り付け高台	0.5~1mm半透明 5コ	灰白色	
S P 280	杯 B	452	1/5	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後半透明 2コ	灰白色	
S P 294	杯 A	453	1/5	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後 白色 1コ	灰白色	
S P 327	脚付皿 A	455	4/5	回転ナデ	回転ナデ	へら切り 脚部は貼り付け	精良	明茶褐色	
S P 328	杯 C 2	456	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1~3mm 白色 3コ	淡橙色	
S P 322	皿 G	460	2/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1~2mm半透明・白色 8コ	淡橙色	
S P 322	皿 G	461	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左) 貫ノ子状圧痕(2mm 巾のもの1条)	1~2mm半透明 3コ	橙色	
S P 322	皿 G	462	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1~2mm半透明 10コ	橙色	内面口縁部に朱塗りの 痕跡あり
S P 322	皿 G	463	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明 5コ	橙色 内外面に2次的な黒 変あり	内外面部分的に朱塗りの 痕跡あり
S P 322	皿 O	464	1/2	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り(細かい)	1mm前後半透明 7コ	灰白色	
S P 352	皿 O	466	3/4	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り(荒い)	1~3mm白 色・半透明 11コ	灰白色 内外面に焼成時の 黒変あり	
S P 352	皿 O	467	1/4	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	回転系切り(細かい)	1mm前後半透明 2コ	灰白色	
井戸	杯 B	470	1/5	回転ナデ	回転ナデ	静止系切り	密	淡橙色	
S K 010	皿 M	472	1/2	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	1mm以下 白色 9コ	淡橙色	
S K 010	皿 M	473	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	0.5~2mm白 色 3コ	灰白色	
S K 010	皿 M	474	3/4	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	1mm以下白 色・半透明 8コ	淡橙色	
S K 010	皿 M	475	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	1mm前後 白色 2コ	灰白色	
S K 010	皿 D	476	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	1~2mm半透明 2コ	にぶい橙色	
S K 010	皿 D	477	底部	——	——	回転系切り 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの5条)	1~3mm半透明 2コ	にぶい橙色	
S K 010	杯 C 3	478	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	1~2mm 白色 17コ	淡赤褐色	
S K 010	杯 E	479	底・ 体部	——	ナデ(?)	へら切り(?)	密	灰白色	
S K 010	黒色土器 碗 A 2	480		横ナデ	内面・横ナデ 外面・指頭圧痕の 上にナデ	——	1mm以下白色 3コ	内外面・黒色 断面・灰白色	
S K 011	皿 E	481	1/8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1~2mm半透明・白色 1コ	淡橙色	
S K 011	皿 E	482		回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1~2mm白 色・赤褐色粒 8コ	淡橙色	
S K 011	皿 F 2	483	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1~2mm白 色・半透明 2コ	赤褐色	
S K 011	皿 F 1	484	4/5	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後白色 2コ	淡橙色 内面に焼成時の黒 変	
S K 011	皿 F 1	485	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	密	淡橙色	
S K 011	皿 F 1	486	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	密	橙色 内外面とも2次的な 黒変あり	
S K 011	皿 O	487	底・ 体部	——	(不明)	回転系切り	1mm前後 白色 3コ	橙色	

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
SK011	黒色土器 碗 B1	488	1/8	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後半透明 5コ	内面・漆黒色 外面・淡橙色 断面・淡橙色	
SK011	黒色土器 碗 A1	489	1/8	回転ナデ	内面・横方向のヘ ラミガキ 外面・回転ナデ	ヘラ切り(方向不明) 高台は貼り付け	1mm前後 白色 2コ	全面・漆黒色 断面・黒褐色	
SK011	脚付皿 A	490	底・ 体部	——	回転ナデ	脚部は貼り付け	0.5~3mm白 色 3コ	淡橙色	粘土紐巻き上げ
SK011	脚付皿 B	491	底・ 体部	——	ナデ	脚部は貼り付け	1mm半透明・ 白色 3コ	灰白色	
SK016	皿 A	492	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後赤色 粒 25コ	淡橙色	
SK017	皿 A	493	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
SK017	皿 A	494	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明 2コ	橙色 2次的な黒変あり	
SK017	皿 A	495	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1~3mm白 色・半透明・ 赤色粒 8コ	橙色	
SK017	皿 C	496	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白 色・半透明 6コ	灰白色	
SK018	杯 C1	497	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm以下赤褐 色粒 多量	にぶい橙色	
SK018	杯 C1	498	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm 赤褐色粒 25コ	にぶい橙色	
SK018	杯 C1	499	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下赤褐 色粒 28コ	にぶい橙色	
SK019	皿 A	500	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 3コ	橙色	
SK019	皿 A	501	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白 色・半透明 10コ	橙色	
SK019	皿 A	502	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 9コ	橙色	
SK019	皿 A	503	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白 色・半透明 4コ	橙色	
SK020	皿 A	504	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 4コ	淡橙色 外面斑状に灰白色	
SK020	皿 A	505	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・ 白色 9コ	淡橙色 内外面斑状に灰白 色	
SK020	皿 A	506	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 箕ノ子状圧痕(1mm 巾のもの14条)	1mm前後半透明・ 赤色粒 4コ	橙色	
SK020	皿 A	507	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~2mm半透明・ 白色 5コ	灰白色	
SK020	皿 A	508	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~3mm半透明・ 白色 7コ	橙色	
SK020	皿 A	509	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~3mm半透明 10コ	灰白色	
SK020	皿 A	510	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 箕ノ子状圧痕(1mm 巾のもの2条)	1~2mm半透明 2コ	淡橙色 内外面斑状に灰白 色	
SK020	杯 A	511	1/6	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデによ って消している	0.5~1mm 半透明 多量	灰白色	
SK020	瓦質土器 碗 D1	512	7/8	回転ナデ	内面・ハケ目部分 的に回転ナデで消 される 外面・回転ナデ	高台は貼り付けである が体部側は削りによ って成形している	0.5~5mm白 色 4コ	灰黒色 断面黒色	
SK022	皿 A	515	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 2コ	橙色	
SK022	皿 A	516	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 6コ	橙色	
SK022	杯 A	517	1/8	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~2mm半透明 9コ	橙色	
SK022	土師質土器 碗 C2	518	底部	——	——	ヘラ切り(方向不明) 貼り付け高台	0.5mm以下白 色 4コ	橙色	
SK024	皿 A	519	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 箕ノ子状圧痕(1mm 巾のもの7条)	1mm前後半透明 10コ	橙色	

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S K024	杯 A	520	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明 10コ	灰白色	
S K024	杯 A	521	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明 11コ	橙色	
S K024	杯 A	522	4/5	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明・白色 5コ	橙色	
S K024	土師質土器 碗 C 4	523	底部	——	——	ナデ 貼り付け高台	1mm前後半透明 1コ	淡橙色	
S K024	土師質土器 碗 C 4	524	底・ 体部	——	回転ナデ	回転ナデ 貼り付け高台	1mm前後白色 1コ	内面・灰色 外面・淡橙色 断面・淡褐色	
S K025	皿 B	527	1/1	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	へら切り(左)	1mm前後半透明 3コ	橙色	胎土は皿A1のもの だが、形態・手法は皿Bのもの
S K025	皿 A	528	1/5	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1~2mm半透明・白色 11コ	橙色	
S K025	皿 A	529	1/3	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	(不明)	1mm前後半透明 3コ	橙色	
S K025	皿 N	530	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透明 1コ	橙色	
S K025	皿 N	531	2/3	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	回転糸切り	1mm前後白色・半透明 1コ	橙色	
S K025	皿 C	532	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右) 竇ノ子状圧痕(4mm 巾のもの8条)	1mm前後半透明・白色 5コ	灰白色	
S K025	杯 A	533	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの16条)	密	橙色	
S K025	黒色土器 碗 B 1	534	底部	——	——	回転ナデ 貼り付け高台	密	内面・黒色 外面・淡橙色 断面・淡褐色	
S K026	皿 N	535	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透明・白色 0.5コ	灰白色 内外面に部分的な 黒変あり	内外面に朱塗りの 痕跡あり
S K026	皿 C	536	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右) 竇ノ子状圧痕(2 ~3mm巾のもの5 条。圧痕断面は、鋸 歯状)	1mm前後半透明・白色 7コ	灰白色	
S K026	皿 N	537	1/2	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	へら切り(方向不明)	1~5mm半透明・白色 4コ	橙色	
S K026	杯 D	538	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	灰白色	
S K026	杯 D	539	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り 竇ノ子状圧痕(1 ~2mm巾のもの2 条)	1mm前後半透明 7コ	灰白色	
S K028	皿 A	540	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透明 4コ	橙色 斑状に灰白色	
S K028	皿 A	541	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの4条)	1mm前後半透明 1コ	橙色	
S K028	皿 A	542	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透明 3コ	橙色	
S K028	皿 N	543	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1~3mm白色・半透明 2コ	淡橙色 一部に焼成時の黒 変あり	
S K028	皿 C	544	3/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの2条)	1~5mm白色 3コ	灰白色 一部に焼成時の黒 変	
S K028	皿 N	545	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り(?)	1mm前後半透明・赤褐色 12コ	淡橙色	
S K028	杯 A	546	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)の後 ナデ	1mm前後半透明 1コ	淡橙色 一部に焼成時の黒 変あり	
S K028	杯 A	547	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明 5コ	灰白色	
S K028	杯 D	548	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り 竇ノ子状圧痕(0.5mm 巾のもの5条)	1~2mm半透明 3コ	淡橙色	
S K044	黒色土器 碗 B 2	551	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り後回転ナデ 貼り付け高台	1mm前後白色 4コ	内面・大部分黒色 外面・口縁部分 的に黒色 他は淡褐色	
S K045	杯 B	553	底・ 体部	——	回転ナデ	静止糸切り	密	灰白色	
S D02 黒色土	皿 A	554	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
S D02 黒色土	皿 C	555	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの7条)	1mm前後半透明 4コ	灰色	
S D02 黒色土	皿 B	556	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm前後半透明 多量	橙色	

遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S D02 黒色土	皿 B	557	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの多条)	0.5mm前後半 透明 多量	灰白色	
S D02 黒色土	皿 B	558	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm前後半 透明 多量	灰白色	
S D02 黒色土	皿 B	559	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm前後半 透明 多量	橙色	
S D02 黒色土	皿 L	560	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	皿 L	561	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	口縁端部を中心に 内外面にわたって スス付着
S D02 黒色土	皿 L	562	1/1	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	内外面に斑状に焼 成時の黒変あり
S D02 黒色土	皿 L	563	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	皿 N	564	底・ 体部	—	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透 明 3コ	淡橙色 斑状に白色部分 あり	
S D02 黒色土	杯 B	565	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	杯 B	566	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	淡橙色 斑状に白色部分 あり	内面・全体にスス 付着, 外面・斑状 にスス付着
S D02 黒色土	杯 B	567	1/1	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	橙色	
S D02 黒色土	杯 B	568	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	橙色	
S D02 黒色土	杯 B	569	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	淡橙色 斑状に白色部分 あり	内外面とも孤状に ススが付着
S D02 黒色土	杯 B	570	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	橙色 斑状に白色部分 あり	
S D02 黒色土	杯 B	571	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	淡橙色 斑状に白色部分 あり	
S D02 黒色土	杯 B	572	1/1	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	橙色 斑状に白色部分 あり	
S D02 黒色土	杯 B	573	3/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	杯 B	574	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	杯 B	575	4/5	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	内面口縁部に2.5 cm巾でめぐらさ るよう にスス付着 外面は全面に油煙 付着
S D02 黒色土	杯 B	576	1/5	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	杯 B	577	1/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 黒色土	杯 D	578	底・ 体部	—	回転ナデ	回転糸切り	密	内面・灰白色 外面・焼成により 黒変 断面・灰白色	
S D02 黒色土	瓦質土器 碗 D1	581	底・ 体部	—	ナデ	へら切り 高台は貼り付ケ	1~2mm半透 明 6コ	灰色	
S D02 砂質土	皿 A	584	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透 明・白色 10コ	灰白色	
S D02 砂質土	皿 A	585	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透 明 2コ	淡橙色	
S D02 砂質土	皿 B	586	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色	
S D02 砂質土	皿 B	587	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色 斑状に白色部分 あり	
S D02 砂質土	皿 B	588	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの10条)	0.5mm半透明 多量	淡橙色 斑状に灰白色部分 あり	
S D02 砂質土	皿 B	589	1/2	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色	
S D02 砂質土	皿 B	590	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色 斑状に灰白色部分 あり	
S D02 砂質土	皿 B	591	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色	
S D02 砂質土	皿 B	592	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色	
S D02 砂質土	皿 B	593	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左) 竇ノ子状圧痕(5mm 巾のもの2条)	0.5mm以下半 透明 多量	灰白色	

遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S D02 砂質土	皿 B	594	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半透明多量	灰白色	口縁端を中心に内外面にかけてスス付着
S D02 砂質土	皿 B	595	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半透明多量	淡褐色斑状に灰白色部分あり	
S D02 砂質土	皿 B	596	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左)	0.5mm以下半透明多量	灰白色	
S D02 砂質土	皿 B	597	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明) 賈ノ子状圧痕(1mm巾のもの7条)	0.5mm以下半透明多量	淡褐色	
S D02 砂質土	皿 B	598	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	0.5mm以下半透明多量	淡褐色斑状の灰白色部分あり	
S D02 砂質土	皿 L	599	1/1	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	皿 L	600	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	密	灰白色	
S D02 砂質土	皿 M	601	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	浅褐色	
S D02 砂質土	皿 N	602	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	褐色	
S D02 砂質土	杯 A	603	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	1mm前後半透明・白色3コ	褐色	
S D02 砂質土	杯 A	604	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明10コ	淡褐色斑状に灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	605	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	褐色	
S D02 砂質土	杯 B	606	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	607	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	褐色	
S D02 砂質土	杯 B	608	1/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	609	3/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	褐色	
S D02 砂質土	杯 B	610	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	褐色	
S D02 砂質土	杯 B	611	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	612	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	褐色斑状に灰白色	内面体部の一部と口縁部の一部にスス付着
S D02 砂質土	杯 B	613	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	614	1/5	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	615	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	内面全体にスス付着
S D02 砂質土	杯 B	616	1/6	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り 切り離す時、最後に糸を絞っている	精良	褐色斑状に灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	617	1/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D02 砂質土	杯 B	618	底・ 体部	——	回転ナデ	静止糸切り	精良	褐色	
S D02 砂質土	杯 D	619	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り 賈ノ子状圧痕(2mm巾のもの8条)	1~4mm白色13コ	褐色	
S D02 右組内	皿 A	642	1/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm白色6コ	褐色斑状に灰白色	
S D02 右組内	杯 B	643	1/1	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	1~3mm白色11コ	灰白色	
S D02 右組内	土師質土器 碗 C 5	644	底・ 体部	——	回転ナデ	貼り付け高台	1~2mm白色3コ	灰白色 底部内外面に黒変あり	
S D02 右組間	皿 B	645	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(左) 賈ノ子状圧痕(1mm巾のもの15条)	0.5mm以下半透明多量	灰白色	内面底部、部分的にスス付着 外面底部全体・体部1/2に油煙付着
S D02 右組間	杯 B	646	1/6	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り 切る最後で糸を絞っている	精良	灰白色	内面口・体部、部分的にスス付着 外面底部全体、口・体部の一部にスス付着
S D02 右組間	杯 B	647	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D07	皿 A	652	1/4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	0.5~2mm半透明15コ	褐色	
S D07	皿 A	653	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(方向不明)	1mm前後半透明8コ	褐色	
S D07	皿 A	654	2/3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	0.5~2mm半透明5コ	褐色	
S D07	皿 A	655	1/1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右)	0.5~3mm半透明18コ	灰黒色 斑状に褐色	灰黒色は焼成時のもの
S D07	皿 A	656	1/2	回転ナデ	回転ナデ	へら切り(右) 賈ノ子状圧痕(1mm巾のもの4条)	1mm以下半透明15コ	褐色	

遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S D07	皿 B	657	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	0.5mm半透明 多量	淡橙色 斑状に白色	
S D07	皿 B	658	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左)	0.5mm以下半 透明 多量	橙色	口縁端部を中心に 内外面にわたって スス付着 剥けている所が多 いが、内外面全体 に朱塗の跡あり
S D07	皿 L	659	1/6	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	淡橙色	外面体部に朱塗の 痕跡あり
S D07	皿 N	660	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	橙色 斑状に白色	
S D07	皿 C	661	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの11条)	1~3mm 白色 7コ	斑状に淡橙色 斑状に灰白色 大部分は灰黒色	灰黒色は焼成時の もの
S D07	杯 A	662	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透 明 17コ	橙色	
S D07	杯 A	663	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの9条)	0.5~2mm半 透明 6コ	橙色	
S D07	杯 A	664	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~2mm半透 明 5コ	橙色	
S D07	杯 B	665	4/5	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D07	杯 B	666	2/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良だが白色 粘土粒を含む 5コ	灰白色	口縁端部を中心に 内外面、口・体部 にススが付着する ところあり
S D07	皿 N	667	底・ 体部	——	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透 明 3コ	淡橙色	
S D08	皿 A	672	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	0.5~1mm半 透明 4コ	灰白色	
S D08	皿 A	673	1/2	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm以下半透 明 7コ	橙色	
S D08	皿 A	674	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1~2mm半透 明 2コ	灰白色	
S D08	皿 A	675	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	0.5mm半透明 5コ	橙色	
S D08	皿 A	676	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(8mm 巾のもの1条)	0.5~1mm半 透明・白色 10コ	淡橙色	
S D08	皿 A	677	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	0.5~2mm半 透明 5コ	淡橙色	
S D08	皿 A	678	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの3条)	1mm前後半透 明 8コ	橙色	
S D08	皿 A	679	1/1	回転ナデ	回転ナデ	(不明)	1mm前後半透 明 16コ	灰白色	
S D08	皿 B	680	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	0.5mm以下半 透明 多量	灰白色	
S D08	皿 B	681	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明) 竇ノ子状庄痕(0.5mm 巾のもの20条)	0.5mm以下半 透明 多量	淡橙色	
S D08	皿 C	682	1/3	ナデ	ナデ	ヘラ切り(方向不明) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの9条)	0.5~1mm半 透明 1コ	灰白色	
S D08	皿 N	683	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	0.5~1mm赤 褐色粒 30コ	にぶい橙色	
S D08	杯 A	684	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの10条)	0.5~1mm半 透明 6コ	灰白色	
S D08	杯 A	685	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	0.5~1mm半 透明 5コ	灰白色	
S D08	杯 B	686	1/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D08	杯 B	687	1/4	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	精良	灰白色	
S D08	杯 D	688	底部	——	——	回転糸切り	1~2mm半透 明 0.5コ	にぶい褐色	
S D09	皿 A	700	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1~2mm半透 明・白色 3コ	橙色 斑状に白色	
S D09	皿 A	701	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの7条)	密	灰白色	
S D09	皿 A	702	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 3コ	橙色	
S D09	皿 A	703	1/1	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~3mm半透 明 7コ	橙色 斑状に灰白色	
S D09	皿 A	704	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透 明 4コ	淡橙色 斑状に灰白色	



遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
SD09	杯 A	705	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1~3mm半透明・白色 7コ	橙色 斑状に灰白色	
SD09	杯 A	706	1/3	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1~2mm半透明 5コ	灰白色	
SD09	杯 A	707	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 5コ	灰白色	
SD09	杯 A	708	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~3mm半透明・白色 4コ	灰白色	
SD09	杯 A	709	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 5コ	淡橙色 斑状に灰白色	
SD09	杯 A	710	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 4コ	淡橙色 斑状に灰白色	
SD09	杯 A	711	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1~2mm半透明 5コ	橙色	
SD09	杯 D	712	底・ 体部	——	回転ナデ	回転系切り	1~2mm半透明・白色 5コ	灰白色	
SD09	土師質土器 碗 C 2	713	底・ 体部	——	回転ナデ	貼り付け高台	0.5~1mm半透明 25コ	灰白色	
SD010	皿 A	718	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明 3コ		
SD010	杯 A	719	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白色・半透明 4コ		
SD010	杯 B	720	1/1	回転ナデ	回転ナデ	静止系切り	精良	灰白色	
SD011	皿 A	721	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状圧痕(1mm 巾のもの7条)	1mm前後白色・赤褐色 4コ	橙色	
SD011	皿 A	722	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状圧痕(1mm 巾のもの2条)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
SD011	皿 N	723	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り 贅ノ子状圧痕(1mm 巾のもの5条)	1mm前後半透明・赤褐色 3コ	淡橙色	
SD011	杯 A	724	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状圧痕(1.5mm 巾のもの11条, 断面 は鋸歯状)	1mm前後半透明 5コ	淡橙色	内外面に朱塗りの 痕跡あり
SD011	杯 A	725	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状圧痕(1mm 巾のもの6条)	1mm前後半透明 7コ	淡橙色	
SD011	杯 A	726	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 4コ	灰白色	
SD011	杯 D	727	底・ 体部	——	回転ナデ	回転系切り	密	灰白色	
SD015	皿 A	728	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	密	灰白色	
SD016	皿 A	729	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白色 8コ	赤褐色 底部外面黒変	
SD016	皿 A	730	1/4	回転ナデ	内面・ナデ 外面・回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 3コ	橙色	
SD017	皿 A	731	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明・白色 9コ	灰白色	
SX010	皿 A	732	1/5	回転ナデ	回転ナデ	(不明)	密	橙色	
SX010	杯 B	733	1/2	回転ナデ	回転ナデ	静止系切り	精良	灰白色	
SD02 南半	皿 P	741	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	1mm前後白色・赤褐色 21コ	淡橙色	
SD02 南半	杯 B	742	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止系切り	精良	灰白色	
SD02 南半	杯 B	743	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止系切り	精良	灰白色	
SX04	皿 A	761	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明 5コ	橙色	
SX04	杯 A	762	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明 4コ	淡橙色	
SX04	杯 C 2	763	1/5	回転ナデ	回転ナデ	(不明)	1~3mm半透明・白色 8コ	灰白色	
SX04	小鉢 A	764	底・ 体部	——	回転ナデ	静止系切り	密	灰白色	
自然流路	土師質土器 碗 C 1	772	1/5	回転ナデ	回転ナデ	貼り付け高台	1mm前後白色・半透明・ 赤褐色 10コ	橙色	
R-10 第4層	皿 A	773	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 贅ノ子状圧痕(0.5mm のもの5条)	1mm前後半透明 3コ	橙色	外面全体に朱塗りの

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
R-11 第4層	皿 A	777	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	778	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2mm 巾のもの2条)	1mm前後半透明 1コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	779	3/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	780	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの5条)	1mm前後半透明 5コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	781	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの9条)	1mm前後半透明 7コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	782	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(3mm 巾のもの2条)	1mm前後白色 ・半透明 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	783	3/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	784	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 ・白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	785	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 ・白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	786	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下 白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	787	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2mm 巾のもの1条)	1mm白色 1コ	橙色	内外面とも、口縁 端部から底部にか けてスス付着部分 あり
R-11 第4層	皿 A	788	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの5条)	1mm前後半透明 4コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	789	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの6条)	1mm以下白色 ・半透明 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	790	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	791	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(線状 のもの12条)	1mm以下白色 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	792	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2mm 巾のもの4条)	1~3mm白 色・半透明 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	793	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1mm 巾のもの7条)	1mm前後白色 ・半透明 4コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	794	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下 白色 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	795	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2mm 巾のもの4条、断面 は鋸歯状)	1mm前後白色 5コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	796	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(1 ~2mm巾のもの11 条)	1mm前後半透明 ・白色 4コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	797	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	798	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	799	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	800	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2mm 巾のもの2条)	1mm前後半透明 ・白色 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	801	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2mm 巾のもの4条)	1mm以下半透明 2コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	802	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 3コ	橙色	
R-11 第4層	皿 A	803	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 3コ	淡橙色 内外面、斑状に灰 白色	
R-11 第4層	皿 A	804	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 3コ	淡橙色 内面、斑状に灰白 色	
R-11 第4層	皿 A	805	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 3コ	橙色 内外面、斑状に灰 白色	
R-11 第4層	皿 A	806	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状庄痕(2 ~5mm巾のもの6 条)	1mm以下白色 1コ	橙色 内外面、斑状に灰 白色	

遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
R-11 第4層	Ⅲ A	807	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	2mm以下半透明・白色 3コ	橙色	外面全体に朱塗り
R-11 第4層	Ⅲ A	808	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 5コ	橙色	外面全体に朱塗り
R-11 第4層	Ⅲ A	809	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状庄痕(1mm 巾のもの12条)	1mm以下半透明・白色 3コ	橙色 内外面、斑状に灰 白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	810	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm以下半透明 3コ	橙色	外面底体部に朱塗り
R-11 第4層	Ⅲ A	811	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下白色・半透明 2コ	橙色	外面全体に朱塗り
R-11 第4層	Ⅲ A	812	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状庄痕(1mm 巾のもの3条)	1mm以下半透明・白色 3コ	橙色	口縁部を中心に、 内外面口・体部に ススが付着する ところあり。外面・ 斑状に朱塗り
R-11 第4層	Ⅲ A	813	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下 白色 2コ	橙色	外面底・体部、斑 状に朱塗り
R-11 第4層	Ⅲ A	814	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 20コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	815	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下白 色・半透明 3コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	816	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 5コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	817	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下白 色・半透明 4コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	818	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 7コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	819	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1~3mm白 色・半透明 4コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	820	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状庄痕(3mm 巾のもの5条)	密	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	821	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状庄痕(3mm 巾のもの3条)	密	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	822	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 5コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	823	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	密	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	824	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白 色・半透明 6コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ A	825	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 4コ	灰白色	内面全体、外面 口・体部の一部に ススが付着する
R-11 第4層	Ⅲ N	826	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm以下白 色・半透明 5コ	淡橙色	
R-11 第4層	Ⅲ N	827	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm以下半透明 3コ	赤褐色	
R-11 第4層	Ⅲ N	828	2/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	橙色	地は灰黒色、内外 面全体に朱塗りの 痕跡あり
R-11 第4層	Ⅲ N	829	3/4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透明・白色 3コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ N	830	1/2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ N	831	1/4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透明 2コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ N	832	1/1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ N	833	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	1mm前後半透明 3コ	赤褐色	
R-11 第4層	Ⅲ C	834	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状庄痕(2mm 巾のもの4条)	1mm前後半透明・白色 3コ	灰白色	
R-11 第4層	Ⅲ C	835	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 贅ノ子状庄痕(1mm 巾のもの9条)	1mm以下 白色 2コ	淡橙色	
R-11 第4層	Ⅲ K	836	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左)	密	淡橙色	
R-11 第4層	脚付Ⅲ	837	1/2	回転ナデ	回転ナデ	脚部は貼り付ケ	1~3mm白 色・黒色 6コ	淡橙色	
R-11 第4層	杯 A	838	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 4コ	橙色 斑状に灰白色部分 あり	

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
R-11 第4層	杯 A	839	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	840	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明・白色 9コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	841	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	842	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白色・半透明 4コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	843	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 5コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	844	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後白色・半透明 3コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	845	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白色・半透明 5コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	846	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白色 3コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	847	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの9条)	1mm前後白色・半透明 7コ	橙色 内外面・斑状に灰 白色	内外面・斑状にス ス付着の痕跡あり
R-11 第4層	杯 A	848	1/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明・白色 6コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	849	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後白色・半透明 4コ	橙色	
R-11 第4層	杯 A	850	1/3	回転ナデ	回転ナデ	底部中央から1/2は、 粘土板を充填し、そ の後、ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの19条)	1mm前後半透明 6コ	橙色	外面全体に朱塗りの 痕跡あり
R-11 第4層	杯 A	851	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 5コ	橙色	内外面全体に朱塗りの 痕跡あり
R-11 第4層	杯 A	852	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 5コ	灰白色	
R-11 第4層	杯 A	853	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの8条)	1mm前後半透明・白色 3コ	灰白色	
R-11 第4層	杯 A	854	3/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 25コ	灰白色	
R-11 第4層	杯 A	855	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの9条)	1mm以下半透明 8コ	灰白色	
R-11 第4層	杯 A	856	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明) 竇ノ子状圧痕(0.5mm 巾のもの9条)	1mm以下半透明 7コ	灰白色	
R-11 第4層	杯 A (高台付)	857	1/4	回転ナデ	回転ナデ	高台は貼り付け、つ まみ押さえてナデる	1mm前後半透明 3コ	灰白色	
R-11 第4層	杯 B (高台付)	858	底部	-----	回転ナデ	高台は貼り付け後回 転ナデ	1mm前後半透明 4コ	灰白色	
R-11 第4層	黒色土器 碗 B 3	859	底部	-----	-----	回転ナデ 高台は貼り付け後回 転ナデ	1mm前後半透明 3コ	内面・黒色 外面・灰白色 断面・灰白色	
R-11 第4層	瓦質土器 碗 D 2	860	底部	-----	-----	ヘラ切り 高台は貼り付け後回 転ナデ	1mm前後半透明 3コ	灰色	
R-11 第4層	瓦質土器 碗 D 1	861	1/5	回転ナデ	内面・ハケ目 外面・回転ナデ	-----	1mm前後白色・半透明 3コ	灰色 内外口縁部のみ黒 色	
S-10 第4層	皿 A	871	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下白色・半透明 3コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	872	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm以下半透明 3コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	873	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	874	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 3コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	875	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 3コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	876	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの8条)	1mm以下半透明・白色 3コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	877	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの6条)	1mm以下半透明 2コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	878	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 竇ノ子状圧痕(1mm 巾のもの2条)	1mm以下白色 2コ	橙色	内面全体、外面 口・体部の一部に スス付着

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S-10 第4層	皿 A	879	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 2コ	橙色	
S-10 第4層	皿 A	880	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの7条)	1mm前後半透明 3コ	橙色 斑状に灰白色	
S-10 第4層	皿 A	881	3/4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 3コ	橙色	内面全体、外面 口・体部の一部に スス付着 外面・体部に部分的 に朱塗り
S-10 第4層	皿 A	882	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	3mm以下半透明 3コ	灰白色	
S-10 第4層	皿 B	883	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左)	0.5mm以下半透明 多数	橙色	
S-10 第4層	皿 B	884	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの7条)	0.5mm以下半透明 多数	灰白色	
S-10 第4層	皿 B	885	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左) 貫ノ子状圧痕(2mm 巾のもの4条)	0.5mm以下半透明 多数	灰白色	
S-10 第4層	皿 L	886	1/3	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	密	橙色	
S-10 第4層	杯 A	887	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(2mm 巾のもの5条)	1mm前後半透明 4コ	淡橙色 斑状に灰白色	
S-10 第4層	杯 A	888	1/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 6コ	淡橙色 斑状に灰白色	内外面全体に朱塗 りの痕跡あり
S-10 第4層	杯 A	889	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの14条)	2mm前後半透明 3コ	橙色 斑状に灰白色	
S-10 第4層	杯 D	890	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	3mm以下白色・半透明 黒色 4コ	橙色	
S-10 第4層	杯 D	891	1/5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	2mm以下白色・半透明 4コ	橙色	
S-10 第4層	杯 D	892	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	2mm以下白色・半透明 5コ	橙色	
S-10 第4層	黒色土器 碗 B 2	893	底・ 体部	——	内面・ヘラミガキ 外面・ナデ	高台は貼り付け 外面はヘラ切り	2mm以下半透明 ・白色 9コ	内面・黒色 外面・淡橙色 断面・淡橙色	
U-10 第4層	皿 I	908	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm前後半透明 1コ	にぶい橙色	粘土ヒモ巻キ上 の跡あり
U-10 第4層	黒色土器 碗 A 3	910	底部	——	——	高台は貼り付け、そ の後回転ナデ	密	内・外・断面黒色	
U-10 第4層	黒色土器 碗 A 4	911	底・ 体部	——	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明) 高台は貼り付け、そ の後回転ナデ	1mm前後半透明 7コ	内外面・黒色 断面・灰色	
Q-11 第3層	皿 A	915	1/2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの8条)	1mm前後白色・半透明 4コ	橙色	外面底部に朱塗り
Q-11 第3層	皿 A	916	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	1mm前後半透明 ・白色 2コ	橙色	外面体部部分的に 朱塗り
R-11 第3層	皿 A	918	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	2mm以下半透明 ・白色 3コ	橙色	外面体部部分的に 朱塗り
R-11 第3層	皿 N	919	1/2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り 貫ノ子状圧痕(2mm 巾のもの2条)	2mm以下半透明 1コ	橙色	
R-11 第3層	皿 N	920	1/2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	橙色	
R-11 第3層	皿 N	921	1/3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密	橙色	
R-11 第3層	皿 C	922	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの11条)	1mm前後白色・半透明 2コ	橙色	外面全体に朱塗 りの痕跡あり
R-11 第3層	皿 C	923	2/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	2mm以下白色・半透明 3コ	灰白色 内外面1/2は焼成 時の黒変	
R-11 第3層	皿 C	924	4/5	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの10条)	1mm前後半透明 2コ	灰白色	
R-11 第3層	皿 C	925	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右) 貫ノ子状圧痕(1mm 巾のもの7条)	2mm以下白色・半透明 3コ	灰白色	

〔土師質土器盤・擂鉢・鍋・釜〕

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
S P 278	鍋 B	454	口縁部 5 cm	回転ナデ	内面ナデ 外面ナデ	——	2mm以下半透明 ・白色 11コ	灰褐色	
S P 305	釜 A 2	458	口縁部 約 6 cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 後ナデ	——	2mm以下半透明 ・白色 18コ	灰色	釜の上面から下方 は、スス付着

遺構名・ 包含層名	器 種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口 縁 部	体 部	底 部	胎 土	色 調	備 考
SK020	溜鉢 A	513	口縁部 約7cm	回転ナデ	ナデ	——	2mm以下半透明 18コ	にぶい橙色	摺目7条/単位
SK024	釜 A 2	525	口縁部 約7cm	回転ナデ	鈿は回転ナデ 鈿を含まない体部 は回転ナデ	——	1~3mm半透明 12コ	内外面・橙色	鈿端部より下方に スス付着
SK044	甕 A	552	1/1	回転ナデ	内面・左上がりの 板ナデ 外面・上位2/3は回 転ナデ、他はナデ	内面・左上がりの板 ナデ 外面・ナデ	1~3mm半透明・白色 25コ	褐色	体部中央下位に 1.5cm位の肌荒れ がめぐる
SD02 黒色土	鍋 D	580	口縁部 約15cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ハケ目	——	1~3mm半透明・白色 19コ	灰褐色	口縁部内外面、体 部外面に厚いスス 付着
SD02 砂質土	溜鉢 A	620	口縁部 約10cm	端部・回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~3mm半透明・白色 9コ	にぶい黄褐色	内外面、部分的に スス付着
SD02 砂質土	盤 A	621	1/2	端部・回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	内面・ナデ 外面・周辺部は回転 ナデ	1~2mm白 色・半透明 4コ	橙色	
SD02 砂質土	盤 A	622	1/3	端部・回転ナデ	内面・ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	内面・ナデ 外面・周辺部回転ナ デ、他はナデ	1~3mm白 色・半透明 14コ	内面・淡橙色 外面・橙色	
SD02 砂質土	盤 B	623	口縁部 約15cm	端部・回転ナデ	内面・ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~3mm白 色・半透明 10コ	橙色	
SD02 砂質土	盤 B	624	口縁部 約13cm	端部・回転ナデ	内面・ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~3mm半透明・白色 8コ	橙色	外面体部にわずか だがスス付着
SD02 砂質土	鍋 B	625	口縁部 約12cm	回転ナデ	内面・板ナデ 外面・ナデ	——	1~5mm半透明・白色 11コ	灰白色	外面体部に黒変
SD02 砂質土	溜鉢 B	626	口縁部 約9cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~5mm半透明・白色 16コ	灰白色	
SD02 砂質土	釜 B	627	1/3	内面・板ナデ 外面・鈿端部ま で回転ナデ	内面・板ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~3mm半透明・白色 9コ	淡黄褐色	内面・中位より下 方に炭化物付着 外面・鈿より下 方にスス付着
SD02 砂質土	釜 A 1	628	1/4	外面・端部・回 転ナデ 内面・ナデ	内面・ナデ 外面・ナデ	——	1~3mm半透明・白色 10コ	黄褐色	内面・黒変し肌荒 れる 外面・鈿より下 方にスス付着
SD02 石組間	釜	648	脚部	——	——	ナデ	1~3mm半透明・白色 10コ	にぶい橙色	内面・炭化物付着 外面・付ヶ根付近 スス付着
SD06	釜	651	脚部	——	——	ナデ	1~3mm半透明・白色 6コ	褐色	外面・付ヶ根付近 スス付着
SD07	溜鉢 A	668	2/3	端部・回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	ナデ、疎なヘラミガ キ	0.5~3mm半透明・白色 15コ	にぶい黄褐色	摺目は7条/単 位、8箇所
SD07	鍋 A	669	1/3	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕 端部・回転ナデ	内面・ヨコナデ 部分的にハケ目 外面・口縁下2cm 巾は回転ナデ、他 は指頭圧痕	——	1~3mm白 色・半透明 14コ	にぶい黄褐色	外面体部スス付着
SD08	盤 B	689	1/5	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕 の上をナデ 端部・回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	0.5~2mm白 色・半透明 30コ	橙色	外面体部黒変
SD08	鍋 A	690	1/5	回転ナデ	内面・指頭圧痕の 上をナデ 外面・屈曲部は指 頭圧痕、中位は板 ナデ、下位はハケ 目	——	0.5~2mm半透明・白色 5コ	橙色	外面体部黒変
SD08	鍋 B	691	1/5	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・屈曲部指頭 圧痕、他はナデ	——	0.5~2mm半透明・白色 多量	橙色	外面全体にスス付 着
SD08	鍋 E	692	口縁部 約6cm	内面・ナデ 外面・回転ナデ	内面・ナデ 外面・ハケ目	——	1~5mm半透明・白色 7コ	灰白色	外面・スス付着、 部分的に赤変
SD08	鍋 E	693	口縁部 約15cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ナデ	——	1~5mm半透明・白色 3コ	橙色	外面全体にスス付 着
SD08	鍋 E	694	1/4	回転ナデ	ナデ	——	0.5~2mm半透明・白色 20コ	淡橙色	外面全体にスス付 着
SD08	釜 A 1	695	口縁部 約10cm	回転ナデ	ナデ	脚部はナデ	0.5~3mm半透明・白色 40コ	灰白色	内面・肌荒れ 外面・鈿より下 位にスス付着
SD08	釜 B	696	口縁部 約8cm	回転ナデ	ナデ	——	0.5~2mm半透明 18コ	橙色	内外面とも部分的 に黒変している
SD09	鍋 A	714	1/3	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕 の上を回転ナデ 端部・回転ナデ	内面・上半回転ナ デ、下半板ナデ 外面・上半指頭圧 痕の上をナデ、さ らにタタキ目	——	1~2mm半透明 13コ	灰白色	外面全体にスス付 着
SX010	溜鉢 A	738	口縁部 約13cm	端部・回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~5mm半透明・白色 12コ	灰白色	摺目は7条/単位
SX010	釜 A 1	739	口縁部 約6cm	内面・1cm巾回 転ナデ 外面・ 鈿下面外側1/2 まで回転ナデ	内面・斜めの板ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1~3mm半透明・白色 4コ	灰褐色	鈿下面から下位に スス付着

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S D02 南半	鍋 E	745	口縁部 約5cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1～2mm半透 明・白色 12コ	赤褐色	外面全体にスス付 着
S D02 南半	鍋 E	746	口縁部 約6cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ハケ目	——	1～5mm半透 明・白色 4コ	灰白色	外面体部にスス付 着
S X04	鍋 B	765	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕 の上ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1mm前後白 色・半透明 3コ	にぶい褐色	外面全体に厚くス ス付着	
S X04	鍋 B	766	口縁部 約17cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1～2mm半透 明・白色 3コ	にぶい褐色	外面全体にスス付 着
S X04	鍋 E	767	口縁部 約8cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1～2mm半透 明 10コ	灰白色	外面全体に付着
S X04	釜 B	768	口縁部 約9cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1～3mm白 色・半透明 12コ	にぶい褐色	罫下面から下方、 厚くスス付着
S X09	鍋 C	770	1/5	回転ナデ	内面・板ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1mm前後半透 明 2コ	赤褐色	内面体部にスス付 着 外面全体にス ス付着
S X09	釜 A 1	771	口縁部 約11cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	2mm以下白 色・半透明 20コ	灰褐色	外面・罫から下方 にスス付着の痕跡 あり
S-10 第4層	摺鉢 A	894	口縁部 約6cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	3mm以下白 色・半透明 12コ	灰褐色	摺目は7条/単位
S-10 第4層	摺鉢 B	940	1/5	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ナデ	ナデ	1～5mm白 色・半透明 10コ	灰褐色	摺目は5条/単位
T-11 第3層	鍋 F	935	口縁部 約10cm	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1mm前後半透 明・白色 4コ	褐色	内面・部分的にス ス付着 外面・全体に厚い スス付着

〔土師質土器用途不明品〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S P277	(?)	451	1/1	回転ナデ	内外面とも回転ナ デ	ナデ	1mm以下半透 明・白色 15コ	褐色	
U-7 第3層	(?)	907	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	2mm以下白 色・半透明 25コ	褐色	2次焼成により内 外面とも部分的に 黒変あり

〔瓦質土器〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S D02 砂質土	鉢 A	629	口縁部 約10cm	内面・板ナデ 外面・回転ナデ 端部・回転ナデ	回転ナデ 穿孔は両面から行 なっている 突帯は貼り付け 雷文の押圧	——	1mm前後白 色・半透明 1コ	灰色	
S D02 砂質土	鉢 A	630	体部	——	内面・板ナデ 外面・回転ナデ 突帯は貼り付け 突帯間に九弁菊花 文を押圧	——	1mm前後半透 明・白色 1コ	灰黒色 断面・灰褐色	
S D02 砂質土	鉢 B	631	1/5	回転ナデ	内面・板ナデ 外面・回転ナデ 突帯は体部側に沈 線を施し、その上 に貼り付ける 突帯間に押圧文の 痕跡あり	——	1mm前後 半透明 3コ	黒色 断面・灰白色	
S D07	鉢 B	670	1/10	回転ナデ 外面に2本の突 帯、その間に押 圧文があった痕 跡あり	——	——	1mm前後半透 明・白色 3コ	黒色 断面・灰白色	
S D02 南半	鉢 C	747	口縁部 約10cm	回転ナデ 口縁・体部の境 に雷文の押圧	内面・指頭圧痕の 上をナデ 外面・回転ナデ	——	1mm前後白 色・半透明 13コ	外面・口縁端部・ 黒色 内面・灰白色	
R-10 第4層	(?)	774	体部	——	内外面ともナデ 外面に、貼り付け 突帯、突帯の下方 に、2本の縦沈線 に、3個の渦文 線に3個の三升文 を施す	——	密	淡褐色	
R-11 第4層	鉢	862	脚部	——	——	内面・ナデ 外面・指頭圧痕の上 をナデ	1mm前後白 色・半透明 16コ	灰黒色 断面・灰白色	
R-11 第4層	釜 B	863	口縁部 約4cm	回転ナデ 罫は貼り付け	回転ナデ	——	密	黒色 断面・灰白色	
S-10 第4層	鉢 A	895	口縁部 約9cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後白 色・半透明 13コ	外面・灰黒色 内面・淡褐色 断面・灰白色	

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S-10 第4層	釜 A	896	口縁部 約12cm	回転ナデ 突帯は貼り付ケ	回転ナデ	——	1mm前後 白色・半透明 12コ	灰白色	内面全体にス付 着の痕跡
S-10 第4層	釜 C	897	口縁部 約7cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後 白色・半透明 7コ	黒色 断面・灰白色	
S-11 第3層	鉢 A	932	体部	——	回転ナデ 突帯は貼り付ケで 2条あったと思わ れる。突帯間に九 弁菊花文を押し する。また、長方形 の窓は回転ナデで 仕上げる。	——	2mm 白色・半透明 3コ	黒色 断面・灰白色	
S D07	鉢 B	670	口縁部 約12cm	回転ナデ	2条の貼り付ケ突 帯あり 突帯間には、押し 文の痕跡あり 内面・板ナデ 外面・回転ナデ	——	密	黒色 断面・灰白色	

〔須恵質土器〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S P138	甕 B	434	底・ 体部	——	ナデ	回転糸切り	1~2mm半透 明・白色 7コ	灰白色	
S P261	甕 A	248	底・ 体部	——	内面・回転ナデ 外面・縦の板ナデ	ナデ	2mm以下 白色 5コ	灰色	
S P320	(?)	459	底・ 体部	——	回転ナデ	ヘラ切りの後ナデ	1mm前後半透 明 7コ	灰白色	
S K020	こね鉢 C	514	口縁部 約3cm	内面・ナデ 端部・外面・回 転ナデ	——	——	1mm前後 黒色 粒 2コ	灰白色 口縁部 暗青灰色	
S D02 砂質土	こね鉢 B	632	1/4	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後半透 明・白色 3コ	暗青灰色	
S D08	こね鉢 A	697	口縁部 約5cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後半透 明・白色 5コ	灰白色 口縁部 外面巾1cm は黒色	
S X010	こね鉢 A	740	口縁部 約4cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1~2mm 黒色・ 粒 2コ	青灰色 端部・同下方 0.5cm は黒色	
R-11 第4層	こね鉢 A	864	口縁部 約5cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後半透 明 1コ	青灰色 端部 暗青灰色	
S-10 第4層	こね鉢 A	899	1/5	回転ナデ	回転ナデ	——	2mm以下 白色 1コ	青灰色 口縁部 端部・同下方 0.5cm は暗青灰色	
U-10 第4層	甕 A	912	底部	——	——	指頭圧痕の後ナデ	1mm前後 白色・半透明 2コ	青灰色	
R-11 第3層	こね鉢 A	926	1/5	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後 白色・半透明 1コ	灰白色 口縁部 部分的に 暗青灰色	

〔龜山焼〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S-10 第4層	甕 A	898	口縁部 約12cm	回転ナデ	内面・板ナデ 外面・格子目タ キ	——	0.5~2mm 半透 明・白色 3コ	灰黒色	

〔備前焼〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S K024	甕	526	体部	——	内面・指頭圧痕の 上をナデ 外面・回転ナデ 外面・2条の沈線	——	1~2mm 白色・半透明 3コ	内面・青灰色 外面・赤灰色 断面・青灰色	
S K043	溜鉢 B	550	口縁部 約11cm	回転ナデ	回転ナデ 溜目 6条/単位	——	1~5mm 白色 7コ	内面・暗青灰色 外面・赤灰色 断面・赤灰色	
S D02 黒色土	溜鉢 B	579	口縁部 約10cm	回転ナデ 片口をつくる	回転ナデ 溜目 6条/単位	——	1~3mm 半透 明・白色 13コ	内面・暗青灰色 外面・暗褐色 断面・赤褐色	
S D02 砂質土	溜鉢 B	633	口縁部 約8cm	回転ナデ 片口をつくる	回転ナデ 溜目 6条/単位 切り合いあり	——	1~5mm 白色 3コ	赤灰色 外面 体部中位は灰 色	
S D02 砂質土	甕 A	641	口縁部 約5cm 体部	回転ナデ 外下方へ折り、 玉縁とする	内面・指頭圧痕の 上を板ナデ 外面・板ナデ	——	1~5mm 白色・半透明 5コ	内面・暗赤褐色 外面・断面・赤色	



遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S D02 石組間	壺 A	649	口縁部 約15cm	回転ナデ	板ナデ	——	1~2mm半透明・白色 5コ	赤灰色	
S D02 石組間	壺	650	底・ 体部	——	板ナデ	ナデ	1~2mm白色・半透明 5コ	赤灰色	
S D08	溜鉢	698	体部	——	回転ナデ 摺目8条/単位	——	1~3mm白色・黒色粒 8コ	紫灰色	
S D02 南半	溜鉢 C	749	口縁部 約6cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1~3mm半透明・白色 3コ	内外面・橙色 断面・灰白色	
S D02 南半	溜鉢	750	体部	——	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の上をナデ	——	1~2mm半透明・白色 3コ	内外面・暗赤褐色 断面・赤褐色	
S D02 南半	壺 A	751	1/4	回転ナデ	内面・板ナデ 外面・ナデ	——	1~3mm半透明・白色 10コ	暗青灰色	
S D02 南半	皿 A	752	1/1	回転ナデ	内面・回転ナデ、 内面のかえりは貼り付け 外面・ヘラ削り	内面・回転ナデ 外面・ヘラ削り	密	暗赤褐色	内面底部に「ニ」の墨書
R-11 第4層	壺 A	865	口縁部 約7cm	回転ナデ 外下方へ折り、 玉縁とする	——	——	1~3mm半透明・白色 黒色粒 13コ	内面・灰色 外面・赤灰色 断面・赤灰色	
S-10 第4層	壺 A	900	口縁部 約10cm	回転ナデ 外下方へ折り、 玉縁とする	——	——	1mm前後半透明・白色 黒色粒 8コ	灰色	
R-10 第3層	壺 A	917	口縁部 約7cm	回転ナデ 外下方へ折り、 玉縁とする	——	——	1mm前後半透明・白色 3コ 1~8mm白色 土粒 3コ	赤灰色	
R-11 第3層	溜鉢 B	927	口縁部 約6cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後 白色4コ	内外面・赤灰色 断面・灰色	
S-11 第3層	溜鉢 A	931	口縁部 約9cm	回転ナデ	回転ナデ 摺目 8条/単位	——	1mm前後半透明・白色 3コ 1~2mm白色 土粒 3コ	橙色	
S-11 第3層	溜鉢 B	933	口縁部 約8cm	回転ナデ	回転ナデ 摺目 6条/単位	——	1mm前後白色 ・半透明 3コ	口縁外面赤灰色 他は暗赤灰色	
S-11 第3層	壺 A	934	口縁部 約7cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1mm前後白色 ・半透明 3コ	赤灰色	
T-11 第3層	蓋 A	936	1/4	回転ナデ	内面・ヘラ削り 外面・回転ナデ つまみ貼り付け、 回転ナデ	——	密	内外面・赤色 断面・灰色	
T-11 第3層	壺 B	937	口縁部 約12cm	回転ナデ	——	——	1mm前後黒色 粒、白色土粒 24コ	灰白色	

〔常滑焼〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S D07	壺 A	671	口縁部 約10cm	回転ナデ	回転ナデ	——	1~3mm灰色 土粒 3コ	内面・暗青灰色 外面・にぶい褐色	口縁内面にオリブ色の自然釉
S D02 南半	壺 B	753	口縁部 約10cm	回転ナデ	内面・板ナデ 外面・回転ナデ	——	2mm以下白色・半透明 13コ	内外面・赤褐色 断面・芯状に灰色	
S D02 南半	壺	754	体部	——	内面・板ナデ 外面・板ナデ 中位に押印文	——	1~4mm白色・半透明 黒色 9コ	内外面・赤褐色 断面・灰色	外面にオリブ色の自然釉
S D02 南半	壺 B	756	口縁部 約6cm	回転ナデ	回転ナデ	——	3mm以下白色・半透明 黒色粒 10コ	内外面・赤褐色 断面・灰色	外面にオリブ色の自然釉
S-10 第4層	壺	901	体部	——	内面・板ナデ 外面・ナデ 中位に押印文	——	2mm以下白色・半透明 黒色 8コ	内外面・赤褐色 断面・灰色	

〔信楽焼〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S D02 南半	壺 A	755	体部	——	内面・板ナデ 外面・ナデ 外面に繪垣文	——	1mm前後褐色 土粒 4コ	内外面・暗赤褐色 断面・黄褐色の自然釉	

〔瀬戸焼〕

追構名・包含層名	器種・タイプ名	追物番号	追存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S D02 砂質土	皿 B	635	1/8	回転ナデ	回転ナデ	——	やや粗	断面・灰白色	淡緑灰色の薄い軸が内外面にかけられる
S D02 南半	皿 A	748	1/5	回転ナデ	回転ナデ	内面・回転ナデ、井桁状の摺目 外面・回転糸切り	3mm以下 白色 1コ	灰白色	内面口縁部に緑灰色の軸がかかる

〔輸入陶磁器〕

追構名・包含層名	器種・タイプ名	追物番号	追存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S P143	青磁碗	431	底・体部	——	内面・ヘラ削り 外面・ヘラ削り、片切り彫の蓮弁がみられる	高台は削り出し	密	断面・灰色	高台見込みを除き、均一な薄いオリープ灰色の軸がかかる
S P167	青磁碗	437	口縁部 約2cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	密	断面・青灰色	内外面に均一に緑灰色の軸がかかる
S D02 黒色土	青磁碗	582	口縁部 約3.5cm	ヘラ削り	ヘラ削り 上位に、2本1単位の山形文をつくる	——	微小黒色粒 7コ	断面・灰白色	内外面に暗緑灰色の厚さ約0.3mmの軸がかかる
S D02 黒色土	青磁碗	583	口縁部 約4cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	1mm前後白色 3コ	断面・灰白色 部分的に淡赤橙色のところあり	内外面に淡緑灰色の厚さ0.3cmの軸がかかる
S D02 砂質土	白磁皿	634	1/5	ヘラ削り	ヘラ削り	内面・ヘラ削り 外面・ヘラ削り 体部との境に1条の沈線	微小黒色粒 21コ	断面・灰白色	全面に透明軸がかかる 底部外面は厚さにムラがある 底部中央に円状の灰色部分あり 口内面・口先
S D02 砂質土	青磁碗	636	口縁部 約2.5cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	微小気泡 5コ	断面・灰色	内外面に、明緑灰色の厚さ0.3mmの軸がかかる
S D02 砂質土	青磁碗	637	口縁部 約2.3cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	微小気泡 3コ	断面・灰色	内外面に明緑灰色の厚さ0.2mmの軸がかかる 貫入あり
S D02 砂質土	青磁碗	638	口縁部 約3cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	1mm以下黒色粒 15コ	断面・灰白色	内外面にオリープ灰色の厚さ0.3mmの軸がかかる
S D02 砂質土	青磁碗	639	体部	——	ヘラ削り 外面に片切り彫りで蓮弁が、みられる	——	密	断面・灰色	内外面に緑灰色の厚さ0.3~0.5mmの軸がかかる
S D02 砂質土	青磁碗	640	1/3	ヘラ削り	内面・ヘラ削り 外面・ナデにより凹部をつくり、全体的には菊花状になる	——	微小気泡 21コ	断面・灰色	内外面とも明緑灰色の厚さ0.5~1mmの軸がかかる
S D08	青磁碗	699	底・体部	——	ヘラ削り	高台は削り出し 内面に花状の模様があるが不明瞭	密	断面・灰色	高台見込み・畳付を除き、明緑灰色の厚さ0.3mmの軸がかかる
S X010	青磁碗	735	底・体部	——	ヘラ削り	高台は削り出し	密 炭化物のかたまり 1コあり	断面・灰色	高台見込み・畳付を除き、暗緑灰色の厚さ0.3mmの軸がかかる
S D02 南半	青磁碗	757	底・体部	——	ヘラ削り	高台は削り出し 内面に沈線1条、花状の模様があるが不明瞭	0.5mm 気泡 15コ	断面・にぶい黄橙色	高台見込みと畳付を除き、緑灰色の厚さ0.5mmの軸がかかる 畳付きは削り取り
R-10 第4層	青磁碗	775	1/5	ヘラ削り	ヘラ削り	——	気泡 微小な黒色粒	断面・灰色	内外面に淡緑灰色の軸がかかる
R-10 第4層	黒釉碗	776	1/4	ヘラ削り 外面に凹線状のものが1条めぐ	ヘラ削り	高台は削り出し	微小気泡 21コ 1mm前後半透明・白色 3コ	断面・淡黄色	黒色釉の上に褐色釉が斑状にかかり、逆に黒色釉が点状にみえる 外面体部下位から底部は無釉
R-11 第4層	白磁皿	866	口縁部 約3cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	微小気泡 15コ	断面・灰白色	内外面に灰白色の薄い軸がかかる 口縁部内面、面取りにより無軸となっている
R-11 第4層	白磁皿	867	底部	——	——	内面・ヘラ削り 外面・ヘラ削り 内面・底部と体部の界に沈線1条	微小気泡 21コ	断面・灰白色	底部全体に厚さ0.3mmの半透明軸がかかる 底部はムラがある
R-11 第4層	青磁碗	868	口縁部 約1.5cm	ヘラ削り	ヘラ削り 外面に蓮弁がみられる	——	密	断面・灰色	内外面とも灰緑色の厚さ0.5~1mmの軸がかかる
R-11 第4層	青磁碗	869	口縁部 約3.5cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	密	断面・灰色	内外面とも緑灰色の厚さ0.2~0.5mmの軸がかかる 貫入が多い

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
R-11 第4層	青磁碗	870	口縁部 約4cm	ヘラ削り	ヘラ削り 外面に鑄蓮弁がみ られる	——	微小 気泡 30コ	断面・灰色	内外面ともオリ ープ灰色の厚さ0.3 mmの釉がかかる
S-10 第4層	白磁碗	902	底・ 体部	——	ヘラ削り	高台は削り出し	微小 気泡 25コ	断面・灰白色	高台見込みを除き 灰白色、厚さ0.5mm の釉がかかる
S-10 第4層	白磁碗	903	底部	——	——	高台は削り出し	2mm以下気泡 30コ	断面・灰白色	高台見込みは無 釉、 高台外面は部分的 に施釉、ほかに薄 い透明釉がかかる
S-10 第4層	青磁碗	904	口縁部 約1cm	ヘラ削り	ヘラ削り 内面に片切り彫り の蓮弁がみられる	——	密	断面・灰白色	内外面とも、淡灰 緑色の厚さ 0.5~1.5mmの釉が かかる
S-10 第4層	青磁碗	905	口縁部 約5cm	ヘラ削り	ヘラ削り 外面に蓮弁がみら れる	——	微小 気泡 30コ	断面・灰色	内外面とも、灰オ リーブ色の 0.5~1mmの釉が かかる
S-10 第4層	青磁碗	906- 1	口縁部 約4cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	微小 気泡 35コ	断面・灰白色	内外面とも明緑灰 色の厚さ0.5~1 mmの釉がかかる
S-11 第4層	黒釉碗	906- 2	底部	——	——	高台は削り出し	密	断面・灰色	内面に黒色釉、厚 さ0.5~1.5mmがか かる
R-11 第3層	青磁碗	928	口縁部 約2.3cm	ヘラ削り	ヘラ削り にぶい稜による蓮 弁がみられる	——	密	断面・灰色	内外面ともオリ ープ灰色、厚さ0.5mm の釉がかかる
R-11 第3層	青磁皿	929	口縁部 約3cm	ヘラ削り 内面に凹線状の もの1条あり	ヘラ削り	——	微小 気泡 30コ	断面・灰色	内外面とも明オリ ープ灰色厚さ0.2 mmの釉がかかる
R-11 第3層	黒釉碗	930	口縁部 約3cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	微小 気泡 20コ	断面・灰色	内面全体、外面体 部下位まで黒色釉 がかかる 口縁部は釉が薄い ため暗赤褐色を呈 する
U-7 第3層	青磁鉢	938	口縁部 約2cm	ヘラ削り	ヘラ削り	——	密	断面・灰白色	内外面に淡灰緑色 の厚さ0.3mmの釉 がかかる
V-7 第3層	白磁	939	底・ 体部	——	ヘラ削り	高台は削り出し 内面・底部と体部の 境に沈線1条	3mm以下 気泡 35コ	断面・灰白色	外面底部、体部下 位は無釉または灰 白色の厚さ0.2mm の釉がかかる

〔近世陶磁器〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S X 010	碗	734	底・ 体部	——	ヘラ削り	高台は削り出し 内面・同心円状のカ キ目あり	密	断面・灰色	体部下位、高台は 無釉 他はオリープ灰色 の厚さ0.2mmの釉 がかかる
S X 010	染付 碗	736	口縁部 約2.5cm	ヘラ削り 外方へ折り 玉 縁状につくる 内面・1条の横 線	ヘラ削り 外面に文様あり	——	密	断面・灰白色	内外面とも半透明 の厚さ0.2mmの釉 がかかる 文様は青色・
S X 010	染付 碗	737	底・ 体部	——	ヘラ削り 外面下位に1条の 横線	高台は削り出し 内面・底部と体部の 界に2条の横線、高 台外面に2条の横線	密	断面・灰白色	内外面とも全面に 半透明の厚さ0.2 mmの釉がかかる 文様は青色
S D 02 南半	碗	758	口縁部 約4cm	ヘラ削り 外面に2条の横 線	ヘラ削り 外面に文様あり	高台は削り出し	微小 気泡 35コ	断面・灰色	畳付を除き、ほか は全面に半透明、 厚さ0.4mmの釉が かかる 文様は青色
S D 02 南半	碗	759	1/4	ヘラ削り	ヘラ削り	高台は削り出し	2mm以下 気泡 5コ	断面・灰白色	畳付を除き、白色 の厚さ0.2mmの釉 がかかる
S D 02 南半	染付 碗	760	底・ 体部	——	ヘラ削り 外面に文様あり	高台は削り出し 高台外面に2条の横 線 見込みに1条の「円 線、その内側に「大 明」とあり	密	断面・灰白色	残存部分には、す べて半透明の釉が かかる

〔土師器〕

遺構名・包含層名	器種・タイプ名	遺物番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S P 31	羽釜	422	1/5	回転ナデ	鐳は貼付 内面・ナデ 外面・ハケ目	——	1mm前後半透 明 24コ	褐色	外面全体にス付 着
S P 193	甕	438	1/5	内面・ハケ目 外面・回転ナデ	内面・ナデ 外面・左上がりの ハケ目	——	2mm以下半透 明・白色 23コ	褐色	内面・黒変 外面・体部ス付 着

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S K028	壺	549	1/8	回転ナデ	内面・指頭圧痕 外面・指頭圧痕の 上をナデ	——	1mm以下半透明 25コ	内面・黒褐色 外面・暗赤褐色	外面・2次焼成に より赤変している
S D02 南半	碗	744	1/3	回転ナデ	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・指頭圧痕の上 をナデ	2mm以下半透明 ・赤褐色 28コ	淡橙色	内外面とも焼成の 黒斑あり
S X09	碗	769	1/8	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	密	にぶい赤褐色	
U-10 第4層	碗	909	底部	——	——	高台は貼り付け 内面・ヘラ記号あり	1mm前後白色 ・半透明 3コ	橙色	

〔須恵器〕

遺構名・ 包含層名	器種・ タイプ名	遺物 番号	遺存度	口縁部	体部	底部	胎土	色調	備考
S P36	杯身	426	1/1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm前後白色	青灰色	
S P305	皿	457	2/3	回転ナデ	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ヘラ切り(方 向不明)	1mm前後白 色・半透明 2コ	灰色	
S P348	高杯	465	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削り 脚部は回転ナデ	1mm以下半透明 ・白色 23コ	灰白色	
JF <sup>i</sup>	杯身	468	1/3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(方向不明)	1mm以下半透明 15コ	明青灰色	
JF <sup>i</sup>	杯身	469	1/8	回転ナデ	回転ナデ	高台は貼り付け	密 1mm以下黒色 粒 6コ	内面・青灰色 外面・暗青灰色 断面・明青灰色	
JF <sup>i</sup>	壺	471	1/8	回転ナデ	——	——	1mm以下半透明 3コ	灰白色	
S D09	皿	715	1/2	回転ナデ	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ヘラ切り(方 向不明)	1mm以下半透明 2コ	灰白色	
S D09	蓋	716	2/3	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ つまみは貼り付け	2mm以下半透明 6コ	青灰色	
S D09	蓋	717	4/5	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ つまみは貼り付け	1mm以下半透明 2コ	暗青灰色	外面に淡黄色の自然 釉がかかる
V-10 第4層	杯身	913	1/8	回転ナデ	——	——	密	青灰色	
V-10 第4層	壺	914	口縁部 約2cm	回転ナデ	——	——	密	暗青灰色	

(2) 縄文土器

包含層から合計11点の縄文土器の破片が出土した。6点を図化した。941は波状口縁で、全体に磨消し縄文、その上に「ハ」の字状の沈線をほどこす。942はミガキの上に少なくとも3条の沈線をほどこす。943は口縁部片で、横方向の2条の沈線をほどこす。944は口縁部片、横と縦方向の沈線をほどこす。945は、波状口縁、縄文の地文に先端部で下方に湾曲する横方向の沈線を3条以上ほどこす。946は、波状口縁、磨消し縄文に沈線、沈線底部に径3mmの円形刺突文をほどこす。

表38 縄文土器観察表

遺物 番号	調	整	胎土	色調
941	内面ナデ(?) 外面磨消し縄文に沈線		1mm前後の半透明・白色 砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色
942	内面回転ナデ 外面ミガキ		1mm以下の半透明・白色 砂粒を多量に含む	黒褐色
943	内面肌荒れ強し 外面2条の平行沈線		3mm以下の白色砂粒を多 量に含む	浅黄橙色
944	内面ナデ 外面縄文に沈線		2mm以下の半透明・白色 砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色
945	内面ナデ 外面縄文に沈線		2mm以下の半透明・白色 砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色
946	内面指頭圧痕の上をナデ 外面磨消し縄文の上に沈 線、刺突文		5mm以下の半透明・白色 砂粒を多量に含む	灰黄褐色

(3) 瓦・土壁

S D02南半から29点の瓦が出土した。ここでは軒丸瓦と軒平瓦を各1点づつ図化した。947は左回転の巴文と12個の圏点をもつ、948は中央に花芯状の模様、その両側に2本線で描く蔓草状の模様をもつ。S K011・S D07・包含層から平瓦破片と考えられるものが出土した。952は須恵器の

焼き上がり、青灰色を呈する。凸面の縄目のタタキは他のものに比し荒い。952以外は土師質の焼き上がり、淡黄橙色・灰白色を呈する。凸面には縄目のタタキ、凹面には細かい布目痕を残す。

954～956は土壁の破片である。956は厚さ3.7cm、2段になった横並びの孔を有する。孔はすべて貫通せず、円錐状に細まり閉じる。閉じた後、数mmの間をおいて、前の延長線上に別の孔がはじまる。2段になった孔列の間には、断面隅丸長方形の穴が横並びに開く。隅丸長方形の穴は、円形の孔と直交する方向で延びる。円形孔と隅丸長方形の穴は十字形になって延びるが、前者の並びと並びの間に後者が位置するため、両者は接することがない。これらの孔や穴は、塗り壁の芯材であると考えられる。胎土は3mm以下の半透明・白色砂粒を多量に含み、有機物を混じていたためか気泡がある。色調はにぶい橙色、片面は二次焼成による赤変が認められる。この土壁破片は、おそらく使用時に焼成を受け、その結果、竹木を使った芯部は焼失したが、それを包む土質部は固結したものであろう。954・955も同様のものである。

#### (4) 土製品

957は鞆の羽口である。外面指頭圧痕の後ナデ。長軸方向に貫通する円筒状の孔は真円に近似する。おそらく、中子を入れて全体を成形した後、それを抜き取った跡であろう。胎土は比較的密である。外面は灰白色、上半は黒変し、先端部はガラス化し多孔質となっている。先端部近くの孔面は赤色、ほかは灰白色である。先端部外径は基部外径の0.81の比率で細くなっている。先端面は長軸にほぼ直交するが、基部端面は同軸から72.5°の角度をもって斜目につくる。孔径は約3.3cmでほぼ一定している。体部外面には紐状のもので絞めたような圧痕が数箇所残っている。これは、成形後、焼成せずに生乾きのものをそのまま炉に設置した結果であると考えられる。鞆の羽口破片はS-10グリッド第3・4層から各1点ずつ出土している。

958は紡錘車である。胎土は微小な白色砂粒を含む。色調は灰白色である。調整はナデ、穿孔は一方向から行われている。959は蛸壺である。胎土は1mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は明赤

表39 瓦観察表

遺物番号	調整	胎土	色調
947	内面回転ナデ 外面板ナデ		内面灰白色 外面黒色(ツヤ消し状)
948	内面ナデ 外面ナデ		内外面とも黒色(ツヤ消し状)
949	凹面縄目のタタキ、一部に布目に凸面縄目のタタキ	5mm以下の白色・半透明砂粒を多量に含む	赤褐色
950	凹面細かい布目凸面縄目のタタキ	3mm以下の白色・半透明砂粒を多量に含む	淡黄褐色
951	凹面細かい布目凸面縄目のタタキ	3mm以下の白色・半透明砂粒を多量に含む	淡黄褐色
952	凹面細かい布目凸面荒い縄目のタタキ	3mm以下の白色・半透明砂粒を多量に含む	青灰色
953	凹面細かい布目凸面縄目のタタキ	5mm以下の白色・半透明砂粒を多量に含む	凹面灰白色 凸面橙色

表41 土壁包含層別出土量

包含層名	破片数	重量(g)
Q-11 第4層	2	40
R-10	13	430
R-11	103	4200
S-10	19	350
U-11	11	75
計	148	5095
Q-11 第3層	9	325
R-10	5	145
R-11	70	1560
S-10	3	90
T-11	4	135
U-9	1	65
U-10	1	75
U-11	1	25
V-11	1	10
計	95	2430

表40 土壁遺構別出土量

遺構名	破片数	重量(g)	S D02 黒色土附 砂質土附	2	80
S P 195	3	105	S D02 砂質土附	8	950
254	4	60	S D05	2	10
223	1	55	07	6	170
312	5	65	08	3	160
230	6	80	09	11	410
187	3	40	011	4	30
232	4	45	014	3	50
194	8	405	015	14	260
303	5	205	016	6	200
202	6	70	028	5	115
306	16	425	S X 04	3	85
258	7	315	05	1	40
233	1	30	06	1	85
S K 011	3	390	09	3	45
015	9	140	計	281	7890
016	2	70			
019	2	10			
020	16	285			
021	7	150			
024	13	315			
025	45	635			
026	27	1060			
028	16	245			

褐色である。内外面ともナデ仕上げ。全体は釣鐘状を呈する。頂部にはナデにより溝をつくる。釣部の穿孔は一方向から行っている。960～962は土錘である。960・961は棒状有孔のもの、962は管状のものである。

(5) 金属製品

963～971は銅銭である。第3・4の包含層から

表42 出土銅銭表

ら合計9点出土した。銭種は表42に示した。明銭が1点あるが他は北宋銭である。972は鉄製鋤先である。平面舌状形、鋤身最大長18.6cm、先端部巾7.8cm、基部最大巾14.6cm、袋部最大高1.4cm、厚さ約0.25cmである。2枚の鉄板によって袋部をつくり出す。同下側は平坦であるが、袋部からさらに基部側へも平坦面をつくっている。

包含層名	銭種	咸平通寶	天聖元寶	嘉祐元寶	元豐通寶	元豐通寶	紹聖元寶	大觀通寶	永樂通寶	合計
R-10第4層				1					1	2
S-10第4層		1		1	1	1	1	1		6
R-11第3層			1							1
備考						篆書				

一方、上側は「U」字を呈する深い割りをつくる。刃部は舌状形を呈する外形部のすべてにつくり出している。刃部下面は平坦なままであるが、上面は若干内側気味に曲げて鋭いエッジをつくっている。

973～976は鉄釘である。断面方形及至隅丸方形で、頭部から先端部に次第に細まる。頭部はタキによると考えられる拡張がある。拡張は一方にのみ(973・974)と両側に(975・976)みられるものの2種がある。

977は鉄鏃と考えられる。鏃身上半を折損する。断面は長方形である。細長い茎部をもつ。

978は鉄製庖丁である。刃部長18.5cm、茎部長4.5cm以上である。やや湾曲する刃部をもつ。

979は銅製の煙管である。ともに羅字の一部が残存する雁首と吸口がセットで出土した。火皿は接合による、雁首と吸口は、上端に線状の継目を残す。また、両方とも竹管の羅字が残存していた。羅字は雁首には6mm、吸口には13mmの長さ分が差し込まれていた。雁首の首部は、ゆるやかに屈曲して細まりながら短く延びる。首部には口縁端が水平ではなく、前方へ傾斜する火皿を取り付ける。吸口は中位で急に細くなり、再び外湾してやや径を増して端部に至る。端部はゆるく屈曲させ、内傾して終わる。火皿・雁首には渡金の一部が残存している。

S D02砂質土層から合計8点、492g、第4層から合計12点、1156g、第3層から合計14点、998gの鉄滓が出土した。これらのうち、破損などがなく、外形が完結する鉄滓を6点図化した。980・981・982・985は一面が椀底状を呈する、いわゆる椀形滓である。983・984は板状を呈する。980は化学分析等を行った。それによると鍛練鍛治滓と判断されている。また、破碎した際、内部に松材の木炭が含まれていることも確認された(VIIIの一、参照)。第4層はR-11とS-10グリッドのみからの出土である。これは、R-11グリッドのSK26出土の鞆の羽口と関連があるものと考えられる。第3層ではS-11・T-11・V-8グリッドからまとまって出土している。

## (6) 木製品

986～1016はS E01出土の桶の側板である。井筒としての桶には当然に底板はなかった。31枚の側板を割竹を利用したタガで締めて組み立てている。タガは4箇所につけられている。側板はすべてヒノキ<sup>(1)</sup>と考えられる。側板の法量は1枚毎に異なる。木取方法と調整方法も複数ある(表43)。

側板長(A値)は53.4～56.0cm, 平均値は54.25cmである。(最大値-最小値)÷平均値=変動率とするとA値の変動率は0.0479である。

側板上端巾(B値)は5.3～9.8cm, 平均値は7.74cmである。変動率は0.5814である。

側板下端巾(C値)は4.0～8.2cm, 平均値は6.3cmである。変動率は0.6667である。

側板厚(D値)は1.1～1.6cm, 平均値は1.33cmである。変動率は0.3759である。

側板中位外面巾(E値)は4.6～9.2cm, 平均値は7.05cmである。変動率は0.6525である。

側板中位内面巾(F値)は4.4～8.8cm, 平均値は6.72cmである。変動率は0.6548である。

A値変動率が小さいのは分母となる数値が相対的に大きいためであろう。B・C・E・F値は、桶の形状・機密性を左右する値である。各値かならずしも同一ではないが、ほぼ同じ変動率であるといえよう。変動率0.5814～0.6667の範囲であれば、桶の機密性が保たれるということであろう。D値は分母となる数値が他に比し小さいが、変動率はA値ほどではないが小さいといえよう。

木取り方法は図106に示したようにA・B・Cの3種に分類した。Cが圧倒的に多い。側板の大部分はその凹面を桶の内面側に置くが、C類のものに限って凹面を外側面に置くように成形しているものがある。それは、No.1・11・16・27の4枚である。

調整痕は残らないものが多いが、外面左右端に面取りを行うものが少しある。それは、No.1・6・11・16・21・27の6枚である。この6枚は側板凹面を外側面に置く。このうち4枚には共通するものがある。No.1・11・16・27がそれである。その意味については「四、考察」で触れる。

1017はタガの一端である。タガは、竹を巾約1cmに割り、端部は斜目に鋭く切断している。タガの総延長は29.28mであった。

1018・1019はS D02北半に設置されていた2本の石積み遺構の基底板である。1018は南側のもの。両端を失っている。腐食を強く受け原状はよく分からないが、厚さよりも巾を大きくつくっていることは推測できる。1019は北側のもの、腐食が激しい。

1020はS X010出土の木製の漆椀である。口径13.4cm, 器高4.5cm, 高台外径5.4cm, 素材はトチノキ<sup>(1)</sup>である。木目は横に走る。割りぬき造りであり、外面は黒漆を、内面は黒漆の上に、さらに赤漆を塗っている。

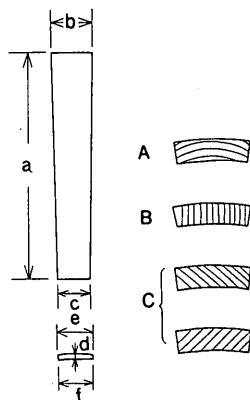


図106 桶側板計測基準図

1021~1028はS D02南半出土の縦長薄板品である。形状は細長い長方形、長さは完存するもので28.5cm、ほかは不明である。巾は2.7~2.9cm、3.5~3.6cm、7.0cmの3種がある。厚さは0.1~0.25cm、径2mm以下の穿孔がなされている。穿孔は縦方向において上下端寄りと中位に、横方向において両端寄りと

表43 S E 01井筒用桶側板計測値・観察表

側板No	A	B	C	D	E	F	C/B	F/E	木取りの種類	調整など
1	54.0	9.8	8.2	1.2	9.2	8.8	0.84	0.96	C	外面左・右端面取り、中位から上・下方向へ削り
2	53.9	8.0	6.1	1.4	7.1	6.8	0.76	0.96	C	調整痕見えず
3	54.0	8.0	6.7	1.1	7.4	7.1	0.84	0.96	C	調整痕見えず
4	54.2	7.8	6.4	1.2	7.2	6.9	0.82	0.96	C	調整痕見えず
5	54.0	5.3	4.1	1.3	4.6	4.4	0.77	0.96	B	調整痕見えず
6	55.1	9.3	7.4	1.4	8.6	8.4	0.80	0.98	C	外面左・右端面取り、中位から上・下方向へ削り
7	54.4	7.9	6.0	1.1	7.0	6.5	0.76	0.93	C	調整痕見えず
8	54.0	7.6	6.3	1.4	6.9	6.6	0.83	0.96	C	調整痕見えず
9	54.4	8.7	7.2	1.3	8.0	7.7	0.83	0.96	C	調整痕見えず
10	54.0	7.0	5.7	1.4	6.5	6.0	0.81	0.92	C	調整痕見えず
11	53.4	9.4	7.8	1.4	8.6	8.4	0.83	0.98	C	外面左・右端面取り、中位から上・下方向へ削り
12	54.0	8.3	7.8	1.2	7.6	7.0	0.94	0.92	A	調整痕見えず
13	54.2	7.0	5.5	1.4	6.3	5.9	0.79	0.94	C	調整痕見えず
14	54.3	8.0	6.7	1.4	7.5	7.5	0.84	1.00	C	調整痕見えず
15	54.2	6.2	5.6	1.4	5.6	5.4	0.90	0.96	A	調整痕見えず
16	53.6	9.2	8.4	1.6	8.8	8.5	0.91	0.97	A	外面左・右端面取り、中位から上・下方向へ削り
17	53.8	7.8	6.8	1.3	7.4	6.9	0.87	0.93	C	内外面に削り痕少しあり
18	54.0	6.8	5.4	1.3	6.2	5.9	0.79	0.95	C	調整痕なし
19	54.7	8.0	6.6	1.4	7.2	6.9	0.83	0.96	A	調整痕見えず
20	54.8	7.7	6.3	1.4	7.0	6.8	0.82	0.97	C	調整痕見えず
21	54.0	9.6	7.2	1.4	8.4	8.0	0.75	0.95	A	外面左・右端面取り、中位から上・下方向へ削り
22	56.0	7.4	5.4	1.2	6.5	6.2	0.73	0.95	A	調整痕見えず
23	54.4	7.8	6.4	1.2	7.0	6.4	0.82	0.91	C	調整痕見えず
24	54.5	8.8	6.6	1.3	7.8	7.4	0.75	0.95	C	調整痕見えず
25	54.4	6.4	5.5	1.2	6.0	5.7	0.86	0.95	B	調整痕見えず
26	54.6	8.0	6.2	1.6	7.3	7.0	0.78	0.96	C	調整痕見えず
27	54.4	8.5	6.6	1.4	7.8	7.5	0.78	0.96	C	外面左・右端面取り、しかし、調整痕見えず
28	54.5	5.8	4.0	1.4	5.0	4.7	0.69	0.94	C	調整痕見えず
29	54.2	5.8	4.4	1.2	5.0	4.7	0.76	0.94	C	調整痕なし
30	54.2	7.8	6.4	1.4	7.1	6.7	0.82	0.94	C	調整痕なし
31	53.6	6.1	5.6	1.3	5.9	5.6	0.92	0.95	C	調整痕見えず
平均	54.25	7.74	6.30	1.33	7.05	6.72	0.81	0.95		

中位に行うものに分けられる、側面は面取りを行っている。用途は不明である。

1029・1030は漆片である。1029は漆椀の木質部が失われて、漆部のみ残存したものの。これは椀内面口縁部付近のものである。復元口径12cmとなる。赤漆の後、口縁部のみ黒漆を塗っている。裏面には木質の木目がスタンプされている。1030は黒漆片である。裏面には木質の木目がスタンプされている。本来の形状は不明である。

#### (7) 石製品

1031~1033は砥石である。石質はすべて1mm前後の気泡を多く含む。色調は白色である。1031は1組の相対する側面を砥ぎ面とする。他の2側面には巾1.3cmの削り痕がある。1032は最低3面を砥ぎ面とする。残り1面は折損のため不明である。1033は1031と同様である。1034は叩き石である。一半を欠く。石材は花崗岩であろう。端部の凹みは使用痕である。1035はナイフ形石器である。サヌカイトの横長剝片を素材とする。断面三角形、刃部にもブランディングを行っている。1036は磨製石斧である。緑泥片岩を利用する。刃部は使用により鈍くなっている。1037は叩



き石である。上下端に使用痕がみられる。1038は凝灰岩を素材に直方体につくる。焼成を受け全体に黒変している。ほかに花崗岩であるが、焼成を受け黒変している切り石が多量に出土した。1039は石灯籠の一部である。凝灰岩を素材とする。頂部に柵を、底部に柵穴をつくり出している。体部には8枚の蓮弁を削り出している。

(1) 樹種鑑定は鈴木三男氏（金沢大学）と能城修一氏（大阪市立大学）によるものである。

表44 奈良時代以降土器類以外遺物番号・出土遺構  
包含層対照表

遺物番号	出土遺構・包含層	遺物番号	出土遺構・包含層	遺物番号	出土遺構・包含層	遺物番号	出土遺構・包含層
941	R-10第5層	966	S-10	991	S E 01 - 6	1016	S E 01 - 31
942	R-11第5層	967	S-10	992	S E 01 - 7	1017	S E 01
943	R-11第5層	968	S-10	993	S E 01 - 8	1018	S D 02
944	S-11第5層	969	S-10	994	S E 01 - 9	1019	S D 02
945	T-11第5層	970	S-10	995	S E 01 - 10	1020	S X 010
946	V-11第2層	971	S-10	996	S E 01 - 11	1021	S D 02 南半
947	S D 02 南半	972	R-11第4層	997	S E 01 - 12	1022	S D 02 南半
948	S D 02 南半	973	S P 11	998	S E 01 - 13	1023	S D 02 南半
949	S K 011	974	R-11第3層	999	S E 01 - 14	1024	S D 02 南半
950	S D 07	975	S-10第4層	1000	S E 01 - 15	1025	S D 02 南半
951	R-11第4層	976	R-11第4層	1001	S E 01 - 16	1026	S D 02 南半
952	S-10第4層	977	T-11	1002	S E 01 - 17	1027	S D 02 南半
953	R-11第3層	978	S D 02	1003	S E 01 - 18	1028	S D 02 南半
954	S P 258	979	S D 02	1004	S E 01 - 19	1029	S D 02
955	R-11第3層	980	S D 02	1005	S E 01 - 20	1030	S D 02
956	R-11第4層	981	R-11第4層	1006	S E 01 - 21	1031	S D 08
957	S K 024	982	S-10第4層	1007	S E 01 - 22	1032	S D 08
958	T-11第3層	983	S-10第4層	1008	S E 01 - 23	1033	S D 08
959	R-10第3層	984	T-11第3層	1009	S E 01 - 24	1034	U-11第4層
960	U-11第3層	985	S-11第3層	1010	S E 01 - 25	1035	S-10第4層
961	U-11第3層	986	S E 01 - 1	1011	S E 01 - 26	1036	S E 01
962	V-10第3層	987	S E 01 - 2	1012	S E 01 - 27	1037	S-11第2層
963	R-10	988	S E 01 - 3	1013	S E 01 - 28	1038	S D 02 南半
964	R-10	989	S E 01 - 4	1014	S E 01 - 29	1039	S D 02 南半
965	R-11	990	S E 01 - 5	1015	S E 01 - 30		

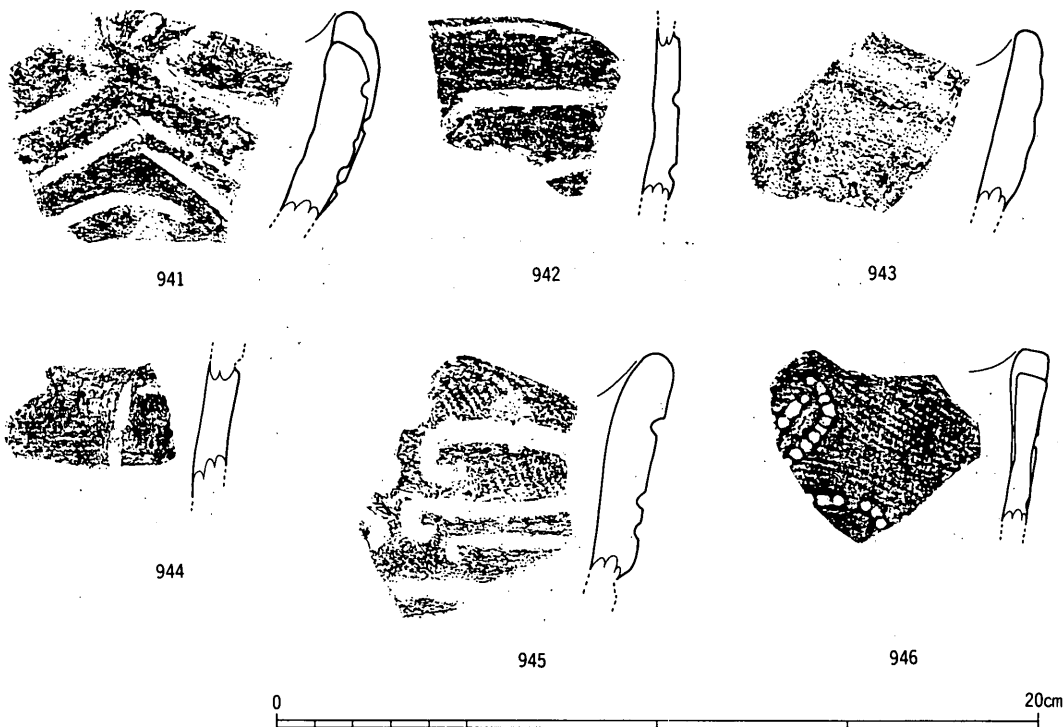
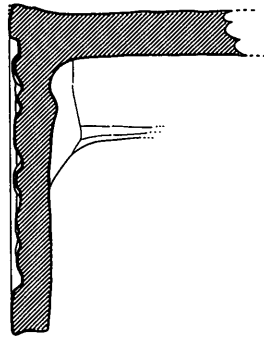
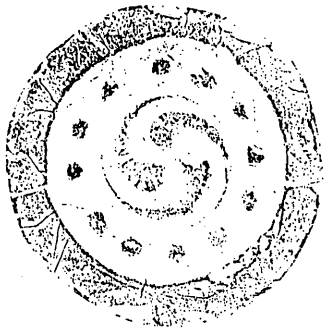
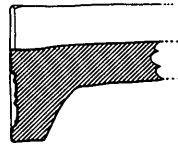


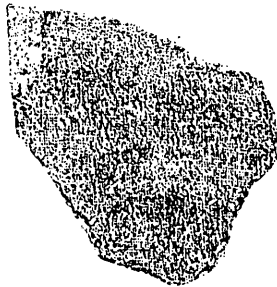
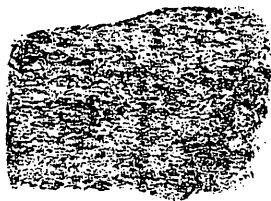
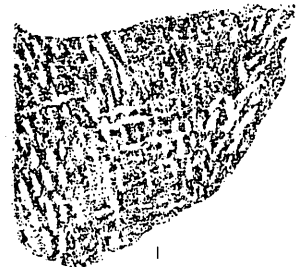
図107 R-10・R-11・S-11第5層, T-11第4層, V-11第2層出土縄文土器実測図 (1/2)



947



948



949

950

951

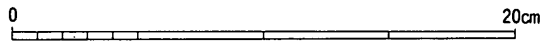


图108 S D02南半·07, S K011, R-11第4层出土瓦实测图 (1/3)

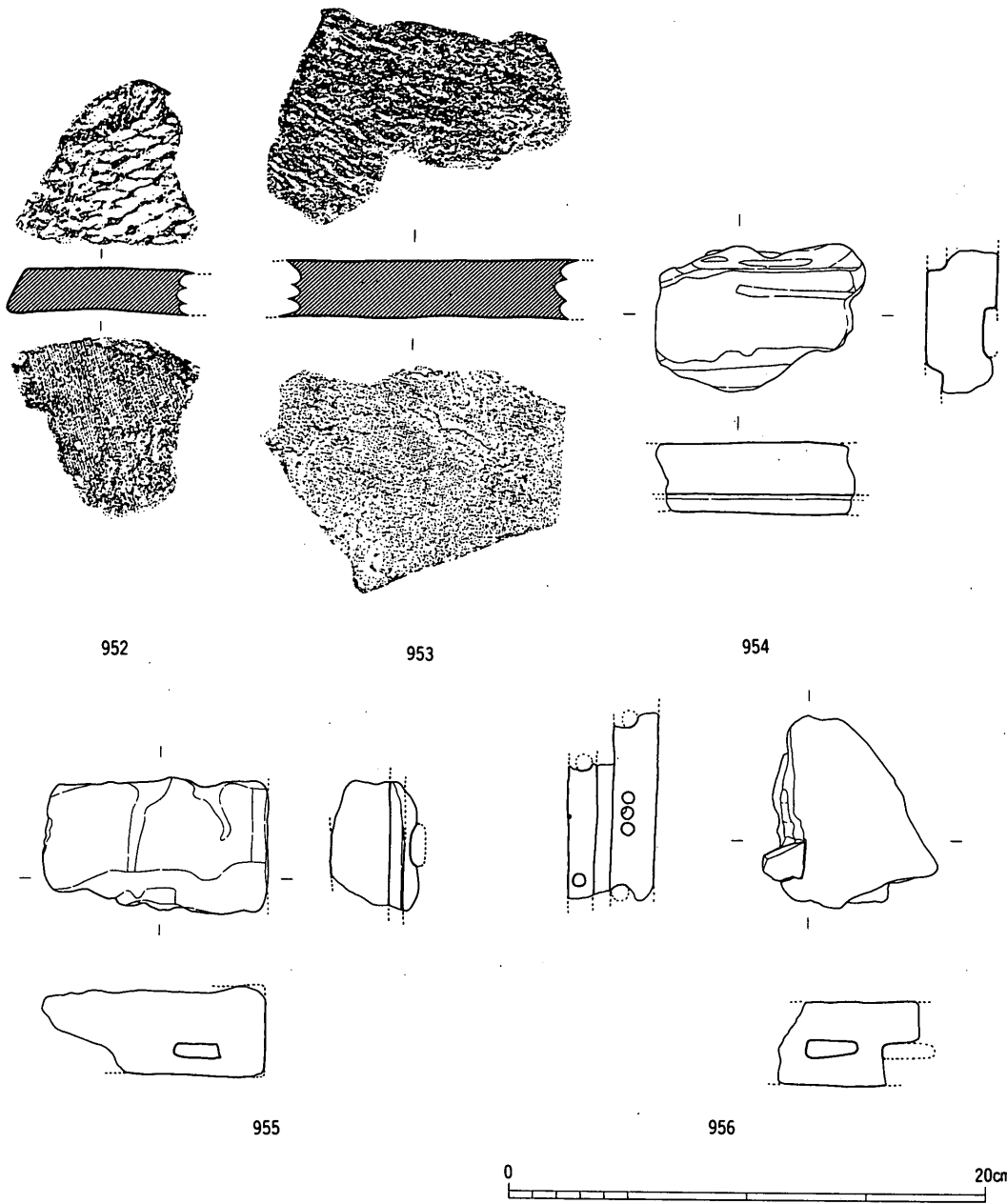


图109 S-10第4层, R-11第3层出土瓦, SP258, R-11第3·4层出土土壁实测图 (1/3)

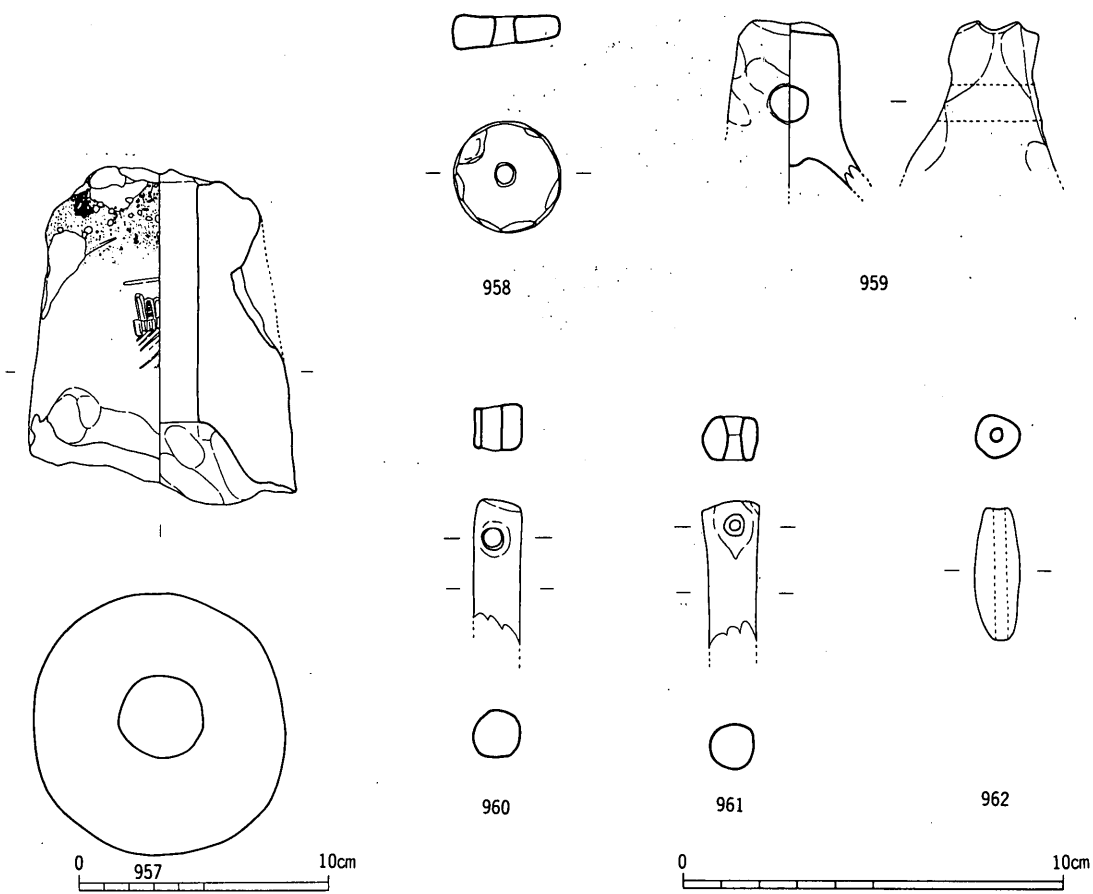
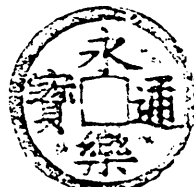


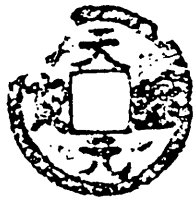
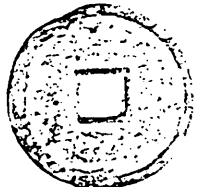
图110 S K 024, T-11·R-10·U-11·V-10第3層出土土製品実測図 (1/3·1/2)



963



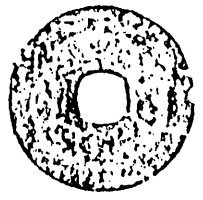
964



965



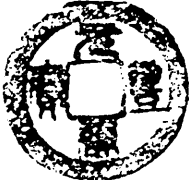
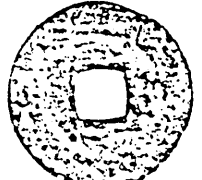
966



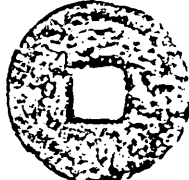
967



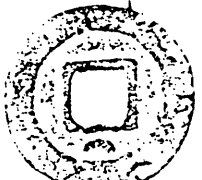
968



969



970



971

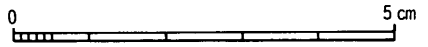


图111 出土銅錢拓影 (1/1)

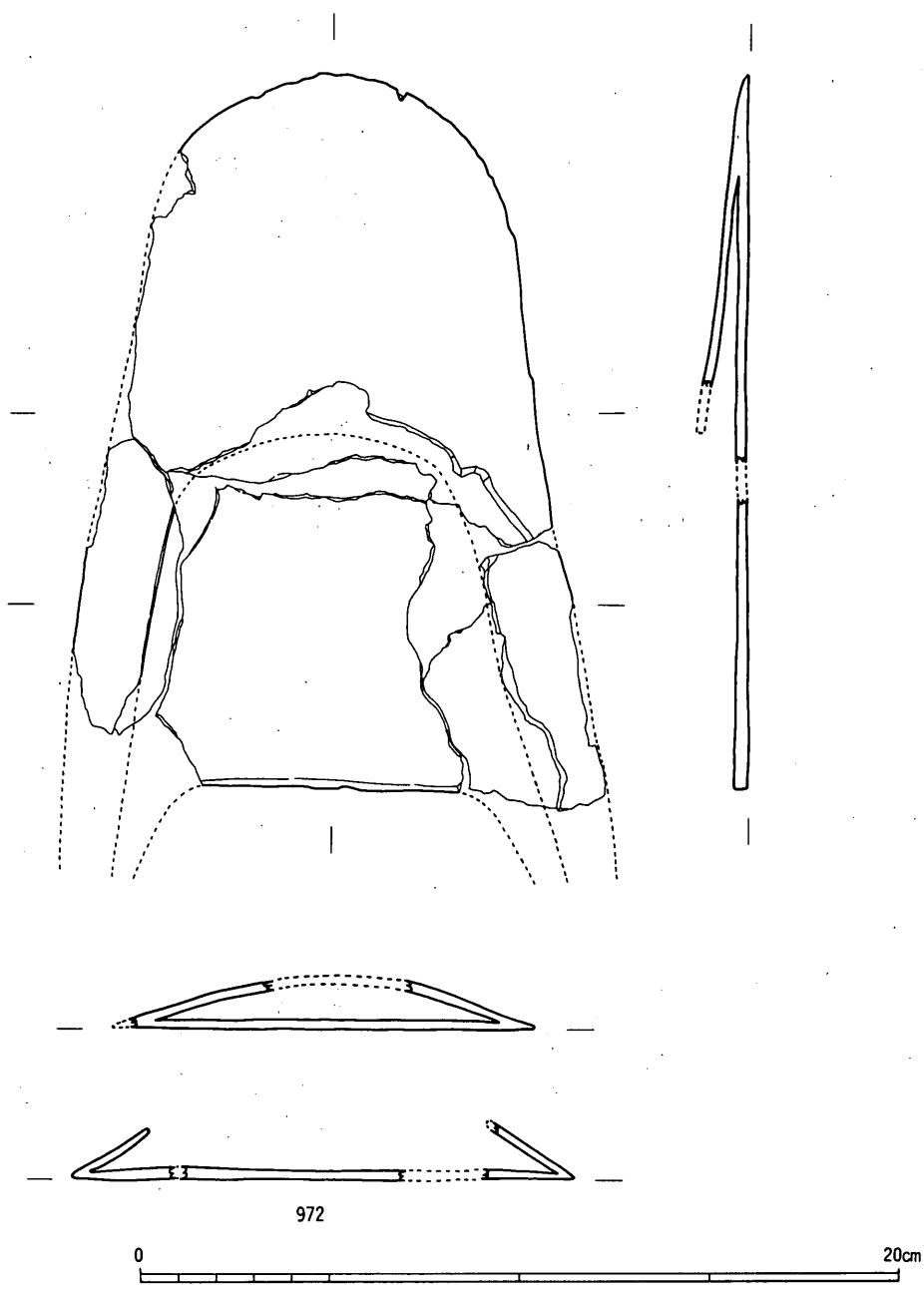


图112 R-11第4层出土金属制品实测图 (1/2)

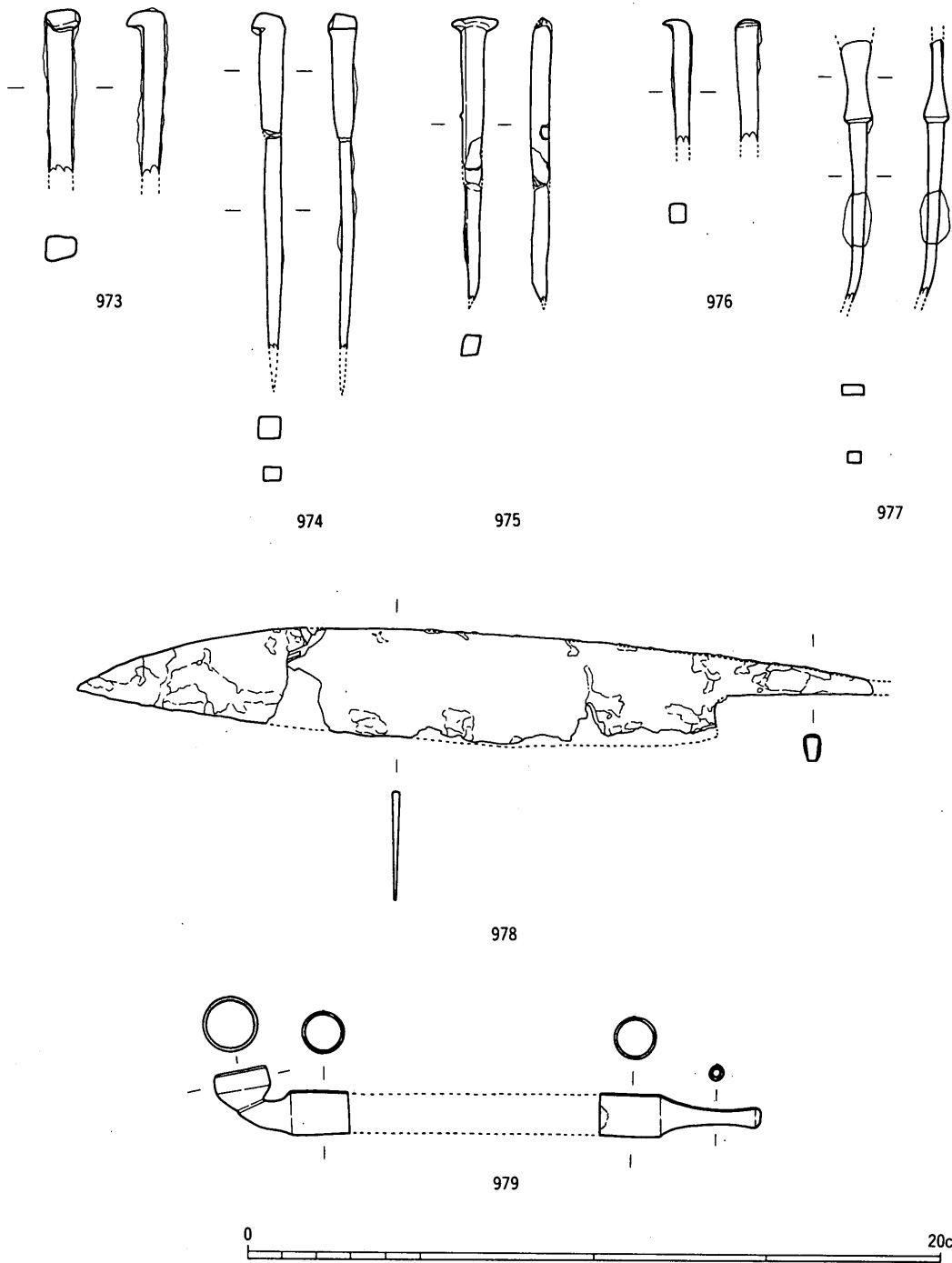
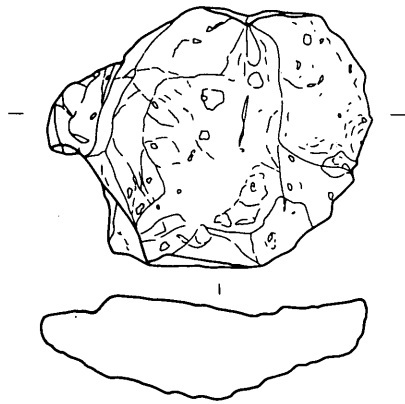
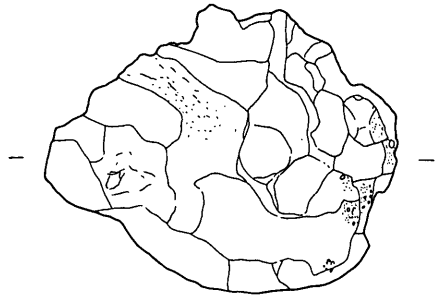


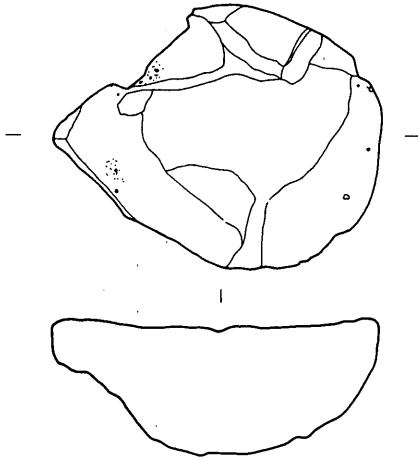
图113 SP11, R-11第3层, S-10·R-11·T-11第4层, SD02南半出土金属制品实测图 (1/2)



980



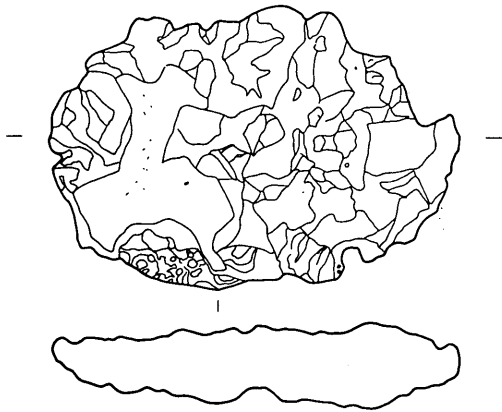
981



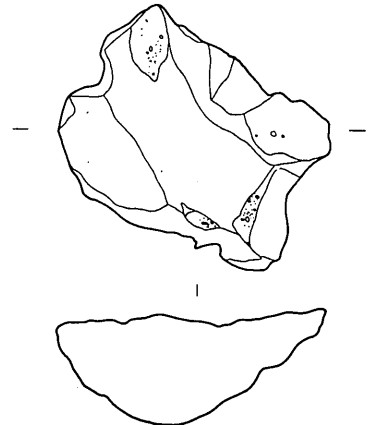
982



983



984



985

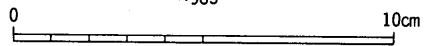
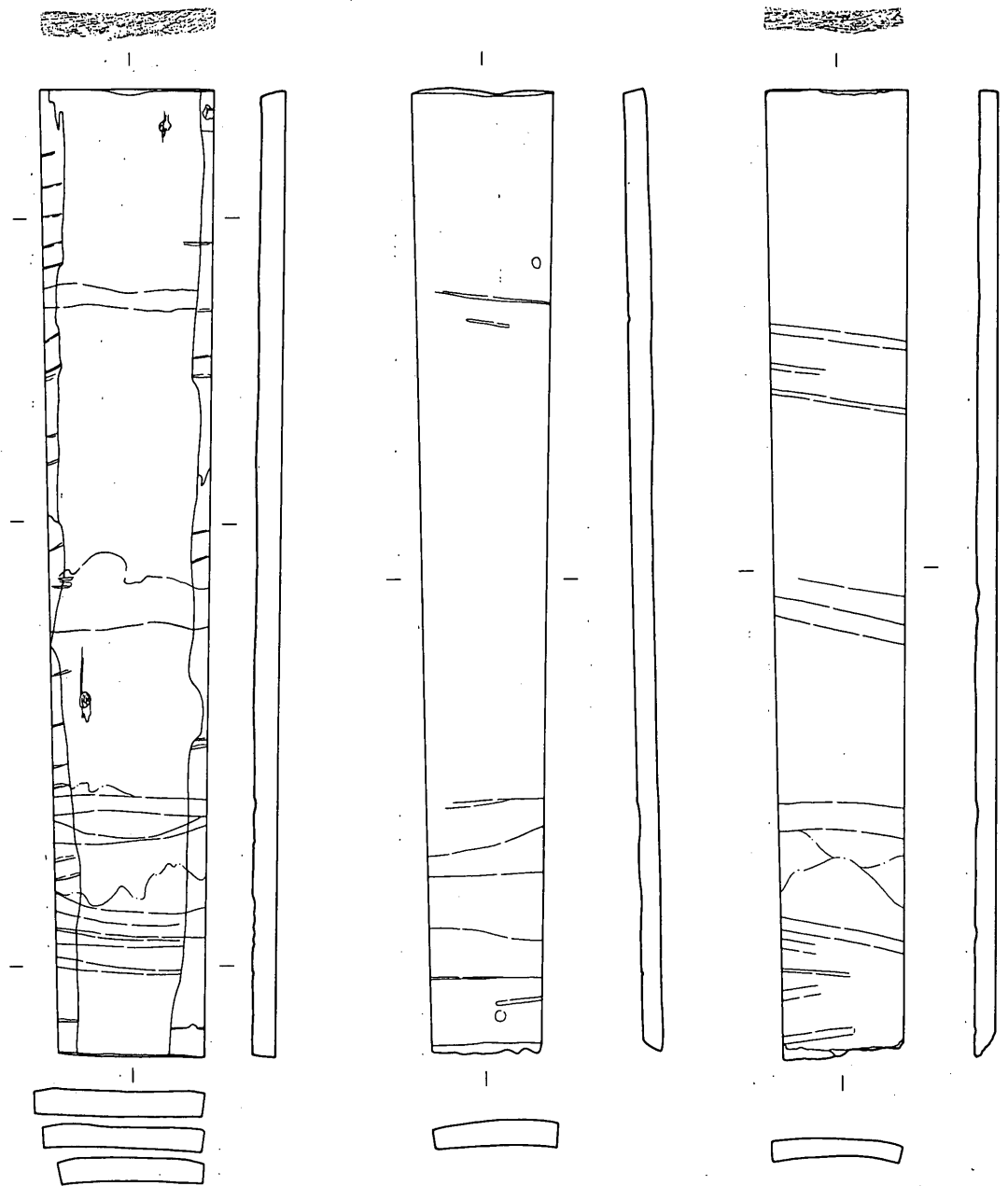


图114 S D02, R-11·S-10第4層, S-11·T-11第3層出土鉄滓実測図 (1/2)





986

987

988

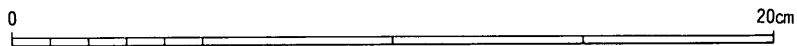


图115 S E 01出土木製品実測图(1) (1/4)

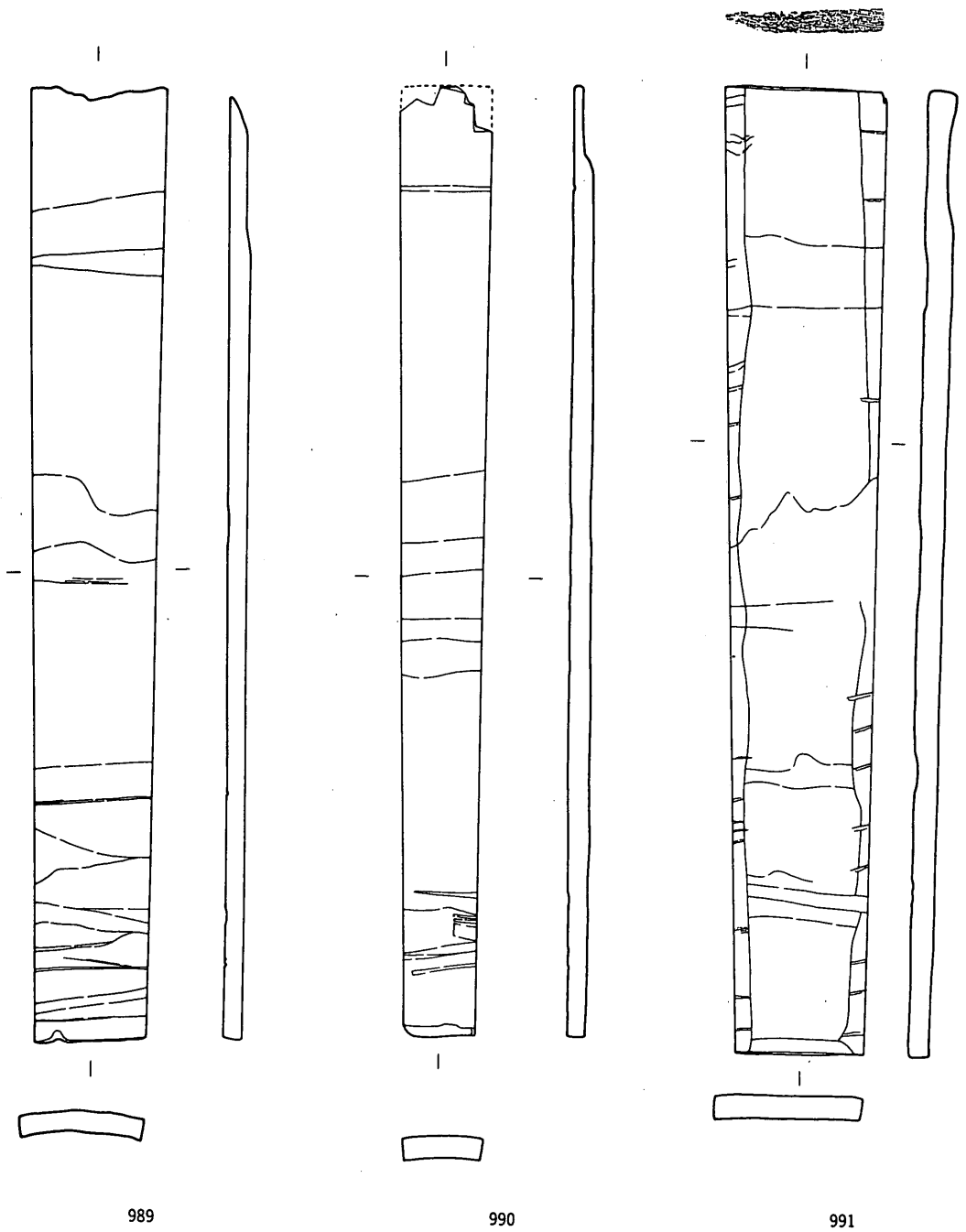
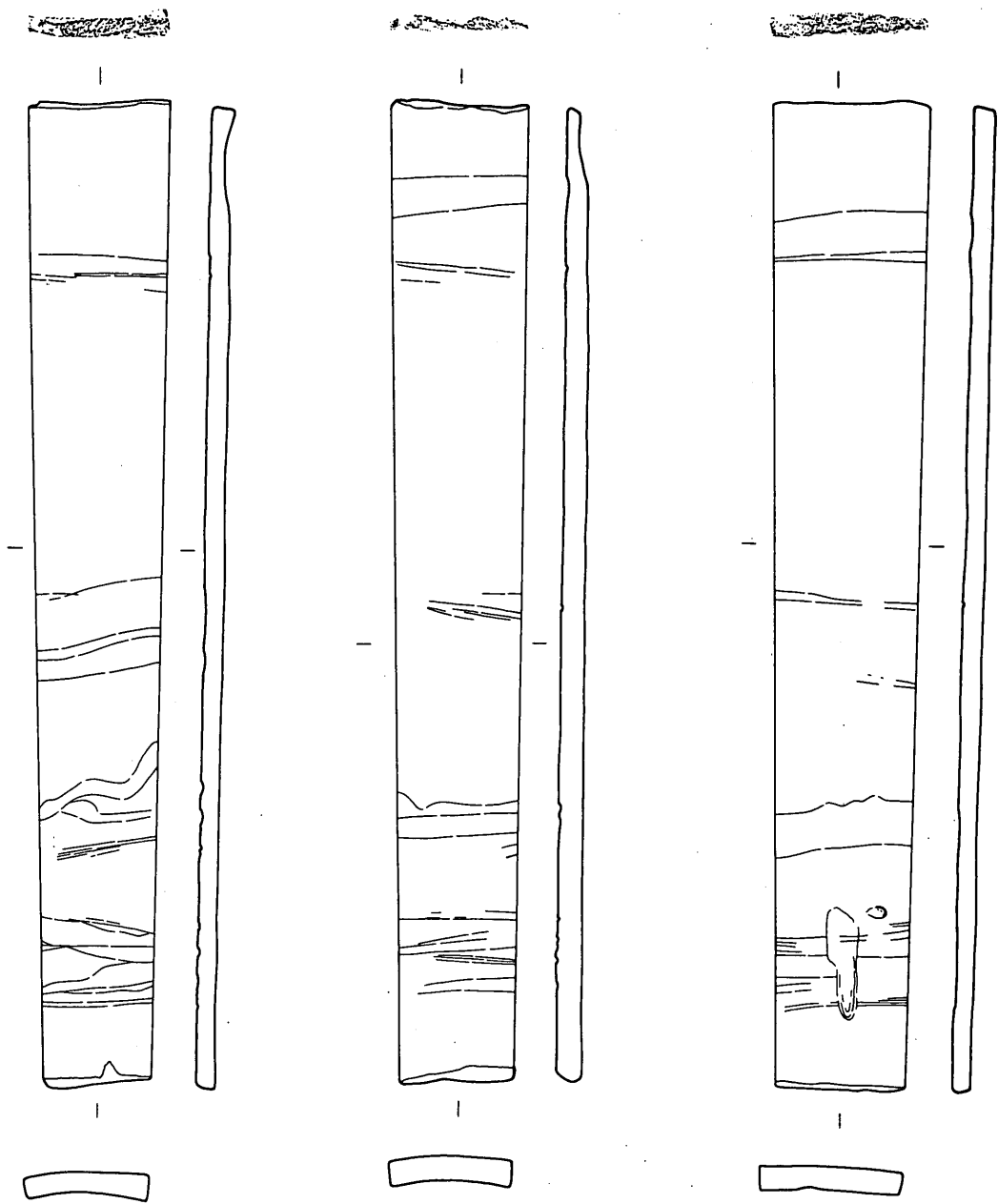


图116 S E 01出土木製品実測图(2) (1/4)



992

993

994

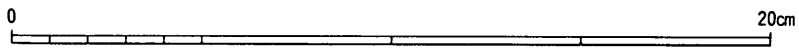


图117 S E 01出土木製品実測图(3) (1/4)

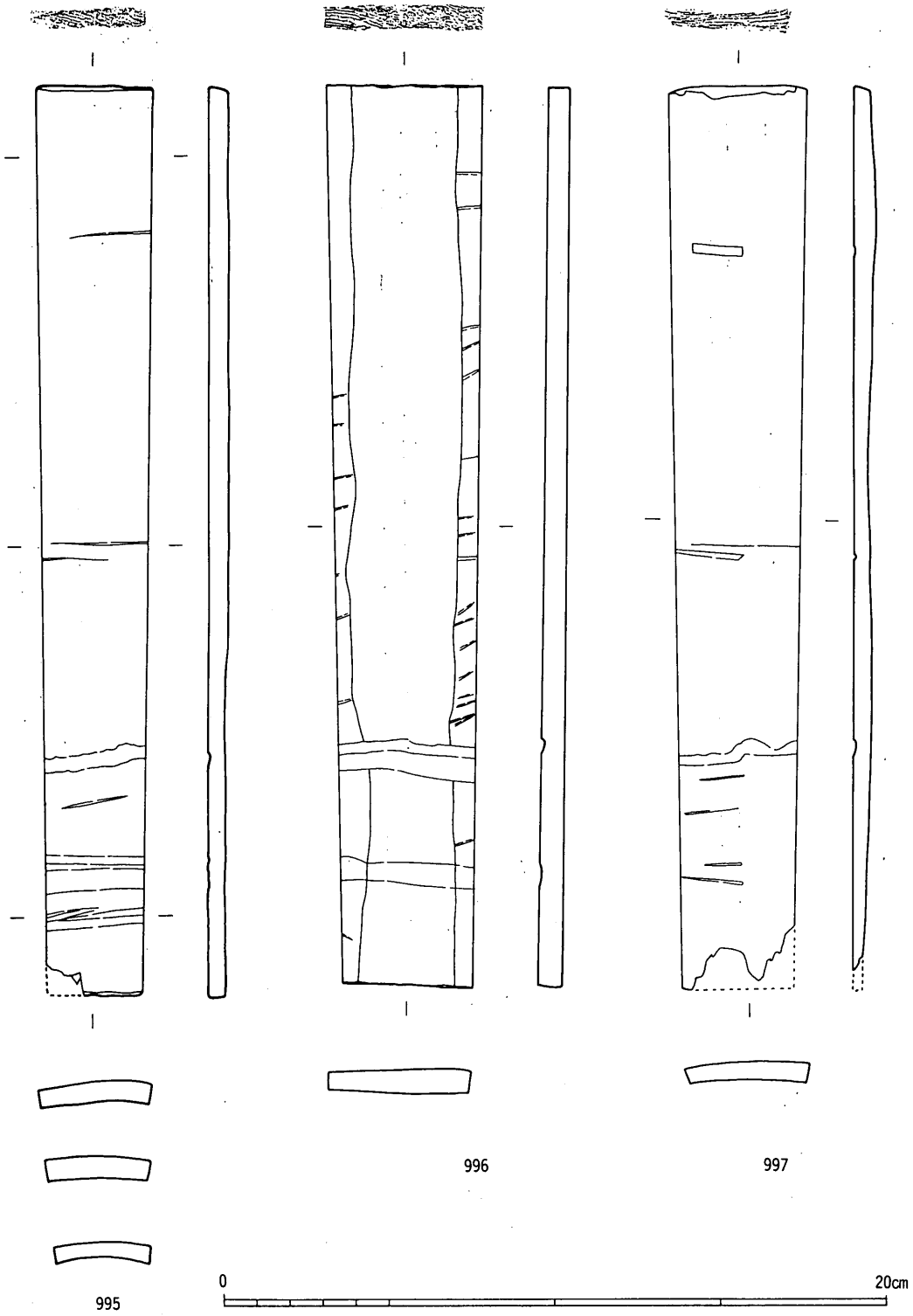


图118 S E 01出土木製品実測图(4) (1/4)

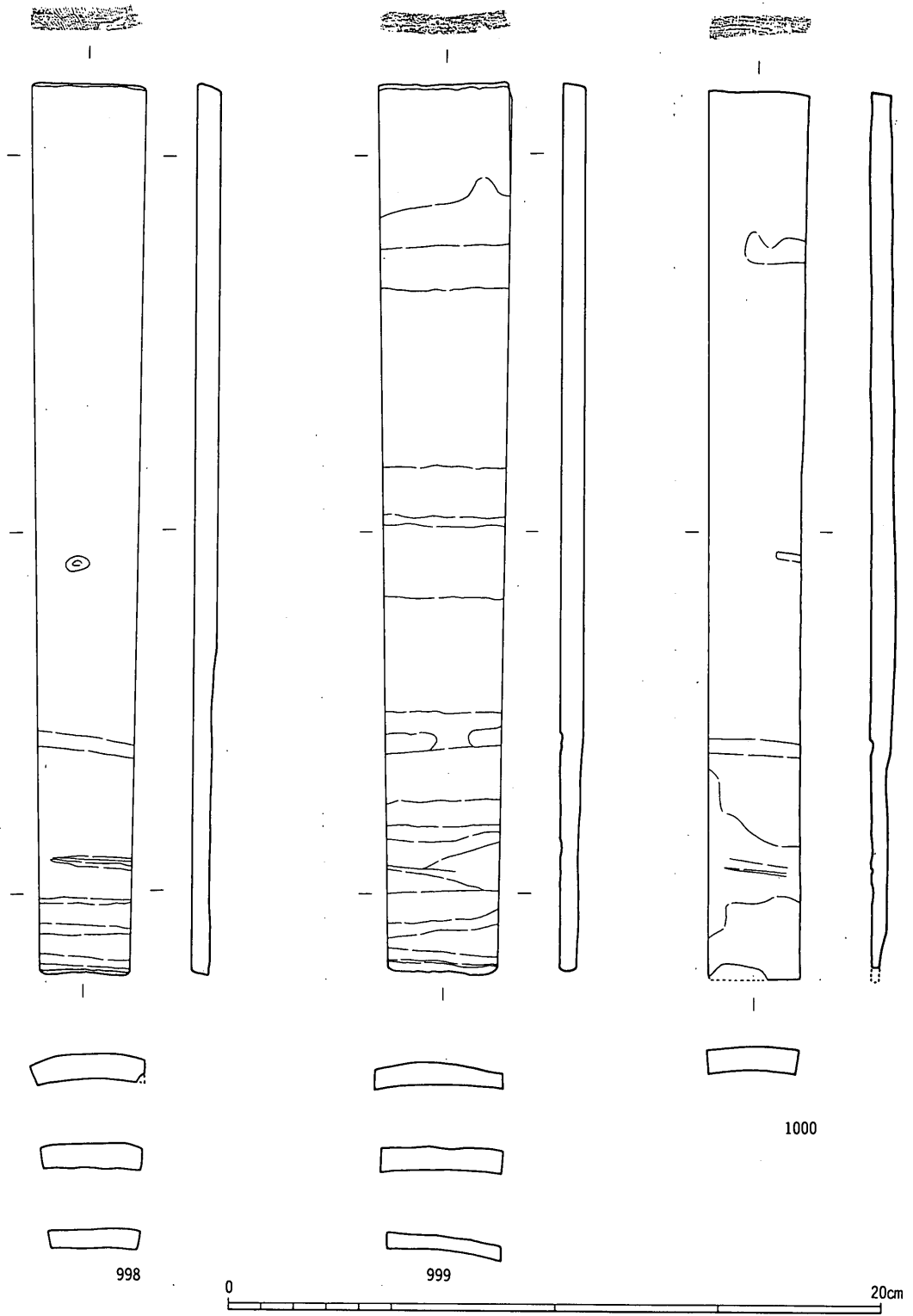


图119 S E 01出土木製品実測图(5) (1/4)

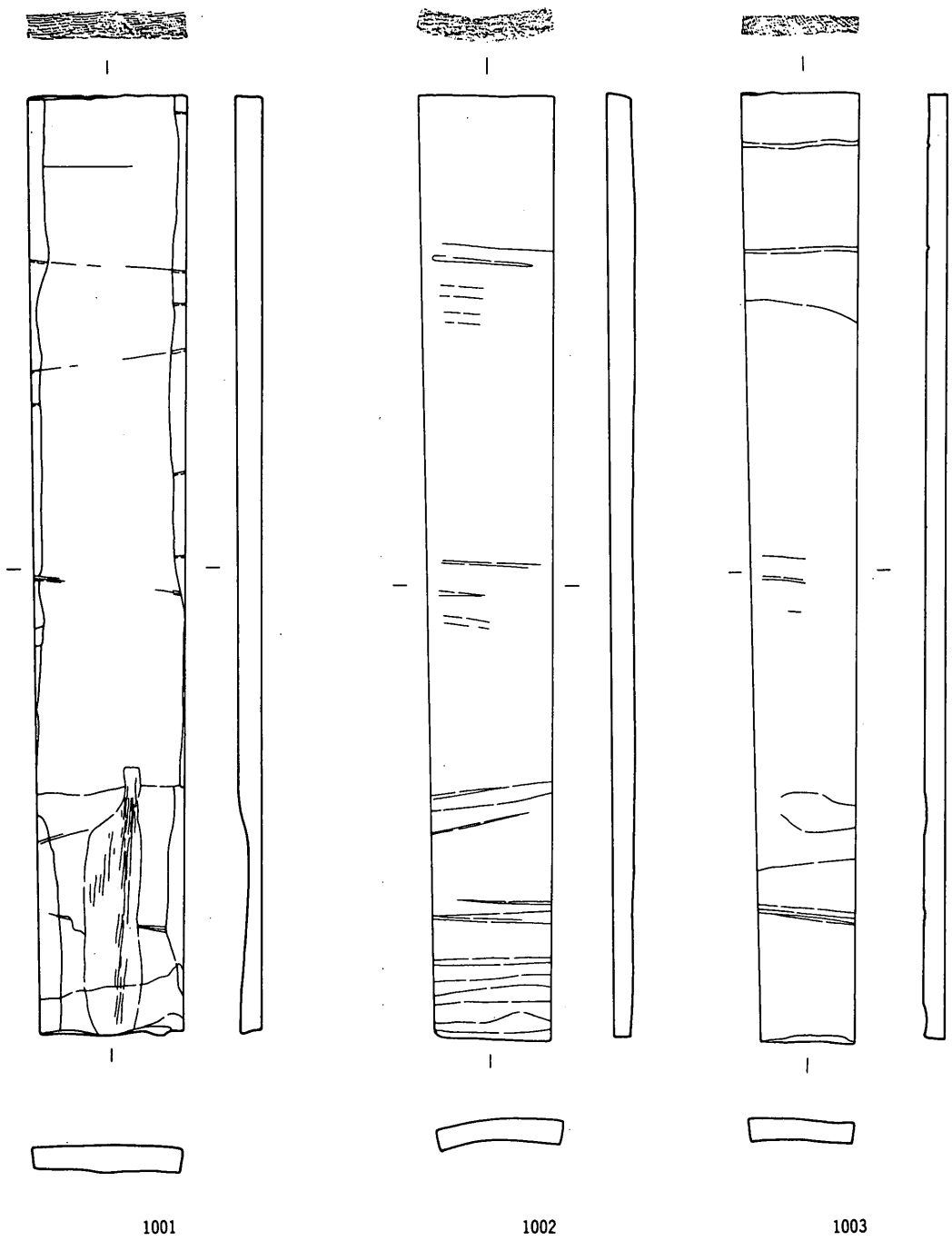
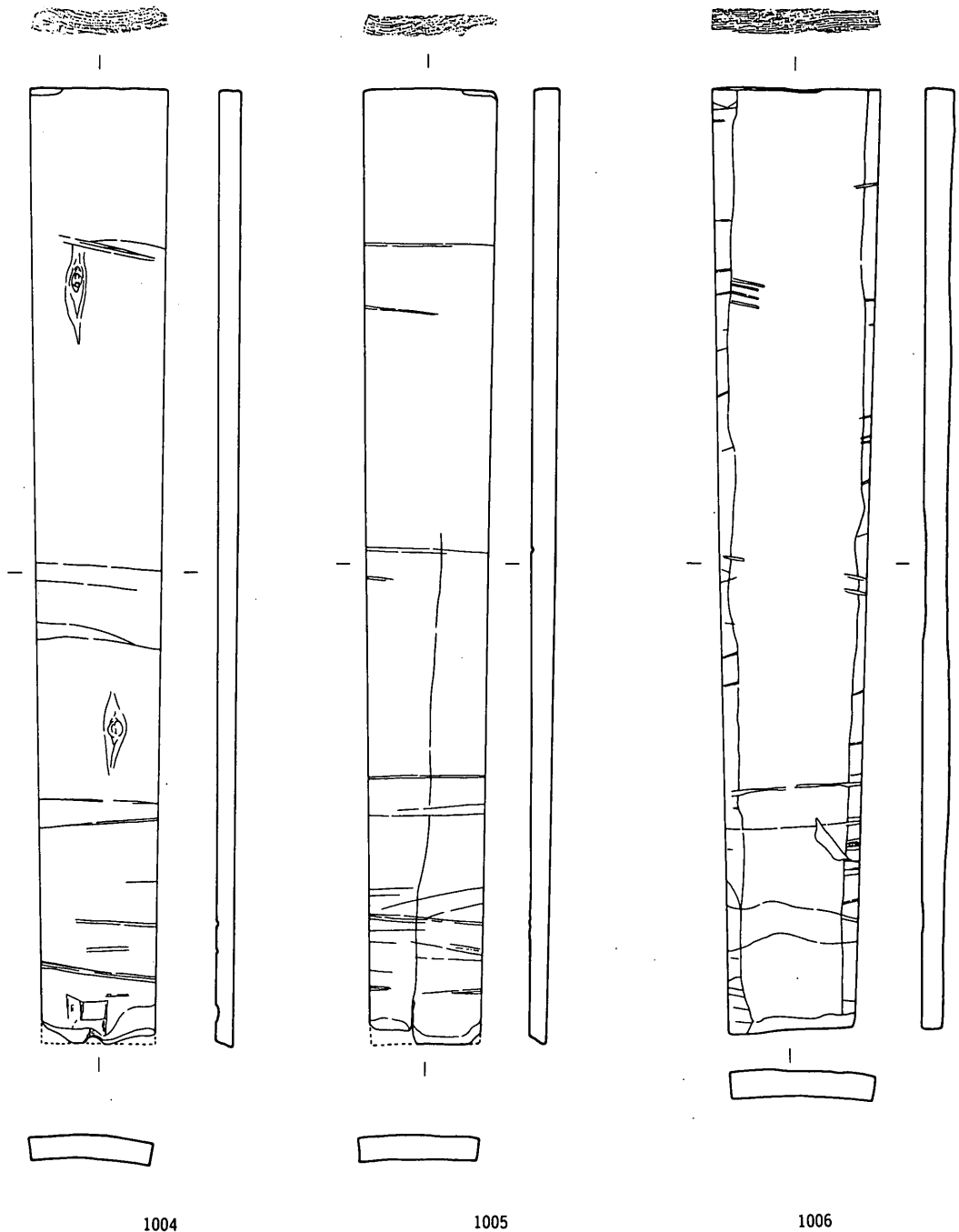


图120 S E 01出土木製品実測图(6) (1/4)



1004

1005

1006

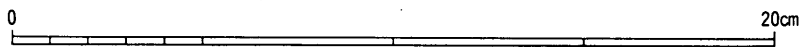


图121 S E 01出土木製品実測图(7) (1/4)

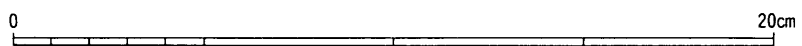
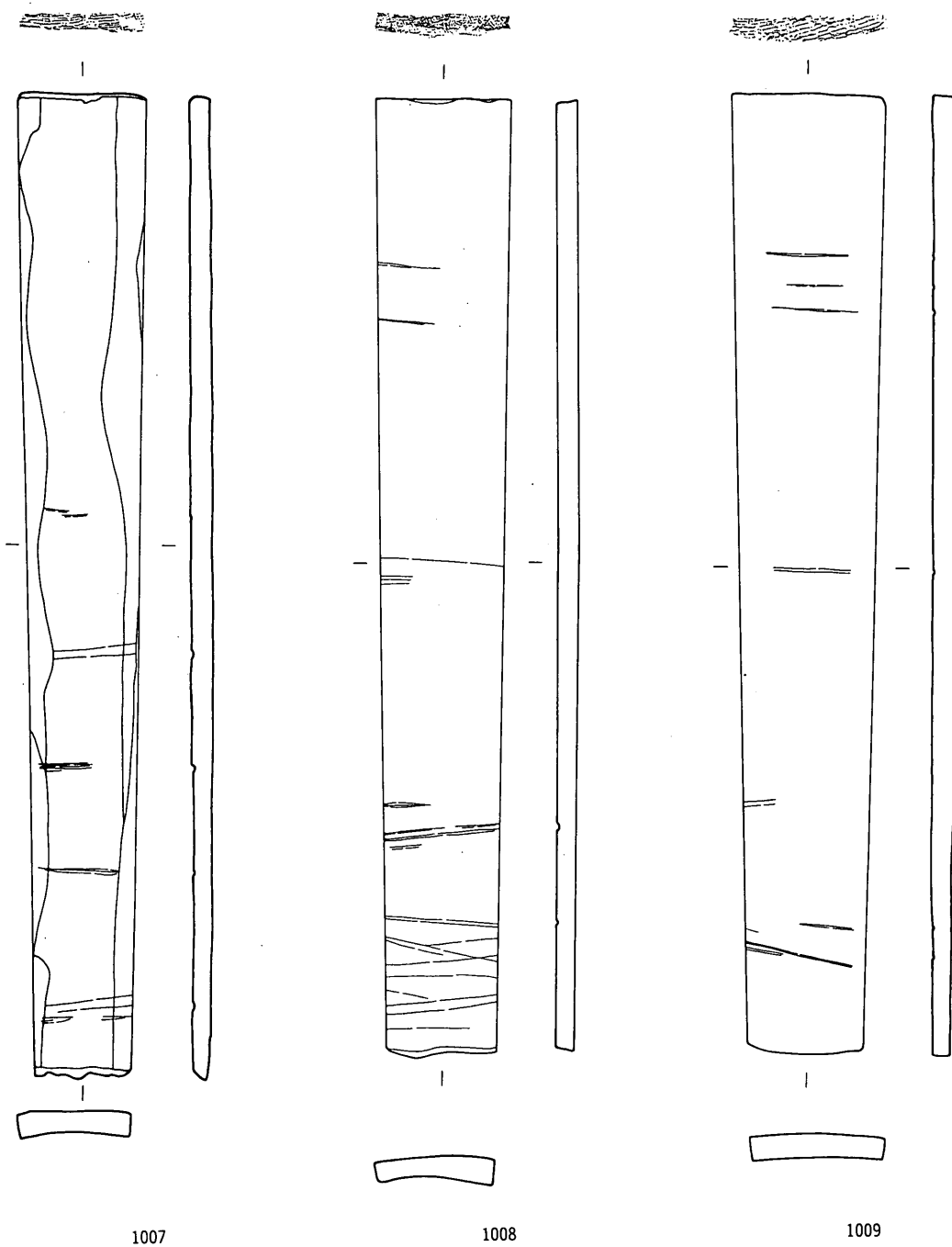
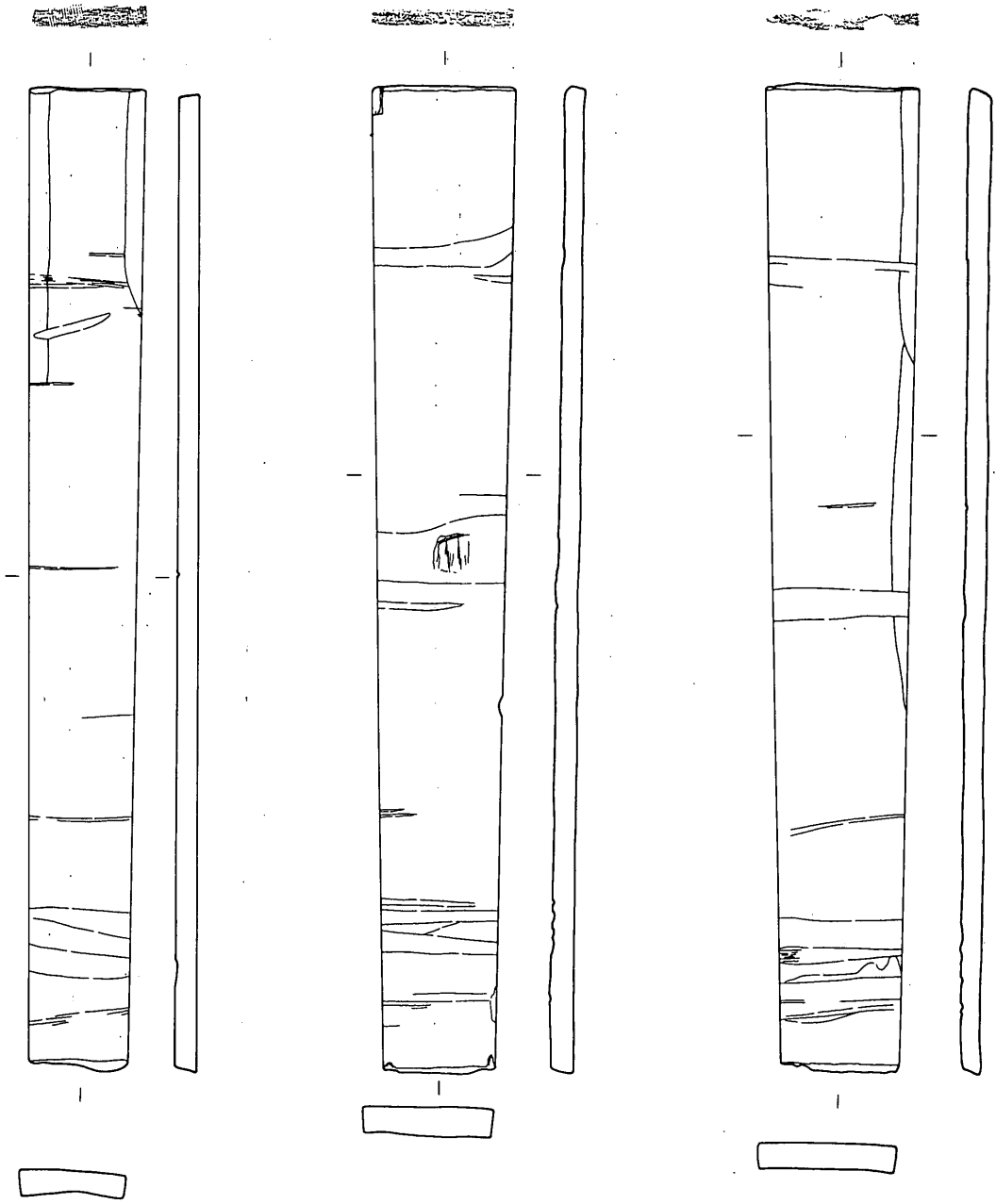


图122 S E 01出土木製品実測图(8) (1/4)





1010

1011

1012

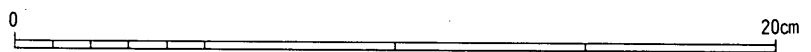


図123 S E 01出土木製品実測図(9) (1/4)

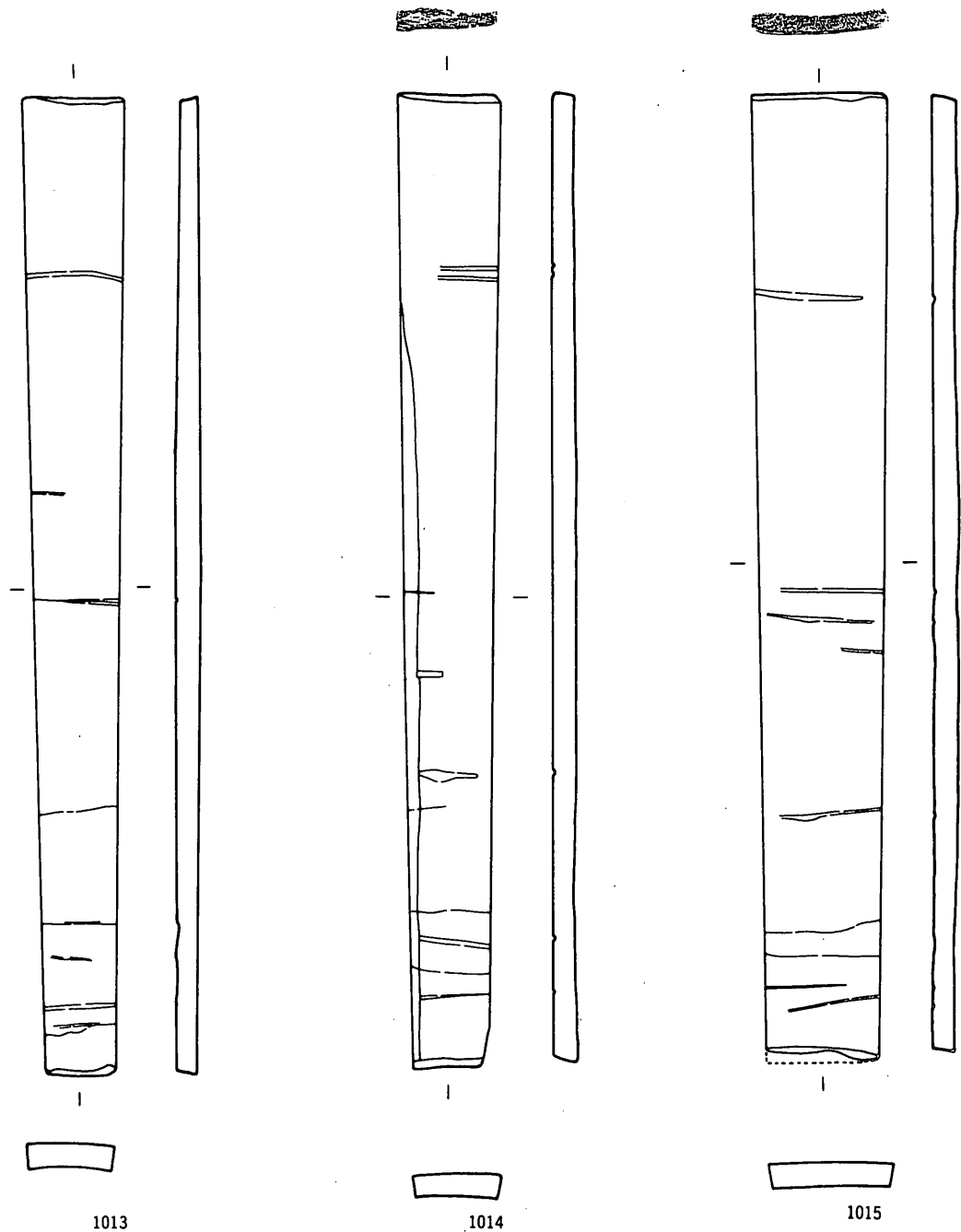


图124 S E 01出土木製品実測图(10) (1/4)

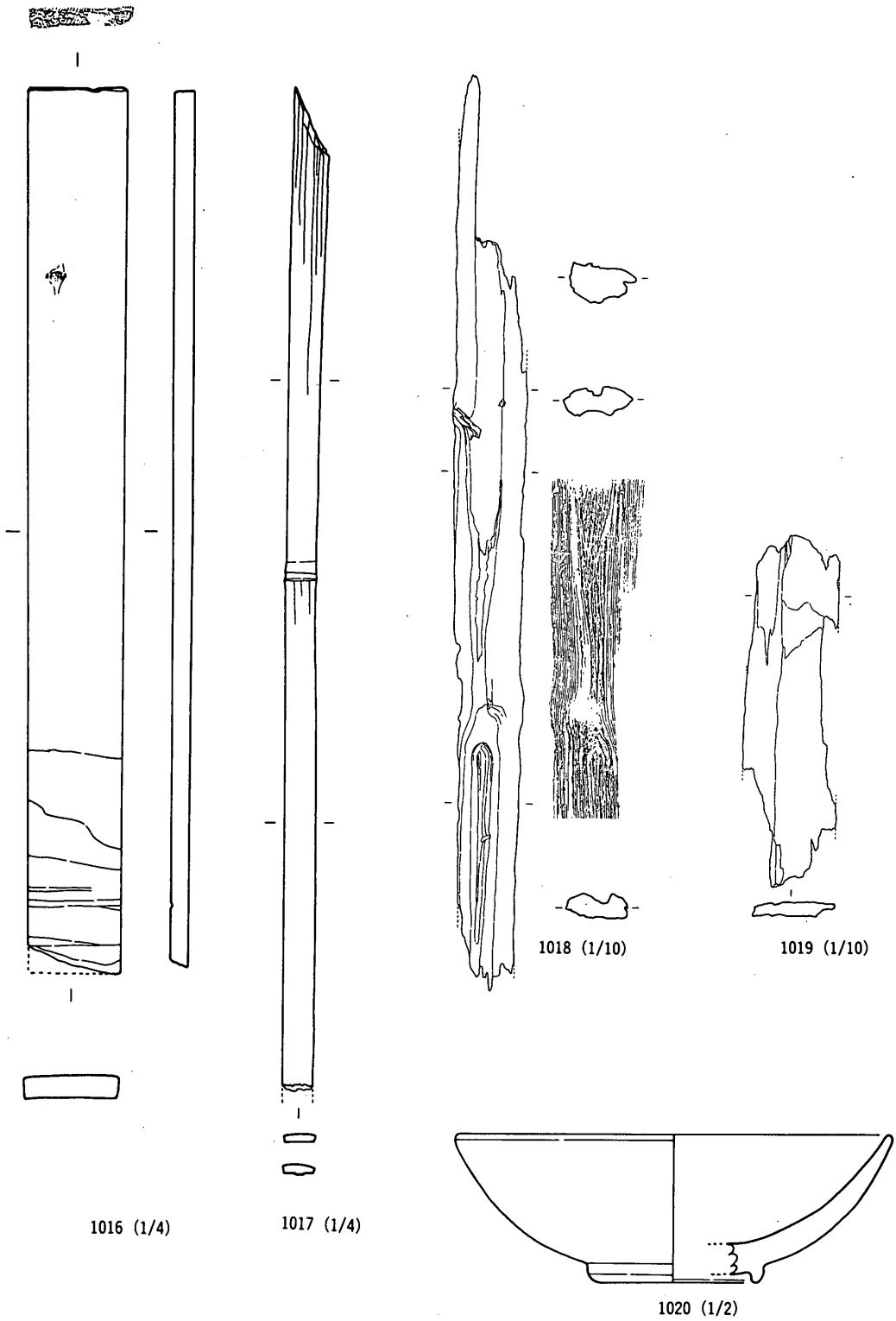


図125 S E 01 (1016・1017, 1/4), S D 02石積み遺構内 (1018・1019, 1/10), S X 010 (1020, 1/2) 出土木製品実測図

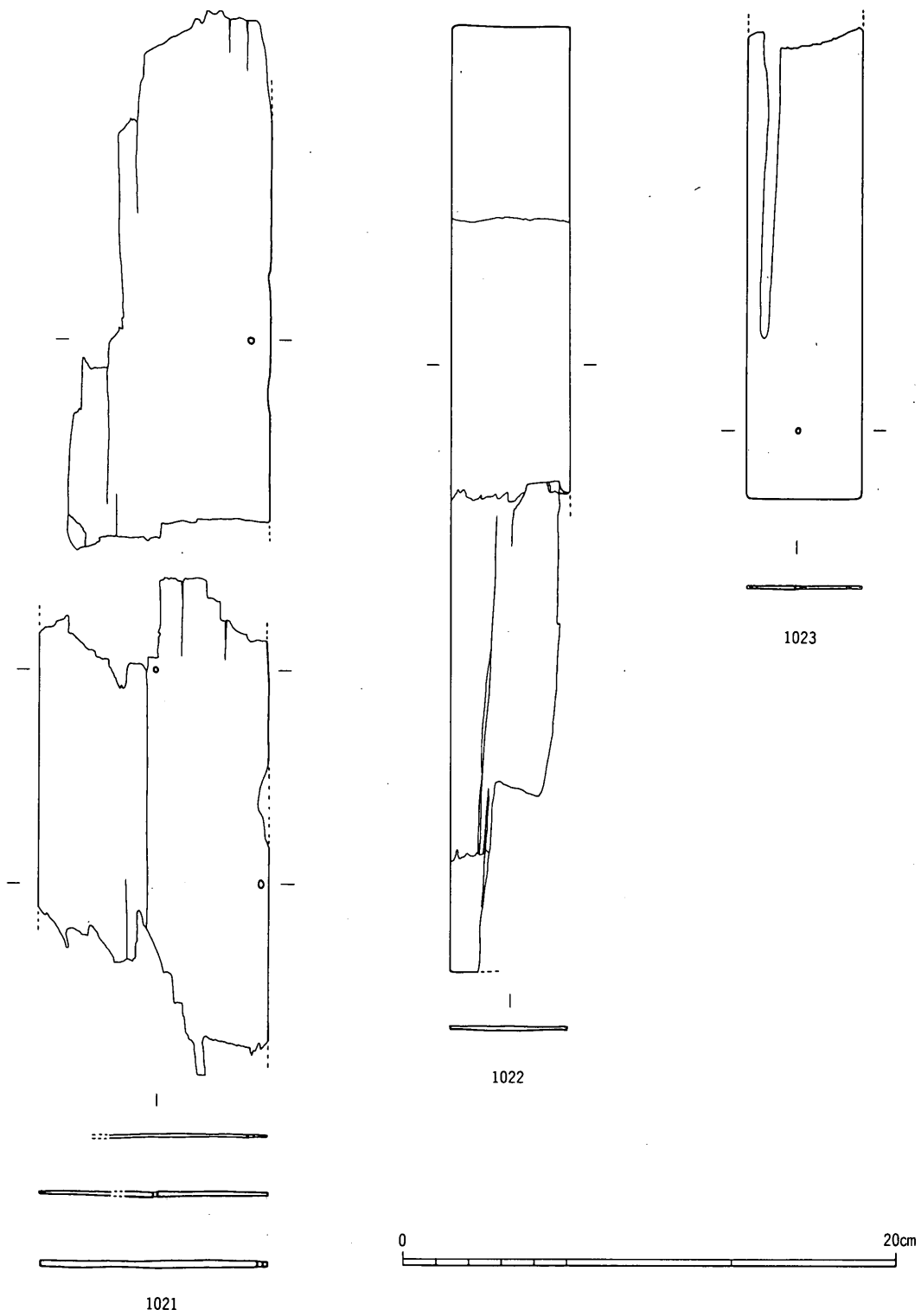


图126 S D02南半出土木製品実測图(1) (1/2)

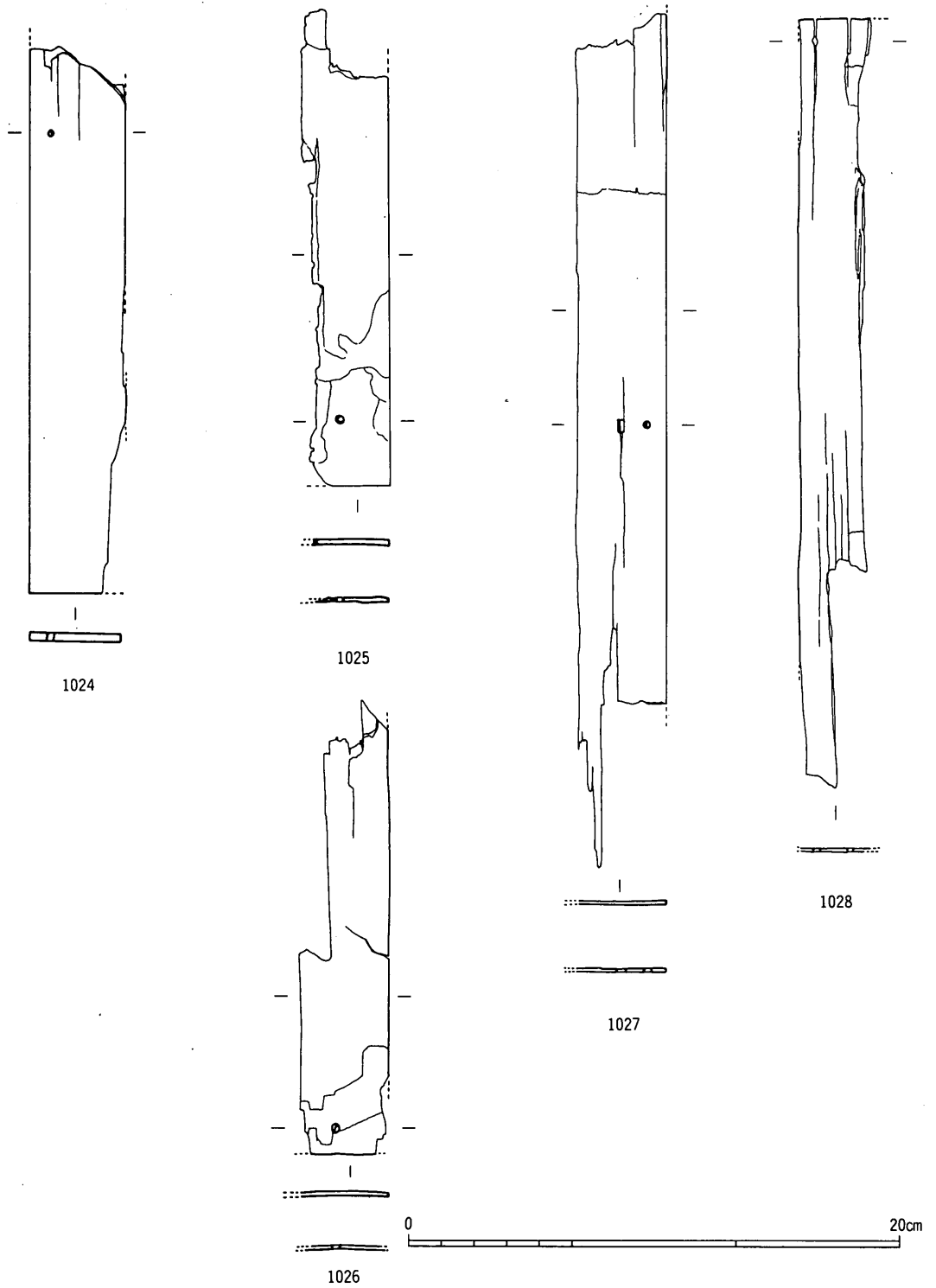
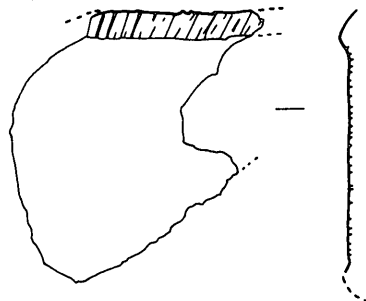
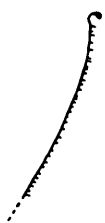


图127 S D02南半出土木製品実測図(2) (1/2)



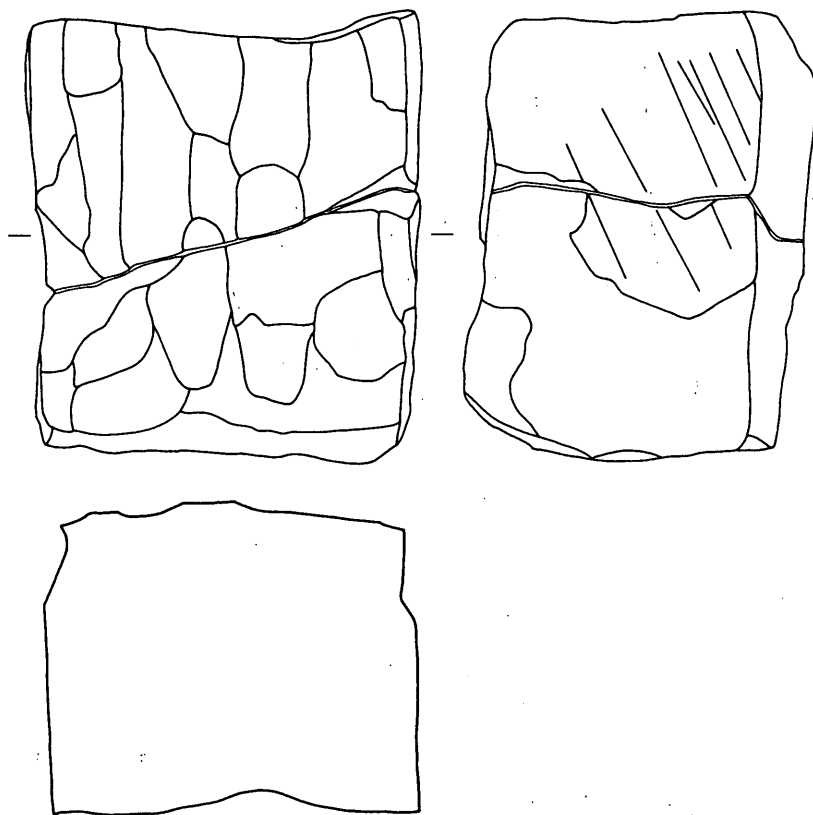
1029



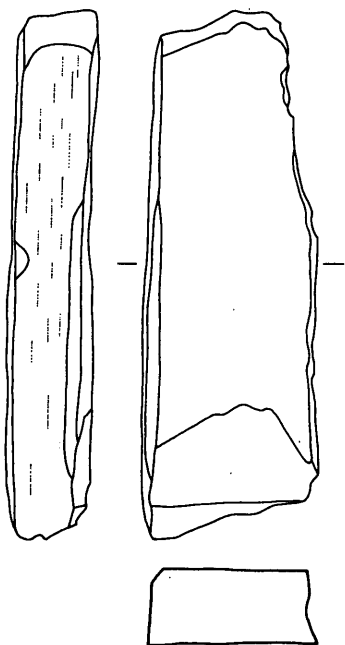
1030



图128 S D 02砂質土層出土木製品実測図 (1/1)



1031



1032

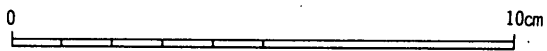
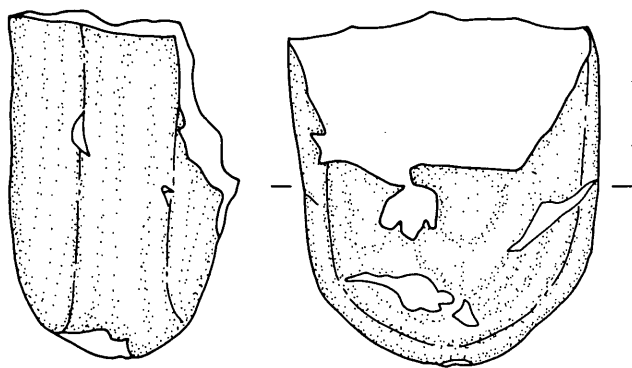
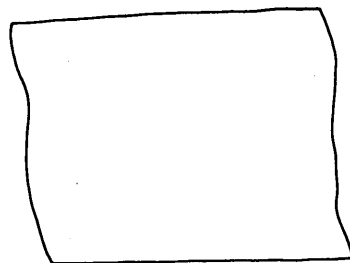
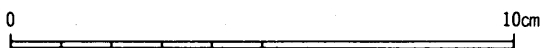
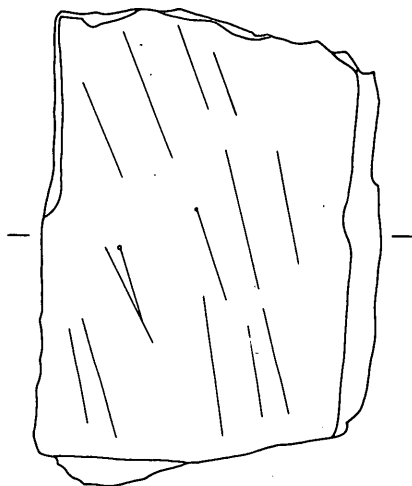
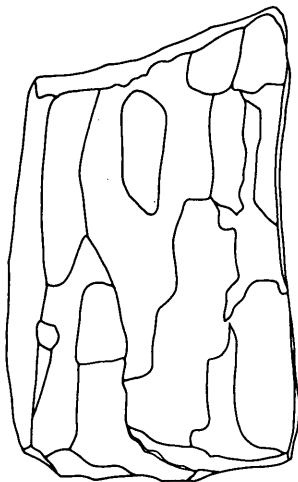
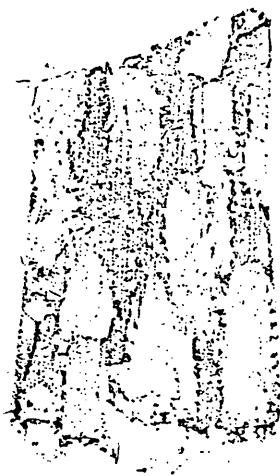
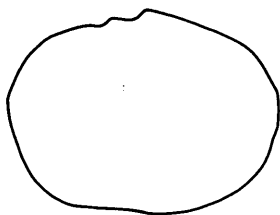


图129 S D08出土石製品実測图 (2/3)



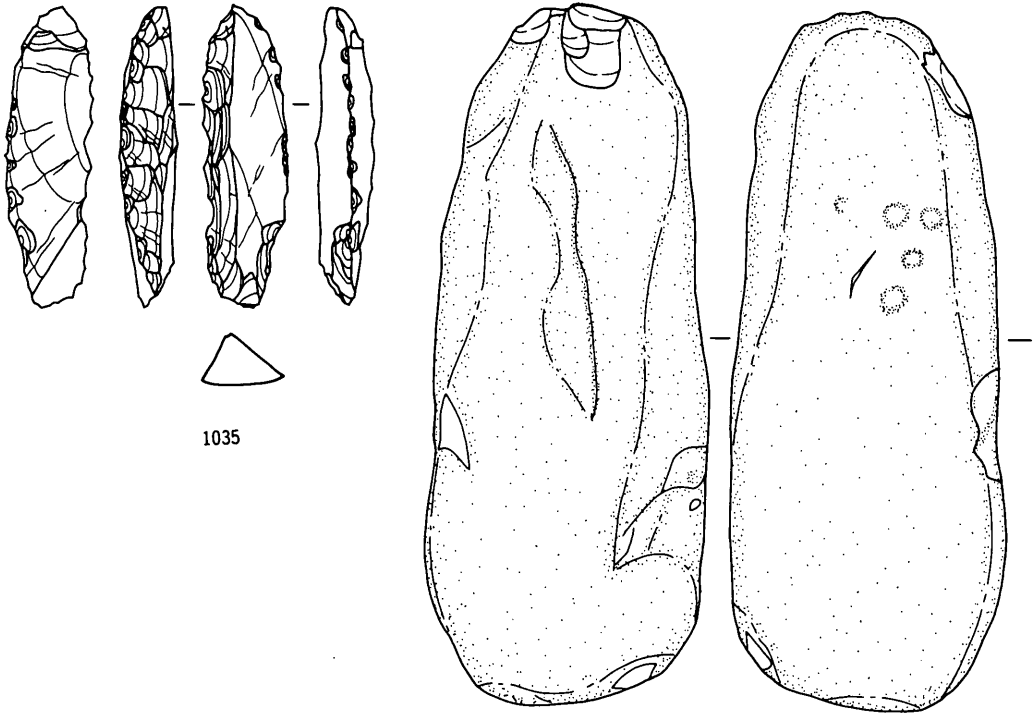
1034



1033

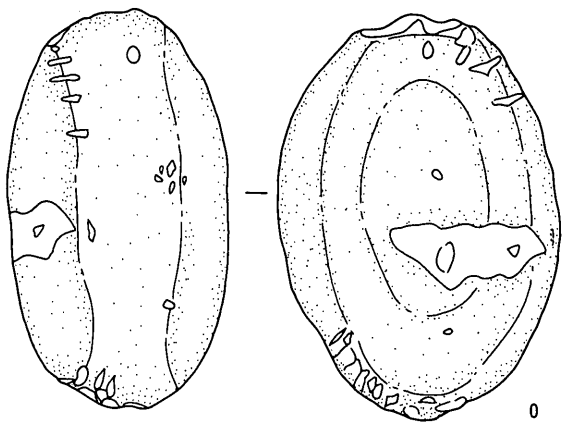
图130 S D08, S E01出土石製品実測図 (2/3)





1035

1036



1037

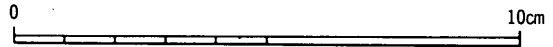
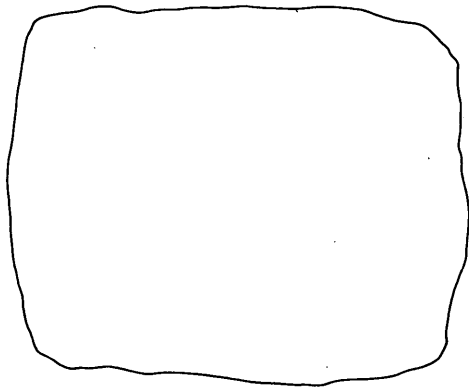
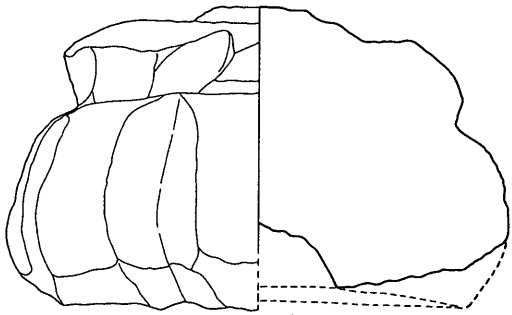
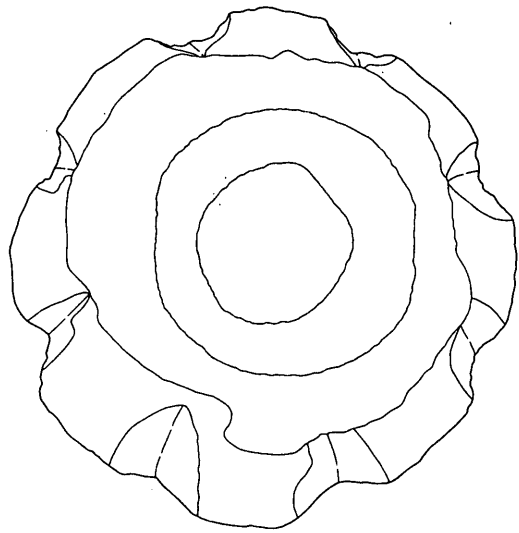
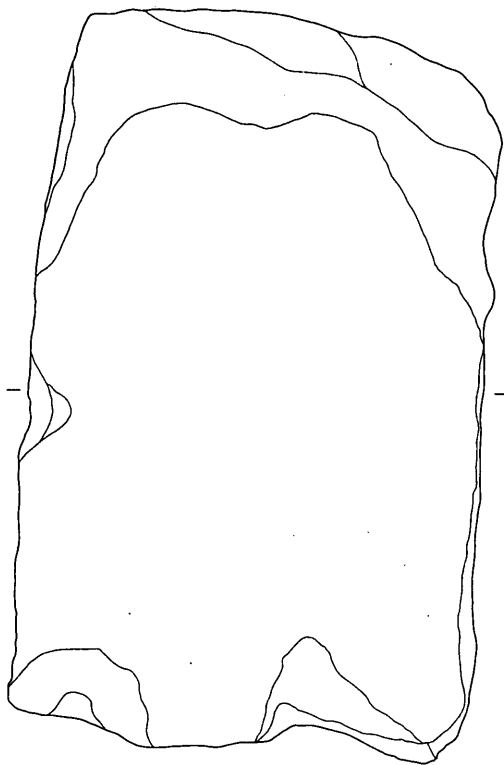
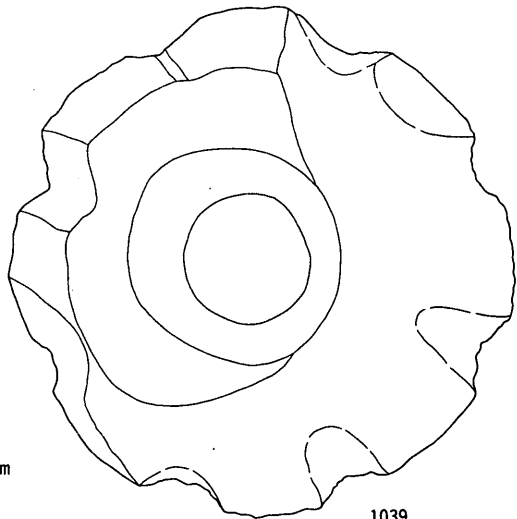


图131 S E 01, S-10第4层, S-11第2层出土石製品実測图 (2/3)



1038



1039

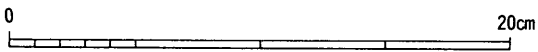


图132 S D02南半出土石製品実測図 (1/5)

## 四 考 察

### 1 古墳時代の遺構と遺物について

#### (1) 遺構について

##### 1) 建物跡

床面積を10㎡毎に区切り、それぞれの棟数を表にした(表46)。大体、27~34㎡・13~26㎡・7~9㎡・2~3㎡の4群に分けられる。それぞれを大型・中型・小型・超小型とする。このうち超小型のSB024は特別の性格をもつことを想定すべきである。大型は分布上から同群を設定したが、それは他から隔離しているわけではなく、量的な相違とすべきであろう。この4群を遺構配置図上に落としてみた(図135)。「大型」は満遍なく分布し、平面型・付属施設等においても特徴はみられない。小型も分布上からは特徴を指摘できない。しかし、カマドをもたない点で共通する。これら以外にカマドをもたないことが明らかな建物跡にはSB01・07・024がある。カマドを付設することが一般的であると考えられる時期であることを前提とすると、これらは、カマドを必要としない倉庫・納屋等であることが想定される。そうであるならば、逆に倉庫・納屋等の一つの特徴的傾向として床面積が小型であるといえよう。

平面型はすべて隅丸方形である。しかし、均整な方形ではなく大部分は歪みがあり、又、台形状のものもある。

主軸方向をまとめたのが表45である。(イ) N42°~27°W (SB07~02), (ロ) N16°~1°W (SB016~08), (ハ) N11°~12°E (SB013~04), (ニ) N35°~64°E (SB06~021) の4群に分けられる。(イ)と(ニ)は、その差約90°であるから同群としてよい。(ロ)のSB022・023は(ニ)の最も「E」寄りのSB021とは切り合い、かつ約90°振っており、また、(ロ)のSB012は隣接する(ニ)のSB011と比較するとその差約90°であることから、(ロ)のSB022・023・012及び016は(イ)・(ニ)と同群としてよいであろう。そうであるならば、主軸方向は次のような2群となる。

(ホ) N10°W~N12°E (SB017~04)

(ヘ) N42°~12°W・N35°~64°E (SB07~02・SB06~021)

このうち少数である(ホ)を遺構配置図にマークしたのが図135である。

建物の方向を規定する要因としては、カマド使用に伴う排煙、生活道の位置、生活溝の位置、建物出入口の位置、複数建物間における利用上の便宜、集団単位毎の統一的規制、地形、時代・時期差などが考えられる。

カマド使用に伴う排煙は逆には風向きということである。(ホ)群は(ヘ)群と分けられるのであるが、方位の数値上は(ヘ)群の範囲に属する。このことは、風向きが両群を分ける要因であ

るとは言えない。生活道は不明である。生活溝では、強いて言えば（へ）群は集落を貫通するSD020の延長方向と一致するといえよう。（ホ）群のSB04は同SBに北面するSD028を意識しているといえよう。また、（ホ）群のSB013・015・017・018はSD020から相対的に離れているから、他の溝に規定されている可能性はある。

出入口については、出入口そのものの確定が実証できない場合がほとんどであるから考える材料とならない。

（ホ）群のSB013・015・017・018は、遺構分布上、同群の残り2棟（SB08・04）が分散しているのに対し集中しており、またSB017・018は（へ）群の大部分とは明らかに離れた位置にある。これは、（ホ）群のSB013・015・017・018が（ホ）群のSB04・08と（へ）群のすべてとは、群を引きつける中心を別にするものであると考えられる。換言すれば、両群はそれぞれ別の集団単位の統一的規制が加えられたことにより、方向性及び分布を異とする結果になったものといえよう。

地形については、（ホ）群のSB08が斜面部に立地することから別群となったとも言えようが、一方、同じく斜面に立地するSB06・07が（へ）群に属することから、（ホ）（へ）両群を分ける要因に地形があるとはいえない。

時代・時期差は、遺物を考察したところで指摘するが、SB024・026が時期を異にするのみであって、両群を分ける要因とは言えない。

さて、以上のように建物の方向性を規定する要因には、生活溝と集団単位毎の統一的規制があるとした。ともに十分な可能性があるから、両者は矛盾するものではなく逆に補完するものと考えべきであろう。そこで、両者を合理的に考えてみよう。SB04の機能は倉庫・納屋を想定している。このSB04はSB03に付属するものと考えられる（「溝」の項参照）から、特定の住居に付属する倉庫・納屋等の方向は、集団単位毎の統一的規制の対象から免除されており、母屋である住居居住者の裁量権内にあったといえよう。その点、集団単位用の倉庫と考えられるSB01が（へ）群に属する方向性をもっていることと対照的である。

## 2) 建物跡の支柱穴

竪穴住居跡の支柱穴が明らかであるのは7棟である。こ **表52 支柱穴間内面積と床面積の比率**  
 のうち、SB05が2穴と考えられるのを除き、他はすべて  
 4穴である。ここでは4穴をもつ6棟について考えてみる。

支柱穴間内面積を1㎡毎に区切ってその分布を示したのが表47である。4～9㎡の間に均等に分散している。支柱

	SB03	SB04	SB09	SB012	SB021	SB024
支柱穴間内面積 (a)	8.58	4.41	6.05	7.99	5.31	1.01
床面積 (b)	33.14	17.72	29.59	31.92	18.21	2.39
$\frac{a}{b}$	0.26	0.25	0.20	0.25	0.29	0.42

穴間内面積の順序を床面積の大小の順序と比較すると、SB024を除き相応している。これは各建物跡の支柱穴間内面積と床面積との比からもいえる。すなわち、支柱穴間内面積÷床面積の値は、SB024を除けば、0.20～0.29に集中しており（表52）、それは一定の範囲内にあるといえよう。

床面積と支柱穴間内面積のどちらが規定的であるのかは不明であるが、建物建設作業工程上からは

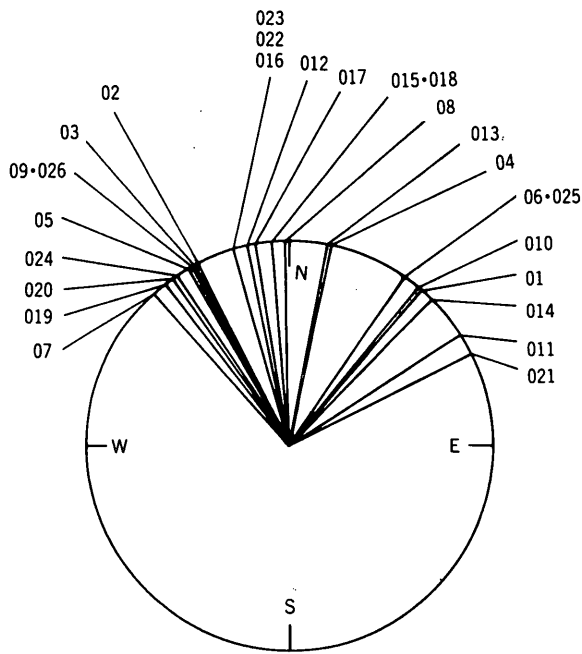


表45 竪穴住居跡主軸方向分布表

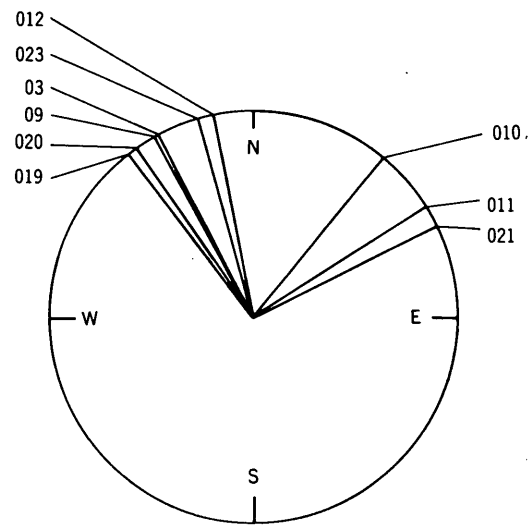


表48 煙道主軸方向分布表

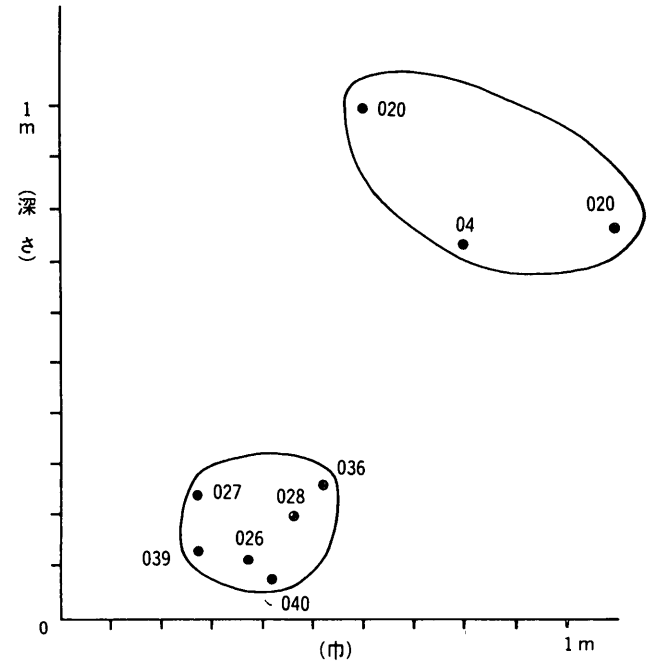


表51 古墳時代 S D 深さ・巾値分布表

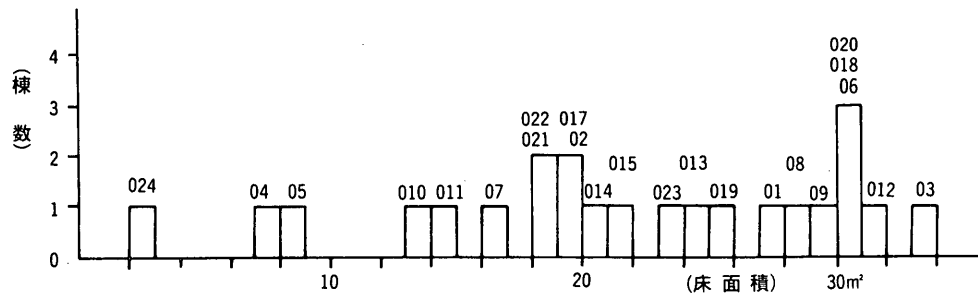


表46 竪穴住居跡床面積別棟数

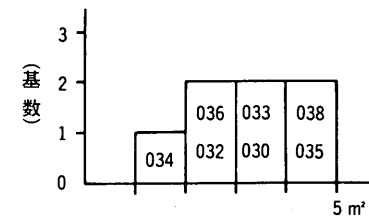


表50 古墳時代 S K 面積別基数分布表

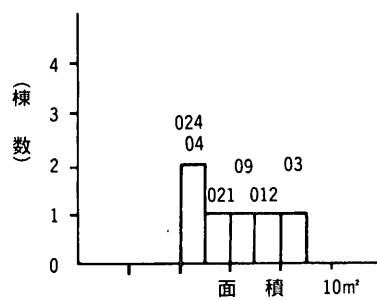


表47 支柱穴間内面積別棟数

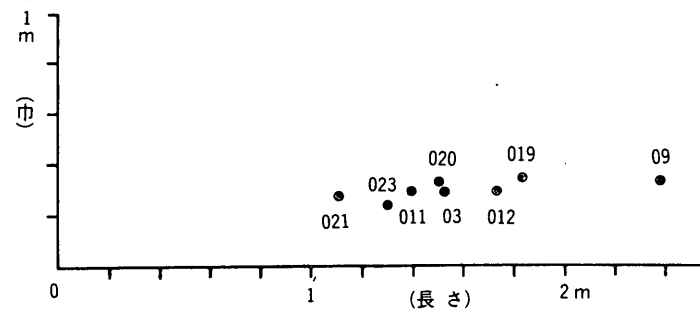


表49 煙道巾・長さ値分布表

柱穴を掘ることよりも、それに先行する竪穴掘削の方、すなわち床面積の方が規定的であるといえる。床面積の規模を決定するのは、居住人員と建物の利用目的であろう。その違いによって、床面積は種々のものができる。それでも、床面積と主柱穴間内面積の比が一定であるのは、建物の構造上に原因があると考えべきであろう。具体的には上部構造をつくる場合の規格性にあるといえよう。

ところで、S B024は、主柱穴間内面積はS B04とともに小さいが特別というほどではない。それと床面積との比は、0.42を示し特異である。これは主柱穴間と竪穴壁との間が非常に狭く、いわば竪穴の隅に柱穴が掘られていることによる。おそらく、上部構造も特異なものであったろう。しかし、床面積が極端に小規模であるにもかかわらず、主柱穴間内面積が特別に小さいということがないのは、人間が生活・作業する空間としてはS B024の主柱穴間内面積1.01㎡でも可能であったことを示している。おそらく、1.01㎡は人間1人の生活・作業空間の最低の面積であろう。

### 3) 建物跡の付属施設

建物跡に伴う施設は、カマド・主柱穴以外には周溝・壇状台・土坑・炭化物の集中・竪穴の外方へ延びる溝（外溝と称す）があげられる。

周溝は竪穴壁際の小溝のことである。それには、全周するもの（S B02・03・07・08・09・018・021）と、部分的なもの（S B012・023・025）とがある。それぞれ、カマド部分は途切れるが、S B012ではカマドに対面する位置で周溝が土橋状に掘り残されて途切れている。また、周溝内にピットの存するもの（S B07・08）もある。

壇状台はS B012にみられるもので、竪穴壁際に若干の平坦部を残して巾0.35～0.5mの凹みを掘り、竪穴内を巡らせることで、その内側に壇状の台部をつくり出したものである。そこは水はけがよく、建物の中央であることからベスト空間といえよう。

土坑はS B024にみられるもので、そこから砥石が出土していることから作業施設と考えたい。

炭化物の集中は、S B05・09・023にみられる。火が焚かれたものであろう。しかし、焼土がみられない点から一時的なものと考えたい。

外溝は、S B03・05・07・024にみられる。機能は排水がまず考えられる。しかし、単に竪穴内に溜った余水を外部へ排出するだけではない。S B07では、斜面の高所側と低所側の両方に外溝を有する。これは、積極的に入水させて竪穴内の溜水を動かすことで、溜水の腐敗を防ぎ清浄化を果たさせていたことも想定できる。

### 4) 建物跡のカマド

カマドにはかならず煙道を付設する。カマドはS B023の場合によると、竪穴北壁際床面を約8cm掘り凹め、そこへ広さ0.75×0.85m、厚さ8cmに粘質土を入れ置き、その上に口部内巾0.6mで奥部に向かってやや細まる平面形に、相対する2本の立ち上がり部を築く。立ち上がり部は内湾気味に内傾させて立て、奥部は竪穴壁に接合させる。床面は奥へ向かってやや上がる。奥部は急な角度で上がって煙道口とつながる。

煙道は堅穴が掘られたのと同じ基盤土を掘り凹めて造る。平面形は、細長いもので先端部へ向かって巾を次第に減じるものと、長方形そのものの場合（S B011）がある。規模は表49に示したように、巾は0.23～0.35mの間に収まりほぼ一定しているといえる。長さは1.1～1.9mの間に均等に分散しているが、2.38m（S B09）と長いものもある。煙道底部は先端部に向かってゆるやかに上がるものが多いが、水平なままのもの（S B09）もある。先端部にピット状の凹みをもつものが多い（S B03・011・019・021）。天井部については不明である。

煙道先端部のピット状の凹みはそこへ土師器大片が落ち込んでいた例（S B03）から、そこへ土器片を立てて縦坑状のものをつくっていたことが考えられる。煙道平面形が細長いのは周堤や建物の上屋が原因しているものと想定される。

なお、カマド内に支脚が残存する例はなかったが、S D03から土師器の支脚（213番遺物）<sup>(1)</sup>が出土しているから、当然、支脚の使用が行われていたと考えられる。

## 5) 土 坑

土坑は平面形から円形乃至楕円形のもの和不整形のものがある。前者は主に調査区中央部に分布し、後者は同南東部に分布する。前者は、深さ10cm前後で、削平されているとしても相対的に浅い。床面は水平につくる。同端部に小土坑をもつ場合が多く、また、そこへ須恵器甕を埋置している例（S K030）もある。S K035・036はS D028が囲む範囲の中にあり、S B03に付属する可能性を有するが、他のものはそれらを付属させる主体となる遺構の存在の可能性は考えられない。後者は、深さ0.31mと相対的に深い。床面は水平につくる。同端部に小土坑をもつ場合（S K038）もある。周囲にそれを囲む溝をもつ場合もある（S X06とS D040）。

両者の機能は、ともに住居以外の貯蔵庫・納屋等と考えられる。平面形にみられる相違は、両者の間に何らかの使い分けがあったものと想定される。

## 6) 溝状遺構

主な溝の規模を表にした（表51）。溝は規模から2群に分けられる。

(イ) 巾0.6m以上、深さ0.7m以上

(ロ) 巾0.55m以下、深さ0.3m以下

(イ)は巾より深さの方が大で、断面はV字形となる場合が多い。(ロ)は深さより巾の方が大で、断面はU字形となる場合が多い。(イ)は分布上から、集落を貫通し、(イ)に(ロ)が流れ込む点などから幹線的な溝であるといえる。(ロ)は、S D028・036がS B02・03・04、S K035・036を、S D039・040がS X06、S K038を囲むような配置であることから、それぞれの建物や土坑等に関係するものと考えられる。地形をみると、前者では東から西へ下る斜面であり、溝は等高線に対して直交-平行-直交している。後者では北東から南西へ下る斜面で、溝は等高線に直交-平行している。このことは、(ロ)の溝は建物や土坑へ流下する雨水等を受けて、それを幹線溝であるS D020へ流し、建物や土坑などが浸水するのを防ぐ役割を果たしていたといえる。

また、(ロ)の溝によって囲み包まれる範囲は、その内部の建物や土坑の利用者が少なくとも占地している場所であるといえよう。さらに言えば、S D020とS D028で囲まれる「D」字形の範囲はS B02・03の居住者が占地する場所であり、倉庫・納屋・貯蔵庫と考えられるS B04, S K035・036は占地された範囲内にあることからS B02・03の居住者が専用する施設であるといえよう。

## (2) 遺物について

### 1) 床面直上遺物について

ここでいう床面直上遺物とは、遺構の床面直上に残置されたとみなせるものと、竪穴住居跡の煙道内とカマドをつくる土材中の遺物とを考えている。床面直上遺物の一覧を表53に示した。

数量は非常に少なく、遺構の機能時の状態を考える材料としては不十分である。ただ、S B03の土師器鍋とS B012の大甕はともに煙道内からの出土であり、破片であるが、大片である点で共通する。これは、土師器の大片が煙道設備の一部を構成していた可能性を推測させる。

表53 床直上遺物一覧表

	須 恵 器							土 師 器				
	杯身	杯蓋	有蓋高杯	高杯(脚部)	罍	短頸登	鉢(大型)	鍋	甕	大甕	小中甕	鍋
S B03							A1				A	A
09				B1								
012		B	A							B1	A	
023	A1											
S K036	A1	BBB		B1								

S K036は、土坑とするが、杯・高杯の供膳具があるのは、そこで食生活が為されていたことを想定させる。

床面直上遺物を既存の編年案に当てると、中村編年案<sup>(2)</sup>では、すべてがII型式6段階に相当し、田辺編年案<sup>(3)</sup>では有蓋高杯を考慮してS B012をT K209に、ほかはT K217に相当すると考えられる。大門遺跡の古墳時代後期の絶対年代を検討する材料の出土はない。そこで、これらの床面直上遺物を出土する遺構は一括して、上記編年案に示されている年代観を借用して、7世紀前葉としておきたい。

### 2) 須恵器杯身について

遺構の覆土中からは、床面直上遺物に比すれば多くの遺物が出土した。ここでは、遺構の先後関係の大勢を把握するために、遺構覆土中の須恵器のかえり付杯身の計測値の分析を行ってみよう。

表54は、遺構出土のかえり付杯身の口径(かえり部)毎の点数を表にしたものである。表から、9cmと11.3cmの2カ所に分布の頂部があることがわかる。両者の境いは10.5cmである。この事実から、かえり付杯身を、かえり部口径10.5cmを境いにして2種に分類したい。

表55は、S B出土のかえり付杯身の受部端での口径を示し、さらに遺構毎に杯身の口径差の中点を出したものである。後者から、杯身は口径12.5cmを境いに2グループに分けられる。すなわち、S B09・024・026は小型、S B07・08・010・011・012・015・017・020・023は中型といえよう。

表57・58・59は、かえり付杯身のかえり部の長さ(A)と受部の長さ(B)をそれぞれ縦・横軸として各杯身のかえり部の特徴を点として示したものである。各表とも、それぞれ、点の分布状態から2～3のグループに分けることができる。すなわち、イはA・Bが相対的に最小のもの、



ハはA・Bが相対的に最大のもの、ロはイとハの中間のものである。

一般的に、杯身のかえり部は、段階・時期の進行に従い、次第に低くなり、また、身と蓋とが逆転すると受部の長さは急に伸び、遂には、かえり部はなくなる。また、口径も次第に小さくなる。これらの一般的傾向を前提として、上記のように複数基準によって、それぞれグループ分けが出来ることを考えると、グループ間には時期差があるとする事ができよう。

表55から分けられる2グループの内、小型のSB09・024・026は他の中型よりも相対的に新しいといえよう。表57から分けられるグループの内、イのSB08・09・020・026は相対的に新しく、SB010・012・015は相対的に古いといえよう。表58からイのSX09は、相対的に新しいといえよう。表59から、イのSD028・029は相対的に新しいといえよう。なお表57・59のハの遺構がロ・イであるならば、それはより新しいグループに属するものと考えた。

以上のように相対的な新旧関係を考えてみたが、覆土中からの出土であり、また、床面直上遺物のところで触れたように最大2時期にわたる程度の時間差であることを考えると、上の結果は参考程度の意味しかもたないであろう。

ところで、かえり付杯身とともに宝珠状つまみ付きの杯蓋を出土する遺構と、高台付杯身を出土する遺構がある。SB024からは高台付杯身が、SB026からは宝珠状つまみ付杯蓋が、SD044からは高台付杯身やかえりの消失した杯蓋が出土している。これらも覆土中からの出土であるが、他の多くの遺構に比すれば、単純明瞭に新しいといえよう。この事実と上記の分析結果を合わせると表55の小型の部類に属するSB024・026、表57のイのSB026が相対的に新しいという結果は当たっているといえよう。

### 3) 黒色粒を含む須恵器

大門遺跡の須恵器の胎土は、ほとんどが、半透明・白色の2mm以下の砂粒を多く含み、粘土自体も粗である。そのような中に、一部、2mm以下の黒色粒を含むものがある。器形は種々のものにあり、特定のものに限られるということはない。黒色粒の数も種々である。出土遺構も分散しており、特定遺構に集中するという傾向はみられない。

下川津遺跡(坂出市)では、須恵器の胎土中に黒色粒を多量に含むものは、全体の5%程であるが、特定の竪穴住居跡から出土するという傾向がみられる。それは、土師器甕の口縁端部の形状の特徴と対応するという<sup>4)</sup>。しかし、大門遺跡においては、特定の傾向は見出せなかった。

### 4) ヘラ記号を有する土器

ヘラ記号は、須恵器のみではなく、土師器にも認められる。

SB04煙道内出土の土師器大甕は、ヘラ記号を体部外面に施す。これは須恵器にはみられない点である。須恵器では、杯身・杯蓋・甕・平瓶の底・頂部外面か口頸部内外面に施している。

ヘラ記号の形状は、1本線又は平行する2本線のものと、線が2本以上で不整形に交わるものの2種に分けられる。前者は杯に多く、後者は堤瓶・甕に多い。SD020の244とSD028の299は

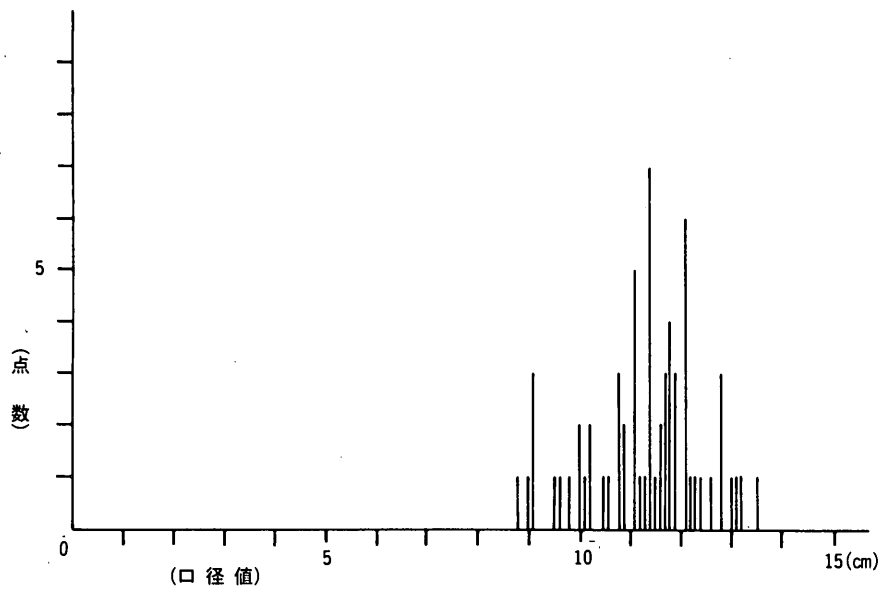


表54 杯身口径分布表 (かえり部)

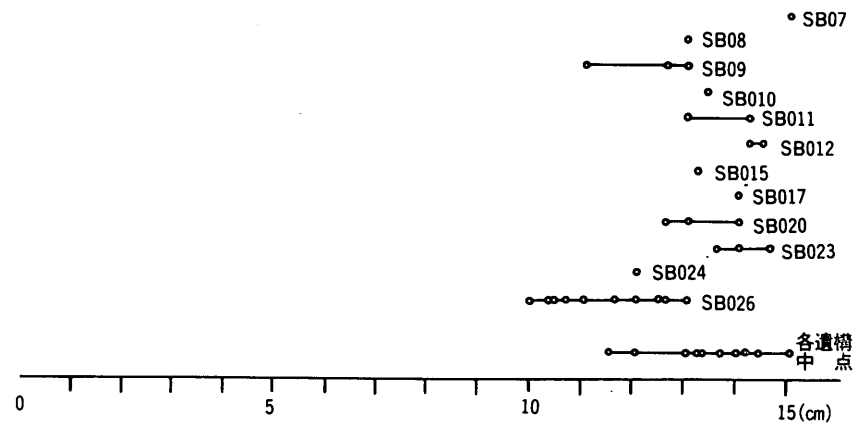
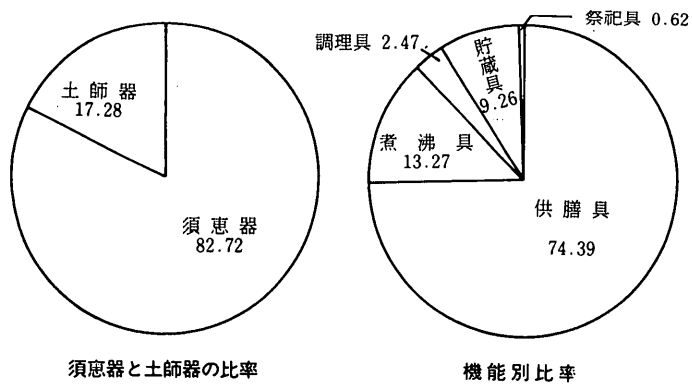
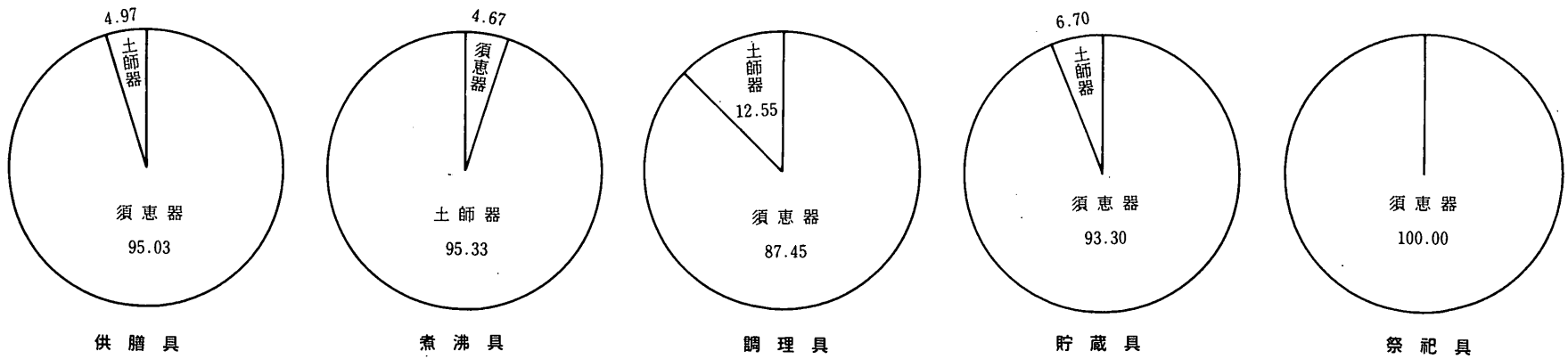


表55 遺構別杯身口径分布表 (受部)



須恵器と土師器の比率

機能別比率



貯蔵具

煮沸具

調理具

貯蔵具

祭祀具

表56 須恵器・土師器個体数・機能別比率表 (遺構全体)

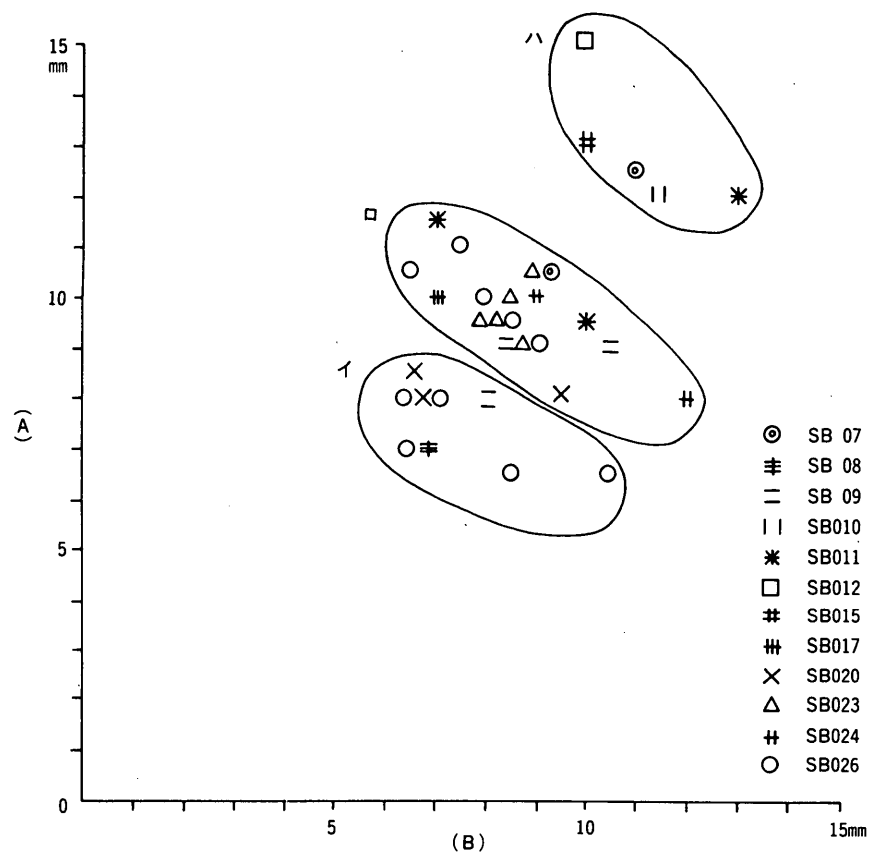


表57 杯かえり部・受部計測値表 (SB)

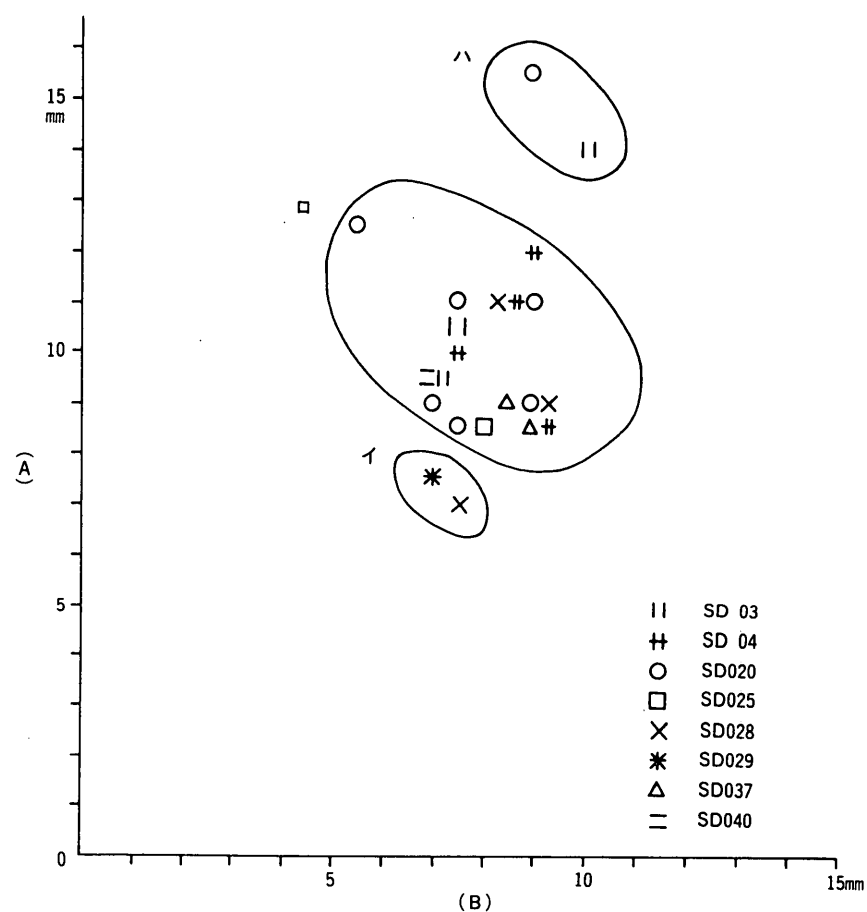


表59 杯かえり部・受部計測値表 (SD)

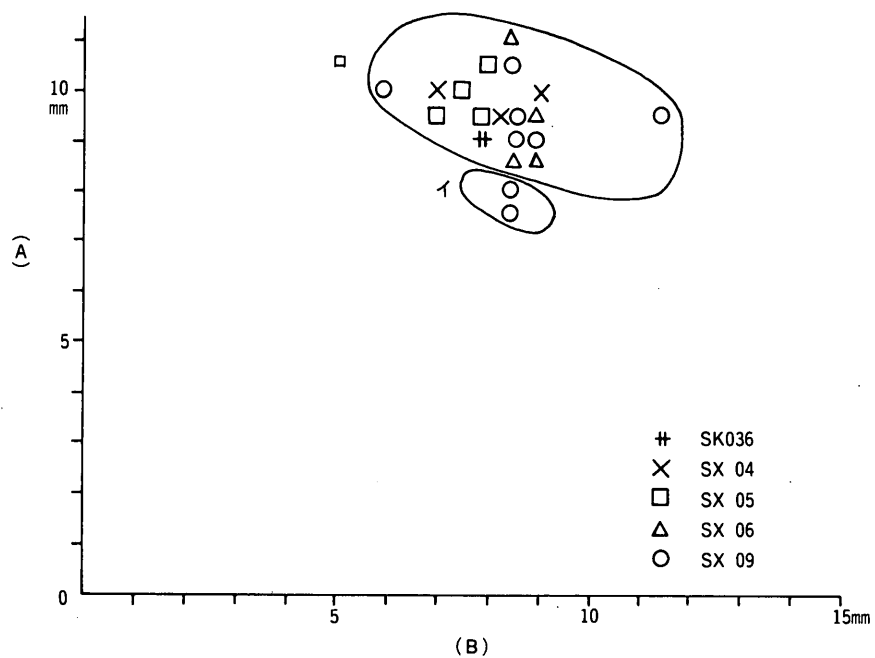


表58 杯かえり部・受部計測値表 (SK・SX)

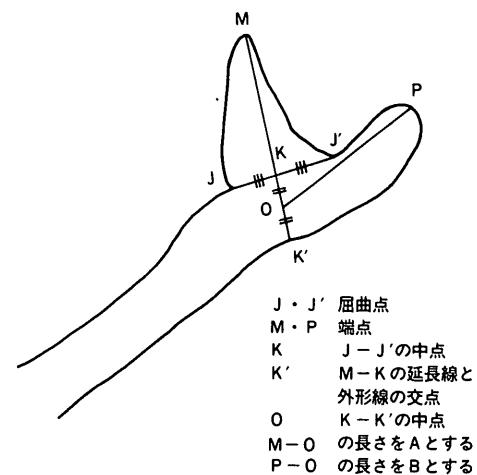


図133 杯かえり部計測基準図

ともに杯身でヘラ切り時にできた余分な粘土が底部に付着していたり、ヘラを止めた後に粘土が盛り上ったり、また、胎土・形態が非常によく似ている点、およびヘラ記号そのものが類似していることから、同一人が製作したものと考えられる。また、矢ノ岡古墳1号の3・15は、身と蓋でセットをなすが、成形手法・形態・大きさともに類似しており、また、ヘラ記号そのものもよく似ていることから同一人の手になるものと考えられる。

ヘラ記号の意味は、杯における身と蓋のセット関係の明示、甕にセット関係はないとすれば、製品使用時における区別のため、あるいは、製作工人の区別のためなどが想定できる。しかし、結論を出すには、資料不足である。

### 5) 土器の材質別・機能別数量

遺構全体と出土点数の多い遺構について、各器種毎の出土点数・比率を示した(表60)。これをもとにして、材質別の比率を示した(表61)。遺構全体では、須恵器と土師器の比率は8対2である。SB026では須恵器の比率が若干高くなっており、逆に、SD020では土師器の比率が若干高くなっているが、大勢は変わらない。次に機能別の比率を示した(表63)。各機能別の器種は右に示した。遺構全体では、供膳具が7割余を占めて圧倒的に多い。次に煮沸具が1割余、貯蔵具が1割弱、調理具、祭祀具は微量である。SB026では、供膳具が多く、煮沸具が少ない。SD020では供膳具が少なく、煮沸具が多い。

以上から、SB026は須恵器の供膳具が、SD020は土師器の煮沸具が相対的に多く廃棄されたという特徴が指摘できる。

次に、各機能の用具を材質別に別けてみた(表64)。煮沸具のほとんどは、土師器で占められている。しかし、煮沸具以外の供膳・貯蔵具などは須恵器が大部分を占める。食生活における須恵器利用の高いことをよく示している。

表60 SB026・SD020・遺構全体土器類器種別出土比率

(下段 単位：%)

	杯身	杯蓋	椀	盤皿	有蓋高杯	無蓋高杯	甕	長頸壺	短頸壺	無頸壺	壺蓋	横瓶	平瓶	鉢	甕	子持ち甕	器台	杯身		
SB026	12 36.36	8 24.24	0	1 3.03	0	3 9.09	0	1 3.03	0	1 3.03	0	0	0	1 3.03	0	0	2 6.06	0	1 3.03	
SD020	8 14.29	10 17.86	1 1.79	0	0	7 12.50	2 3.57	3 5.36	3 5.36	0	0	0	0	0	1 1.79	0	5 8.93	0	1 1.79	
遺構全体	98 30.25	65 20.06	1 0.31	1 0.31	1 0.31	36 11.11	7 2.16	7 2.16	7 2.16	1 0.31	3 0.93	1 0.31	2 0.62	7 2.16	1 0.31	1 0.31	27 8.33	1 0.31	1 0.31	6 1.85

杯蓋	高杯	鉢	大型	小中壺	鍋	羽釜	甕	支脚	製塩土器	合計
0	0	0	0	1 3.03	0	1 3.03	0	0	1 3.03	33 99.99
0	2 3.57	0	7 12.50	2 3.57	1 1.79	0	1 1.79	0	1 1.79	56 98.25
1 0.31	5 1.54	1 0.31	19 5.86	10 3.09	5 1.54	1 0.31	5 1.54	1 0.31	2 0.62	324 100

表61 SB026・SD020・遺構全体須恵器・土師器出土比率

	須恵器	土師器	合計
SB026	87.88%	12.12%	100%
SD020	71.43%	28.57%	100%
遺構全体	82.72%	17.28%	100%

表62 機能別器種一覧表

供膳具	須恵器(杯身、杯蓋、椀、盤皿、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、長頸壺、短頸壺、無頸壺、壺蓋、平瓶)、土師器(杯身、杯蓋、高杯)
煮沸具	須恵器(甕、鍋)、土師器(大型、小中壺、鍋、羽釜、甕、支脚)
調理具	須恵器(鉢)、土師器(鉢)
貯蔵具	須恵器(横瓶、甕)、土師器(製塩土器)
祭祀具	須恵器(子持ち甕、器台)

表63 S B 026・S D 020・遺構全体機能別出土比率

	供膳具	煮佛具	調理具	貯蔵具	祭祀具	合計
S B 026	81.81%	6.06%	3.03%	9.09%	0%	99.99%
S D 020	66.09%	21.44%	0%	10.72%	0%	98.25%
遺構全体	74.39%	13.27%	2.47%	9.26%	0.62%	100.01%

表64 須恵器・土師器機能別比率(遺構全体)

	供膳具	煮佛具	調理具	貯蔵具	祭祀具
須恵器	95.03	4.67	87.45	93.30	100
土師器	4.97	95.33	12.55	6.70	0
合計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

(3) 小 結

1) 遺跡の範囲

大門遺跡の東限は、今回の調査で遺構の消滅する南北ラインである。それはちょうど高瀬川から谷奥部にある黒坊池へ向かう現在の生活道路付近が相当する。西限は、昭和60年度県営圃場整備事業高瀬地区6-1I区の実施に伴う確認調査<sup>(5)</sup>において、図134のようなトレンチを設定して試掘調査を実施したが、現地表から3m余にわたって水洗された花崗土の堆積がみられ、その土層中からは磨耗した須恵器・土師質土器の小片が出土するのみで、また、遺構も検出されなかったことから、最大限みてもこのトレンチまでである。北限は鬼ヶ白山の最末端である小尾根の際までとするのが妥当であろう。南限は高瀬川北岸にみられる旧河道ライン、標高18mの等高線の走るラインとしてよいであろう。

表65 ヘラ記号を刻す土器一覧

遺跡名	遺構名	遺物番号	器形	ヘラ記号を施す部位	ヘラ記号の形状等
大門遺跡	SB05	27	須恵器壺	頸部内面	「人」字形
〃	SB012 煙道内	60	土師器壺	体部外面	2本の平行線 下から上へ、別々に掘り込む。
〃	SD020	244	須恵器杯蓋	底部外面	1本線
〃	SD020	275	須恵器壺	頸部外面	2本の平行線 上から下へ、別々に掘り込む。
〃	SD020	276	須恵器壺	頸部外面	「X」字形 下から上へ
〃	SD028	299	須恵器杯身	底部外面	1本線 底部中央から外方へ
〃	S-10 第5層	382	須恵器壺	頸部外面	不整形の4本線
〃	R-11 第5層	369	須恵器杯身	底部外面	1本線
矢ノ岡遺跡	F-11 第4層	29	須恵器杯蓋	底部外面	「X」字形

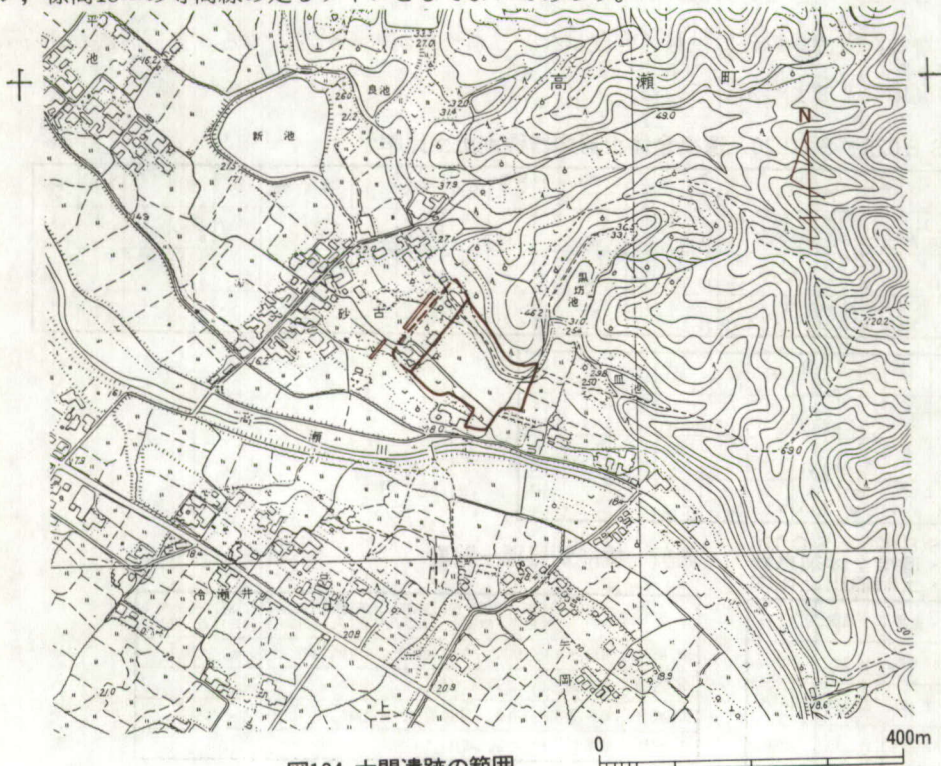


図134 大門遺跡の範囲

以上によって限定した範囲は、東西約150m、南北約90mで面積では13500㎡、西限をもう少し縮めると約10000㎡ということになる。この範囲を現地形でいうと、南北限は旧河道と山であり、東西限はともに谷筋である。遺跡は谷筋によくみられる流水や土砂流、また、川の氾濫等の自然災害を受けない安定したところに立地しているといえよう。

## 2) 集落の変遷

集落の変遷を考えるためには、その前提として同時併存の遺構を抽出しなければならない。同時併存を決める基準としては次のようなものが通常考えられる。

- ①床面直上、あるいは埋土中の遺物の時期差による場合
- ②遺構の切り合い関係による場合
- ③遺構の方向性による場合
- ④遺構の大小による場合

しかし、これらのどれか一つによって同時併存が明らかになるということにはなかった。これらの基準は同時併存を考える不可欠の要素であるが、これらに加えて遺跡の特徴に即した別な基準を設定して、合わせ考えることが必要である。

まず、①による場合。S Bの埋土中の遺物から、S B024・026、S D044は他の多くの遺構とは、時期を異にし、遅れるものである ((2)遺物について)。床面直上遺物からは、S B012→S B03・05・023の時期差が知れる ((2)遺物について)。

②による場合。切り合い関係は次の(イ)～(へ)の6例がある。

- (イ) S B02→S B03
- (ロ) S B010→S B011→S D03→S B012・S D04
- (ハ) S B016→S B015→S B014→S B013
- (ニ) S B018→S B017
- (ホ) S B019→S B020
- (ヘ) S B021→S B022→S B023

この6例の切り合い関係のみから同時併存の問題は考えられない。ほかのもっと基準性の高い要素と関連させることが必要である。

③による場合。方向性からはS Bの機能の相違と異集団単位の存在を指摘した ((1)遺構について)。方向性は切り合い関係にある6例において同時併存を示す基準とはならない。

④による場合。切り合い関係にあるS B間において、大小の変遷、例えば小から大へというような傾向は伺えないから、この基準は無効である。

①～④の基準は同時併存を考える要素としては不十分である。そこで、遺跡の特徴、すなわち遺構・遺物の在り方の特徴から別な基準を設定してみよう。

遺構からは、まず、同一場所に数回の切り合いが行われたり、非常に近接するS B群がみられ

る(⑤)。次に、多くのSBと同時期のSDが比較的多く掘られており、そのSDは幹線的なものと、一定の範囲を囲む区画界的な性格をもつものがあること(⑥)が指摘できる。

遺物からは、切り合い関係にあるSB間において埋土中の遺物量を比較すると、切り合い関係上最も新しいSBでは埋土中の遺物量は相対的に多く、また床面直上遺物を有することも多いが、切られたSBにおいては埋土中の遺物量は微小で相対的には少ないということが指摘できる。この相違は、切られるSBが廃棄された後、自然に周辺の遺物が土とともに流れ込む時日をおかずに、新しいSBが古いSBを切って建てられたことを意味している。さて、このことを入れて遺構からみられる(⑤)の特徴を考えるならば、同一場所で複数に切り合ったり、近接するSB群は、継続的な建替えであったといえる。このことは、⑤でいうSB群は同一主体乃至一つの系譜に連なる者によって建てられたもので、それは遺構分布上から一つのグループであるとできる。

⑥の特徴からは、まず、幹線的な溝が機能していた時期とその前後という時期差が設定できる。幹線的な溝とはSD020とSD04である。これに先行するものが②の(ロ)の切り合い関係から知れる。すなわち、SB010→SB011→SD03→SB012・SD04・020という変遷である。なお、幹線的な溝と両側にある多くのSBに切り合い関係は見られないから同時併存とも考えることができる。一方、この溝を切るSB026は、①からSB024・SD04とともに他の遺構から遅れる時期のものであるという点と一致する。

次に、一定の範囲を囲む区画界的な溝(SD028・039・040)があり、その内部に同一場所で切り合うSBとそれらに近接するSBが存し、一つのグループをなしていることは、その範囲が同一主体乃至一つの系譜に連なる者に固有のもの、別言すれば、屋敷地であるといえよう。

さて、次に同時併存の遺構を時期を分けて抽出してみよう。

まず、⑥から、SB010→SB011→SD03はそれぞれI期→II期→III期となる(図137・038)。次に、①から時期が遅れるSB024・026・SD044と上記のSB010・011を除いた遺構を⑤の観点からグループ分けを行ってみたのが図136である。それぞれをA～Hとした。これらのグループは幹線的な溝SD04・020と同時併存すると考えられるから、グループ分けを行った遺構は、Gで4回の切り合い関係がある点から4時期はあったといえよう。

さて、幹線的な溝が掘られた最初の時期・IV期は、I～III期が川に最も近い調査区南端部に存することにより開発は南から始まり、次第に北へ及んだと考え、山際に近くかつ斜面に立地するD・Eを除くグループのそれぞれの最も古いSBがIV期に相当すると考えた(図138)。V期は、開発が進行し山際に近く、かつ斜面に立地するD・Eを含むグループすべてにおいてSBが存する時期と考えた(図139)。なお、①で古い時期とされ、また、切り合い関係のないFグループは、この時期には存していなかったと考え除いた。VI・VII期は不確定要素があるため省略する。なお、切り合い関係があるグループの内の最新のSBの床面直上遺物が時期分けのできないものであることを考えると、それらは一時に廃棄されたものと推測できる。

VIII期は、幹線的な溝が埋まり、①で遅れる時期としたS B024・026・S D044の存する時期である。

以上をまとめる。I、II期は他所からここへ初めて来住した時期である。S Bは1棟、建物規模も中程度で、場所は川縁である。III期は溝のみしか知られない。IV期は幹線的な溝が掘られ、その両側に7棟のS Bが建てられる。V期はS Bが山際の斜面部にまで建てられる。S Bは10棟に増加している。VIII期は幹線的な溝が埋まり、それよりも西方に別な幹線的な溝が掘られ、集落の中心も西方に移り、S Bは2棟があるのみである。

### 3) 集落の構成

集落の最盛期と考えられるV期についてみてみよう。集落の変遷の③で指摘したように方向性を異にするS B015・017は他の多くのS Bとは異なる集団単位に属する。

集落の中央を貫通する幹線的なS D04・020と集落の北東端であるが最高所に1棟のみ存する掘立柱建物は、S B015・017を除くS B集団の共有のものであっただろう。前者は排水溝で、後者は倉庫であろうが、ともに集団で共同に利用・管理される施設であろう。

集落のほぼ中央部には小溝によって区画された面積約250m<sup>2</sup>の屋敷地の中に住居と倉庫・納屋と考えられる建物を各1棟もつ者が位置を占める。この周囲には、区画界的な溝をもたない住居が5棟散在する。そのうち、E群のS B09のみはS B07を倉庫乃至納屋としてもっていたと考えられる。

以上から、集団は少なくとも5箇の小単位で構成される。そのうち1小単位は小溝によって区画される屋敷地をもち、その内部には住居と倉庫乃至納屋をそれぞれ1棟ずつもつ。次に、住居と倉庫乃至納屋はもつが明確に区画された敷地はもたない小単位がある。残りは住居のみをもつ小単位である。ここに3層にわけられる階層の存在が知られる。集団は共同で利用・管理する排水溝と倉庫をもっていた。倉庫は、あくまで集団共有のものであるが、3階層の最上位にランク付けられる小単位のもの敷地に最も近いことは、その小単位のもの集団における発言力の強さを示している。

集落は、その内部に階層差を有する小単位によって有機的に構成される集団が、互いに異集団であることを顕示しながら、一方で一個の集落としてのまとまりを保ちながら複数寄り合って構成されていた。

- (1) これと類似するものが、立野遺跡（福岡県）から出土している。同遺跡の51号住居跡ではそれを粘土で固定している。（福岡県教育委員会『立野遺跡（C地区）』1986年）
- (2) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』（1981年、柏書房）
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』（1981年、角川書店）
- (4) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（VII）』1986年
- (5) この確認調査は昭和60年12月に香川県教育委員会文化行政課が行った。



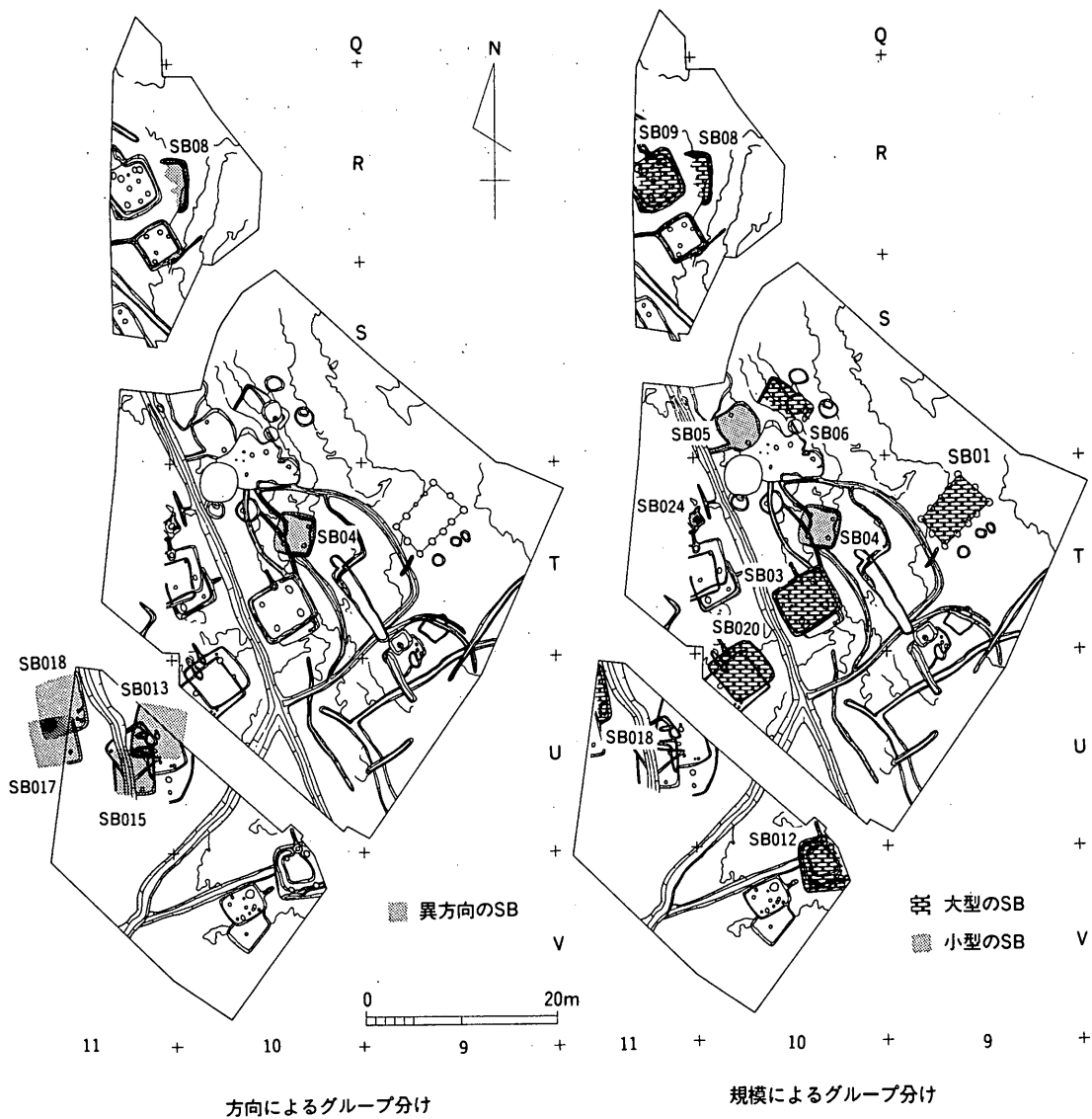


図135 古墳時代SBの方向と規模によるグループ分け図 (1/800)

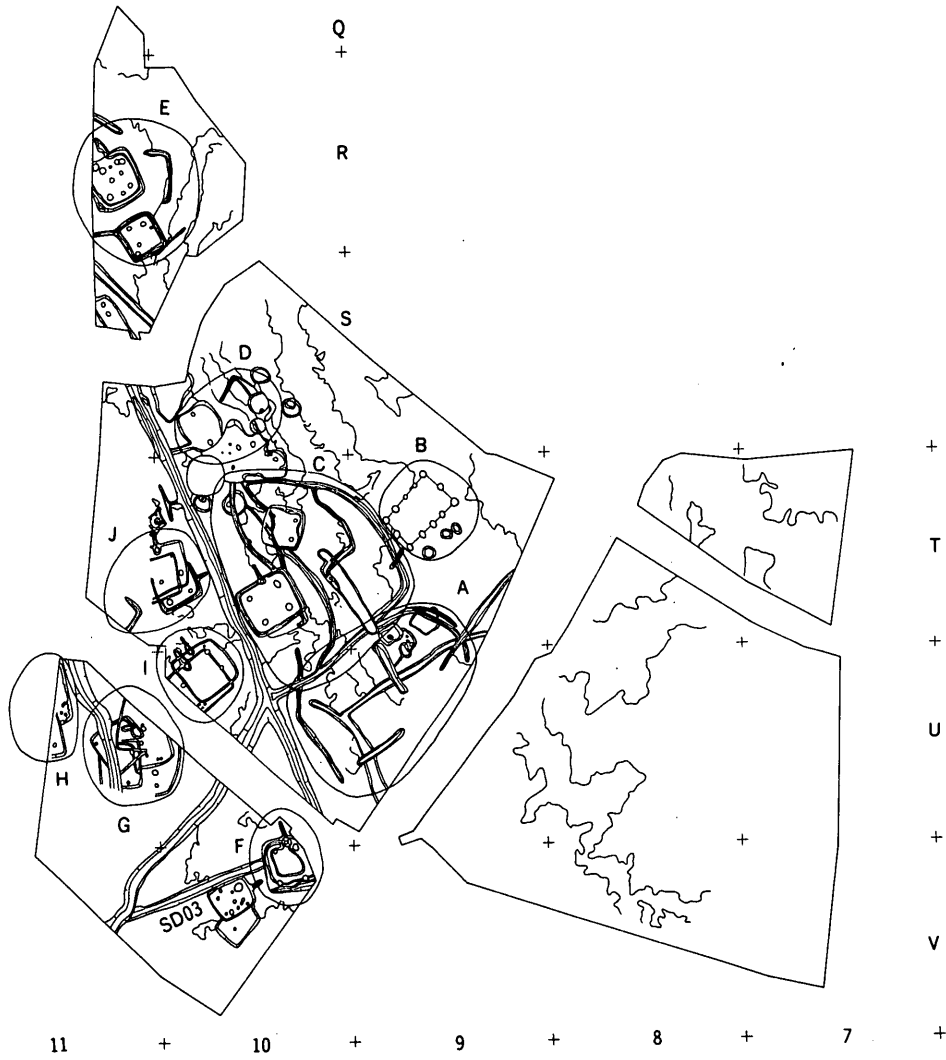


図136 古墳時代SBの分布によるグループ分け図 (1/800)

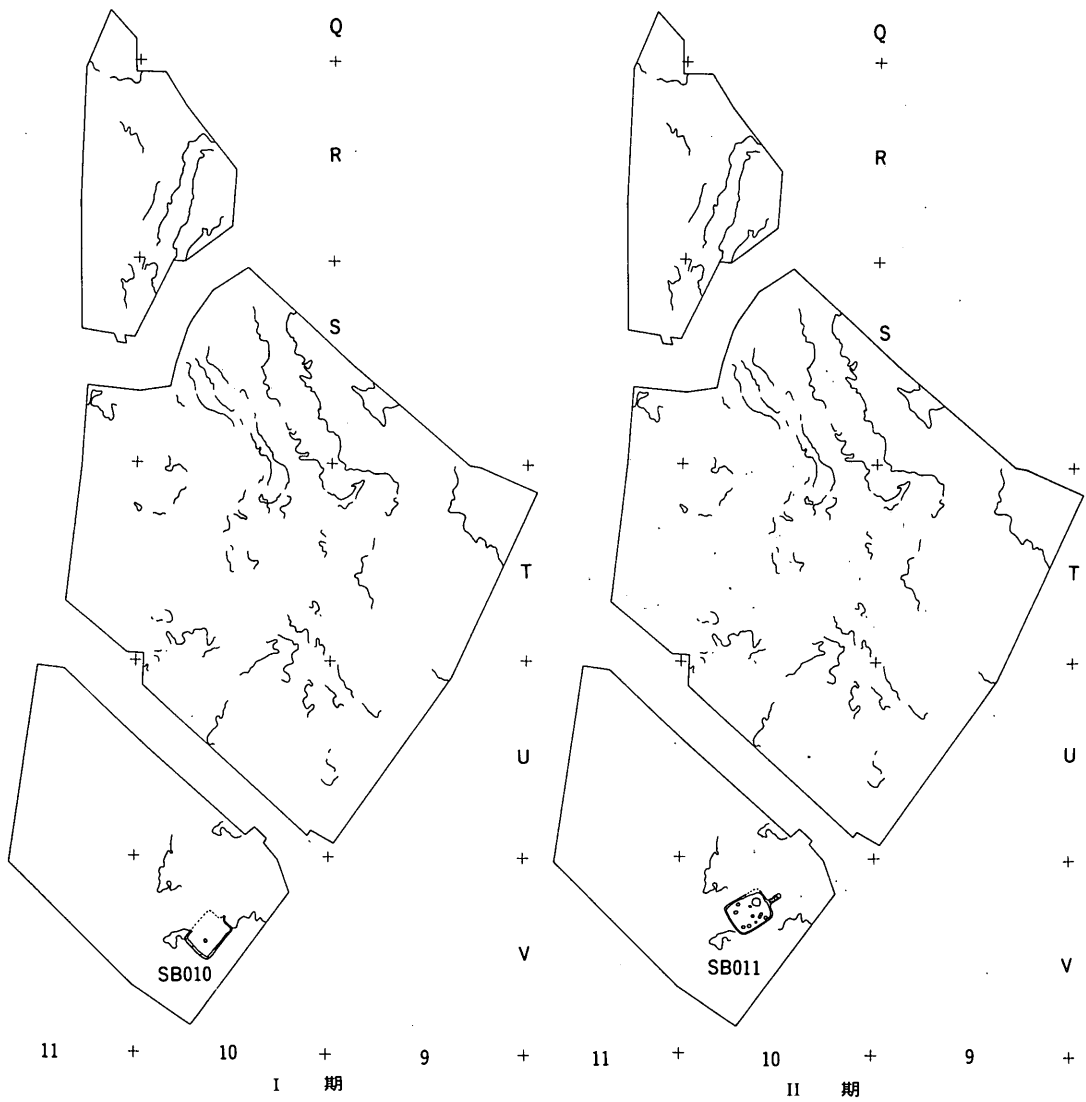


图137 古墳時代遺構変遷図 (I・II期) (1/800)

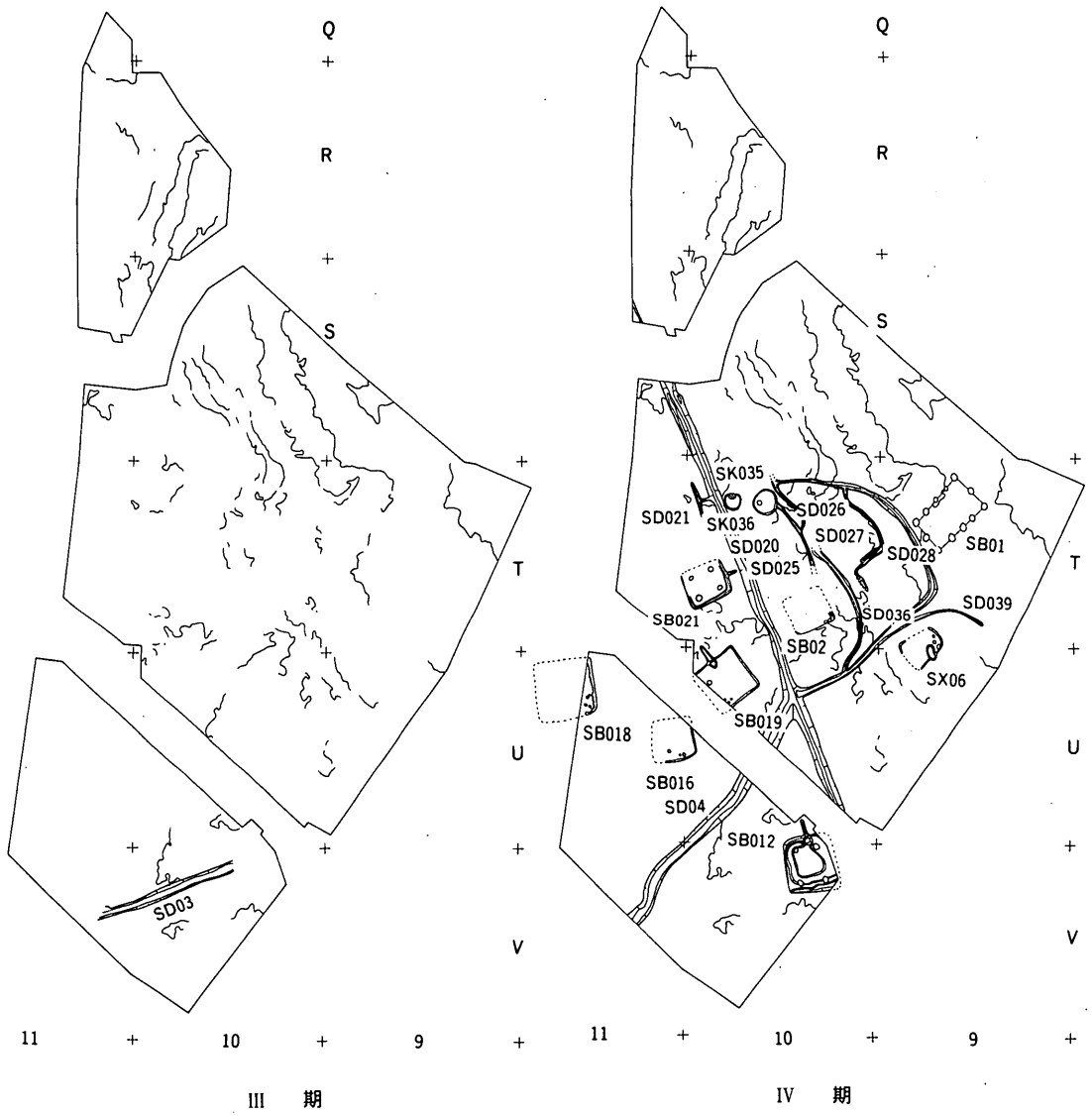


图138 古墳時代遺構変遷図 (III・IV期) (1/800)

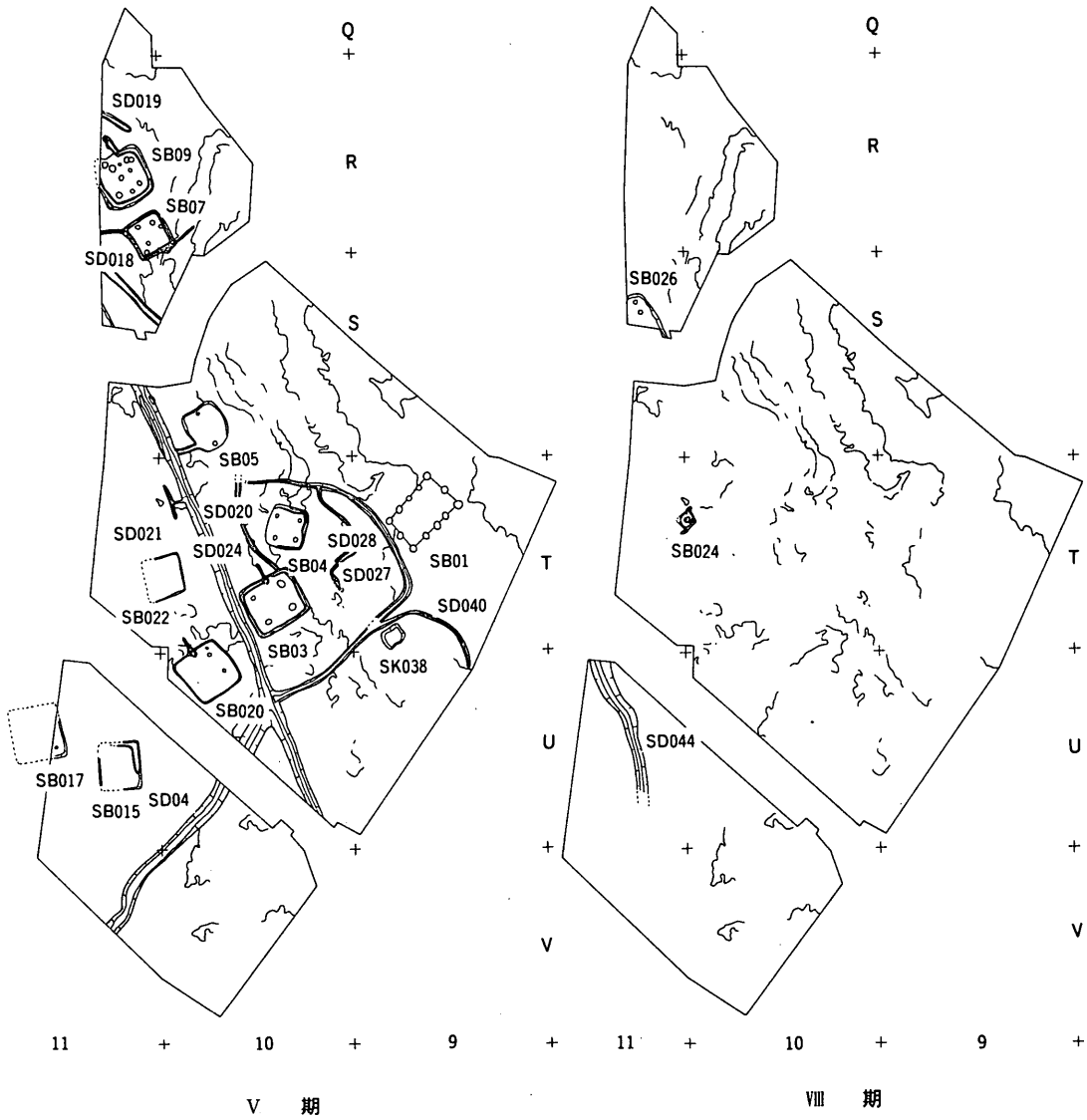


图139 古墳時代遺構変遷図 (V・VIII期) (1/800)

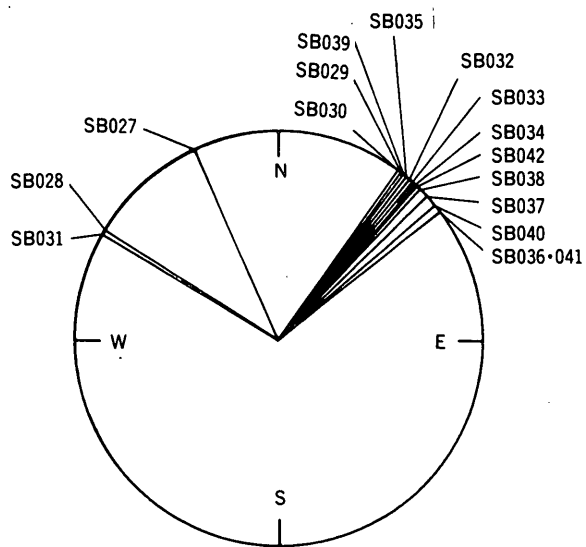


表66 奈良時代以降S B 主軸方向分布表

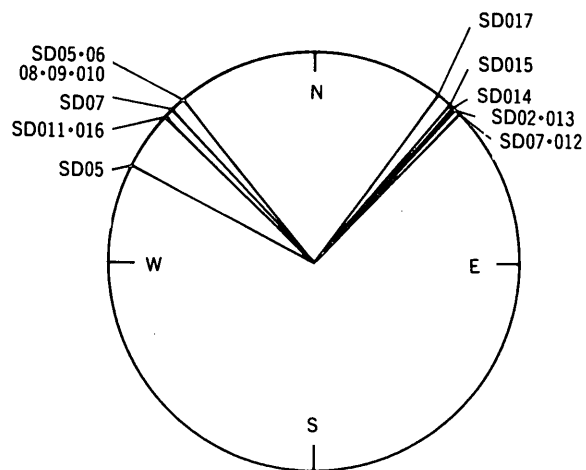


表68 中世S D延長方向分布表

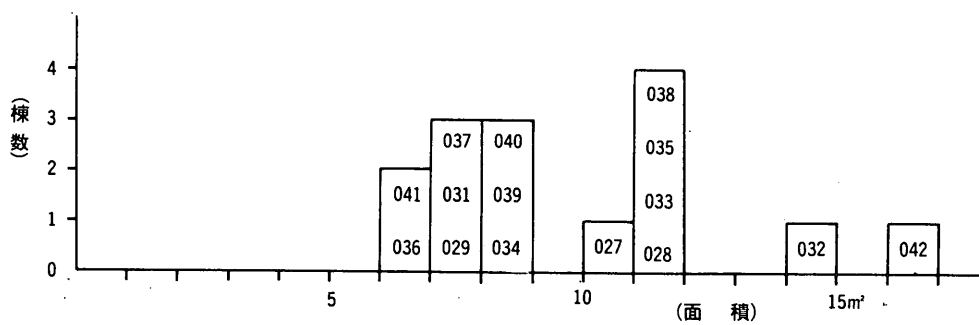


表67 奈良時代以降S B 面積別棟数表

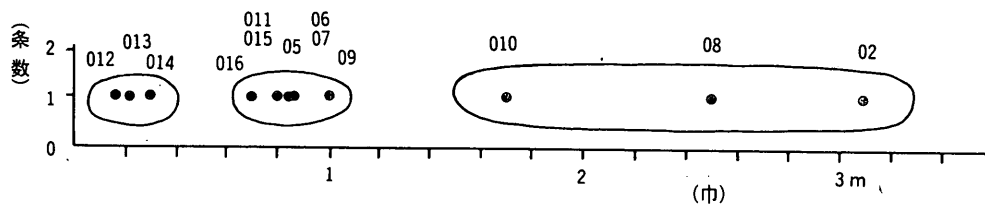


表69 中世S D巾値分布表

## 2 奈良時代以降の遺構と遺物について

### (1) 遺構について

#### 1) 建物跡

建物跡の時期変遷、および性格を明らかにするために若干の考察を行う。方向性から、N58°W前後・N42°E前後のものとN24°Wのものとの2グループに分けられる(表66)。前者は約90°振った結果だから同一グループのものとするべきであろう。後者はSB027の1例のみである。従って、SB027以外の建物跡は方向性においては同質である。SB027は、その構造(方形ピット)をも考えると他の大部分(円形ピット)とは時代差があると言えよう。

規模は、表67のように大体3グループに分けられる。しかし、小規模なものが大部分を占めることを考えると、この相違は時期差を示すものではなく機能差と考えるべきであろう。最も規模の小さい(9m<sup>2</sup>以下)グループ(SB036・041・029・031・037・034・039・040)は、住居以外の機能、すなわち作業小屋などとするべきであろう。なお、規模の最も大きいSB042は未調査部分があるので、さらに大きくなると考えられる。SBの中では別格である。

構造的には、礎石建物跡であるSB042とそれ以外の掘立柱建物跡とが区別される。この区別は、方向性が同一であることから時期差の基準とはならないであろう。機能差を示すものであろう。前者は、倉庫・載瓦建物を想定すべきである。掘立柱建物跡は、方形ピットのものと同形ピットのものとの2種がある。前者はSB027のみである。これは、その方向性が他の多くのものと異なることから時代差・時期差を示していると考えられる。

切り合い関係は、調査区北西部にその例がある。それは建物配置に変遷があったことを示しているが、それは、柱間の線が交差するものが大部分で、ピット同士の切り合い関係はないために先後関係を導き出すことは難しい。

分布からは、疎・密があることが指摘できる。調査区北西部は密である。一方、SD05に沿うようにある建物跡は疎である。しかし、この分布から時期差を考えることは難しい。

以上から、時期差について結論的に言えるのは、方向性およびピットの形状からSB027がそれ以外の建物跡に先行するというのみである。SBの機能・性格については、礎石建物跡であるSB042が倉庫・載瓦建物跡であること、建物規模の極端に小さい8棟は住居以外の作業小屋などを想定するべきであろう。

#### 2) 溝状遺構

方向性は、N50°W前後と、N40°E前後にある。両者の差は約90°であるから、それは単一であるといえよう。規模は表69から大中小の3グループに分けられる。大はSD02北半・08・010で、これらは調査区北西部に分布する。SD02北半とSD08・010は直角に交わる可能性がある。おそらく特定の範囲を区画する役割の溝であろう。この意味では、SD010と土橋状部分を間に置いて連

続するS D09もこのグループに入れるべきである。小は、長さも2～4 mと相対的に短く、上記の大グループの溝によって区画される範囲内にあり、また、埋土中に焼土を含むという点が共通する。これから、この小グループの溝は、一定の範囲内において焼土を生じる施設に隣接、又は付属する溝であるといえよう。中グループの溝は、規模からは、両方の機能の溝を含むといえよう。

構造からは、石組み溝と素掘り溝の2種がある。前者をつくるためには、その前段階として石を据えるための掘り形の掘削作業がある。これは、素掘り溝をつくることである。前者は、石を運搬し・据える分だけ、後者よりも手間を要する。このことは、両者に構築目的の相違があったことを伺わせる。しかし、時期差があるとは言えない。石組み溝の存在は、同時に礎石建物跡や石組み井戸の存在を妥当なものとする。素掘り溝の中にはS D02北半のように、石積み遺構をもつものがあるが、これは、溝に付属する施設であって、他の素掘り溝と構造的に異なるとはいえない。

切り合い関係の例としては、S D08とS D010の例がある。S D08はS D010を切っている。S D08・010は基本的には平行する溝であり、前述したようにS D02北半・09とともに特定の範囲を区画する機能を有しているから、溝の掘り替えは、範囲の拡張といえよう。ここに2時期の存在が明らかになったといえよう。

分布は、調査区北西部が密である。他は疎である。

以上をまとめると、溝の時期変遷としては、S D09・010→S D08が指摘できる。溝の機能・性格としては、規模が大のグループは鍵形に配置されていることから特定の範囲を区画するもの、小のグループは、焼土を生じる施設に隣接・付属するものであると考えられる。また、石組み溝は、他の大部分の素掘り溝とは構築目的が相違していたと考えられる。

### 3) 遺構の時期変遷

遺物の時代・時期からは ((2)遺物について)、次のものが区別される。

平安時代 S K011・S K044

中世XI期 S K010

    XII期 S D09・010

    XIII期 S D02北半砂質土層・S D08

近世 S D02南半・S X010上層

遺構の諸要素からは、次のものが区別される。

S B027

S D09・010

S D08

遺構のS D09・010とS D08は、それぞれ遺物の中世XII期・XIII期に相当する。遺構のS B027は、



一的な考え方によって平安時代の前に置いておく。

上記で区別されたもの以外の大部分の遺構は、出土遺物から中世Ⅺ～Ⅻ期の中に収まるが、時期を特定することは現時点では難しい。ここでは遺構の性格・機能からセットをなすものをピックアップし、それらのセット間に併存がないとして区別を行った。まず、焼土を含む遺構であるSK024・025・026・028、焼土魂、SD012・013・014をセットとする。次に構造から特異である礎石建物跡SB042と石組み溝SD07をセットとする。このうちSD012とSB042は重なり合う。ここでは、前者は後者に先行するとして、前者を中世のⅫ期、後者を中世Ⅻ期に属するものとして遺構の時期変遷図に組み入れた。

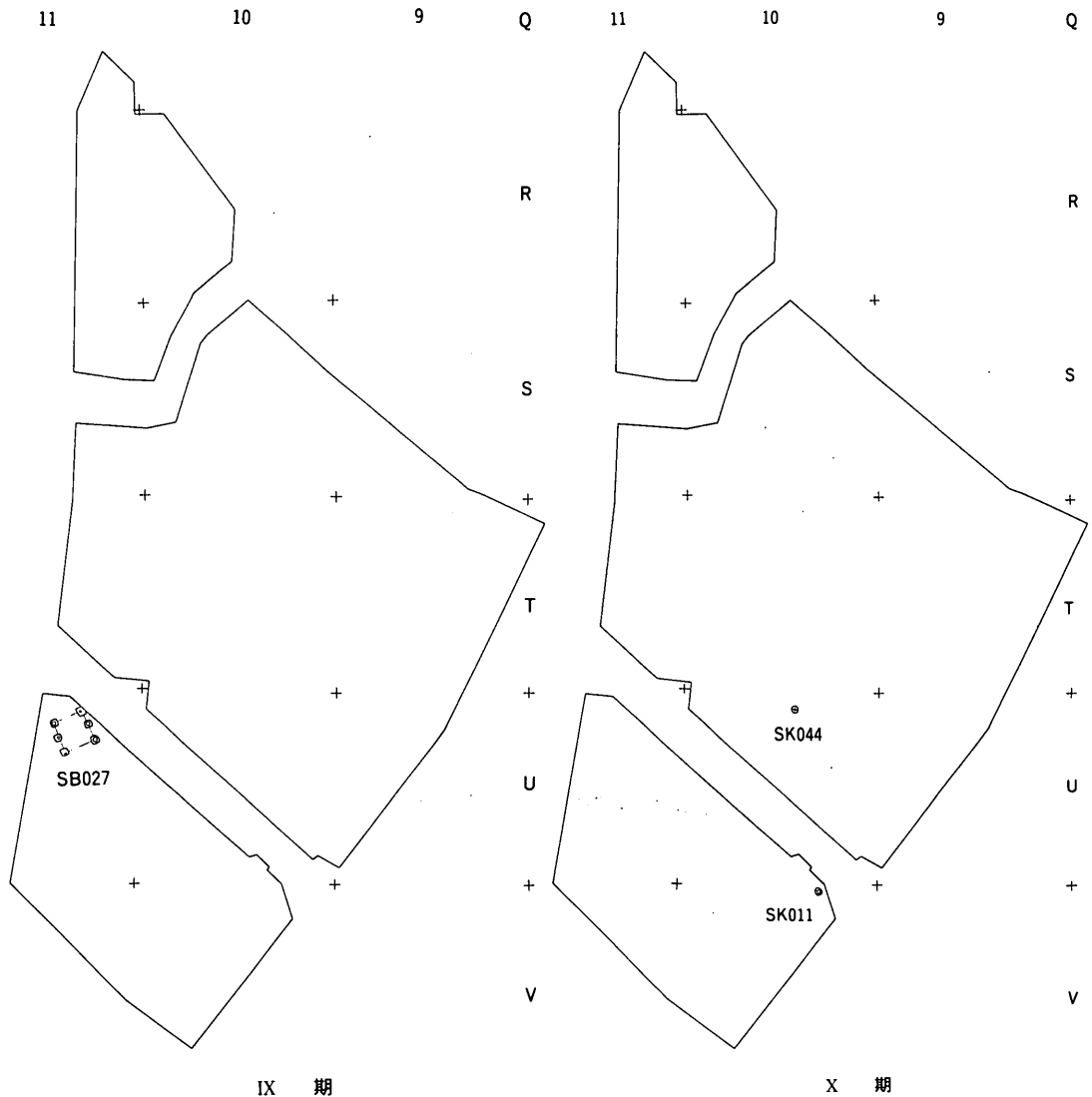


図140 奈良時代以降遺構変遷図 (IX・X期) (1/800)

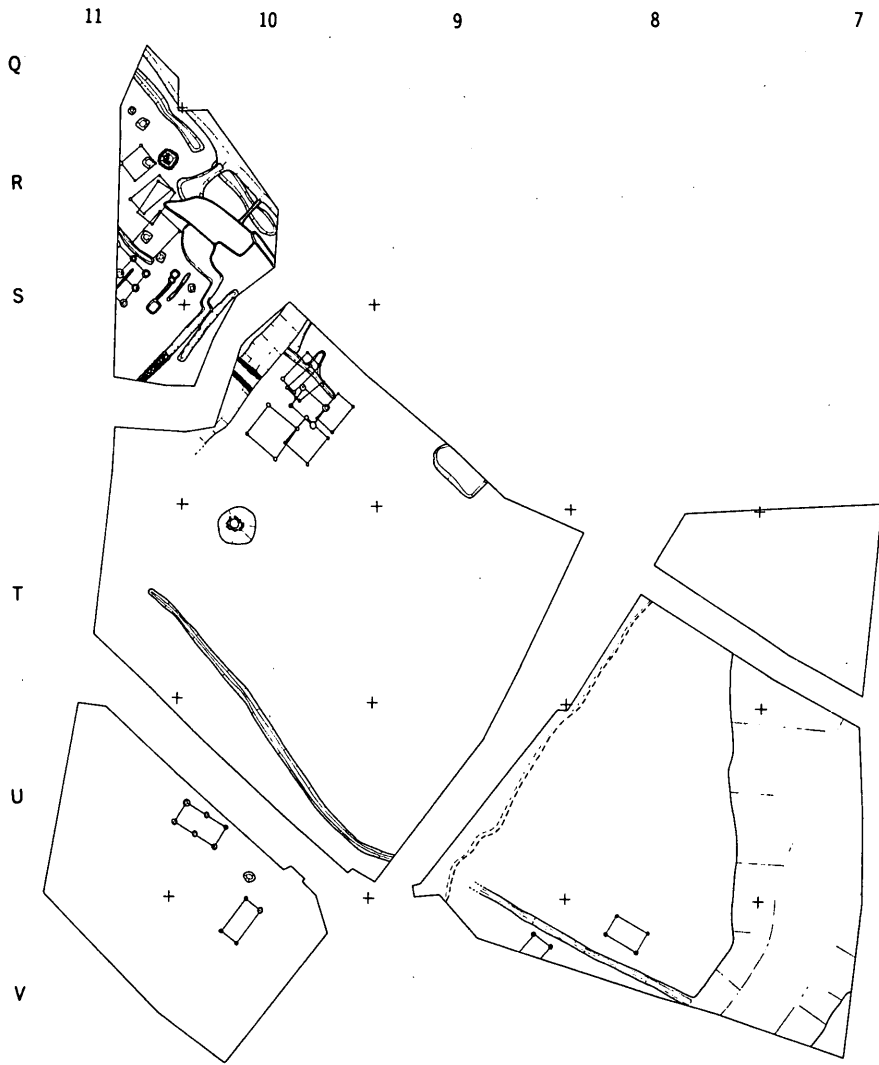


图141 中世遺構配置図 (1/800)

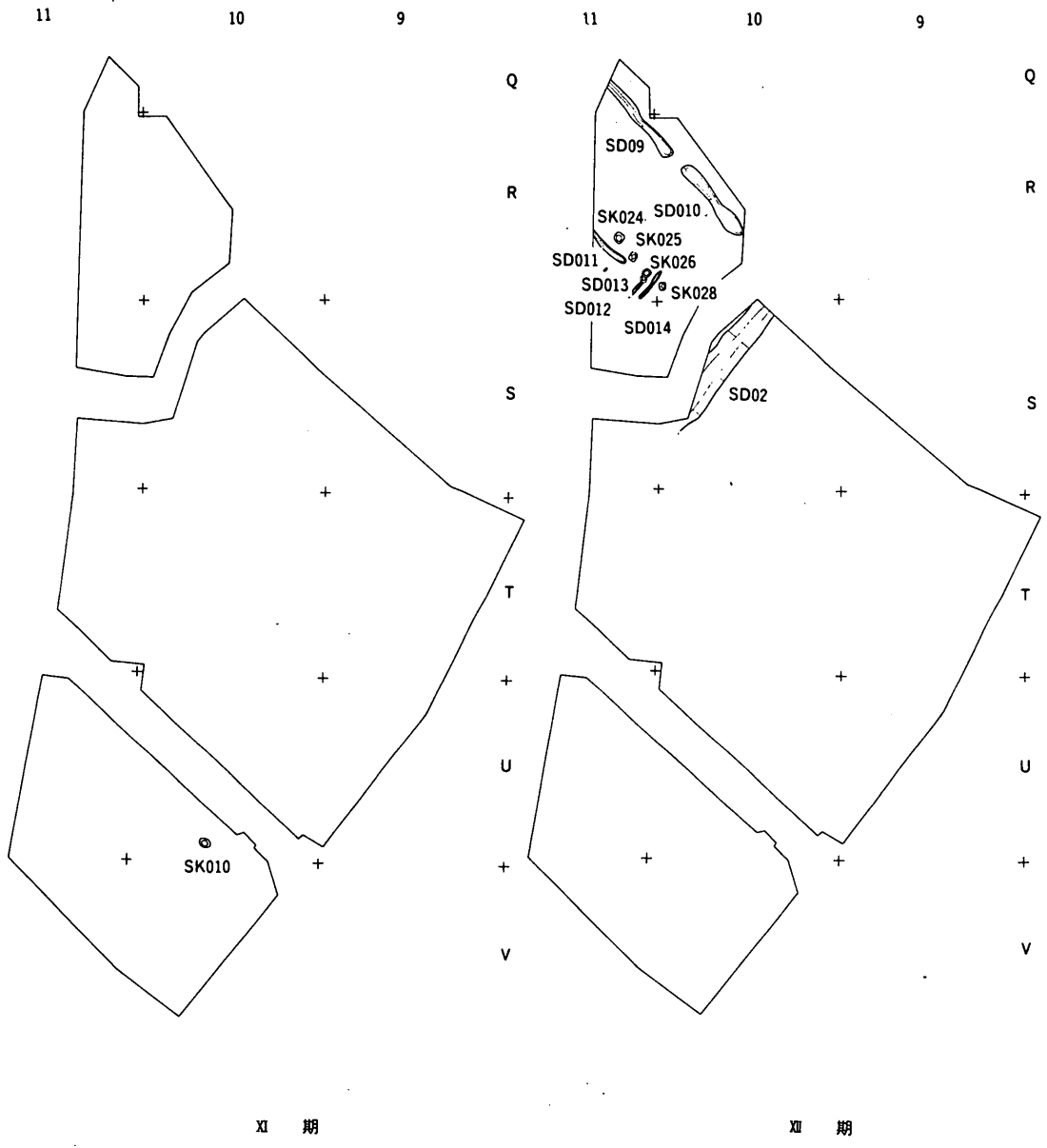
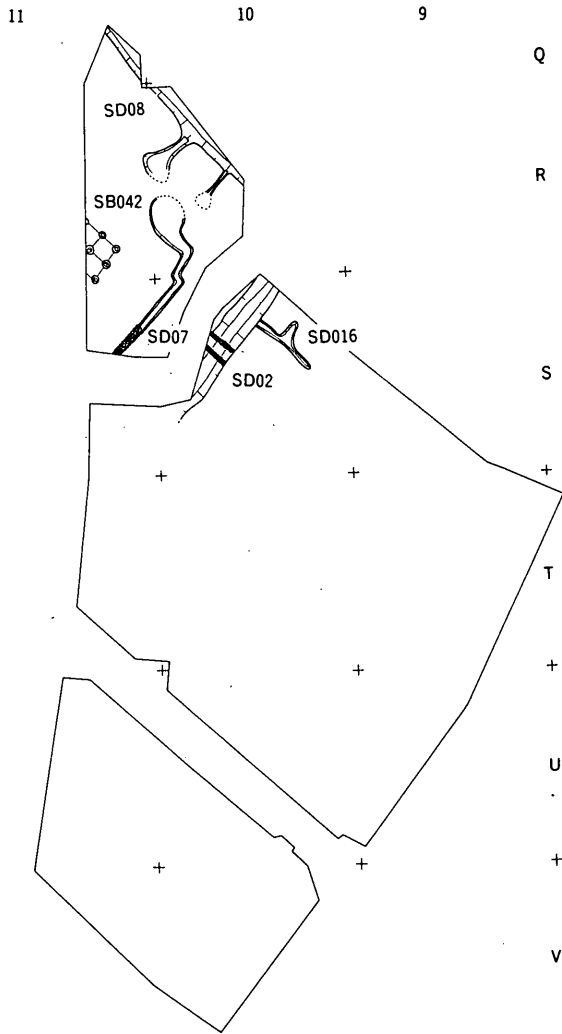


図142 奈良時代以降遺構変遷図 (XI・XII期) (1/800)



XIII 期

图143 奈良時代以降遺構変遷図 (XIII期) (1/800)

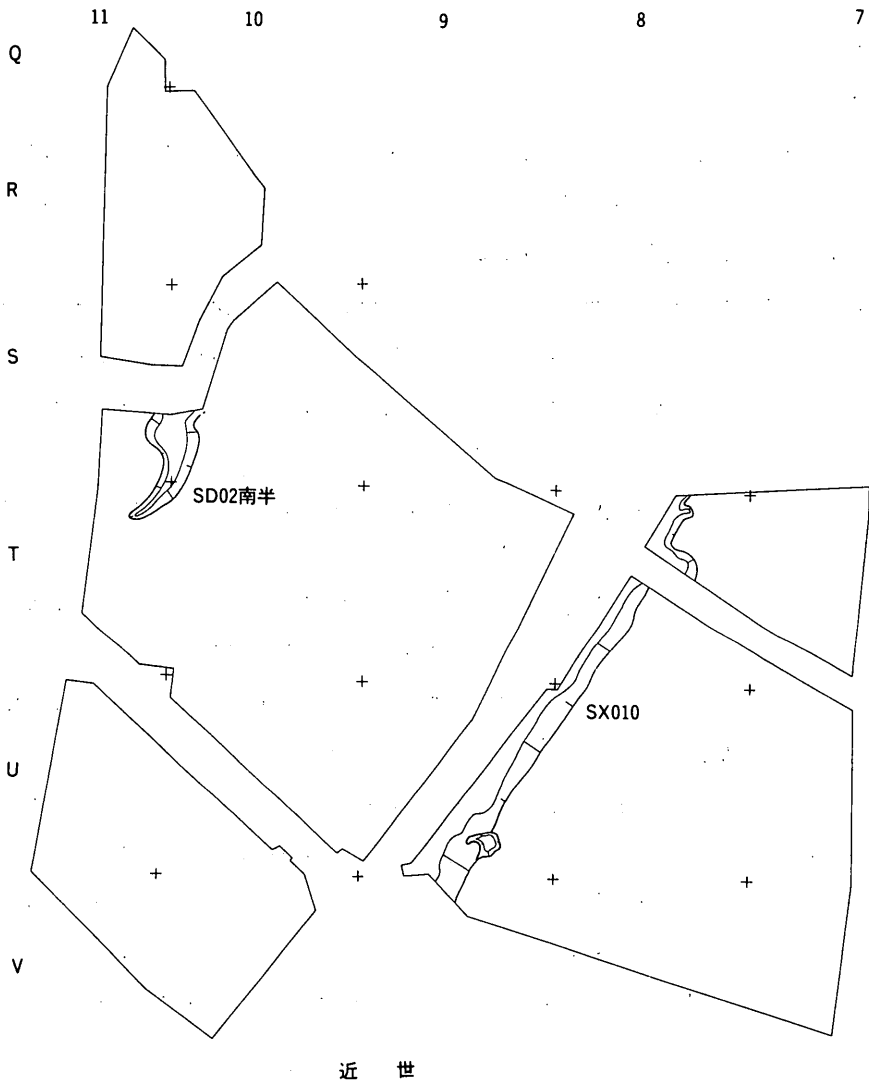


图144 奈良時代以降遺構変遷図（近世）（1/800）

## (2) 遺物について

### 1) 土師質土器

#### i) 皿・杯・碗の分類

整理当初は明確な規準はなく、碗は高台をもち体部が内湾して開く口径・器高の比較的大きいものを考え、これ以外の小物は皿・杯としてそれぞれ区別した。分類の結果から法量による皿・杯・碗の区別を示せば、口径は10.5cmと14cm、器高は2cmと7cmとなる。

皿・杯は、胎土・色調・形態から簡単に群別できる。胎土から、微砂粒を含みやや荒いもの(皿E・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・O)、水ひされたように精良なもの(皿L・杯B)、0.5mm以下の砂粒を均一に多量に含むもの(皿B)。比較的密だが1mm前後の砂粒を数個～10数個/ $(\pi \times 1.5^2)$  cm<sup>2</sup>含むもの(皿A・C・D・M・N、杯A・D)の4群に分けられる。

色調から、褐色気味のもの(皿E・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・O)、白色気味のもの(皿L・杯B)、黄橙色気味のもの(皿A・B・C・D・M・N)の3群に分けられる。

形態から、口径・底径の大きい皿(E・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>)と小さい皿に分けられる。小さい皿は体部が水平に近いまで開くもの(皿D)、底径が小さく体部が長いもの(皿L)、底部が不整形に出張るもの(皿B)、全体に分厚いもの(皿M)、体部が垂直に近い程にしか開かないもの(皿N)、体部が非常に短いもの(皿C)、これら以外のもの(皿A)に分けられる。

分類は、これらの群を形態を中心に技法を加味してさらに細分したものである。各類の特徴がどれほど客観的なものであるかをみるために、遺物量の多い遺構について各遺物の法量比を点とし、同類のものを囲ってみた(表70～77)。その結果、皿・杯・碗の区別はもちろん、主な分類型については確認ができた。より簡単な因子によって確認できるものから述べよう。

皿C 外傾値・器高・口径が最小(④-XYZ)。器高は最小(⑥-YZ)。故に皿Cは器高が最小。

皿D 口径と外傾値が最大(⑦-XYZ)。

皿L 外傾値・器高が最大、底径が最小(⑤-XYZ)。外傾値・器高が最大。底径が最小(④-XYZ)。故に皿Lは外傾値・器高が最大、底径が最小。

皿A・B・C・D・E・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・M・Nは、口径からDとE・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>とA・B・C・M・Nとに分けられる(⑦-UV)。

皿E・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub> 底径—口径から区別できる(②-X・⑦-U)。

皿M 皿A・B・C・M・Nのなかで最も大きい(⑦-UV)。

皿N 外傾値・口径が最小(⑤-XYZ)。外傾値が最小(⑥-Z)。口径・底径が最大(⑥-YZ)。故に皿Nは外傾値が最小。

皿A・B・C ④-XYZによって皿Lとともに4分できる。⑥-XYZによって皿Nとともに4分できる。故に皿A・B・Cは区別できる。

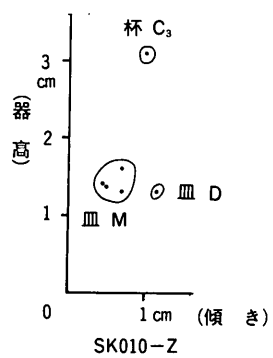
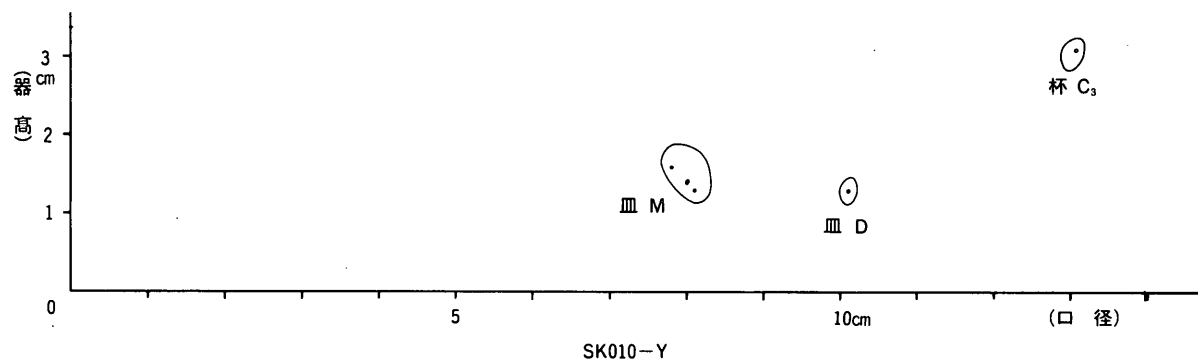
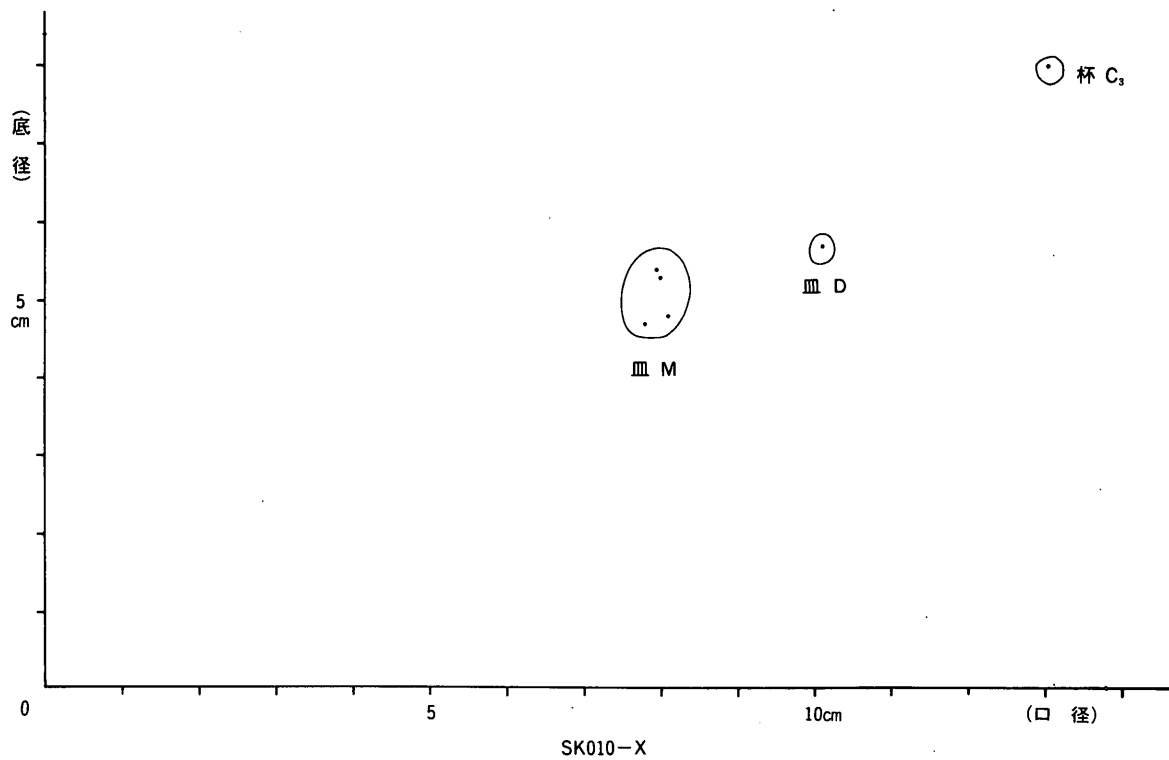


表70 土師質土器(皿・杯・椀)口径・底径・器高・傾き比(S K 010)

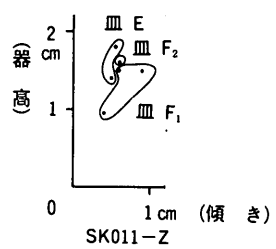
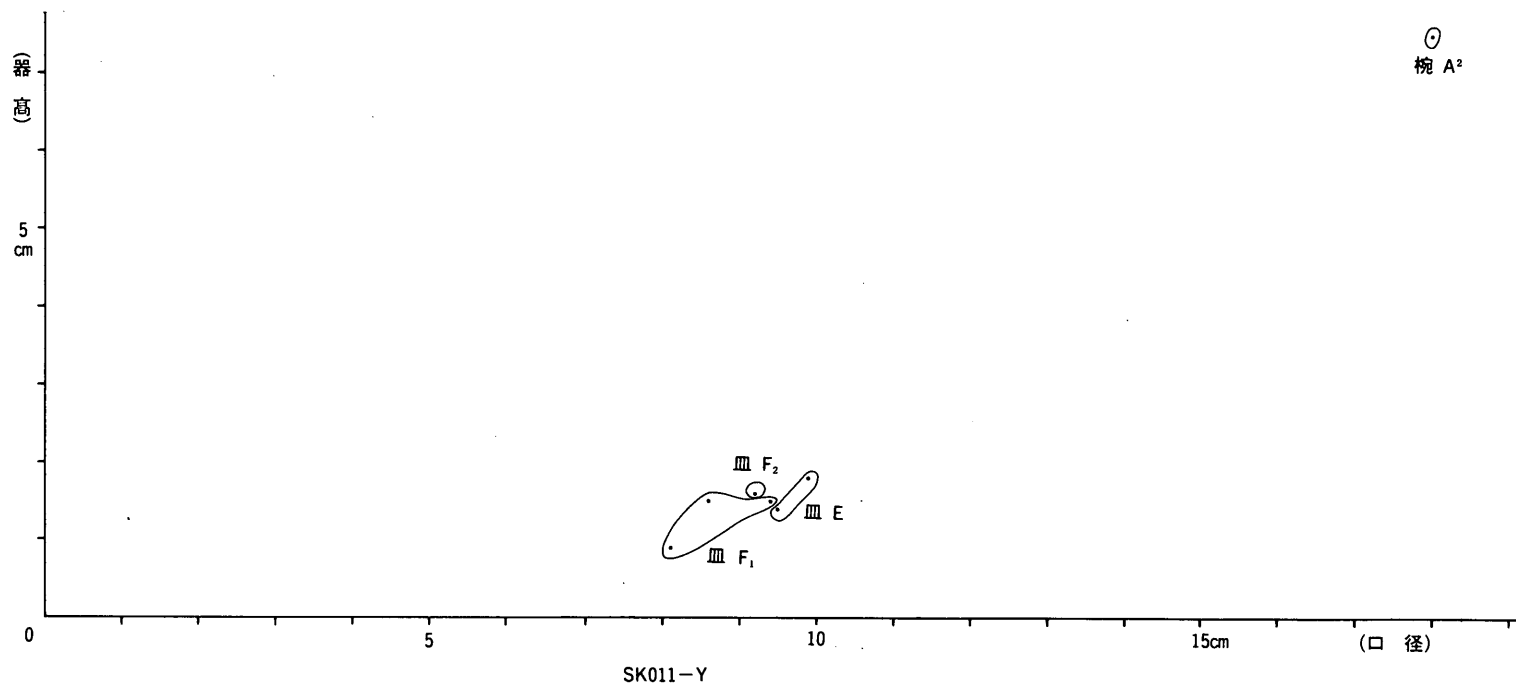
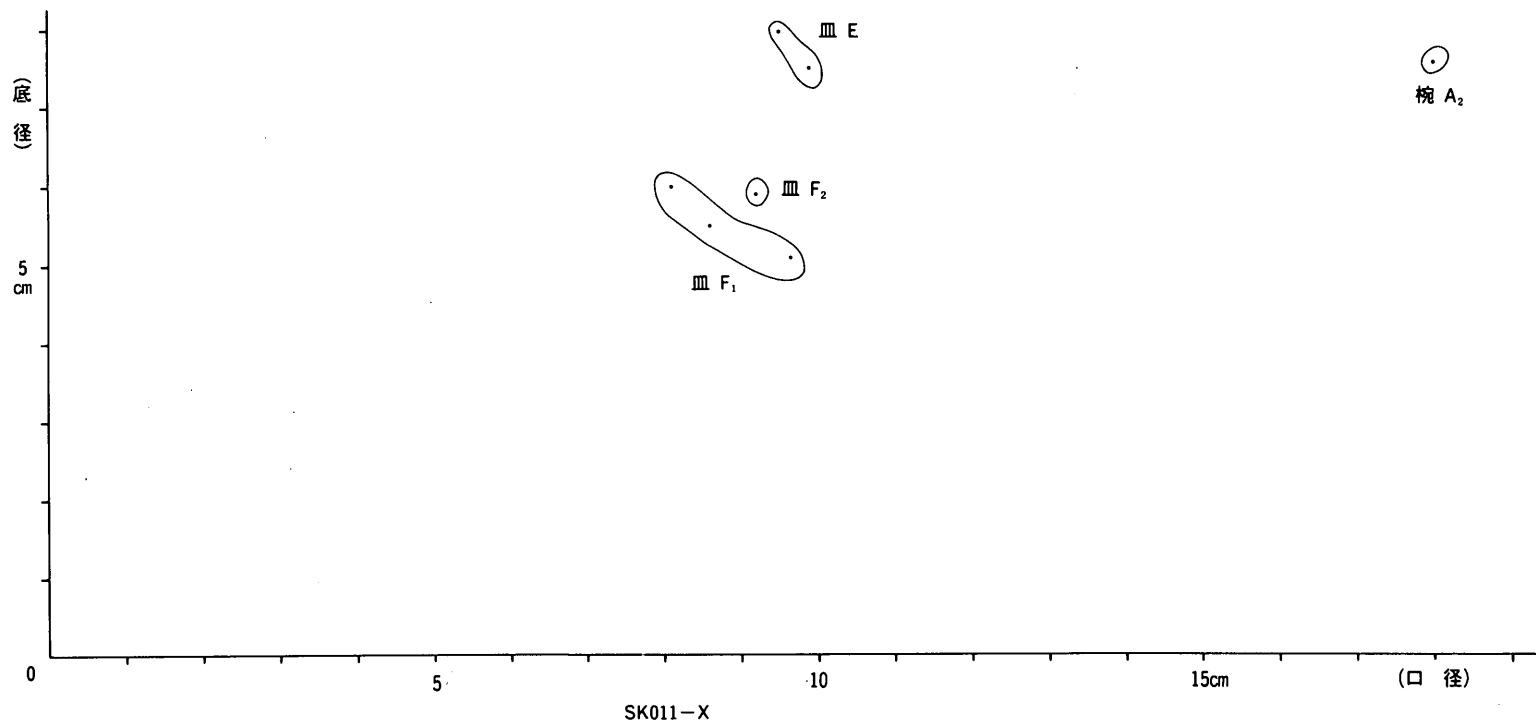


表71 土師質土器(皿・杯・碗)口径・底径・器高・傾き比(S K 011)



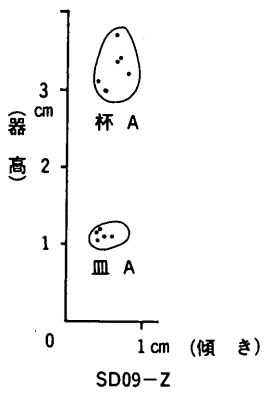
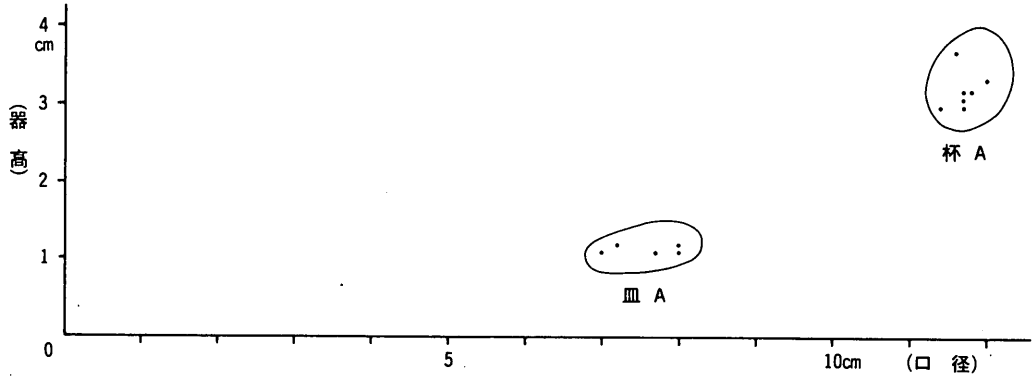
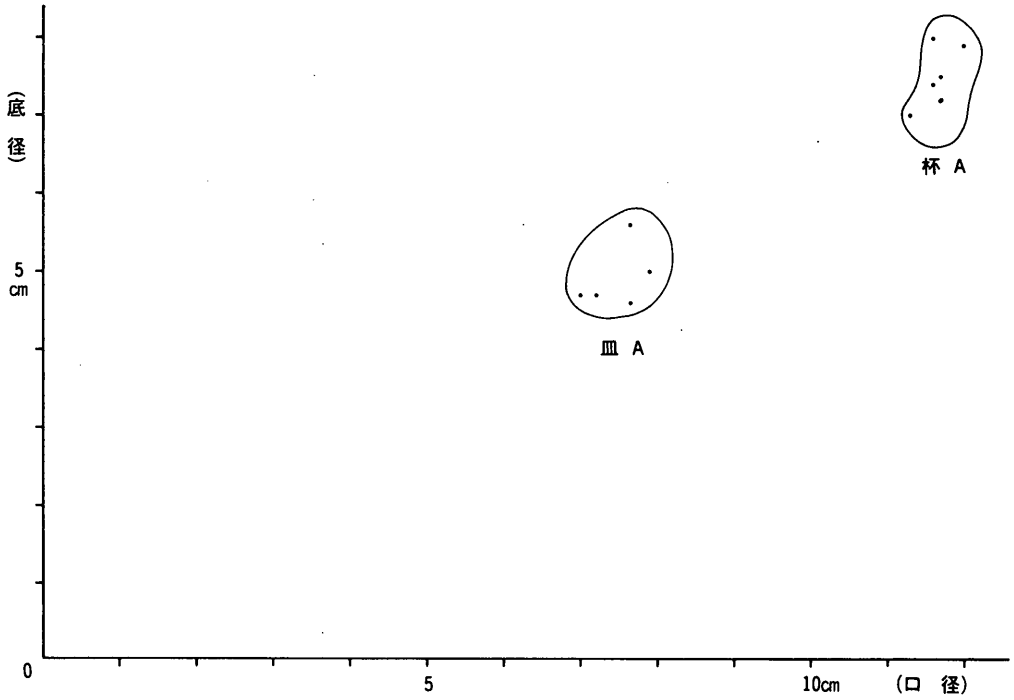
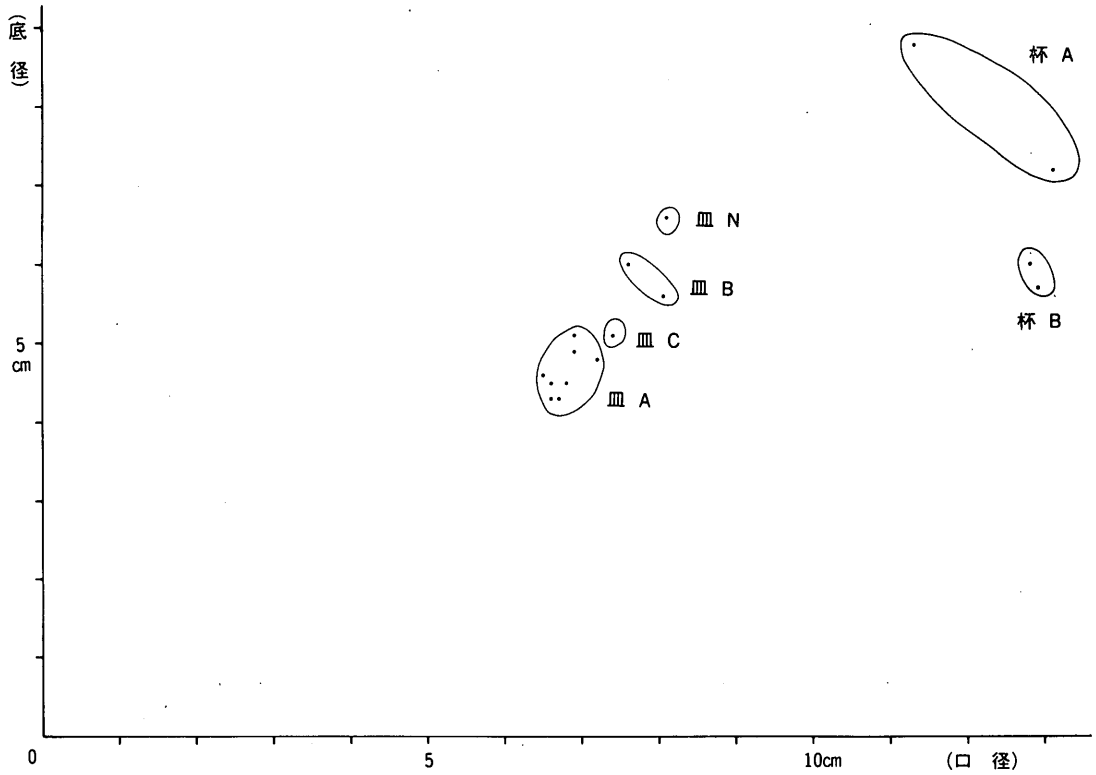
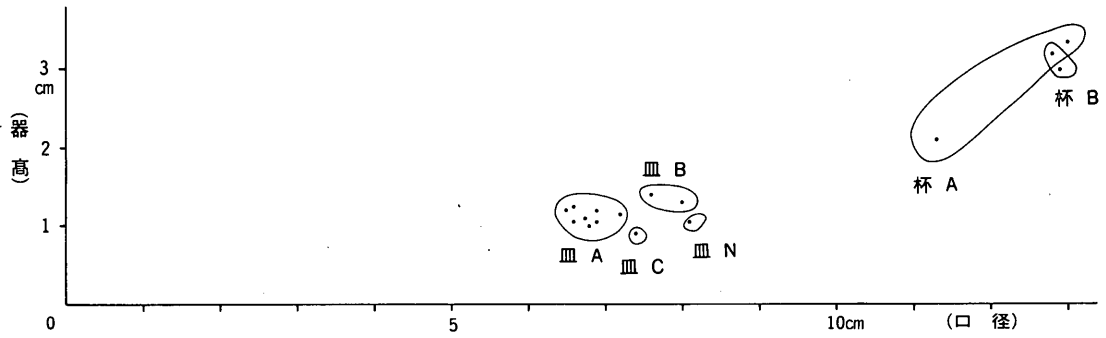


表72 土師質土器(皿・杯・碗)口径・底径・器高・傾き比(SD09)



SD08-X



SD08-Y

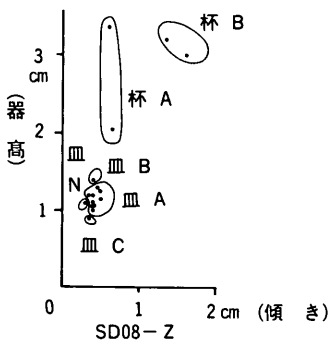


表75 土師質土器(皿・杯・椀)口径・底径・器高・傾き比(SD08)

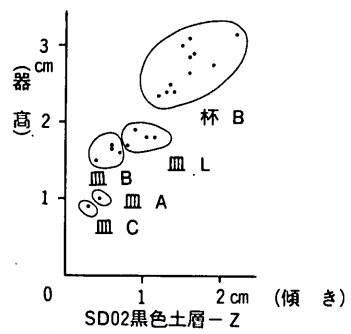
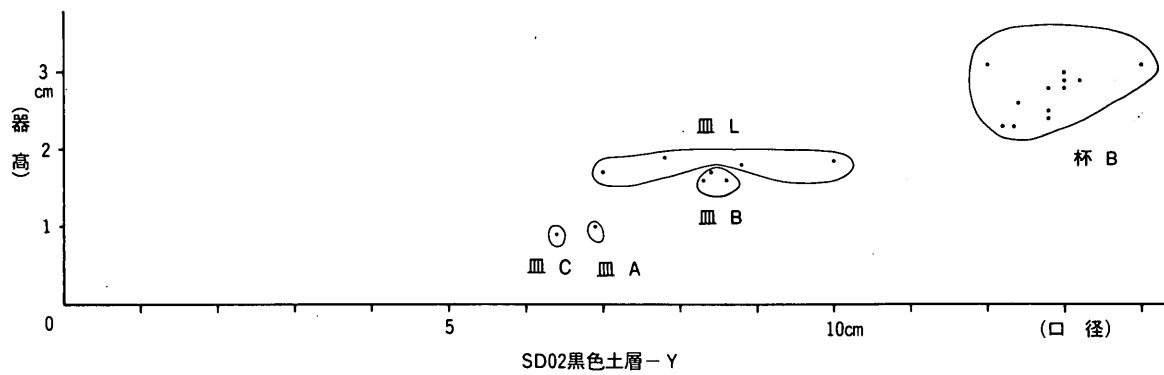
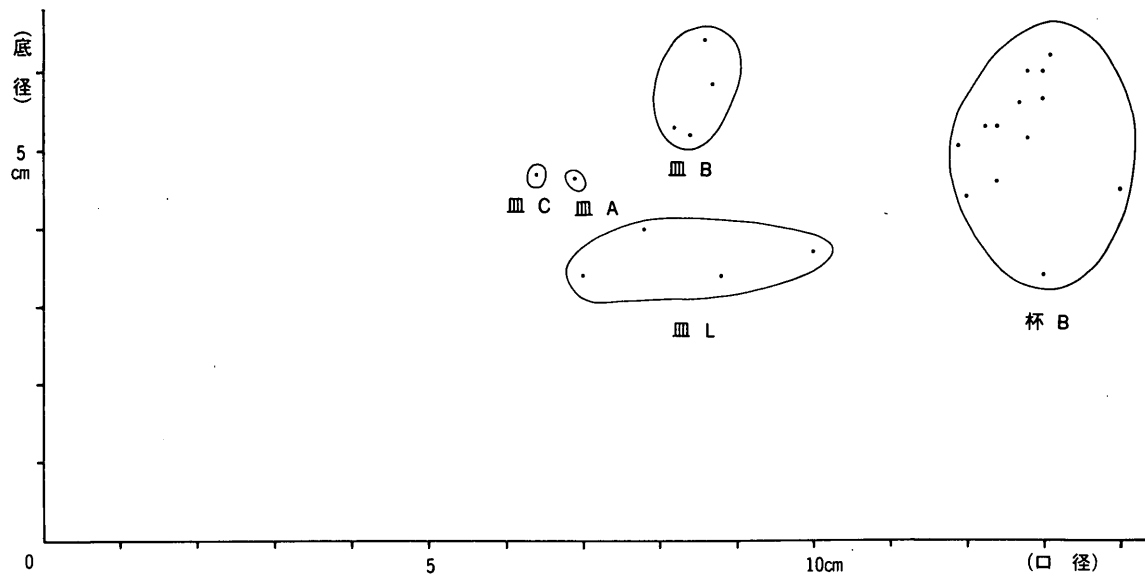


表73 土師質土器(皿・杯・椀)口径・底径・器高・傾き比(S D 02黒色土層)

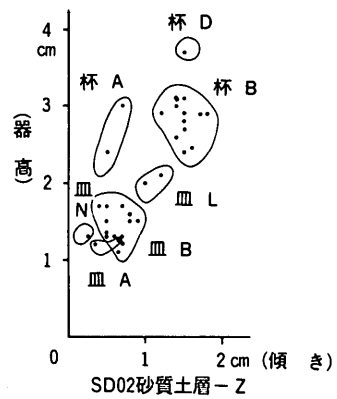
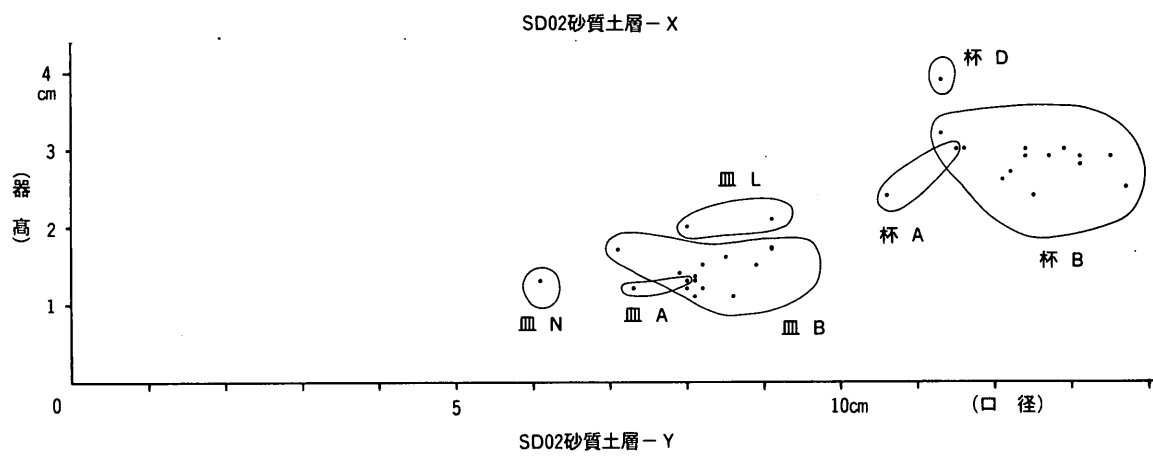
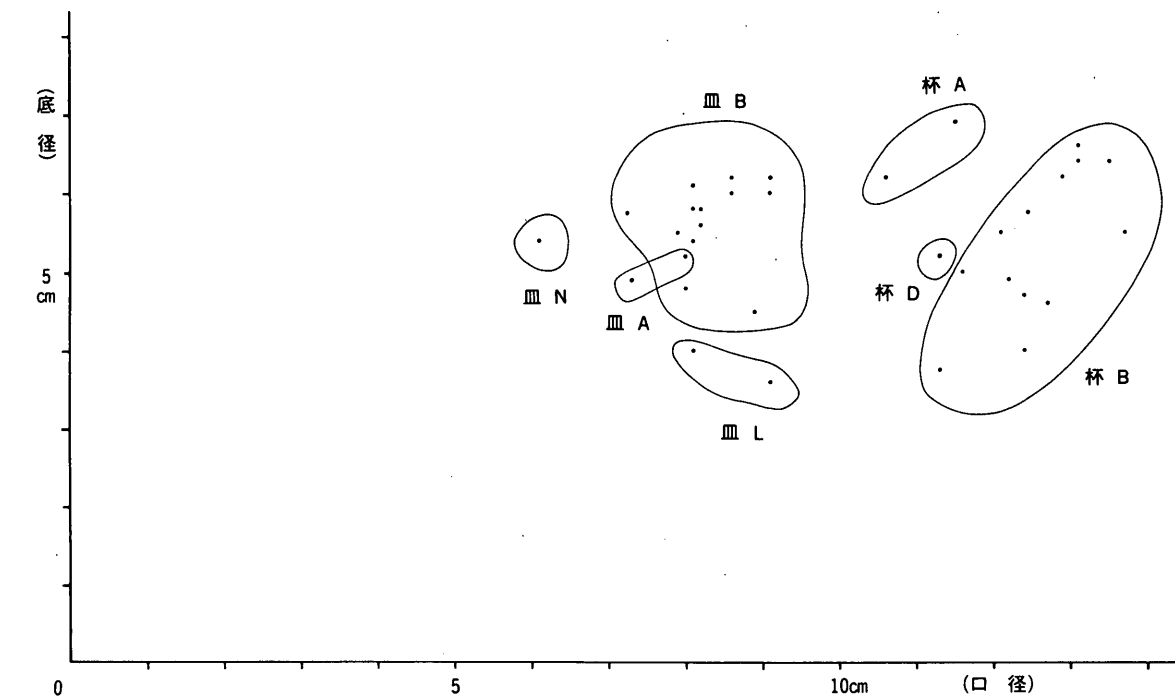


表74 土師質土器(皿・杯・碗)口径・底径・器高・傾き比(SD02砂色土層)

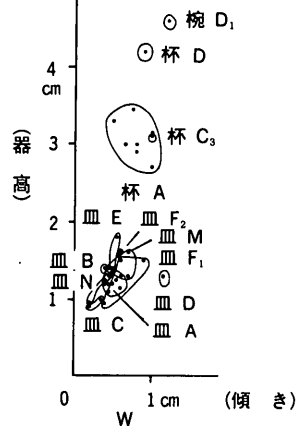
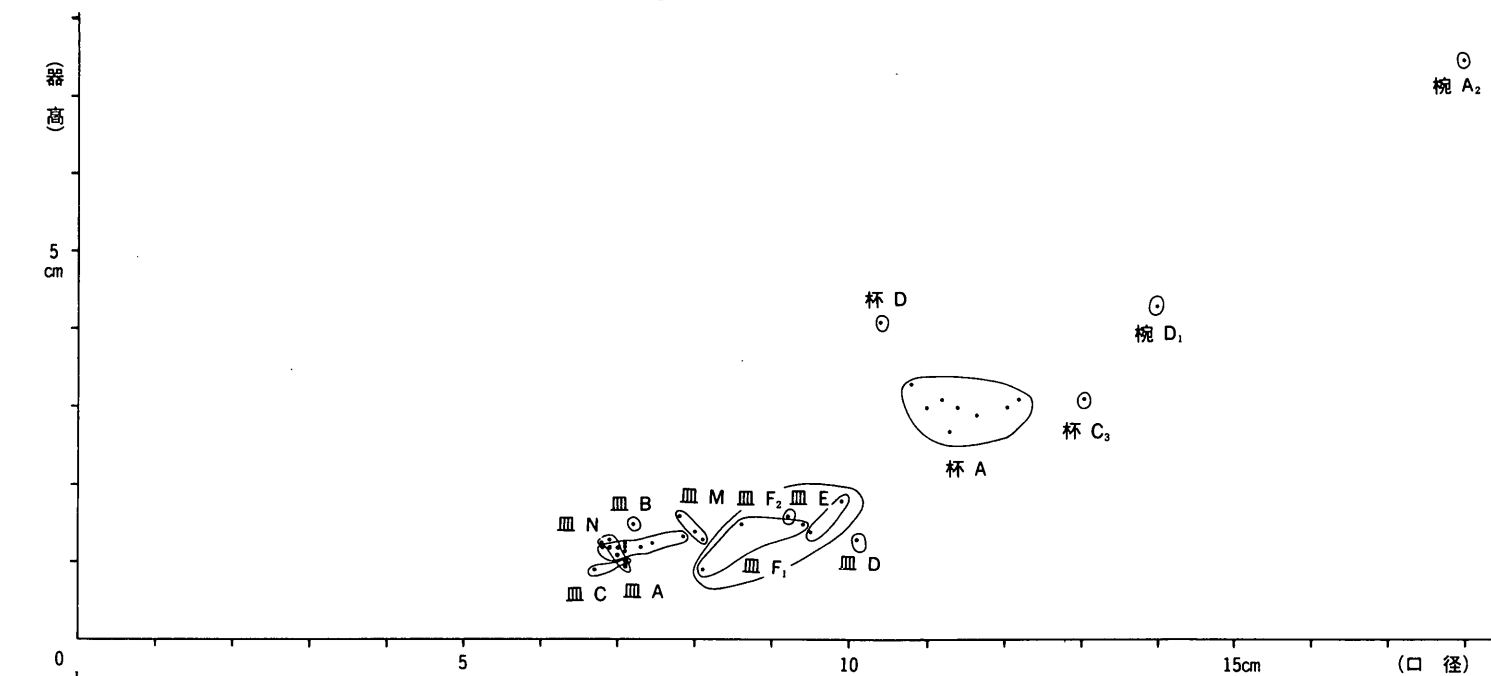
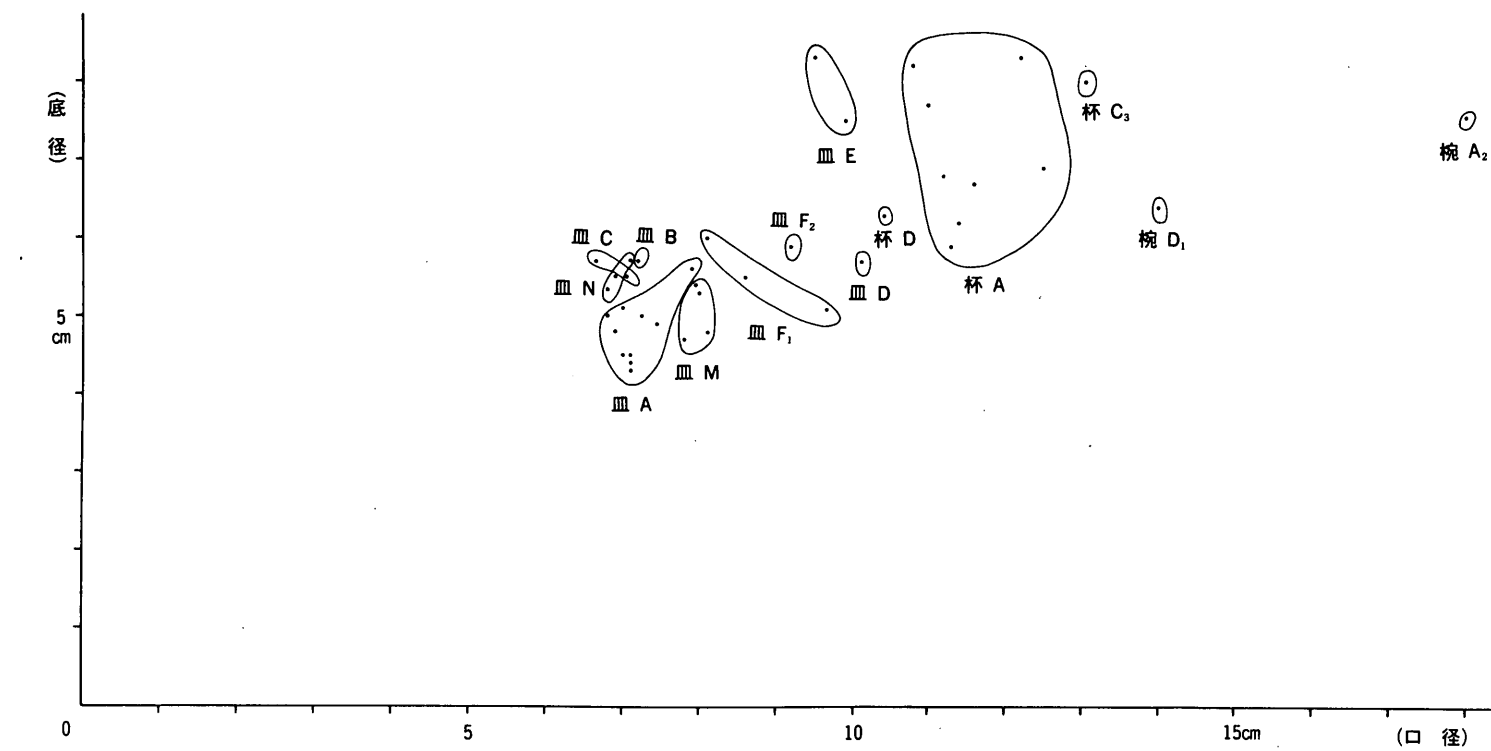


表76 土師質土器(皿・杯・椀)口径・底径・器高・傾き比(S K 010・011・020・022・024・025・028)

杯A・B ⑤-XZによって杯Dとともに3分できる。底径と外傾値によって区別できる(⑥-XZ)。故に杯A・Bは底径・外傾値によって区別できる。

杯D 器高が最大(⑤-YZ)。杯A・Bとともに3分できる(⑤-XZ)。故に杯Dは器高によって区別できる。

皿・杯の主なものについては分類案を法量化によって確認することができた。

形態を中心に分類を行ったが、形態の相異は製作技法と密接に関係する。主なものについての技法を考えてみよう。技法の相異は底部外面に端的にみられる。すなわち、ヘラ切り・静止糸切り・回転糸切りの3種類がある。

ヘラ切りは、その痕跡やヘラの回転方向から細分できる。まず、ヘラ切りの後、ナデを加えるために明瞭な痕跡を残さないもの(第1種)、

皿E・F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・Gが相当する。次に、ヘラ切り時に切り離された側の粘土が渦巻状に底部に付着するために明瞭な痕跡を残し、ヘラを右方向に動かすもの(第2種)、皿A・C・Dが相当する。第3に、ヘラを左方向に1回転させるもの(第3種)、皿Bが相当する。共伴する第2・3種について、もう少しみてみよう。

第2種の切り離された側の粘土が渦巻状に付着残していることは、荒い仕上がりといえよう。一方、渦巻状の痕跡が真円に近いことは、安定して精確に回転する道具の使用が想定できる。第3種はヘラ切りの方向が第2種とは反対であり、巾広のヘラを使用することで1度の回転で完了しているものがあり、また底部に不整形な出張りを有することを考えると、手持ちによるヘラ切りの可能性が想定できる。体部はともに回転ナデであるが、前者はより均斉がとれているが、後者はよりアンバランスである。この点は、表の③-XYZ・⑤-XYZによって皿A・Bの分布範囲が明瞭に広い。換言すれば、Aの方がBよりも均一で規格性が高いといえよう。さらに言えば、第2種は粗製品であるが大量生産に適する技法であり、第3種はより丁寧な製品であるが前者に比すれば手間を要する技法といえよう。

糸切りには、静止糸切りと回転糸切りの2種がある。両者は共伴する。それぞれの技法を採用した根拠を考えてみよう。静止糸切りは皿Lと杯Bのみである。回転糸切りは皿M・Nと杯Dである。両者を比較すると、前者は底径がより小さく、後者はそれがより大きい。また、後者は器

表77 口径・底径・器高・傾き比判定表

辺	構名	表名	皿											杯				
			A	B	C	D	E	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	L	M	N	A	B	C	D		
①	SK010	X				○						○						○
		Y				○						○						○
		Z				○						○						○
②	SK011	X				○	○	○										
		Y				○	×	×	×									
		Z				○	×	×	×									
③	SD09	X	○														○	
		Y	○														○	
		Z	○														○	
④	SD02 黒色土層	X	○	○	○						○						○	
		Y	○	○	○						○						○	
		Z	○	○	○						○						○	
⑤	SD02 砂質土層	X	×	×						○		○	○	○				○
		Y	×	×						○		○	×	×				○
		Z	×	×						○		○	○	○				○
⑥	SD08	X	○	○	○												○	○
		Y	○	○	○								○	×	×			
		Z	○	○	○								○	○	○			
⑦		U	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×					
		V	×	○	×	○	○	×	×	○	×							
		W	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×						

X: 口径-口径の表  
 Y: 器高-口径の表  
 Z: 器高-傾きの表  
 U: SK010・011・020・022・024・025・028の  
 口径-口径の表  
 V: SK010・011・020・022・024・025・028の  
 器高-口径の表  
 W: SK010・011・020・022・024・025・028の  
 器高-傾きの表  
 ○: 分布域を分ける  
 ×: 混じって分布

厚がより分厚いという特徴がある。胎土では前者は精良、後者は1mm前後の砂粒を多く含む。これらの特徴を糸切りを行う場合に難易という面から考えると、対象面積が小さく胎土精良である前者はより容易であり、対象面積がより広く胎土に砂粒を多く含む後者はより難しいといえる。この違いが前者においてより容易な静止糸切りが、後者においてより手間の要する回転糸切りが採用された一つの根拠であると考えられる。

ところで、静止糸切りの底部をもつ杯Bとヘラ切り第2種の底部をもつ杯Aとは共併する。前者は後者に比し胎土が精良であり、器厚も薄いなど相対的に丁寧である。逆に、後者は相対的に荒いつくりである。⑤-X Y, ③-X Yから杯の分布範囲をみると杯Bは杯Aよりも広い。このことは、相対的に荒いつくりである杯Aは製品としてはより均一であり、規則性があるといえよう。

### ii) 皿・杯の機能について

皿・杯にはその口縁部に油煙状のススが付着しているものがある。これは灯明皿としての使用が行われたことを示している。しかし、その使用例は全遺物において皿は11例、杯は15例と極めて少ない。灯明皿以外の機能が主であったことがわかる。

ところで、皿・杯の多くには色調において赤と白との区別があったようである。赤に区別されるものは黄橙色に発色される。発色が不十分で班状に灰白色の部分がある場合には、そこへ赤色顔料を塗布して赤に仕上げている。白は灰白色に発色している。赤と白の比率をS D02砂質土層とR-11第4層でみると、皿は赤が6~8割を、杯は赤が7割を占める(表84)。ともに赤が多い。このように赤と白の区別があることは、使用時に赤と白の使い分けがなされていたことが暗示される。しかし、具体的な機能の内容としては、食膳具の一つであったであろうこと以上には不明とせざるを得ない。

### iii) 皿・杯各タイプの時期的な消長

皿・杯のタイプ別の時期的な消長を知るために次のような表を作成した。切り合い関係にあるS D010とS D08、層位的に先後関係のあるS D02黒色土層と同砂質土層における、皿・杯各タイプ毎の比率(個体数)の増減表を作成した(表79の①・②)。次に、S D02砂質土層よりも層位的に先行する同黒色土層をS D010とS D02砂質土層・S D08との間において、上記の表①・②を合体・合成させて表③・④を作成した。なお、S D02とS D08は同時併存すると考えている。

表③から次のことが指摘できる。

皿Aは漸減→漸増、皿Bは新出→微増、皿Cは急減→消滅、皿Lは新出→漸減、皿Mは急減→微増、皿Nは新出→微増、杯Aは急減→急増、杯Cは漸減→消滅、杯Bは新出→漸減、杯Dは新出→微増

整理すると、皿A・杯Aは漸減・急減→漸増・急増であるのに対し、皿B・L・N・杯B・Dは新出→微増・漸減である。すなわち、後者はS D02が掘られた頃に突然、使用されはじめるが、

表78 遺構別土師質土器(皿・杯)タイプ別比率(個体数について)

遺構名	皿							杯				
	A	B	C	L	M	N	計	A	C <sub>1</sub>	B	D	計
SD02黒色土層	23.08	46.15	7.69	15.38	0	7.69	99.99	10.59	0	88.24	1.18	100.01
SD02砂質土層	38.57	47.14	0	2.86	1.43	10.00	100.00	32.20	0	66.53	1.27	100.00
SD08	72.41	27.59	0	0	0	0	100.00	55.56	0	44.44	0	100.00
SD010	60.00	0	20.00	0	20.00	0	100.00	81.82	9.09	9.09	0	100.00

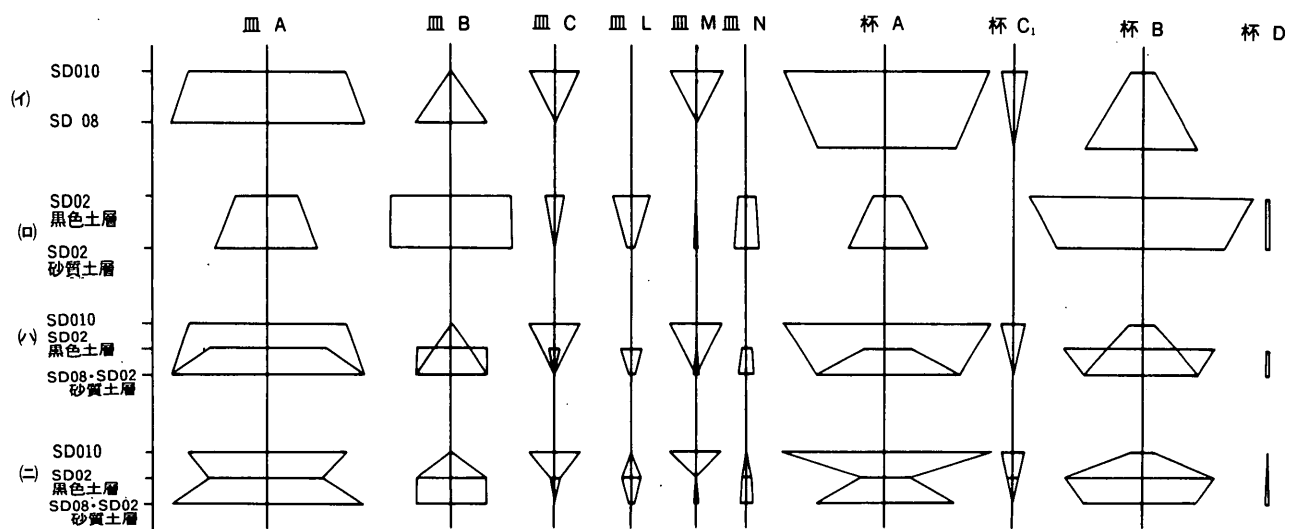


表79 土師質土器(皿・杯)タイプ別出土比率の変遷表



直ぐに減少する。一方、前者はS D010の時期から中心的に使用されていたが、後者の出現で相対的に比率が下がる。しかし、直ぐに回復して再び主流を占めるようになる。

iv) 皿・杯・碗の編年

付図5～7に示したように大きくはI～III期に分け、III期はさらに4時期に細分した。I期はS K011の碗A<sub>1</sub>から最も古いと考えた。II期は矢ノ岡遺跡S B04を構成するS P01出土の瓦器碗からI期とIII期の間に位置づけた。III期はそれぞれの遺構出土の碗と瓦器が存しないことからII期の次とした。

III-1はS K010出土の碗A<sub>2</sub>から他の2～4時期よりも古いとした。III-4は切り合い関係において切る側であるS D08を標識遺構とし、またそれと遺物タイプの種類が同一傾向にあり、遺構配置上からも同時併存が考えられるS D02砂質土層をIII-4の標識遺構に加えた。III-2はS D08に切られる側のS D010・09を標識遺構とした。III-3は層位的にS D02砂質土層に先行するS D02黒色土層を標識遺構とした。このうち、III-2・3・4はその序列化において推測を混じえたり、標識遺構を複数にししたりしている点は、根拠薄弱の謗りを免れないであろう。ただ、切り合い関係にあるS D010とS D08の先後関係は誤りないものである。

皿は、各時期毎に種々のものがあるが、全体的には小型化傾向にある。I・II期で口径9.5cm、III-3で7cmである。胎土・色調から、I期のものは0.5mm以下の砂粒を含みにぶい褐色を呈するが、II・III期のものは1mm以上の砂粒を含み橙色気味である点で区別できる。

しかし、技法において時期差が最もよく伺える。I期ではヘラ切り後ナデを加える。一方、わずかであるが糸目の細かい回転糸切りの皿Oがある。II期はナデを加えずヘラ切りのままである。III期は糸切りのものが一定の比率で使用され始める。一方、ヘラ切りのものはやや荒いが均一性のあるものが多量に使用されるようになる。III-1は回転糸切りの皿Mが中心的で皿A・Dは少ない。III-2は皿A・C・Mがあるが、皿Aの量が初めて中心的となる。III-3はIII-2のものに加えて、左回転のヘラ切りで丁寧なつくりの皿B、胎土精良で静止糸切りの皿Lが突然に現われる。III-4は皿B・Lは漸減するが、ヘラ切り・静止糸切り・回転糸切りのものが並存する。

杯は、I・II期ではみられない。III-Iで、ヘラ切りで体部が直線的に開く杯C<sub>3</sub>があらわれる。III-2では、皿Aと技法を共通にする杯A、皿Lと技法を共通にする杯B、回転糸切りの杯Dが新たに現われる。III-3・4は量に増減があるが、タイプの種類に変動はない。

碗は、I期では内外黒色の黒色土器A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>がある。II期では断面三角形の低い高台をもつ瓦器碗がある。III-1で未だ黒色土器がある。III-3では瓦質土器碗が現われる。

各期の絶対年代は、I期は黒色土器A<sub>1</sub>から平安時代後半とする。II期は瓦器碗から13世紀後半とする<sup>(1)</sup>。III期はIII-4で共伴する白磁皿・青磁碗が14世紀中葉であり、魚住窯のこね鉢が14世紀のものであることから14世紀中葉とする。

v) 盤・挿鉢・甕・鍋・釜について

土師質土器の中・大型品には、盤・播鉢・甕・鍋・釜がある。甕は点数が非常に少なく、ここで出土しているのは平安時代のもののみである。編年表では、これらも取り上げたがⅠ・Ⅱ期のものが出土していないため不十分なものとなっている。

ところで、鍋は胎土や形態から搬入品の可能性のあるものが区別できる。多くは、胎土中に相対的に大きい砂粒を含み、粘土の接合痕を消さずに残し、全体的に荒いつくりである。しかし、鍋C・Dは砂粒が相対的に小さく、焼成も堅致である。形態も口縁部を直角に屈曲させて水平にするなど、系譜を異にするものである。

盤の機能は、明瞭な使用痕を残さないために確かなことは分らない。ただ、外面は赤褐色で本来の色調を保っているが、口縁端を境に内面は肌荒れを受け色調もにぶい黄褐色を呈している。大型品であるために中に水などの重量物を入れると破損するおそれが強いことから、ここでは灰を入れた上に炭を置くという火鉢の可能性を示しておく。

## 2) 須恵質土器と陶器

須恵質土器と陶器には、魚住窯のこね鉢(S K 020・S D 02砂質土層・S D 08)、備前焼の播鉢・甕(S K 024・043・S D 02黒色土層・砂質土層・石積み遺構間・S D 08)、常滑焼甕(S D 07)、瀬戸皿(S D 02砂質土層)がある。このうち、S D 02砂質土層とS D 08出土のこね鉢(632・697)はともに魚住窯の製品で時期は14世紀のものである<sup>(2)</sup>。S K 043・S D 02黒色土層・砂質土層出土の備前焼播鉢(550・579・633)はともに間壁忠彦・葎子両氏の編年<sup>(3)</sup>のⅢB期に相当すると考えられる。絶対年代は同編年によれば14世紀中葉である。S D 07出土の常滑焼甕(671)は口縁部が「J」状の受口を呈することから赤羽一郎編年の第Ⅲ段階の前半期に相当する<sup>(4)</sup>。同期の絶対年代は1250～1300年とされている。

S D 07は13世紀で若干古い、ほかのS D 02黒色土層・砂質土層・S K 08は14世紀中葉を中心とするものとしてよいであろう。なお、S D 07は他の遺物や陶器に耐久性があることを考えると14世紀のものとするのが妥当であろう。

以上のもの以外に、中世の陶器としては亀山焼甕・信楽焼破片・瀬戸焼おろし皿が出土している。

## 3) 輸入陶磁器

輸入陶磁器と考えられるものには黒釉陶器・白磁・青磁がある。黒釉陶器は3点出土している。R-10第4層の椀(775)は黒釉の上に薄く褐色釉をかけるために、逆に黒色が点状に浮いてみえる。いわゆる禾目天目茶椀である。体部の開きは相対的に小さい。黒釉のにじみは暗赤褐色を呈する。胎土は微小な気泡を含む。色調は淡黄色である。優品であることから輸入品と考えられるが、瀬戸焼の可能性も否定できない。906-2は小片であるが胎土は密で断面の色調は灰色である。この2点は底部の高台外側の水平な部分が広いことから14世紀前半とするのがよい<sup>(5)</sup>。

次に、主な遺構出土の白磁・青磁について既往の編年案によってその年代を考えたい。S D 02

砂質土層出土の白磁皿(634)は太宰府跡の編年<sup>(6)</sup>で無高台のものうち、底部径が大きく内面底面界に1条の沈線状のものがある点からIX類とするのが適当であろう。青磁碗のうち639は体部外面に鎬蓮弁を有することから同編年の龍泉窯系碗I-5bに相当すると考えられる。SD08出土の青磁碗699は高台畳付および同内面が露胎である点、高台外面下端を面取りする点から同編年の龍泉窯系碗I-7に相当すると考えられる。SD02砂質土層出土の他のものは時期決定ができないが、残りの634・639は太宰府跡の編年における絶対年代の下限はともに14世紀中葉である。このことからSD02の埋没年は14世紀中葉としたい。SD08出土の699も同編年の14世紀中葉である。

包含層第4層出土の866・868・869・870・902・903・904・905・906-1は、すべて絶対年代の下限は14世紀中葉とすることができる。年代の分かるもので、これより新しいと考えられるものはない。

#### 4) 土器類の材質別・機能別比率

最初に、主な遺構・包含層出土遺物について器種別の点数・比率を示した(表80)。次に、この表をもとに材質別の比率を算出した(表81)。個体数でみると、土師質土器が97%余を占め、陶器・磁器がそれぞれ1%前後、瓦質土器が0.5%前後である。これは遺構平均・両包含層に共通する。破片数の場合は、陶器の体部片が算入されたことにより陶器は2%を越え、一方土師質土器は97%を切っている。このことは、土師質土器は断然に多いが、瓦質土器・陶器・磁器は微々たるものであるということであって、比率が非常に小さい瓦質土器・陶器・磁器についてその多少を問題にするには不適當な表であるといえよう。

機能別の個体数の比率をみよう(表82)。遺構平均と両包含層で、供膳具が圧倒的に多く、次いで煮沸具があり、残りの調理具・貯蔵具・暖房具は微々たるものであるという傾向は共通する。ここで、一定の比率を有する供膳具と煮沸具によってその比率の多少を問題にするのは有意味なことである。すなわち、SD02砂質土層とSD08は同時併存が考えられるが、両者における供膳具と煮沸具の相異は対照的である。SD02砂質土層の供膳具の比率は比較的高いが、煮沸具は3遺構のなかで最も低い比率である。一方、SD08の供膳具は75.00%と非常に低いが、煮沸具は20.00%とあるように他遺構から突出して高い比率である。両者は同時併存しているのであるから、両者はまさに補完的な関係にあるといえよう。さらに言えば、SD08は厨房色が、SD02は母屋色が強く、両者が揃うことでまとまりのあるものになるといえよう。このことは、SD08に調理具の、SD02に暖房具の比率が高いこととも関連しているものと思われる。

#### 5) 赤・白の皿・杯について

1) 土師質土器の皿・杯・碗の分類で、皿・杯には赤と白の区別があることを指摘した。ここでは、その区別の意味についてさらに検討を加える。

主な遺構・包含層の器種・タイプ別の赤・白比率を示した(表84)。この表を使って主な遺構・

表80 中世土器類器種別点数・比率

	土師質土器 (椀は黒色土器・瓦質土器を含む)																瓦質土器				亀山焼			
	皿		杯		椀		盤		摺鉢		甕		鍋		釜		鉢		釜		瓦山焼			
	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%	比率%
S D02 砂質土層	86 14.26	70 21.15	423 70.15	236 71.30	0	0	18 2.99	5 1.51	6 1.00	2 0.60	0	0	1 0.17	1 0.30	24 3.98	3 0.91	6 1.00	3 0.91	0	0	0	0	0	0
S D08	29 15.51	29 29.00	112 59.89	45 45.00	0	0	3 1.60	1 1.00	4 2.14	2 2.00	0	0	27 14.44	15 15.00	8 4.28	5 5.00	0	0	0	0	0	0	0	0
S D09	35 32.40	34 45.95	68 62.96	36 48.65	1 0.93	1 1.35	0	0	0	0	0	0	3 2.78	2 2.70	1 0.93	1 1.35	0	0	0	0	0	0	0	0
R-11 第4層	409 55.12	382 55.12	515 68.96	279 40.26	13 1.73	2 0.29	0	0	0	0	0	0	11 1.59	11 1.59	0	0	1	0.14	1	0.14	0	0	0	0
S-10 第4層	164 29.51	144 29.51	502 63.32	309 63.32	7 0.90	1 0.20	0	0	5 1.02	0	0	0	11 2.25	5 1.02	1 0.20	1 0.20	2	0.41	2	0.41	1	0.20	1	0.20

東播系須恵質土器	陶器										輸入陶磁器										合計		
	備前焼					常滑焼					白磁		青磁		黒釉								
	摺鉢		甕		登		甕		皿		椀		皿		椀		鉢		椀				
	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数
1 0.17	1 0.30	3 0.50	1 0.30	27 4.48	1 0.30	0	0	0	0	1 0.17	1 0.30	0	0	0	0	6 1.00	6 1.81	1 0.17	1 0.30	0	0	603 100.04	331 99.99
1 0.53	1 1.00	0	0	1 0.53	1 1.00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2 1.07	1 1.00	0	0	0	0	187 99.99	100 100.00
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	108 100.00	74 100.00
1 0.14	1 0.14	0	0	1 0.14	1 0.14	0	0	0	0	2 0.29	2 0.29	0	0	0	0	8 0.43	3 0.43	0	0	0	0	693 99.99	99.99
3 0.61	3 0.61	0	0	0	0	0	0	1 0.20	1 0.20	0	0	2 0.41	2 0.41	0	0	3 0.61	3 0.61	0	0	0	0	488 99.96	99.96

表81 中世土器類材質別出土比率

(破片数)	土師質土器	瓦質土器	陶器	輸入陶磁器
S D02 砂質土層	92.55	1.00	5.15	1.34
SD08	97.86	0.00	1.06	1.07
S D09	100.00	0.00	0.00	0.00
遺構平均	96.80	0.33	2.07	0.80
(個体数)	土師質土器	瓦質土器	陶器	輸入陶磁器
S D02 砂質土層	95.77	0.91	0.90	2.41
S D08	97.00	0.00	2.00	1.00
S D09	100.00	0.00	0.00	0.00
遺構平均	97.59	0.30	0.97	1.14
R-11 第4層	98.85	0.14	0.28	0.72
S-10 第4層	97.32	0.61	1.01	1.02

表82 中世土器類機能別出土比率

(個体数)	供膳具	煮沸具	調理具	貯蔵具	暖房具
S D02 砂質土層	94.86	1.21	1.21	0.30	2.42
S D08	75.00	20.00	3.00	1.00	1.00
S D09	95.95	4.05	0.00	0.00	0.00
遺構平均	88.35	8.35	1.72	0.76	1.14
R-11 第4層	96.39	3.32	0.14	0.14	0.00
S-10 第4層	94.05	3.68	1.63	2.03	0.20

表84 遺構・包含層別器種・タイプ別土師質土器(皿・杯)赤・白比率(1)

遺構名 包含層名	器種	タイプ別	赤		白		合計個体数 %	S D07	皿	赤			白					
			個体数 %	個体数 %	個体数 %	個体数 %				個体数 %	個体数 %	個体数 %	個体数 %	個体数 %	個体数 %			
SP322	皿	G	75.00	25.00	1	4	100.00	S D07	皿	A	26	0	26	100.00	0	26	100.00	
		O	0.00	100.00	1	1	100.00			B	9	0	9	100.00	0	9	100.00	
SK020	皿	A	93.94	6.06	2	33	100.00	S D07	皿	L	1	0	1	100.00	0	1	100.00	
		杯	50.00	50.00	1	2	100.00			M	-	-	-	-	-	-	-	
SK024	皿	A	100.00	0.00	5	5	100.00	S D07	皿	N	1	0	1	100.00	0	1	100.00	
		杯	55.56	44.44	4	9	100.00			杯	A	14	15	29	100.00	15	29	100.00
SK025	皿	A	87.50	12.50	1	8	100.00	S D08	皿	A	15	6	21	100.00	6	21	100.00	
		C	0.00	100.00	1	1	100.00			B	5	3	8	100.00	3	8	100.00	
		N	50.00	50.00	3	6	100.00			杯	A	9	16	25	100.00	16	25	100.00
SK028	皿	A	100.00	0.00	6	6	100.00	S D09	皿	A	33	1	34	100.00	1	34	100.00	
		C	0.00	100.00	2	2	100.00			杯	A	19	16	35	100.00	16	35	100.00
		N	100.00	0.00	3	3	100.00			D	1	0	1	100.00	0	1	100.00	
SD02 黒色土	皿	A	100.00	0.00	3	3	100.00	R-11 第4層	皿	A	267	57	324	100.00	57	324	100.00	
		B	66.67	33.33	2	6	100.00			B	4	1	5	100.00	1	5	100.00	
		C	0.00	100.00	1	1	100.00			C	3	5	8	100.00	5	8	100.00	
		L	0.00	100.00	2	2	100.00			M	-	-	2	100.00	-	2	100.00	
SD02 砂質土	皿	A	81.48	18.52	27	27	100.00	S-10 第4層	皿	A	102	13	115	100.00	13	115	100.00	
		B	66.67	33.33	11	33	100.00			B	6	5	11	100.00	5	11	100.00	
		L	0.00	100.00	2	2	100.00			C	1	3	4	100.00	3	4	100.00	
		N	85.71	14.29	1	7	100.00			L	1	0	1	100.00	0	1	100.00	
SD02 砂質土	杯	A	56.58	43.42	33	76	100.00	S-10 第4層	杯	A	166	109	275	100.00	109	275	100.00	
		B	82.80	17.20	27	157	100.00			C <sub>1</sub>	-	-	3	100.00	-	3	100.00	
		D	100.00	0.00	3	3	100.00			B	6	16	22	100.00	16	22	100.00	
										D	9	0	9	100.00	0	9	100.00	

表83 遺構・包含層別土師質土器(皿・杯)赤・白比率

遺構名 包含層名	赤	白
SP322	3 60.00	2 40.00
SK020	32 91.43	3 8.57
SK024	10 71.43	4 28.57
SK025	14 73.68	5 26.32
SK028	14 70.00	6 30.00
SD02 黒色土層	55 56.12	43 43.88
SD02 砂質土層	226 74.10	79 25.90
SD07	62 69.66	27 30.34
SD08	34 45.95	40 54.05
SD09	53 75.71	17 24.29
遺構全体	503 69.00	226 31.00
R-11 第4層	495 75.69	159 24.31
S-10 第4層	303 67.33	147 32.67

表85 遺構・包含層別器種・タイプ別土師質土器(皿・杯)赤・白比率(2)

遺構名 包含層名	皿					杯		
	A	B	C	L	N	A	B	D
SK024	赤					赤	白	
SK025	赤	白			白	赤	白	赤
SK028	赤				白	赤	白	赤
SD02 黒色土層	赤	赤	白		白	赤	白	赤
SD02 砂質土層	赤	白	赤	白	白	赤	白	赤
SD07	赤	赤	赤	白	赤	赤	白	赤
SD09	赤					赤	白	赤
R-11 第4層	赤	白	赤	白	赤	赤	白	赤
S-10 第4層	赤	白	赤	白	赤	赤	白	赤

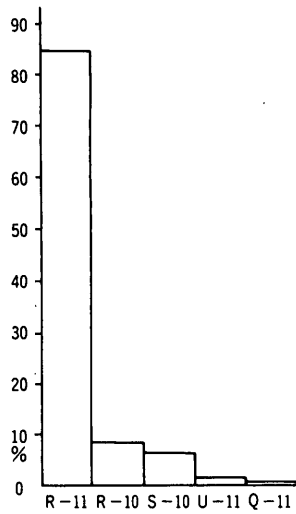


表86 第4層土壁グリッド別出土比率

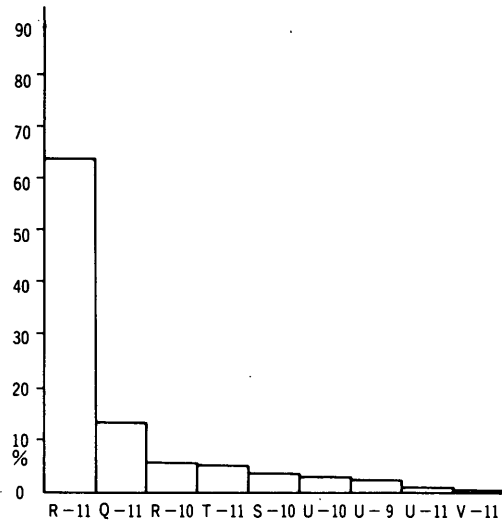


表87 第3層土壁グリッド別出土比率

グリッド番号		R-11	S-10	S-11	T-8	T-10	T-11	U-9	U-10	V-8	V-10	合計
第3層	400-900	18g (1.80%)		300 (30.06)	46 (4.61)		321 (32.16)	35 (3.51)	15 (1.50)	218 (21.84)	45 (4.51)	998 (99.99)
	300-800											
第4層	200-700	541g (46.80%)	615 (53.20)									1156 (100.00)
	100-600											
第5層	0-500	48g (18.82%)	25 (9.80)	88 (34.51)		94 (36.86)						255 (99.99)
	400-900											

表88 鉄滓グリッド別出土比率

包含層毎の赤・白比率を表にした(表83)。それによると、遺構全体では赤：白=69%：31%である。赤が圧倒的に多い。これは、遺構全体の特徴であるといえよう。

この比率を基準として個々の遺構をみると、S K020は赤：白=91%：9%で赤が断然多い。一方、S D08は赤：白=46%：54%で白の方が赤よりも高比率である。この2例の意味を探るために、この2例以外の、平均的な比率を示す遺構・包含層について、皿・杯の各タイプがそれぞれ一定の赤・白比率をもつものかどうか考えてみたい。もし一定の比率をもつものであれば、上の2例が時期差によるものか、遺構の性格からくるものかなどについて一つの仮説を示すことができよう。

2例を除いた遺構・包含層についてタイプ毎の赤・白比率を表にした(表85)。

皿Aは赤が81~100%を占め、安定的な比率をもつといえよう。

皿Bは赤が55~100%の間を動き、バラツキがあるといえよう。

皿Cは白が50~100%の間を動き、バラツキがあるといえよう。

皿Lは赤が100%を占める場合、白が100%を占める場合があり、バラバラである。

皿Nは赤が50~100%の間を動き、バラツキがあるといえよう。

杯Aは赤が100%を占める場合もあるが、赤・白が相半ばする場合が多いということで安定した比率をもつといえよう。

杯Bは赤が17~83%の間を動き、バラツキがあるといえよう。

杯Dは赤が60~100%を占め比較的安定しているといえよう。

安定した比率をもつ皿A・杯A・Dのうち絶対数の多い皿A・杯Aを基準に、その多少を考えるならば、その結果は正当であるといえよう。

S K020は、皿Aの赤が94%、杯Aの赤が50%である。この比率は上述した安定比率の範囲内にある。このことはS D020が特徴的であるということではなく、逆に典型的であるといえよう。それならば、最初に指摘した特徴はどこからくるものであろうか。皿・杯の絶対数は35個体で、そのうち杯Aが2個体あるほかは皿Aのみである。すなわち、S K020は不安定な比率をもつタイプの皿を含まずに安定的な皿Aが大部分を占めることにより、皿Aの安定的であるという特徴が直接に現れたということである。S K020は皿Aの特徴を典型的に示す遺構といえよう。

S D08は、皿Aの赤が71%、杯Aの赤が36%でともにそれぞれがもつ安定的比率の範囲からはずれている。また皿A・杯Aの絶対数はそれぞれ29のうちの21、45のうちの25個体あり、他のタイプのものが原因で白の比率が高くなったということは言えない。もし、そうならば、白の比率が高い皿Cが多くなければならないがS D08に皿Cは存しない。以上から、S D08は皿A・杯Aがそれぞれ安定的比率をはずれているために、白の比率が高くなったといえよう。この意味でS D08は特徴的な遺構であるといえよう。

白の比率が高いことは、何を意味しているのであろうか。そこで思い当るのは、4)で土器類

の機能別比率を検討した時に指摘したSD08は厨房的であるという性格である。この性格と白の比率が高いという特徴がともにSD08においてのみみられるという事実は、両者には関連があるということを示唆する。すなわち、白い皿・杯は煮沸具や調理具などの厨房関係用具と共に利用される頻度が高いということである。さらに逆をいえば、供膳具の多い母屋的性格と赤い皿・杯は関連があるといえよう。

皿・杯における赤・白の区別の存在の意味を母屋的対厨房的という図式で考えたが、これは仮説である。他遺跡の出土例との比較が必要であろう。

#### 6) 土壁の分布について

遺構から、合計281点、7890gの土壁破片が出土している。ピットではSP306・194・258・303などが多い。SP230・233・194・258は建物跡を構成するピットである。これらの建物跡はR-11・S-10グリッドに位置する。ピット以外ではSK026(1060g)・SD02砂質土層(950g)・SK025(635g)などから多く出土している。これらは建物跡と同じくR-11・S-10に位置するものである。

一方、包含層では第4層から148点、5095g、第3層からは95点、2430g出土している。これをグリッド別にみると(表86・87)、第3・4層ともR-11グリッドからの出土が圧倒的に多い。

土壁が遺構・包含層ともにR-11及びS-10グリッドで大部分が出土していることは、それが同じグリッドに所在する建物跡の上部構造に使用されていたものであるとしてよいであろう。

#### 7) 桶の側板配置について

SE01出土の桶の側板上端巾(B値)を1cm毎に区切った分布表を作成した(表89)。各クラスをそれぞれMNOPQとした。B値の平均は7.74cmであるが、その数値に近接するOPを中とし、中より大きいQクラスを大とし、中より小さいMNクラスを小とする。そして、面取り調整を有する側板に○印を付したものが表90である。

この表によると、まず、面取り調整を有する合計6枚の側板は、面取りのない側板5～6枚毎にその間に配されていることがわかる。さらに、面取り調整を有する6枚の側板は側板上端巾が大の部類に属するものと対応することに気付く。なお、No27は大ではないが、巾8.5cmで比較的大きく、また両隣りのものより大きいことにより「大」としてよいであろう。桶は、上端巾が大の部類に属し、かつ外面左右端に面取り調整を有する側板をほぼ等間隔に配置して組み立てているということである。

それでは、この配置の目的はどこにあるのだろうか。三の2の「遺物」のところでも少し触れたが、面取り調整を有するものの内No1・11・16・27は凹面を外面に置く。また、残りのNo6・21も外面側は凹面ではないが凸面でもない平坦面であるから他の4枚と同類であるといえよう。この外面左右端に面取り調整を有するものが、一方で凹面又は平坦面を外面側に置くという事実は、桶にかかってくる種々の圧力に対する一つの対応策であろうと考えられる。



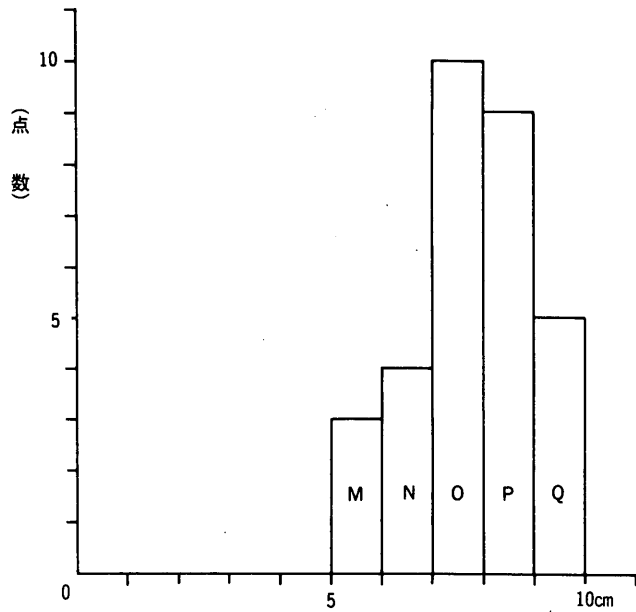


表89 桶側板B値分布表

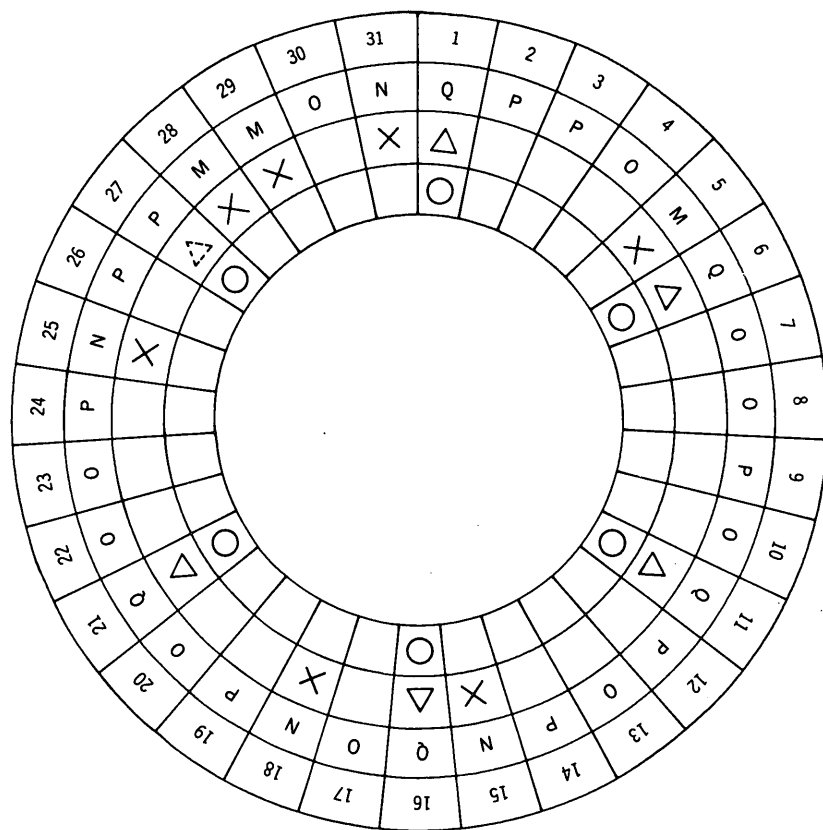


表90 桶側板分類表

側板外面面取りの有無  
側板B値の大・小  
側板B値の種類  
側板番号

- △ 側板B値が大きいもの(Q)
- × 側板B値が小さいもの(M・N)
- 側板外面に面取りのあるもの

桶はタガによって外側から強く締めつけている。この力は側板凹面を内面側に置くことで、弧状の断面をつくり出しその力を解消させる。しかし、桶内からかかる圧力はタガの締める力で対抗するのみである。そこで側板の一部を凹面が外面側にくるように置けば、桶内からの圧力は多くの内面側凹面の側板と、等間隔に配置された外面側凹面の側板同士が互いに力を吸収して、タガの締める力以上の耐力をもつようになると考えられる。

桶内からの圧力に耐えさせるために外面側凹面の側板を等間隔に配置したとする推測が当たっているか否かは、実験等による確認が必要であろう。

- (1) 本報告書の「矢ノ岡遺跡」を参照。
- (2) 片桐浩二氏の御教示による。
- (3) 間壁忠彦・葎子「備前焼ノート(3)」『倉敷考古館研究集報』第5号 1968年
- (4) 赤羽一郎『常滑焼』（ニュー・サイエンス社、1984年）
- (5) 755と906-2の黒釉椀は、福岡県教育委員会の亀井氏・福岡市教育委員会の大場氏の両氏に見ていただいた。輸入品かどうかの問題と、年代観は両氏の御教示によるものである。
- (6) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶器について」（『九州歴史資料館研究論集4』、1978年）



## IV 矢ノ岡遺跡



## IV 矢ノ岡遺跡

### 1 立地と土層序

遺跡は、試掘の結果や地形から、東一西約100m、北端が本調査区の北端部に当たる、細長い河岸段丘上に立地する。

土層序は、調査区の北半と南半で異なる。南半は、耕作土・床土・淡黄褐色土層（古代・中世遺物包含層）・黄褐色粘質土層（地山）の4層である。北半は、耕作土、中世遺物包含層（暗褐色粘質土層・茶黒色粘質土層の2層）・古墳時代包含層（灰黒色砂粘質土層）・地山（淡褐色砂質土層）が、場所によって厚さを種々に変えて堆積している。

南半の中世遺構は、7層上面から、古代遺構は8層（地山）上面から掘り込まれている。北半の中世遺構は、4層上面から掘り込まれている。5層上面は、古墳時代の面であるが、明確な同時代の遺構は存しない。

1. 黒色土層（耕作土）	1. 黒色土層（耕作土）
2. 暗褐色粘質土層	6. 灰黄褐色土層（床土）
3. 茶黒色粘質土層	7. 淡黄褐色土層
4. 灰黒色砂粘質土層	8. 黄褐色土層（地山）
5. 淡褐色砂質土層（地山）	

図1 矢ノ岡遺跡土層模式図（北西部・南東部）

### 2 遺構

遺構は、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡9棟、ピット数10穴、土坑6基、溝状遺構6条、塚1基、である。

#### (1) 建物跡

S B01 規模5.35×5.0m、形状は、隅丸方形の竪穴住居跡である。主軸方向はN15°Wである。深さは約6cmと浅い。削平に原因するものであろう。床面は水平であるが、同中央東寄りの部分に1.6×2.35mの不整形の低い段状の高まりがある。主柱穴は4穴、柱根跡径は、11～20cmである。主柱穴間内面積は5.94㎡で、床面積の0.22の比率である。北壁際にカマドを作り付ける。カマド平面形は、先端部が細まる「ハ」字形を呈する。両壁は、約60°の角度で内傾して立ち上がる。残存する壁内高は10cm、最大壁内巾は48cmである。壁体材は地山とは区別し難い淡黄褐色粘質土である。カマド内には3層に分けられる土が入っていた。下位2層には焼土・炭が混じっていた。

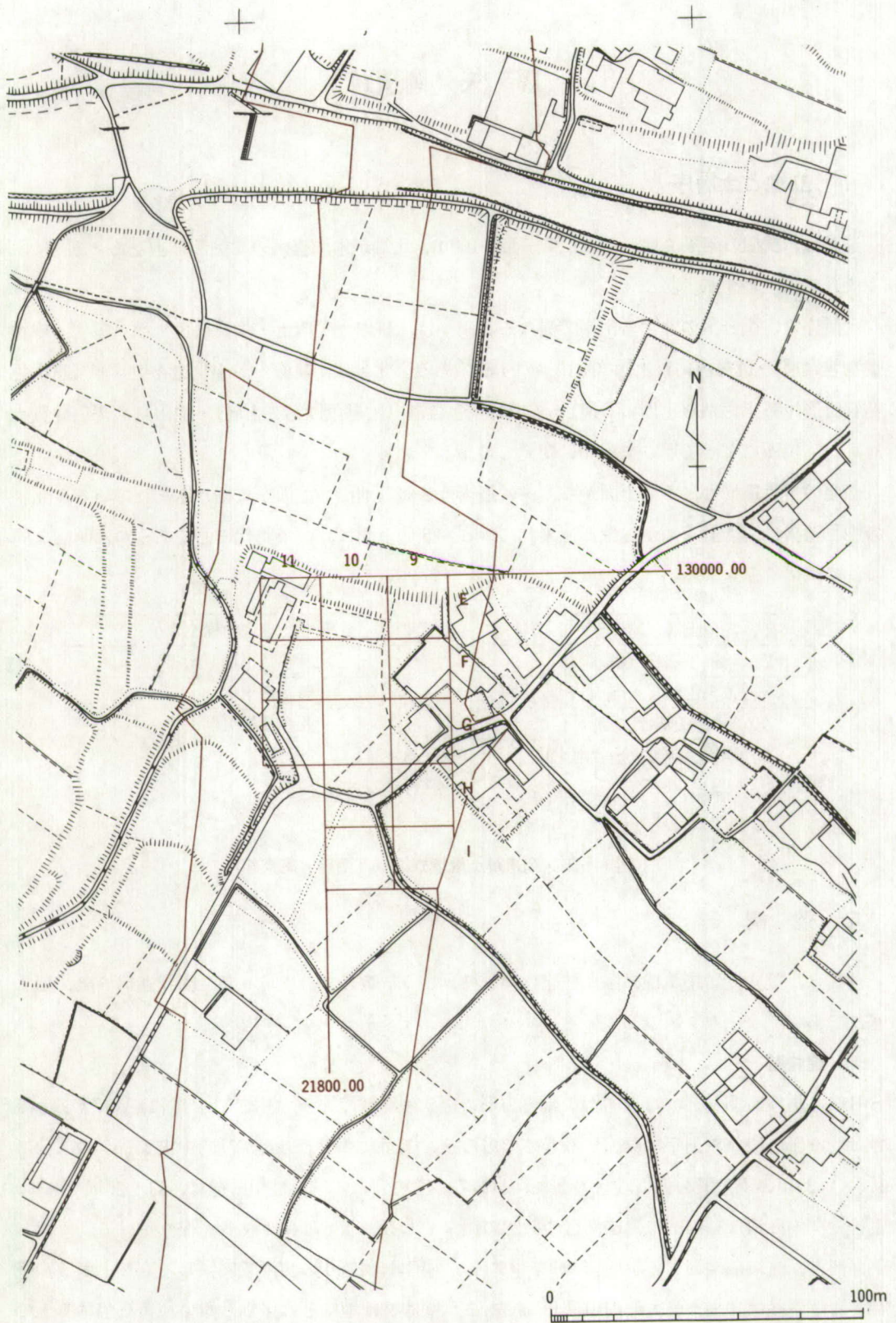


図2 矢ノ岡遺跡グリッド配置図 (1/2000)



カマド床面は、竪穴床面をやや掘り凹ませ、竪穴外へ向かって、ややレベルを上げながら、煙道口へ至る。カマド奥行きは75cmである。煙道は、巾30cm、長さ55cm、横断面形は皿形で、縦断床面はほぼ水平である。煙道内埋土は、暗灰色粘質土層である。大門遺跡の例に比すれば短い煙道である。

カマド部分を残して周溝を巡らせる。巾25～35cm、床面からの深さは2～5cmである。南西隅から竪穴外へ延びる小溝を1条もつ。竪穴とは、トンネル状に竪穴壁を抜いてつなぐ。溝巾は23cm、長さ2.75m、深さ20cm、断面U字形である。縦断床面はほぼ水平である。竪穴内周溝床面と比すれば小溝の方が段落ち状に低くなっている。

竪穴東壁北寄り床面直上から土師器鉢が1点出土した。北西ピット掘り形内から須恵器杯身片、周溝・外方へ延びる小溝（外溝）・竪穴埋土から須恵器杯身・杯蓋片が出土した。

S B 02 2×3間の掘立柱建物跡である。ピット掘り形は20cm～54cm、他の掘立柱建物跡より大である。柱根跡径は10～20cmである。ピット埋土は、暗褐色粘質土層で、S B 01の埋土と近似する。しかし、他の掘立柱建物跡のものとは明瞭に異なるものである。

S B 03 1×3間の掘立柱建物跡である。西側桁部は柱が1本多く4間である。ピット掘り形の径に大差はないが、深さは、コーナー4ヶ所のものが、検出面から約60cmと深い。他のものは10～30cmである。柱根跡の径は8～10cmである。ピット掘り形埋土は、淡褐色土層である。

S B 04 1×1間の掘立柱建物跡である。ピットの径は18～32cmである。S P 01から瓦器椀(1)土師質土器皿(1)、S P 03から土師質土器杯(1)が出土した。S P 01のものは、完形に近いものを含む点から流れ込みではなく、意図的に入れたものと考えられる。

S B 05 1×2間と推測される掘立柱建物跡である。東半は、段落ち状になっている宅地部分にある。おそらく破壊されているであろう。柱根跡の径は約10cmである。

S B 06 2×2間と推測される掘立柱建物跡である。東半は、調査区外に属する。柱根跡の径は6～12cmである。なお、建物跡北方、約2mの箇所から八稜鏡が1点出土した。

S B 07 1×2間と推測される掘立柱建物跡である。東半は調査区外に属する。柱根跡径は10cmである。なお、S B 08とは桁部が重なり合う。

S B 08 2×2間と推測される掘立柱建物跡である。東半は調査区外に属する。S B 07とは桁部が重なり合う。

S B 09 1×4間の掘立柱建物跡である。西側桁部のピットのうち、1穴は削平によって失われ、もう1穴はグリッド土層観察用畦の中にあるものと考えられる。梁部の柱間距離は約3.95mで非常に長い。床面積は27.18㎡で他の掘立柱建物跡より大きい。ピットは古墳時代包含層を掘り込む。埋土は淡褐色土層、掘り形の径は、23～38cmである。

S B 010 2×2間の方形に近い掘立柱建物跡である。対応するピットがないのは、後世の削平によって失われたものと考えられる。ピット掘り形の径は、16～30cmである。埋土は淡褐色土層で



ある。

## (2) 土坑

S K S Kの主なものの概要は、表2に示した。出土遺物は、少量であり性格がわかるものはない。I-9グリッド南端部の2基の土坑は、近現代のものである。

## (3) 溝状遺構

S D S D01~06の概要は、表3に示した。S D01はS B01に切られているから古墳時代後期以前に埋ったものである。S D02はS D01とほぼ同一の埋土である。S D04は、中世のものである。機能等がわかる溝はない。

## (4) 塚

塚1号は、「土佐神社」と称され、塚の所存する水田の地権者によって祀られていた。調査前は、径1.8m高さ0.54mの円丘状の高まりの上面に石製の小祠が置かれていた。調査は、円丘状の高まりを4分割して、層位毎に掘り下げていく方法で行った。

高まりは、ほぼ水平に推積する5層の土層から成っていた。最上層は、灰黒色土層、次の3層は、色調や土質から分層できるが、すべて中世遺物包含層である。第4層からは、土師質土器杯(3)銅銭(「熙寧元寶」及び銭種不明片)、第5層からは銅銭(「政和通寶」)が出土した。第6層は基盤土層で古墳時代の包含層である。塚内部に、内部主体等の遺構は存しなかった。

塚1号の生成過程を推測するならば、近世から現代の間において、塚1号の部分を残して、その周囲を全体的に掘り下げる工事を行った。その結果、塚1号の部分は、周囲から明確に区別される高まりとして現れることとなった。地権者によると、近代に、塚のある水田の地下げを行ったという。地下げ時に、この部分を意図的に残したことは、そこが人為を加えることを忌み、避けるべき由緒のある場所であるとの伝承があったことを証していよう。そこが「土佐神社」跡であったためであるか否かは、確かめられない。しかし、可能性を考える材料としては唯一のものである。

## (5) 段落ち

G-9・10・11グリッドに南端部を有し、巾25m以上で東一西に延びると考えられる段落ちが検出された。また、検出された段落ちの西端部には深さ0.8mの凹みも検出された。ともに、自然の作用によるものであろう。段落ち、凹みの埋土中からは、土師器(高杯・甕)須恵器(杯身・杯蓋)が少量出土した。

表1 SB計測値表

遺構名	規模	柱間距離 (床面積)	主軸方向	備考
SB01	5.35×5.0 (26.75m <sup>2</sup> )	2.68 2.75 2.20 2.20 (5.17m <sup>2</sup> )	N15°W	カマド、周溝 外方へ延びる溝1条
SB02	2×3間	1.65 1.55 1.72 1.60 1.50 1.90 1.90 1.85 1.85 1.55 (16.96m <sup>2</sup> )	N35°W	
SB03	1×3間	3.05 3.05 0.81 1.15 0.91 0.86 1.14 0.94 1.82 (11.38m <sup>2</sup> )	N37°W	
SB04	1×1間	2.20 2.32 3.96 3.91 (8.71m <sup>2</sup> )	N50°W	
SB05	(1×2間)	2.22 2.35	N32°W	
SB06	(2×2間)	1.50 1.50	N49°W	
SB07	(1×2間)	3.2 2.12	N48°W	
SB08	(2×2間)	1.70 1.74	N45°W	
SB09	1×4間	3.95 3.92 2.54 1.35 1.51 1.48 1.50 (27.18m <sup>2</sup> )	N34°E	
SB010	2×2間	1.96 2.0 2.10 2.25 (17.23m <sup>2</sup> )	N24°E	

表2 SK計測値表

遺構名	形状 平面形 断面形	規模 深さ	埋土	出土遺物
SK01	ほぼ円形 皿形	1.2 0.2	明淡褐色粘土層 暗褐色粘土層	無し
SK02	不整形 U字形	0.70・0.86 0.37	明淡褐色粘土層 暗褐色粘土層	無し
SK03	不整形 皿形	1.05・1.28 0.24	淡褐色粘土層 茶黒色粘土層	無し
SK06	不整形 皿形	1.68・3.07 0.32	黒褐色砂質土層	土師器・須恵 器ともに小片

表3 SD計測値表

遺構名	断面形	規模 巾・深さ	埋土	出土遺物
SD01	U字形	1.0・0.43	褐色粘質土層 暗褐色粘土層	土師器小片
SD02	U字形	0.4・0.15	褐色粘土層	無し
SD03	皿形	0.66・0.09	暗褐色土層	無し
SD04	U字形	1.04・0.45	淡褐色土層 黒褐色土層	土師質土器 溜鉢・鍋・釜・甕
SD05	皿形	0.59・0.14	黒灰色粘質土層	無し
SD06	皿形	0.91・0.16	茶黒色粘土層	無し

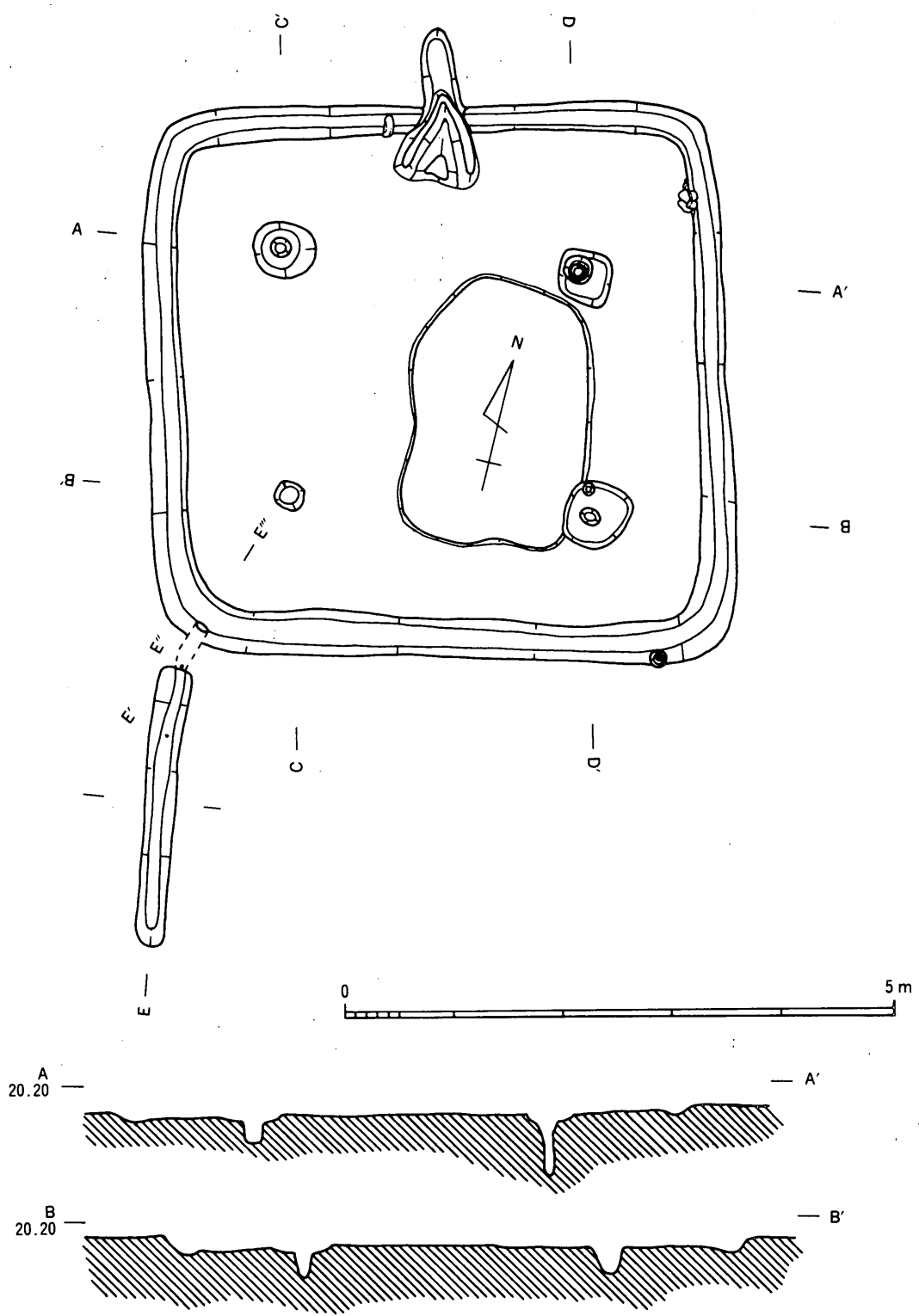


图3 SB01实测图 (1/60)

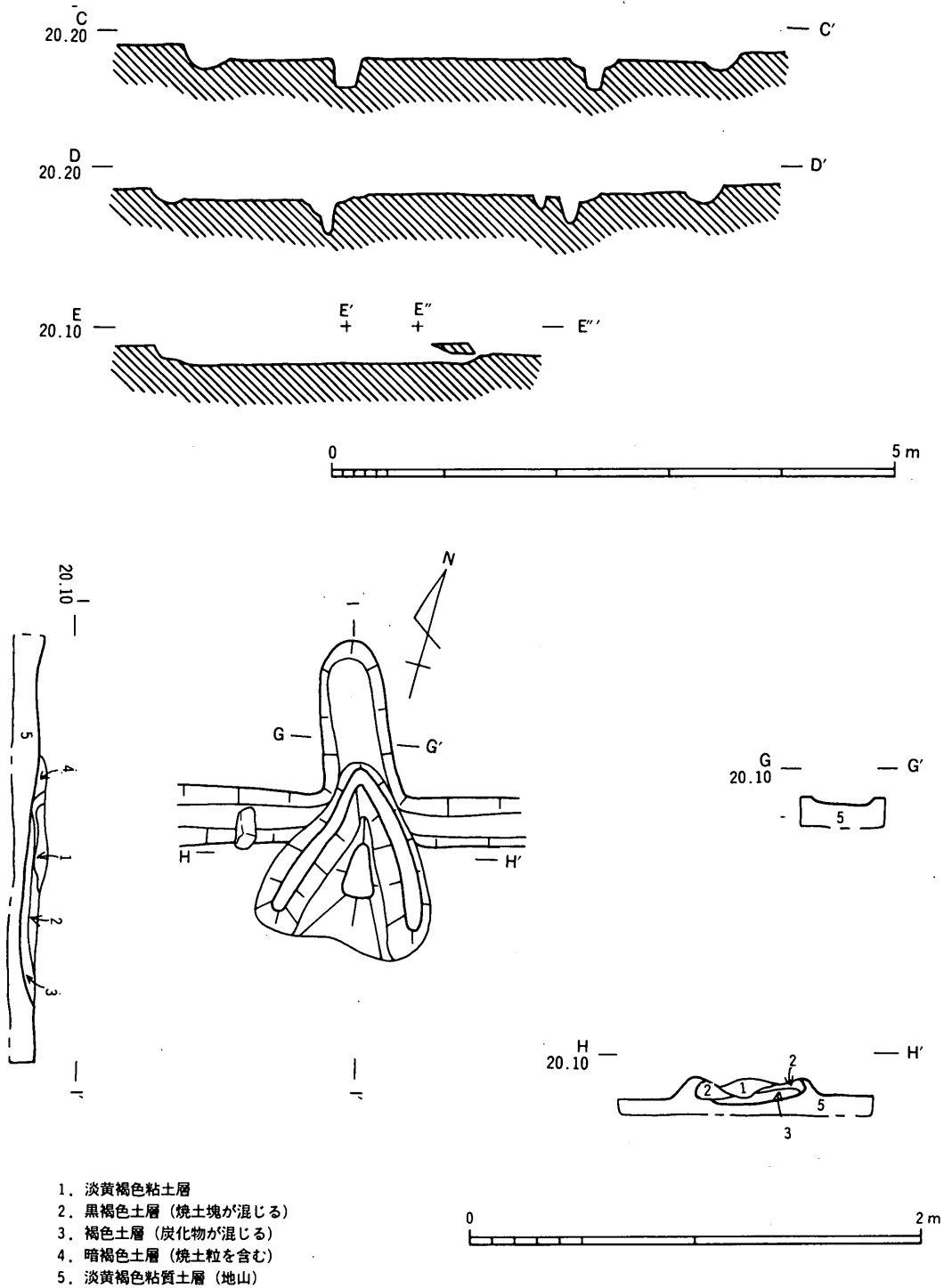


図4 S B 01・S B 01カマド実測図 (1/60・1/30)

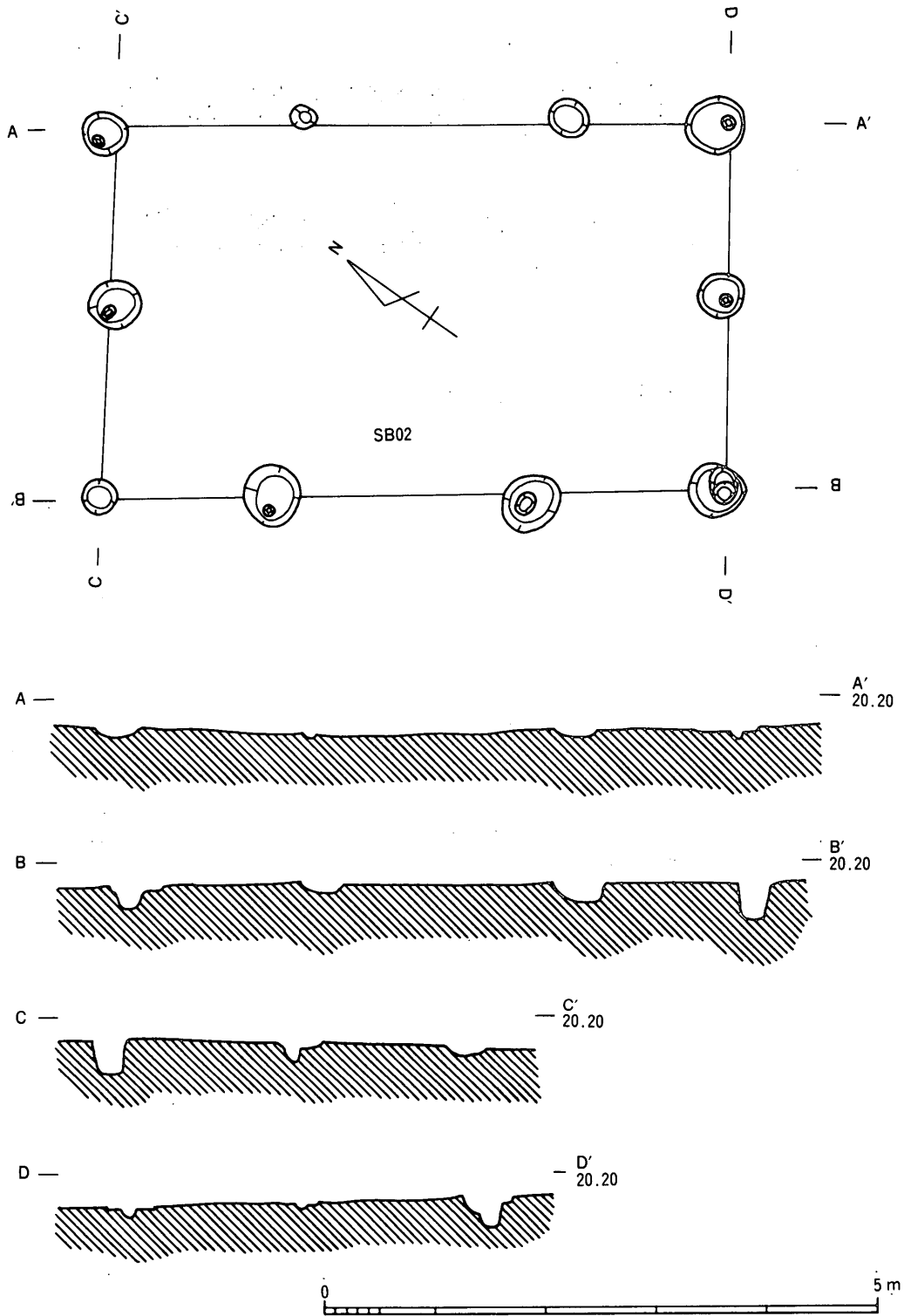


图5 SB02实测图 (1/60)

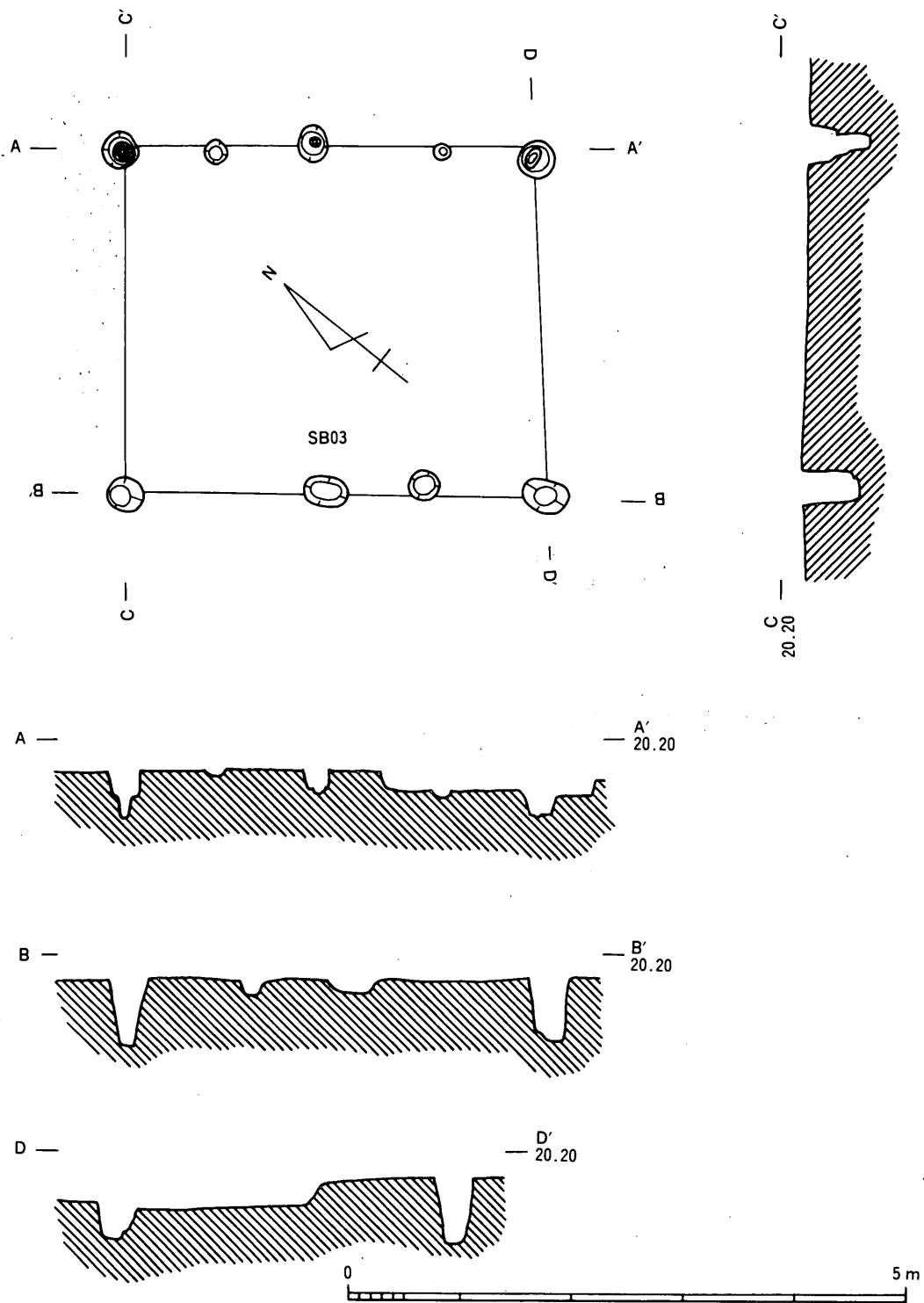


图6 SB03实测图 (1/60)

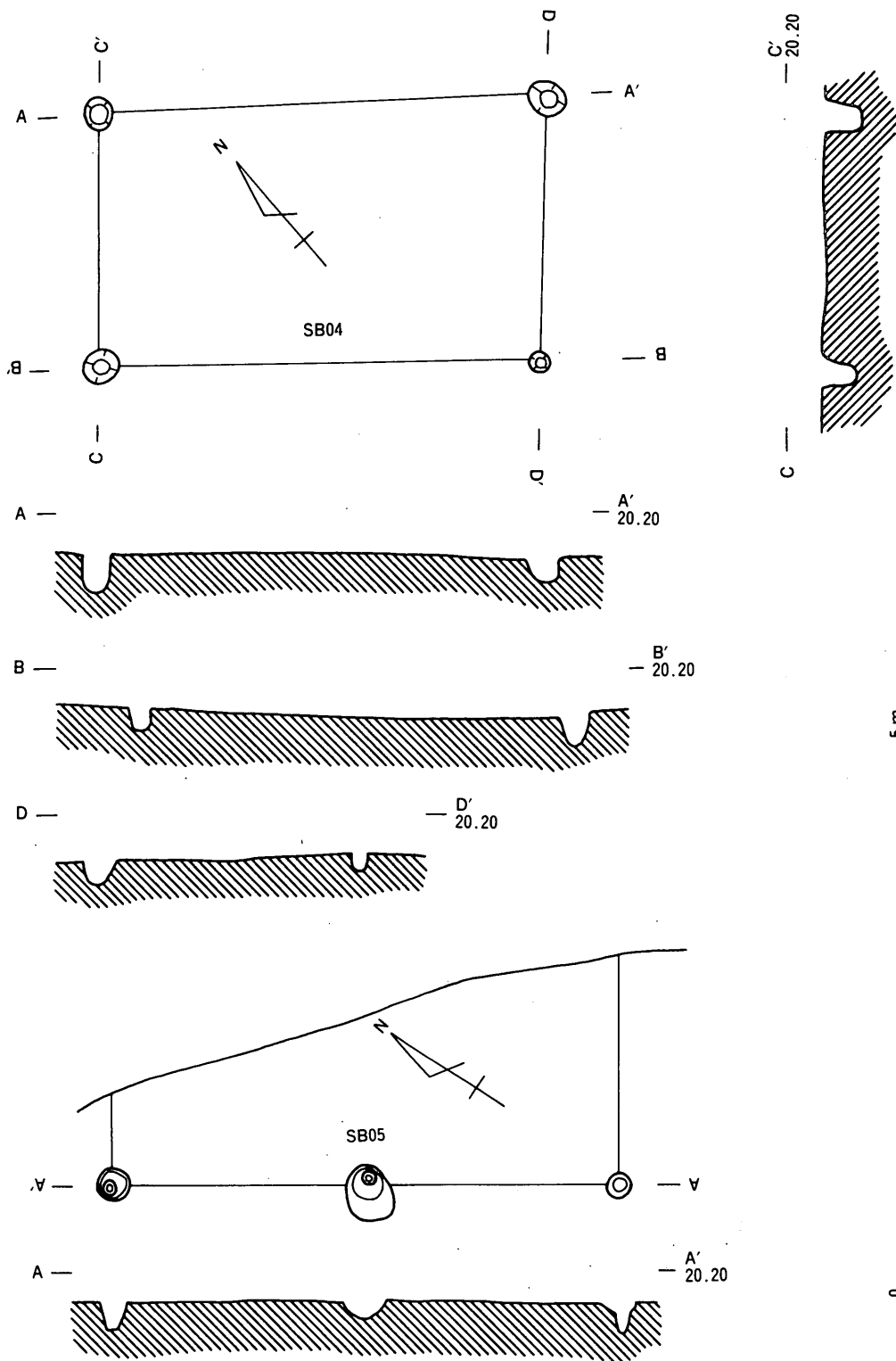


图7 SB04·05实测图 (1/60)

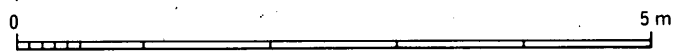
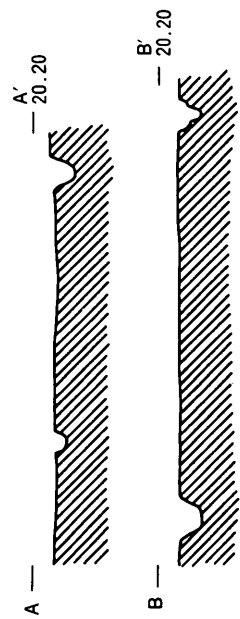
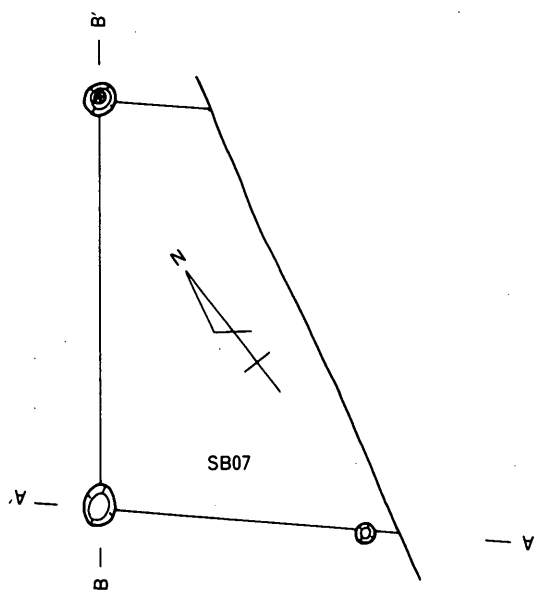
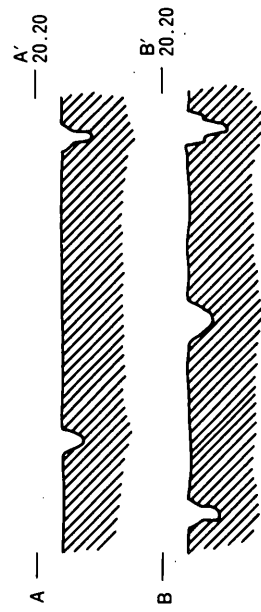
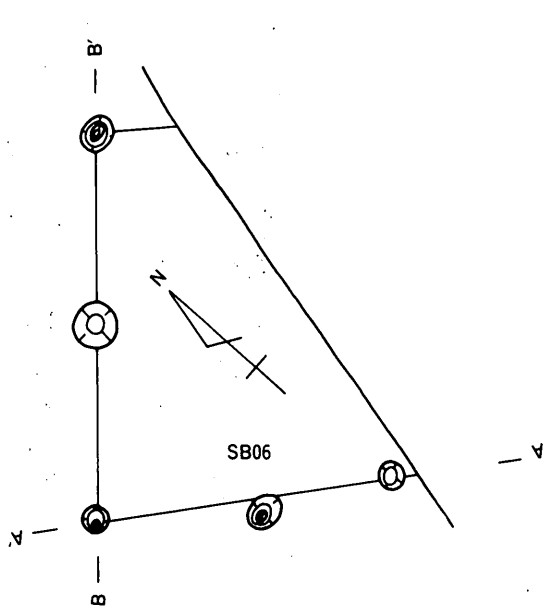


图8 SB06·07实测图 (1/60)



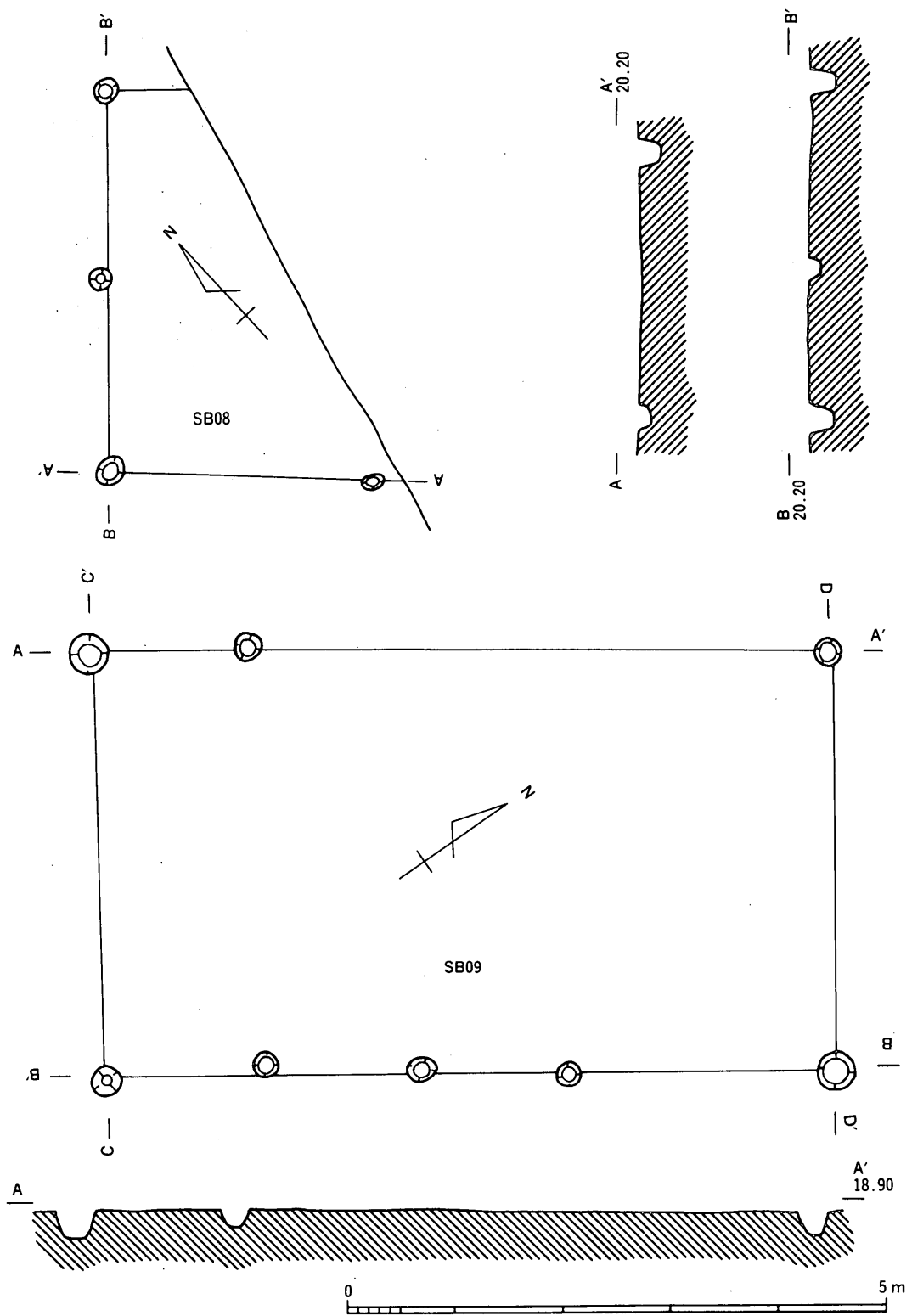


图9 S B 08 · 09 实测图 (1/60)

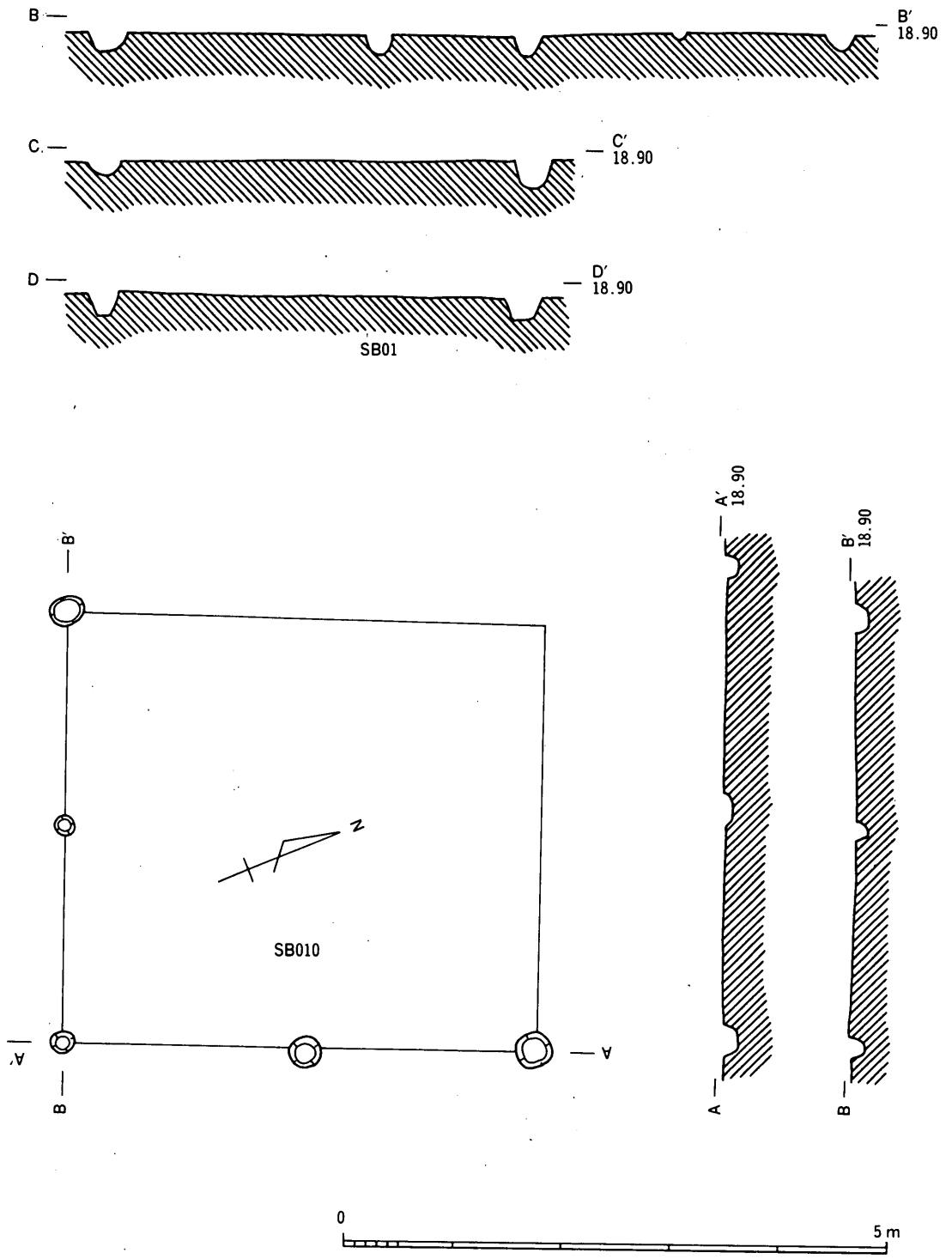
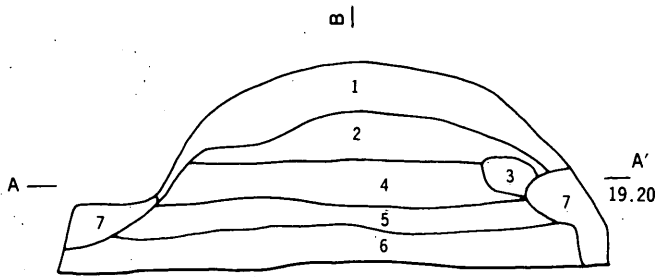
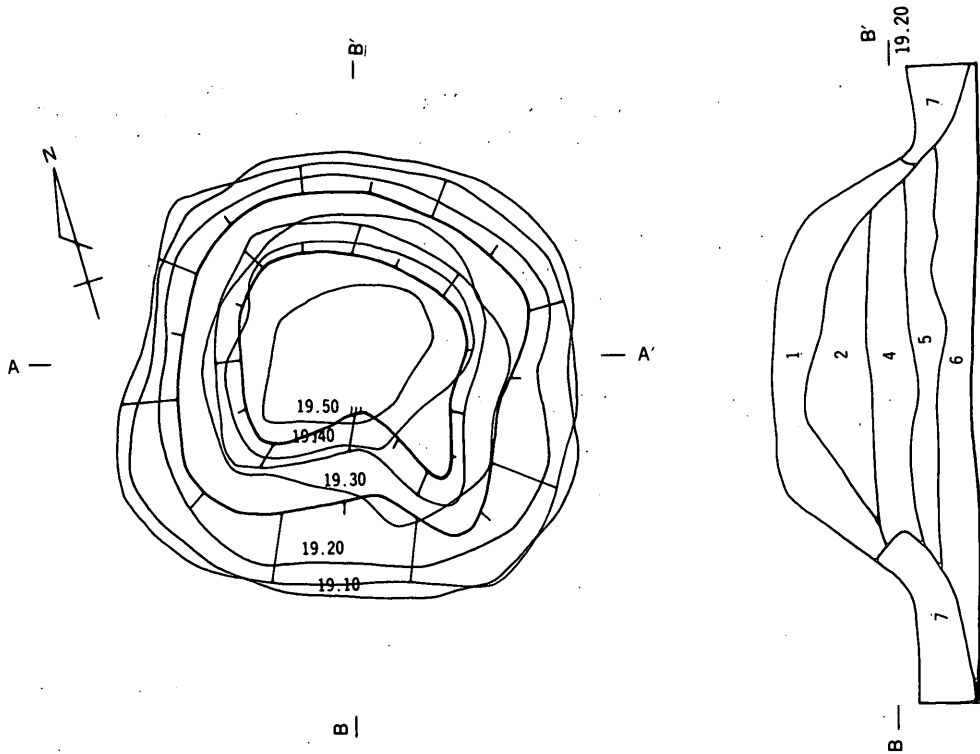
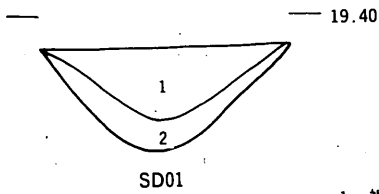
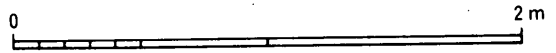


图10 S B 09 · 010实测图 (1/60)

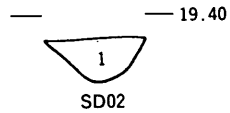


1. 灰黑色土層 (表土)
2. 褐灰色土層 (中世遺物包含層)
3. 灰褐色粘質土層 ( " )
4. 淡褐色粘質土層 ( " )
5. 褐色粘質土層 ( " )
6. 茶褐色粘質土層 (地山)
7. 黑色土層 (耕作土)

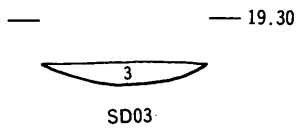
塚 1 号



SD01

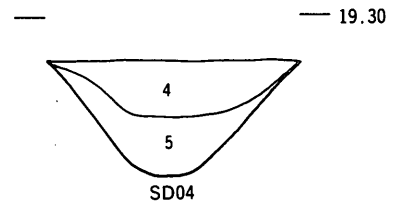


SD02



SD03

1. 褐色粘質土層
2. 暗褐色粘質土層
3. 暗褐色土層
4. 淡褐色土層
5. 黑褐色土層



SD04

图11 塚 1 号, S D 01 · 02 · 03 · 04 实测图 (1/30)

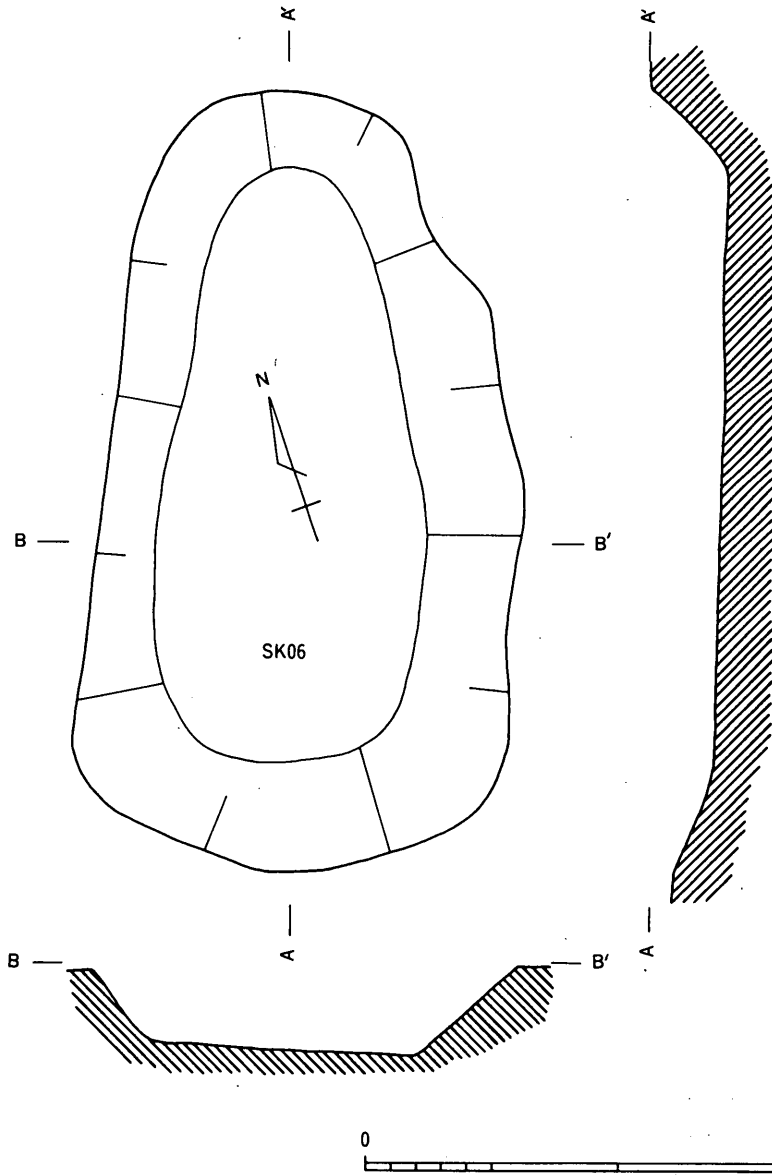
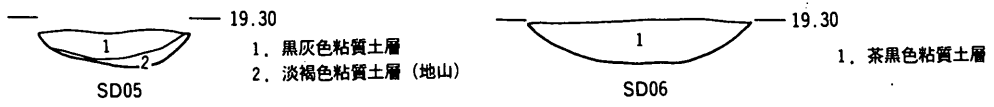


图12 S D 05 · 06, S K 06实测图 (1/30)

### 3 遺物

#### (1) 縄文土器

F-11第2層から体部片が1点出土した。内外断面とも漆黒色。外面には磨消縄文の跡、並行する多条沈線を施す。

#### (2) 土師器

F-10第4層（段落ち内）からまとまって出土した。器種は、壺・甕・高杯である。21の壺は、口頸部がラップ状に開くものである。甕は、口径9cmの小型のもの（22）と、口径14.5cmの中型のもの（23、24）に分けられる。両者とも体部中位に最大径を有し、底部は丸底である。高杯は杯部高が約7cmと深く、杯体部と底部との境に段を有して明瞭な稜線をもつもの（25）と、杯部高約5cmで杯体部と底部との境の稜線が不明瞭なもの（26）の2種がある。脚部は、前者は、杯底部につくり出している凸起を受け入れ、ゆるやかに開き、端部近くで強く開く。後者は、内面に絞り目を残し、筒状に延びた後、強く開き端部となる。

S B01からは、鉢が出土した。1は、上底気味の底部から内湾して直立気味に立ち上がる。口縁部外面には、凹線状の凹みがめぐる。口径15.3cm、器高8.1cm。2は、口径13cm、内傾する体部から直立気味の非常に短い口縁部が延びる。これは椀になる可能性がある。

#### (3) 須恵器

S B01と包含層から杯が出土した。他の器種はない。S B01出土の4は口径14.1cm、5は口径12.6cmの杯身である。3の杯蓋の口径は14.8cm。3点とも同一時期のものと考えてよいであろう。27は肩部に鋭い稜をもち、口縁端部は薄く、内傾する。28と27とほぼ同じ形態であるが、全体にぶい。31は、立ち上がりが2cmと長い。34・35はへら切りの底部に高台を貼り付ける。38・39は口径11・12cm、立ち上がりは、0.5cmと低い。40は口径8.4cmで小型である。42・43・44・45は口径11~12cm、38・39とセットとなる杯蓋であろう。

#### (4) 瓦器

6は口径14.1cm、器高4.8cm、断面三角形の低い貼り付け高台をもつ椀である。外面体部中位には指頭圧痕が2段分残る。外面灰色、内面黒灰色。S P01からは、この椀とともに、小片であるが皿も出土している。

#### (5) 土師質土器

7の皿は、口径9.3cm、器高1.4cm。底部は左回りのへら切り、体部は、直線的に外傾する。6の瓦器椀と一括されるものである。37は口径11cm、器高2cmの皿。体部はやや外湾気味に外傾する。底部の成形手法は不明。杯の9は、平底から直線的に外傾して開く体部、口径14.3cm、器高4cmである。他の杯に比して、厚く、大きい。15・16・17はともに塚1号から出土。静止糸切りの底部、体部上位は若干外湾するが全体的には直線的に開く体部、器壁は薄く、胎土は精良であ

る。36もこれと同タイプのものである。

13は片口の播鉢である。口縁端部は回転ナデによって、やや凹む面をなす。14は甕である。内傾する口縁部、端部は水平な面をなす。12は鍋である。内湾する体部からゆるく屈曲して口縁部となる。外面全体にススが付着している。11は釜である。口縁下0.5cmのところの低い鑿をつけている。

(6) 青磁

47は鎬蓮弁文を施した椀であろう。

(7) 銅鏡

I-9グリッドで、鏡面を上にして、一端をわずかに地山に埋めた状態で出土した。縁部に比較的鋭い稜を8箇所につくり出す八稜鏡である。稜部径10.3cm,内区厚2mm,外区厚2.3mm,縁部厚5mmである。鏡面は、無文で、ゆるやかな起伏があるが、ほぼ平坦であるといえる。鏡背中央には断面が先丸円錐形で、横方向の径2mmの孔をもつ紐部がある。紐部の周囲には8個の球紋がある。

内区には、唐草文様と飛鳥文様をそれぞれ2個、相対する位置に施している。内区から板状に肥厚する外区には、縁の稜毎に、3個の円形浮文を施したようであるが、鑄出しが悪かったためか、使用時に破損されたためか、

表4 塚1号出土銅銭

層名	銭種	熙寧元寶	政和通寶	不明	合計
第4層		1		1	2
第5層			1		

欠けるところが多い。縁は断面三角形である。

(8) 銅銭

塚1号から銅銭が3点出土した。北宋銭が2点ある。1点は銭種不明である。

表5 遺構別出土遺物

	土師器		須恵器			土師質土器					瓦器		瓦	銅銭	
	杯	鉢	壺	杯身	杯蓋	皿	杯	椀	播鉢	壺	鍋	釜			皿
SB01		1	1	4	1										
G-11 SP03						1									
I-9 SP04							1	1							
H-9 SP01						1						1	1		
SK03										1					1
SK04								1							
SK05							1								
塚01			2				3								3
SD04									1	1	2	4			

表6 包含層別出土遺物

	細文土器	土師器	須恵器	土師土器	瓦器	瓦質土器	備前焼	青磁	鉄製品	銅鏡
E-9第2層		6								
F-8 "		12	7							
F-9 "		110	39	1					1	
F-10 "		182	60							
F-11 "	1	77	14							
G-9 "		1	2	65	1		1			
G-10 "		31	1						1	
G-11 "		33	5							
H-9 "		13	58					1	1	
I-9 "		23	4	3		1				1
F-10第4層		198	9							
F-11 "		250	20							
G-11 "		69								
F-10第5層		74	18							
F-11 "		53								

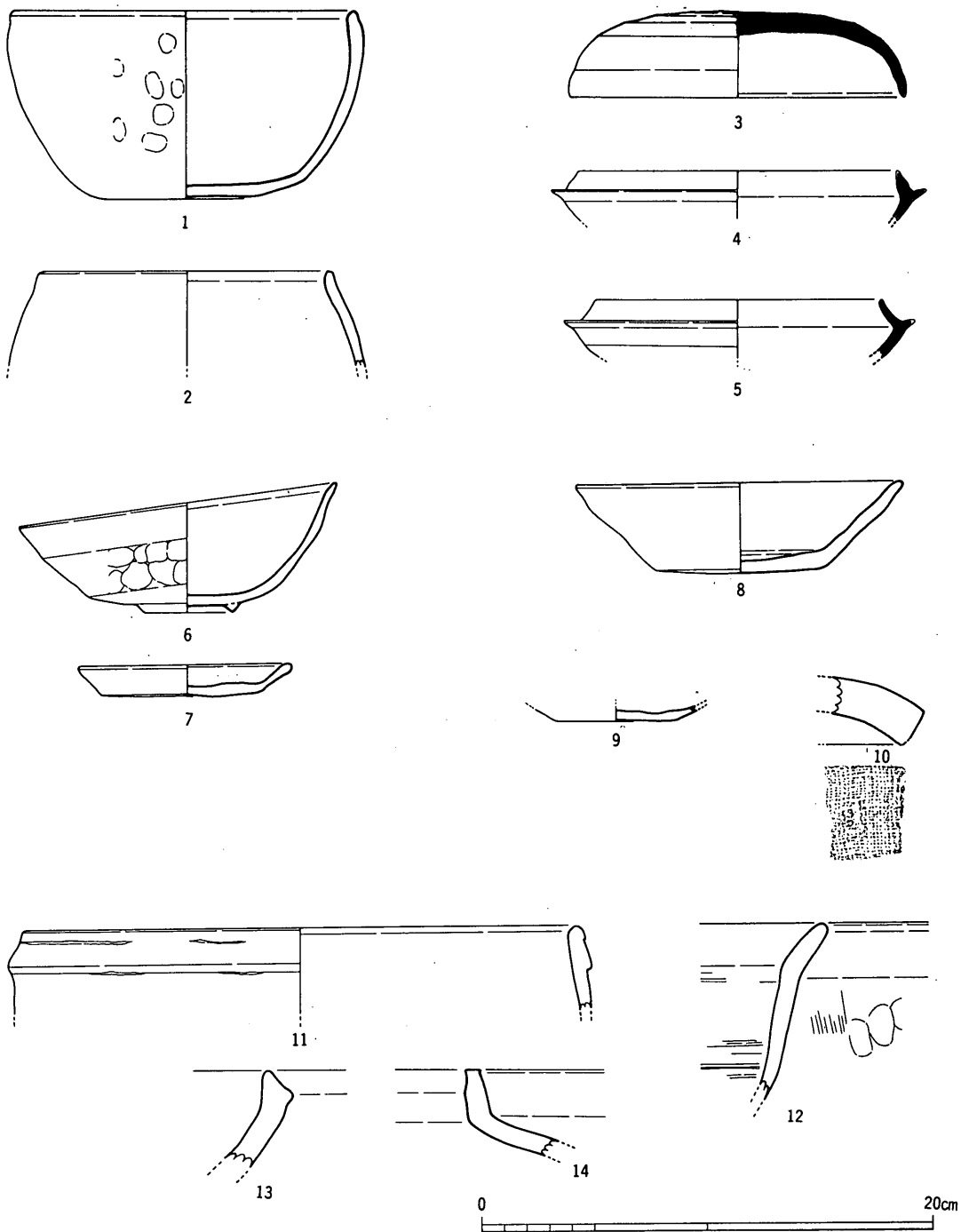


图13 SB01·04, SK03, SD04出土土器实测图 (1/3)

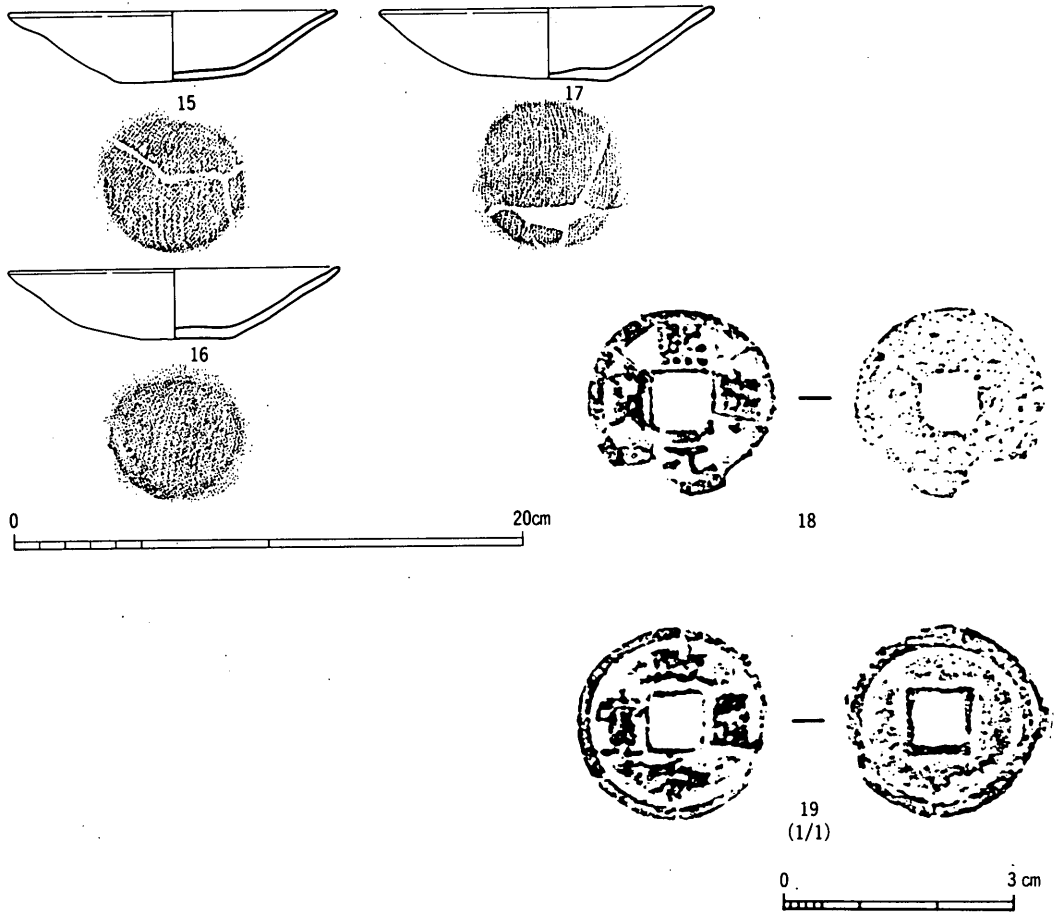


图14 塚1号出土土器実測図，銅銭拓影 (1/3) (1/1)



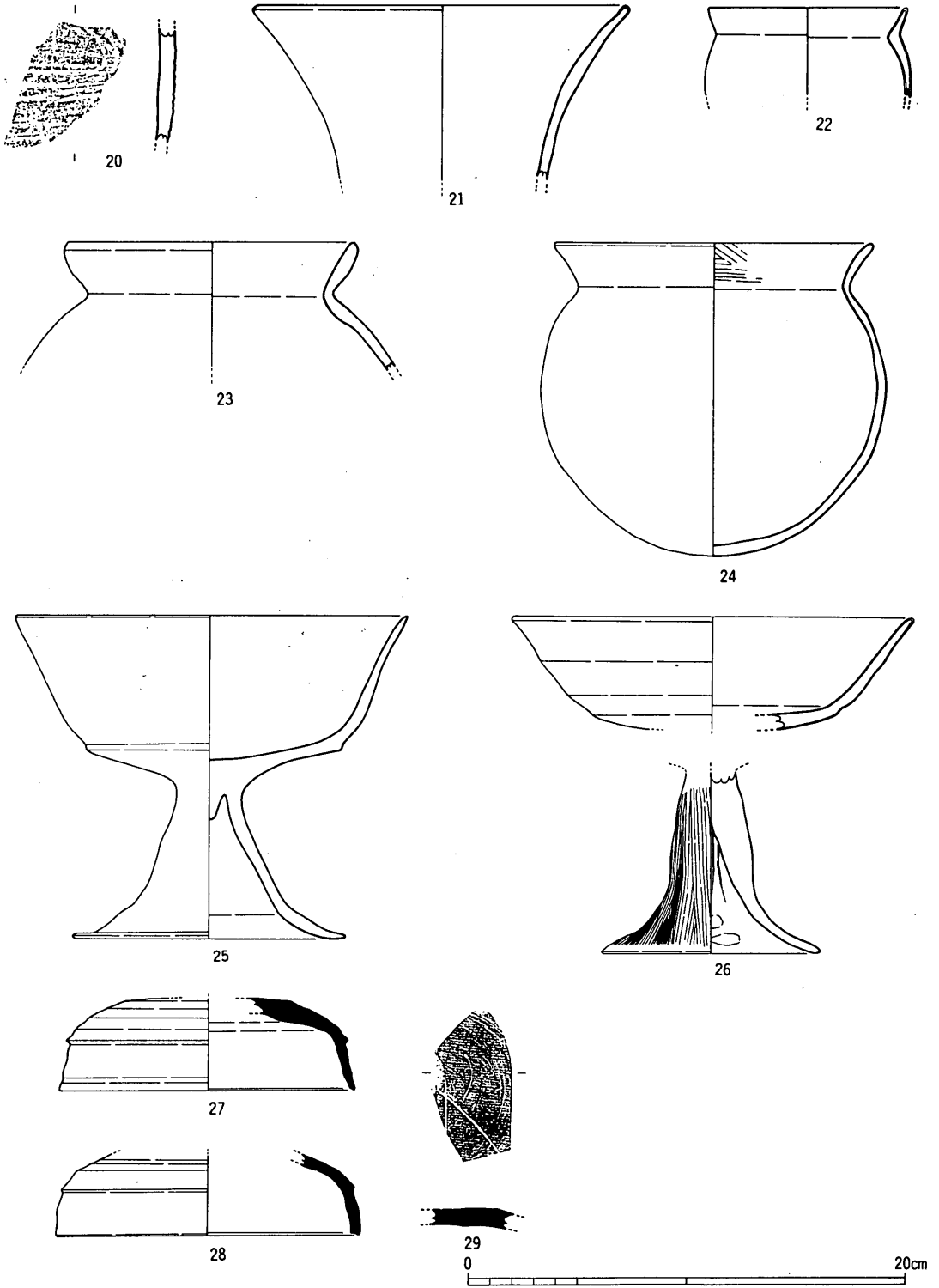


图15 F-10·F-11出土土器实测图 (1/3)

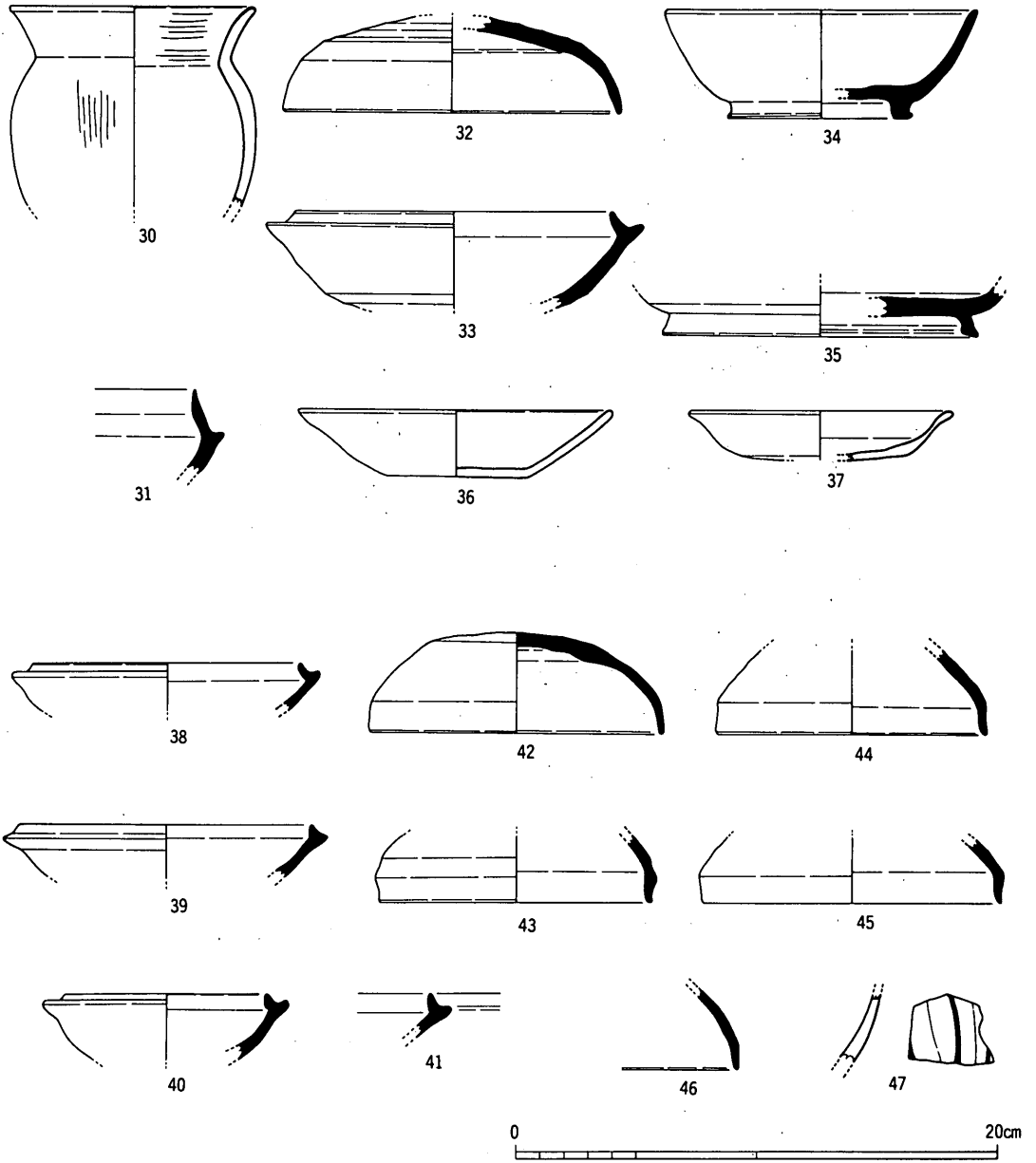
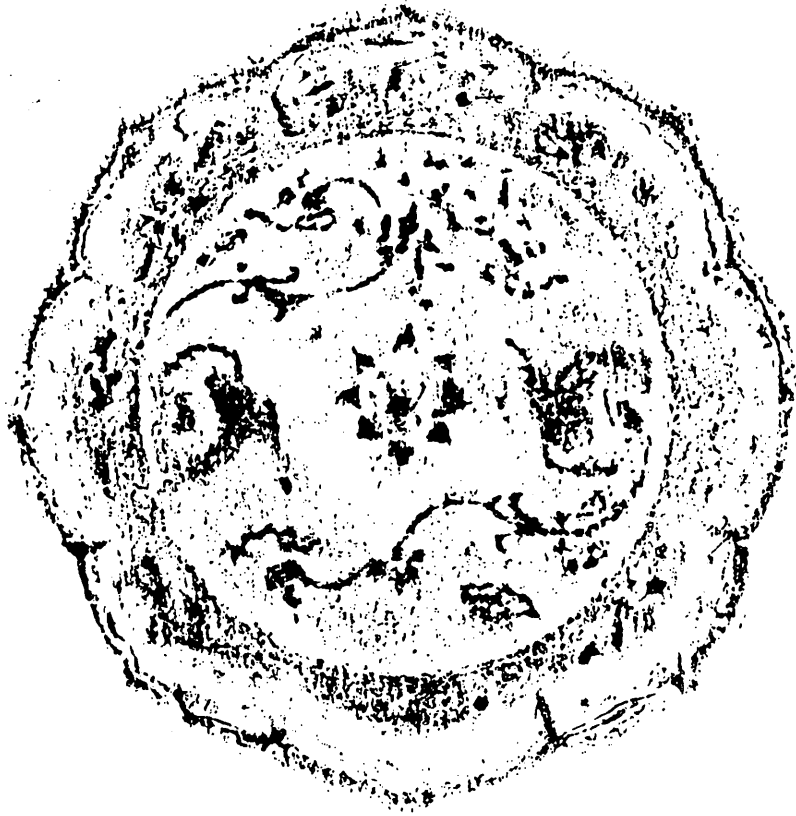


图16 F-10·F-11·G-9·H-9出土土器实测图 (1/3)



48

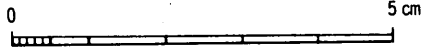


图17 1-9 出土铜镜拓影·实测图 (1/1)

表7 遺物観察表

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質	器種	口縁部	体部	底部(頂部)	胎土	色調	備考
S B01 床面上	1	土師器	鉢	回転ナデ	指頭圧痕の後ナデ	ナデ?, 肌荒れ強し	粗, 1~3mmの砂粒含む	灰色 灰褐色 淡黄色	口縁部4cm巾で2次焼成による赤変あり
S B01	2	土師器	鉢	回転ナデ	ナデ?, 肌荒れ強し	(?)	粗, 1mm前後の砂粒含む	淡黄色 灰色, 淡赤褐色 淡黄色	体部外面2次焼成を受ける
S B01 周溝	3	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	精良, 気泡跡あり	灰白色 // //	
S B01 周溝・ 小溝	4	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	(?)	並, 1mm前後の白色砂粒を含む	灰色 // //	
S B01 北西ピツ	5	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削りは受部下1cmのところまで及ぶ	密, 気泡跡あり	灰白色 // 淡黄色	
S B04 (S P01)	6	瓦器	椀	回転ナデ	内面・肌荒れ強く不明 外面・指頭圧痕の後回転ナデ	回転ナデ 高台は貼り付け	1~2mmの白色砂粒, わずかに含む	黒灰色 灰色 灰白色	
S B04 (S P01)	7	土師質土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(左)	1~5mmの白色砂粒を多く含む	淡褐色 // //	
S B04 (S P03)	8	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り?	0.5~4mmの半透明砂粒を多く含む	にぶい褐色 にぶい赤褐色 褐色	
S K03	9	土師質土器	杯	(?)	肌荒れ強し	肌荒れ強し	1mm以下の白色砂粒を含む	淡褐色 // //	
S K03	10	瓦質	平瓦	ナデ	内面・布目圧痕 外面・ナデ 側面・ヘラ削り	—	1~2mmの半透明砂粒を含む	にぶい褐色 褐色 褐色	
S D04	11	土師質土器	釜	回転ナデ	ナデ	(?)	1~3mmの白色砂粒を多く含む	灰白色 // 灰褐色	
S D04	12	土師質土器	鍋	内面・回転ナデ 外面・ハケ目の後ナデ	内面・ヘケ目の後ナデ 外面・指頭圧痕の後ハケ目, さらにナデ	(?)	0.5~3mmの半透明砂粒を少し含む	淡青褐色 黒色 淡黄褐色	外面全体にスス付着
S D04	13	土師質土器	摺鉢	回転ナデ	内面・回転ナデ, 4条以上の摺目 外面・指頭圧痕の後ナデ	(?)	1~2mmの半透明砂粒を含む	褐色 暗褐色 明赤褐色	
S D04	14	土師質土器	壺	回転ナデ	ナデ	(?)	0.5~2mmの白色砂粒を含む	淡黄褐色 // 黒色	
塚1号	15	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	1mm以下の半透明砂粒を少し含む	淡黄褐色 // //	
塚1号	16	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	2mm以下の半透明砂粒を少し含む	淡黄褐色 // //	
塚1号	17	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	1mm以下の半透明砂粒を少し含む	淡黄褐色 // //	口縁部2次焼成により赤変
F-11 第4層	20	細文土器	(?)	(?)	内面・ナデ 外面・磨消細文の後多条沈線	(?)	2mm以下の白色・半透明砂粒を多く含む	黒色 // //	
F-10 第4層	21	土師器	壺	回転ナデ	(?)	(?)	密	褐色 // 灰白色	
F-10 第4層	22	土師器	壺	回転ナデ	回転ナデ	(?)	0.5mm以下の白色砂粒を少し含む	明赤褐色 // //	
F-10 第4層	23	土師器	壺	回転ナデ	内面・ナデ 外面・ハケ目の後ナデ	(?)	2mm以下の白色砂粒を多く含む	褐色 // //	
F-10 第4層	24	土師器	壺	内面・ハケ目 外面・回転ナデ	ナデ	ナデ	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む	にぶい褐色 // にぶい赤褐色	底部外面, 2次焼成により赤変
F-10 第4層	25	土師器	高杯	肌荒れ強く調整不明	肌荒れ強く調整不明	杯底部に凸起を作り出し, 脚部に挿入して接合	2mm以下の白色砂粒を含む	淡黄褐色 // //	口縁部に黒斑あり
F-10 第4層	26	土師器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	脚部内面指頭圧痕の後ナデ 外面・ハケ目	2mm以下の白色砂粒を含む	淡褐色 // //	
F-11 第4層	27	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(右)	密	暗青灰色 // //	
F-11 第4層	28	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(右)	密, 4mmの紫灰色の砂をわずかに含む	暗青灰色 // //	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材質	器種	口縁部	体部	底部(頂部)	胎土	色調	備考
F-11 第4層	29	須恵器	杯蓋	(?)	(?)	回転ヘラ削り(左) ヘラ記号有り(交 差する2直線)	密、微小な黒色 粒を多く含む	青灰色 // //	
F-11 第2層	30	土師器	壺	内面・ハケ目 外面・肌荒れ強 し	内面・ナデ 外面・ハケ目の 後ナデ	(?)	0.5mm以下の砂 粒を含む	暗褐色 赤褐色 暗褐色	
F-10 第2層	31	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	(?)	密、微小な黒色 粒を含む	青灰色 // // にぶい赤褐色	
F-11 第2層	32	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	2mm以下の半透 明砂粒を含む	青灰色 // //	
F-11 第2層	33	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(方 向不明)	1mmの白色砂粒 を含む	灰白色 // //	生焼けである
F-10 第2層	34	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り、高台は 貼り付けた後、回 転ナデ	1~2mmの半透 明砂粒を含む	青灰色 // // 灰白色	
F-11 第2層	35	須恵器	杯身	(?)	回転ナデ	高台は貼り付け、 回転ナデ	1mm以下の半透 明砂粒を少し含 む	灰色 // //	
G-9 第2層	36	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り	密、1~2mmの 半透明砂粒を少 し含む	浅黄褐色 // //	
F-10 第2層	37	土師質土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	肌荒れのため調整 は不明	1mm以下の白 色・半透明砂粒 を含む	明赤褐色 // //	
H-9 第2層	38	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	(?)	0.5mmの白色砂 粒を少し含む	青灰色 // //	
H-9 第2層	39	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の白色 砂粒を少し含む	灰白色 // //	
H-9 第2層	40	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の白色 砂粒を少し含む	青灰色 // // 灰色	
H-9 第2層	41	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	(?)	2mm以下の半透 明砂粒を含む	灰色 // // 灰白色	
H-9 第2層	42	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mmの半透明砂 粒を含む	灰白色 // //	
H-9 第2層	43	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の半透 明砂粒を多く含 む	灰白色 明青灰色 浅黄色	
H-9 第2層	44	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の半透 明砂粒を含む	青黒色 暗青灰色 青黒色	
H-9 第2層	45	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	0.5mm以下の半 透明砂粒を含む	灰白色 // // 灰色 浅黄色	
H-9 第2層	46	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の半透 明砂粒を含む	青黒色 暗青灰色 青黒色	
H-9 第2層	47	青磁	椀	(?)	ヘラ切り?	(?)	密	内外面とも暗オ リーブ色の薄い 釉を施す 断面は灰オリーブ 色	

## 4 小 結

### (1) 遺 構

遺構の変遷を考えることでまとめとする。

遺構内出土遺物と、切り合い関係から次の4  
時期の遺構が抽出できる。

古墳時代後期以前 S D 01

古墳時代後期 S B 01

鎌倉時代～14世紀 S B 04

14世紀以降 塚 1 号

S B 01と S B 04は遺構出土遺物から、それぞ  
れ上記の時期であることがわかる。S D 01は、  
S B 01に切られていることにより、S B 01に先  
行する。塚 1 号は、遺構内遺物を包含する土層  
を切って作られたものである点から遺構内遺物  
の属する時期より後の時期のものである。

上記の遺構以外は、出土遺物、切り合い関係からは、時期を限定し難い。建物跡については、  
その主軸方向からグループ分けを行なうことで時期を考えてみたい。表 8 から次のようなグルー  
プ分けを行なった。

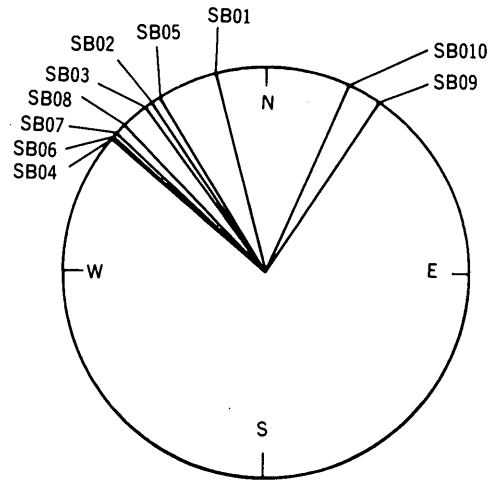
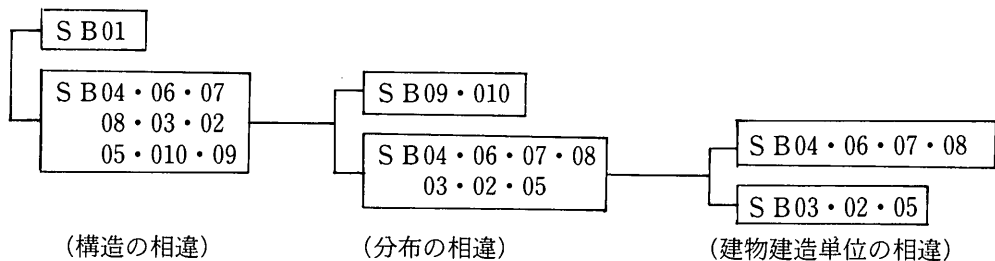


表 8 S B 主軸方向分布表



S B 01は、竪穴住居跡で他は掘立柱建物跡である。この建物構造の相違は、時期差をある程度  
は反映しているといえよう。次に主軸が東に振れる S B 09・010を別グループとした。これは、分  
布の相違を反映しているといえよう。さらに、わずかな角度の相違であるが、グループ分けを行っ  
た。その理由は難しいが、一応建物建造単位の相違と考えた。さて、このグループ分けの結果か  
ら、時期区別に役立つのは最初の構造の相違によるもののみであるが、それは、時期不明の掘立  
柱建物跡を時期的に区別するものとはなっていない。従って、主軸方向とは別な面から時期を考  
えざるを得ない。

S B 02のピット埋土は、他の掘立柱建物跡のピット埋土と異なり、逆に S B 01埋土に近似する

〔遺構〕の項参照)。S B 02及びS B 01以外の建物跡のピットの埋土はほぼ同じである。この埋土の事実からS B 02をS B 01に近い時期のものと考えたい。

S B 09・010は、古墳時代後期包含層掘り込みである。その上には、中世包含層が堆積している。中世包含層は、塚1号をつくる中世包含層が14世紀のものである点から、14世紀以前のものと考えたい。なお、ピット埋土は、S B 04を含む多くの掘立柱建物跡とほぼ同じである点から、S B 04の属する鎌倉時代～14世紀という時期と矛盾はしない。

S B 06・07・08・03・05については、時期を考える材料がない。ここでは、埋土がS B 04とほぼ同じであるという点から、これらも、鎌倉時代～14世紀の頃のものとしておく。なお、S B 07とS B 08が桁部で重なり合うように、すべて同時併存ではない。一定の時期内で先後関係がある。

次に、建物跡の大まかな時期変遷を示す。建物跡以外の遺構についても、埋土からの推測であるが、組み込んでみた。なお、上述のように、同時併存を示すものではない。

古墳時代後期以前 S D 01・02

古墳時代後期 S B 01・02・段落ち

鎌倉時代～14世紀 S B 03・04・05・06・07・08・09・010, S D 04

近世～現代 塚1号

## (2) 遺物

遺構出土の遺物の時期・年代を考えたい。S B 01出土の杯身(4・5)は、中村編年のII型式5段階、田辺編年のTK43に相当すると考えられる<sup>(1)</sup>。絶対年代は、6世紀後半としておく。S P 01出土の瓦器碗は、橋本久和氏の「高槻における中世土器の編年<sup>(2)</sup>」の第III期-2に相当すると考えたい。第III期の実年代は、13世紀代とされている。

塚1号の第4層出土の土師質土器杯3点は、大門遺跡の杯Bと同タイプのものである。同遺跡での比定に従い14世紀中葉としておく。

## (3) 遺跡の範囲

調査区南東部で検出した竪穴住居跡や掘立柱建物跡群が、調査区南東方へ広がっていることは明瞭である。調査区南西方では遺構は検出されなかった。また、同東方は段落ちになっている。以上から、遺跡は、巾50m余で北西から南東に連なる河岸段丘上に立地しているといえる。南東限は、かならずしも明瞭ではないが、河岸段丘部を囲んでみた(図19)。その部分を集落跡としての矢ノ岡遺跡の範囲と考えたい。

(1) 中村浩『和泉陶器窯の研究』(1981年、柏書房) 田辺昭三『須恵器大成』(1981年、角川書店)

(2) 高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』(1980年)

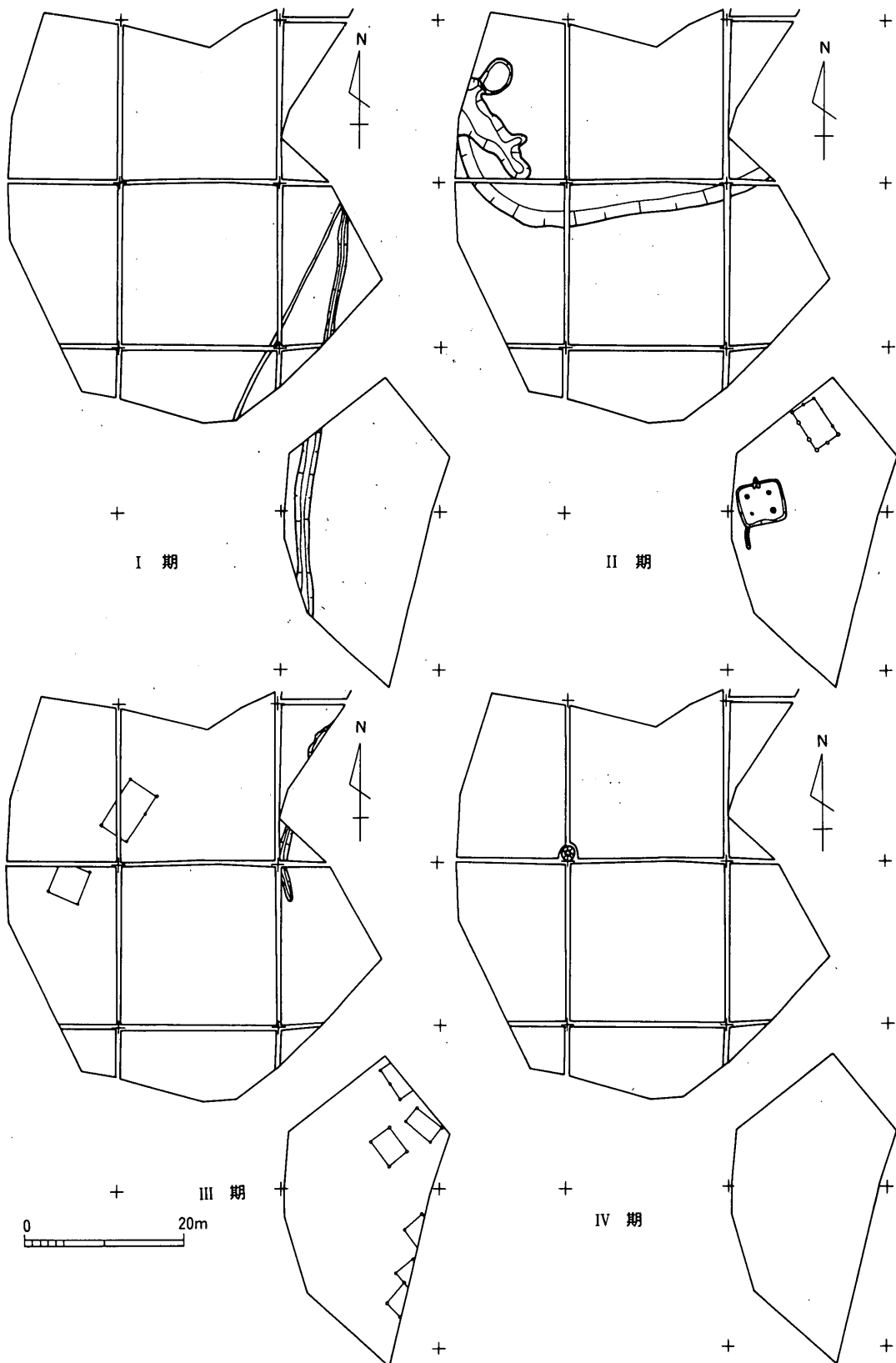


图18 矢ノ岡遺跡遺構変遷図 (1/800)



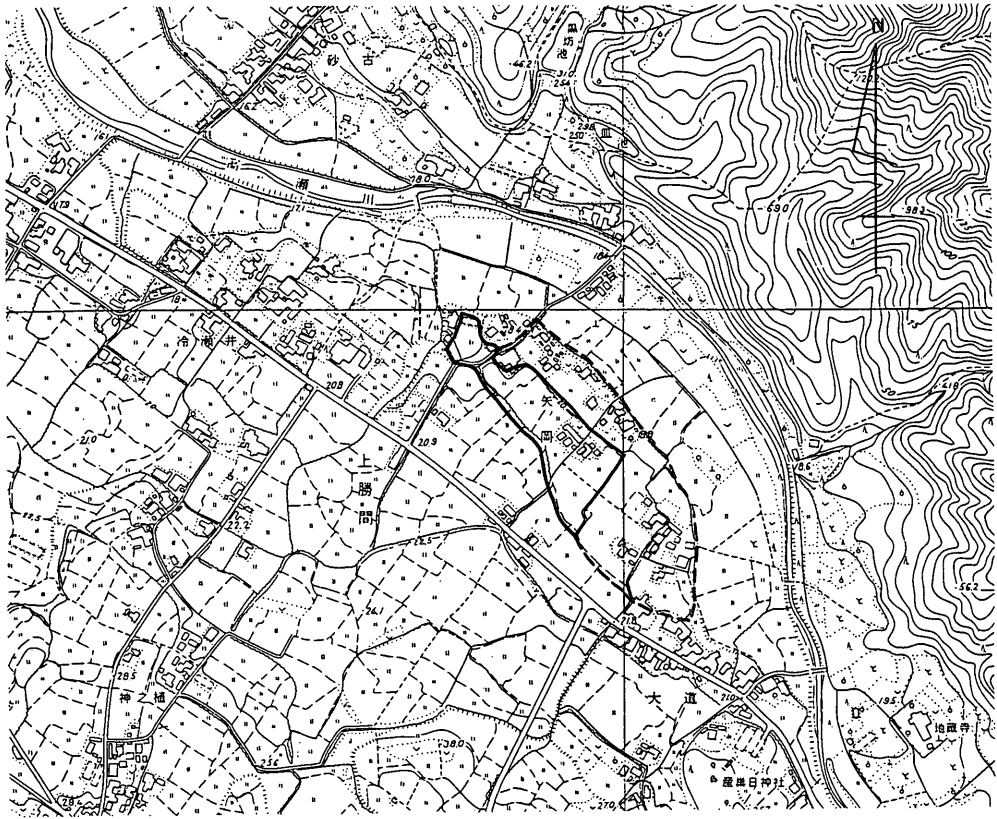
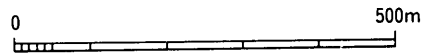


図19 矢ノ岡遺跡の範囲 (1/5000)



# V 利生寺遺跡



## V 利生寺遺跡

### 1 立地と土層序

利生寺遺跡は、高瀬町上勝間字砂古の「利生寺」(小地名)に所在する。調査は、谷底部の平坦地(標高約36.8m)と、谷の北斜面にわずかにあるテラス部(標高38.4m)及び斜面部に対して行った。谷底部は、水洗を受けた花崗岩質の砂礫層が厚く堆積している。地表下約1.5mまでに近現代・中世・弥生時代の包含層がある。その下層は無遺物層であった。

この間の土質は基本的に同一のものである。しかし、北側の斜面部に近くなると谷底部土層図の21層のように、水洗を受けていない、固い花崗土の基盤土が出てくる。近世の遺構は、水洗された花崗岩質の砂礫層に掘り込まれている。弥生時代の遺構は、固い花崗土の基盤土層に掘り込まれている。

一方、谷北側のテラス部及び斜面部は、固い花崗土を基盤土層とし、その上に、中世包含層などを含む厚さ約0.5mの土が堆積している。遺構は、すべて基盤土層に掘り込まれている。

以上を要約すると、弥生時代には、谷底部は不安定で、生活活動は、より安定的な花崗土の地山面上において行われていた。従って、地形的にはテラス部だけでなく斜面部も利用している。

中世においても谷底部は不安定で、生活活動は、北側のテラス部及び斜面部の地山面上において行われていた。

近世になると、谷底部の平坦地が生活面として利用される。一方、北側のテラス部や斜面部での生活活動は見られなくなる。

なお、利生寺川を挟む南側のテラス部からは、遺構・遺物は検出されな

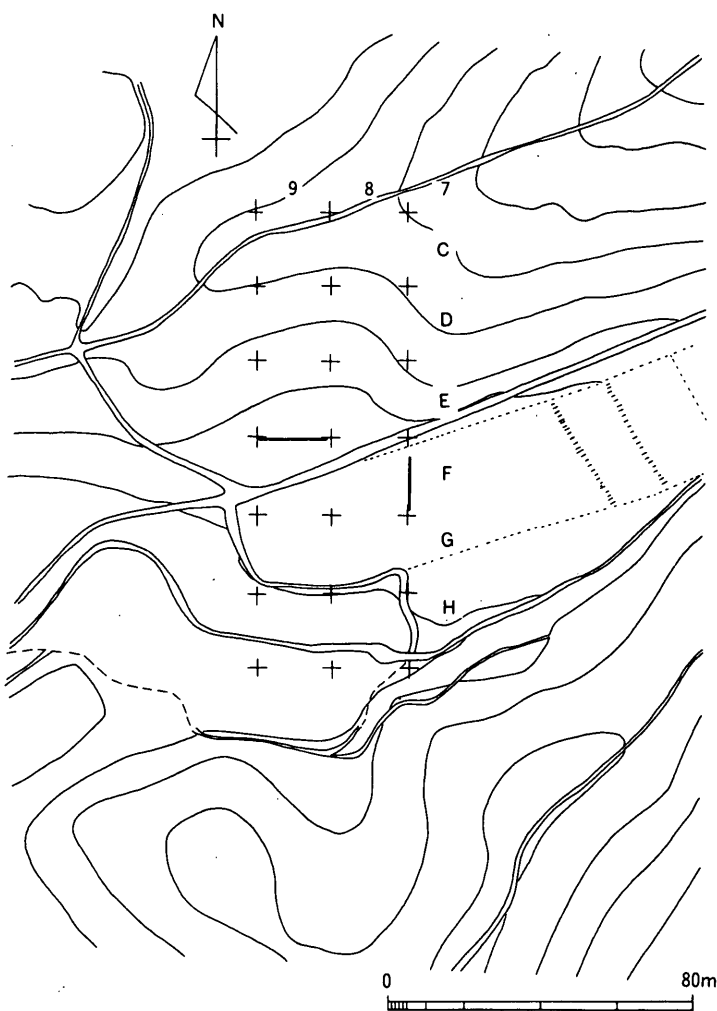
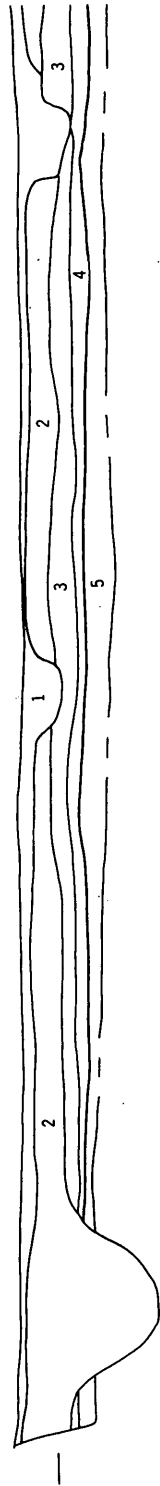


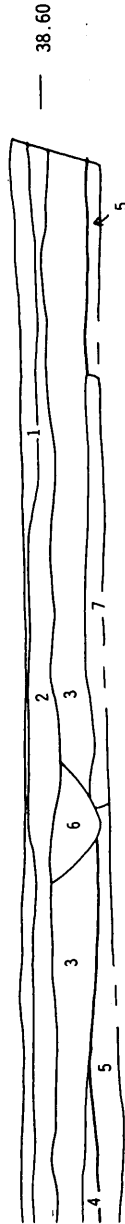
図1 グリッド土層位置図 (1/1000)

西 F-9

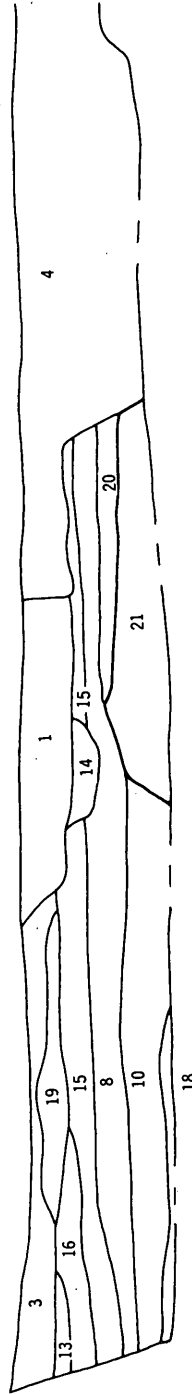


F-8 東

- 1. 黒色腐植土層
- 2. 黄褐色砂質土層
- 3. 暗褐色土層
- 4. 褐色土層
- 5. 暗茶褐色土層 (地山)
- 6. 2より暗い (SD01)
- 7. 3より暗い (SB03)



南 G-7



- 23. 赤褐色土層
- 24. 暗褐色粘質土層
- 25. 灰色砂質土層

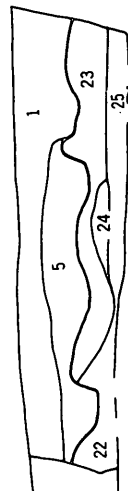
- 18. 黒褐色粘質土層
- 19. 褐灰色土層
- 20. 灰褐色土層
- 21. 黒褐色粘土層 (地山)
- 22. 黄褐色粘土層 (地山)

- 10. 暗灰色砂層
- 13. 黒褐色粘質土層
- 14. 褐黒色粘質土層
- 15. 赤褐色粘質土層
- 16. 褐色粘質土層

- 1. 明褐色土層
- 3. 黒褐色土層
- 4. 黄褐色粘質土層
- 5. 暗褐色土層
- 8. 灰黒色砂質土層

北

— 36.40



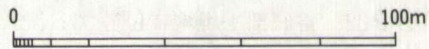
5 m

0

図2 グリッド土層図 (1/60)



図3 利生寺遺跡グリッド配置図 (1/1000)



かった。生活面としての利用はなかったと考えられる。

## 2 遺構

町道砂古線と利生寺川の間の平坦地は整地工事によって多くの攪乱坑が掘られていた。遺構も破壊を受けており、その全容は知りえない。この地区からは、掘立柱建物跡(1)、竪穴住居跡(1)、土坑(2)、径の大きい円形ピット(4)、井戸(1)を検出したのみである。町道砂古線北側の地区からは、竪穴住居跡(1)、方形ピット(13)、円形ピット(数10)、土坑(10)を検出した。SD01は近現代のものである。

### (1) 建物跡

SB01 谷底部平坦地のほぼ中央に位置する1×2間の掘立柱建物跡である。梁間1.4・1.6m、桁行0.9・1.0m、径15～20cmの円形ピット。床面積2.85㎡。非常に小規模な建物跡である。ピットと切り合い関係はないが、梁部と重なり合う埋甕SK01がある。その位置から、SB01に付属するものとするのが妥当であろう。主軸方向はN19°Wである。ピットからの出土遺物はない。

SB02 谷の底部北寄りの緩斜面に立地する。南辺部は攪乱を受けている。規模は2.5×2.5m、床面積6.25㎡、形状は歪な方形である。主軸方向は、N23°Eである。床面の東-西はほぼ水平であるが、南-北はゆるやかに北から南へ下がる。ピットはない。床面の途中から、低所側である南方へ延びる、巾10cm、深さ7cmの小溝が掘られている。竪穴の深さは約10cmと浅い。おそらく削平に原因するものであろう。非常に小規模で、支柱穴がないことから特殊な性格の建物跡であろう。竪穴埋土中から弥生土器壺口頸部などが出土した。

SB03 谷の北側のテラス部に位置する竪穴住居跡である。規模は2.47m×3.17m、床面積7.83㎡、形状は歪な長方形である。主軸方向はN25°Wである。竪穴壁は、約17°外傾し、残存高は約23cmである。床面は、北西隅から南東隅へゆるやかに下がっている。床面には、2～5cmの固く締った黒褐色土層が全面にある。おそらくこの上面が生活面であり、その下面は、竪穴掘削時の掘り形であろう。竪穴北半中央には竪穴埋土よりも黒色味が強く、粘性の強い褐黒色土層の土塊があった。その直上には土師質土器釜(1/2残存)が残されていた。竪穴西壁際には、上場径0.67m、深さ0.4mの土坑が掘られていた。底部は水平で、床面には外径32cmの円状の凹みが残っていた。凹みは巾3cm、深さ2cmである。これは、おそらく桶等の底部端の圧痕であろう。南東隅には、径0.4mの不整形の浅い凹みがあった。支柱穴はない。竪穴埋土中から、土師質土器皿・杯・播鉢、瓦質土器鉢、備前焼播鉢が出土した。

### (2) 柱・穴

SP02 谷底部平坦地に位置する。上場径1.2m、残存する深さ0.52m、底部径0.96mで、平坦面となっている。底面のやや北西寄りのところに、径0.2mの柱根跡と考えられるものが残存してい

た。

S P09～016 1辺0.45mの方形の掘り形をもつ。深さは約5cmと浅い。S P09とS P012には、径8～14cmの円形の凹みが残存していた。ピットはN66°Eの方向の並びが3列みられる。1間のものが2例、3間のものが1例である。間隔は1.5m～1.8mである。S P014から瓦質土器鉢が1点出土した。他のピットからの出土遺物はない。

### (3) 土 坑

S K01 S B01北梁部と重なり合う位置にある。土坑内には、土師質土器鉢が据えられていた。鉢口縁部は破壊されていた。鉢内は3層に分けられる砂質土が入っていた。埋土中から据えられたものとは別個体の土師質土器鉢口頸部片、磁器椀が各1点出土した。

S K02 S P02に隣接する。0.73×1.42mの不整形な土坑である。埋土は、2層に分けられる砂質土である。これはS P02と同一である。埋土中から土師質土器皿が1点出土した。

S K04 径1.3mの不整形の土坑である。深さ約5cm。床面は平坦である。埋土は暗褐色土層である。出土遺物はない。

S K06 上場径1.25mの不整形の土坑である。2穴のピットに切られている。壁面はほぼ垂直である。床面はほぼ平坦につくる。床面直上から完形品を含む弥生土器が出土した。

S K07 谷北側の急斜面部に位置する。付近には同一の埋土をもつ土坑が6基ある。1.1・1.45×1.55mの平面台形の土坑である。北壁は0.45m、南壁は3cmの深さである。埋土は、褐色粘質土である。床面は水平につくる。土坑内から、弥生土器破片が多量に出土した。

### (4) 井 戸

S E01 谷底部平坦地に位置する。石組み井戸である。内径0.6m、残存する深さ1.02mである。上場径1.3mの円形の掘り形の中に、10～30cmの石を小口積みによって下から上へやや開き気味に積み上げている。底部には、中央に1辺15cmの三角形の空間をつくるように、平たい石を3個並べ巡らしている。埋土上層は粘土層、下層は暗褐色土層である。下層中から磁器椀が1点出土した。



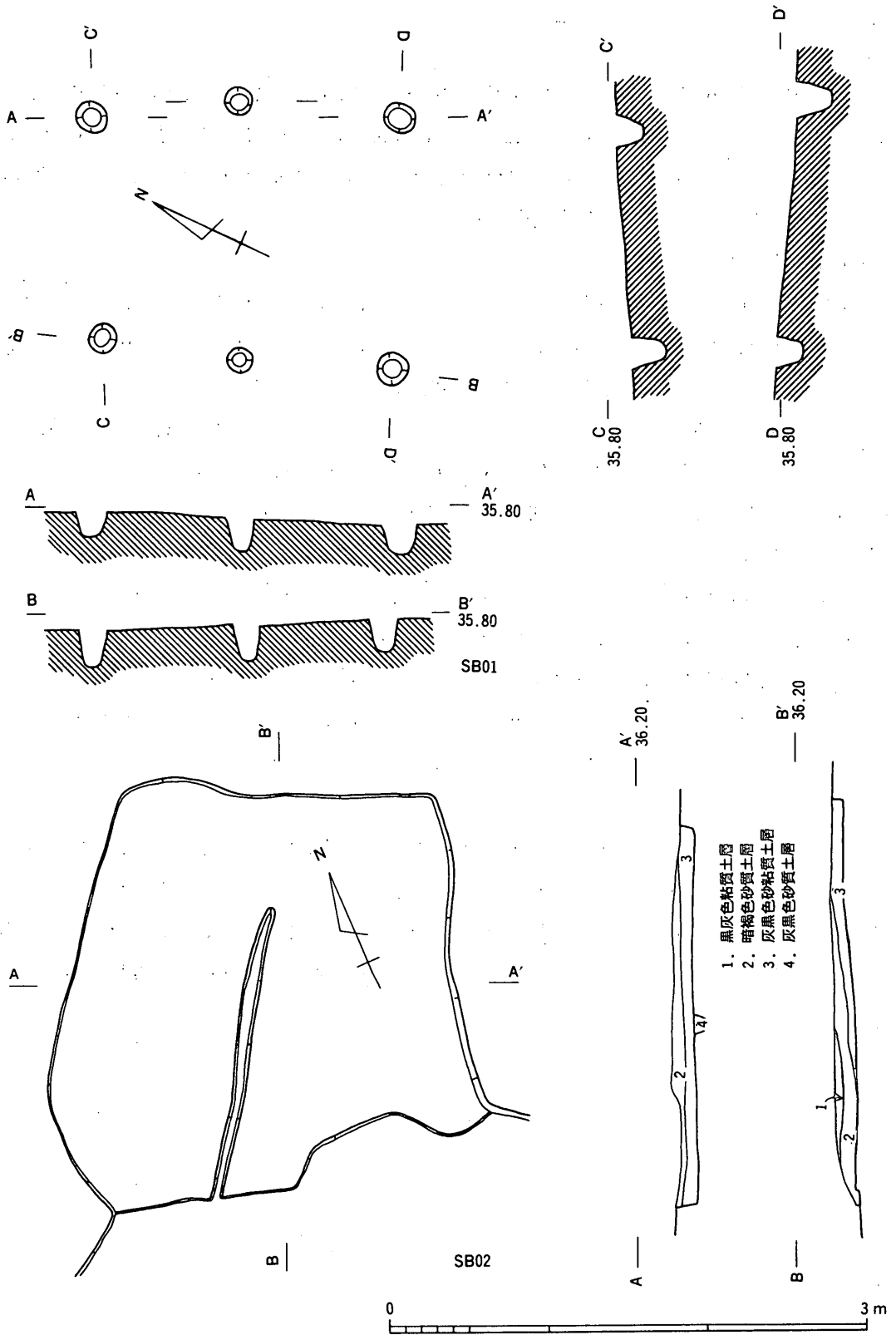


图4 SB01·02实测图 (1/40)

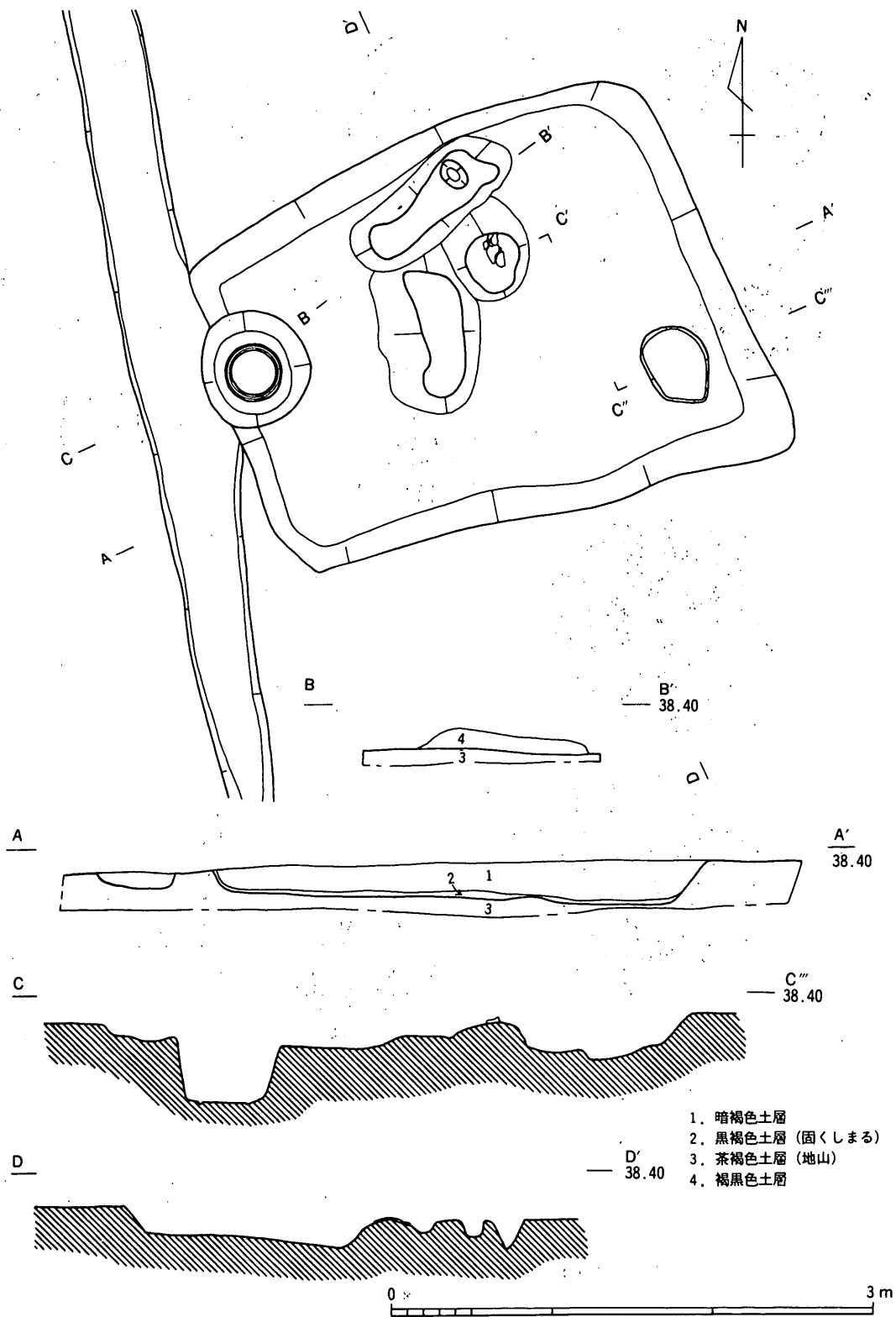


图5 SB03実測図 (1/40)

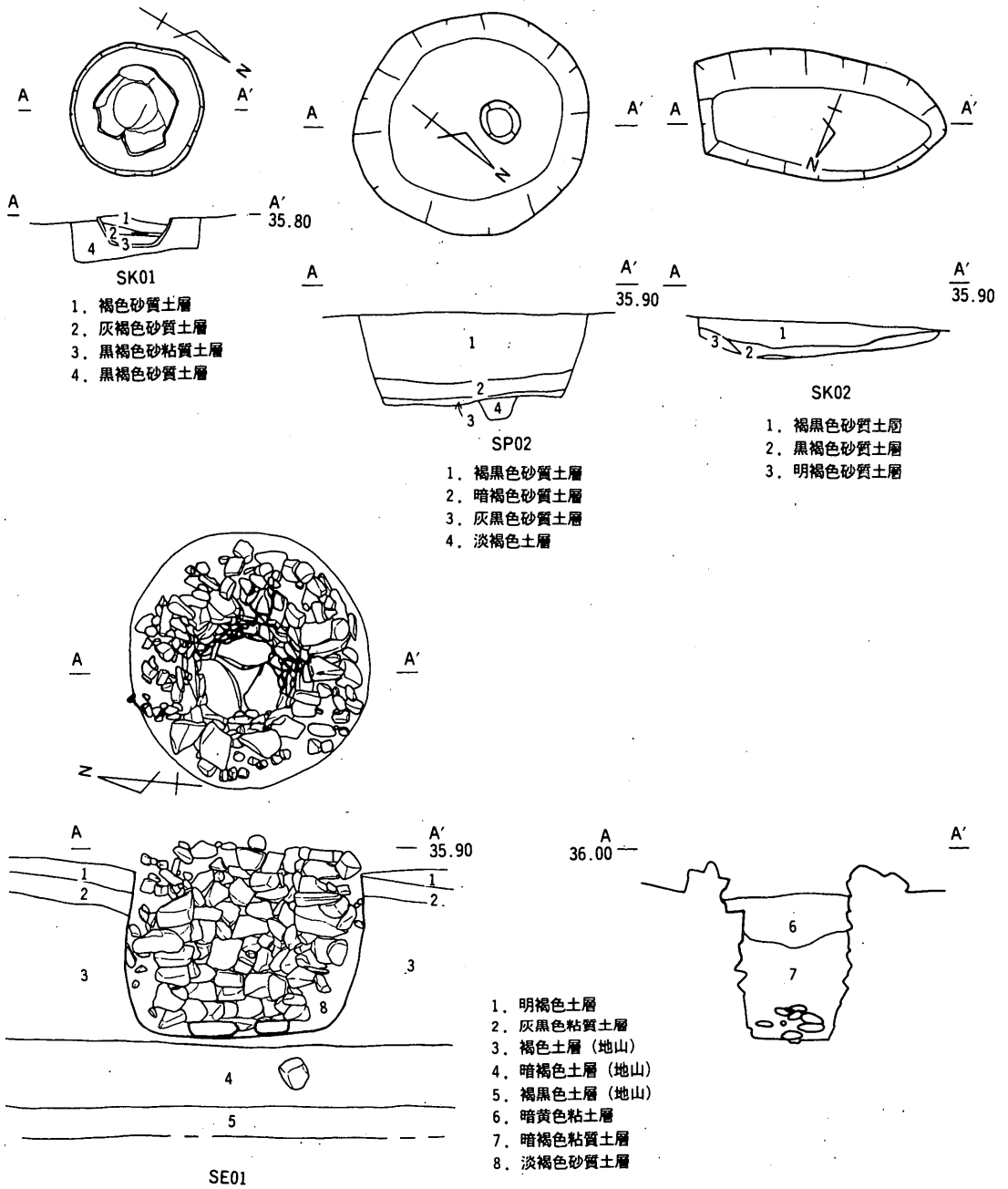


圖6 SP02, SK01·02, SE01實測圖 (1/40)

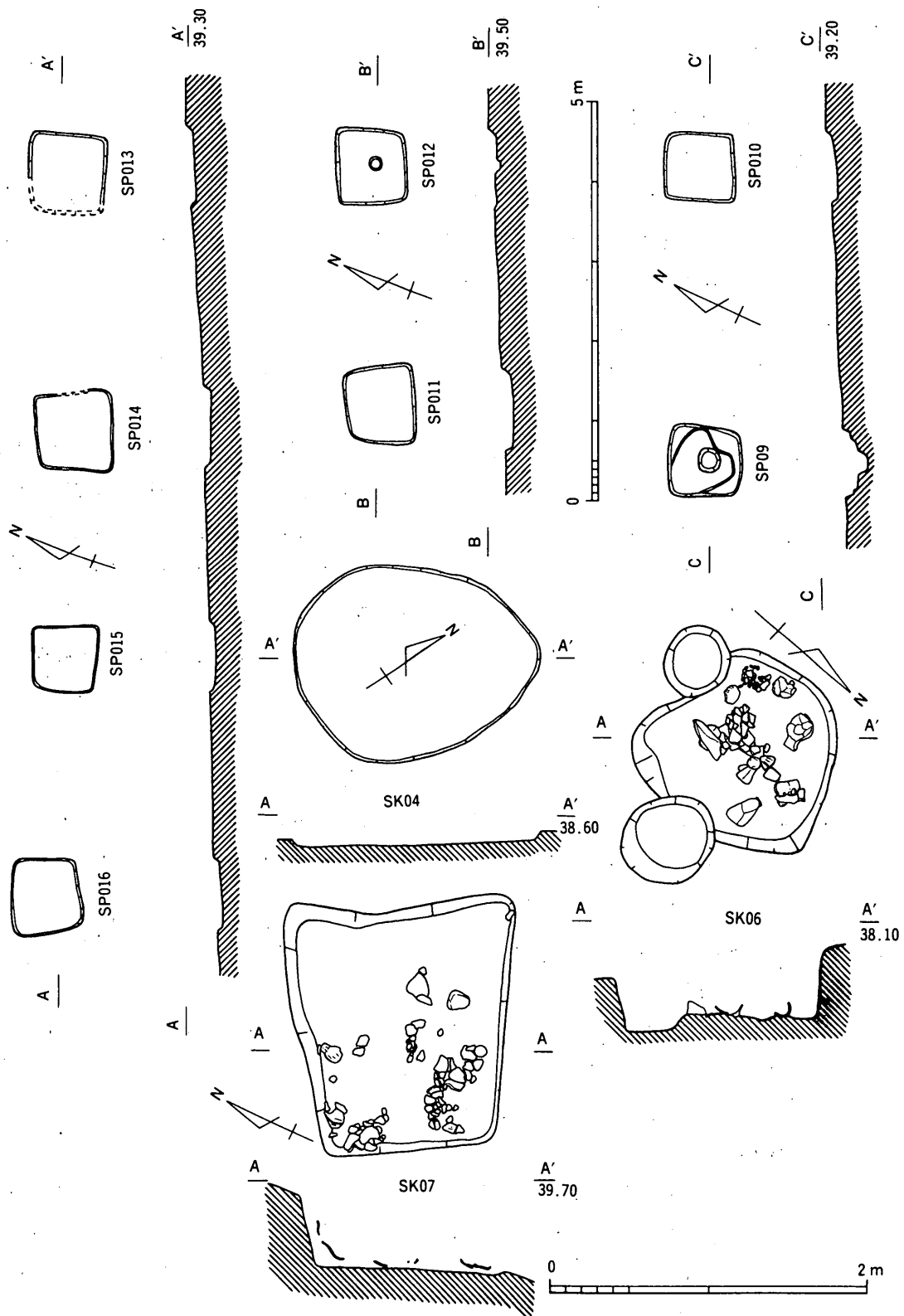


图7 SP09~013, SK04·06·07实测图 (1/40)

### 3 遺物

遺構出土の遺物と包含層出土の金属製品・石製品について説明を行なう。

#### (1) 弥生土器

弥生土器はS K06・07等からまとまって出土した。1・18・19・26は壺である。1・26は、外方へやや開く筒状の口頸部をもつ。1は口頸部に6条以上の凹線文をもつ。18・19は、法量が若干異なるが、形態・技法は共通する。18は、器高18.2cm、口径9.9cm、器高中位よりやや上に最大径(15.1cm)がある。器厚6～9mmで、全体的に厚い。内面はヘラ削り、頸部内面に絞り目があるがナデ消す。外面は口頸部を除きヘラミガキ。肌土は粗で、口縁部は水平でなくアンバランスである。全体的に荒い作りである。

20・21・27は甕である。すべて「く」字形の口縁部をもつ。21の口縁部は内外面とも肥厚させる。20・27は内面側へのみ肥厚させ、ともに端面には凹線文を施す。20は上げ底の底部にイチジク形の体部である。24は鉢である。口径18.8cm、器高8.8cm、底部径7.1cm。上げ底の底部から短く直立した後、強く開き、体部中位で内方へ屈曲させて直立させる。外面底部には明瞭な指頭圧痕を残す。体部はヘラミガキ。25は蓋である。口径17.7cm、器高8.1cm、把手径6.5cm。深く凹む把手頂部から短く内傾した後、やや外湾気味に強く開く体部に連なる。把手外面には明瞭な指頭圧痕を残す。体部外面にはヘラミガキを施している。

#### (2) 土師質土器

5・6・7はS B03出土の皿である。5は口径7.4cm、器高1.1cm、ヘラ切り底、6は口径9.9cm、器高1.1cm、ヘラ切り底の皿である。7は口径10.2cm、器高2.2cm、底部成形法は不明。17は口径6.9cm、器高1.2cm、ヘラ切り底の皿である。8・9・10はS B03出土の杯である。8の底部は回転糸切りであろう。9・10はともに静止糸切りである。3・4は、S B03出土の釜である。3は口径22.7cm、体部高13.3cm、口縁部からそのまま鐳端部に連なる。鐳は水平方向へ6mm延びる。体部下位3カ所に脚部を貼付ける。14は底部を欠くが深鉢であろう。口縁部は内外面とも強く肥厚させる。体部外面には、波条文、浮文、突帯などを施す。16は口径61cm、器高35cm、丸底の底部から屈曲して直線的に外傾する体部となる。体部から外方へ強く屈曲させて口縁部となる。口縁端部内面は強く拡張させる。その結果、端部は広い面となっている。

#### (3) 瓦質土器

12は、瓦質土器の鉢と考えられる。口縁部内面を断面三角形に肥厚させる。13は、瓦質土器の鉢とした。底部を欠く。口径6.7cm、最大径は8.2cmで体部中位にある。内湾する体部、口縁部内面やや肥厚して丸い。体部外面には沈線と菱形文のスタンプを施す。内面にはスス付着の痕跡がある。香炉のような機能が想定される。

#### (4) 陶磁器

11は備前焼の擂鉢である。口縁部内外面とも、やや肥厚する。端部は平坦な広い面をなす。15は磁器椀である。灰白色の密な胎土、透明釉をかけるが色調はオリーブ灰色を呈する。体部厚4.5mm、底部厚1.1cmで全体に分厚い。31は磁器椀である。口径10cm、器高5.2cm、白色の密な胎土に薄い透明釉をかける。体部厚4mm、底部厚6mmで全体に均一である。

#### (5) 銅 銭

表1のように、渡来銭3点、「寛永通宝」2点が出土した。すべて包含層からの出土である。32は「皇宋通寶」、36は「元豊通寶」である。

表1 出土銅銭表

グリッド名	銭種	皇宗通寶	元豊通寶	洪武通寶	寛永通寶	合計
F - 9		1				1
G - 6				1	2	3
G - 7			1			1

#### (6) 石製品

37・38・39は、サヌカイトを材料とする打製石庖丁である。37は両側端を欠く。両面とも大剝離面の末端を、さらに剝離、調整して刃部とするが、背面は細かいブランティングのみ、腹面は階段状剝離をつらねた後、さらに細かいブランティングを加えるというように、背面と腹面で調整法が異なる。38も両側端を欠く。背面の一端は大剝離面の末端まで残すが、他端は細かいブランティングを加えている。腹面は両端とも階段状剝離を加え、さらに細かいブランティングを加えて刃部をつくっている。39は両側端にくりこみを残す完形品である。3.4×8.2cmの小型品である。両面とも階段状剝離を加え、さらに細かいブランティングを加えて刃部をつくっている。40は打製石斧であろう。基部を除く両面に刃部をつくり出している。両面とも階段状剝離を加え、さらに細かいブランティングを加えている。材料はサヌカイトであるが、風化が強く灰白色を呈する。41・42は石鋸である。ともにサヌカイトを材料とする。41は、基辺が凹み、両側辺は内湾する。最大厚2.5mm。大剝離は両側にわずかに残るのみである。42は、基辺がわずかに凹み、両側辺は直線的である。最大厚4mm。大剝離面は両面に平坦面として比較的広く残している。

#### (7) 鋏 子

43・44は、利生寺遺跡の南側に立ち上がる尾根の頂部南寄り付近で偶然に発見されたという鋏子である<sup>(1)</sup>。鋏子は、2点で1組をなす。互いに打ち合わせて音を出す仏具の一つである。材質は銅を中心とするものであろう。43は、把手は外反して広がり、頂部は丸く隆起する。ほぼ中央に径6mmの穿孔がある。体部はほぼ直線的に伸び、先端部で外湾してそり反えらせる。成形は、把手・体部とも同時に銭造によって行ったもの。把手と体部の境いには、鑄こぼれを削り取った跡がある。体部円弧の中心点と把手円弧の中心点は約3mmずれている。従って、厳密には把手は体部の中央にはない。また穿孔の位置も把手円弧の中心点からずれている。把手・体部外面には、鑄型のものと思われる砂目が均一に残っている。なお、体部は、反りの部分を除き、全体を7分割して砂目の上に弦状に磨きをかけている。内面は、把手見込みを除き、全体に指頭痕が残る。体部には、最初、放射状に磨きをかけ、さらに全体を7分割して弦状に磨きをかけている。先端

部の対になる鉞子と打ち合う箇所は、丁寧に磨かれ平坦面になっている。

44は、法量・形状・成形法・調整法すべて近似している。ただ体部外面の磨きが、43では全面に行なわれていたが、44では一部のみに行なわれていない。この点で両者を区別することが出来る。

包含層からは、表3に示したような遺物が出土した。弥生土器・須恵器・土師質土器がその中心を占めている。中世遺物のうち亀山焼と備前焼が多いことは注目される。

(1) 鉞子2点は、現在、威徳院勝造寺（三豊郡高瀬町下勝間913）に所蔵されている。

表2 遺構別出土遺物

	弥生土器							須恵器		土師質土器					瓦質土器		須恵器 土器		備前焼		陶器		染付	計
	壺	甕	鉢	蓋	口縁部	底部	体部	杯身	体部	皿	杯	槽鉢	鉢	釜	体部	鉢	体部	鉢	槽鉢	甕	体部			
SB01																								0
02	1						1																	2
03									13	2	3	1		2	22			2	2					47
SP01															1									1
02									1	1				1	18								1	22
03															1									1
05															2									2
06														1	9									10
07															13									13
08															1									1
09															12									12
011															2									2
014																1								1
015									1						1								1	3
016									1						10								1	11
020									1						2	1								4
021															1									1
022									3															3
039															1									1
041														1	2									3
SK01														2									1	3
02										1					11									12
03															1									1
06	2	2	1	1		1	220																	227
07	1	1			15	6	329																	352
SE01															1								1	2
計	4	3	1	1	15	7	550	0	20	4	3	1	2	5	111	2	0	2	2	2	0	2	2	737

表3 包含層出土遺物集計表

	弥生土器	須恵器	土師質土器		瓦質土器	須賀土器	亀山焼	備前焼	陶器	輸入陶器		瓦	石礎	サファイア	砥石	銅銭	鉄製品	骨角器	計	染付	合計
			皿杯	槽鉢						背磁	黒釉										
F - 9	11	235	119	1303	7	0	0	3	4	1	1	0	2	17	1	1	8	0	1713		
	0.64	13.72	6.95	76.07	0.41	0	0	0.18	0.23	0.06	0.06	0	0.12	0.99	0.06	0.06	0.47	0	100.02		
G - 7	7	34	35	471	0	1	14	23	0	0	1	1	0	0	0	1	3	1	592		
	1.18	5.74	5.91	79.56	0	0.17	2.36	3.89	0	0	0.17	0.17	0	0	0	0.17	0.51	0.17	100.00		
包含層全体	90	425	254	3306	20	3	25	35	32	4	3	17	2	18	2	3	32	1	4272	20	4292
	2.11	9.95	5.95	77.39	0.47	0.07	0.59	0.82	0.75	0.09	0.07	0.40	0.05	0.42	0.05	0.07	0.75	0.02	100.20		

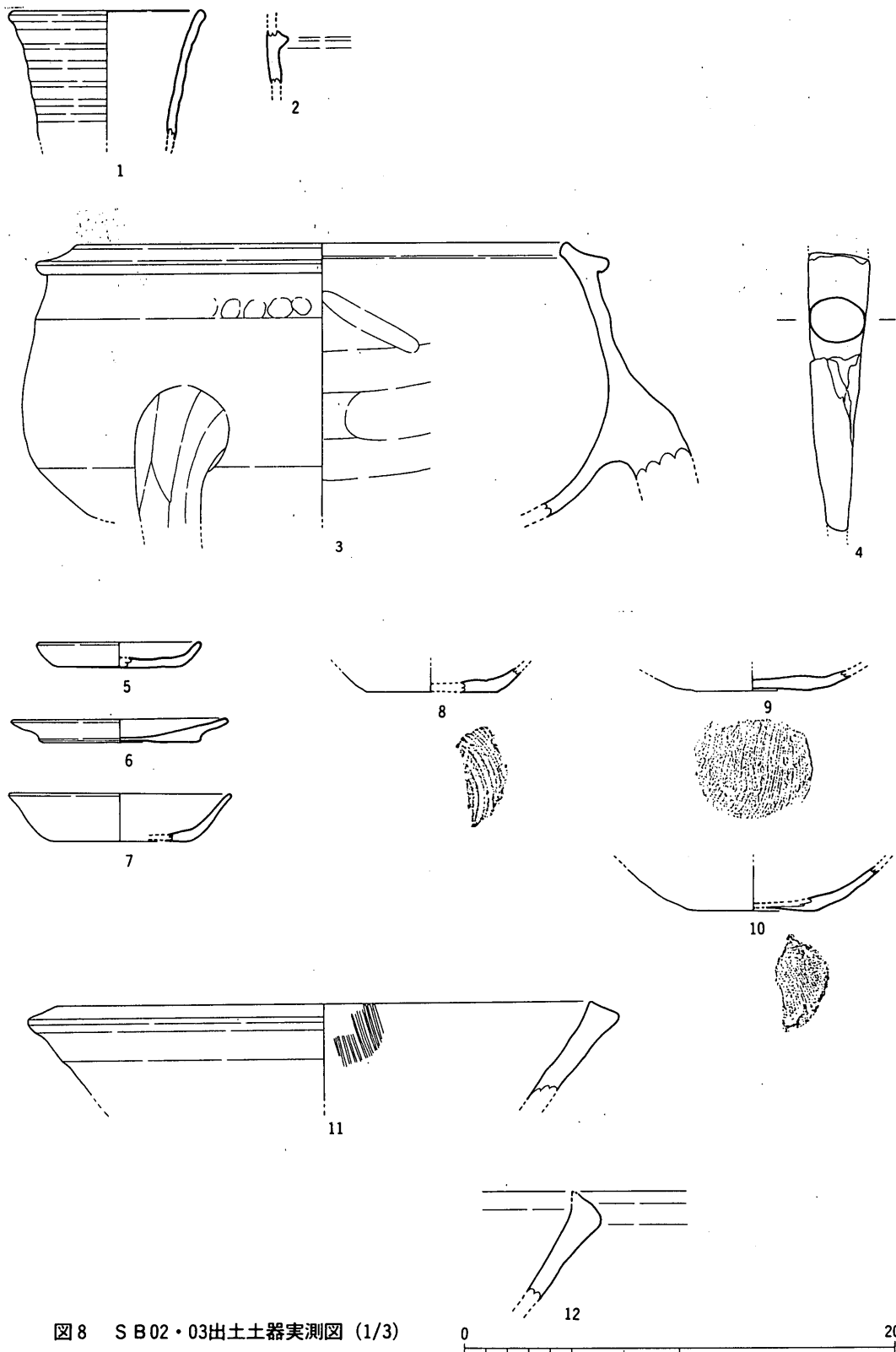


图8 S B 02·03出土土器实测图 (1/3)



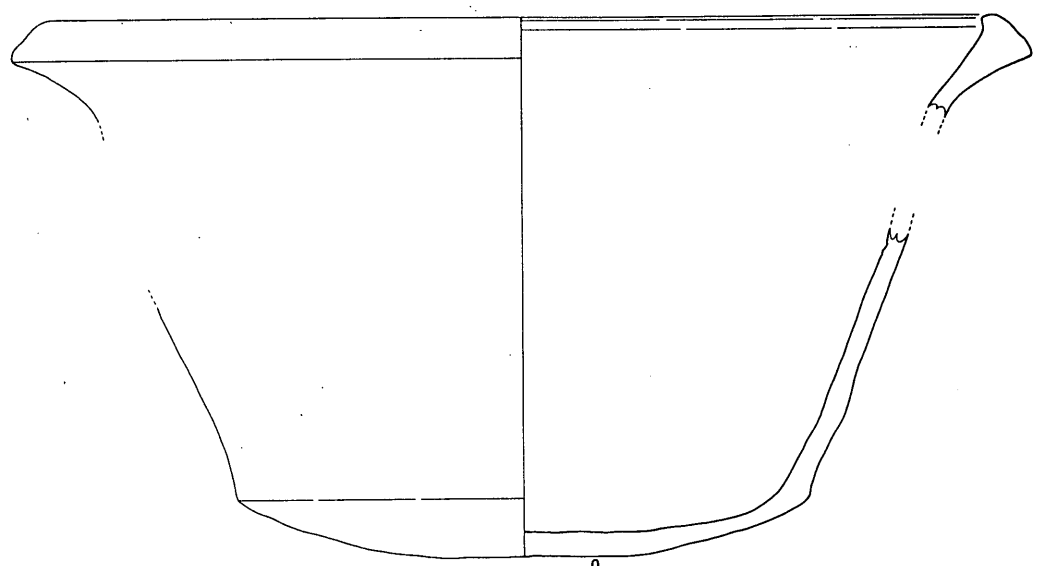
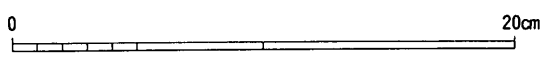
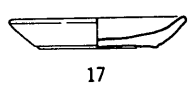
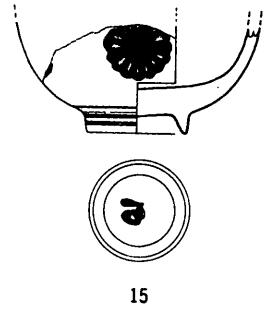
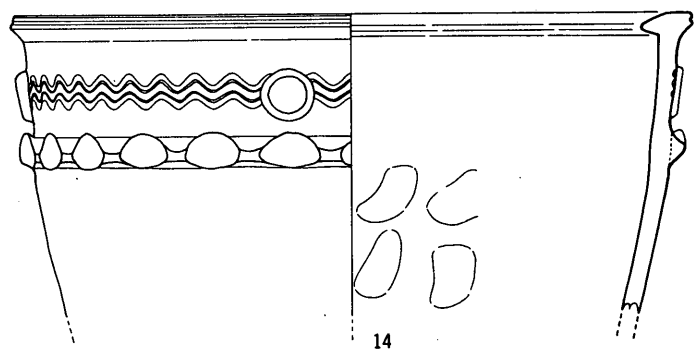
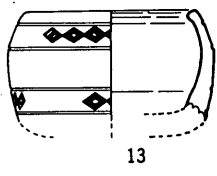
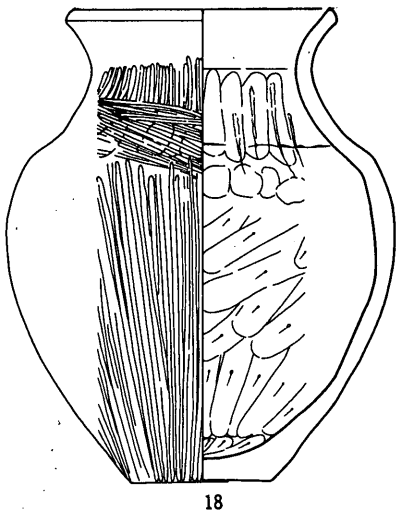
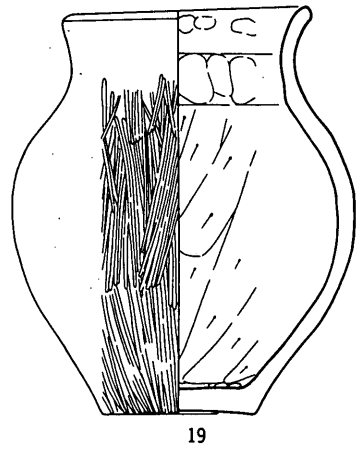


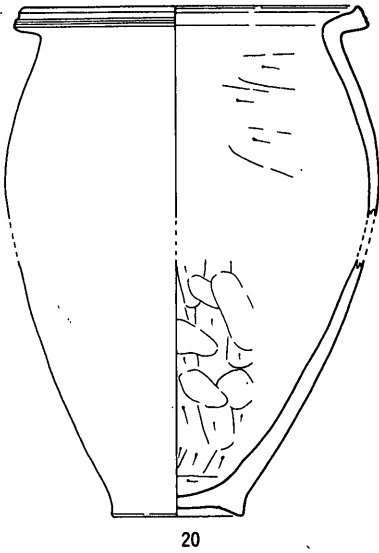
图9 S P014, S K01·02出土土器实测图 (1/3·1/5)



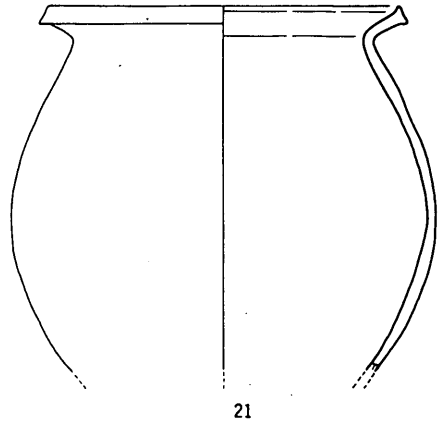
18



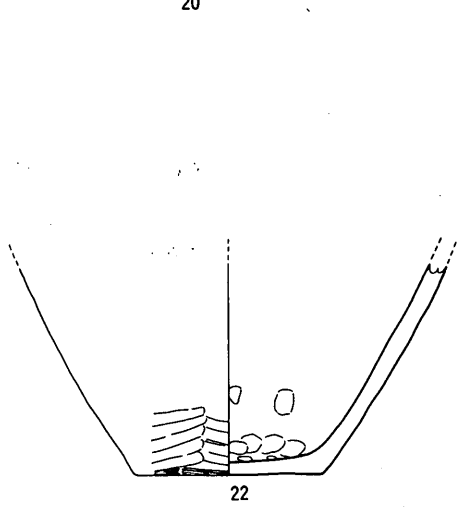
19



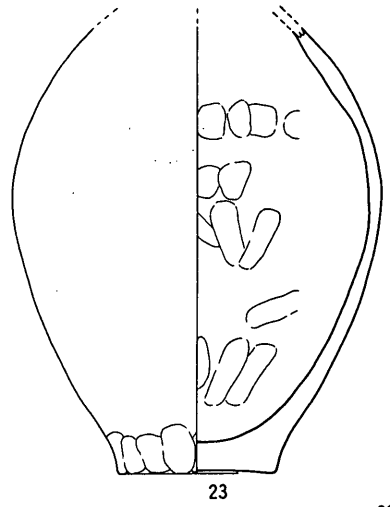
20



21



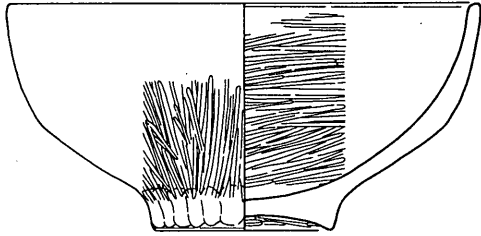
22



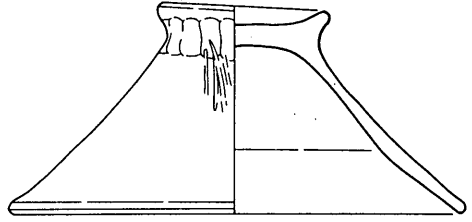
23

图10 S K 06出土土器实测图 (1/3)

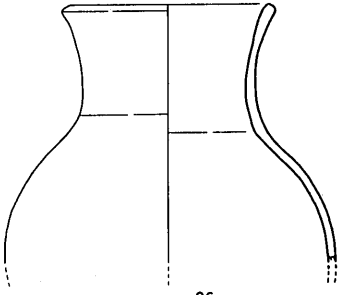




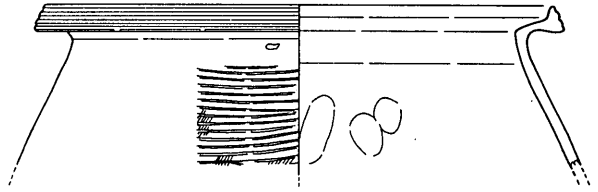
24



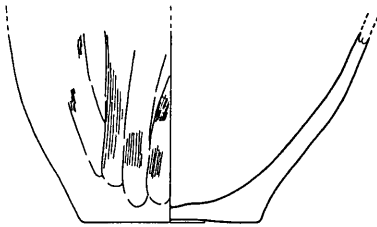
25



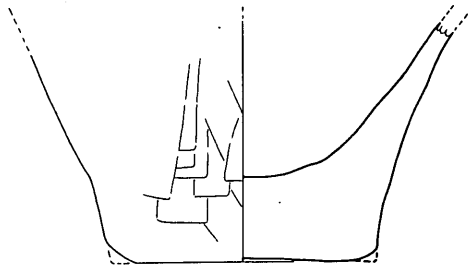
26



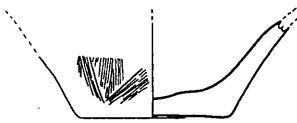
27



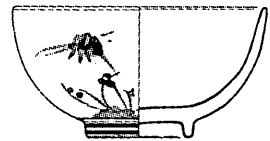
28



30



29



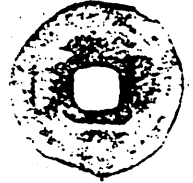
31



图11 S K 06 · 07, S E 01出土土器实测图 (1/3)



32



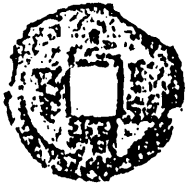
33



34



35



36



图12 F-9·G-6·G-7出土銅錢拓影(1/1)

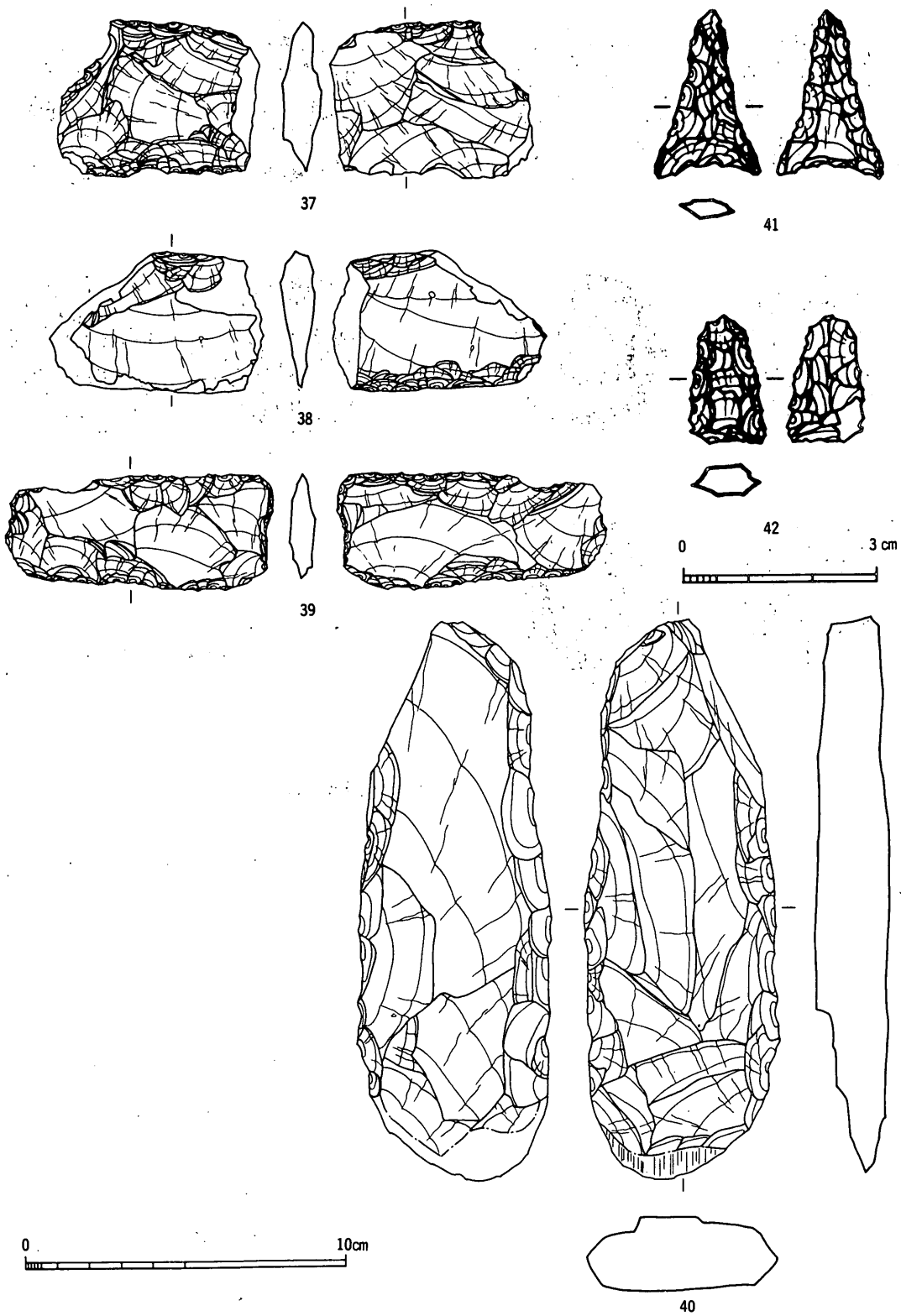
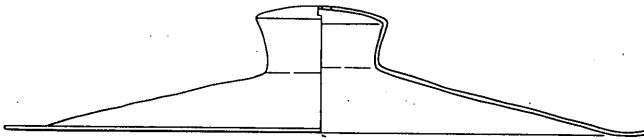
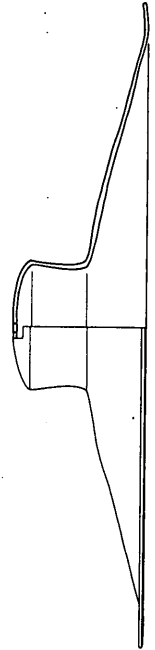
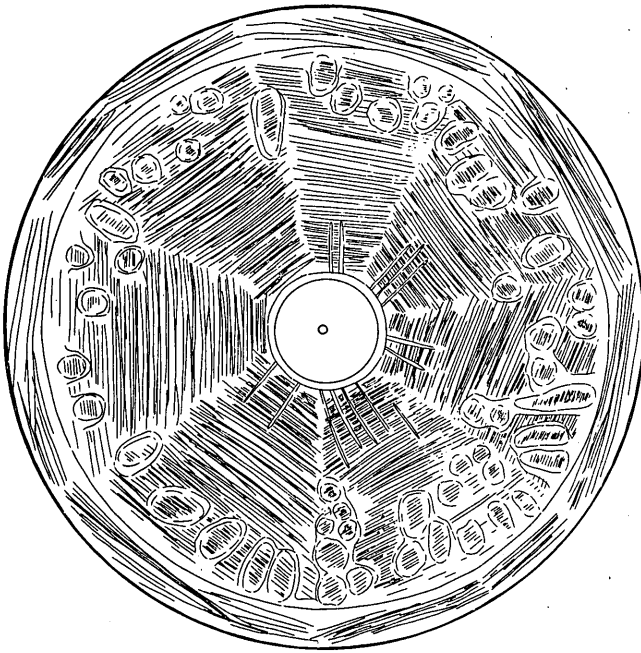


图13 F-9·F-10·G-7出土石器实测图 (1/2·1/1)



43



44

图14 高瀬町字砂古2321出土鉞子実測図 (1/5)

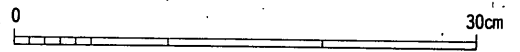


表4 遺物観察表

遺構名 包含層名	遺物 番号	材 質	器 種	口 縁 部	体 部	底部(頂部)	胎 土	色 調	備 考
S B02	1	弥生土器	壺	回転ナデ 6条以下の凹線 文を施す	(?)	(?)	1mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	緑灰色 明褐色 緑灰色	
S B02	2	弥生土器	(?)	頸部と推測され るところに断面 三角形の突帯を 付ける	(?)	(?)	2mm以下の半透 明砂粒を含む	明赤褐色 // 灰褐色	
S B03	3	土師質土器	釜	回転ナデ 口縁端部から厚 みを増し頸に至 る	内面・板ナデ 外面・指頭圧痕の 後ナデ	板ナデ、脚部は貼 り付け	2mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	橙色 // //	
S B03	4	土師質土器	釜?	(?)	(?)	脚部はナデ仕上げ	2mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	橙色 // //	
S B03	5	土師質土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り?	微砂粒を少し含 む	にぶい黄褐色 // //	
S B03	6	土師質土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	橙色 // //	
S B03	7	土師質土器	皿	回転ナデ	肌荒れ強い	肌荒れ強い	1mm以下の褐色 砂粒を少し含 む	浅黄褐色 // //	
S B03	8	土師質土器	杯	(?)	肌荒れ強い	回転系切り	微小な白色砂粒 を含む	橙色 // //	
S B03	9	土師質土器	杯	(?)	回転ナデ	静止系切り	微小な半透明砂 粒を少し含む	浅黄褐色 // //	
S B03	10	土師質土器	杯	(?)	回転ナデ	静止系切り	密、1mm以下の 半透明砂粒をわ ずかに含む	浅黄褐色 // //	
S B03	11	備前焼	摺鉢	回転ナデ	回転ナデ、摺目は 11条	(?)	5mm以下の黒褐 色砂粒をわず かに含む	灰色 // // 灰色	
S B03	12	瓦質土器	鉢	回転ナデ	内面・回転ナデ 外面・ナデ	(?)	2mm以下の半透 明砂粒を含む	暗青灰色 // 灰白色	
S P014	13	瓦質土器	鉢	回転ナデ	回転ナデ 平行する沈線の間 に二重ひし形文を スタンプする(二 帯あり)	(?)	1mm以下の半透 明砂粒を含む	暗灰色 // 浅黄色	
S K01	14	土師質土器	鉢	回転ナデ 外面に1条の沈 線	内面・指頭圧痕の 後ナデ 外面に2条の沈 線文、その上に円形 浮文を貼り付け る。この下方に突 帯を貼付け、8mm の間隔毎に突帯に 指頭圧痕を加えて 押しひろげる。	(?)	1mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	橙色 // 黄褐色	
S K01	15	磁器	椀	(?)	16弁菊花文を4カ 所に描く。高台 面近のところに 1条の横線	高台外面に2条の 横線、高台見込み に「ナ」字を草書 体で描く	密	オリーブ灰色 // 灰白色	高台付けきを除き 薄く施す
S K01	16	土師質土器	鉢	回転ナデ	ナデ	ナデ	7mm以下の白 色・半透明砂 質を含む	にぶい黄褐色 // //	
S K02	17	土師質土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透 明砂粒を少し含 む	灰褐色 // にぶい橙色	
S K06	18	弥生土器	壺	回転ナデ、口縁 端部にハケ目が残 る。頸部内面に 残る紋目もナデ を施す。外面縦 方向のヘラミガキ	内面ヘラ削り(下 から上へ) 外面上位指頭圧痕 の上に横方向のヘ ラミガキ、他は縦 方向のヘラミガキ	内面・ナデ 外面・ナデ	2mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	にぶい赤褐色 // 明赤褐色 // にぶい赤褐色	体外面に黒斑
S K06	19	弥生土器	壺	内面指頭圧痕の 後上半は回転ナ デ。下半はナデ	内面ヘラ削り(下 から上へ) 外面はヘラミガキ	内面・ナデ 外面・ナデ	3mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	にぶい赤褐色 // 明赤褐色 // 灰赤色	内外面の同一箇所 に黒斑あり
S K06	20	弥生土器	壺	内面回転ナデ 外面回転ナデの 後2条の凹線文	内面上半は横方向 のヘラ削り。下半 は下から上へヘ ラ削り、外面肌荒 れが強く調整は不明	ナデ	5mm以下の白色 砂粒を含む	明赤褐色 // 明褐色	
S K06	21	弥生土器	壺	内外面とも回転 ナデ	内外面とも肌荒れ が強く調整は不明	(?)	4mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	淡褐色 // 明赤褐色	
S K06	22	弥生土器	(底部)	(?)	内面ナデ、外面ヘ ラミガキ	ナデ	3mm以下の白 色・半透明砂 粒を含む	褐色 // 明赤褐色 // 褐色	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材 質	器 種	口 縁 部	体 部	底部(頂部)	胎 土	色 調	備 考
S K06	23	弥生土器	甕?	(?)	内面指頭圧痕の後ナデ。外面は肌荒れ強い。ヘラミガキ?。下端部横一列に指頭圧痕を施す。	ナデ	4mm以下の半透明・白色砂粒を含む	黒色 明赤褐色 〃	
S K06	24	弥生土器	鉢	内面ハケ目の原体のようなもので回転ナデ。外面回転ナデ	内面ヘラ削り、ハケ目状の条痕が残る。外面縦方向のヘラミガキ。下端部に横一列の指頭圧痕を施す。	内面・ヘラ削り 外面・ヘラミガキ	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む	黒褐色 明赤褐色 〃	
S K06	25	弥生土器	蓋	回転ナデ?	内面肌荒れ強し。外面ヘラミガキ?。下端部に横一列の指頭圧痕を施す。	ナデ	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む	明赤褐色 明赤褐色 〃	
S K07	26	弥生土器	壺	肌荒れ強し	肌荒れ強し	(?)	3mm以下の白色砂粒を含む	橙色 明赤褐色 〃	
S K07	27	弥生土器	甕	回転ナデ、端面には3条の凹線文を施す。頸部に内面側からの穿孔あり。	内面指頭圧痕の後ナデ。外面縦横のハケ目。	(?)	2mm以下の半透明・白色砂粒を含む	明赤褐色 橙色 明赤褐色	
S K07	28	弥生土器	(底部)	(?)	内面ナデ。外面ハケ目の後ナデ。	ナデ	1mm以下の白色・半透明砂粒を含む	にぶい黄橙色 浅黄橙色 黒色	内外面同一箇所 に黒斑あり
S K07	29	弥生土器	(底部)	(?)	内面ナデ。外面ハケ目	ナデ	1mm以下の半透明砂粒を含む	黒色 浅黄褐色 黒色	外面黒斑あり
S K07	30	弥生土器	(底部)	(?)	内面ナデ?。外面板ナデ。	ナデ?	2mm以下の半透明・白色砂粒を含む	にぶい橙色 淡赤褐色 にぶい橙色	
S E01	31	磁器	椀	薄く透明釉をかける。	外面青灰色の草暗緑色の花の模様の薄く透明釉を施す。	高台外面に2条の暗緑色の縦線を描く。高台見込みの草灰色の不明の模様を描く。壺付きは露胎。	密	白色 〃	

## 4 小 結

### (1) 遺 構

遺構は、出土遺物から弥生時代・中世・近世の3時期のものがある。

弥生時代は、竪穴住居跡1棟と土坑10基である。小さなテラス部と斜面に立地する。住居跡は1棟のみで、その規模は非常に小さく、構造も特殊なものである。このことを考えると、祭祀施設、あるいは避難場所などの性格が推測される。

中世は、谷北側のテラス部と斜面部に立地する竪穴住居跡1棟と方形ピット13穴などがある。前者の主軸方向はN64°E、後者の並びの方向はN66°Eである。両者は同一の方向性を有するといえるから、同時併存の可能性も考えられる。前者は、釜が出土し、桶等の底部の圧痕と考えられる凹みをもつ土坑もあることから住居跡と考えられる。しかし、住居跡が1棟のみであるのは、共同作業を必要とする生産に関わる者の住居ではなく、非生産者的、祭祀的、宗教的な性格の行為を行なう者の存在を伺わせる。後者は、並びはあるが掘立柱建物跡とするには歪みが大きい。ここでは一つの可能性を示しておこう。調査地には石製五輪塔が多く散布していた。これらの五輪塔が他所から運び込まれたものではなく、かつて、この付近に立てられていたとすることに大過はないであろう。そうであるならば、1辺約0.45mの方形掘り形は、五輪塔を建立・安置するための据え穴であるとも考えられる。そうであるならば、方形掘り形が、一定の間隔で、一定の方向性をもって列状に並ぶことも納得できる。さらに、竪穴住居跡の性格を含めて旧景観を復元



するならば、斜面部には五輪塔群が立ち並び、その下方のテラス部にはこの墓地に関係する者の住居が1棟建っていたといえよう。

近世は、大きく深い攪乱坑による破壊のために十分にはわからない。しかし、埋甕（SK01）を伴うと考えられる小規模な掘立柱建物跡と石組井戸は、ここで、常住的な生活活動が行なわれていたことを十分に推測させる。IIの二の3で触れた「利生寺林番平蔵」同「娘」らの家族の住居が、この遺構である可能性も否定はできない。

## (2) 遺物

遺物は、弥生時代・中世・近世の3期に大きく分けられる。ここでは、遺構出土の遺物の年代を限定してみたい。SB02出土の壺は、口頸部には6条以上の凹線文を施すことから弥生時代中期後半のものと考えられる<sup>(1)</sup>。SK06・07出土の甕は弥生時代中期の可能性はあるが、共伴する壺は中期には見られないものである点より弥生時代後期前半としておく。

SB03の床面直上出土の土師質土器釜から時期を決定することは、現時点では難しい。同埋土出土の備前焼播鉢は、間壁編年のII期Bに近似する。II期Bは鎌倉時代のものとされている<sup>(2)</sup>。杯9・10は、大門遺跡出土の杯Bである。同杯Bは14世紀中葉と考えられている。以上の2例より、SB03の埋没年代を14世紀中葉と考えたい。

SK01・SE01出土の磁器碗は、それぞれ、京都妙心寺境内地のSE04から近似するものが出土している<sup>(3)</sup>。同報告書によれば、それらは伊万里焼系磁器で、時期は18世紀前半から中頃を中心に構成されるものとしている。ここでは、同報告書に従い、SK01・SE01出土の磁器碗をとものに18世紀前半から中頃を中心とするものと考えたい。

## (3) 遺跡の範囲

調査区の東方は、5面の平坦地が段々状にレベルを高めて連なる。この部分に弥生時代・中世・近世の遺構が延びていることは、当然に考えられ、就中、小地名「利生寺」の由来を示す遺構・遺物の存在が予想される。また、谷部北側の斜面部も弥生時代・中世の遺構が広がっていると考えられる。これらを、地形を考慮して囲んでみた。図17の囲みを利生寺遺跡の範囲と考えたい。

(1) 詫間町文化財保護委員会『紫雲出』（昭和39年）参照。

(2) 間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート(1)～(3)」(『倉敷考古館研究集報』第1・2・5号所収。1966・1968年)

(3) 花園大学考古学研究室編『妙心寺境内地の調査』

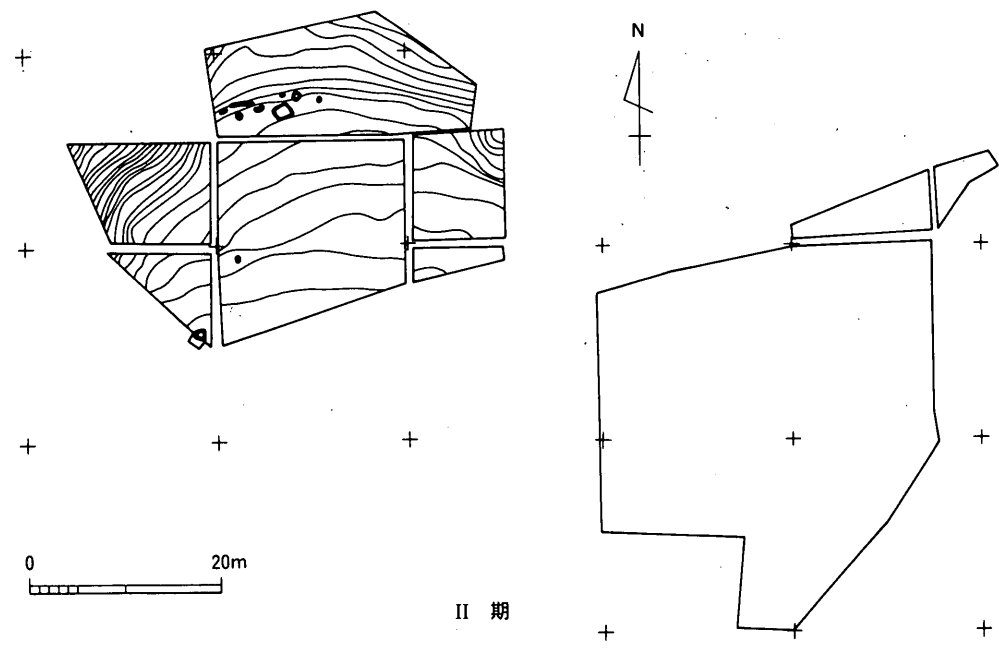
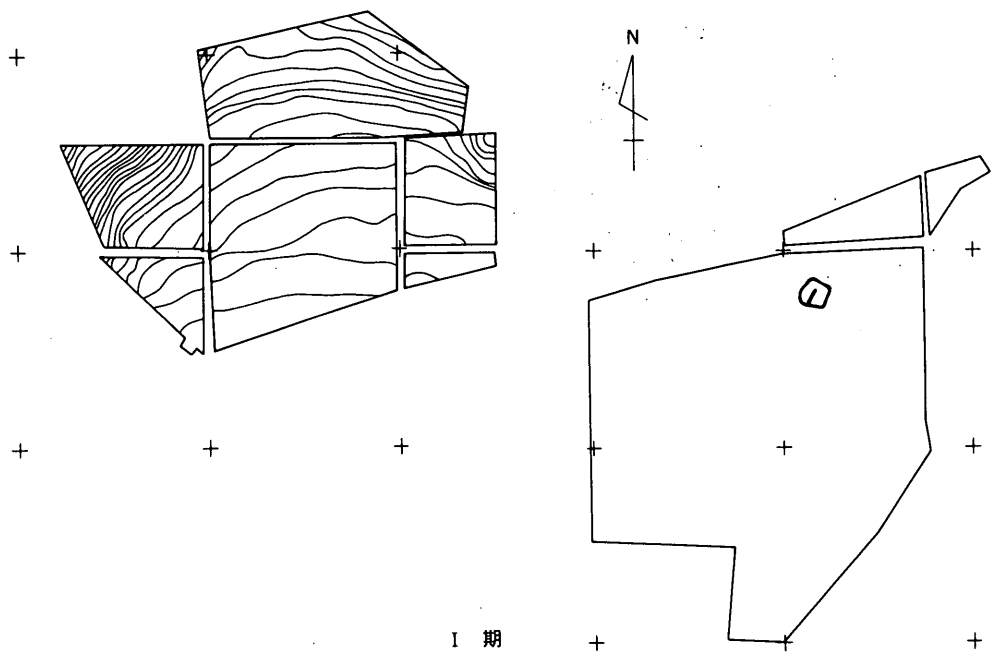


图15 利生寺遺跡遺構變遷圖(1)

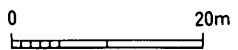
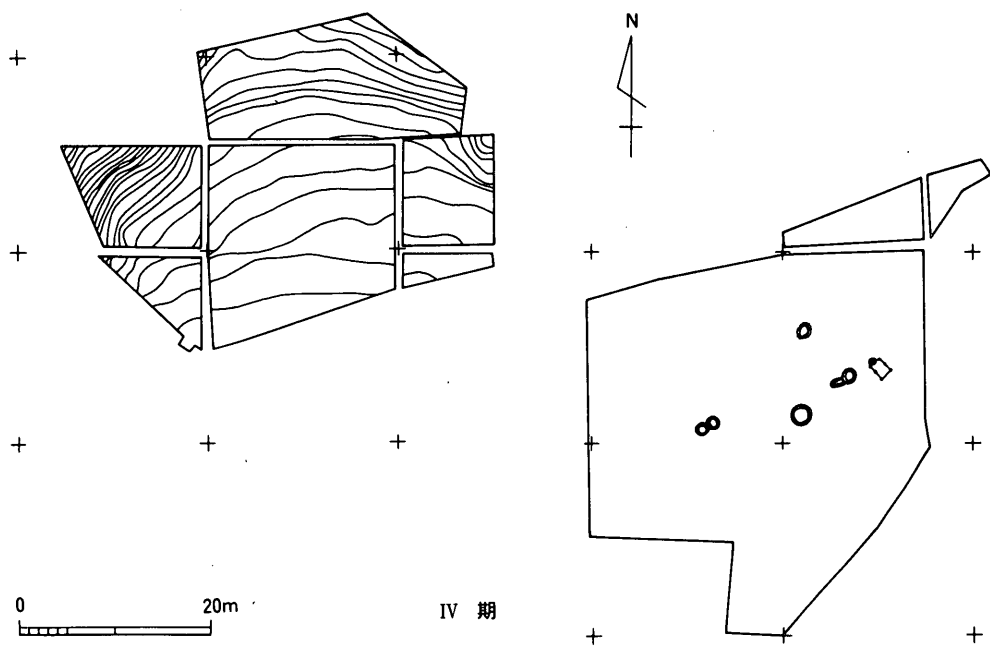
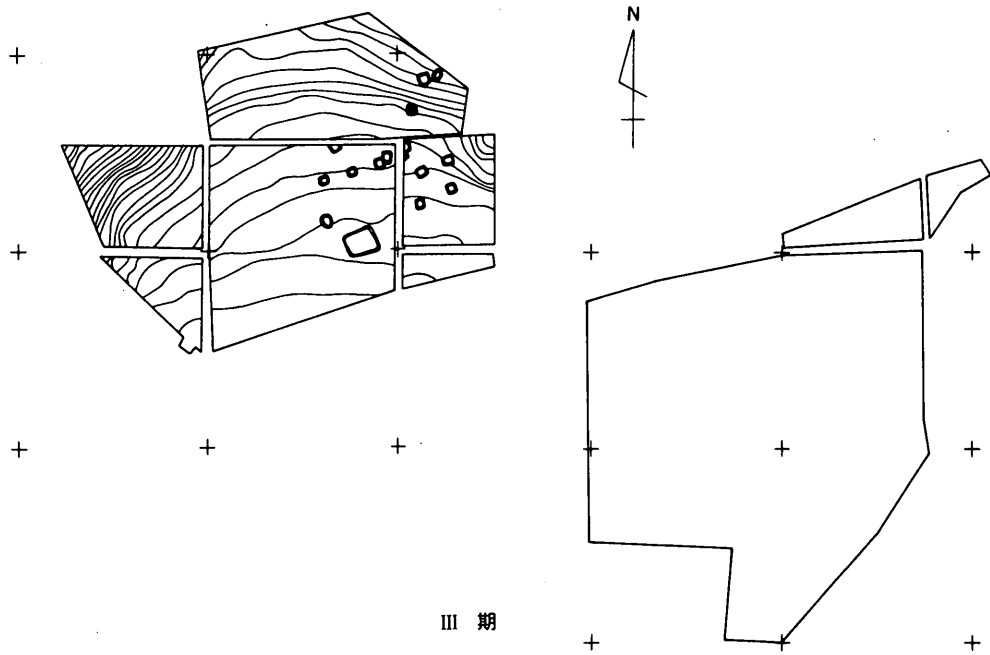


图16 利生寺遗址遗构变迁图(2)

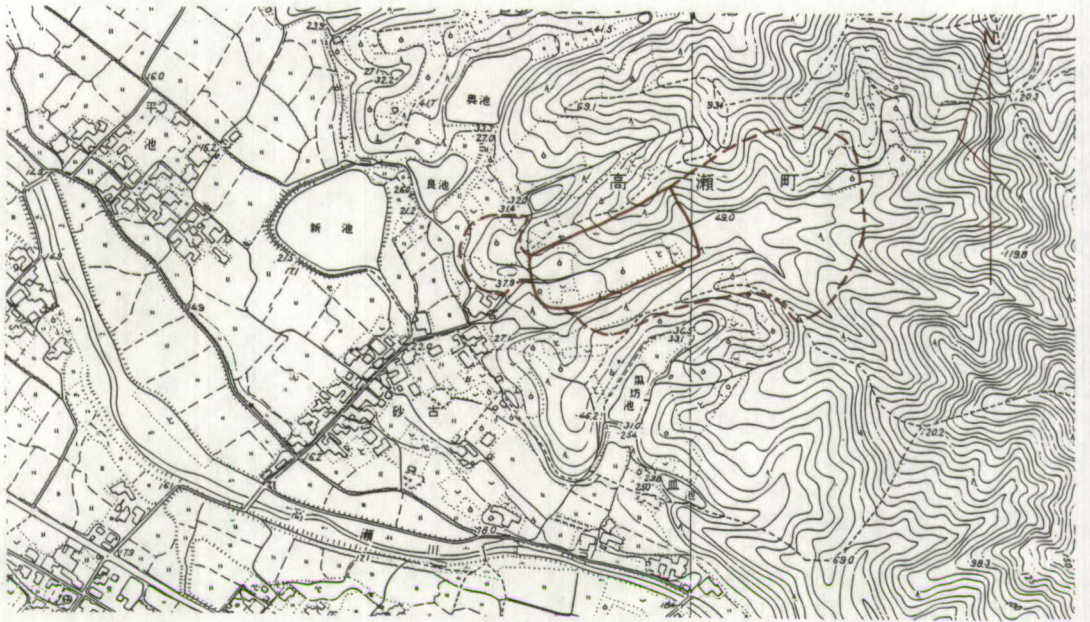


図17 利生寺遺跡の範囲

0 500m



## VI 利生寺古墳(2号墳)



## VI 利生寺古墳 (2号墳)

### 1 立地と利生寺古墳群

利生寺古墳は、鬼ヶ白山の西斜面の末端部に幾条にも延びる尾根上に立地する。その尾根は基部で巾80m、中程から巾を増して端部近くで二又状に分岐し、二筋の尾根となって終わる。尾根

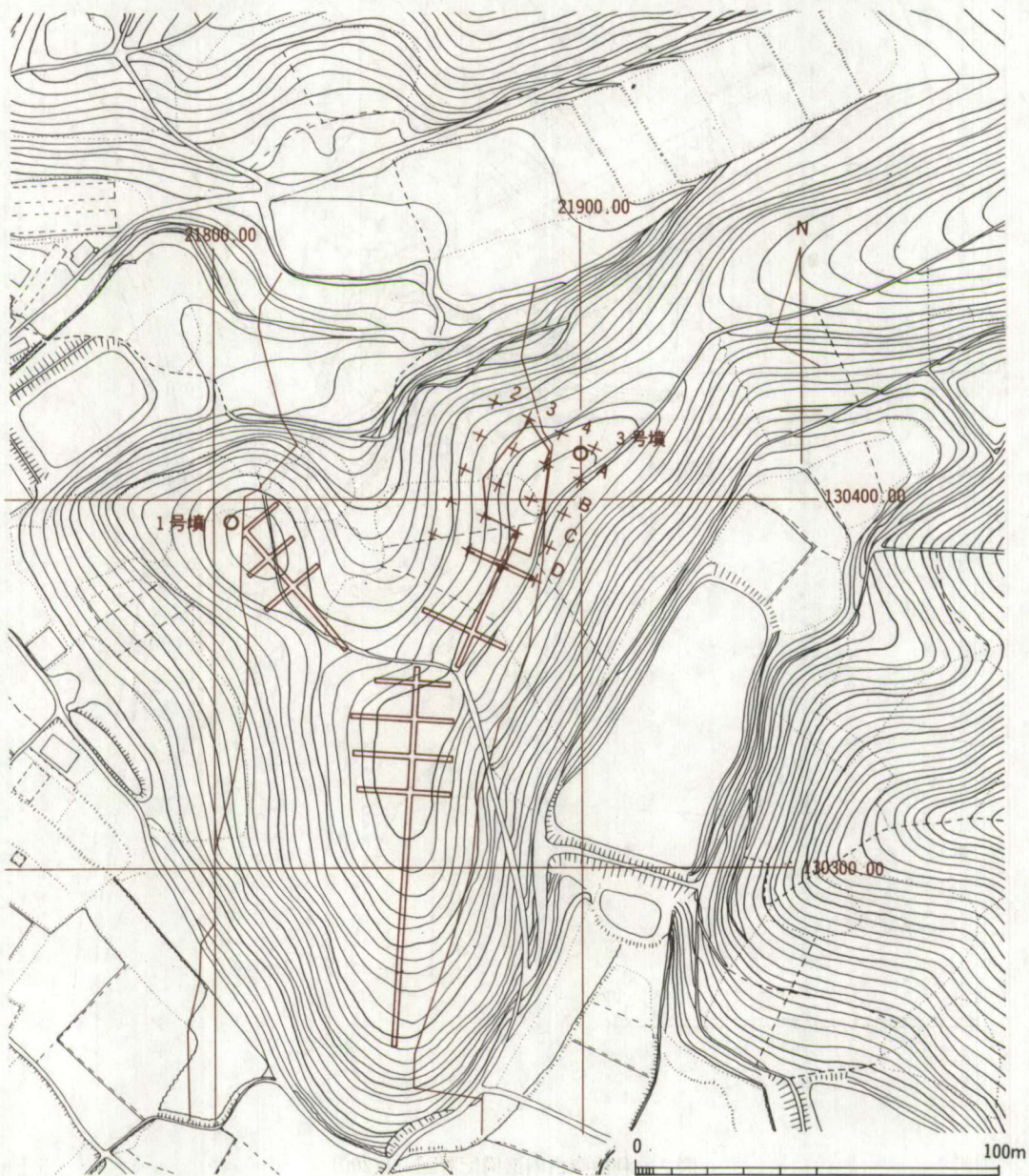


図1 利生寺古墳グリッド配置図 (1/1000)



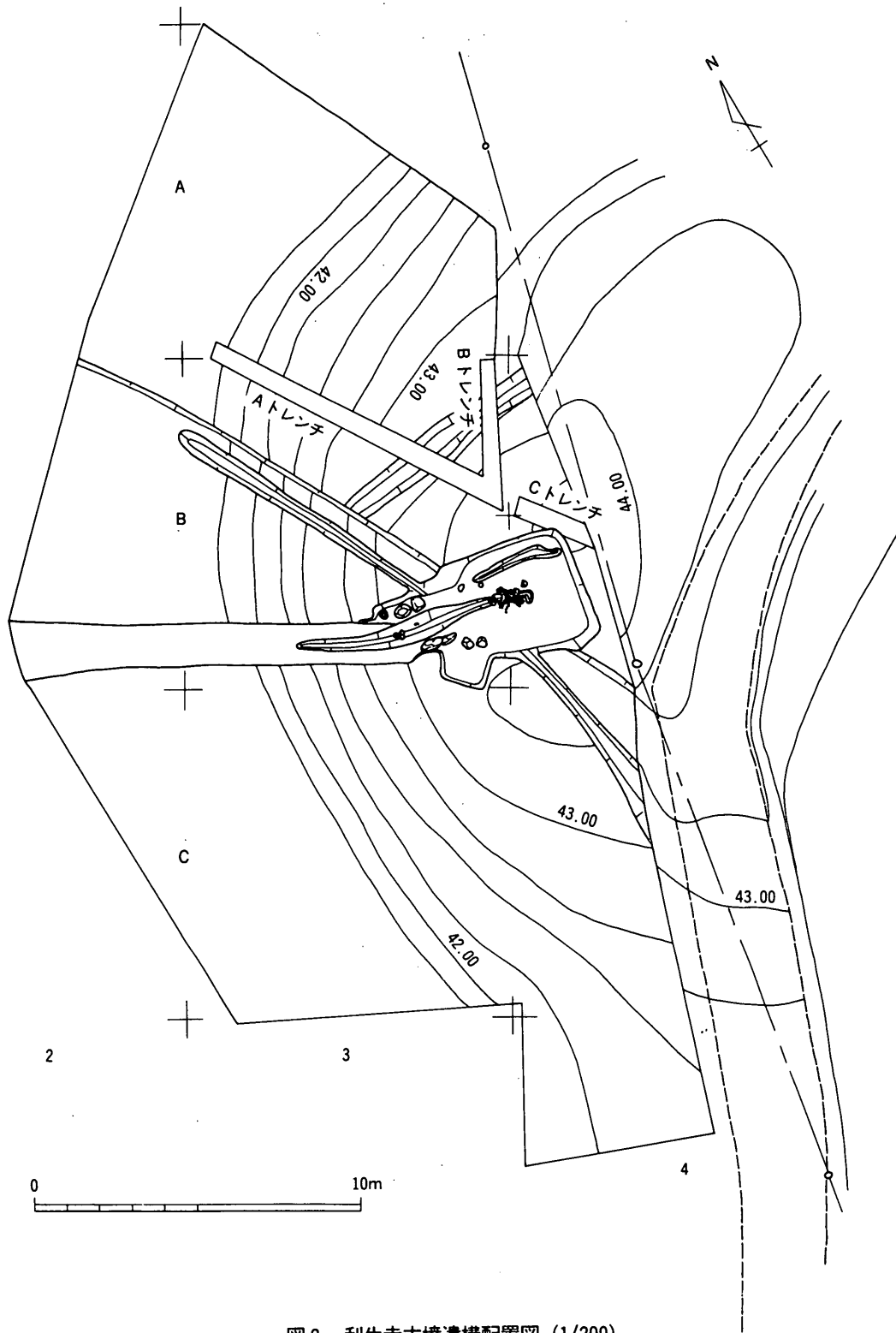


図2 利生寺古墳遺構配置図 (1/200)

と高瀬川との間約100m巾の平坦部には古墳時代後期の集落跡である大門遺跡がある。

試掘調査の結果や表採遺物、及び伝承から、この尾根には3基の古墳の存在が知れる。1号墳は、試掘調査では検出できなかったが、端部近くで分岐したうちの北側の尾根の頂部から、かつて須恵器杯身等が出土していることから、古墳としておく。現在は、畑となっている。2号墳は今回調査を行った古墳である。尾根中程の頂部に立地する。地目は畑と山林であった。3号墳は、2号墳の北東約10m余のところにな不自然な高まりと数10cm大の石が散在していることにより古墳とした。二又状に分岐する尾根のうち南側のそれは、頂部に比較的広い平坦部があり、標高も1号墳の所在する尾根よりも高く、また、眼下に同時期の集落が見えることから古墳築造の最適の場所と考えられるが、試掘調査では検出できなかった。現在知られる利生寺古墳群は上記の3基である。

## 2 遺構

### (1) 外部施設

古墳は、その内部主体を斜目に半裁するような位置で開墾による攪乱を受けていた。その結果、地形は0.5～1mの段差をもつようになっていた。地形測量図からは、墳丘の形状等は読み取れない。開墾を受けていない部分において設定したAトレンチによると(図3)、1は表土、6・7・9層は人為の加わっていない基盤土層と考えられる。高所端近くの3・4・5層は遺物は伴わないが、人為が加わっていると考えられる。20は等高線に沿うように延びるSD01の埋土である。

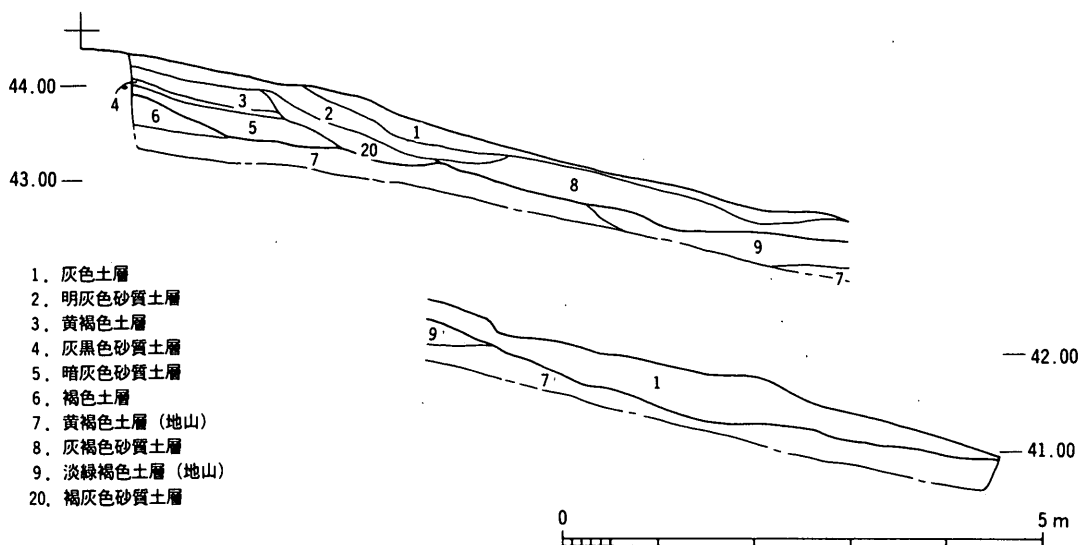


図3 Aトレンチ南壁土層図 (1/80)

遺物は検出できなかった。3・4・5層を盛土とするには、版築等は見られず、軟質の土である点から否定的にならざるを得ない。20を埋土とする溝状遺構は時期決定ができない点から周溝とすることは控えておく。外部施設の形状・規模については、調査区東側付近の調査が可能となった時に再度考えたい。

## (2) 内部主体

調査区頂部付近で溝状遺構(1)と土坑(1)を検出した。SD02は、近現代のものである。土坑は、最大巾3.53m、最大長6.58mの細長いものである。主軸方向はN80°Wである。南・西辺は、後世の攪乱と試掘トレンチのために原形を失っている。東辺は、主軸に直交し、両端はほぼ直角に屈曲して西方へ延びる。北辺は、直線的に約6.05m延び、西端近くで内側へほぼ直角に屈曲して約0.3m延び、さらに西方へほぼ直角に屈曲して延びる。端部はやや内湾気味となっている。この部分から土坑西辺が収束するのであろう。土坑が主軸を中心として左右対称形であるとするならば、本来の形状は、東辺部で巾3.53m、そこから巾を若干、減じながら約6.05m延び、その後、クランク状に巾を約0.3m減じ、さらに約0.4m延びて西辺をつくり完結されるものであったと推測される。

土坑内床面はほぼ水平である。土坑東半部の3辺の壁際から不整形の凹みが検出された。石の据え穴であろう。南・北辺の凹みの内巾は約1.7mである。土坑西半の北壁際に、平坦面を上面にした石(1)と石の据え穴と考えられる凹み(3)を、南壁際に平坦面を上面にした石(1)と稜線が上面にある石(1)を検出した。両辺にある石の内巾は約0.9mである。

東壁から約1.4mのところから、土坑主軸にほぼ沿う方向で延びる、長さ7.38mの溝を1条検出した。土坑西辺は確かではないが、溝は土坑外へ延びていたものと考えられる。溝東端部約1.05m間は、15～30cm大の板状石を溝に架して蓋としていた。溝の埋土は最下層に粘質土、上層には色調から2層に分けられ、微小な炭を混じり、固く締った砂質土があった。炭混じりの砂質土は、人為的に作られたものであろう。従って、そのような土を埋土とすることは、意図的に埋められたことの証としてよいであろう。土坑西半の北壁際の凹み付近の溝床面真上から蓋を倒立させて杯身に載せた状態の杯身・杯蓋セットを3組検出した。溝底部のレベルは、東から西方へゆるやかに下っていった。

溝東端部に架されている板状石の周囲には数cm大の小石が、敷かれた状態で集中していた。小石の上面直上から、内巾14cmの間隔で銅環が2点出土した。

なお、羨道部の埋土中から多量の須恵器と数点の土師器・鉄製品が出土したが、すべて攪乱を受けており、原位置は不明である。

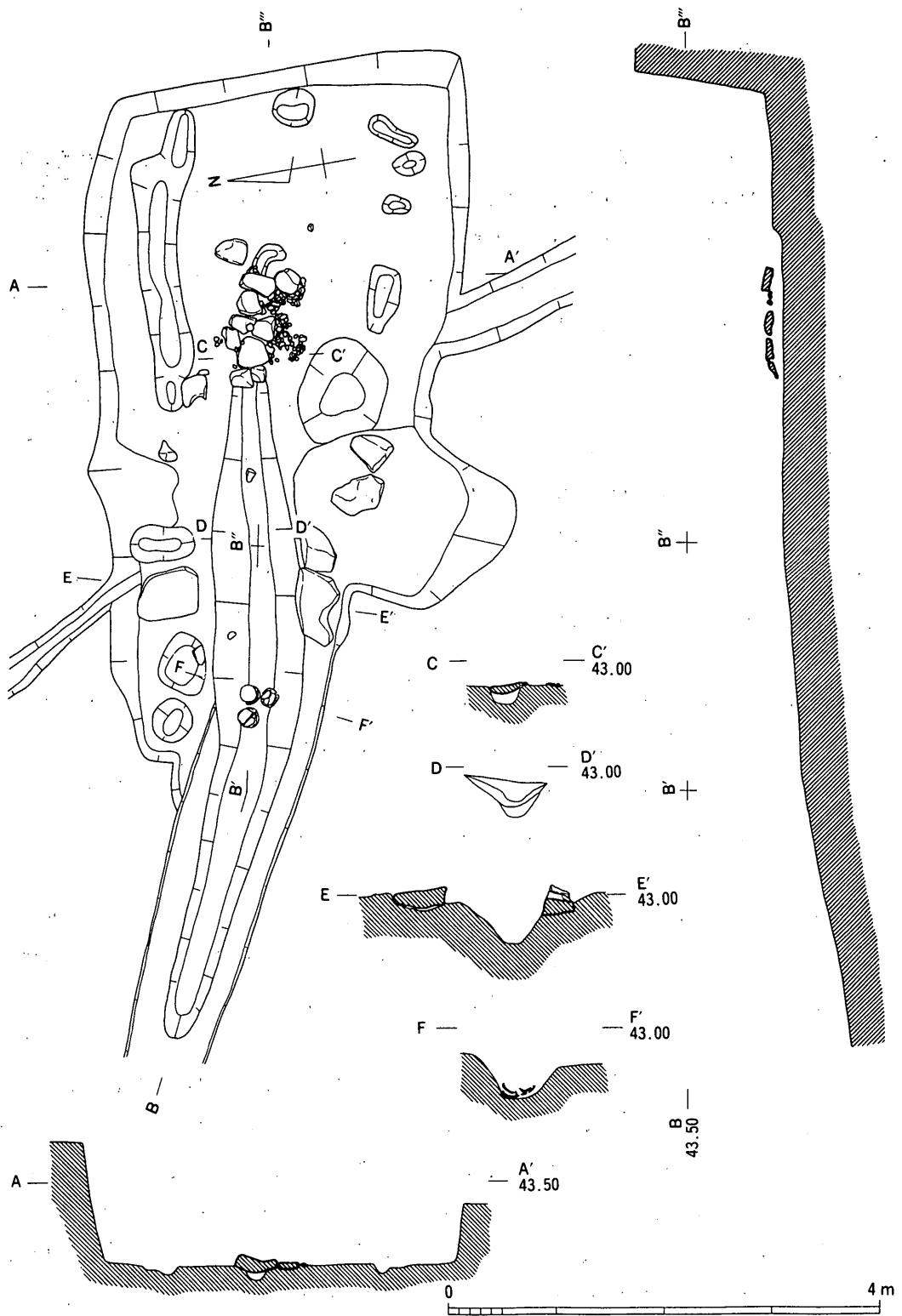


图4 利生寺古墳石室掘り形・排水溝等実測図 (1/60)

### 3 遺物

#### (1) 土器類

遺構別出土遺物の点数を表1に示した。

1～6は、排水溝底部に残置されていた杯身・杯蓋セット3組である。しかし、1～5と6は、法量・胎土・色調を異にする。2・4の口径は13.9・12.9cm、6は11.5cmである。1～5の内外面の色調は緑灰色であるが、6は灰白色・明青灰色である。しかし、形態・技法においては顕著な相違はみられない。

7の杯身は、1～5の部類のものである。8は、6の部類に属するものである。9～13の杯身は、底部がヘラ切りである。口径も9を除き10～11cmの間であって、他の杯身に比して小型である。14～16は、かえり部をもたない杯身である。底部はヘラ切りである。

17の杯蓋は、1～5の部類のものである。19～22の杯蓋の口径は10～12cmの間にある。19・20は口縁部が内傾するが、21・22は外傾する。18の口径は12.5cmで、法量においては、17と19～22の中間に位置するものである。

23は有蓋高杯である。脚部は、杯部から短く直線的に開いた後、外方へ屈曲し、さらに、すぐに内側へ屈曲してほぼ直線的に延び、端部はほぼ水平な面をなす。形態は、あたかも甗の口頸部を逆転させたものといえる。24・25は、外湾して、そのまま内面側を肥厚させる端部に至る、高さが低い脚部をもつ。26は、形態は24・25と同じであるが、高さが5.4cmで、24・25よりも高い脚部をもつ。

甗27は、体部最大径がそのほぼ中央にあり、穿孔位置も最大径部になされている。口頸部は二重口縁状に開く。口径は10.5cmで体部最大径より弱冠大きい。28は体部最大径がそのほぼ中央にあるが、穿孔は中央よりやや上方においてなされている。29は体部最大径がその上位1/3のところにある。穿孔も同じところになされている。30は大型の甗である。球形の体部の中央よりやや上方に穿孔がなされている。口頸部は外湾して強く開く。口径は体部最大形の2倍近くある。

長頸壺31は、体部上位に最大径をもつ。口頸部は直線的に外傾する。脚付短頸壺32は、外湾し、端部近くで屈曲して直線的となる高さ4.6cmの脚部に、器高10.7cmの短頸壺を載せる。器厚6～12mmで、33・34の短頸壺に比して分厚い。33は、楕円形の体部に直線的に外傾する口頸部がのびる。34は、直線的に外傾した後、口縁部近くで内方へ若干屈曲する口頸部をもつ。35は、口頸部を欠くが、短頸壺であろう。底部は平底である。36は大型の短頸壺である。体部最大径19.2cm、口径10.1cmで、前者に対する後者の比は、他の短頸壺に較べて小さい。

37は、横瓶の側面の一つであろう。円形粘土板を充填している。横瓶38は、約23.5×37.8cmの

表1 利生寺古墳出土土器集計表

	排水溝	掘乱坑
杯身	3	7
杯蓋	3	4
有蓋高杯		1
高杯脚部		3
甗大型		1
甗小型		3
長頸壺		1
横瓶		2
平瓶		4
土師器甗		1
合計	6	27

楕円形の体部のほぼ中央に外湾して延びる口径13.1cmの口頸部をつける。体部の前後で肩部の張り方が異なるために正立しない。

39は、大型の平瓶である。体部最大径はその上位1/4にある。体部上面の偏した部分に中心線が直立する口頸部を付す。口頸部は、口径12.1cm、高さ4cmで、他のものに較べて扁平である。40・41は、楕円形の体部の一方に偏した位置に、中心部が外傾する口頸部を付したものである。

43は土師器の甗である。体部中央に最大径を有し、穿孔の中心点は体部中央より上位にある。口頸部は外湾して強く開く。

44・46は土師器の杯である。体部内外面に平行する数本の稜線を残す。同タイプのものである。46は皿である。体部は直立に近い。器厚は全体に分厚い。

## (2) 金属製品

47・48は銅環である。ともに金鍍金の跡がある。49は、鉄製品の破片である。断面楔形で一辺に刃部をもつ。一端は次第に巾を減じて尖っていたことも考える。

## (3) 石製品

50はサヌカイトを素材とするナイフ形石器である。横長剥片を利用、一つのポジティブ面と二つのネガティブ面をもつ。打点を境いとして上半にのみブランディングを施すことで、鋭い先端部を得ている。51は胴張り長方形の一長辺と二短辺に刃部をもつ磨製石庖丁である。長軸方向に反りがあり、剥片時の腹背面の区別ができる。刃部は両面から磨き出している。中央、背寄りに両面から穿孔を行っている。52はサヌカイトを材料とする打製石庖丁である。両長辺に刃部をつくる。剥片端部では浅いが両端辺にくりこみをつくっている。剥片端部側1/3は、細かなブランディングのみで、剥片基部側2/3は、階段状剥離を加えた後、ブランディングを行って刃部を得ている。

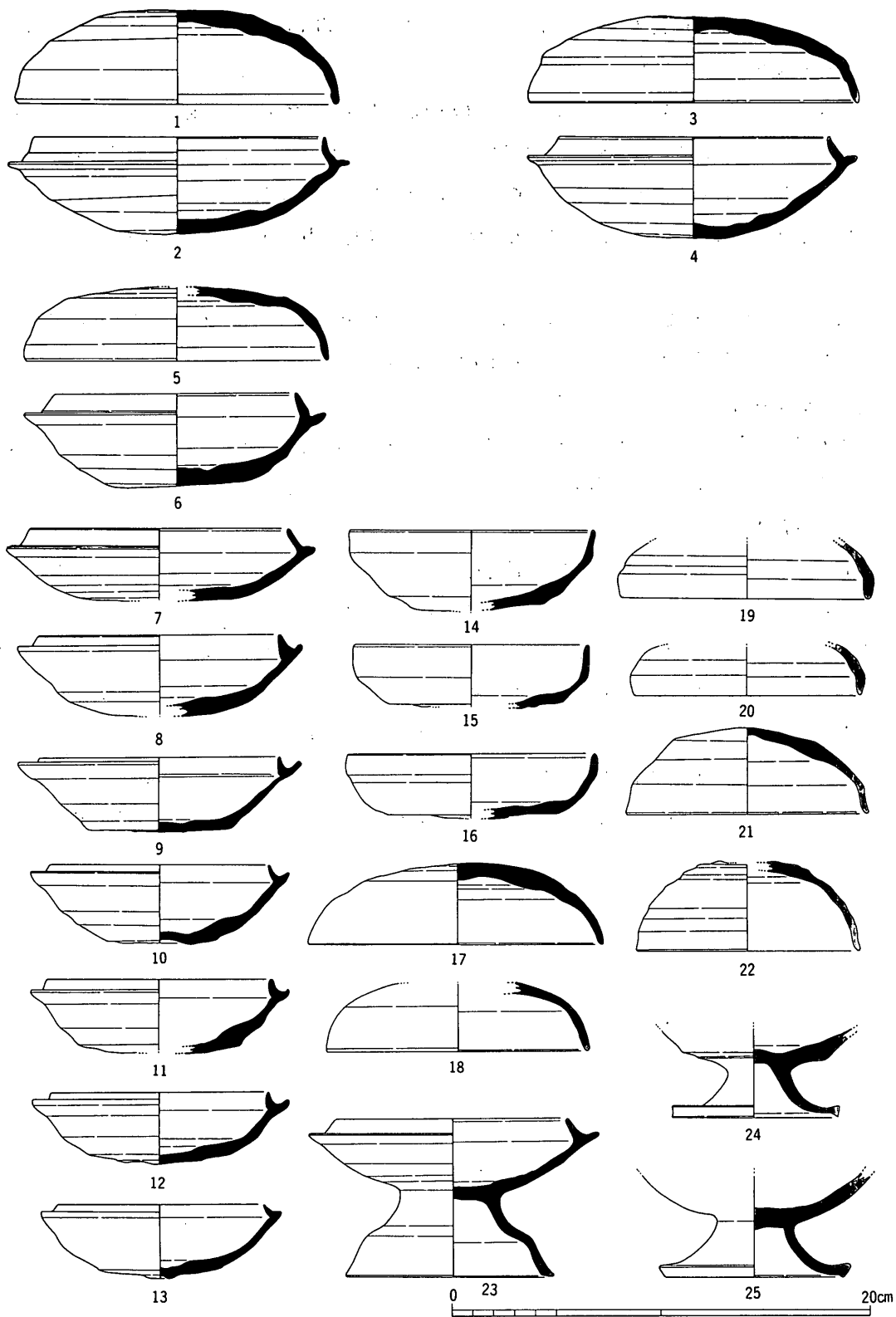


图5 排水溝内・石室掘り形内出土土器実測図 (1/3)

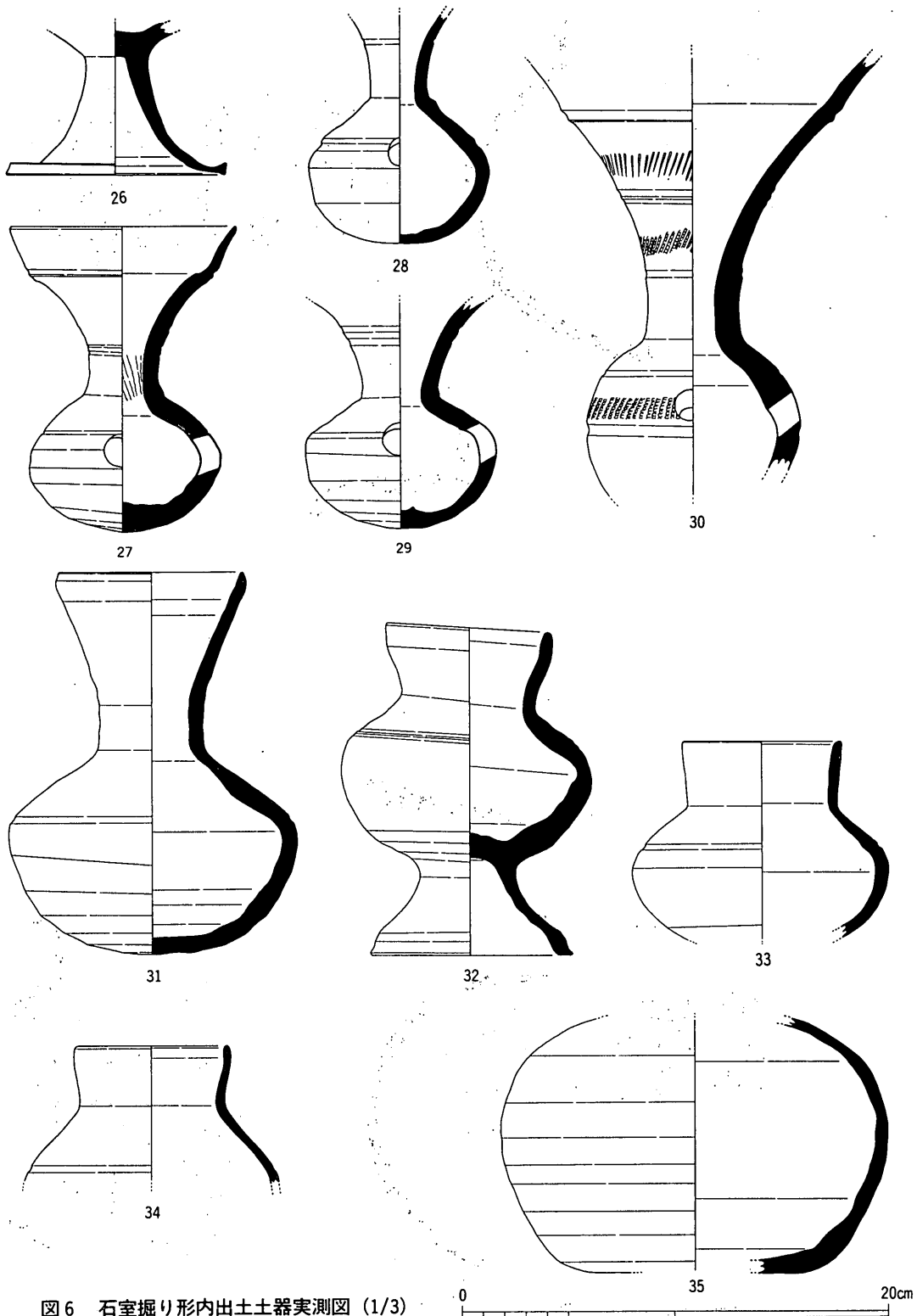
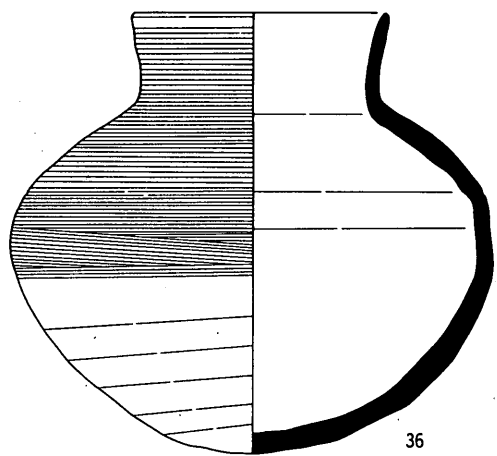
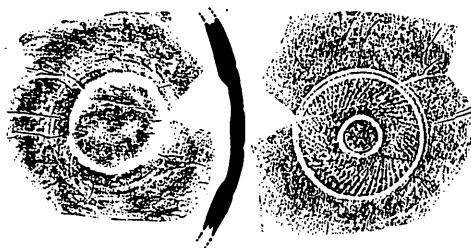


图6 石室掘り形内出土土器実測図 (1/3)

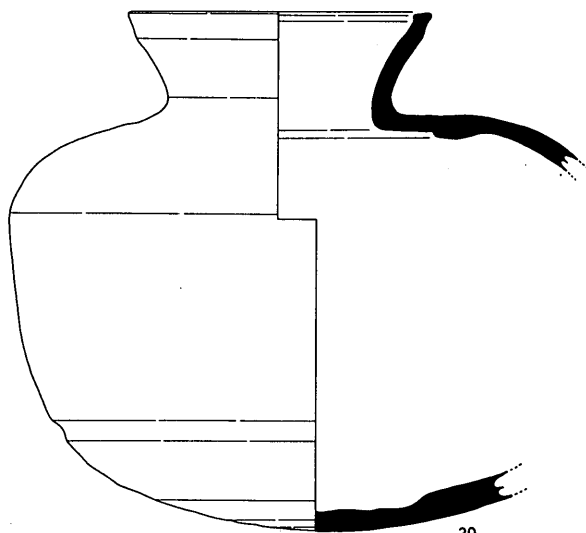




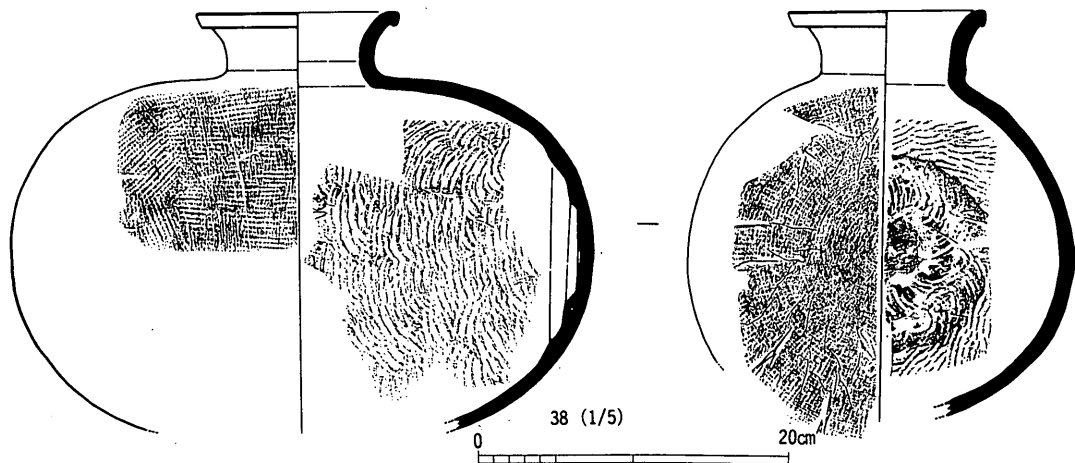
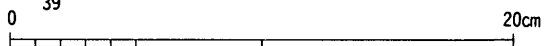
36



37



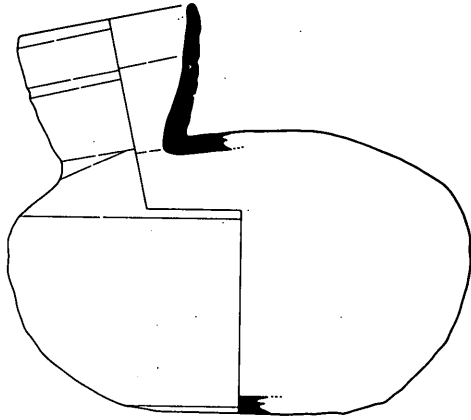
39



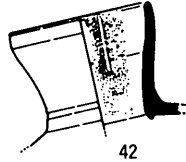
38 (1/5)

20cm

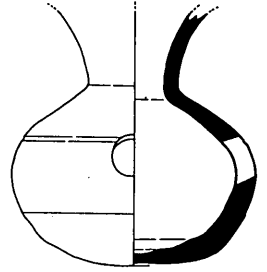
图7 石室掘り形内出土土器実測図 (1/3・1/5)



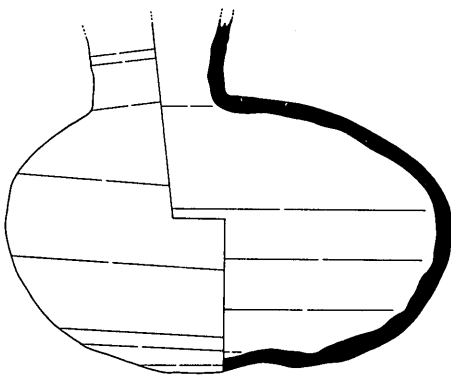
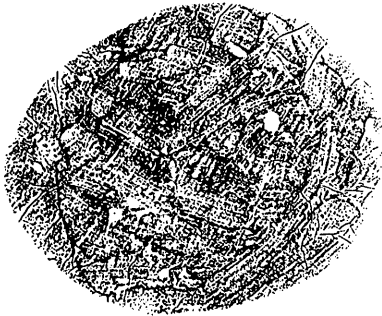
40



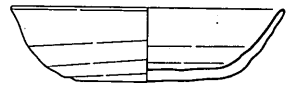
42



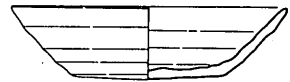
43



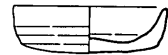
41



44



45



46

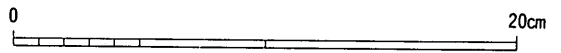


図8 石室掘り形内・グリッド包含層出土土器実測図 (1/3)

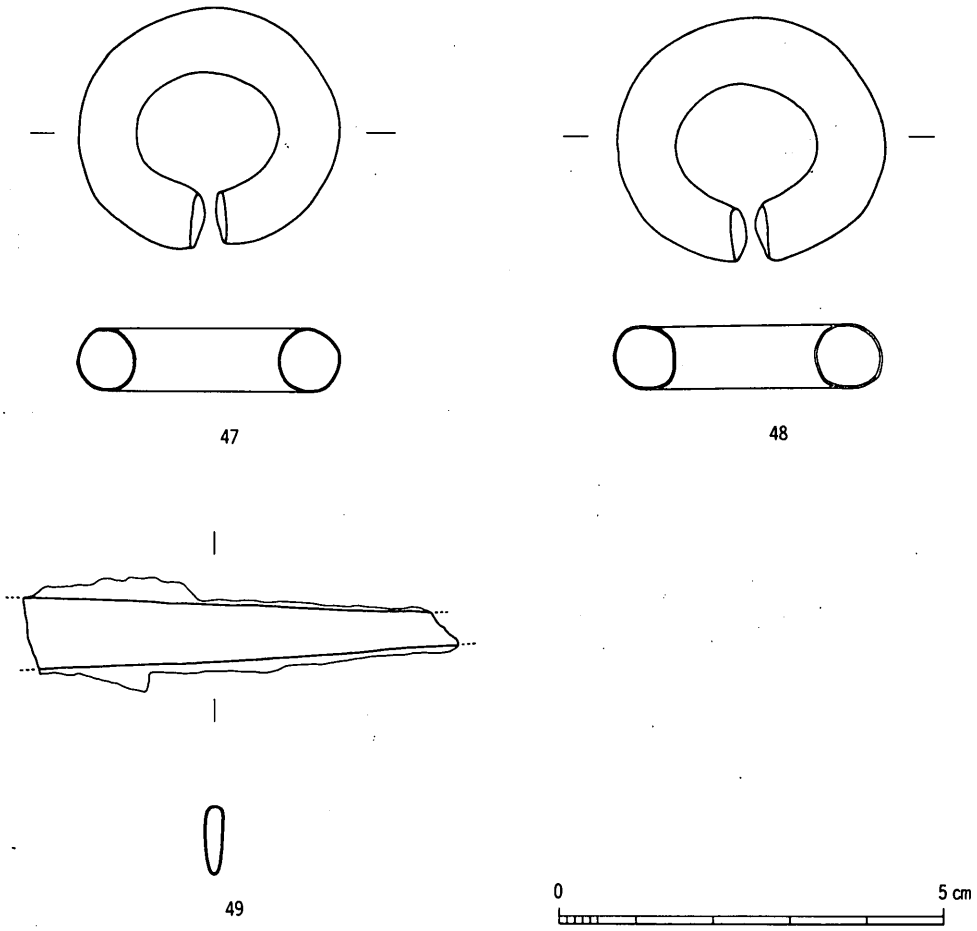
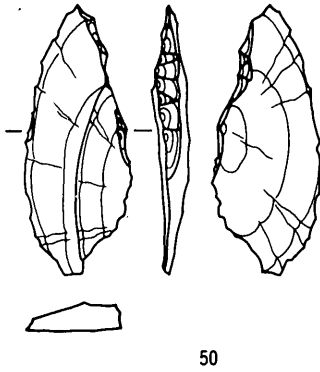
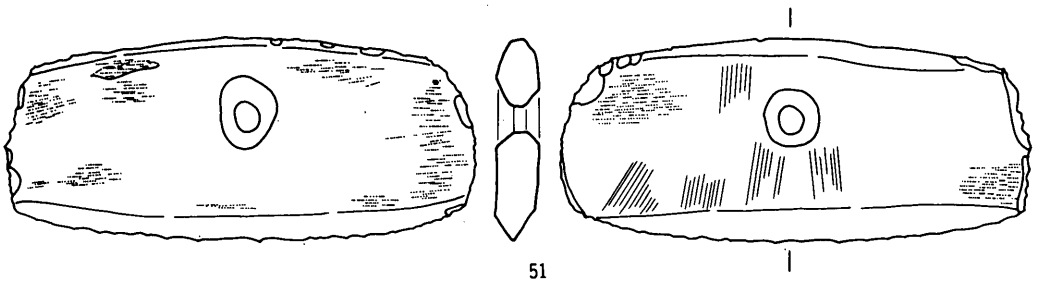


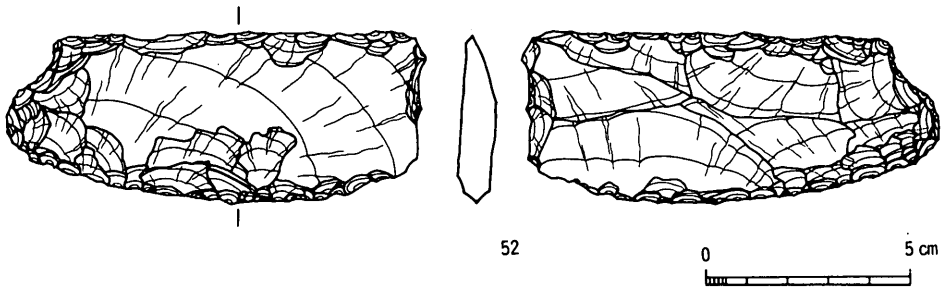
図9 排水溝充填石直上出土銅環，石室掘り形内出土不明鉄器実測図（1/1）



50



51



52

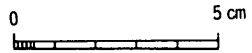


図10 石室掘り形内出土石器実測図 (1/2)

表2 遺物観察表

遺構名 包含層名	遺物 番号	材 質	器 種	口 縁 部	体 部	底 部 (頂 部)	胎 土	色 調	備 考
排水溝	1	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	3mm以下の半透明砂粒を含む。白色の粒状土を多く含む。	緑灰色 にぶい黄褐色	
排水溝	2	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	3mm以下の半透明・白色砂粒を含む。炭化物を混入している。	緑灰色 にぶい黄褐色	
排水溝	3	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	3mm以下の半透明・白色砂粒を含む。炭化物を混入している。	緑灰色 にぶい黄褐色	
排水溝	4	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	3mm以下の半透明・白色砂粒を含む。炭化物を混入している。	暗緑灰色 緑灰色 にぶい黄褐色	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材 質	器 種	口 縁 部	体 部	底部 (頂部)	胎 土	色 色 調	備 考
排水溝	5	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	3mm以下の半透明・白色砂粒を含む。炭化物とし、白色土粒を混している。	緑灰色 // にぶい黄褐色	
排水溝	6	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	2mm以下の半透明砂粒を含む。黒色粒を少し含む。	灰白色 // 暗灰色 // 淡褐色	
攪乱坑	7	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	1mm以下の半透明・白色砂粒を含む。白色土を	暗緑灰色 // 緑灰色 // 明緑灰色	
攪乱坑	8	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(右)	1mm以下の半透明砂粒を含む。	灰白色 //	
攪乱坑	9	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を含む。	灰白色 //	
攪乱坑	10	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	2mm以下の半透明砂粒を多く含む。	灰白色 // //	
攪乱坑	11	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を多く含む。	淡緑灰色 // //	
攪乱坑	12	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	青灰色 // //	
攪乱坑	13	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を多く含む。	灰白色 // 暗灰色 // 灰赤色	
攪乱坑	14	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を含む。	緑灰色 // 灰白色	
攪乱坑	15	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を含む。	灰白色 //	
攪乱坑	16	須恵器	杯身	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を含む。	緑灰色 // 灰白色	
攪乱坑	17	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	2mm以下の白色砂粒を含む。3mm以下の黒色粒を含む。	暗紫灰色 // 紫灰色 // 明赤褐色	
攪乱坑	18	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の半透明砂粒を含む。	青灰色 // 暗赤灰色	
攪乱坑	19	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の半透明・白色砂粒を含む。	青灰色 // 暗赤褐色	
攪乱坑	20	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	(?)	1mm以下の半透明・白色砂粒を含む。	青灰色 // //	
攪乱坑	21	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	1mm以下の半透明砂粒を多く含む。	灰色 // 淡緑灰色 // 灰色	
攪乱坑	22	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	2mm以下の白色・半透明砂粒を多く含む。	青黒色 // 灰赤色	
攪乱坑	23	須恵器	有蓋高杯	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)、脚部は回転ナデ	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	青灰色 // //	
攪乱坑	24	須恵器	高杯	(?)	回転ナデ	ヘラ切り、脚部は回転ナデ	1mm以下の半透明砂粒を含む。	灰白色 //	
攪乱坑	25	須恵器	高杯	(?)	回転ナデ	ヘラ切り?、脚部は回転ナデ	1mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	灰白色 // 暗紫灰色 // 灰赤色	
攪乱坑	26	須恵器	高杯	(?)	(?)	(?),脚部は回転ナデ	1mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	青灰色 // 灰赤色	
攪乱坑	27	須恵器	甗	回転ナデ。頸部に2条の沈線。同内部に紋り目が残る。	回転ナデ	回転ヘラ削り(右)	4mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	青灰色 // 灰色	
攪乱坑	28	須恵器	甗	回転ナデ。頸部に1条の沈線。	回転ナデ。凹縁状の凹みが1条めく。	不定方向の荒いヘラ削り	1mm以下の半透明・白色砂粒を含む。	灰白色 // 青灰色	
攪乱坑	29	須恵器	甗	回転ナデ。頸部に2条の沈線。	回転ナデ。1条の沈線あり。	回転ヘラ削り(左)	5mm以下の白色・半透明砂粒を含む。1mm以下の黒色粒を含む。	青灰色 // //	
攪乱坑	30	須恵器	甗	回転ナデ。1及至2条の平行する沈線を3箇所に施す。その間に帯描文と帯描列点文を施す。	回転ナデ。最大径部に1条の沈線を施す。その上下に施す。列点文に施す。底部上位にも1条の沈線を施す。	(?)	白色・半透明の微砂を含む。1mm以下の黒色粒を少し含む。	青灰色 //	
攪乱坑	31	須恵器	長頸壺	回転ナデ	回転ナデ。最大径部に1条の沈線を施す。	回転ヘラ削り(左)	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	青灰色 // 暗赤灰色	
攪乱坑	32	須恵器	脚付短頸壺	回転ナデ	回転ナデ。体部上位に2条の沈線を施す。	回転ヘラ削り(左)。脚部は回転ナデ。	2mm以下の白色・半透明砂粒を含む。1mm以下の黒色粒を含む。	暗紫灰色 // 紫灰色 // 赤褐色	
攪乱坑	33	須恵器	短頸壺	回転ナデ	回転ナデ。体部上位に1条の沈線を施す。	回転ヘラ削り(左)	1mm以下の半透明砂粒を含む。	暗青灰色 // 灰赤色	
攪乱坑	34	須恵器	短頸壺	回転ナデ	回転ナデ。体部上位に1条の沈線を施す。	(?)	1mm以下の半透明砂粒を含む。	灰白色 // //	
攪乱坑	35	須恵器	壺	(?)	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)	3mm以下の白色・半透明砂粒を含む。3mm以下の黒色粒を多く含む。	灰白色 // //	

遺構名 包含層名	遺物 番号	材 質	器 種	口 縁 部	体 部 部	底部 (頂部)	胎 土	色 調	備 考
攪乱坑	36	須恵器	短頸壺	外面カキ目	体部上位に1条の沈線。体上中にカキ目。	回転ヘラ削り(左)	2mm以下の白色半透明砂粒を含む。1mm以下の黒色粒を含む。	灰白色 //	
攪乱坑	37	須恵器	横瓶?	(?)	外面・同心円状に1条と2条単位の沈線。沈線によって面り部分に左回りの放射線状に櫛目状の文を施す。	(?)	2mm以下の白色砂粒を含む。	青灰色 // 灰色 // 青灰色	
攪乱坑	38	須恵器	横瓶	回転ナデ	内面・同心円状タタキ 外面・平行タタキ 筒側の丸く終わる部分には同心円状のカキ目を施す。	内面・同心円状タタキ 外面・平行タタキ	5mm以下の白色・半透明砂粒を含む。1mm以下の黒色粒を含む。	暗青灰色 // 緑灰色	
攪乱坑	39	須恵器	平瓶	回転ナデ	回転ナデ。体部下位に凹線状の凹みがめぐる。	回転ヘラ削り(右)	2mm以下の半透明砂粒を含む。1mm以下の黒色粒を含む。	青灰色 // //	
攪乱坑	40	須恵器	平瓶	回転ナデ	回転ナデ	外から中心部へ向かう荒いヘラ削りを施す。	1mm以下の白色・半透明砂粒を含む。	緑灰色 // //	
攪乱坑	41	須恵器	平瓶	回転ナデ	回転ナデ	荒い回転ヘラ削り(右)	1mm以下の白色・半透明砂粒を多く含む。	青灰色 // //	
攪乱坑	42	須恵器	平瓶	回転ナデ。内面にヘラ記号あり(縦1本の沈線)	(?)	(?)	1mm以下の白色砂粒を含む。	紫灰色 // 灰赤色	
攪乱坑	43	土師器	甌	回転ナデ	回転ナデ体部上位に1条の沈線を施す。	ナデ	1mm以下の半透明砂粒を含む。	浅黄褐色 // //	
B-4 第2層	44	土師器	杯	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	2mm以下の半透明・白色砂粒を多く含む。土は精良である。	浅褐色 // //	
B-4 第2層	45	土師器	杯	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(右)	3mm以下の半透明・白色砂粒を多く含む。土は精良である。	浅褐色 // //	
B-4 第2層	46	土師器	杯	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り(不定方向)	褐色の塵粒を含む。	灰褐色 // //	

## 4 小 結

### (1) 遺 構

銅環が出土したことにより、この土坑、及びそれに付属されると考えられる石や溝は、内部主体をつくる遺構であったとしてよいであろう。次に、内部主体の原形を復元してみよう。

土坑内に石と据え穴としての凹みがあることから、内部主体は石室である。主軸方向はN80°Wである。玄室内巾約1.7m、土坑北辺の下場線が広がる箇所までを玄室の範囲として、奥行きは約3.05m、高さは、土坑の深さである1.2mの前後としておく。床面には、数cm大の小石を敷いていた痕跡があった。羨道は内巾約0.9m、長さは約2m、高さは不明。羨道の外方に石を使用しない空間が作られていたが、規模等は不明である。羨道北辺の石・凹みの内つらと玄室北辺の凹みの内つらは同一線上にある。一方南辺側のそれは、玄室の内巾が羨道のそれより広く、両者はずれている。このことは、石室に向って右側が出張る片袖式のプランをもつといえよう。排水溝は、玄室の中央付近から始まり、羨道を貫通して、石室外まで延びていた。玄室内の部分は板石を架して蓋としていた。なお、羨道部分において、羨道巾一杯に溝が掘られていることは、墓道の機能を併有していた可能性を考えさせる。

玄室に敷かれた小石直上の2点の銅環の位置に被埋葬者の頭部があったとすれば、そこから壁面までの間の長さを考慮すると、羨道側を頭部とし、奥壁側に足部があったと考えられる。一方、

頭部は奥壁側にあると前提すれば、遺体の体・足部は溝部・羨道部にかかることになる。このことは、玄室側に2mの余地を持つことから追葬ということになる。その場合、排水溝は埋っていたであろう。

羨道西端部付近の排水溝底部直上に、杯身の上に倒立させた杯蓋を置いた状態のものが3組出土した。供献した時の状態を保っているといえよう。

## (2) 遺物

古墳の時期と追葬の可能性を考えてみる。杯身を検討材料とする。杯身は、まず、かえり部があるものとな

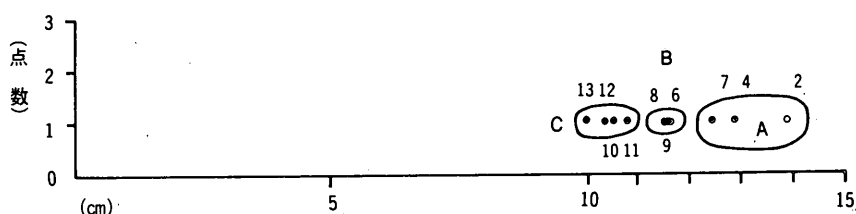


表3 須恵器杯身口径値分布表(立ち上がり部)

前者には、口径の大小がある、口径値を分布表にしてみた(表3)。口径はA・B・Cの3群に分けられる。A群はかえり部が最も高く、底部はすべて回転ヘラ削りでその範囲も最も広い。C群はかえり部が最も低く、底部はすべてヘラ切りである。B群6は、かえり部高はA群並に高く、底部は回転ヘラ削りであることは、A群の要素をもつといえる。8は、底部ヘラ切りであるが、かえり部高が低いことからC群側に近いといえよう。9は、かえり部高は低く、底部ヘラ切りであることはC群の要素をもつといえる。このことは、B群がA群とC群の中間的な要素をもつものであるといえよう。しかし、形式的には、それぞれ別なものとして分類されるものであろう。

ところで、A群の2・4とB群の6は、その出土状態から一括のものである。このことは、A群とB群の一部は、分類されるものであるが同時併存するものであるということを示している。さらに、B群の一部(8・9)とC群も同様に同時併存する可能性をもつといえよう。しかし、A群とC群はB群を間に置いて懸隔しているから、同時併存の必然性はないと考えるべきであろう。

以上から、利生寺古墳の遺物には2時期あるとすることができよう。A群に代表される杯身は、中村編年<sup>(1)</sup>のII型式4段階、C群に代表される杯身はII型式6段階に相当し、田辺編年<sup>(2)</sup>では前者はTK43、後者はTK217に相当すると考えたい。絶対年代は、田辺編年に従い前者は6世紀後半、後者は7世紀前半としておきたい。

このように2時期の存在が十分に考えられ、さらに、前者の遺物は排水溝底部に残置されたもので、後者は埋没した排水溝より上層において出土したものであることを考えると、追葬が行われた可能性は十分にありとすることができる。

(1) 中村浩『和泉陶器窯の研究』(1981年、柏書房)

(2) 田辺昭三『須恵器大成』(1981年、角川書店)

## VII 北条遺跡





## VII 北条遺跡

北条遺跡は、高瀬町大字上高瀬字北条に所在する。かつて銅剣が3口発見されている<sup>(1)</sup>。調査地は銅剣出土地から約150m南西へ寄った低丘陵上である。調査は等高線に直交するトレンチを5本設定して行った。

土層序は耕作土・黄褐色粘質土・赤褐色粘質土で、第2層以下は無遺物層である。すべてのトレンチで、遺構は検出されず、近現代の遺物を除いて遺物の出土はなかった。

(1) 「北条遺跡」(『新編香川叢書考古篇』1983年)

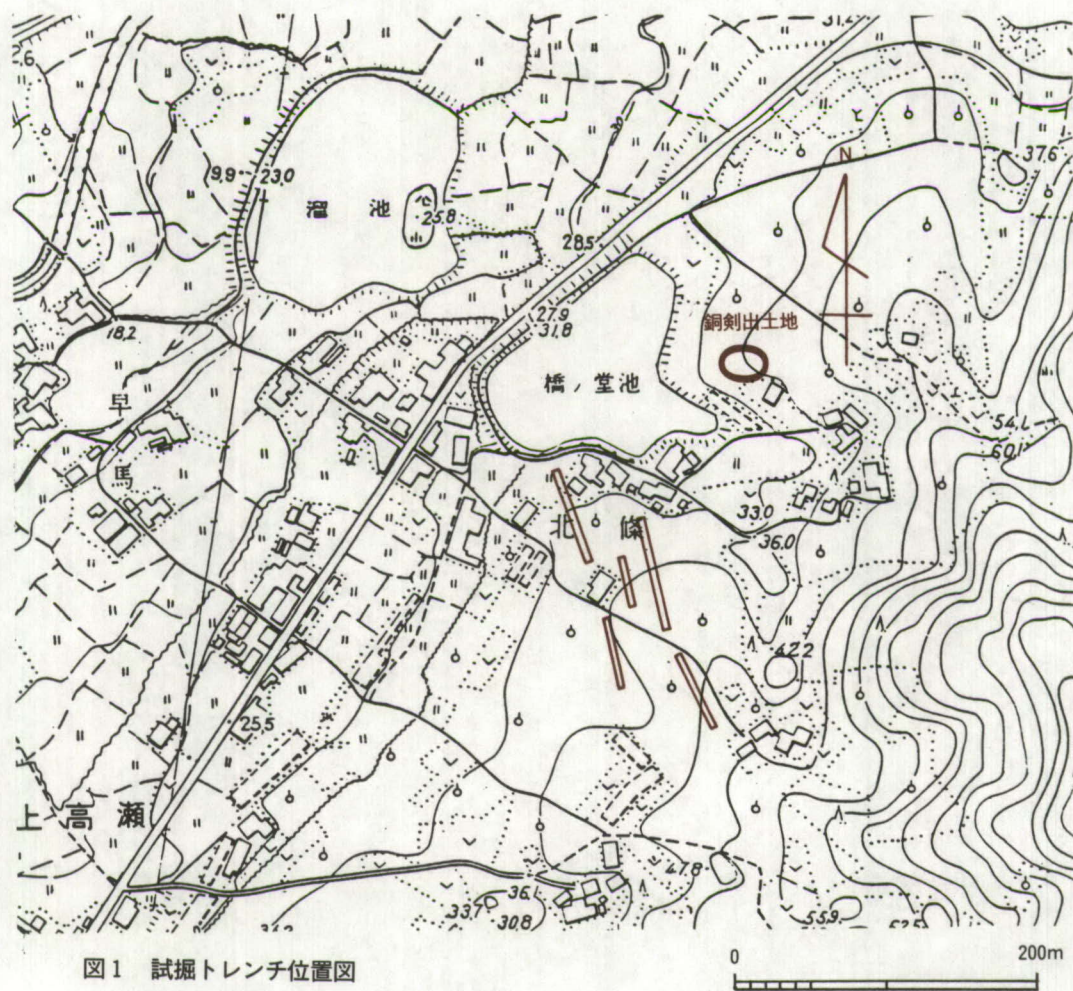


図1 試掘トレンチ位置図



## VIII 自然科学的調查



## VIII 自然科学的調査

### 一 大門遺跡出土鉄滓の調査

佐藤 豊 (和鋼記念館副館長)

四国横断自動車道建設にともない、予定地域内にある大門遺跡の事前調査が昭和60年4月より行われた。同遺跡は古墳時代後期と14世紀との遺構があり、鉄滓は両遺構の竪穴住居跡と溝状遺構から出土し、中世遺構からは韃の羽口や焼土が出土されている。同遺跡は三豊郡高瀬町上勝間字砂古にあって、鬼ヶ白山から派生する一尾根が終って、高瀬川に至る間の巾約70mの狭小な平地にある。

出土鉄滓について香川県教育委員会より調査の依頼があったので、化学分析、反射顕微鏡組織およびE PMA、X線粉末回析により鉄滓構成相の解析を行なった。その結果を報告するとともに若干の考察を加えたので併せて報告する。

#### 1 資 料

資料の明細及び外観をそれぞれ表1、写真1に示す。

表1 資料の明細

番号	名 称	明 細	時代	個数	重量(g)
No 1	竪穴住居跡026	表、裏とも赤味を帯び、厚みは約20mm、やや半円状で中は黒く気泡あり	7世紀	1	120
2	〃	表、裏とも赤味をあり、断面の中側は黒く気泡あり、厚みは約25mm位	〃	1	70
3	〃	〃	〃	1	110
4	〃	黒く気泡あり、厚みは約20mm位、裏側は砂の上を流れた感じ、砂をかんでいる。	〃	1	120
5	溝状遺構 S D 20	裏側に砂をかんでいる、気泡あり、裏側、断面とも黒く厚み約20mm位	〃	3	100
6	〃 S D 29	厚み約30mm位、表面に赤味あり、断面は黒い	〃	1	160
7	〃 S D 44	厚み約25mm位、表面に赤味あり、断面は黒い	〃	1	40
8	〃 S D 07	裏側は砂をかんでいる、赤味を帯び、表面は凸凹状で黒く、厚み約20mm位	14世紀	1	100
9	〃 S D 02 砂質土層	裏側は碗形となっており、砂をかんでいる、全体的に赤味を帯び、厚み約25mm	〃	1	200



写真1-1  
資料No.1



写真1-2  
資料No.2



写真1-3  
資料No.3



N04大門竪穴住居跡鉄滓06

写真1-4  
資料No.4



N05大門溝状遺構鉄滓SD20

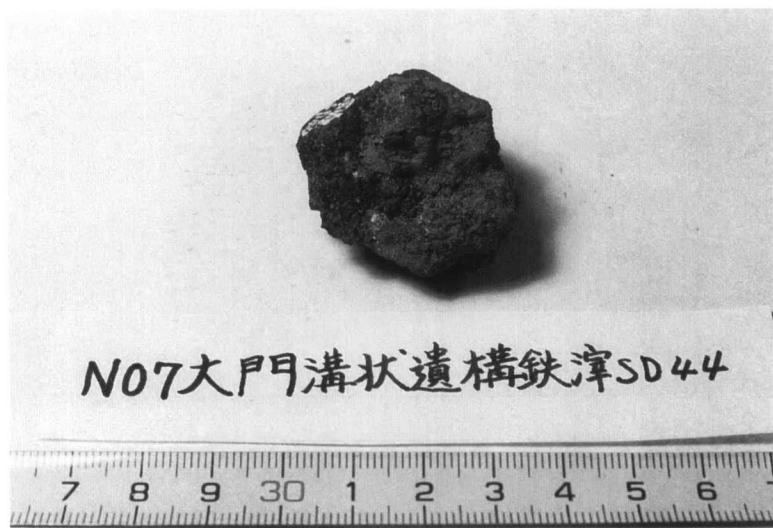
写真1-5  
資料No.5



N06大門溝状遺構鉄滓SD29

写真1-6  
資料No.6





N07大門溝状遺構鉄滓SD44

写真1-7  
資料No.7



N08大門遺跡鉄滓SD07

写真1-8  
資料No.8



N09大門遺跡鉄滓SX03

写真1-9  
資料No.9

## 2 化学組成

各資料より約5gの分析試料を採取し、次の方法により化学組成を決定した。

元 素	分 析 方 法
C (炭素)	赤外線吸収法
S (硫黄)	同上
SiO <sub>2</sub> (シリカ)	2 酸化珪素重量法
MnO (酸化マンガン)	過沃素酸ナトリウム酸化吸光光度法
P (燐)	モリブデン青吸光光度法
Ni (ニッケル)	原子吸光光度法
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (酸化クロム)	同上
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (5 酸化バナジウム)	同上
Cu (銅)	同上
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (アルミナ)	同上
CaO (カルシヤ)	同上
MgO (マグネシア)	同上
TiO <sub>2</sub> (チタニヤ)	ヂヤンチピリル・メタン吸光光度法
M・Fe (金属鉄)	塩化第2水銀溶解・重クロム酸カリウム滴定法
T・Fe (全鉄)	3 塩化チタン還元重クロム酸カリウム滴定法
FeO (2 価酸化鉄)	重クロム酸カリウム滴定法
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (3 価酸化鉄)	(T・Fe-Fe <sup>++</sup> ) より算出

結果を表2に示す。

表2 鉄滓の化学組成 (重量%)

番号	名 称	C	SiO <sub>2</sub>	MnO	P	S	Ni	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Cu	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	MgO	M・Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	T・Fe	K	Na
No 1	竪穴住居跡026	0.12	8.47	0.09	0.13	0.016	0.03	0.02	0.003	0.01	0.87	0.13	0.18	0.30	0.69	60.07	23.95	63.32	0.44	0.35
2	〃	0.024	17.07	0.10	0.075	0.013	0.03	0.06	0.009	0.04	1.52	0.22	0.41	0.35	0.74	58.14	14.82	55.47	0.80	0.45
3	〃	0.056	18.45	0.15	0.14	0.018	0.03	0.04	0.005	0.05	1.68	0.18	0.47	0.33	0.69	54.52	15.53	53.24	0.72	0.50
4	〃	0.014	15.24	0.11	0.079	0.008	0.04	0.02	0.005	0.08	1.52	0.17	0.46	0.35	0.60	59.15	15.68	56.92	0.74	0.47
5	溝状遺構 S D 20	0.046	27.08	0.14	0.098	0.019	0.03	0.03	0.001	0.03	4.12	0.23	1.14	1.03	0.78	43.20	12.10	41.94	1.12	0.58
6	〃 S D 29	0.11	9.35	0.21	0.095	0.014	0.02	0.02	0.001	0.06	1.09	0.08	0.54	0.27	0.56	58.43	21.65	60.47	0.46	0.27
7	〃 S D 44	0.062	15.76	0.06	0.12	0.011	0.03	0.03	0.001	0.01	1.35	0.13	0.34	0.33	0.58	60.27	16.10	57.99	0.59	0.40
8	〃 S D 07	0.042	18.51	0.06	0.063	0.015	0.03	0.05	0.001	0.04	1.55	0.13	0.43	0.26	0.47	62.36	10.25	55.65	0.69	0.38
9	〃 S D 02 砂質土層	1.15	11.50	0.07	0.13	0.008	0.03	0.18	0.003	0.01	1.50	0.13	0.21	0.30	0.60	47.71	28.10	56.70	0.39	0.35

たたら製鉄の際に発生する鉄滓は砂鉄を原料に用いた場合、 $\text{TiO}_2$ が少なくとも2～3%以上、多いもので10～20%は含まれている。これに対し本鉄滓は $\text{TiO}_2$ が0.13～0.23%であるところから“たたら”滓とは思われない。また、鉱石を原料に用いた場合を考慮に入れてもT.Feが高いところから製錬滓とは若干違うのではないかと思考される。

鍛冶滓は精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓に分類され、一般的に鍛錬鍛冶滓はT.Feが高く造滓成分が低いといわれていることからすれば、資料No.1は鍛錬鍛冶滓に含まれるべきものと思われ、またNo.5資料は造滓成分が33.7%と多く、T.Feも低いことから製錬滓を予想させるものである。

その他の資料No.2～4、およびNo.6～9は造滓成分は18～21%とやや低目であり、またT.Feおよび $\text{Fe}_2\text{O}_3$ がやや高目であることから精錬鍛冶滓と推察されるものである。

### 3 顕微鏡組成

資料の顕微鏡組織を写真2～10に示す。No.1はヴスタイトを主体とする組織で鍛錬鍛冶滓の特徴ある組織を示す。No.2～4、No.6～9はヴスタイトファイヤライトを主体とするが、よく発達した巨大な棒状結晶ファイヤライトが認められ精錬鍛冶滓の特徴を呈している。No.5はヴスタイトとファイヤライトそれにマグネタイトの結晶が認められることから製錬滓の可能性が高い。

### 4 構成相の解析

前項で観察した資料の代表的なものを、走査型電子顕微鏡（SEM）による微細組織の観察ならびにEDX分析（エネルギー分散型X線分析）による局所的な定性元素分析を行なった。また粉砕試料を用いてX線回折を実施し、構成結晶相の同定を行なった。

結果を写真11～28に示す。

以上、資料No.1～9について結晶組織の検討を行なった結果をまとめると表3の通りである。

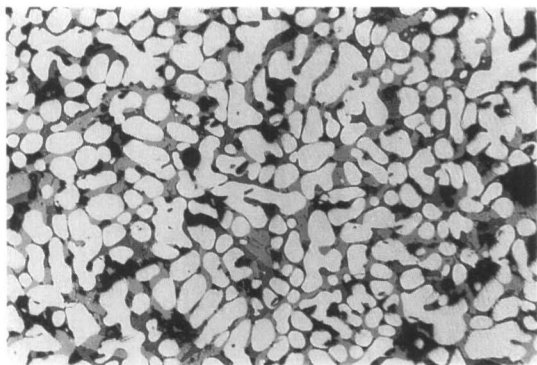


写真2 No.1資料 ×100  
白色の粒子状晶がヴスタイト，基地の淡灰色の結晶がファイヤライト

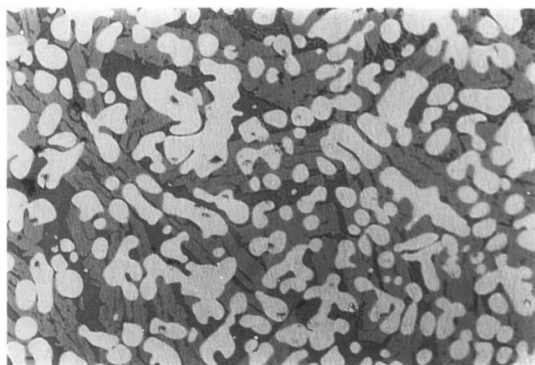


写真5 No.4資料 ×100  
白色の粒子状晶がヴスタイト，基地の淡灰色の棒状晶がファイヤライト

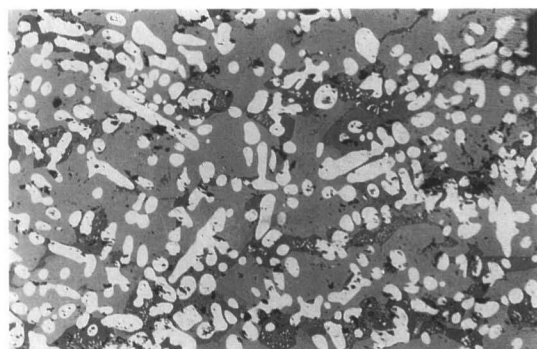


写真3 No.2資料 ×100  
白色の粒子状晶がヴスタイト，基地の淡灰色の板状晶がファイヤライト

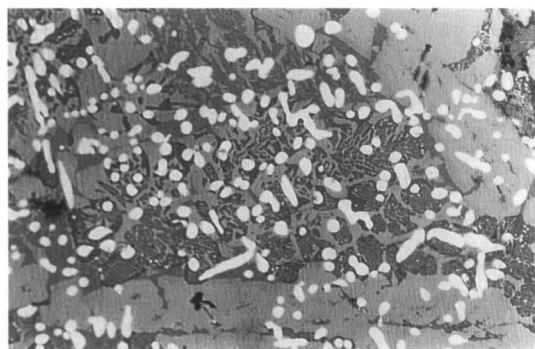


写真6 No.5資料 ×100  
白色の粒子状晶がヴスタイト，基地の淡灰色の板状晶がファイヤライト

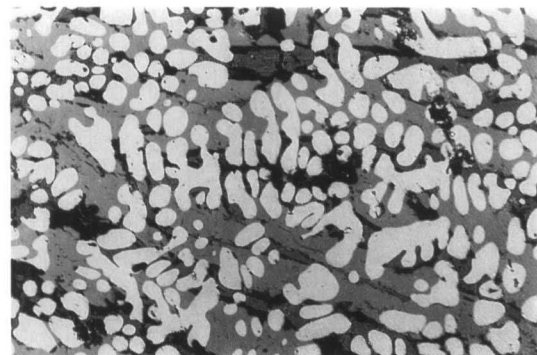


写真4 No.3資料 ×100  
白色の粒子状晶がヴスタイト，基地の淡灰色の棒状晶がファイヤライト

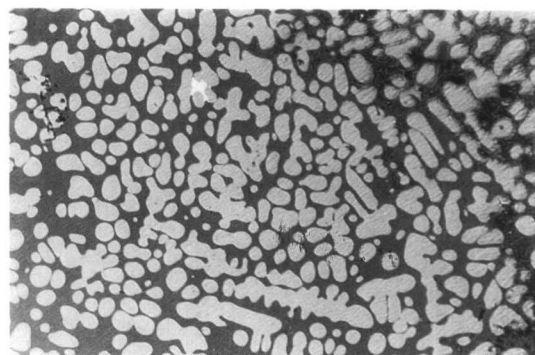


写真7 No.6資料 ×100  
白色の粒子状晶がヴスタイト，基地はガラス質

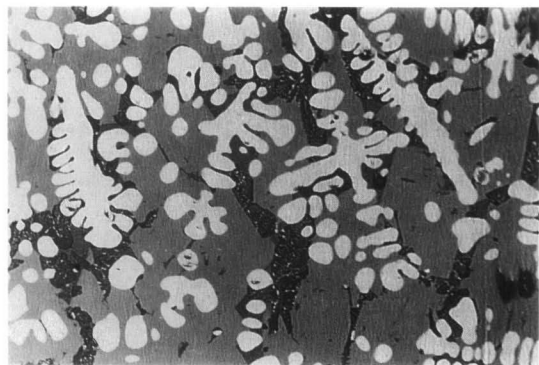


写真8 No.7資料 ×100

白色の樹枝状晶がヴスタイト，基地  
の淡灰色の板状晶がファイヤライト

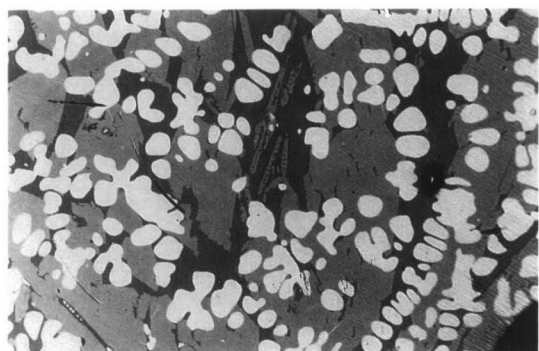


写真9 No.8資料 ×100

白色の粒子状晶がヴスタイト，基地  
の淡灰色の巨大な棒状晶がファイヤ  
ライト



写真10 No.9資料 ×100

白色の樹枝状晶がヴスタイト，基地  
の棒状晶がファイヤライト

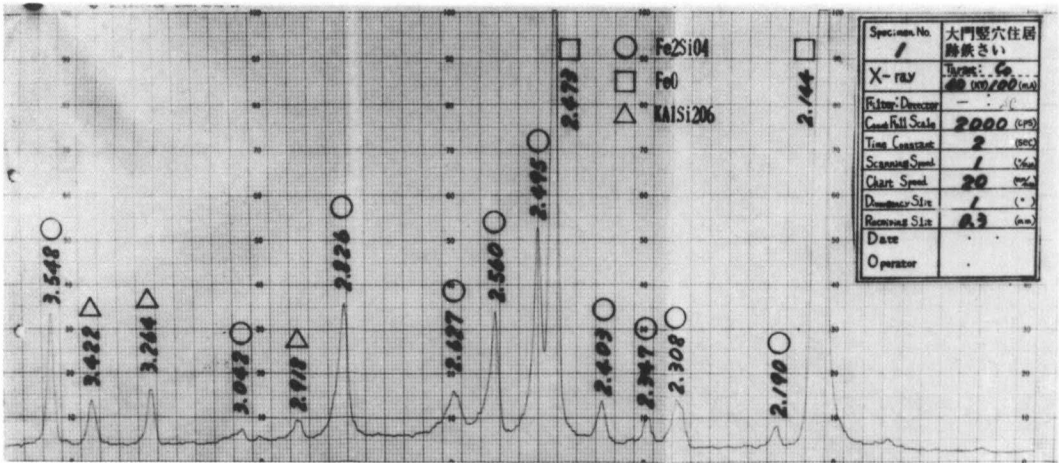
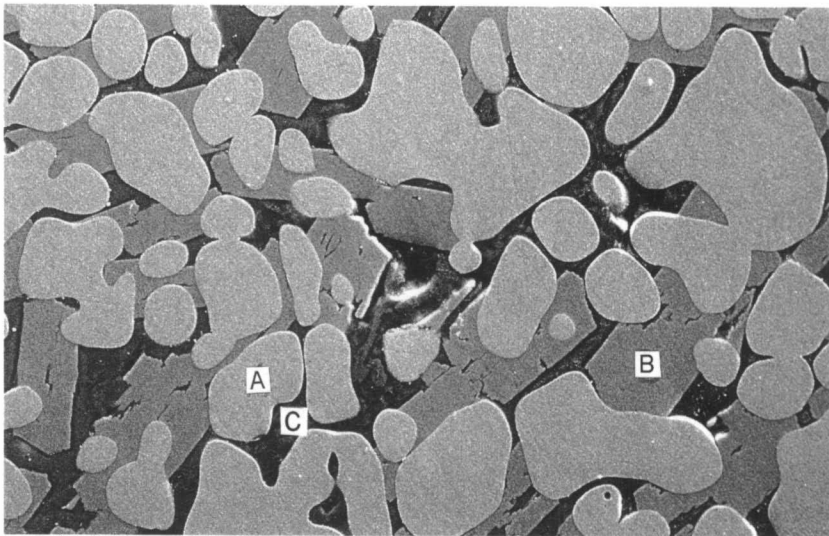
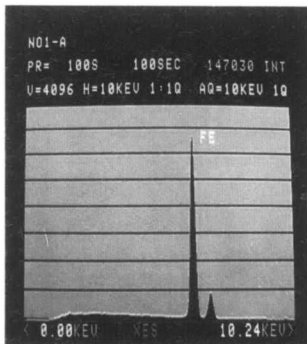


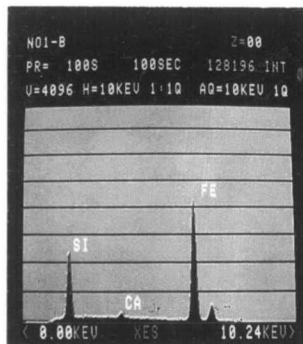
写真11 No. 1のX線回折プロフィール



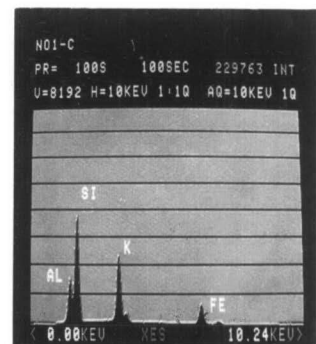
×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真12 No. 1のSEM像とEDX分析

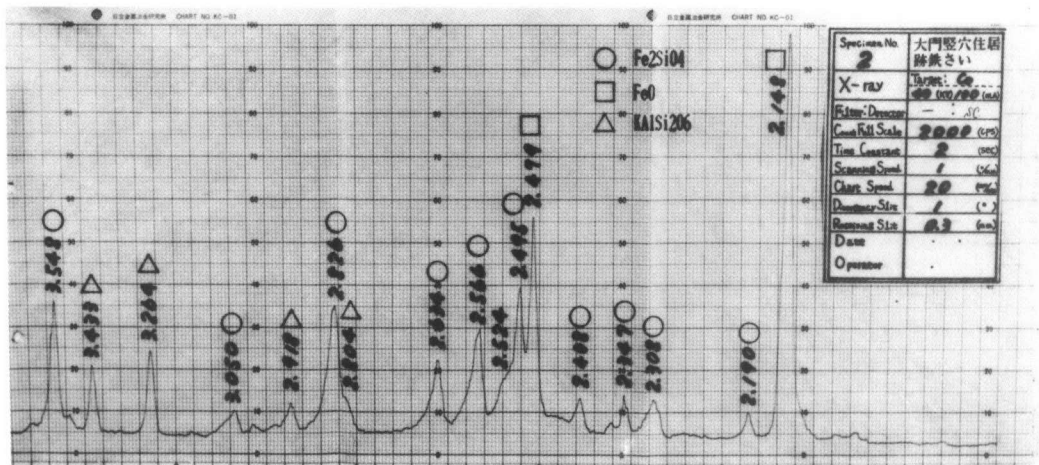
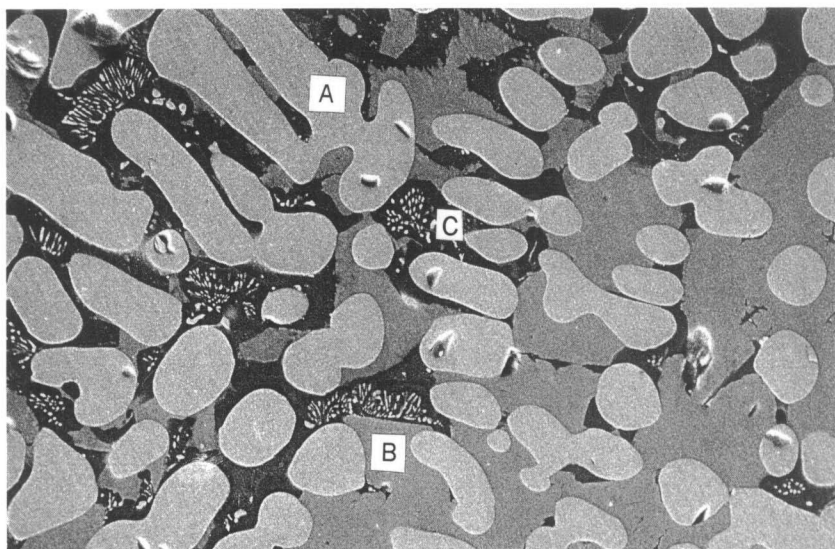
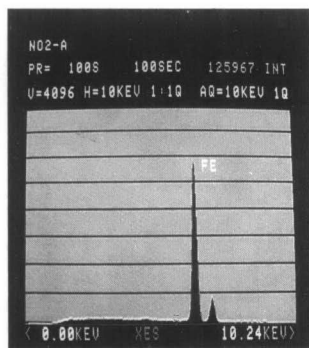


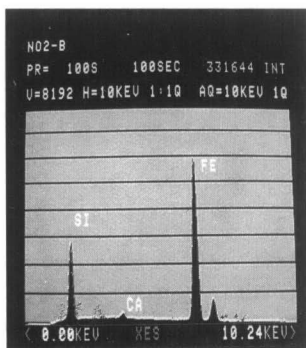
写真13 No. 2 の X線回折プロフィール



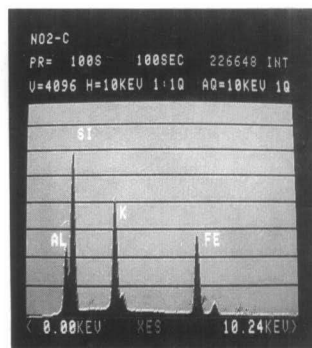
×400



A 部  
(グスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真14 No. 2 の SEM像と EDX分析

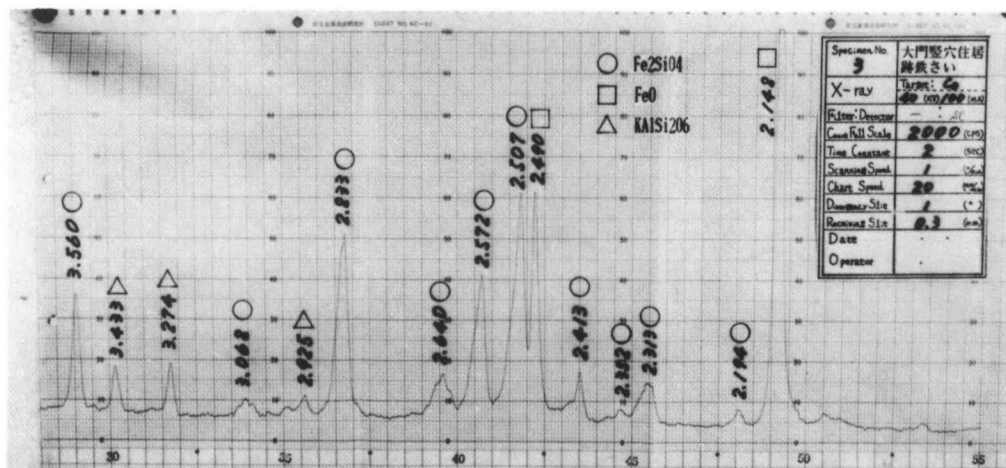
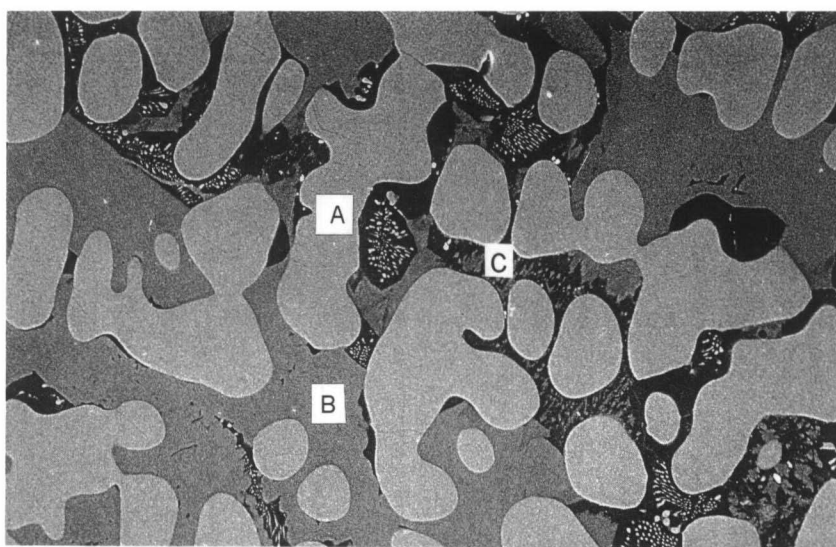


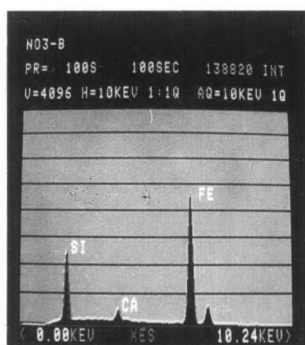
写真15 No. 3のX線回折プロフィール



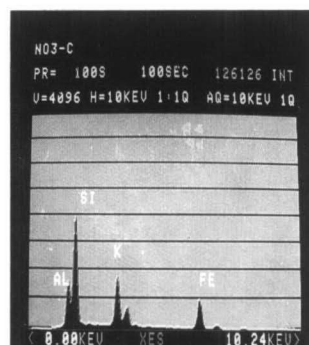
×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真16 No. 3のSEM像とEDX分析



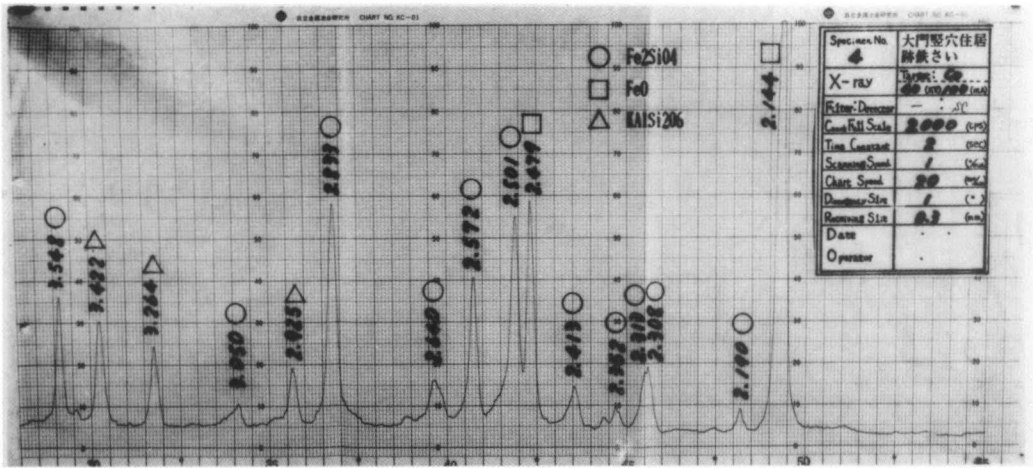
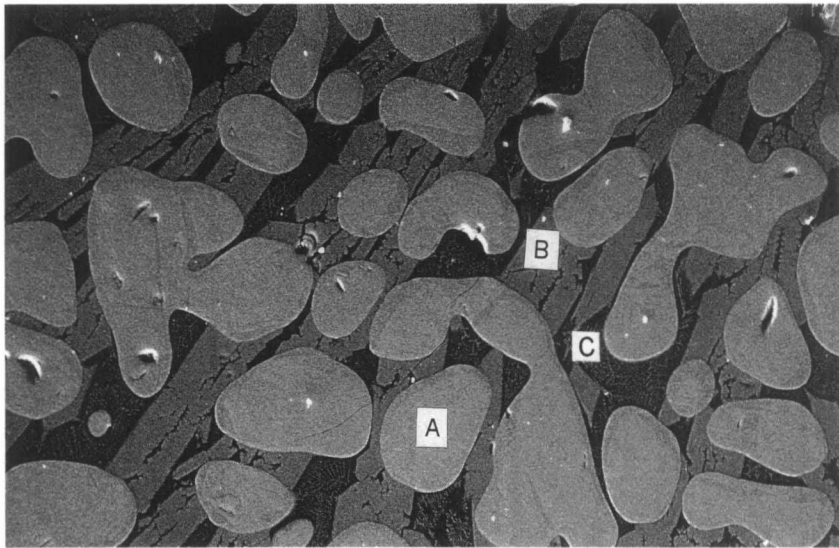


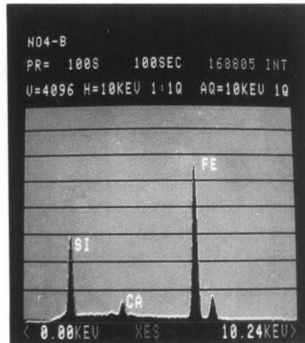
写真17 No. 4 の X線回折プロフィール



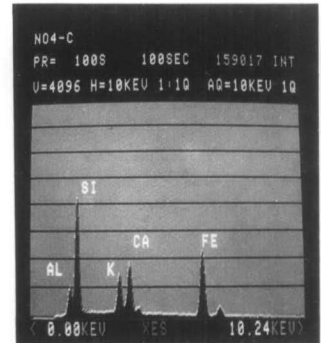
×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真18 No. 4 の SEM像と EDX分析

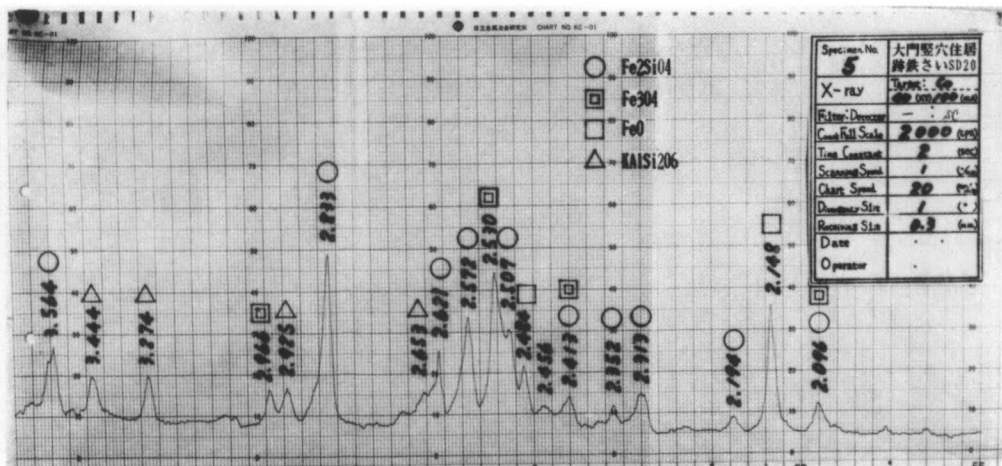
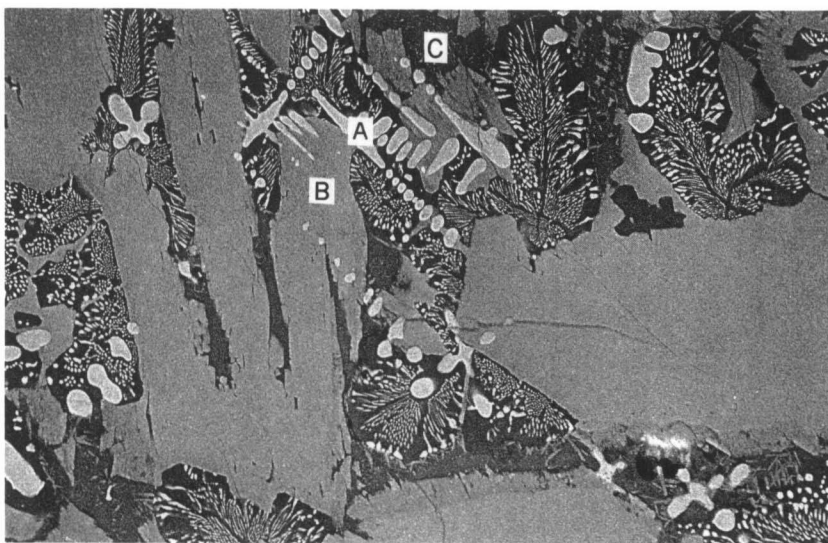
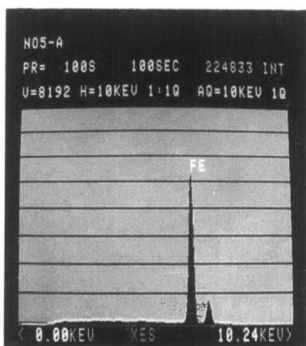


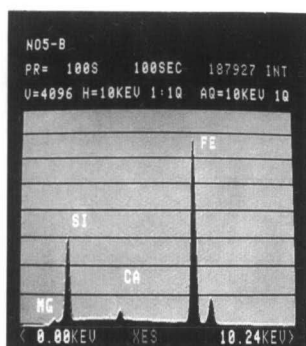
写真19 No.5のX線回折プロフィール



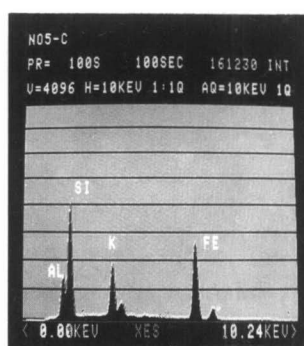
×400



A 部  
(グスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真20 No.5のSEM像とEDX分析

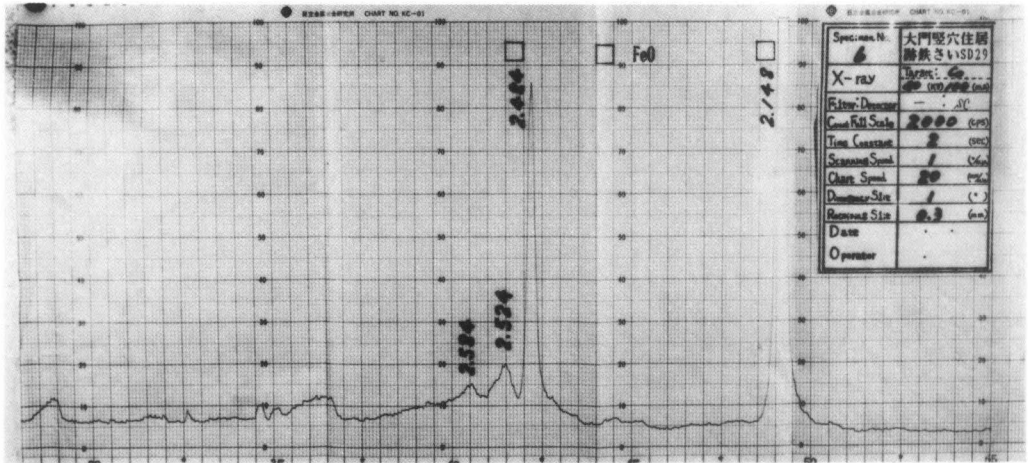
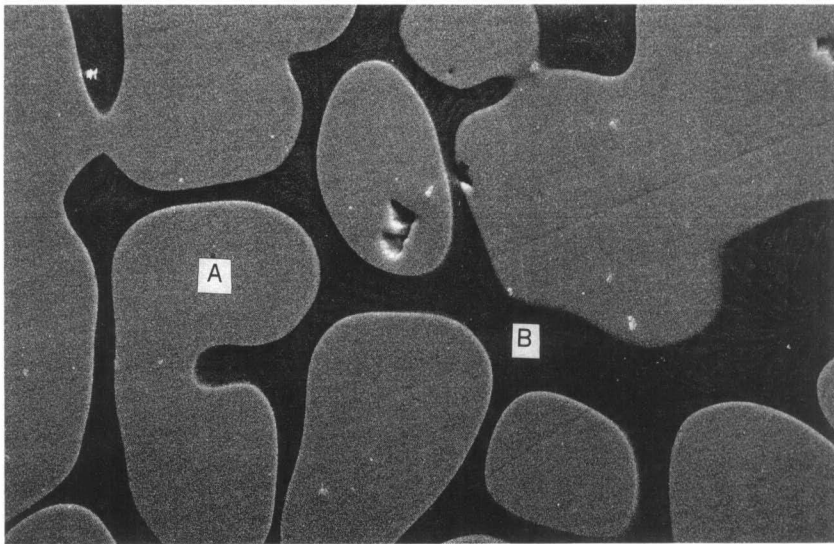
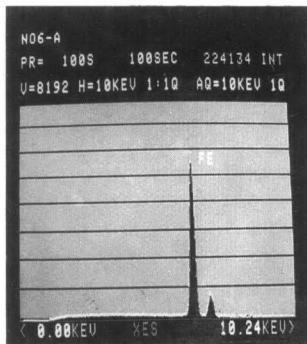


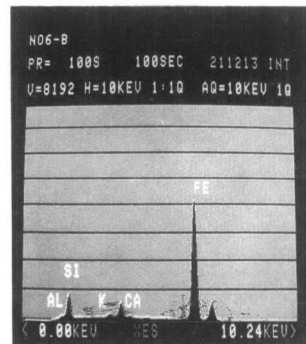
写真21 No. 6 の X 線回析プロフィール



×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ガラス質)

写真22 No. 6 の SEM 像と EDX 分析

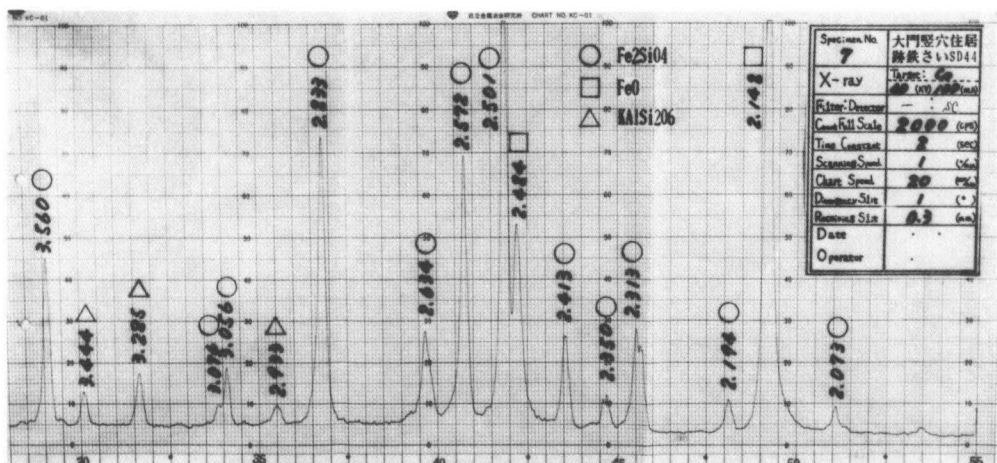
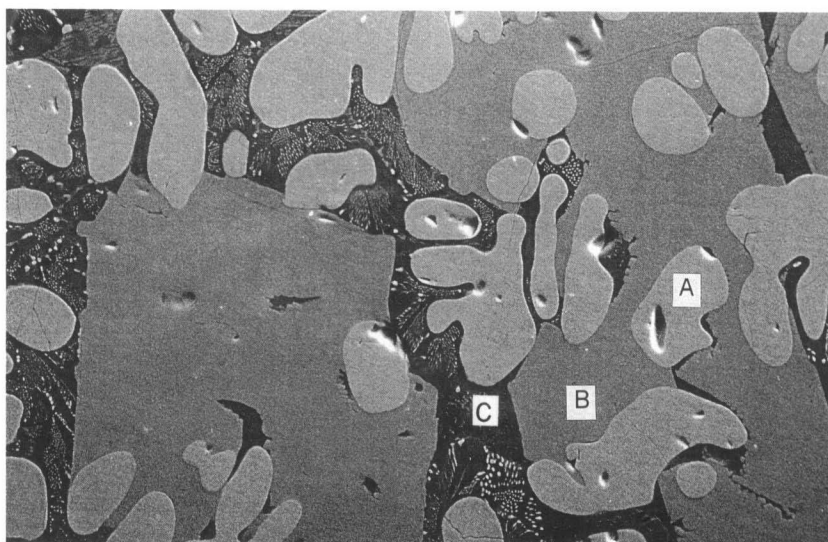
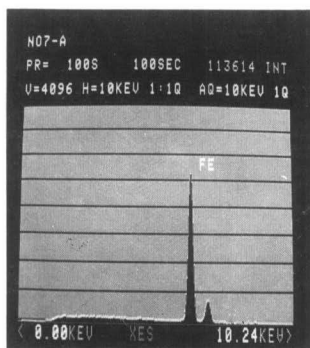


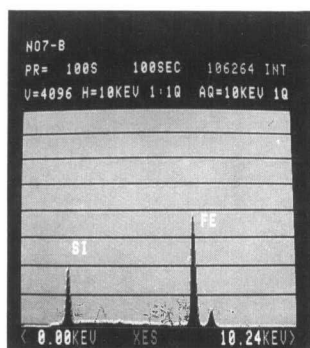
写真23 No. 7のX線回折プロフィール



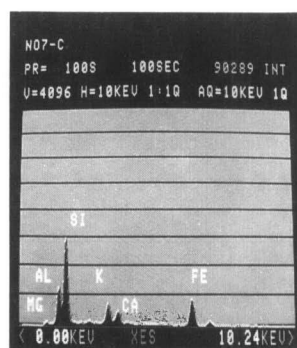
×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真24 No. 7のSEM像とEDX分析

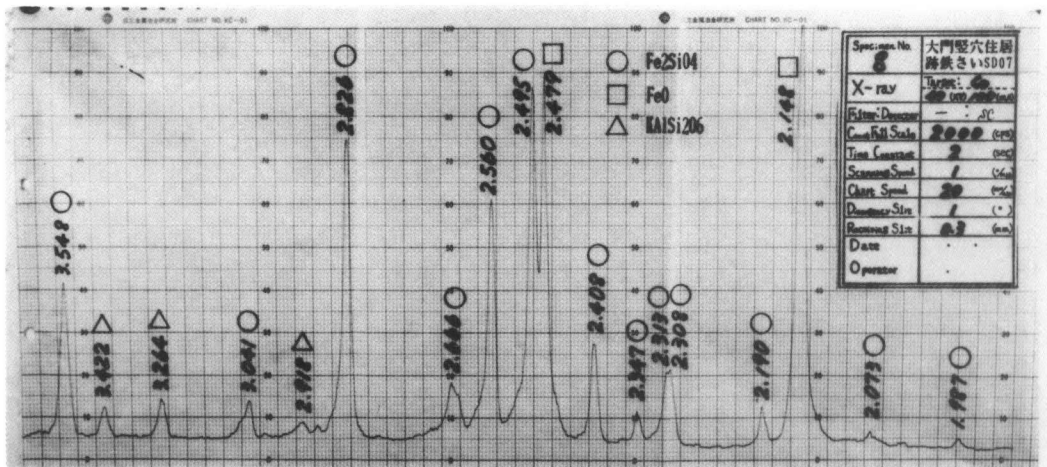
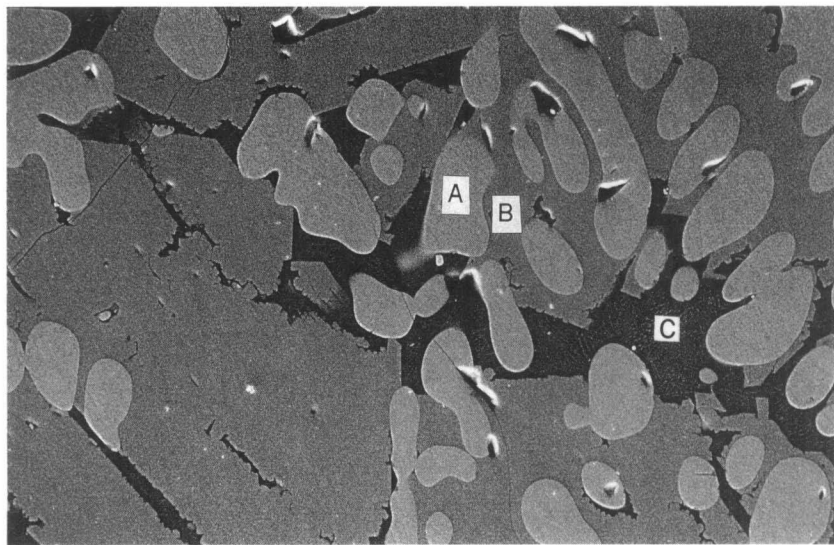
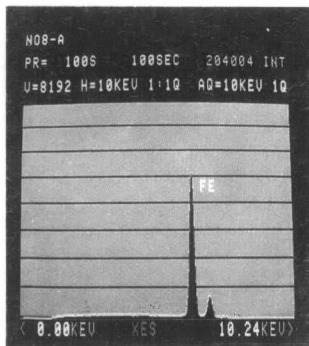


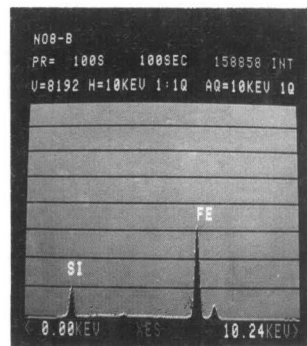
写真25 No. 8 の X線回折プロフィール



×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真26 No. 8 の SEM像と EDX分析

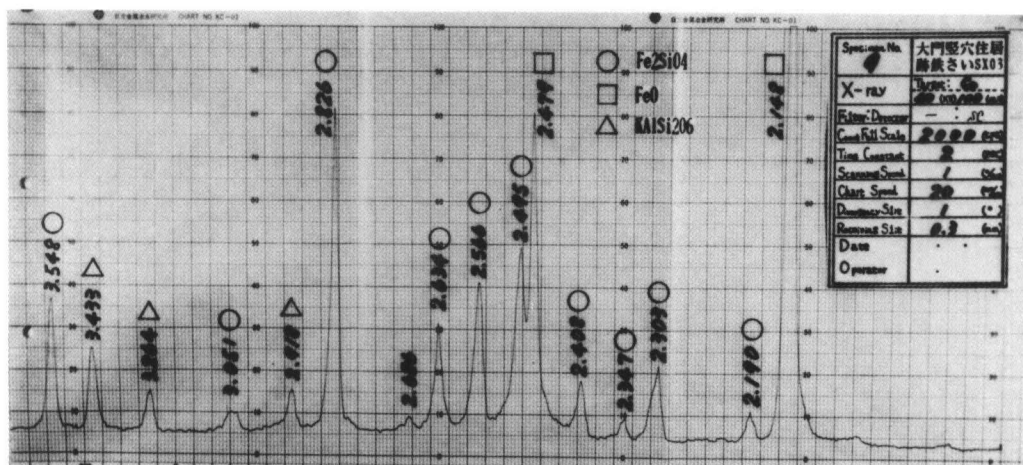
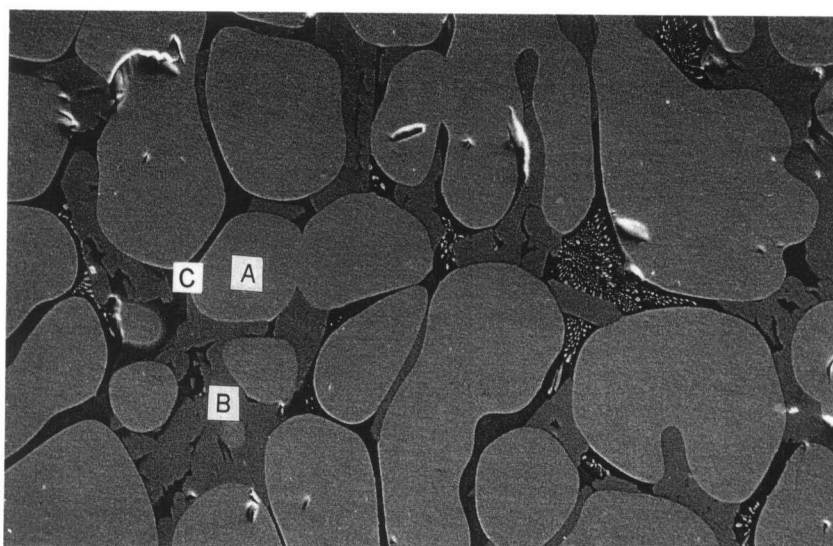


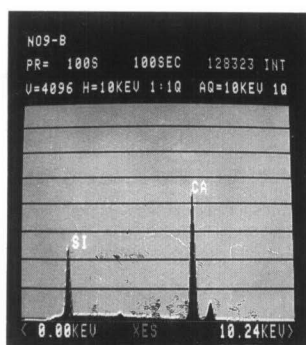
写真27 No.9のX線回折プロフィール



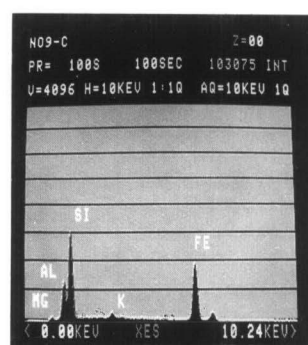
×400



A 部  
(ヴスタイト)



B 部  
(ファイヤライト)



C 部  
(ガラス質)

写真28 No.9のSEM像とEDX分析